岡山県埋蔵文化財発掘調査報告143

立田遺跡2
高松原古才遺跡2
加茂政所遺跡2
津寺遺跡6

立田排水機場建設ならびに立田排水機場
関連放水管地下埋設事業に伴う発掘調査

1999

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告143

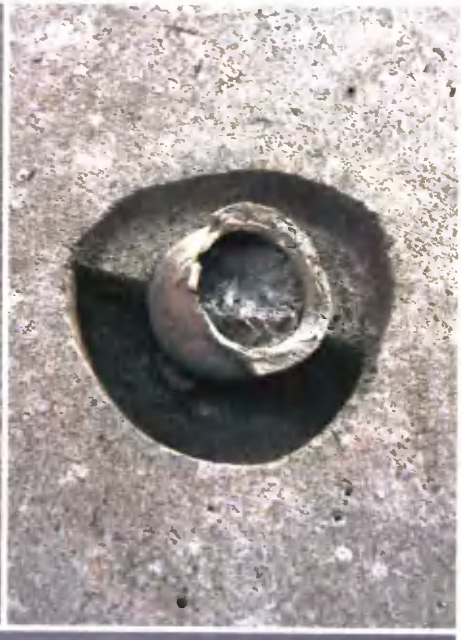
立田遺跡2
高松原古才遺跡2
加茂政所遺跡2
津寺遺跡6

立田排水機場建設ならびに立田排水機場
関連放水管地下埋設事業に伴う発掘調査

1999

岡山県教育委員会

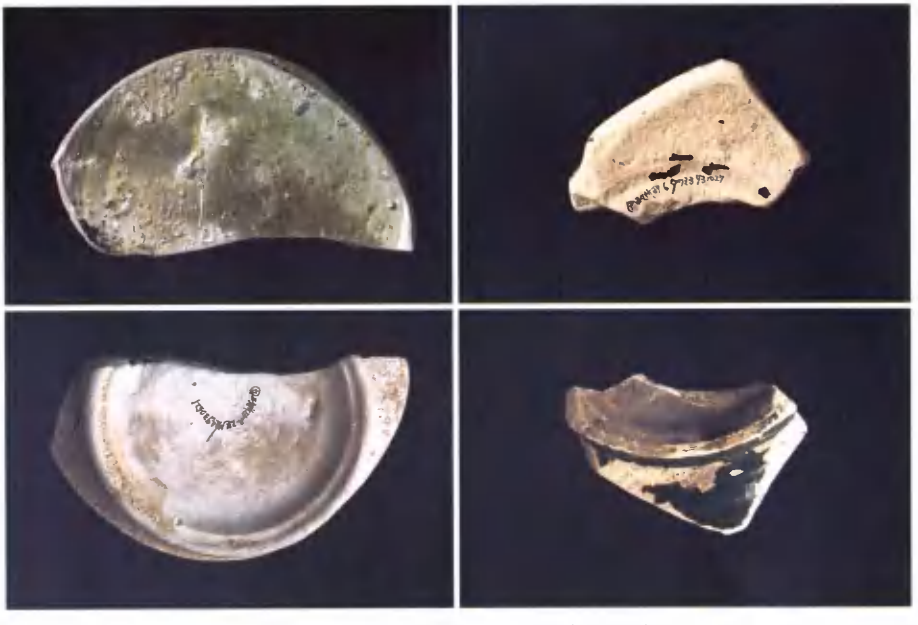
1．加茂政所遺跡土壙7全景（北西から）（上）　　2．　同　土層断面（南西から）（下）



1．津寺遺跡土器埋納壙1検出状況（北東から）（上左）　　2．　同　蓋形土器除去後（北西から）（上右）

3．　同　出土土器（1212・1213）

1．加茂政所遺跡出土軒丸瓦(943)



2．加茂政所遺跡出土緑釉陶器(左 970)(右 969)

1．加茂政所遺跡墓4・5（東から）

2．津寺遺跡中屋T区足守川堤防土層断面（北西から）

序

本書に掲載の遺跡は、岡山市の西部を流れる足守川の流域に位置しています。足守川は吉備高原に源を発し、平野部に至って血吸川や砂川や高梁川の分流、あるいは前川も合わせ、さらに南流していきます。この四つの川の合流点付近から下流にかけてはしばしば洪水が発生し、地元では長年の間湛水防除が課題とされていました。

山陽自動車道がこの地区を横断し、平野部には大規模な盛土がなされることとなり、さらなる滞水が心配されましたが、埋没した旧河道の存在する地区については橋脚による構造をとるように設計もなされました。こうした状況の中で、岡山県は、岡山市立田地区に排水機場を建設し、山陽自動車の側道下に放水管を埋設して足守川へ放流する事業を計画しました。

岡山県教育委員会では、この事業が施行されるにあたり、事前に放水管の埋設される部分について、やむをえず記録保存の措置をとることとしました。調査にかかる遺跡は、すでに山陽自動車道の調査報告書に膨大な資料が掲載されていますので、本報告書はその補足的な色合いが濃いものですが、橋脚部分などについては、より詳細な土層関係や遺構の連続状況を明らかにすることができました。

立田遺跡や高松原古才遺跡は山陽自動車道の発掘調査で新たに知られた遺跡で、本報告書でもできるかぎり多くの資料を提示することに努めました。加茂政所遺跡では貝殻を多量に包含した弥生時代中期の大形の土壙が検出され、出土した獣骨や魚骨から当時の食生活がしのばれます。また、古代の遺物も多く出土し、なかでも緑釉・灰釉陶器片やほぼ完形に近い宝相華文軒丸瓦が注目され、あらためてこの地区が日常生活とはかけ離れた特別の空間であったことをうかがわせております。津寺遺跡は弥生時代以来の拠点的な大集落で、奈良時代の官衙遺跡としても知られています。今回の調査でも、先年に検出された胞衣容器ときわめて類似した土器埋納遺構が検出され、須恵器の獣脚のような希少な遺物も出土しました。

発掘調査の実施にあたりましては、岡山県文化財保護審議会考古専門委員の先生方にご指導を賜り、岡山地方振興局農林事業部の職員諸氏や地元の方々に多大なご協力をいただきました。あらためまして厚くお礼を申し上げます。

ささやかではありますが、本書が郷土の歴史を解明する資料として、少しでもお役立ていただければ幸いに存じます。

平成11年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　葛　原　克　人

例　　言

1．本書は、岡山県農林部が湛水防除事業として実施した、立田排水機場建設ならびに立田排水機場関連放水管地下埋設事業に伴い、岡山県教育委員会が行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は岡山県農林部の分任事業として岡山県教育委員会が調査主体となり、その実務は岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

3．発掘調査された遺跡は立田遺跡・高松原古才遺跡・加茂政所遺跡・津寺遺跡の4遺跡である。立田遺跡のうち、立田排水機場内の遺跡は岡山市立田鼓山下に所在し、それ以外の遺跡は岡山市立田・高松原古才・加茂・津寺の山陽自動車道側道下に位置していた。

4．発掘調査は平成元年度（1989年度）の第1次調査から平成9年度（1997年度）の第7次調査まで延べ9年間に及び、調査面積は合計3,798㎡を数える。調査の実施にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員　鎌木義昌氏・近藤義郎氏・水内昌康氏（当時）の指導・助言を得て、岡山県古代吉備文化財センター職員が担当した。各次調査の担当者は第1次調査が柳瀬昭彦、第2次調査は島崎東、第3次調査は浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶、第4次調査は桑田俊明、第5次調査は岡本寛久・長谷川澄博、第6次調査は内藤善史・長谷川澄博、第7次調査は岡本寛久である。

5．発掘調査で出土した遺物のうち、動物遺存体については岡山理科大学理学部講師　富岡直人氏に鑑定を依頼し、加茂政所遺跡弥生時代土壙出土の遺存体については報文をいただいた。また、石製品の石材については倉敷芸術科学大学教養学部助教授　妹尾護氏に鑑定をいただいた。

6．報告書作成作業は平成9年度と10年度（1998年度）に岡山県古代吉備文化財センター職員岡本寛久が担当し、同センターにおいて実施した。遺物の写真撮影には、とくに江尻泰幸の援助と協力を得た。

7．報告書の執筆は岡山県古代吉備文化財センター職員伊藤晃・柳瀬昭彦・浅倉秀昭・岡本寛久・内藤善史・島崎東、岡山県立和気閑谷高等学校教諭桑田俊明がそれぞれの担当部分について行い、各項末に文責を記している。なお、第1章については同センター職員平井勝の全面的な協力を受けるとともに、第3章～第6章では同センター職員江見正己・高田恭一郎・小林利晴の助力を、図版作成にあたっては同センター職員福田正継の援助を得て、ようやく成稿にこぎつけたところであり、衷心より感謝したい。

8．本書の編集は岡本寛久が行った。

9．発掘調査の記録類と出土遺物は岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

凡　　例

1．本書第２図「調査地点周辺遺跡分布図」は建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図（総社東部）・（倉敷）を複製したものである。

2．遺構の番号については遺跡ごとに付した。

3．遺物番号は遺跡の相違にかかわらず、材質別の通し番号とし、土器･土製品は番号のみ、石器にはＳ、金属器にはＭを付した。

4．掲載図の方位は第３図・第５図～第８図は真北、それ以外は磁北である。なお、調査地区周辺の磁北は西偏約６°55′である。

5．本書で使用した標高は海抜高である。

6．掲載図の縮尺は原則として下記のように種別に統一した。なお、各掲載図に縮尺を標記している。

遺構　竪穴住居・建物・柱穴列・大溝　1／60　　土壙・溝・土器溜まり　1／30

調査区土層断面図　1／100　　遺構配置図　1／200

遺物　土器　1／4　　土製品・金属器・石器　1／2

7．土器実測図の中で、口縁上端線または、底部下端線のうち、中軸線の両側を一部欠いているものは、小片のため口径・底径の計測値に不確実性がある。

8．遺構図の中で、炭と焼土の分布範囲は下記のトーンで表現した。

炭　　**焼土**

9．土器のうち、丹塗りのものと黒色土器の炭素吸着面は下記のトーンで表現した。

丹塗り　　**炭素吸着**

10．出土土器の編年と時期区分については、山陽自動車道建設に伴う発掘調査を実施した津寺遺跡の調査報告書に準拠した。詳しくは報告書を参照されたい。

－　高畑知功他『津寺遺跡５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127　岡山県教育委員会　1998年

11．本報告書の記述に使用した時代区分は一般的な政治史区分に準拠したが、古墳時代は７世紀前半まで、古代は７世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃までとおおまかに捉えている。

目　　次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

図版目次

表目次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1

第２章　調査の経過 …… 5

　第１節　調査の契機 …… 5

　第２節　１次調査の経過 …… 6

　第３節　２次調査の経過 …… 7

　第４節　３次調査の経過 …… 8

　第５節　４次調査の経過 …… 8

　第６節　５次調査の経過 …… 9

　第７節　６次調査の経過 …… 10

　第８節　７次調査の経過 …… 11

　第９節　報告書の作成 …… 11

　第10節　調査の体制 …… 12

第３章　立田遺跡 …… 15

　第１節　概要 …… 15

　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 17

　第３節　古墳時代の遺物 …… 41

　第４節　古代の遺物 …… 41

　第５節　中世の遺構と遺物 …… 41

第４章　高松原古才遺跡 …… 43

　第１節　概要 …… 43

　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 49

　第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 59

　第４節　古代の遺構と遺物 …… 75

　第５節　中世の遺構と遺物 …… 80

第５章　加茂政所遺跡 …… 83

　第１節　概要 …… 83

　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 90

　第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 105

　第４節　古代の遺構と遺物 …… 130

第５節　中世の遺構と遺物 …… 138
第６章　津寺遺跡 …… 149
第１節　概要 …… 149
第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 159
第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 167
第４節　古代の遺構と遺物 …… 192
第５節　中世の遺構と遺物 …… 201
第７章　まとめ …… 212
付　載　加茂政所遺跡弥生時代土壙出土の動物遺存体 …… 214
報告書抄録 …… 222

第１図　遺跡の位置（黒丸印） …… 1
第２図　調査地点周辺遺跡分布図 …… 2
第３図　第１次調査トレンチ位置図 …… 5
第４図　第１次調査トレンチ土層断面模式図 …… 6
第５図　調査地区（矢印）の位置及び周辺地形図（１） …… 7
第６図　調査地区（矢印）の位置及び周辺地形図（２） …… 8
第７図　調査地区（矢印）の位置及び周辺地形図（３） …… 9
第８図　調査地区（矢印）の位置及び周辺地形図（４） …… 10
第９図　立田遺跡調査区区割り図 …… 15
第10図　立田遺跡立田排水機場区南壁（上）、立田Ｅ２，３区北壁（下）土層断面図 …… 16
第11図　立田遺跡弥生時代遺構配置図 …… 17
第12図　竪穴住居１・出土遺物 …… 18
第13図　竪穴住居２・出土遺物 …… 18
第14図　建物１・出土遺物 …… 19
第15図　建物２・出土遺物 …… 20
第16図　建物２周辺柱穴内出土遺物 …… 20
第17図　柱穴列１ …… 21
第18図　土壙１ …… 21
第19図　土壙１出土遺物（１） …… 22
第20図　土壙１出土遺物（２） …… 23
第21図　土壙２ …… 24
第22図　土壙２出土遺物（１） …… 25
第23図　土壙２出土遺物（２） …… 26
第24図　土壙２出土遺物（３） …… 27
第25図　土壙３ …… 28
第26図　土壙３出土遺物（１） …… 29
第27図　土壙３出土遺物（２） …… 30
第28図　溝１ …… 31
第29図　溝２ …… 31
第30図　溝３ …… 31
第31図　立田Ｅ２区西端河道１斜面堆積層出土遺物（１） …… 32
第32図　立田Ｅ２区西端河道１斜面堆積層出土遺物（２） …… 33
第33図　立田排水機場区微高地斜面肩部包含層出土遺物（１） …… 34
第34図　立田排水機場区微高地斜面肩部包含層出土遺物（２） …… 35
第35図　立田排水機場区微高地斜面堆積層出土遺物 …… 36
第36図　立田Ｅ２，３区出土弥生時代遺物 …… 37
第37図　立田排水機場区出土弥生時代遺物（１） …… 39
第38図　立田排水機場区出土弥生時代遺物（２） …… 40
第39図　立田Ｅ２区出土古墳時代遺物 …… 41
第40図　立田Ｅ２，３区出土古代遺物 …… 41
第41図　立田遺跡中世遺構配置図 …… 42
第42図　溝４ …… 42
第43図　溝５ …… 42
第44図　立田排水機場区出土中世遺物 …… 42
第45図　立田Ｅ３区出土中世遺物 …… 42
第46図　高松原古才遺跡調査区区割り図 …… 43
第47図　立田Ｅ１区西半北壁土層断面図 …… 44
第48図　立田Ｗ２区（上）・Ｗ３区（中）南壁、Ｗ２区北壁（下）土層断面図 …… 45
第49図　立田Ｗ２，３区第33層出土遺物 …… 46
第50図　立田Ｗ２，３区第34層出土遺物 …… 47
第51図　立田Ｗ２，３区第35層出土遺物 …… 47
第52図　立田Ｗ２，３区第42層出土遺物 …… 48
第53図　高松原古才遺跡弥生時代遺構配置図 …… 49
第54図　弥生時代前期土器 …… 50
第55図　竪穴住居１・出土遺物 …… 50
第56図　建物１・出土遺物 …… 51
第57図　建物２ …… 51
第58図　溝１ …… 51
第59図　溝２ …… 51
第60図　河道１下層（第33層）出土遺物 …… 52
第61図　河道１上層（第28層）出土遺物 …… 52
第62図　立田Ｅ１区東半北壁（旧河道部分）土層断面図 …… 53

第63図　河道2東斜面堆積出土遺物 …… 54
第64図　河道2西斜面堆積出土遺物 …… 55
第65図　立田W1区東・西北壁(上)、W1区西東壁(下)土層断面図 …… 56
第66図　立田W1区西微高地斜面洪水砂層(第12層)出土遺物 …… 57
第67図　高松原古才遺跡出土弥生時代遺物 …… 58
第68図　高松原古才遺跡古墳時代遺構配置図 …… 59
第69図　竪穴住居2・出土遺物 …… 60
第70図　竪穴住居3・出土遺物 …… 62
第71図　竪穴住居4 …… 63
第72図　竪穴住居5 …… 63
第73図　竪穴住居6・出土遺物 …… 63
第74図　竪穴住居7・出土遺物 …… 63
第75図　竪穴住居8・出土遺物、竪穴住居9 …… 64
第76図　竪穴住居10・出土遺物、竪穴住居11 …… 64
第77図　竪穴住居12・出土遺物 …… 65
第78図　竪穴住居13 …… 66
第79図　建物3・出土遺物 …… 67
第80図　柱穴列1・出土遺物 …… 67
第81図　土壙1 …… 68
第82図　土壙2 …… 68
第83図　土壙3 …… 68
第84図　土壙4 …… 68
第85図　土壙5・出土遺物 …… 68
第86図　土壙6、土壙7・出土遺物、溝4 …… 69
第87図　土壙8 …… 69
第88図　土壙9・出土遺物 …… 70
第89図　溝3・出土遺物 …… 70
第90図　溝4・出土遺物 …… 70
第91図　溝5・出土遺物 …… 71
第92図　河道2砂層(第26・27層?)出土遺物 …… 71
第93図　立田E1区包含層出土遺物 …… 72
第94図　立田W1区包含層出土遺物 …… 72
第95図　高松原古才遺跡出土古墳時代遺物 …… 73
第96図　高松原古才遺跡古代遺構配置図 …… 75
第97図　柵1・出土遺物、溝7 …… 76
第98図　溝6 …… 77
第99図　溝8 …… 77
第100図　溝9・出土遺物 …… 77
第101図　溝10～18・出土遺物 …… 78
第102図　落ち込み1出土遺物 …… 79
第103図　立田W3区出土古代遺物 …… 79
第104図　高松原古才遺跡出土古代遺物 …… 79
第105図　高松原古才遺跡中世遺構配置図 …… 80
第106図　落ち込み2上部砂層(左半)・下部粘質土層(右半)出土遺物 …… 81
第107図　溝19～23 …… 82
第108図　溝24 …… 82
第109図　溝25 …… 82
第110図　高松原古才遺跡出土中世遺物 …… 82
第111図　加茂政所遺跡調査区区割り図 …… 84
第112図　高田3,4区南壁(上)、高田5区南東壁(下)土層断面図 …… 85
第113図　砂場1区(上)、砂場2区西端・東端(下)南壁土層断面図 …… 86
第114図　砂場3,4区南壁土層断面図 …… 87
第115図　砂場5区(上)、砂場6区西端・東端(下)南壁土層断面図 …… 88
第116図　砂場7区(上)、砂場8区(下)南壁土層断面図 …… 89
第117図　加茂政所遺跡弥生時代遺構配置図 …… 90
第118図　墓1・出土遺物 …… 91
第119図　竪穴住居1・出土遺物 …… 92
第120図　土壙1・出土遺物 …… 93
第121図　土壙2 …… 93
第122図　土壙2出土遺物 …… 94
第123図　土壙3 …… 94
第124図　土壙4・出土遺物 …… 95
第125図　土壙5・出土遺物 …… 95
第126図　土壙6・出土遺物 …… 96
第127図　土壙7 …… 97
第128図　土壙7出土遺物 …… 98
第129図　土壙8 …… 98
第130図　土壙9 …… 98
第131図　土壙10 …… 98
第132図　土壙11・出土遺物 …… 99
第133図　土壙12・出土遺物 …… 99
第134図　土壙13・出土遺物 …… 100
第135図　土壙14・出土遺物 …… 101
第136図　土壙15 …… 101
第137図　土壙15出土遺物 …… 102
第138図　砂場8区微高地傾斜面出土遺物 …… 103
第139図　加茂政所遺跡出土分銅形土製品 …… 103
第140図　加茂政所遺跡出土弥生時代遺物 …… 104
第141図　加茂政所遺跡古墳時代遺構配置図(1) …… 105
第142図　加茂政所遺跡古墳時代遺構配置図(2) …… 106
第143図　竪穴住居2・同遺物出土状態平面図・出土遺物 …… 107
第144図　竪穴住居3,4・竪穴住居3出土遺物 …… 108
第145図　竪穴住居5・出土遺物 …… 109
第146図　竪穴住居6・同カマド平面図・出土遺物 …… 110
第147図　竪穴住居7・出土遺物 …… 111
第148図　竪穴住居8・出土遺物 …… 112
第149図　竪穴住居9 …… 113
第150図　竪穴住居10・出土遺物 …… 114
第151図　竪穴住居11,12・出土遺物 …… 115
第152図　竪穴住居13・出土遺物 …… 116
第153図　竪穴住居14・出土遺物 …… 117
第154図　竪穴住居15・出土遺物 …… 118
第155図　竪穴住居16 …… 118
第156図　竪穴住居17・出土遺物 …… 119
第157図　建物1 …… 120
第158図　柱穴列1 …… 120
第159図　炉状遺構1 …… 120
第160図　炉状遺構2 …… 120
第161図　溝1 …… 121
第162図　溝2 …… 121

第163図　溝3 …… 121
第164図　溝4 …… 121
第165図　溝5・出土遺物 …… 121
第166図　溝6・出土遺物 …… 122
第167図　溝7・出土遺物 …… 122
第168図　溝8・出土遺物 …… 122
第169図　溝9・同遺物出土状態・出土遺物 …… 123
第170図　溝10・同遺物出土状態 …… 124
第171図　溝10出土遺物 …… 125
第172図　溝11・同遺物出土状態・出土遺物 …… 126
第173図　土壙16 …… 127
第174図　土壙17 …… 127
第175図　土壙18 …… 127
第176図　加茂政所遺跡出土古墳時代遺物(1) … 128
第177図　加茂政所遺跡出土古墳時代遺物(2) … 129
第178図　加茂政所遺跡古代遺構配置図 …… 130
第179図　土壙19・出土遺物 …… 131
第180図　土壙20・出土遺物 …… 131
第181図　土壙21・出土遺物 …… 132
第182図　砂場2区調査区南壁土壙出土遺物 …… 133
第183図　溝12 …… 133
第184図　溝13 …… 133
第185図　溝14 …… 134
第186図　溝15 …… 134
第187図　溝16 …… 134
第188図　溝17 …… 134
第189図　集石1 …… 134
第190図　集石2 …… 134
第191図　土器溜まり1・出土遺物 …… 135
第192図　加茂政所遺跡出土羽口 …… 135
第193図　加茂政所遺跡出土古代遺物(1) …… 136
第194図　加茂政所遺跡出土古代遺物(2) …… 137
第195図　墓2・出土遺物 …… 138
第196図　加茂政所遺跡中世遺構配置図(1) …… 139
第197図　墓3 …… 139
第198図　加茂政所遺跡中世遺構配置図(2) …… 140
第199図　加茂政所遺跡中世遺構配置図(3) …… 141
第200図　墓4 …… 142
第201図　墓5 …… 142
第202図　土壙22・出土遺物 …… 142
第203図　土壙23・出土遺物 …… 143
第204図　土壙24 …… 143
第205図　土壙25 …… 143
第206図　土壙26 …… 144
第207図　土壙27 …… 144
第208図　溝18・出土遺物 …… 144
第209図　溝19 …… 144
第210図　溝20 …… 144
第211図　溝21 …… 145
第212図　溝22 …… 145
第213図　溝40 …… 145
第214図　溝41 …… 145
第215図　溝42 …… 145
第216図　溝43 …… 145
第217図　溝44 …… 146
第218図　溝45 …… 146
第219図　溝46 …… 146
第220図　溝47 …… 146
第221図　溝48 …… 146
第222図　溝49 …… 146
第223図　溝50 …… 146
第224図　溝51・出土遺物 …… 147
第225図　溝52 …… 147
第226図　溝53 …… 147
第227図　溝54 …… 147
第228図　溝55 …… 147
第229図　高田5区南端微高地斜面土層断面図 … 147
第230図　加茂政所遺跡出土中世遺物 …… 148
第231図　津寺遺跡調査区区割り図 …… 150
第232図　高田1～3区南壁土層断面図 …… 151
第233図　高田4・5区南壁土層断面図 …… 152
第234図　高田6・7区東壁土層断面図 …… 153
第235図　高田8区東壁(上)、高田9～11区南壁(下)土層断面図 …… 154
第236図　高田12区東半北壁(上)、同西半南壁土層断面図 …… 155
第237図　中屋1・2区南壁土層断面図 …… 156
第238図　中屋3～5区南壁土層断面図 …… 157
第239図　中屋T区東壁(上)、西壁(下)土層断面図 …… 158
第240図　津寺遺跡弥生時代遺構配置図(1) …… 159
第241図　津寺遺跡弥生時代遺構配置図(2) …… 160
第242図　竪穴住居1,2,3,4・竪穴住居3,4出土遺物 …… 161
第243図　溝1・出土遺物 …… 162
第244図　溝2 …… 162
第245図　溝3・出土遺物 …… 162
第246図　溝4 …… 162
第247図　溝5 …… 162
第248図　溝6 …… 163
第249図　溝7 …… 163
第250図　溝8 …… 163
第251図　溝9 …… 163
第252図　溝10 …… 163
第253図　溝11・出土遺物 …… 164
第254図　溝12 …… 164
第255図　溝13 …… 164
第256図　溝13出土遺物 …… 165
第257図　津寺遺跡出土弥生時代遺物 …… 166
第258図　津寺遺跡古墳時代遺構配置図(1) …… 167
第259図　津寺遺跡古墳時代遺構配置図(2) …… 168
第260図　竪穴住居5・出土遺物 …… 169
第261図　竪穴住居6・出土遺物 …… 170
第262図　竪穴住居7・出土遺物 …… 171
第263図　竪穴住居8,9・出土遺物 …… 172
第264図　竪穴住居10 …… 173
第265図　竪穴住居11 …… 173
第266図　竪穴住居12・出土遺物 …… 174
第267図　竪穴住居13 …… 174
第268図　竪穴住居13出土遺物 …… 175

第269図　竪穴住居14 …… 175
第270図　竪穴住居14出土遺物 …… 176
第271図　竪穴住居15・出土遺物 …… 176
第272図　竪穴住居16・出土遺物 …… 177
第273図　竪穴住居17,18 …… 178
第274図　竪穴住居17,18出土遺物 …… 179
第275図　竪穴住居19,20・竪穴住居20出土遺物 … 180
第276図　竪穴住居19出土遺物 …… 181
第277図　溝14 …… 182
第278図　溝15・出土遺物 …… 182
第279図　溝16 …… 182
第280図　溝17・出土遺物 …… 182
第281図　溝18(左),19(右) …… 183
第282図　溝20・出土遺物 …… 183
第283図　溝21 …… 183
第284図　溝24 …… 183
第285図　溝25・出土遺物 …… 183
第286図　溝25,26,41,42・溝26出土遺物 …… 184
第287図　溝27・出土遺物 …… 185
第288図　溝28,29・溝29出土遺物 …… 185
第289図　高田4区北壁水田土層断面・水田関連遺物 …… 186
第290図　古墳時代水田 …… 187
第291図　溝22・出土遺物 …… 187
第292図　溝23・出土遺物 …… 187
第293図　土器溜まり1 …… 188
第294図　土器溜まり1出土遺物 …… 189
第295図　土器溜まり2出土遺物 …… 190
第296図　津寺遺跡出土古墳時代遺物 …… 191
第297図　津寺遺跡古代遺構配置図(1) …… 192
第298図　津寺遺跡古代遺構配置図(2) …… 193
第299図　建物1 …… 194
第300図　柱穴列1 …… 194
第301図　土器埋納壙1・出土遺物 …… 195
第302図　溝30 …… 195
第303図　溝31 …… 195
第304図　溝32 …… 195
第305図　溝33・出土遺物 …… 196
第306図　溝34・出土遺物 …… 196
第307図　溝35 …… 196
第308図　溝36(左)・37(右) …… 196
第309図　溝38 …… 196
第310図　溝39 …… 197
第311図　溝40・出土遺物 …… 197
第312図　溝42出土遺物 …… 197
第313図　溝43 …… 198
第314図　溝44(左),45(右)・溝45出土遺物 …… 198
第315図　溝46 …… 198
第316図　溝47・出土遺物 …… 198
第317図　溝48 …… 199
第318図　溝49 …… 199
第319図　溝50・出土遺物 …… 199
第320図　土器溜まり3出土遺物 …… 200
第321図　津寺遺跡出土古代遺物 …… 200
第322図　津寺遺跡中世遺構配置図(1) …… 201
第323図　津寺遺跡中世遺構配置図(2) …… 202
第324図　土壙1・出土遺物 …… 203
第325図　土壙2 …… 203
第326図　土壙2出土遺物 …… 204
第327図　土壙3 …… 205
第328図　土壙4・出土遺物 …… 205
第329図　土壙5 …… 205
第330図　土壙6・出土遺物 …… 206
第331図　溝51 …… 206
第332図　溝52・出土遺物 …… 206
第333図　溝53 …… 207
第334図　溝54・出土遺物 …… 207
第335図　溝55 …… 208
第336図　溝56 …… 208
第337図　溝57・出土遺物 …… 209
第338図　溝58 …… 209
第339図　溝59(左)・溝60(右) …… 209
第340図　溝61～78・出土遺物 …… 210
第341図　溝79,80,81・出土遺物 …… 211
第342図　溝81 …… 211
第343図　津寺遺跡出土中世遺物 …… 211

図　版　目　次

巻頭図版 1
1.　加茂政所遺跡土壙7全景(北西から)(上)
2.　同　土層断面(南西から)(下)
巻頭図版 2
1.　津寺遺跡土器埋納壙1検出状況(北東から)(上左)
2.　同　蓋形土器除去後(北西から)(上右)
3.　同　出土土器(1212・1213)
巻頭図版 3
1.　加茂政所遺跡出土軒丸瓦(943)
2.　加茂政所遺跡出土緑釉陶器(左 969)(右 970)
巻頭図版 4
1.　加茂政所遺跡墓4・5(東から)
2.　津寺遺跡中屋T区足守川堤防土層断面(北西から)
図版 1　　立田遺跡
1.　立田排水機場区全景(南西から)
2.　立田E2区全景(西から)
3.　立田E3区全景(南西から)
図版 2　　立田遺跡
1.　竪穴住居1(南から)
2.　竪穴住居2検出状況(南から)
3.　建物2(南から)

図版３　立田遺跡
1. 土壙1(北西から)
2. 土壙2(南から)
3. 土壙3(北西から)
図版４　高松原古才遺跡
1. 立田E1区全景(東から)
2. 立田C区全景(東から)
3. 立田W1区西全景(西から)
図版５　高松原古才遺跡
1. 溝1(東から)
2. 竪穴住居1・建物2他(西から)
3. 河道2東岸斜面(南西から)
図版６　高松原古才遺跡
1. 竪穴住居2(南から)
2. 竪穴住居3(南から)
3. 竪穴住居4・5(北から)
図版７　高松原古才遺跡
1. 竪穴住居7(北から)(上)、竪穴住居8・9(南から)(下)
2. 竪穴住居10・11(北から)(上)、竪穴住居12(南から)(下)
図版８　高松原古才遺跡
1. 立田W1区東古墳時代柱穴群(南から)
2. 柱穴列1(南から)
3. 土壙1(南から)
図版９　高松原古才遺跡
1. 溝3(南西から)
2. 溝11～18(東から)
3. 柵1・溝7(南から)
図版10　加茂政所遺跡
1. 高田3区全景(西から)
2. 砂場2区全景(西から)
3. 砂場5区調査風景(北東から)
図版11　加茂政所遺跡
1. 竪穴住居1・16(東から)
2. 墓1(東から)
3. 土壙1(北から)
図版12　加茂政所遺跡
1. 土壙6(北から)
2. 土壙7半割状況(南西)(上)、土壙7貝殻集積状態(南西から)(下)
図版13　加茂政所遺跡
1. 土壙7遺物出土状態(北東から)
2. 土壙7完掘状況(南東から)
3. 土壙13(南から)
図版14　加茂政所遺跡
1. 土壙15(西から)
2. 竪穴住居2(南から)(上)、竪穴住居3(西から)(下)
図版15　加茂政所遺跡
1. 竪穴住居5(北から)
2. 竪穴住居6(北西から)(上)、同カマド(北西から)(下)
図版16　加茂政所遺跡
1. 竪穴住居7(北から)(上)、竪穴住居8(東から)(中)、竪穴住居10(北西から)(下)
図版17　加茂政所遺跡
1. 竪穴住居11・12(東から)
2. 竪穴住居13(北から)
3. 同壁側穴(西から)
4. 同壁側穴断面(西から)
図版18　加茂政所遺跡
1. 竪穴住居14(東から)
2. 竪穴住居15(南から)
図版19　加茂政所遺跡
1. 炉状遺構2(西から)
2. 溝6(北東から)
3. 溝7(北から)
4. 同遺物出土状態(南西から)
図版20　加茂政所遺跡
1. 溝9遺物出土状態(南から)
2. 溝10(北から)
3. 同遺物出土状態(東から)
図版21　加茂政所遺跡
1. 溝11(南東から)
2. 同遺物出土状態(北西から)
3. 土壙17(南西から)
図版22　加茂政所遺跡
1. 土壙20(北から)
2. 溝14～17(東から)
3. 土器溜まり1(南から)
4. 同軒丸瓦出土状態(南西から)
図版23　加茂政所遺跡
1. 集石2(北から)
2. 墓4(南から)
3. 土壙26(南から)
図版24　加茂政所遺跡
1. 溝23～39(北東から)
2. 溝44(東から)
3. 溝51(西から)
図版25　津寺遺跡
1. 高田1～3区全景(西から)
2. 高田6・7区全景(北から)
3. 中屋3区全景(南西から)
4. 中屋T区全景(北東から)
図版26　津寺遺跡
1. 溝2(南東から)
2. 溝3(南東から)
3. 溝6(南から)
4. 溝9(南から)
5. 溝10(北東から)
図版27　津寺遺跡
1. 竪穴住居5(北西から)
2. 竪穴住居6(南から)
3. 竪穴住居6カマド(南から)
図版28　津寺遺跡
1. 竪穴住居7(東から)
2. 竪穴住居8・9(南から)
3. 高田4・5区古墳時代遺構全景(東から)

図版29　津寺遺跡
1. 竪穴住居10(南から)
2. 竪穴住居12(南から)
3. 竪穴住居13(南から)
図版30　津寺遺跡
1. 竪穴住居14(南から)
2. 竪穴住居15(南から)
3. 竪穴住居14カマド(南東から)
4. 竪穴住居15カマド下土壙(東から)
図版31　津寺遺跡
1. 竪穴住居16(南から)
2. 竪穴住居17～20(北東から)
3. 溝25(南東から)
4. 溝26(北東から)
図版32　津寺遺跡
1. 高田4･5区古墳時代水田(東から)
2. 高田6･7区古墳時代水田(北から)
3. 溝23(南から)
図版33　津寺遺跡
1. 土器溜まり1(南西から)
2. 土器溜まり2(南から)
3. 建物1(南から)
図版34　津寺遺跡
1. 溝44･45(東から)
2. 溝38･39(東から)
3. 溝49･50(南西から)
4. 土器溜まり3(南西から)
図版35　津寺遺跡
1. 高田1～3区中世遺構全景(東から)
2. 土壙2(西から)
3. 土壙6(北東から)
4. 溝57(北から)
図版36　津寺遺跡
1. 溝54(南から)
2. 溝59･60(南西から)
3. 溝66～73(南西から)
4. 溝74～78(北東から)
5. 溝79･81(西から)
図版37　立田遺跡
1. 土壙1出土土器
図版38　立田遺跡
1. 土壙2出土土器
図版39　立田遺跡
1. 土壙3出土土器
2. 立田遺跡出土土器･石器
図版40　高松原古才遺跡
1. 高松原古才遺跡出土土器
図版41　高松原古才遺跡
1. 高松原古才遺跡出土石器･玉類
2. 高松原古才遺跡出土鉄器
図版42　加茂政所遺跡
1. 加茂政所遺跡出土弥生土器
図版43　加茂政所遺跡
1. 加茂政所遺跡出土土器
図版44　加茂政所遺跡
1. 溝10出土土器
2. 加茂政所遺跡出土古墳時代土器･紡錘車
図版45　加茂政所遺跡
1. 加茂政所遺跡出土古代･中世遺物
図版46　加茂政所遺跡
1. 加茂政所遺跡出土石器･分銅形土製品
2. 加茂政所遺跡出土鉄器
図版47　津寺遺跡
1. 津寺遺跡出土土器
図版48　津寺遺跡
1. 津寺遺跡出土石器･金属器･土錘･羽口

表　目　次

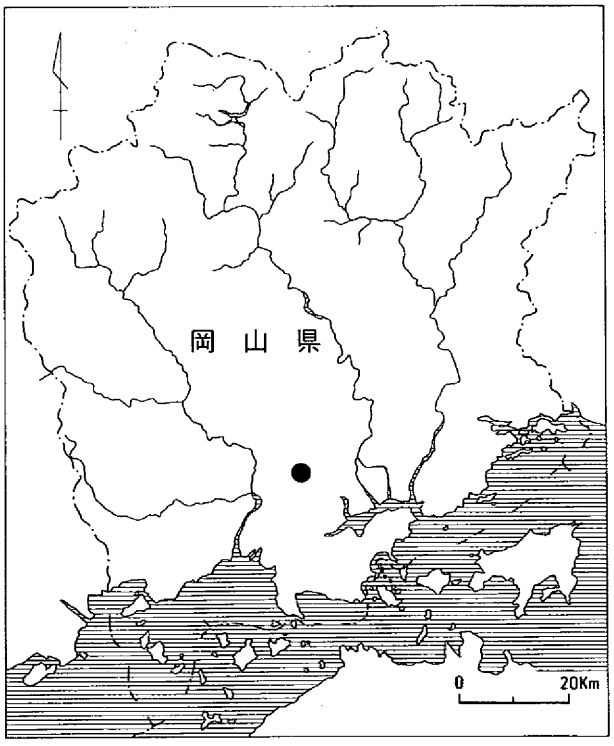
第1表　立田排水機場関連発掘調査一覧表 …… 11
第2表　獣骨等鑑定結果一覧表 …… 218
第3表　石製品一覧表 …… 219
第4表　土錘一覧表 …… 220
第5表　緑釉･灰釉陶器一覧表 …… 221
第6表　出土窯壁片･羽口片一覧表 …… 221

第１章　遺跡の位置と環境

本書で報告する立田遺跡(１)・高松原古才遺跡(２)・加茂政所遺跡(３)・津寺遺跡(４)は、岡山県南部中央よりやや西寄り、足守川下流域の東岸に位置する。行政区画上は岡山市の西端にあたるが、地形的には総社平野の東端を占め、原始・古代には高梁川の分流が総社平野を西から東に貫流し、さらに現在の足守川に沿って南流していたと考えられている。足守川は吉備高原の高陣山に源を発し、岡山市足守で平野部に至り、岡山市三手で血吸川と前川を合わせて砂川に合流して南進する。現在では、岡山市古新田で笹ケ瀬川に合流し、児島湾に注ぐが、縄文時代から中世には現在の平野部の奥深くまで海が入り込んでいたことから、倉敷市下庄から岡山市庭瀬辺りが河口であったと考えられる。そうであるとすれば、報告する諸遺跡の所在する微高地は、足守川河口から約４km上流にあたる。

足守川下流域にあたる岡山市三手から加茂、吉備津、川入、そして倉敷市矢部から上東一帯には多くの微高地が形成されている。その広がりのすべてが明らかにされているわけではないが、遺跡の所在する微高地群は大きく二つに分けることができる。一つはかつての河口に形成された倉敷市上東から岡山市川入地域の微高地群で、上東遺跡(５)、新邸遺跡(６)、川入遺跡(７)などが所在する。もう一つは河口から少し上流にあたる岡山市三手から高塚、加茂、倉敷市矢部地域の微高地群で、報告する諸遺跡もこの中に含まれるほか、津寺遺跡、矢部南向遺跡(８)、高田遺跡(９)などが所在する。

ほぼ南北に広がる足守川下流域平野部の東側と西側には丘陵が連なり、その南端はかっての海に面していたと思われる。この丘陵上には大形の墳丘墓を始め、多くの古墳が認められることから、微高地上の大集落と併せて考えれば、吉備において重要な役割を担った地域であった可能性は高い。以下、報告する諸遺跡周辺を中心に、密接な関係を有する足守川下流域一帯を視野に入れ、歴史的環境を述べる。



第１図　遺跡の位置（黒丸印）

この地域における最も古い生活の痕跡は、足守川西岸の丘陵上に所在する甫崎天神山遺跡(10)や雲山遺跡(11)から出土したナイフ形石器から、旧石器時代に遡ることは明らかであるが、資料が少ないためその実態は不明である。

寒冷な旧石器時代から温暖な気候となった縄文時代には海水面の上昇が始まり、倉敷市上東から岡山市川入付近まで海が入り込んでいたであろう。足守川西岸の丘陵裾に立地する矢部貝塚(12)は、このことを雄弁に物語っている。中期後半に形成された貝層は大半がヤマトシジミで、これにカキ、ハイガイなど

1	立田遺跡	10	甫崎天神山遺跡	19	津寺三本木遺跡	28	雲山烏打墳丘墓	37	前池内古墳群
2	高松原古才遺跡	11	雲山遺跡	20	吉野口遺跡	29	女男岩墳丘墓	38	王墓山古墳群
3	加茂政所遺跡	12	矢部貝塚	21	矢部大坑遺跡	30	矢部大坑古墳	39	王墓山古墳
4	津寺遺跡	13	加茂B遺跡	22	矢部堀越遺跡	31	中山茶臼山古墳	40	二子14号墳
5	上東遺跡	14	矢部奥田遺跡	23	後池内遺跡	32	佐古田堂山古墳	41	大崎廃寺
6	新邸遺跡	15	矢部伊能軒遺跡	24	女男岩遺跡	33	造山古墳	42	日畑廃寺
7	川入遺跡	16	前池内遺跡	25	加茂A遺跡	34	小造山古墳	43	惣爪廃寺
8	矢部南向遺跡	17	黒住遺跡	26	楯築弥生墳丘墓	35	三手遺跡	44	東山遺跡
9	高田遺跡	18	西尾貝塚	27	鯉喰神社墳丘墓	36	榊山古墳		

第２図　調査地点周辺遺跡分布図（1/40000）

が混じることから、さほど遠くない場所でこれらの貝を採集したとすれば、上東から川入付近に河口が、倉敷市下庄から岡山市庭瀬付近には砂泥質の海が広がっていたと考えられる。こうした自然環境は、加茂Ｂ遺跡(13)や加茂政所遺跡における弥生時代中・後期の貝塚から見て、大きな変化は認められない。このような情況は、河川による沖積化の進行はあるものの、おそらく中世まで大きな変化はなかったものと考えられる。

ところで、縄文時代には早期の矢部奥田遺跡(14)や矢部伊能軒遺跡(15)、中期から後期の前池内遺跡(16)や黒住遺跡(17)、後期から晩期の甫崎天神山遺跡、中期から後期の矢部貝塚、後期の西尾貝塚(18)など、丘陵上から裾部に立地する遺跡が多いが、後期になると津寺遺跡のような微高地上の遺跡も見られるようになる。これらの遺跡では、わずかな遺物の出土によって生活の痕跡が窺われる程度であるが、矢部貝塚は発掘によって貝層が分析され、生業活動の一端が垣間見れる貴重な例である。

弥生時代になると、微高地上に多くの遺跡が形成されるようになる。前期の集落の実態はなお明確でないが、高松原古才遺跡を始め加茂政所遺跡、津寺遺跡、岩倉遺跡、高田遺跡、川入遺跡などで遺物が認められることから、小規模な集落が点在していたものと思われる。中期になると先の遺跡に加え、津寺三本木遺跡(19)、加茂Ｂ遺跡、矢部南向遺跡、新邸遺跡、吉野口遺跡(20)、上東遺跡など、遺跡数の増加が著しい。これらの多くは後期で拡大し、さらに古墳時代にまで続く。

中期、特にその後半には、後期の大集落の先駆けとなるような微高地の遺跡に対し、矢部大坑遺跡(21)、矢部奥田遺跡、矢部堀越遺跡(22)、前池内遺跡、後池内遺跡(23)、雲山遺跡、女男岩遺跡(24)など、丘陵上あるいはその裾部に小規模な、しかも短期間の集落を形成する遺跡が急増する。水稲農耕に適した微高地上の集落と異なり、少なくとも水稲農耕に適した場所とは言えないところに営まれた集落は、軍事的緊張関係の高まりと関わる高地性集落と時期が重なることから、その社会的背景のもとで出現したものと考えられる。

後期になると55軒の住居からなる津寺遺跡を始め、加茂政所遺跡、高塚遺跡、矢部南向遺跡、加茂Ｂ遺跡、やや離れるが上東遺跡など、拠点的な集落が形成される。これらの拠点集落は高塚遺跡で銅鐸や貨泉、加茂政所遺跡で銅釧、矢部南向遺跡で小銅鐸や銅鏡などの青銅器を持ち、加茂Ａ遺跡(25)や加茂Ｂ遺跡では朱に関わる遺物をもつなど、他地域の集落に比較して優位性が見られる。これは集落のみならず、楯築弥生墳丘墓(26)、鯉喰神社墳丘墓(27)、雲山鳥打墳丘墓(28)、女男岩墳丘墓(29)など、大形を含む墳丘墓が集中することからも、岡山県南部に留まらず、のちに吉備と呼ばれた地域の中枢であった可能性が強い。

古墳時代前半期の集落は弥生時代後期の集落から継続しており、しかも252軒もの住居からなる津寺遺跡のように拠点集落の発展が窺われる。これらの集落からは、弥生時代終末から各地域の土器が出土していることから、吉備の中枢勢力として物流の拠点をも掌握していたと思われる。しかしその政治勢力の首長墳は以外に少なく、矢部大坑古墳(30)と中山茶臼山古墳(31)があるにすぎない。むしろその主体は岡山平野、とりわけ旭川東岸に移っている。

足守川流域では中山茶臼山古墳に続き佐古田堂山古墳(32)が、続いて吉備最大の造山古墳(33)が築造される。このあと小造山古墳(34)が造られるが、これを最後に足守川流域から大形の首長墳は姿を消し、おもに総社平野に築かれるようになる。

中期の集落は以外に少なく、高塚遺跡や津寺遺跡、三手遺跡(35)などがあるにすぎない。このうち高塚遺跡や津寺遺跡ではカマドを作り付けた竪穴住居が認められ、朝鮮半島系の遺物も出土している。

造山古墳の陪冢の一つである榊山古墳(36)からも馬形帯鉤や陶質土器が出土していることを併せて考えると、渡来系の人々が居住していたことが推定される。

後期になると周辺の丘陵上には多くの古墳が築かれる。その多くは前内池古墳群(37)や王墓山古墳群(38)などで明らかにされているような、横穴式石室をもつ小規模な古墳であるが、大形の石室に家形石棺を収めた王墓山古墳(39)も存在する。おそらく被葬者はこの地域でイニシアチブを取った人物と推定される。7世紀になると古墳は減少してくるが、ごく一部の有力氏族や官人層はなお古墳を造り続けている。その一つが二子14号墳(40)で、一辺13mの外護列石をめぐらす2段築成の方墳である。一方、これとあい前後して大崎廃寺(41)や日畑廃寺(42)などの寺院が造られるようになる。こうした寺院はこれまで古墳を築造していた有力首長層が新来のイデオロギーを受け入れたことによるものであろう。また、なかには中央政権に官人として組み込まれた者もおり、後内池古墳の石室から出土した「官」印の押された須恵器はこのことを如実に物語っている。

古代の足守川下流域は備中国の東端に位置し、都宇郡に属していた。都宇郡は4郷からなる小郡で、本書で報告する諸遺跡は河面郷に属していたものと推定される。津寺遺跡の南、足守川に接して惣爪廃寺(43)があるが、その北側にはほぼ東西に古代山陽道が推定されている。足守川西岸の山陽道沿いには津峴駅に比定されている矢部遺跡がある。

津寺遺跡からは外溝の中心で南北123.80m、東西約93.75mを測る2条の溝で区画された掘立柱建物群が発見されている。8世紀の第2四半期に建てられ、第3四半期頃まで継続したと考えられ、津寺が交通の要衝であることから、物流の拠点として公的な機能が推定されている。

古代の集落については不明な点が多いが、掘立柱建物は津寺遺跡、吉野口遺跡、矢部南向遺跡、東山遺跡(44)などで見られる。また、津寺遺跡では大規模な護岸施設が築かれている。この護岸施設は6世紀末から7世紀初頭に造られ、奈良・平安時代に機能していたもので、水利管理、水衝部の保護、陸橋などの役目をはたしたものと推定されている。

荘園との関わりが想定される加茂政所遺跡からは、平安前期の瓦とともに梵鐘の鋳造跡も発見されており、小規模な寺院が存在していたことが窺われる。

中世の遺跡は高塚遺跡、津寺遺跡、東山遺跡、吉野口遺跡、三手遺跡、足守川矢部南向遺跡など、多くの遺跡で集落を構成する遺構が発見されている。このうち津寺遺跡や三手遺跡などでは、溝で区画された建物群が見られるほか、輸入陶磁器を副葬する土壙墓も散見されることから、やや上位の農民層の屋敷地ではないかと考えられる。　　(岡本)

参考文献

『岡山県史』第1巻（自然風土）岡山県 1983年
『岡山県史』第18巻（考古資料）岡山県 1986年
近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年

なお、個々の遺跡に関わる報告書については省略した。

各遺跡の後ろに付した番号は第2図の遺跡番号と対応している。

第２章　調査の経過

第１節　調査の契機

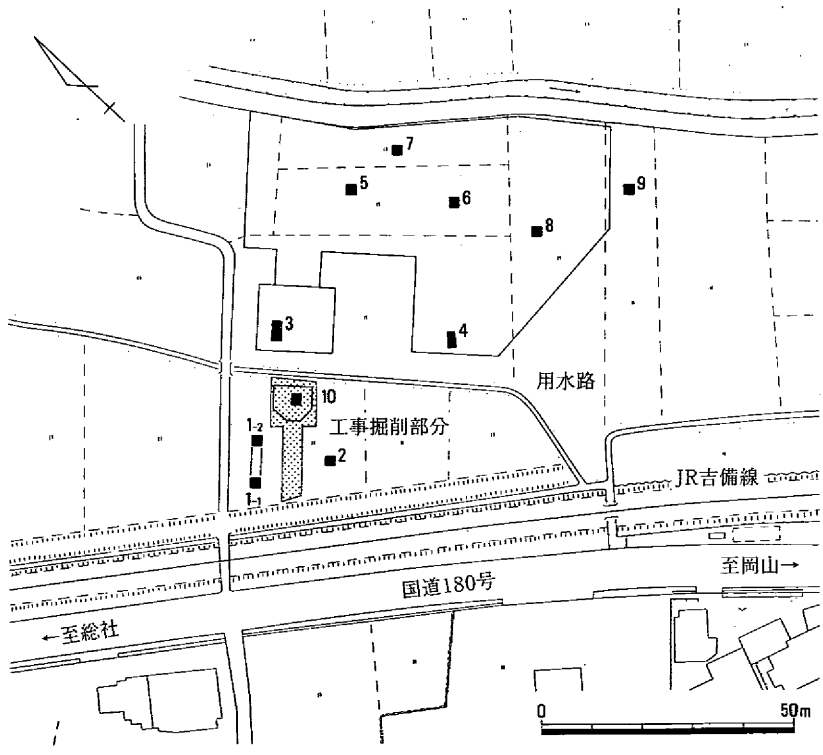
岡山市高松西川地区における県営排水防除事業は、以前から耐水の激しかったこの地域に、山陽自動車道が東西に横断することによって起因した事業である。このため岡山県農林部（農政企画課）は、地元要望により、立田地区に排水機場を設け、山陽自動車道の南北の側道を利用して直径約２ｍほどの送水管を埋め、足守川に排水する計画であった。しかしこの地域は、笹ヶ瀬川への自然排水であり、水利権の異なる足守川への強制排水であったため、地元では諸々の問題を持っていたようである。

埋蔵文化財の協議は、昭和62年９月、担当であった岡山地方振興局農林事業部から今年度立田地区の排水機場の用地買収が完了する予定であり、早急に発掘調査を行って欲しい旨の要望が出された。しかし当時、山陽自動車道の発掘調査が始まったばかりの頃で、最も忙しい時期であり人員を充てることが出来なかった。協議の結果、平成元年度に排水機場建設予定地の確認調査を実施し、遺跡の有無、その範囲を確定することになったのである。

側道敷の調査については、日本道路公団との協議により、地盤不等沈下防止ネットを敷くことによって仮保存をすることで協議が整ったばかりの時であり、改めて発掘調査を行わねばならなかった。このためジャンクション部分から足守川までについては平成元・２年にジャンクション部分の調査と同時に行うこととし、この区間以外は順次発掘調査を行っていく事となったのである。　（伊藤）

事業は順調に進行するかにみえたが、県道箕島高松線の道路敷部分から東へ約30ｍの区間については、周辺住民との合意が得られず、平成５年度の調査が終了した時点で中断のやむなきに至った。

平成９年度に合意が成り、調査を再開するとともに、県道部分については主要な生活道路として遮断が困難なため立会調査を実施することとした。　（岡本）



第３図　第一次調査トレンチ位置図（1/1500）

第２節　１次調査の経過

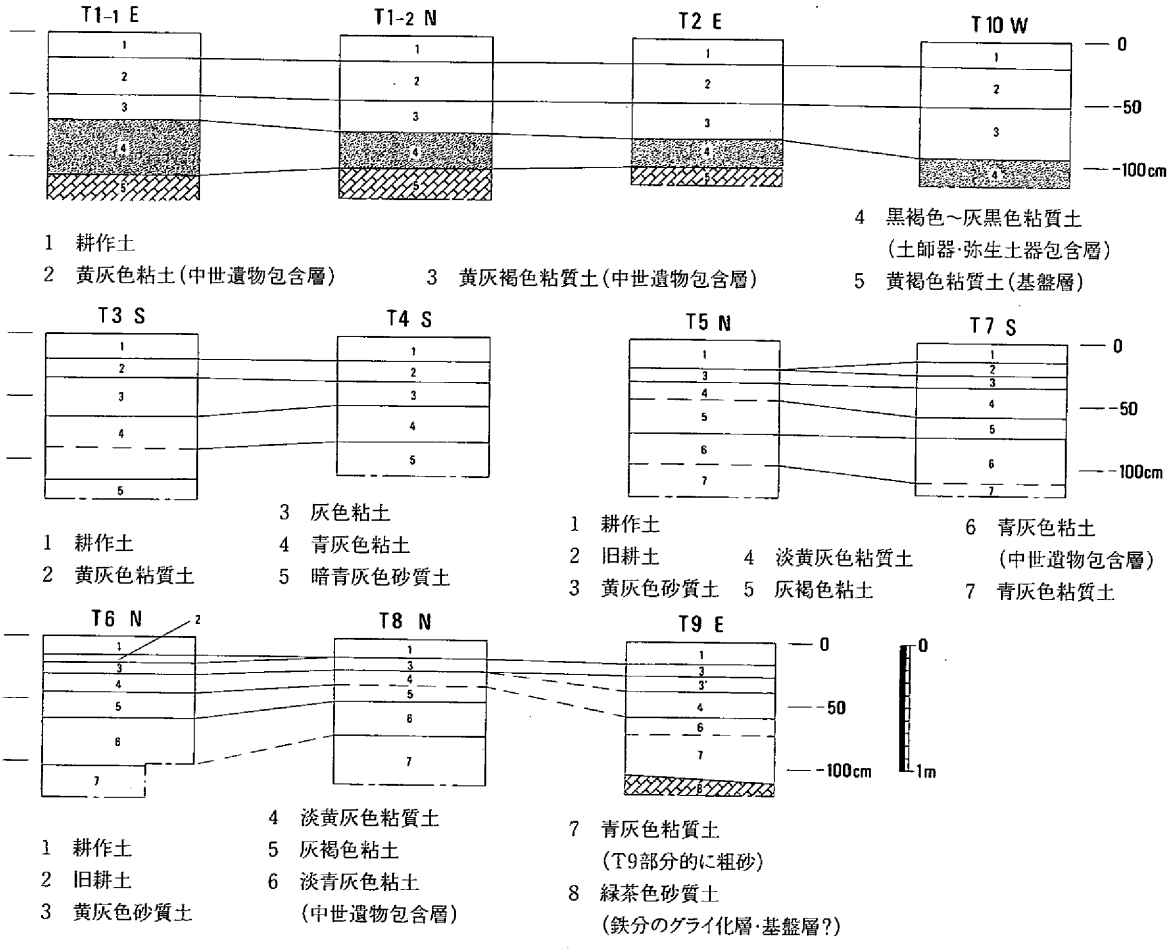
１次調査は、排水機場建設用地が立田遺跡に隣接することから、用地内の遺跡の状況を把握するため、２m四方のトレンチを11カ所に設定し実施した。調査地点は、山陽自動車道と国道180号線が交差するところからすぐ北側にあたる岡山市立田鼓山下の一角であり、調査期間は平成元年10月12～16日、調査面積は46.5㎡であった。

調査は各トレンチを約120cm前後掘り下げ、土層断面観察および出土遺物と遺構の有無の確認を行い、以下の結果を得た。

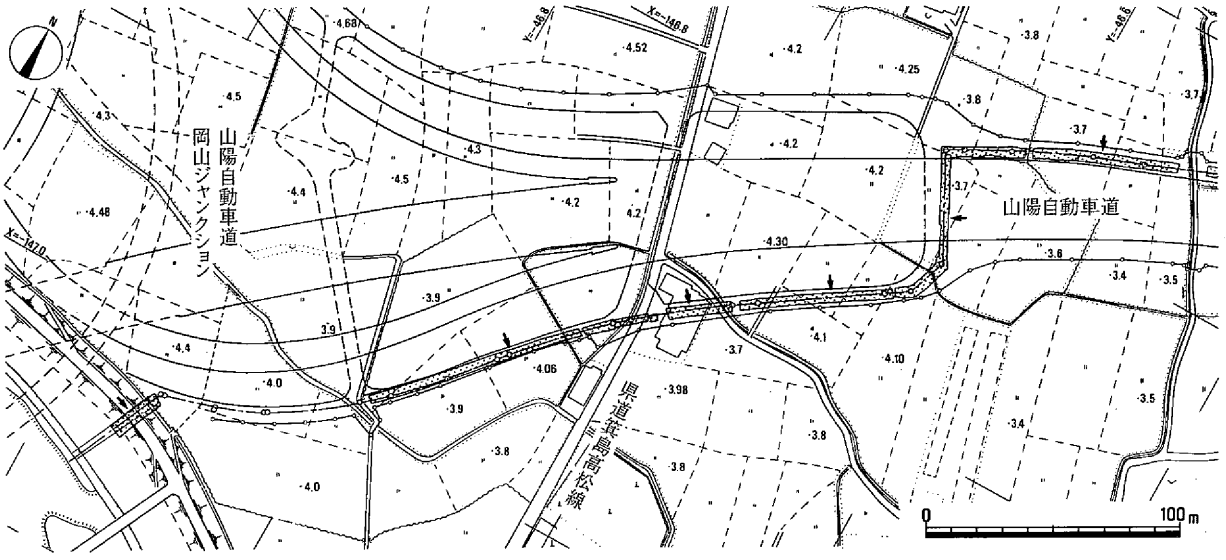
１．第３図に示す用地内のうち、用水路の南西部分にあたる第1－1・1－2・2・10の各トレンチで、中世の遺物包含層（第４図第２・３層）および弥生土器・土師器の包含層（同第４層）を認め、その下部の基盤層（同第５層）上面に住居跡などの遺構の存在が予想される。

２．同様に、用水路の北東部分にあたる第３～９トレンチでは、第５トレンチなどの第６層に１～２片の中世土器が出土したものの、いわゆる旧河道あるいは湿地帯であることを認めた。

以上のことから、用水路から南西部分のＪＲ吉備線との間の約500㎡は微高地状の遺跡地内であり、工事掘削の伴う部分（第３図網目部分）の約150㎡については、全面発掘調査が必要であることが判



第４図　第1次調査トレンチ土層断面模式図（1/60）



第５図　調査地区（矢印）の位置及び周辺地形図（1）（1/3000）

明したものである。また、用水路の北東部分については沼地状の湿地帯であり、古代あるいは弥生水田の存在も土層関係からは認められなかったため、調査対象からは除外する判断を下した。

なお、第９トレンチ部分から以東には別の微高地の存在も予測されたが、第９トレンチも含めて最終的に用地外となったため調査の必要がなくなった。（柳瀬）

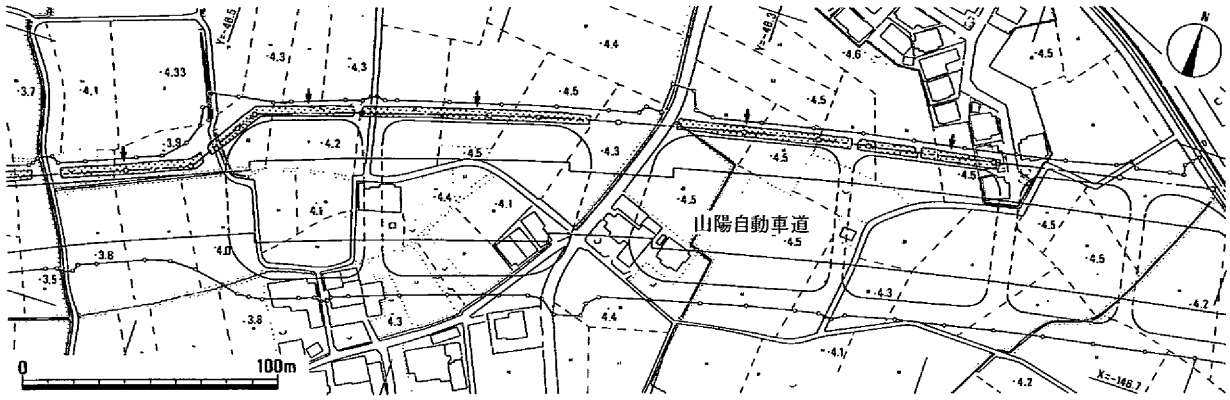
第３節　２次調査の経過

２次調査は、排水機場部分の一部と送水管埋設部分の合計150㎡が対象となった。調査は、重機による耕土層除去の後、順次平面的な掘り下げ・清掃を行いながら遺構の検出・実測などを実施した。この結果調査区は、北側排水機場部分が北側に緩やかに斜傾する微高地の下がり斜面を、南側送水管部分が微高地上面の状況を呈することを確認した。これにより調査の大半は、微高地上面で検出される土壙、柱穴に注がれることとなった。中でも土壙には比較的数多くの土器の遺存により、時間を費やすこととなった。調査の行程は、以下のとおりである。（島崎）

日誌抄

平成２年（1990年）

4月10日（火）	調査機材搬入。現場作業開始。
4月16日（月）	杭打ち。グリッド設定。
4月19日（木）	土壙１掘り下げ開始。
4月24日（火）	土壙２掘り下げ開始。土壙１遺物検出状況写真撮影。
4月25日（水）	土壙３掘り下げ開始。
4月27日（金）	土壙２・３遺物検出状況写真撮影。
5月８日（火）	溝２遺構検出状況写真撮影。
5月10日（木）	遺構全体写真撮影。
5月11日（金）	調査資材撤収。調査終了。



第６図　調査地区（矢印）の位置及び周辺地形図（2）（1/3000）

第４節　３次調査の経過

日本道路公団は、渇水期にあたる平成２年11月中旬、足守川右岸堤防の掘削工事を始めた。この地区は津寺遺跡中屋調査区の連端部にあたるため同月26日から当センターが調査を実施することになった。足守川堤防下の調査であるため、最初に堤防の盛り土の状況を観察した。次に堤防除去後に掘削される115㎡の調査区を設定した。調査区は北北東から南南西に長い短冊形を呈する。遺構は堤防とほぼ並行する近世から中世の溝群７条と中世から古代の水田層を１層ずつ検出した。それらの遺構を掘り上げた後、下層遺構を精査したところ、古墳時代から弥生時代の竪穴住居が８軒検出できた。遺物は弥生土器・土師器・陶磁器など15箱を採集している。　（浅倉）

日誌抄

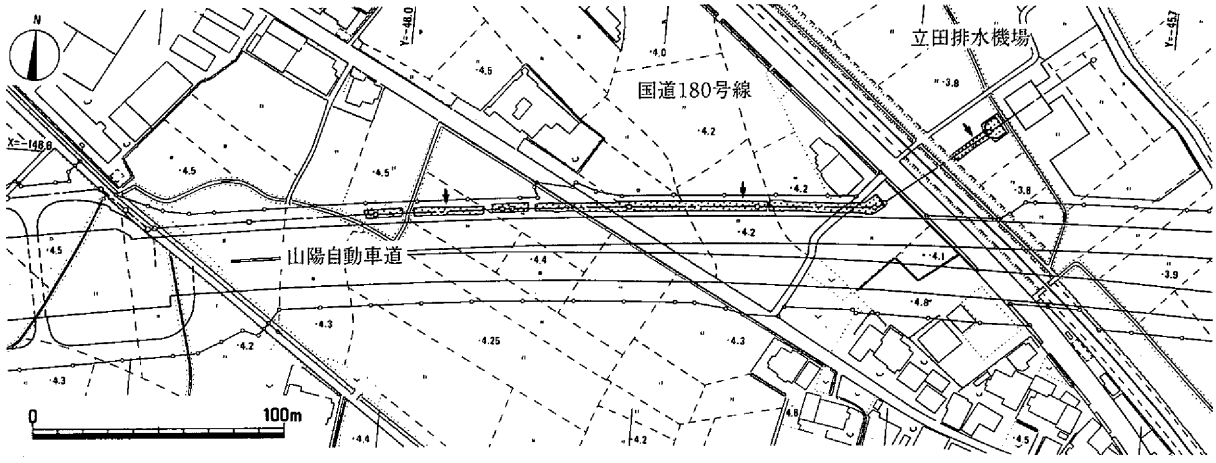
平成２年（1990年）

11月26日（月）引っ越し、テント設営
11月27日（火）ベルコン移動、トレンチ設定
11月28日（水）トレンチ掘り下げ
11月29日（木）中世溝掘り下げ
11月30日（金）所内会議
11月１日（土）中世溝掘り下げ
11月３日（月）中世溝掘り下げ
11月４日（火）中世溝・中世水田掘り下げ
12月５日（水）中世溝・中世水田掘り下げ
12月６日（木）中世溝・中世水田掘り下げ
12月７日（金）竪穴住居掘り下げ
12月10日（月）竪穴住居掘り下げ
12月11日（火）弥生時代下がり掘り下げ
12月12日（水）古墳時代溝掘り下げ
12月13日（木）弥生時代竪穴住居掘り下げ
12月20日（木）調査終了

第５節　４次調査の経過

４次調査は、国道180号線の西側付近を中心に、放水管埋設部分の208㎡を対象に実施した。排土置場や既設道路などとの関連から調査区を二つに分け（立田Ｅ２区・立田Ｅ１区東，西）、道路盛土及び排土層を重機により除去してＷ１区、Ｅ２区の順に調査を進めた。

調査の結果、東西両区とも微高地上にあたり、いずれも西傾する微高地の下がり斜面を各区西端で



第７図　調査地区（矢印）の位置及び周辺地形図（3）（1/3000）

確認できた。遺構としては、Ｗ１区では古墳時代後期の竪穴住居２軒をはじめ、土壙６、溝１、柱穴多数を検出した。また、西側の河道中からは後期弥生土器がまとまって出土した。一方、Ｅ２区では弥生時代の柱穴群を検出したが、確実な構築物は認められなかった。ここでも微高地斜面（後に河道と判明）から弥生土器が出土している。なお、Ｗ１区では上層から中世の小溝が数条確認された。出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器などであり、やや散在的な出土状況を呈する。　（桑田）

日誌抄

平成４年（1992年）

2月３日　Ｗ１区発掘調査開始

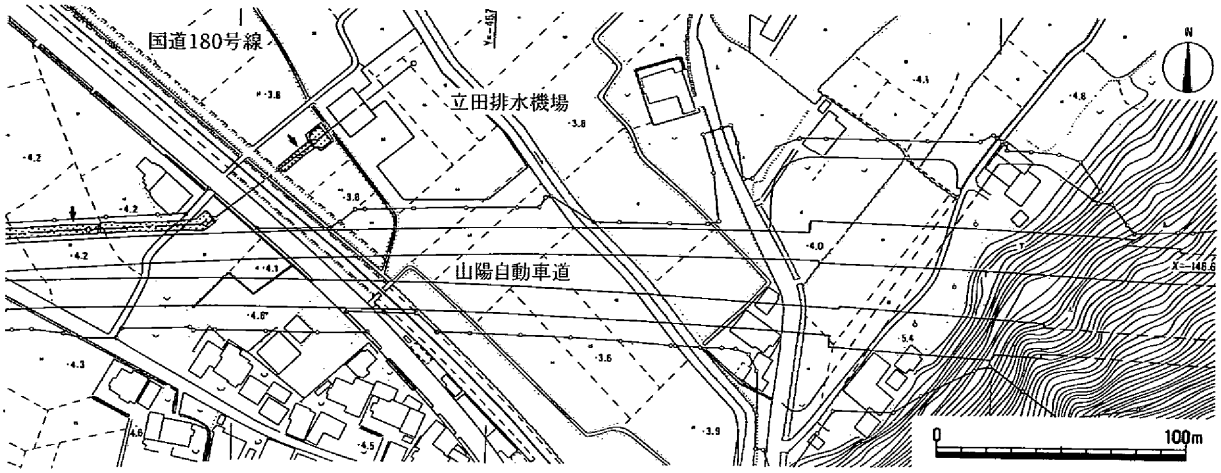
2月20日　Ｅ２区発掘調査開始

3月31日　Ｗ１・Ｅ２区発掘調査終了

第６節　５次調査の経過

５次調査は平成４年度を通して行われた。発掘調査の対象地区は立田遺跡・高松原古才遺跡・津寺遺跡、そして加茂政所遺跡の一部であった。昨年度に調査を実施した立田遺跡（Ｅ２区）と高松原古才遺跡（Ｗ１区）の２カ所の調査区の間（Ｅ１区）から調査を開始した。この調査区は西半が微高地にあたり、東半には弥生時代の河道が存在した。旧河道部分については、途中から砂層になって湧水が始まったため、土器を多く包含していた層を掘り上げた段階で調査を終了した。次にＷ１区の西の調査に入った。Ｗ１区では弥生時代の微高地端部は検出されたが、古墳時代以降の遺跡の西限が明確でなかったためである。土層的には古墳時代後期以降の水平層が続いていたが、Ｗ１区の西50ｍあたりで遺構・遺物ともみられなくなり、ここで調査を終了した。続いて、立田遺跡の最後の調査区（Ｅ３区）に入り、微高地の基盤層まで掘り下げて、この地区の調査を終えた。

次に調査は西端の津寺遺跡中屋調査区へ移った。この地区もほとんどの部分が微高地上にあったが、遺構の多くは中世以降のものであった。弥生時代の大溝が調査区をかすめ、掘り下げに苦労した。中屋調査区の終了後は津寺遺跡と加茂政所遺跡の間の北側道下の調査に入り、津寺遺跡高田1～5区・加茂政所遺跡高田１～３区の調査を続いて実施した。この地区は微高地の裾部分にあたり、水田なども検出されたが、微高地の基盤層が確認された。調査は津寺遺跡にもどり、高田6区から11区まで微高地の基盤層までの掘り下げを終えて、調査をすべて終了した。　（岡本）



第８図　調査地区（矢印）の位置及び周辺地形図（４）（1/3000）

日誌抄

平成４年（1992年）

４月１日　高松原古才遺跡・立田遺跡調査開始
６月25日　高松原古才遺跡・立田遺跡調査終了
６月26日　津寺遺跡中屋調査区調査開始
８月31日　津寺遺跡中屋調査区調査終了
９月１日　津寺遺跡高田調査区１～５区調査開始
11月２日　加茂政所遺跡高田調査区調査開始
12月10日　津寺遺跡高田調査区１～５区調査終了
12月15日　津寺遺跡高田調査区６・７区調査開始
12月18日　加茂政所遺跡高田調査区調査終了

平成５年（1993年）

２月８日　津寺遺跡高田調査区６・７区調査終了
２月９日　津寺遺跡高田調査区８~11区調査開始
３月31日　津寺遺跡高田調査区８~11区調査終了

第７節　６次調査の経過

６次調査は、前年度の調査に引き続いて、平成５年４月から加茂政所遺跡の高田４・５区および砂場１区から８区にかけて発掘調査に着手した。高田４・５区では、古墳時代や中世の溝などを検出した。また、砂場２区から８区の調査では、東と西に２つの微高地を確認し、西側で古墳時代の竪穴住居や溝のほか古代から中世の土壙墓や土壙・溝などを、東側で弥生時代や古墳時代の竪穴住居や溝・土壙などを検出し11月末に調査を終了した。一方、高松原古才遺跡の立田Ｃ区は、着手準備に時間を要したため、平成６年２月から調査を実施することになった。立田Ｃ区では、古墳時代後期の竪穴住居８棟のほか、溝・土壙・焼土遺構などを検出し、３月で調査を終了した。（内藤）

日誌抄

平成５年（1993年）

４月１日　加茂政所遺跡砂場１・２区調査開始
４月12日　加茂政所遺跡高田４・５区調査開始
５月24日　加茂政所遺跡砂場３・４区調査開始
８月４日　加茂政所遺跡高田４・５区調査終了
８月26日　加茂政所遺跡砂場５・６区調査開始
９月16日　加茂政所遺跡砂場３・４区調査終了
９月27日　加茂政所遺跡砂場１～４区調査終了
10月６日　加茂政所遺跡砂場７・８区調査開始
11月10日　加茂政所遺跡砂場６・７区調査終了
11月24日　加茂政所遺跡砂場５・８区調査終了

平成６年（1994年）

２月14日　高松原古才遺跡立田Ｃ区調査開始
３月31日　高松原古才遺跡立田Ｃ区調査終了

第８節　７次調査の経過

７次調査は平成９年12月10日から開始した。調査の対象地は真砂の盛土がなされた上にアスファルト舗装がされていたため、これらを事前に重機を使って除去することから始めた。調査区の東半は現在の水田の上に遺跡を保護するための網（ジオグリッド）が現れたが、西半では網が破られ、さらに深く掘削されて、大量の破砕礫が投入されていた。これらも重機で取り除き、東半では中世の包含層と考えられる層まで続けて表土剥ぎを行った。調査区の東端ではすぐに微高地の上面を覆う古墳時代以前の包含層が出土したが、そこから西は微高地の斜面となり、中世の遺物をかなり包含した粘土層が広く堆積していた。この層を取り除くと溝が５条交錯しながら検出され、一つの溝からは黒色土器の完形品が出土し、土層関係からも古代の遺構と考えられた。遺構の底はすでに全面が湧水する砂層となっていて、調査区の側壁の崩落も予想されたため、平成10年１月９日で調査を終了した。

立会調査は平成10年１月28日から３日間実施した。重機でじょじょに掘り下げながら遺構の有無を確認していった。古代の浅い溝と弥生時代の大溝が各１条検出され、これらを発掘して調査を終了した。出土遺物は土器片数片にすぎなかった。　（岡本）

日誌抄

平成９年（1997年）
12月10日　津寺遺跡高田調査区12区発掘調査開始
平成10年（1998年）
１月９日　津寺遺跡高田調査区12区発掘調査終了
１月28日　立会調査開始
２月３日　立会調査終了

第９節　報告書の作成

報告書作成作業は、平成９年度に岡山県古代吉備文化財センター職員１名が担当者として専従し、同センターで１年間をかけて実施することとなった。ところが年度途中で、放水管埋設事業で最後まで未着工で残されていた工区について、急遽施行の運びとなったため、報告書担当者が発掘調査員として出向いた。このため、この間の報告書作成作業の中断と新しい発掘調査の整理期間が必要となり、平成10年度に３カ月間報告書作成作業を継続した。

発掘調査は７次にわたっていて、各調査の遺構数と遺物量は第１表の通りである。作成作業にあたっては遺構は中世以前のものを対象とし、遺物については、津寺遺跡と加茂政所遺跡では遺構出土のものを中心とし、高松原古才遺跡と立田遺跡については包含層出土遺物も掲載に努めた。　（岡本）

第１表　立田排水機場関連発掘調査一覧表

次	調査期間	種別	調査担当者	調査面積	遺跡名	遺構数(内容)	遺物数	備考
1	1989.10.12~1989.10.16	確認	柳瀬昭彦	46.5㎡	立田		1箱	排水機場建設
2	1990. 4.10~1990. 5.11	全面	島崎　東	150 ㎡	立田	5(K3,D2)	20箱	排水機場建設
3	1990.11.26~1990.12.20	全面	浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶	115.5㎡	津寺	16(H9,D7)	15箱	放水管埋設
4	1992. 2. 3~1992. 3.31	全面	桑田俊明	208 ㎡	立田・高松原古才	9(H2,K6,D1)	12箱	放水管埋設
5	1992. 4. 1~1993. 3.31	全面	岡本寛久・長谷川澄博	1864 ㎡	立田・高松原古才 加茂政所・津寺	160(H18,B7,K11,D123,A1)	56箱	放水管埋設
6	1993. 4. 1~1994. 3.31	全面	内藤善史・長谷川澄博	1264 ㎡	加茂政所 高松原古才	145(H24,B2,K36,D62,T7,X14)	88箱	放水管埋設
7	1997.12.10~1998. 2. 3	全面	岡本寛久	150 ㎡	津寺	8(D8)	5箱	放水管埋設
計				3798 ㎡		335(H53,B9,K56,D203,A1,T7,X14)	197箱	

※遺構内容略号　H:住居　B:建物　K:土壙　D:溝　A:柵　T:墓　X:その他(土器溜まり等)

第10節　調査の体制

平成元年度から平成10年度にかけて実施した発掘調査と報告書作成の体制は以下の通りである。

平成元年度

岡山県教育委員会

教育長	竹内　康夫

岡山県教育庁

教育次長	竹本　博明

文化課

課　　長(～11/30)	吉尾　啓介
課　　長(12/1～)	鬼澤　佳弘
課長代理	河野　　衛
参　　事	浅野間朗雄
課長補佐(埋蔵文化財係長)	伊藤　　晃
主　　査	藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	長瀬日出明
次　　長	河本　　清

＜総務課＞

総務課長	竹原　成信
課長補佐(総務係長)	藤本　信康
主　　任	岡田　祥司
主　　任	平松　郁男
主　　任	片山　敦司

＜調査第一課＞

(課長事務取扱)	河本　　清
課長補佐(第一係長)	柳瀬　昭彦

平成２年度

岡山県教育委員会

教育長	竹内　康夫

岡山県教育庁

教育次長	杉井　道夫

文化課

課　　長	鬼澤　佳弘
課長代理	光吉　勝彦
課長補佐(埋蔵文化財係長)	伊藤　　晃
主　　査	藤川　洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	長瀬日出明
次　　長	河本　　清

＜総務課＞

総務課長	竹原　成信
課長補佐(総務係長)	藤本　信康
主　　任	平松　郁男
主　　任	坂本　英幸

＜調査第一課＞

(課長事務取扱)	河本　　清
課長補佐(第一係長)	柳瀬　昭彦
文化財保護主任	島崎　　東

＜調査第三課＞

課　　長	正岡　睦夫
第二係長	浅倉　秀昭
文化財保護主査	窪田　廣志
主　　事	守屋　佳慶

平成3年度

岡山県教育委員会

教育長	竹内　康夫

岡山県教育庁

教育次長	森崎岩之助

文化課

課　　長(~12/31)	鬼澤　佳弘
課　　長(1/1~)	渡邊　淳平
課長代理	大橋　義則
課長補佐(埋蔵文化財係長)	柳瀬　昭彦
主　　査	時長　　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	横山　常實
次　　長	河本　　清

＜総務課＞

総務課長	藤本　信康
課長補佐(総務係長)	小西　親男
主　　査	平松　郁男
主　　任	坂本　英幸

＜調査第一課＞

課　　長	葛原　克人
課長補佐(第一係長)	松本　和男
文化財保護主任	桑田　俊明

平成4年度

岡山県教育委員会

教育長	竹内　康夫

岡山県教育庁

教育次長	森崎岩之助

文化課

課　　長	渡邊　淳平
課長代理	松井　新一
課長補佐(埋蔵文化財係長)	柳瀬　昭彦
主　　査	時長　　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	横山　常實
次　　長	河本　　清
文化財保護参事	葛原　克人

＜総務課＞

総務課長	北原　　求
課長補佐(総務係長)	小西　親男
主　　査	石井　　茂
主　　査	石井　善晴
主　　任	三宅　秀吉

＜調査第一課＞

(課長事務取扱)	葛原　克人
課長補佐(第一係長)	高畑　知功
文化財保護主幹	松本　和男
文化財保護主査	岡本　寛久
文化財保護主査	長谷川澄博

平成5年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長	岸本　憲二

文化課

課　　長	渡邊　淳平
課長代理	松井　新一
課長補佐(埋蔵文化財係長)	高畑　知功
主　　査	時長　　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	横山　常實
次　　長	葛原　克人

＜総務課＞

総務課長	北原　　求
課長補佐(総務係長)	小西　親男
主　　査	石井　　茂
主　　査	石井　善晴
主　　任	三宅　秀吉

＜調査第一課＞

課　　長	正岡　睦夫
課長補佐(第二係長)	山磨　康平
文化財保護主査	内藤　善史
文化財保護主査	長谷川澄博

平成9年度

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長	平岩　　武

文化課

課　　長	髙田　朋香
課長代理	臼井　洋輔
課長代理	西山　　猛
参　　事	葛原　克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井　　勝
主　　事	三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	籔本　克之
次　　長	正岡　睦夫

＜総務課＞

総務課長	小倉　　昇
課長補佐(総務係長)	井戸　丈二
主　　査	木山　伸一

＜調査第二課＞

課　　長	伊藤　　晃
課長補佐(第二係長)	山磨　康平
文化財保護主幹	岡本　寛久

平成10年度

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長	平岩　　武

文化課

課　　長	髙田　朋香
課長代理	西山　　猛
参　　事	正岡　睦夫
課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本　和男
主　　事	三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	葛原　克人
次　　長	大村　俊臣

＜総務課＞

総務課長	小倉　　昇
課長補佐(総務係長)	安西　正則
主　　査	山本　恭輔

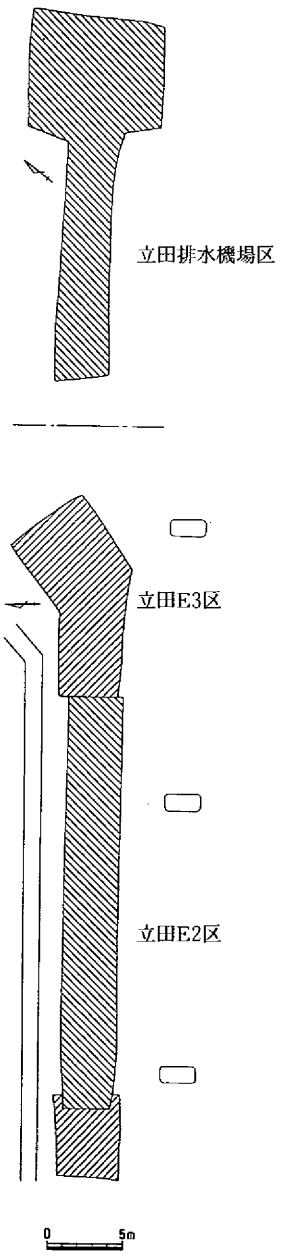
＜調査第三課＞

課　　長	柳瀬　昭彦
課長補佐(第三係長)	岡本　寛久

第3章　立田遺跡

第1節　概要

立田遺跡は本書で報告する遺跡の中でもっとも東に位置している。調査区では、立田排水機場区と立田Ｅ３区・Ｅ２区を遺跡の範囲として取り扱っている。現在の地名でいえば、立田Ｅ３区と立田Ｅ２区の境界あたりに立田と高松原古才の境があるが、立田Ｅ２区の西端で弥生時代の河道が検出され、これより東では、立田排水機場区の東半で確認された微高地の傾斜面まで、大きな微高地が存在するとみられる。この微高地を一つの遺跡としてとらえ、これを立田遺跡と呼びたい。



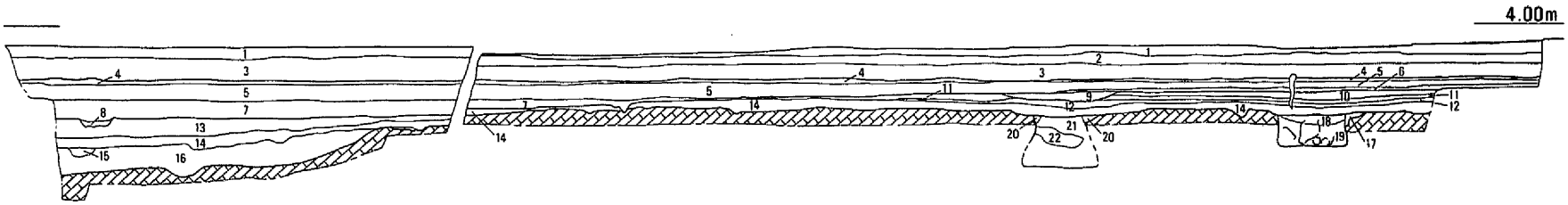
第9図　立田遺跡調査区区割り図(1/500)

第10図の上段は立田排水機場区の南東壁の土層断面図である。第７層が中世の包含層で、東へ厚みを増しながら堆積し、その上面は水平になっているものの、底面は緩やかに下降し、かつての低位部の痕跡をとどめている。この底面を逆に西へたどると、じょじょに高さを増し、微高地中心部への接近を示している。第16層の堆積部分が微高地の傾斜面であるが、勾配は緩く、河道の肩部とは異なる。弥生時代の遺構が検出されたのは微高地基盤の地山層の上面であった。遺構の上面を覆う第14層は微高地の上面だけではなく東の低位部にも及び、調査区一帯に広がっていた。このような状況から判断して、立田排水機場区ではかなり大規模な地下げが行われ、このことが遺構の少なさに関係しているものと思われる。遺物もほとんど弥生時代のものに限られていた。

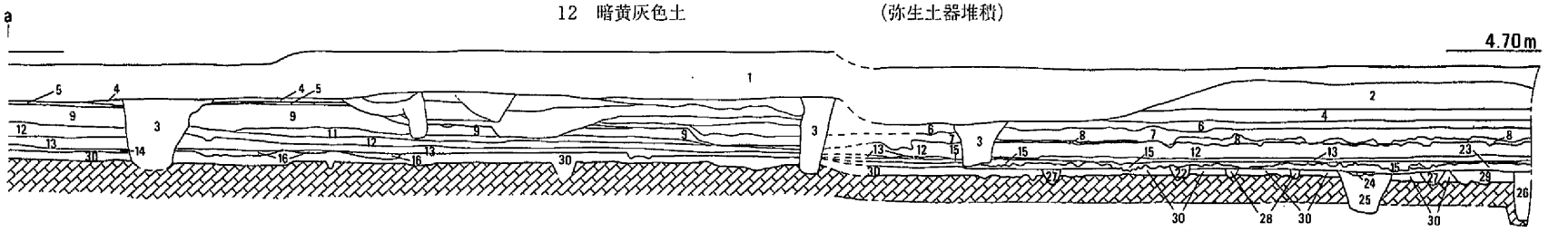
立田Ｅ３区からＥ２区にかけての状況もあまり違いはなかった。第10図の第15層が中世の包含層であり、Ｅ３区ではその下に薄層が2枚存在していたにすぎなかった。ただ、それはともに弥生時代の包含層で、かなりの遺物が出土し、遺構の多くは下の包含層の上面から掘り込まれていた。出土遺物を検討したが、上下の包含層の間での時期差は認められなかった。

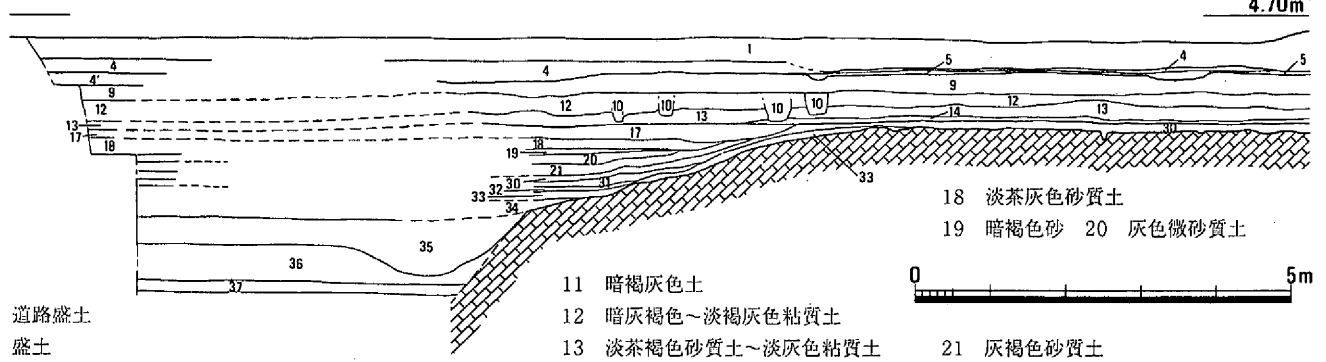
立田Ｅ２区の微高地上面では、第30層のみが弥生時代の包含層とみられ、それより上面は中世以降の堆積層であった。河道堆積土中には多くの遺物が包含されていたが、調査区の壁の崩落もあって採集は困難で、河道も底までは掘りきれなかった。

このように、立田遺跡での遺構の残存状況はきわめて悪く、遺構の数も少なかったが、微高地の斜面や河道からは多量の遺物が出土し、遺跡の消長を知る資料は豊富に得ることができた。また、若干ではあるが、奈良時代の遺物の出土もみられた。　（岡本）



1　灰色粘質土(現耕土)
2　淡灰色粘土
3　淡灰白色粘土
4　灰色粘土
5　淡黄灰色粘土
6　灰色粘質土
7　淡灰褐色～灰黄色土
(溝5埋土と同じ)
8　淡灰白色砂
9　暗灰色土
10　暗茶灰白色土
11　灰黄色土
12　暗黄灰色土
13　淡灰黄色粘土
14　暗灰色～暗灰褐色土
15　灰色粘土
16　灰黄色粘土
(弥生土器堆積)
17　灰茶色土
18　暗灰色土
19　黄色粘土斑暗灰茶色土
(土壙1埋土)
20　灰茶色土
21　暗灰茶色土
(土壙3埋土)
22　黄色粘土





1　道路盛土
2　盛土
3　現代攪乱
4　灰色粘土(現耕土)
5　黄灰色土
6　青灰色粘性微砂
7　淡青灰色細砂(洪水砂)
8　灰白色微砂斑淡灰色粘質土
9　明黄灰色土
10　暗灰褐色土
11　暗褐灰色土
12　暗灰褐色～淡褐灰色粘質土
13　淡茶褐色砂質土～淡灰色粘質土
14　暗茶褐色土
15　淡黄褐色粘質土(中世包含層)
16　灰色土
17　淡茶褐色砂質土
18　淡茶灰色砂質土
19　暗褐色砂　20　灰色微砂質土
21　灰褐色砂質土
22　黄褐色粘質土斑淡灰褐色粘質土
23　茶褐色粘質土(土器包含層)
24　灰褐色粘質土
25　黄褐色粘質土斑茶灰褐色粘質土
26　黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土(竪穴住居2埋土)
27　灰褐色粘質土
28　黄褐色粘質土斑淡灰褐色粘質土
29　褐灰色粘質土
30　暗灰褐色粘質土(弥生後期包含層、焼土・炭粒混)
31　暗黄灰色土
32　暗黄灰色粘質土
33　淡黄褐色土(土器包含層)
34　暗灰色粘土
35　暗灰色粘土斑暗緑灰色粘土(土器片多量)
36　緑灰色粘土(土器片・木片・炭粒含)
37　灰黒色粗砂(土器片大量)

第10図　立田遺跡立田排水機場区南壁（上）、立田E2，3区北壁（下）土層断面図（1/100）

第２節　弥生時代の遺構と遺物

１　遺構配置

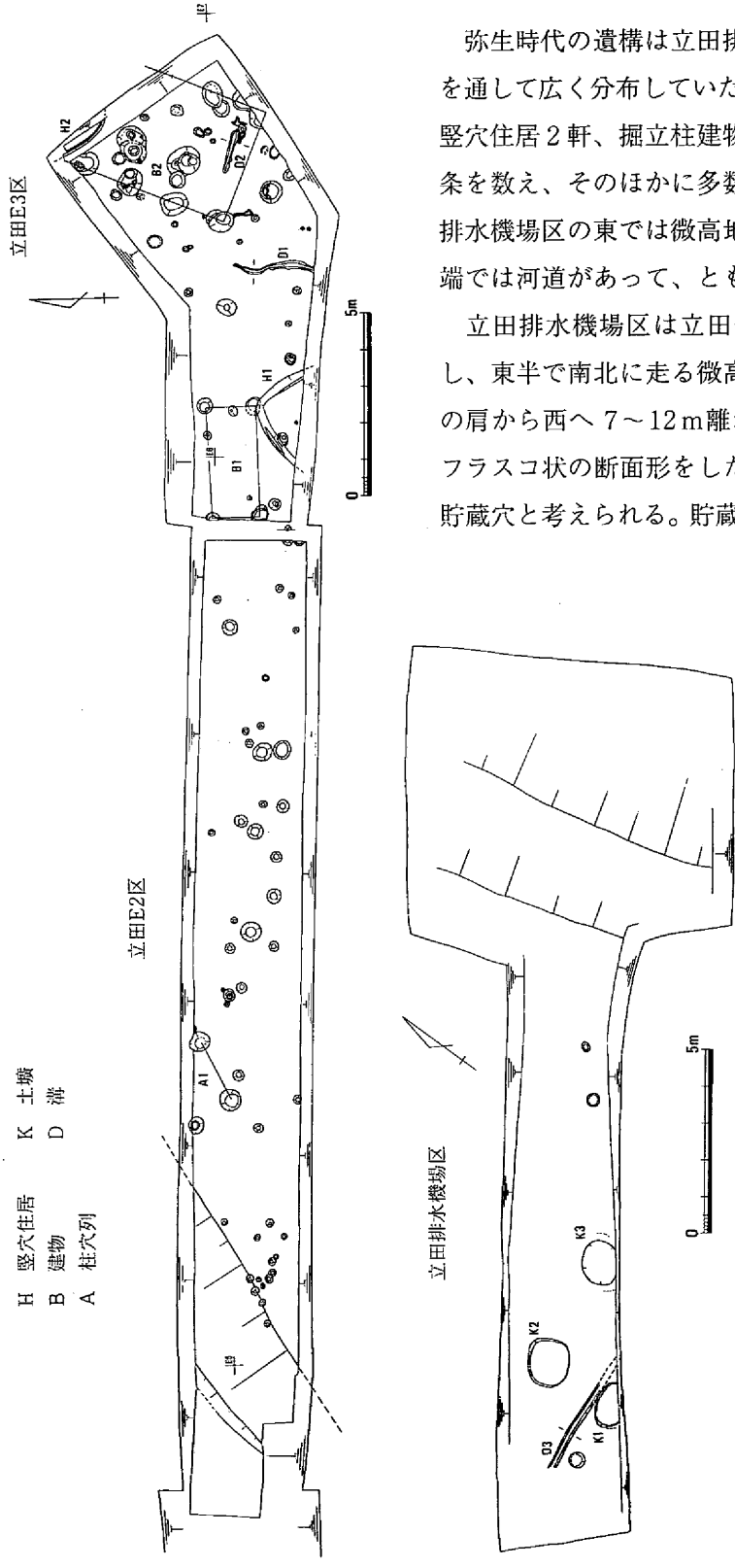
弥生時代の遺構は立田排水機場区、立田Ｅ３区、立田Ｅ２区を通して広く分布していた。時期的にはいずれも後期のもので、竪穴住居２軒、掘立柱建物２棟、柱穴列１列、土壙３基、溝３条を数え、そのほかに多数の柱穴を確認している。また、立田排水機場区の東では微高地の斜面が検出され、立田Ｅ２区の西端では河道があって、ともに多くの土器を出土した。

立田排水機場区は立田遺跡が所在する微高地の東端に位置し、東半で南北に走る微高地の斜面が検出された。微高地斜面の肩から西へ７～12ｍ離れた地点で３基の土壙が検出された。フラスコ状の断面形をしたものがあり、これらの一群の土壙は貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴群の中に細い溝が１条検出された。

立田Ｅ３区では竪穴住居２軒と掘立柱建物２棟が検出された。他に大形の柱穴や溝状の遺構が２条あり、居住域として集落の中心を占めていた地区の一角と思われる。

立田Ｅ２区では柱穴はかなり認められたものの、竪穴住居などはなく、対応するとみられる柱穴２個からなる柱穴列が検出されただけであった。柱穴列の２ｍ西には河道の肩が列と平行するように出土し、この河道を立田遺跡の西限と考えている。この河道１は８ｍの幅をもっていた。

（岡本）



第11図　立田遺跡弥生時代遺構配置図（1/200）

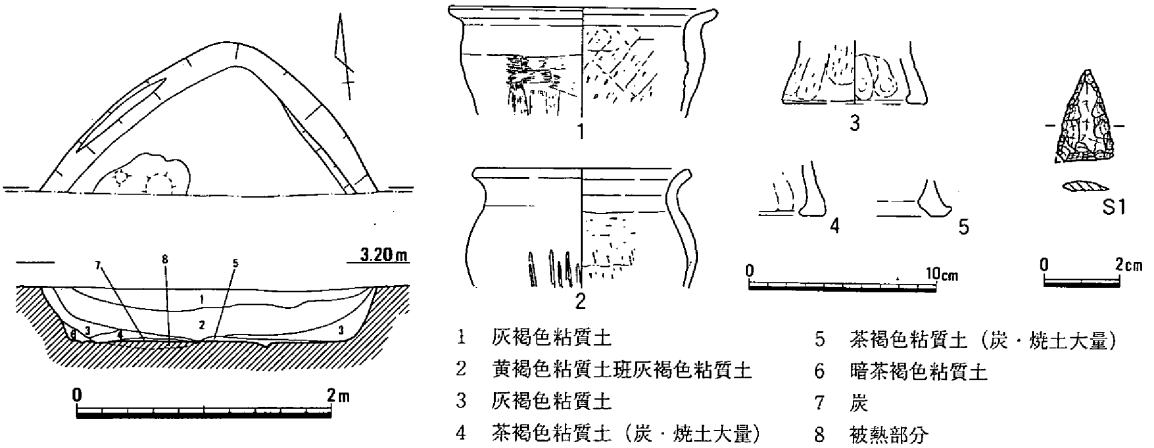
2　遺構・遺物

竪穴住居１（第12図、図版２・39）

立田Ｅ３区の西半で一部を確認したのみである。検出部分は角張ったようにみられ、胴張りの方形を呈する平面形をもった竪穴住居の北角と推定される。検出部分は、北辺が160㎝、西辺は200㎝を測り、竪穴の深さは47㎝であった。穴の壁は急傾斜で、途中に段をもつ部分がみられた。壁体溝は検出されなかった。検出部分の西半、調査区の南壁に接して、床面に炭や灰の堆積した部分があり、魚骨や植物の炭化したものが混じっていた。炉があったものと考えられるが、住居のかなり周縁部にあたる場所である。埋土はレンズ状の堆積を示し、大きくは３層に分けられたが、床面に近い第４層には炭や焼土が密に含まれていた。ただ、竪穴住居２のような炭化材の出土はなかったため、焼失したものかどうかは不明である。

出土遺物がいくらかみられた。１と２は小形の甕で、胴部内面は頸部のあたりまでヘラケズリがなされていた。**３～５**は製塩土器の脚部である。Ｓ１の石鏃はサヌカイト製で、平基式の三角形鏃であるが、基部はわずかに斜行するようである。全長24.5㎜、幅15㎜、重量は1.1ｇを測った。

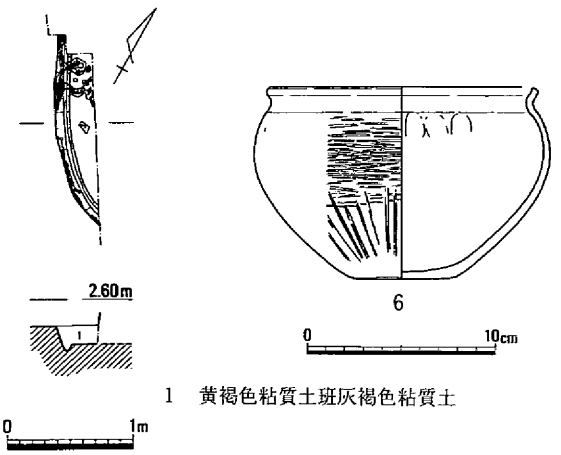
出土遺物から判断すると、竪穴住居の年代は弥・後・Ⅱと考えられる。　（岡本）



第12図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物(1/4,1/2)

竪穴住居２（第13図、図版２・39）

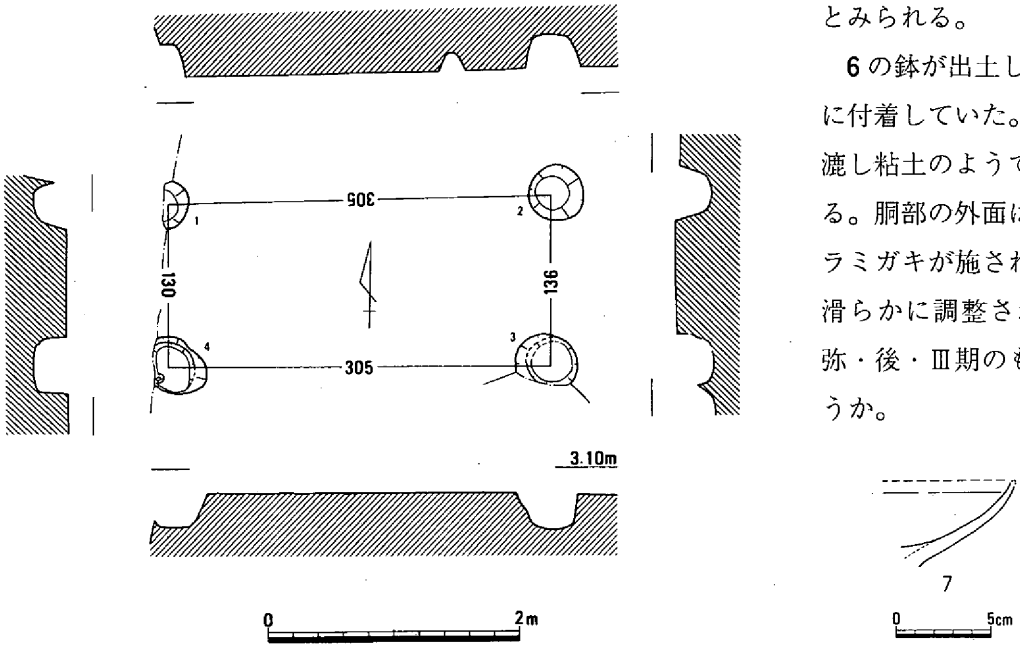
立田Ｅ３区の北隅、側溝のなかに炭を多く含んだ遺構が検出され、調査区の壁面の観察によって竪穴住居であることが確認された。検出部分は調査区の北東壁とほぼ平行するように竪穴の肩部が直線状を呈し、南東端で東へ湾曲していた。このことから判断すれば、住居の平面形は隅丸の方形のように推測されるが、検出部分の長さは1.5ｍ程にすぎず、確定はできない。竪穴住居の深さは52㎝であった。竪穴の壁に添って壁体溝が検出され、その幅は12㎝、住居の



第13図　竪穴住居２（1/60）・出土遺物(1/4)

床面からの深さは５cmを測った。住居内には炭や焼土が大量に含まれ、床面には炭化材や焼土塊が散乱していた。住居の壁には植物質の炭化物が一面にへばりつき、壁の一部は被熱した状況を呈していた。明らかに焼失した住居とみられる。

6の鉢が出土した。床面に付着していた。胎土は水漉し粘土のようで精良である。胴部の外面は細かいヘラミガキが施され、内面は滑らかに調整されていた。弥・後・Ⅲ期のものであろうか。　（岡本）



第14図　建物１(1/60)・出土遺物(1/4)

建物１（第14図）

立田Ｅ３区の西端で検出された。１間×１間の掘立柱建物である。柱穴３は竪穴住居１によって一部壊されていた。住居より古いものと考えられる。建物は東西棟とみられ、柱間は梁間が130cmと136cm、桁行は305cm、床面積は4.1㎡を測った。桁行は梁間の倍を超える長さがあった。柱穴の長径は44・49cmで、柱穴４は50cmを超えるようである。深さは28cmであった。

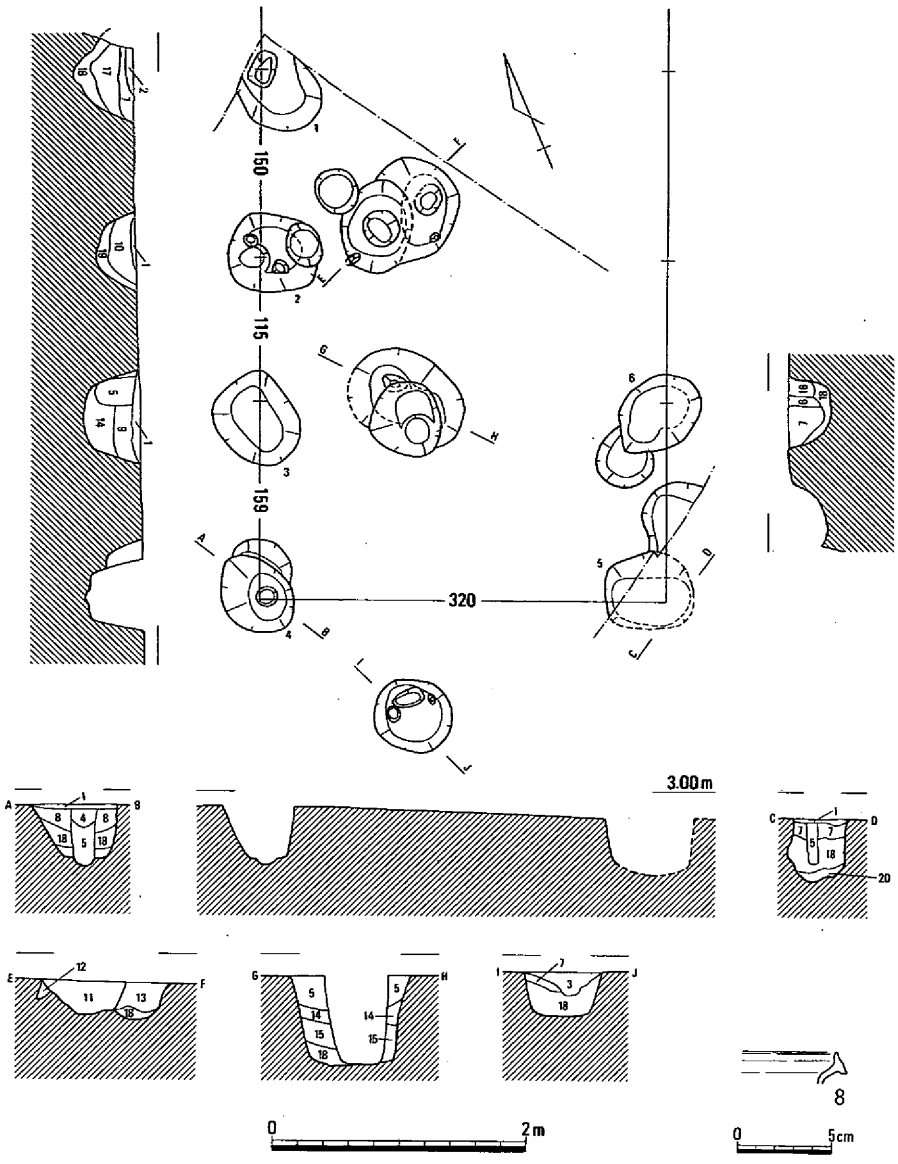
7は高杯の口縁部の破片で、柱穴１から出土した。杯の底は円盤充填法とみられる。

竪穴住居１との重複関係や遺物から弥生時代後期前半の建物と考えたい。　（岡本）

建物２（第15図、図版２）

立田Ｅ３区の東半で検出された掘立柱建物である。柱穴の規模が大きく、さらに北側の調査区外へ続く可能性がある。棟の方向は南北で、少し東へ振る。梁間は１間で、桁行は３間まで検出された。梁間は320cm、桁行の全長は検出部分で424cmを測り、検出部分だけの床面積は13.6㎡であった。柱穴の長径は70～76cmで、柱穴１は80cmを超える。柱穴の深さは29～56cmであった。柱穴３では断面で直径23cmの柱痕が確認され、柱穴１の柱のめり込み穴は長径30cmを測った。柱穴2では柱穴内に２個の柱痕が認められ、柱穴４では２個の柱穴が重複していたが、他の柱穴も楕円形を呈するものが多く、建て替えが行われた可能性がある。さらに建物内や周辺にも大形の柱穴があり、この地点に執着して何度も建て直されたのではないかと思われる。とくに、建物内の２個の柱穴は建物２の棟方向と平行するように列び、ともに柱穴の重複がみられた。対応する柱穴が検出されなかったが、この２個の柱穴も建物を構成していたとみられる。

8の甕の口縁部は柱穴４から出土した。第16図に示した土器は周辺の柱穴から出土したもので、**10**



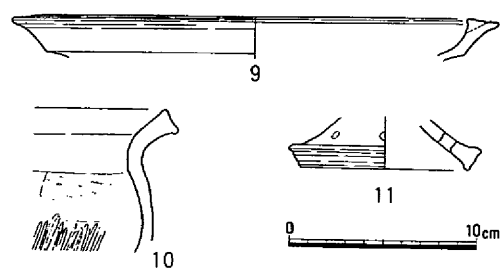
1　灰褐色粘質土
（炭粒点々）
2　暗褐色粘質土
（炭粒点々）
3　淡灰褐色粘質土
（炭粒点々）
4　褐灰色粘質土
（炭粒点々）
5　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土
6　灰褐色粘質土
（炭粒点々）
7　褐灰色粘質土
（炭粒点々）
8　黄褐色粘土斑褐灰色粘質土
9　暗灰褐色粘質土
10　黄褐色粘土斑暗褐色粘質土
11　暗灰褐色粘質土
（炭粒点々）
12　暗灰褐色粘質土
13　黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土
（炭粒点々）
14　黄褐色粘質土
15　灰褐色粘質土
16　灰褐色粘土斑暗褐色粘質土
17　灰褐色粘土斑黄褐色粘質土
18　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土
19　黄褐色粘土斑暗褐色粘質土
20　灰褐色粘土斑黄褐色粘質土

第15図　建物２（1/60）・出土遺物（1/4）

・11は建物内の柱穴出土である。これらの土器も参考にすると、建物２の年代は弥・後・ⅠからⅡの初頭頃かと考えられる。　（岡本）

柱穴列１（第17図、図版１）

立田Ｅ２区の西半で対応するように列んだ２個のやや大形の柱穴を検出した。列の方向はＥ２区の西端を流れる河道１と平行していた。柱間は173cmで、柱穴の長径は60cm、深さが49cmを測った。柱穴2の柱痕は直径21cmであった。遺物はなかったが、弥生時代後期であろう。　（岡本）

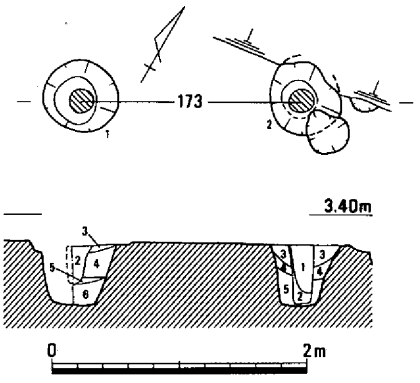


第16図　建物２周辺柱穴内出土遺物（1/4）

土壙１（第18～20図、図版３・37）

土壙１は、調査区南端の一部調査区外にかかった状況で、海抜2.70ｍで検出できた。検出面より上層には中世以降と考えられる水田層が70～80㎝の厚さで重層的に堆積しているのが確認されたのみで、土壙本来の上部構造は既に後世の削平により消滅したことが理解された。

土壙の平面的な形状・規模はその一部が調査区外にかかることで正確ではないが、東西方向に主軸をもった楕円形に復元される。検出面での復元規模は、東西1.25ｍ、南北90㎝が推測された。深さは、45～50㎝と比較的浅いものであったが、壙内には壺・甕・高杯など中には完全な状態を含む土器の遺存が確認された。



1　灰褐色土　　4　暗黄褐色土
2　暗灰褐色土　　5　暗灰褐色土
3　黄褐色土斑暗灰褐色土　　6　暗灰褐色土

第17図　柱穴列１（1/60）

断面の形状は、途中からの観察であるが検出面からほぼ垂直に落ちた後、底部がやや膨らんだ、袋状を呈するものであった。

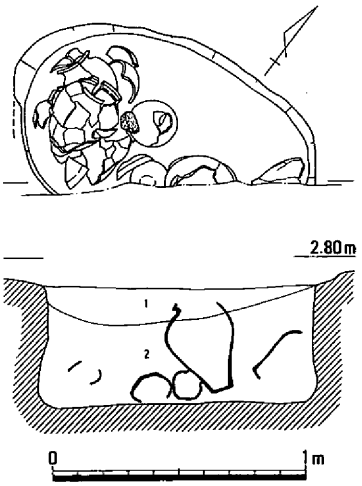
出土遺物は、壺・甕・高杯などの土器類のみで他には確認できなかった。

12は、長頸壺である。頸部は「ハ」字状から垂直に立ち上がり、その後緩やかに外反する口縁部を有するもので、比較的よく張った肩部などで特徴づけられる。胴部外面はハケメの後下半部分に縦方向のヘラミガキが施されている。

13は、**12**に比較して大形の器種であるが頸部の短い壺である。肩は体部中央やや上方にありよく張っている。容量の違いは歴然としている。胴部外面は、縦方向のハケメの後比較的細かいミガキにより丁寧に調整されており、内面は縦方向から斜め方向のヘラケズリが施されている。なお、外面の一部にはタタキ痕跡を認めるが明瞭ではない。**14・15・16**は、器高14㎝前後を計る小形の壺である。**14**は、器表面剥落して明瞭ではないが他はいずれも丁寧なヘラミガキにより調整が施されている。

17は、小形の鉢である。内面はヘラケズリの後のミガキを認めないが、 底部から肩部外面にかけては比較的丁寧な縦および横方向のヘラミガキが施されている。

18～25は、甕である。**18**は、径７㎝のやや凸面気味の平底の底部から上方に大きく外反し、底部から20㎝の部分に胴部最大径をもったものである。口縁部は、３条の擬凹線を巡らす。**19**は、器高24㎝を計る中形の甕であるが、底部と口縁部の中軸線の位置がズレた状態にある。口縁部は、端部が上下に肥厚したもので、３条の凹線文が外面を巡る。胴部外面はヘラミガキが施されている。**20**は、前２者に比べて長胴である。外面胴部下半には、縦方向のヘラミガキ痕跡の他使用痕跡であるススの遺存を認めた。**21**は、底部を欠くが比較的均整のとれたものである。肩部内面には、押圧痕跡が多く見られ、内面のヘラケズリは下半のみで肩部にまでは及んでいな



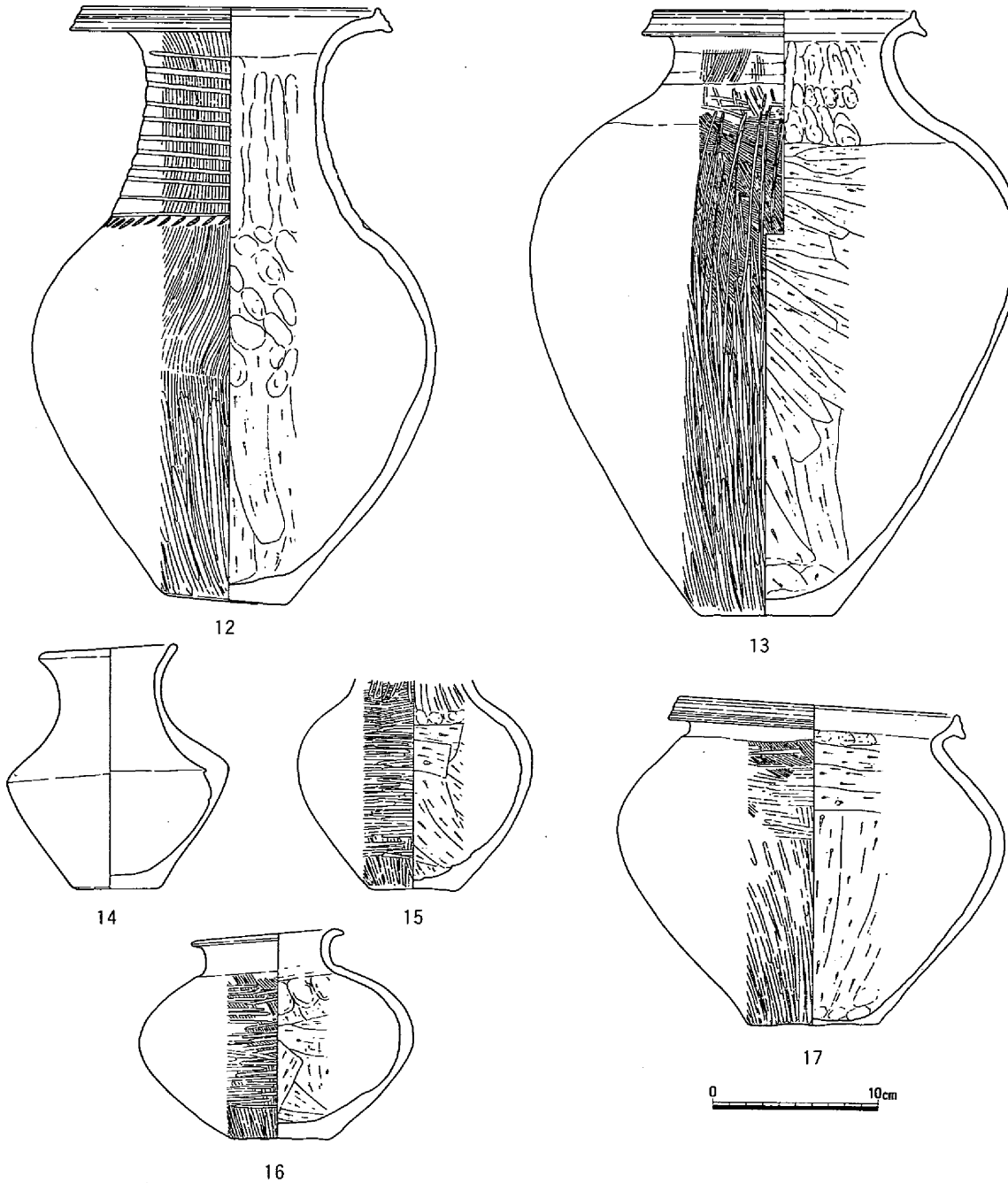
1　暗灰色土
2　暗灰茶色土
（黄色粘土小塊を含む）

第18図　土壙１（1/30）

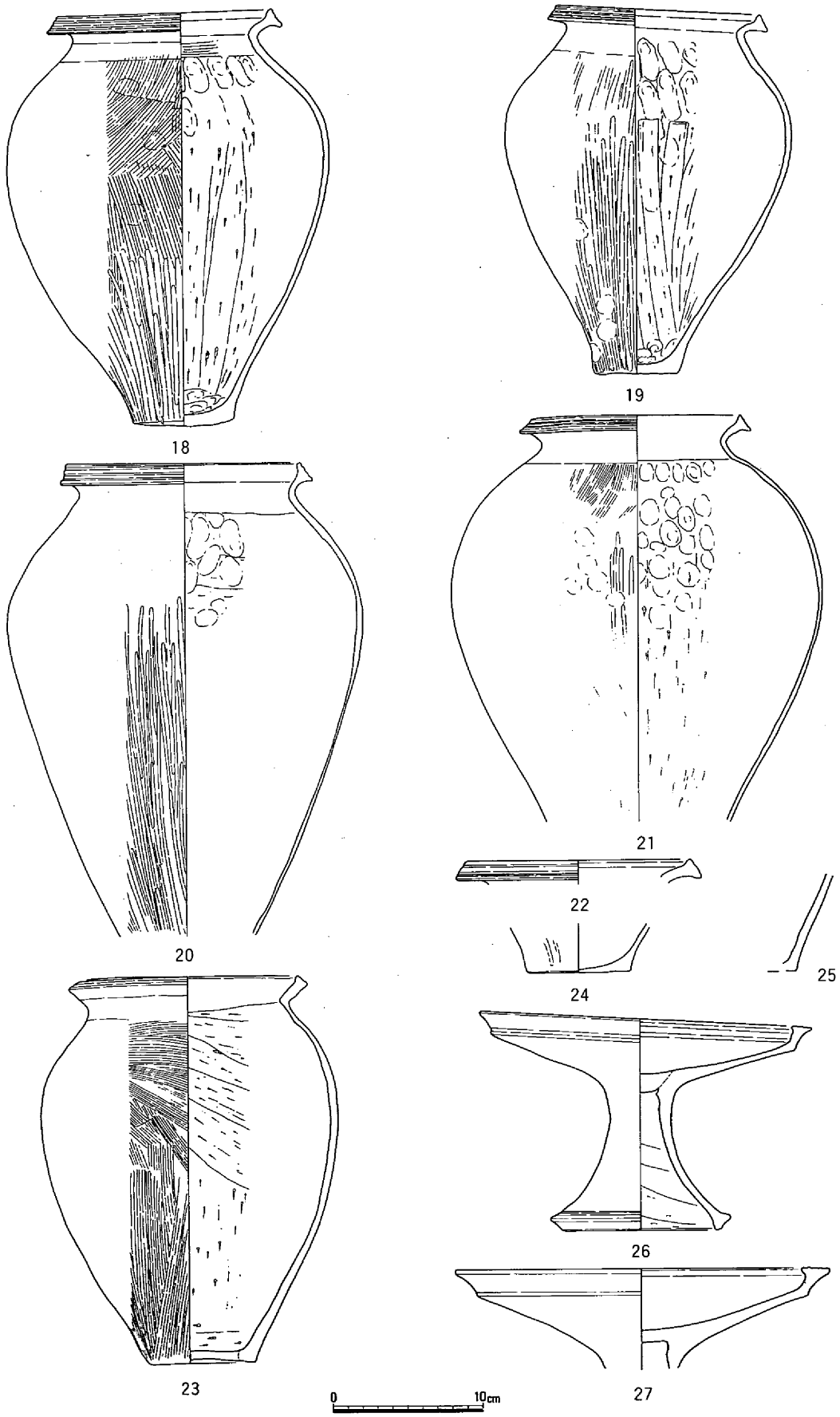
い。23は、肩がさほど張らない、口縁部も上下方向に拡張を見せないものであった。外面は、胴部下半が縦方向の、上半から肩にかけてが斜め方向のハケメが施され、一部にはススの付着痕跡が認められる。同様のものは、24にも認めることができる。

26・27は、高杯である。26は、口径22.4cm、底径10.5cm、器高14.0cmを測る。口縁部上面に凹線文を巡らすもので、わずかに外側方向への拡張をみせる。また、脚部と杯部との境の内面には円盤充填が確認され、脚部内面は、ヘラケズリが確認される。調整は、器表面剥落のため不明である。27は、26と同じく脚部と杯部との境の内面に円盤充填がなされたものである。口径は、25cmと比較的大型品である。

時期は、以上の土器の特徴から弥生時代後期初頭に位置づけられる。　（島崎）



第19図　土壙1出土遺物（1）（1/4）



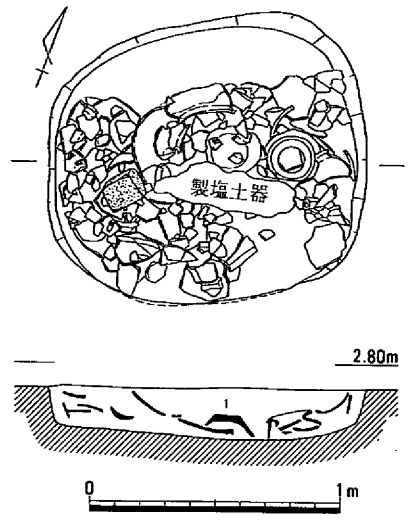
第20図　土壙1出土遺物（2）（1/4）

土壙２（第21～24図、図版３・38）

排水機場区南半部の海抜2.70ｍにおいて検出した土壙である。前述の土壙１から北側２ｍの地点に所在する。

土壙は、検出面での掘り方が長軸で1.28ｍ、幅1.10ｍを測り一見隅丸方形を呈するものであった。床の海抜高は、最深部で2.50ｍを測った。検出面から床面までの深さは最深部で20㎝と浅いが、周辺に所在する袋状を呈する土壙と基本的には同じものと考えられた。上部構造については、本来存在していたであろうが、後世において相当の削平が行われたことがこの検出結果に如実に示されていると考えられた。

土壙内からは数多くの土器の遺存が確認できた。いずれの土器も上から投げ込まれた状況で破片が多く重なり、したがって完全な姿を留めるものは皆無であった。



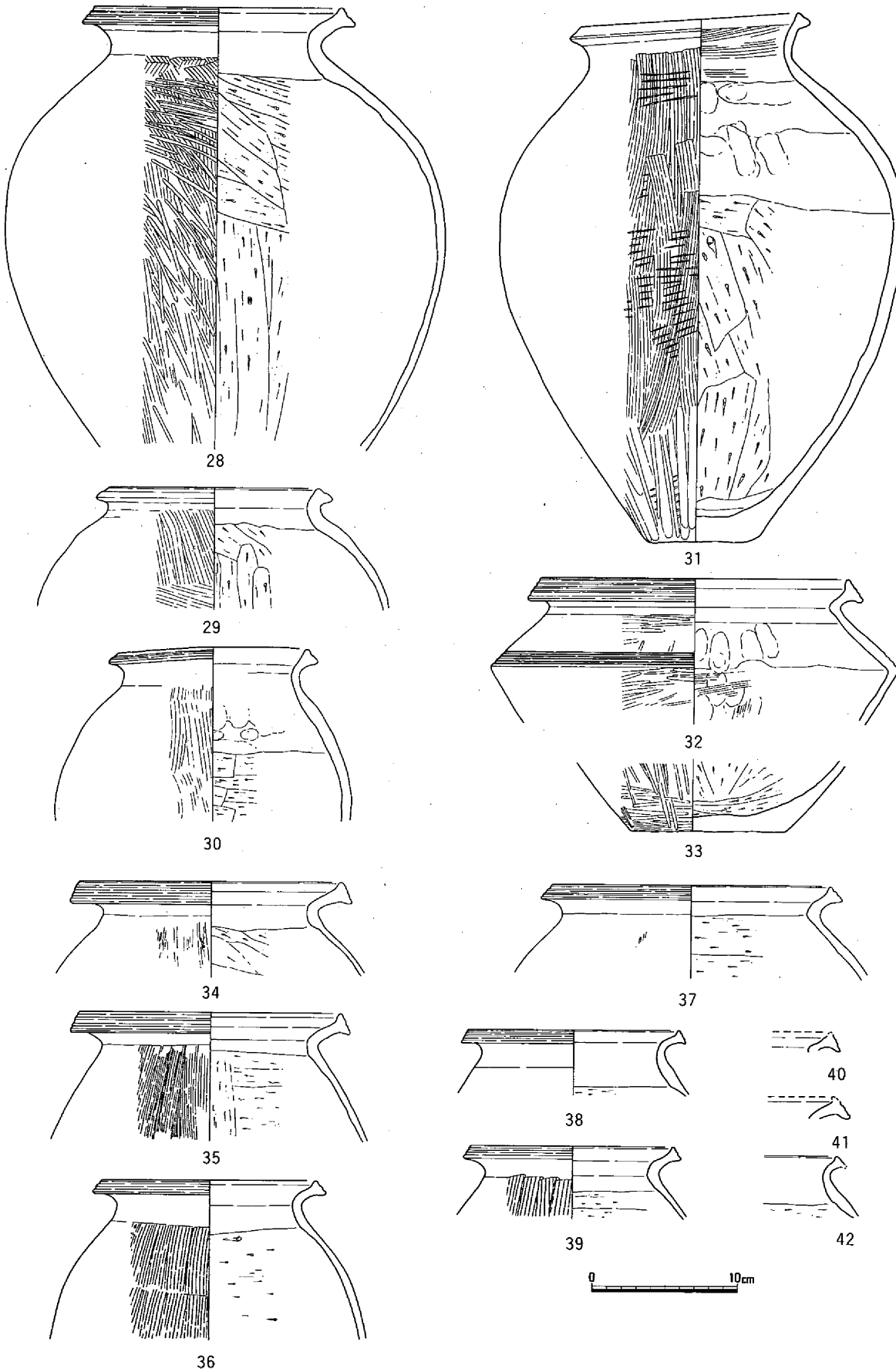
第21図　土壙２（1/30）

土器には壺・甕・鉢・高杯などの器種が認められた。なお、土壙の最上層ほぼ中央には部分的ではあるが破損した数多くの製塩土器の堆積がある一定の広がりと厚みをもって認められた。この状況は、近接した場所での使用の一端を物語るものと推測された。

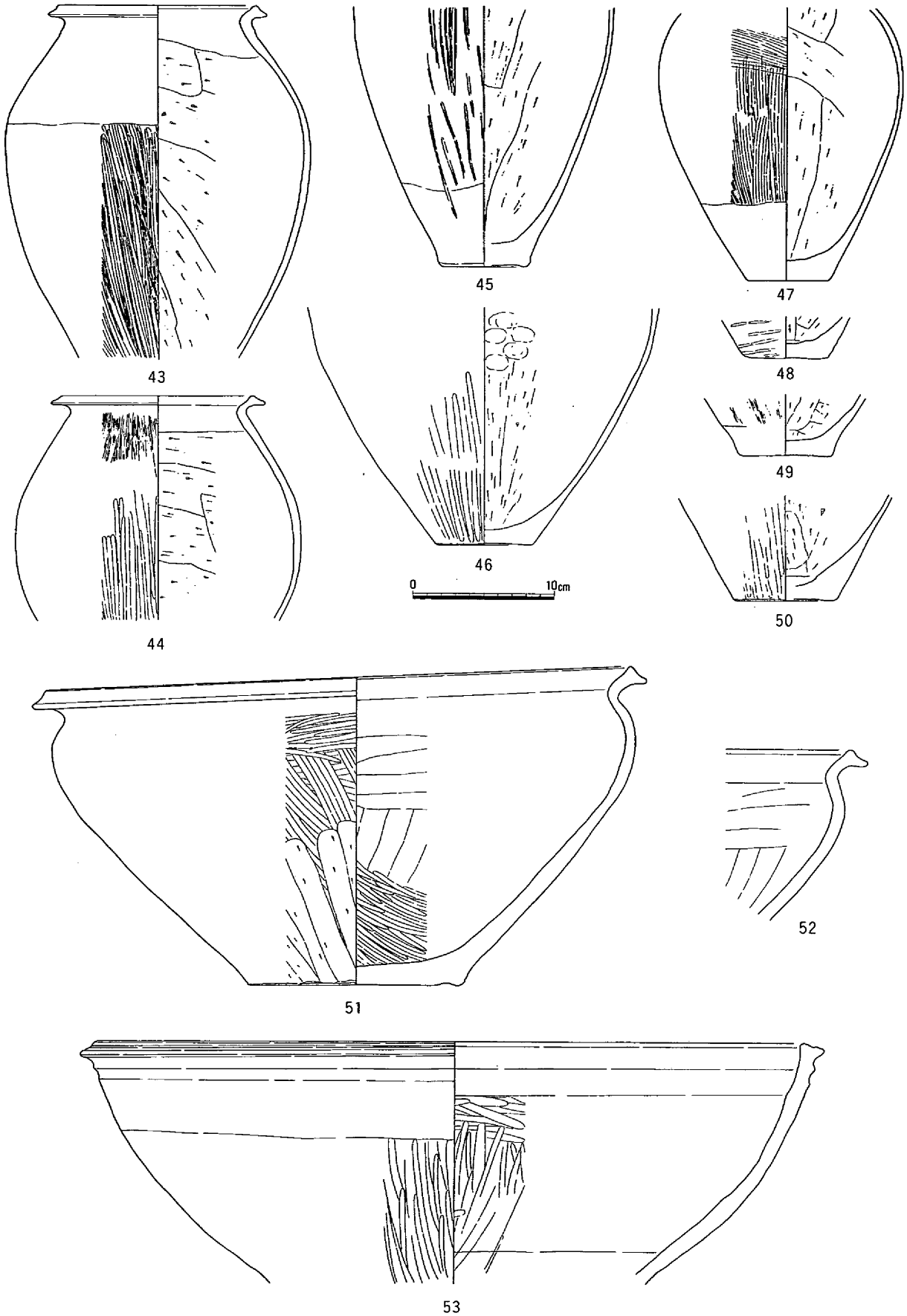
28は、頸部の短い壺である。口縁部は、肩から上方に窄まった後、直ちに大きく外反する口縁部を有するもので、口縁端部には上下方向への拡張をほとんど見せない。内・外面の調整は、底部を欠損するが、その技法は比較的明瞭に確認されている。外面はハケメ調整の後に斜め方向から縦方向のヘラミガキによって、内面はヘラケズリがなされていた。**31**は、**28**と同じく短頸の壺である。口縁部が肩部から緩やかに屈曲した後に上方に短く直線的に伸びるもので、口縁端部を外側にわずかに肥厚させる。調整は、外面比較的粗いハケメの後、底部および底部付近に縦方向のヘラミガキが施される。もっともその他にハケメによって消されるがタタキ目の痕跡が部分的に認められる。内面は、底部から胴部にかけてヘラケズリが認められるが、肩部にまでは及んでいない。**29**・**30**も同種の壺とみられる。**32**は、肩部の算盤玉に似た独特の形状および内面の押圧とナデ、さらには外面のヘラミガキを中心とした調整などから鉢と考えられる。

34～50は、全体像は判然としないが甕と考える。なかでも**43**・**45**・**47**・**49**の外面には煮沸痕跡としてのススの付着が認められる。口縁部の形態は、概して特徴的で端部の拡張こそないものの比較的肥厚されたものが多い。**48**には斜め方向のタタキ痕跡が比較的明瞭に確認される。

51～54は、鉢である。**51**は、口径41.5㎝、器高22㎝を測るもので、内面には縦方向と横方向のナデの後に底部付近にヘラミガキが施され、外面にはハケメ調整の後に底部付近がヘラケズリ、肩部がヘラミガキで調整されている。**53**は、底部を欠損するが、口径50.5㎝を測る大形品である。口縁部は、内湾気味に上方へ伸びるもので、大きな屈曲はない。口縁端部には擬凹線文が巡る。内・外面には、ヘラミガキが施されているが、外面の口縁部の一部と体部には煮沸に使用されたことを窺わせるススが遺存している。**54**は、破片であることと底部が欠損していることで器種の判断が困難であるが、外面体部全体および頸部内面に比較的丁寧なヘラミガキがほどこされていることから鉢と判断した。ただし、体部下半を中心に薄くススの遺存が認められることから、煮沸に用いられたことは判断できる。



第22図　土壙2出土遺物（1）（1/4）

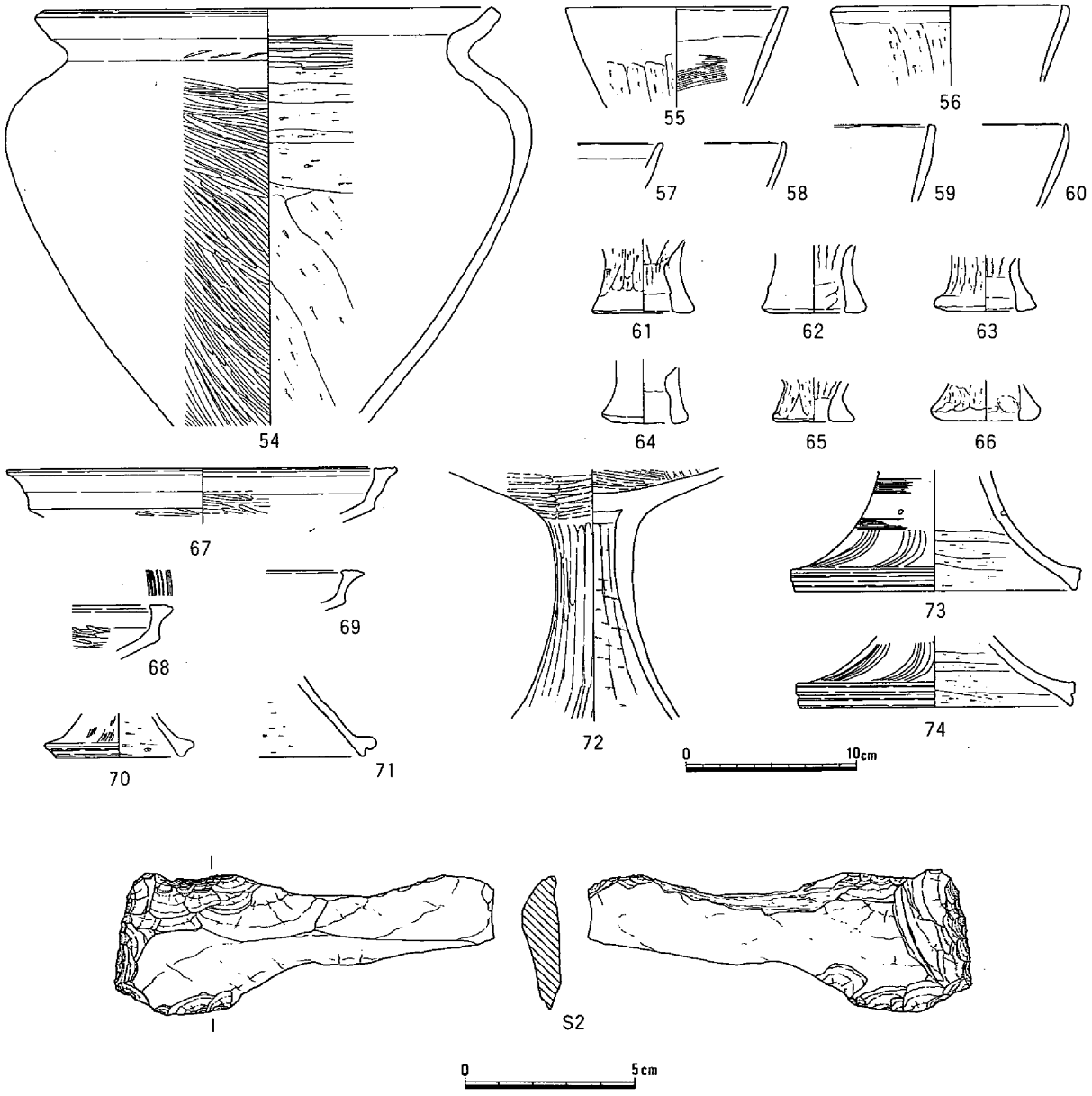


第23図　土壙２出土遺物（２）（1/4）

55～66は、製塩土器である。55～60は口縁部、61～66は脚底部で、脚底部内面にはシボリと粘土塊の充填痕跡が認められる。

67～74は、高杯である。そのうち67～69は杯部の口縁部、72は脚部から杯部にかけての部分、70・71・73・74は脚部である。口縁部は、垂直よりやや外側に伸び、端部を若干外方に拡張したその上面に擬凹線を巡らす。杯部内面には丁寧なヘラミガキが平面多角形に見えるよう施されている。脚部は、比較的長いもので、内面には鋭利なものによるヘラケズリが、外面は脚部が縦方向のヘラミガキ、杯部には内面と同じく多角形を呈するヘラミガキが施されている。脚部と杯部の境は円盤充填により塞がれている。脚部外面には、ヘラ先による線刻で横と縦方向に文様構成され、その間に竹管による円孔が配されている。ただし、それは内面まで貫通するものではない。

S2は、サヌカイト製のスクレイパーである。　（島崎）

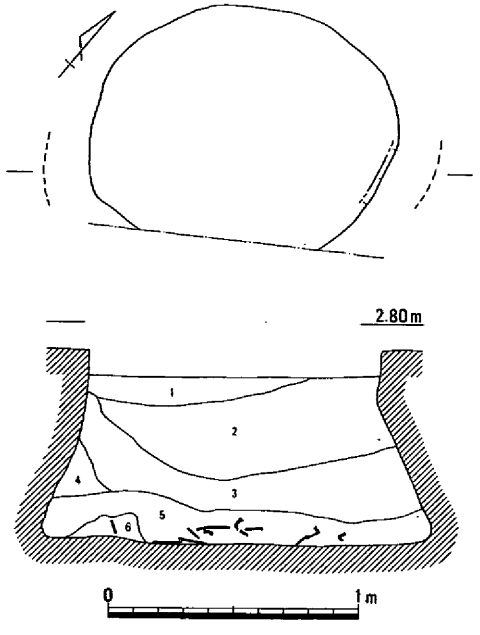


第24図　土壙2出土遺物（3）（1/4,1/2）

土壙３（第25～27図、図版３・39）

排水機場区南半部の海抜2.70ｍにおいて検出した土壙である。土壙２の東側２ｍの地点に所在する。

南西側の一部が調査区外にかかっているが概ね全体像は理解可能である。検出面での規模は、ほぼ東西方向の長軸で1.22ｍ、幅は推定1.10ｍが推測される。断面形態は、フラスコ状を呈するもので、検出面から約80㎝の海抜1.90ｍに床面を持つ。床面の規模は、最長で1.54ｍを測った。土壙内は、第４・６層が基盤層の落ち込みと理解され、他は灰色から黒色の粘質土が自然にじょじょに堆積をし、埋没したことが理解できた。その中で土器が検出できたのは第５層のみで、土器の中には床面に着いたものも存在した。



第25図　土壙３（1/30）

土器は、壺・甕・鉢・高杯などの器種が認められた。

75～78は、壺である。**75**は、垂直から外反気味に上方に伸びる長頸壺で、外面にはラセン状に施されたヘラ先による沈線が巡る。口縁部内面は丁寧なヘラミガキを、外面には擬凹線が巡る。**78**は、頸部の短い壺である。

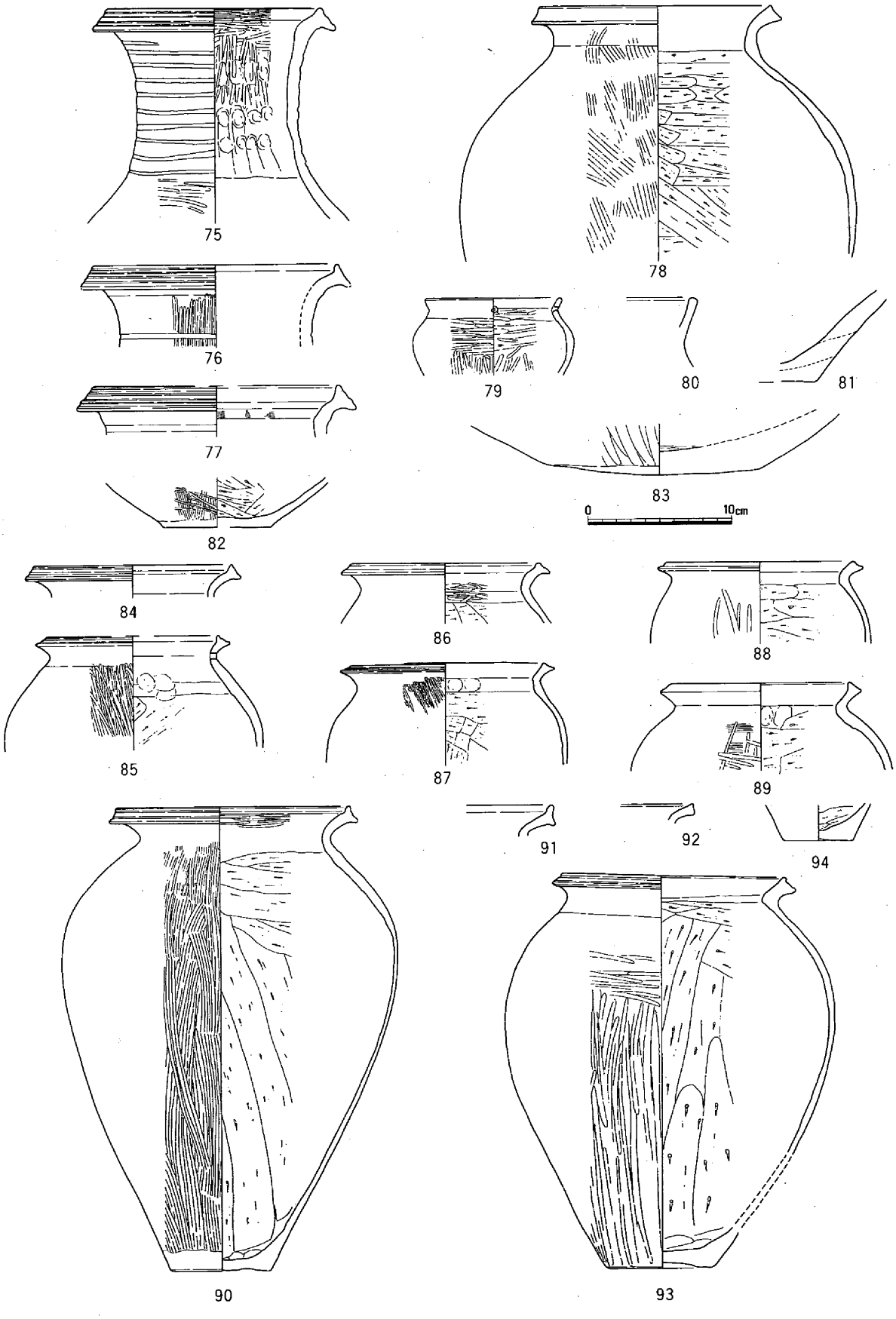
79・81～83は、鉢である。その中でも**81・83**は大形の鉢と考えられ、内・外面には比較的丁寧なヘラミガキが施される。**79**には、蓋の存在を想定させる円孔が存在する。

84～101は、甕である。遺存状態が一様でないため明確ではないが、口径15㎝以内の小形のものと、15㎝を越える大形の2器種が認められる。前者は、器高20㎝前後と小さく、後者は25～30㎝と比例して大きくなる。**84・86**には、外面にススの遺存が認められる。**90**は、内・外面にススの痕跡が認められる。**93**は、口径15.5㎝、器高27.5㎝を測るもので、内・外面にはススの付着が使用形態を窺わせる。外面は、肩部が横方向、それ以下が縦方向のヘラミガキにより調整が施されている。**95**は、口径13.5㎝、器高22.8㎝を測る。外面には、肩部以下にススの遺存を認める。また、調整としてのヘラミガキの存在も部分的に認められる。**96**は、口径14㎝、器高19.4㎝を測る。外面の底面にまで及んだ比較的丁寧なヘラミガキと部分的であって明瞭ではないが一部にススの遺存を認める。**99**は、従来の甕の形状とは若干異なったものである。すなわち、口縁部の位置が若干下方にあり、バランス的に鉢を彷彿とさせる。内面はヘラケズリ、外面には底部の底面を含め比較的丁寧な縦方向のヘラミガキが施される。また外面の肩から下方にはススの痕跡が認められ、煮沸に使用されていたことが理解される。

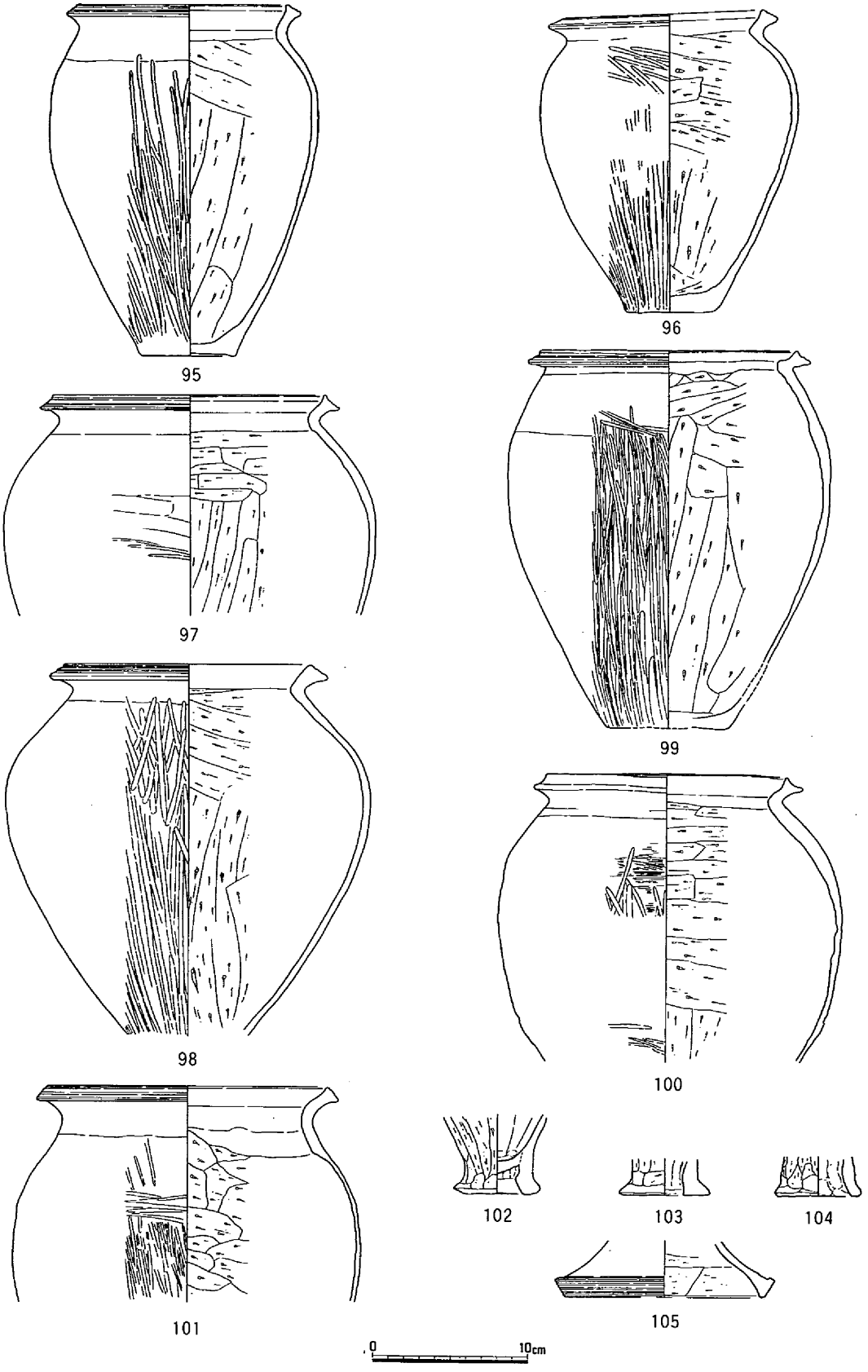
102～104は、製塩土器である。いずれも底部のみの破片で、体部、口縁部は確認されなかった。**102**からは脚部と体部の境、内面の充填が粘土塊によることが知られる。全体にやや粗い砂粒を多く含み、ヘラで粗く面取り状に仕上げられている。

105は、高杯の脚底部である。内面は横方向のヘラケズリによって比較的丁寧に削られていた。

時期は、以上の土器の特徴から弥生時代後期初頭に位置づけられる。（島崎）



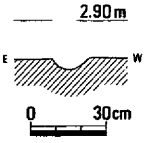
第26図　土壙3出土遺物（1）（1/4）



第27図　土壙３出土遺物（2）（1/4）

溝１（第28図）

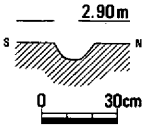
高田Ｅ３区の中央部で検出された。調査区の中央付近から始まり、緩やかにＳ字状の曲線を描きながら北から南へ流れ、調査区外へ続いていく。溝の幅は21cm、深さが南端で4cmにすぎなかった。（岡本）



第28図　溝１（1/30）

溝２（第29図、図版２）

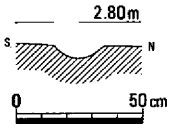
立田Ｅ３区の東半で検出された。位置的には建物２の中にあって、建物の梁間方向に近い方向をとっていた。東端には深さ14cmの柱穴状の窪みがあり、そこから西へ延びていた。幅19cm、深さ7cm、長さ125cmを測った。（岡本）



第29図　溝２（1/30）

溝３（第30図）

排水機場区南半部分において海抜2.70ｍの黄色基盤層上面で、土壙１～３などと同時に検出できた溝である。出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、埋土の質から土壙と同じく弥生時代後期初頭と判断した。（島崎）



第30図　溝３（1/30）

河道１（第10・31・32・53図、図版39）

立田Ｅ２区の西端で弥生時代の河道の肩部が検出された。このＥ２区の調査は平成３年度に行われたが、翌年度の平成４年度の調査によって、立田Ｅ１の東端で西側の肩部が検出され、幅８ｍ程の河道であることが明らかとなった。立田Ｅ１区の調査では、この河道１から西へ10ｍのところでさらに別の河道を検出し、その河道２の幅は河道１よりもはるかに広く、21ｍを測った。河道１は北東から南西方向に流れていたと考えられるが、河道２はほぼ南北方向に流れていたことから、二つの河道は調査地区のすぐ南で合流していたとみて誤りはない。その規模から判断して、河道１は河道２の支流として扱われるべきであろう。

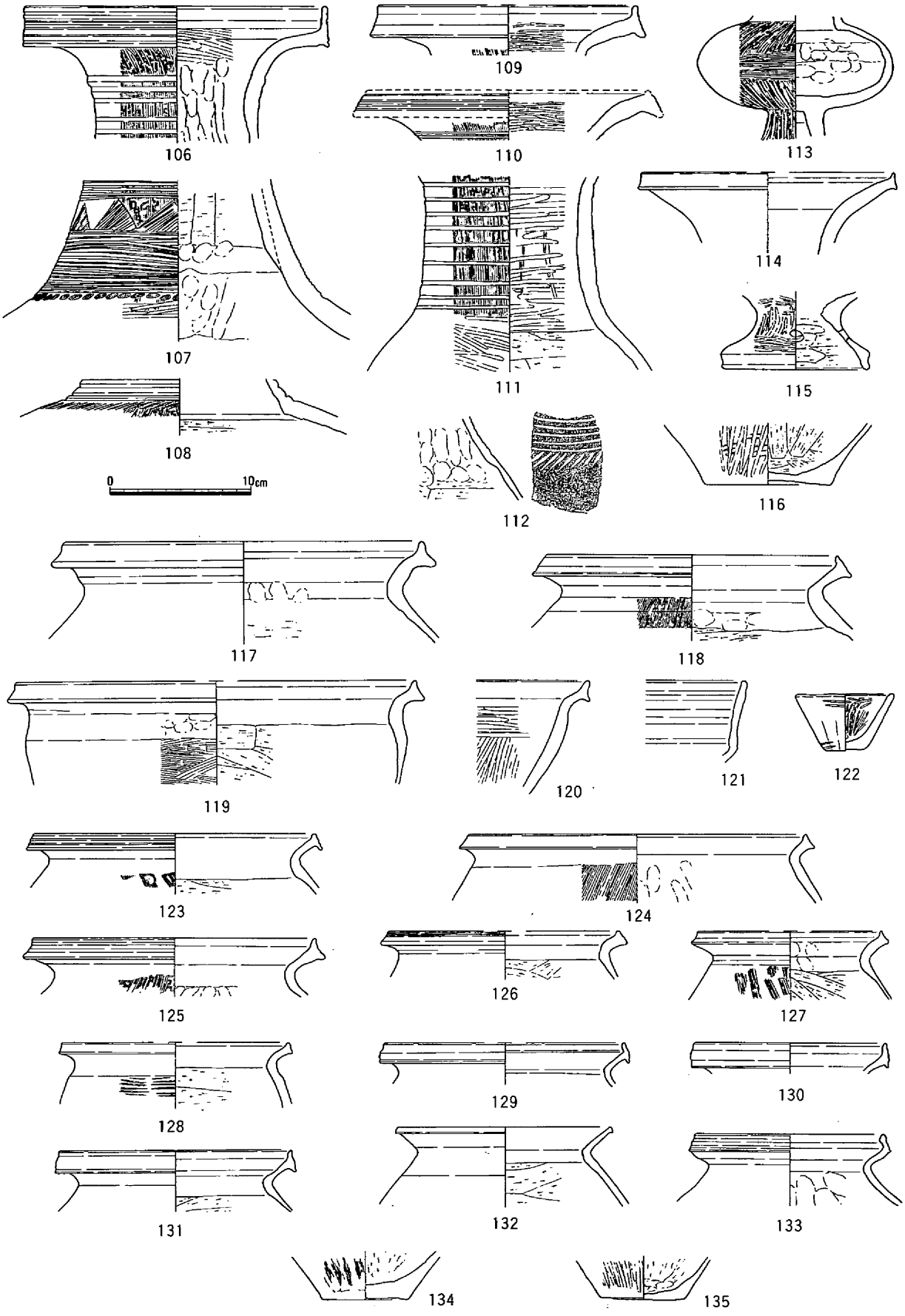
第10図に河道１の土層断面を図示しているが、河道の下部堆積層は粗砂や細砂の層で、湧水がみられたために崩落が激しく、図示することができなかった。第33層以下の各層で多くの土器片が出土したが、とくに第35・37層では大量に出土した。これらの土器片は立田遺跡から落ち込んだものとみて誤りはなく、遺跡の消長を知る資料として注意される。以下、出土土器についての説明を加えたい。

湧水や調査区の壁の崩落のために遺物の取り上げは困難で、細かい土層別の採集はできなかった。掲載図は大きく上下の２層に分けて示している。**106～144**が微高地下がりとして取り上げたもので、第10図の第35層より上の層から出土したものである。**145～155**は微高地下がり最終層として取り上げたもので、第37層出土の土器である。

106～118は壺である。**106～112**は長頸壺であるが、頸部の傾きや口縁部の形状には変化がみられる。口縁部では内傾する端面を上下に拡張するもの（**109・110**）と上方に高く立てるもの（**106**）がみられ、頸部では下に広がるもの（**107・108**）とまっすぐなもの（**111**）がある。頸部にはヘラ描き沈線を巡らせるが、**107**は複線鋸歯文を挟んでいる。頸部の下端には連続刺突文を施すものが多い。**113**は台付直口壺、**115**は壺の脚台とみられる。**117・118**は短い頸部をもつ壺で、口縁端部を上下に肥厚させる。

119～122は鉢である。**119～121**は大形の鉢で、**119・120**の口縁端部は少し肥厚させるだけだが、**121**の口縁部は二重口縁のように上方へ大きく立ち上がる。**121**は古墳時代に降るものかもしれない。**122**は小形の鉢で、外面にタタキ目の痕跡を残している。

123～135は甕である。口縁部の形態には変化が多いが、大きくみれば、端面を少し肥厚させるもの



第31図　立田E2区西端河道1斜面堆積層出土遺物（1）（1/4）

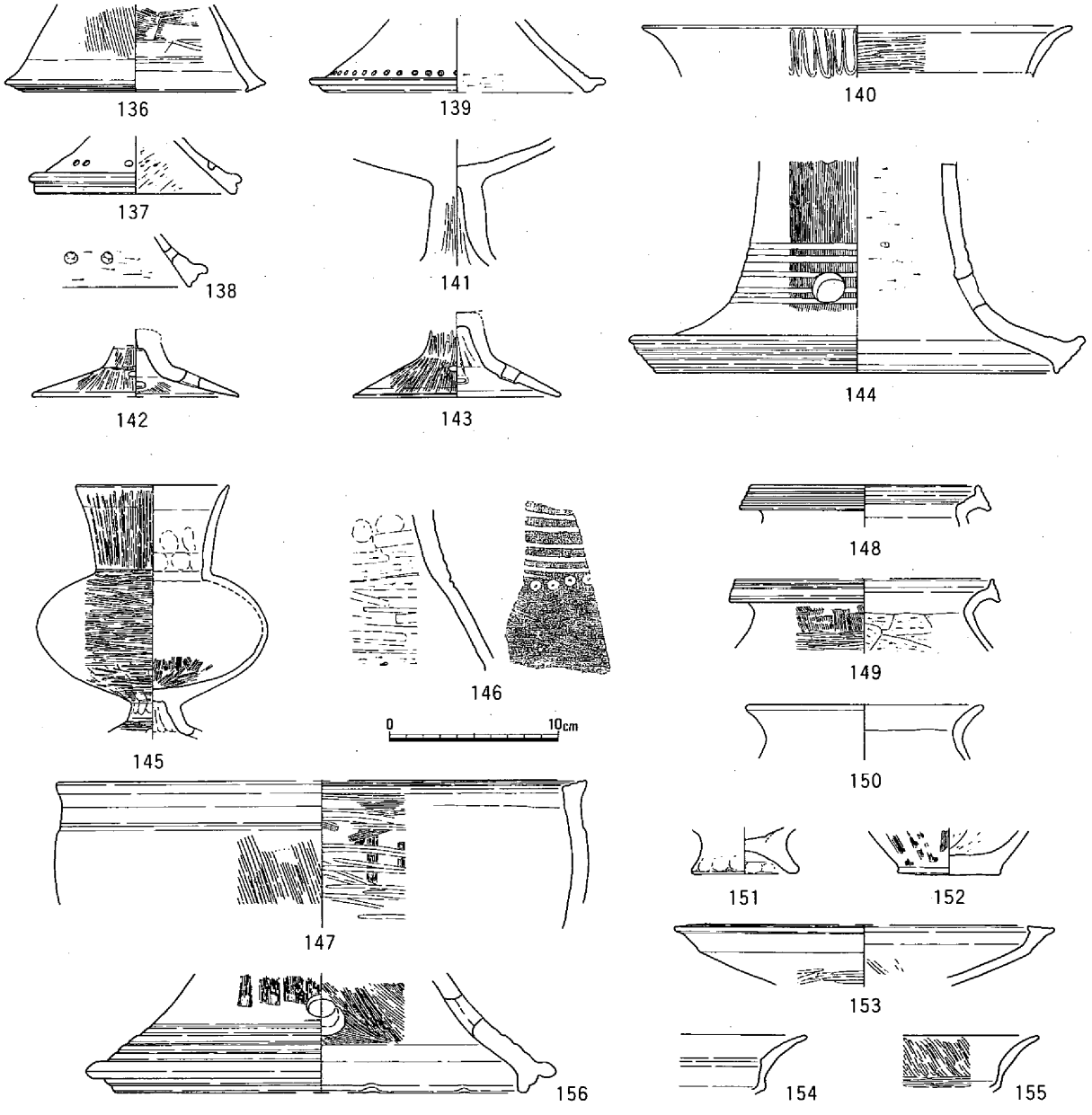
と上方に立ち上げるもの(129～131・133)に分けられる。132は古墳時代のものかもしれない。123・125の口縁端面には凹線が巡らされ、128の胴部外面にはタタキ目が認められる。

136～143は高杯である。136～139の脚の端部は拡張され、端面に凹線を巡らせる。137・139は脚端を竹管文で飾る。142・143は低脚の高杯である。140の外面は縦方向にヘラミガキされる。

144は器台である。胴部には上下二段に円孔が穿たれている。胴部下端には５条の沈線が巡らされる。脚端面は肥厚させ、凹線文を施している。

最終層出土土器のうち、145は台付直口壺、146は長頸壺、147は鉢、148～150・152は甕、151は壺か鉢の脚、153～155は高杯、156は器台である。

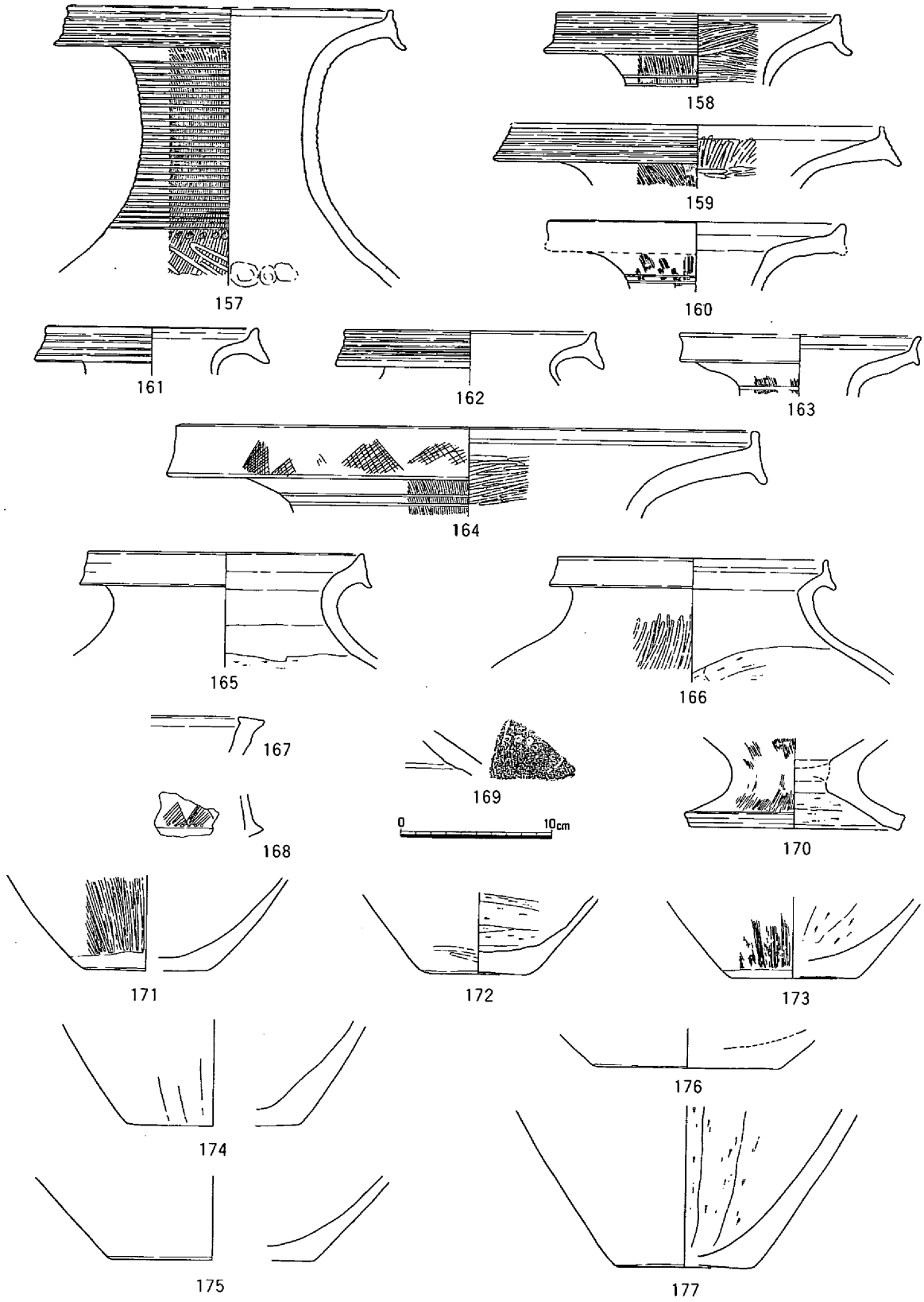
出土土器は弥生時代後期のものであり、時期的には弥・後・Ⅰ～Ⅱのものが多いが、106・133のようにⅢ以降のものも含まれている。また、最終層と上層との時期差はほとんどみられない。（岡本）



第32図　立田E2区西端河道1斜面堆積層出土遺物（2）（1/4）

微高地北東斜面（第10・33～35図）

排水機場区北東側において確認された北東に下がる斜面である。海抜2.70ｍから下がりはじめ調査区北東端部ではおよそ90㎝の比高差の海抜1.80ｍを測った。この斜面には、弥生時代後期後半を中心



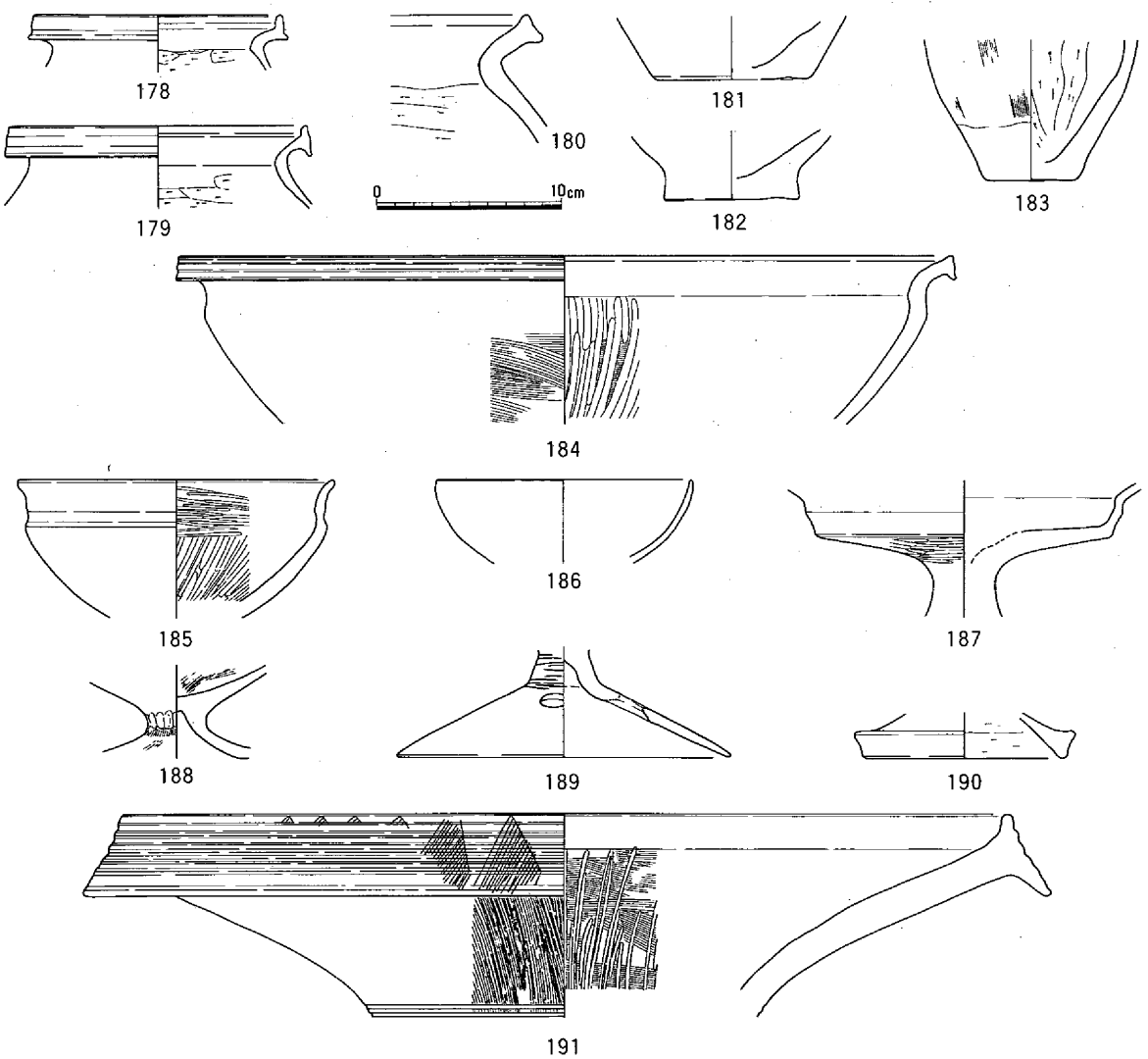
第33図　立田排水機場区微高地斜面肩部包含層出土遺物（1）（1/4）

とした土器が数多く堆積していた。内容的には、高杯186・189の２点が古墳時代初頭のものである以外ほとんどの土器が弥生時代後期後半に属するものであった。この排水機場調査区からは弥生時代後期後半の遺構は確認できなかったが、これらの土器の存在が意味することは、比較的近接した地点に当該期の集落が存在していることである。

出土遺物は、壺・甕・高杯・鉢・器台などの土器類が中心であるが、それ以外にも石器として敲石が２点確認されている。

壺としては、157～169・180が挙げられる。ただし、158・159は口縁端部の在り方が通常の壺のものとは拡張の程度が異なり、さらに内面調整には丁寧なヘラミガキが多用される点などから、壺としてより器台としての可能性が高いと考える。157は、全体的に直立するが頸部外面には細いヘラ先による沈線が数多く巡り、口縁端部は下方への張り出しが特徴的である。161・162は、口縁端部の上下拡張の度合いに比べて頸部の径が小さい。164は、口縁部外面にヘラ先による鋸歯文が施されており、口径の大きさからも器台の可能性が高い。165・166は、短頸の壺に分類される。165の外面には明瞭ではないが縦方向のハケメが、166にはヘラミガキが施される。170は、台付鉢であろうか。

甕は、171～177の底部部分は明確ではないが、口縁部分では178・179が該当する。２者共に口縁端



第34図　立田排水機場区微高地斜面肩部包含層出土遺物（2）（1/4）

部を若干上下に拡張した新しい様相を示す。後期後半である。

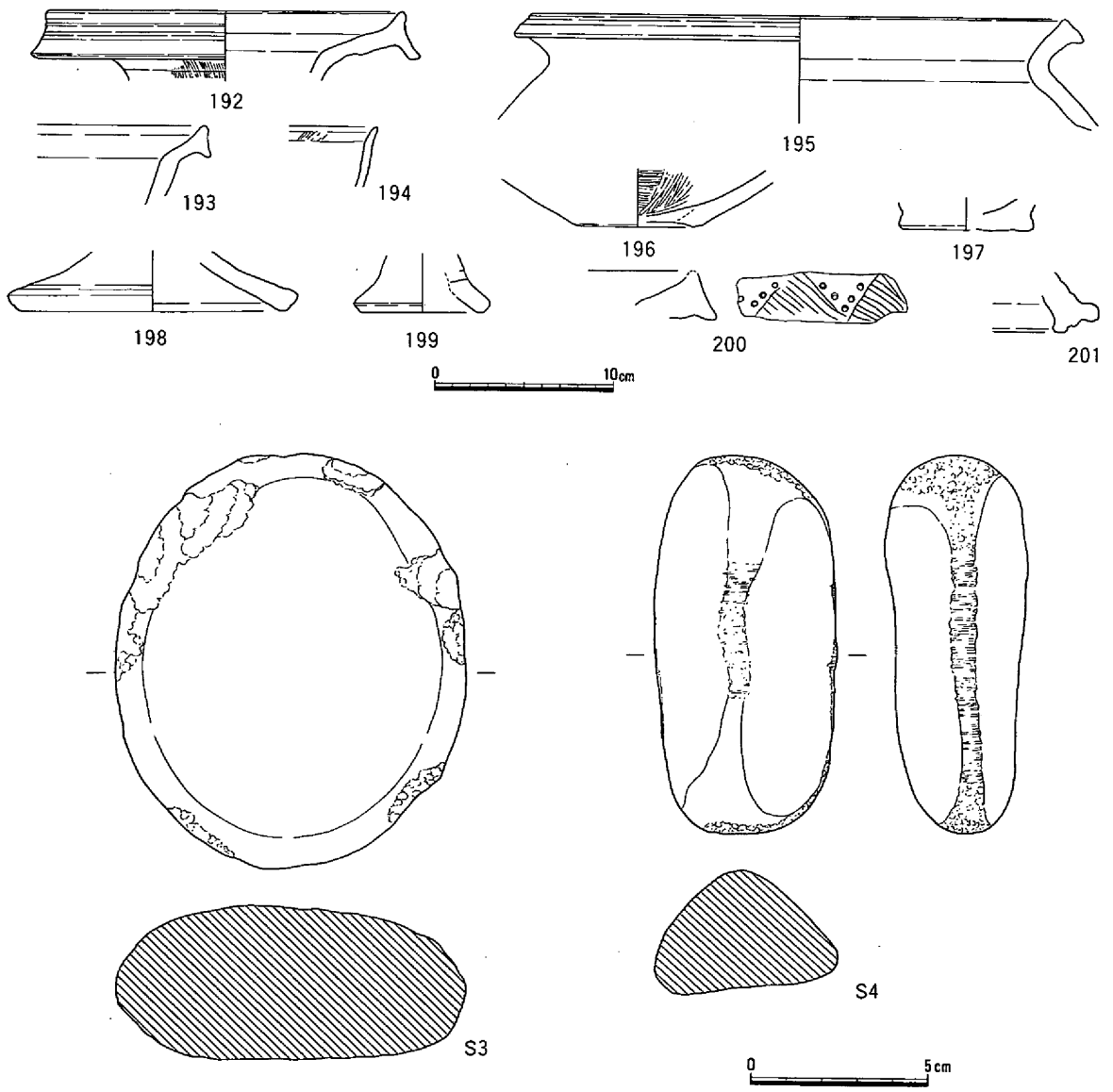
高杯は、185～190である。前述したように186と189が古墳時代初頭で、185および187と190が弥生時代後期前半、188が短脚の脚部で後期後半を示す。187は、脚部と杯部の境内面は円盤充填によるものである。

鉢184は、口径42cmを測る中形のものである。外面は比較的丁寧な横および斜め方向のハケメが、内面は口縁部のヨコナデを除く全てが丁寧なタテハケメによって仕上げられているが、外面には煮沸使用痕跡であるススの存在が確認できた。一方、小形のものでは196が内面に比較的丁寧なヘラミガキを見せる。

器台は、口径48cmを測る191が１点大形のものとして見られた。

石器は、Ｓ３・Ｓ４ともに円礫の一部もしくは稜線部分全部に使用痕跡を見せるもので、敲石と考えられる。

（島崎）



第35図　立田排水機場区微高地斜面堆積層出土遺物（1/4,1/2）

遺構に伴わない遺物（第36～38図、図版39）

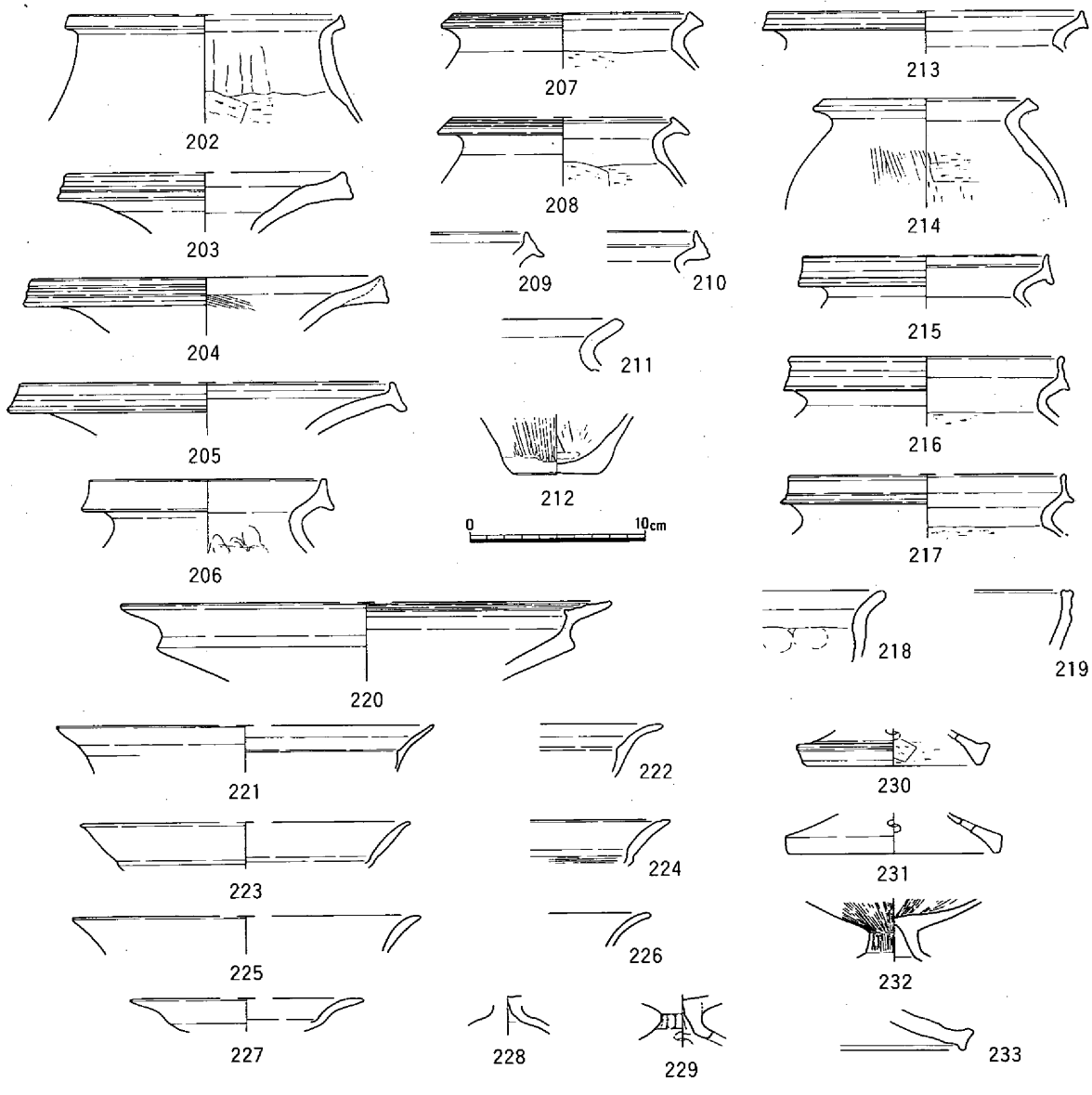
第36図に掲載した遺物は、主に立田Ｅ２・３区の包含層から出土した弥生土器である。

202～206は壺である。このうち**203～205**は長頸壺になるものと考えられ、口縁端部を肥厚させた端面に凹線を施すものと、口縁端部を上下に拡張し、その端面に退化した凹線を施すものがある。また、**206**は口縁端部を上下に拡張するが、端面はヨコナデによる凹部のみがみられる。

207～217は甕である。口縁端部の形態では、肥厚させるもの、上下に拡張するもの、上方に拡張するもの、上方に長く立ち上がらせるもののほか、**211**のように丸くおさめるものがある。胴部内面のヘラケズリは、**214**が頸部のやや下方まで、その他は頸部近くまで施している。

鉢には、口縁が「く」の字状に屈曲する**218**と、屈曲して上方に立ち上がる**219**がある。

220～232は高杯である。口縁部の形態では、一旦垂直に立ち上がった後、水平に大きく拡張するもの、内面に稜をもつもの、外反して端部を丸くおさめるものがある。**220**は拡張した端面に凹線を施す。**224**は内面の端部近くに２条の沈線を巡らしている。**228・229・232**は短い脚柱で、**229**は杯部に



第36図　立田Ｅ２，３区出土弥生時代遺物（1/4）

脚部を差し込む接合痕が観察できる。230と231は肥厚する端部である。

233は器台の脚端部である。拡張した端部の端面は、ヨコナデによる凹部がみられる。

以上の遺物の時期は、多くが弥生時代後期前半に属すが、216・217・228・229・232のように後期後半に分類されるものがある。

第37・38図は、立田排水機場区の包含層や側溝から出土した弥生土器である。

234は長頸壺で、肥厚する口縁端部から頸部の一部にかけてである。現存する部位の調整は、頸部外面が縦方向の細かいハケメ、内面が横方向の細かいハケメである。また、口縁内面はユビオサエ後にナデを施している。

235～244は壺の口縁部と考えている。甕との識別は困難だが、短い頸部をもっている。端部を肥厚する235・237・239、上下に拡張する240・241・242、下方に拡張する238、上方に拡張する244、上方に長く立ち上がらせる243等がある。口縁端面にはヨコナデによる凹部をもつ235・242・244と、凹線を施すものがある。内面のヘラケズリは、頸部の屈曲部よりもやや下方まで施すものが多いが、242のように屈曲部まで施すものもある。

245～254の底部には上げ底と平底がある。外面の調整はヘラミガキ、内面の調整はヘラケズリのものがほとんどだが、大形製品の254のように内外面とも細かいハケメを施すものもある。

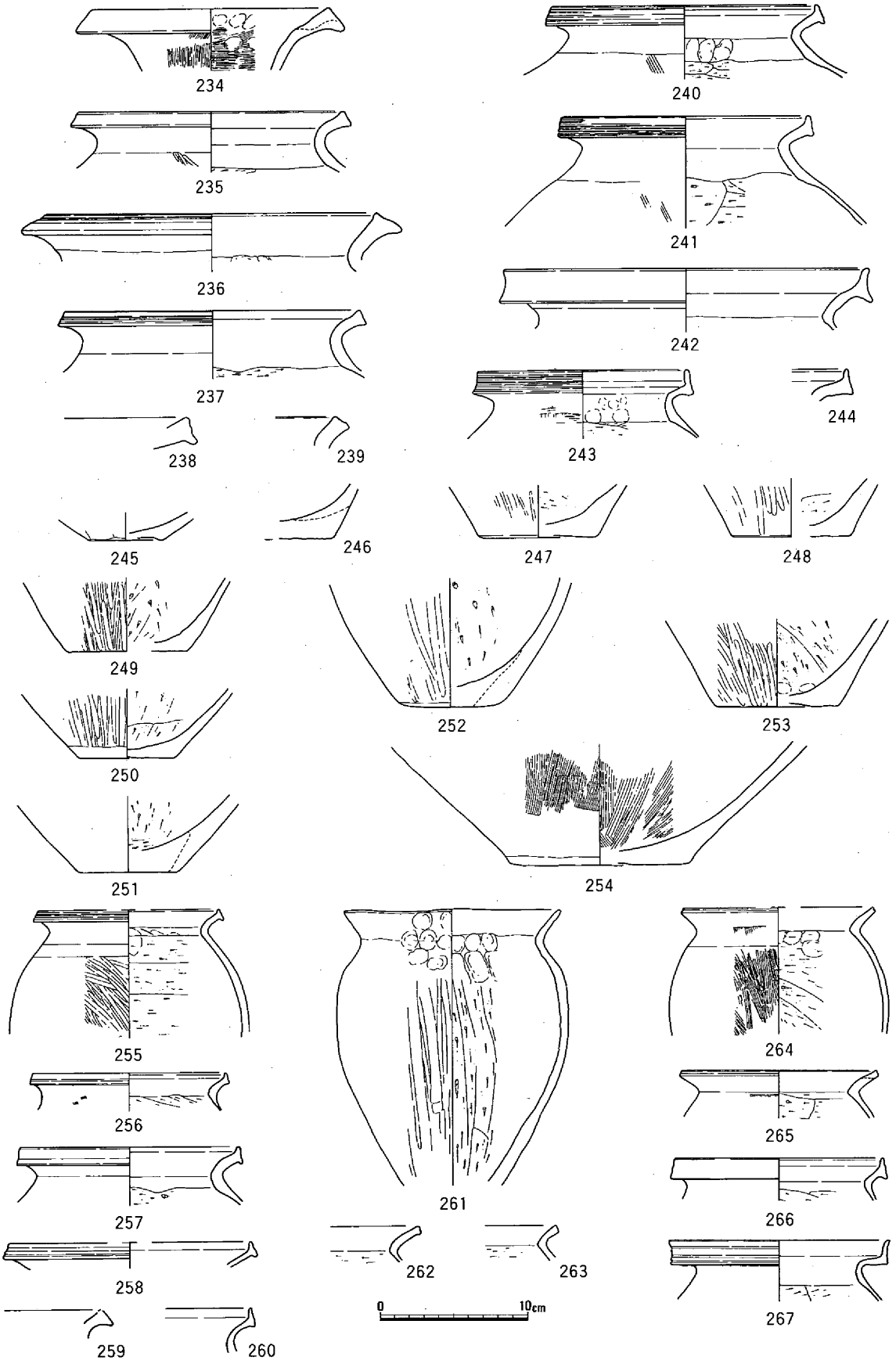
255～286は甕である。口縁部の形態では、上記の234～244にみられた分類が可能であるが、261のように端部を丸くおさめるものや、264・265のように端部を肥厚も拡張もせず、端面に凹線を１条巡らすものを新たに加えることができる。その他の端面では、255～258・267・268のように退化した凹線を施すものと、269～271のように細い凹線を７～８条施すものとがある。確認できる内面ヘラケズリは、頸部の屈曲部よりもやや下方まで施すものと、屈曲部付近まで施すものの二者がある。いずれも最上位のケズリ方向は横であるが、261は最上位まで縦方向のヘラケズリで、その上部はユビオサエとなる。

274～286は甕の底部と考えられるものである。先述した245～254よりも薄手で小振りなものを挙げている。平底のものがほとんどで、283のみ上げ底となる。内外面の調整の確認できるものは、すべて外面ハケメ、内面ヘラケズリである。

287～289は鉢である。287は端部を丸くおさめるもので、288は端部を上下に拡張し、その端面に凹部をもっている。289は器壁の厚い手捏ね土器で、ほぼ完形品である。内面は丁寧なナデ、体部外面はユビオサエが顕著である。

290～301は高杯である。杯部口縁の形態では、内面に稜をもつ290・291と、外反する292・293の二つがあるが、いずれの口縁端部も丸くおさめている。293の口縁外面には上下方向にヘラミガキを施している。脚部では294のように長いものと、293・295～299のように短く脚柱部から屈曲して裾部に至るものがある。294は３方向に施文があり、うち２方向は上段に竹管による刺突文と下段に透かし孔を、残り１方向は脚柱部のほぼ中位に透かし孔一つを開けている。また、杯部と脚部の境には円盤充填の痕跡がみられ、脚部内面はヘラケズリしている。296・298は、杯部に別作りした脚部を差し込んだ痕跡が断面で観察できる。296～298の杯・脚・裾部外面には縦方向の細かいヘラミガキを施し、内面にはシボリの痕跡が観察できる。脚端部は、299・301のように丸くおさめるものと、300のように肥厚させるものがある。

302～304は器台と考えられるものである。302は口縁端部を上下に大きく拡張し、その拡張した端



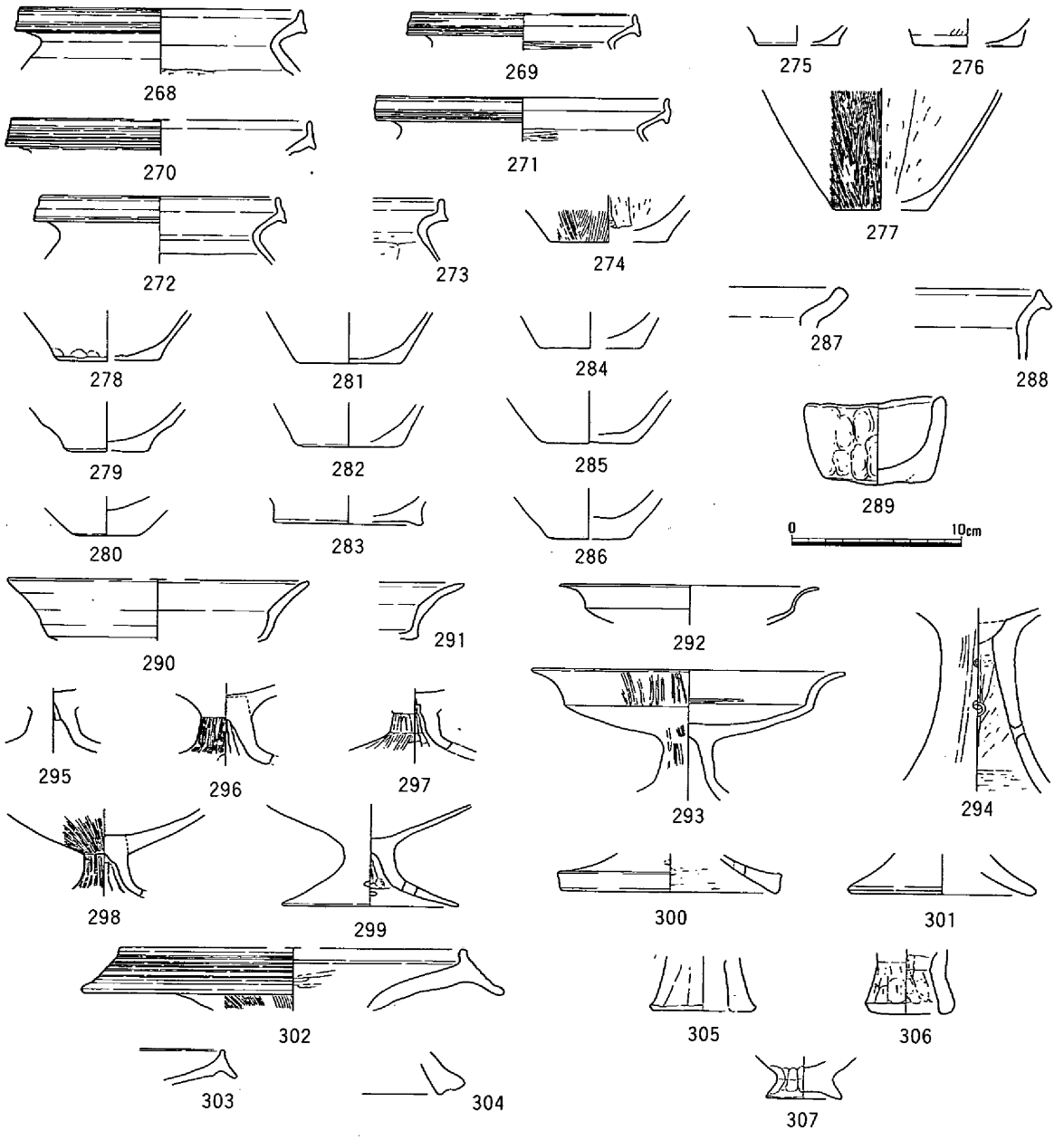
第37図　立田排水機場区出土弥生時代遺物（1）（1/4）

面に７～８条の凹線を巡らすものである。303は内湾気味の口縁から端部を上下に拡張し、端面に凹線を施すものである。304は脚端部で、肥厚させた端面にヨコナデによる凹部をもち、内端面で接地している。

305・306は製塩土器の脚部である。端部を肥厚させる305と、ナデとユビオサエにより端部を面取りするように整形する306がある。306の外面は下から上へ縦方向のヘラケズリ、内面はナデを施し、二次的な焼成を受けている。

307は小形鉢の脚部と考えられるもので、浅い上げ底となる。外面をユビオサエで整形する。

立田排水機場区出土の弥生土器の時期は、その多くが後期前半の弥・後・Ⅱ期に属するものと考えられる。その他では、268～273や293・295～299などが後期後半の弥・後・Ⅲに、267が弥・後・Ⅳと考えられる。内容的には近接する立田２・３区の出土状況と類似することが指摘できる。　（岡本）



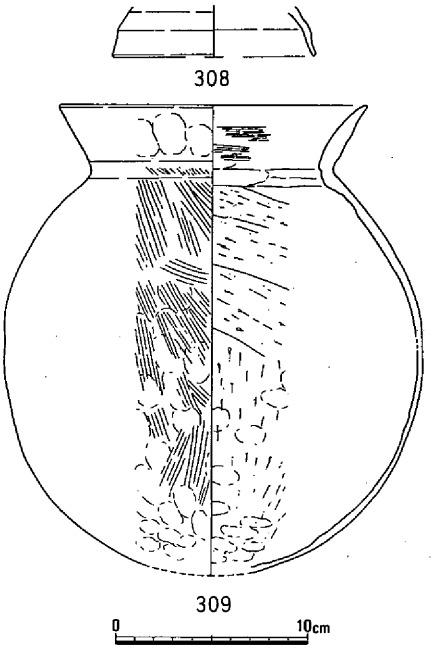
第38図　立田排水機場区出土弥生時代遺物（2）（1/4）

第３節　古墳時代の遺物

古墳時代の遺構は検出していないが、若干の遺物が出土している。

308は須恵器の蓋で、復元口径は約100㎜を測る。時期は７世紀初頭と考えられる。

309は土師器の甕で、胴部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施し、底部内面には指頭圧痕がみられる。また、底部付近をのぞく胴部外面には煤が顕著に付着する。時期は古墳時代前期と考えられる。　（岡本）



第39図　立田Ｅ２区出土古墳時代遺物（1/4）

第４節　古代の遺物

古代の遺構も存在していないが、包含層等から出土した以下の遺物について説明を加える。図示したのは、須恵器の蓋310～312、杯313・314、甕あるいは小壺になると考えられる315と、土師器の高杯316である。

310は碁石状、311は偏平化した擬宝珠状のつまみをそれぞれもつ。312の口縁端部は折り返して逆三角形を呈す。313は断面逆台形の高台が直立して付く。314にはやや開き気味の高台が付き、その径は89㎜を測る。315にもやや開き気味の高台が付く。

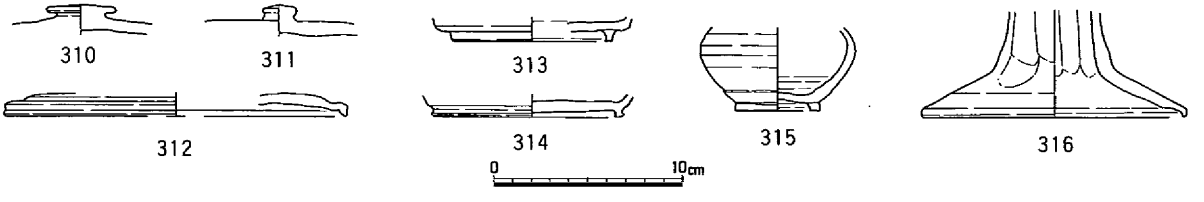
316は丹塗り高杯の脚部下半である。脚柱部外面をヘラで縦方向に面取りし、そこから「く」の字状に屈曲して裾部が開く。裾端部内外面にはヨコナデを施し、下方に折り曲げる。

時期は、概ね奈良時代に比定されるが、316についてはやや新しくなる可能性がある。　（岡本）

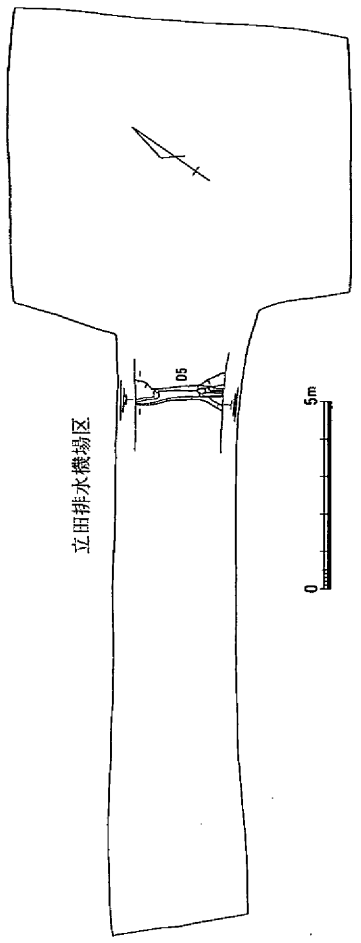
第５節　中世の遺構と遺物

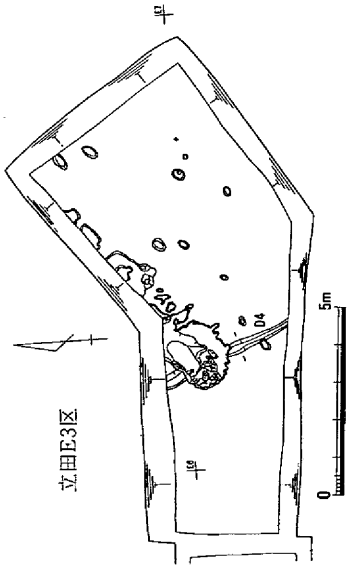
１　遺構配置

立田遺跡で検出された中世の遺構は、立田排水機場区の溝１条と立田Ｅ３区の溝１条、不整形なごく浅い攪乱壙１基にすぎない。溝は現在の地割りに近く、耕作に伴うものとみられる。　（岡本）



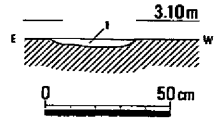
第40図　立田Ｅ２，３区出土古代遺物（1/4）





第41図　立田遺跡中世遺構配置図（1/200）

2　遺構・遺物



1　灰白色粘質土斑
　暗灰茶褐色粘質土

第42図　溝４（1/30）

溝４（第42図）

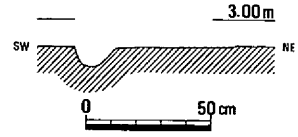
立田Ｅ３区の中央をほぼ南北に流走する溝で、北半の多くは淡黄灰色粘質土を埋土とする浅い不定形土壙に切られる。

検出した溝の規模は、長さ約370cm、幅35cm、深さ3cmを測る。

時期は、検出面等から中世と考えられる。　（岡本）

溝５（第43図）

海抜2.90ｍにおいて検出した幅15cm程度の溝である。後世の掘削により、本来存在したであろう上部構造が消滅し、わずかに残ったのがこの溝である。



第43図　溝５（1/30）

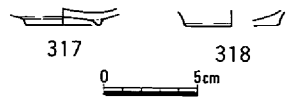
出土遺物が認められなかったことで詳細な時期は不明であるが、検出面の高さと埋土が灰色を基調とした粘質土であったことなどから、時期的には中世と考えた。（島崎）

遺構に伴わない遺物（第44・45図）

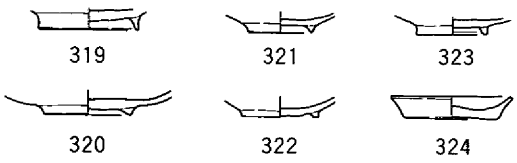
第44図は立田排水機場区出土の土師器で、**317**は断面三角形の高台を貼り付ける椀、**318**は小皿である。

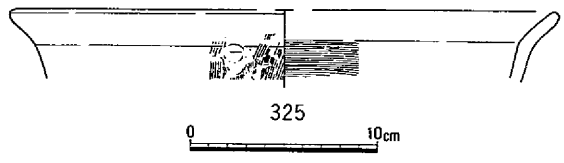
第45図は立田Ｅ３区出土の土師器で、**319～323**は高台付椀、**324**は小皿、**325**は土鍋である。**319**が外方に開き気味の比較的しっかりとした高台を貼り付けるのに対し、**320～323**は低くて貧弱な高台で底径も小さい。

以上の時期は、概ね鎌倉時代に属すると考えられるが、**324**は室町時代まで下る可能性がある。（岡本）



第44図　立田排水機場区出土中世遺物（1/4）

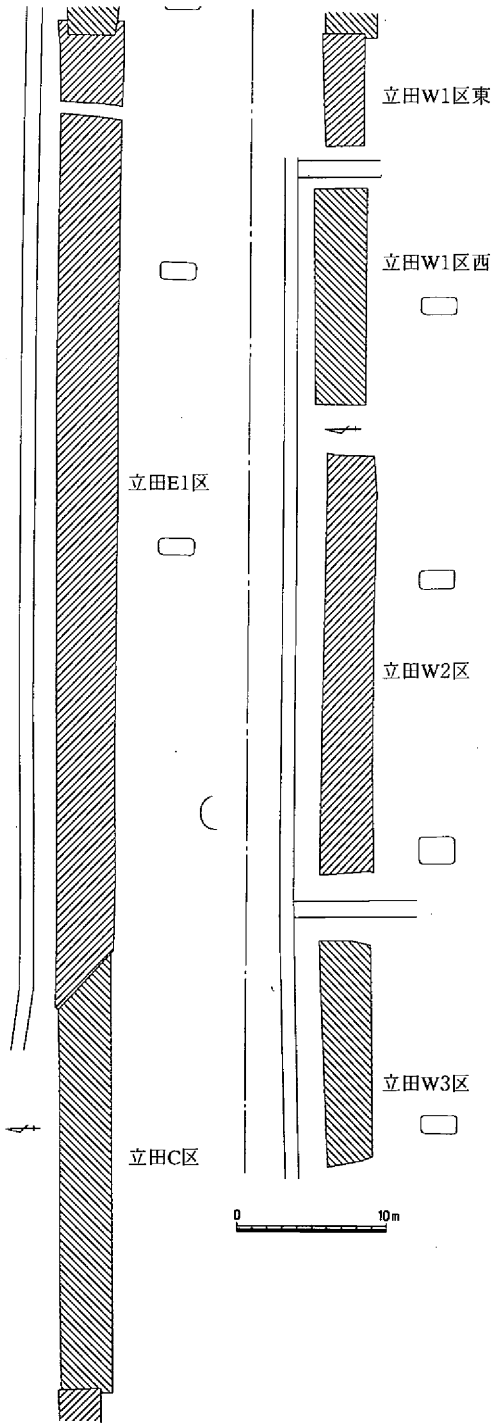




第45図　立田Ｅ３区出土中世遺物（1/4）

第４章　高松原古才遺跡

第１節　概要

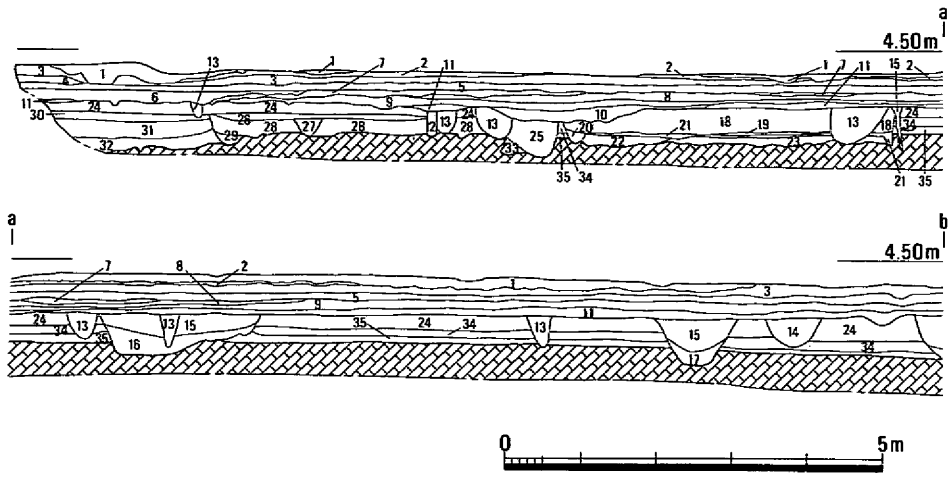


第46図　高松原古才遺跡調査区区割り図(1/500)

高松原古才遺跡は、立田Ｅ２区の西端で検出された河道１を境として、立田遺跡の西に隣接している。高松原古才遺跡に含まれる調査区は、各年次の調査区ごとに呼称を付け、東から立田Ｅ１区、立田Ｃ区、立田Ｗ１区東、立田Ｗ１区西、立田Ｗ２区、立田Ｗ３区とする。立田Ｅ１区の東端で水道管が横断していたため、一時ここまでを調査区としていたので、そこより東の部分をＥ１区の拡張区と呼ぶこともある。また、Ｗ１区では水路が横断していたが、同年度の調査区で短いため、ともにＷ１区としている。高松原古才遺跡内の調査区はその間の水路なども含め、全長で165ｍに達する。

河道１は幅が８ｍで、高松原古才遺跡の東端まで及んでいたが、その西に10ｍ離れてもう１条の河道２が存在していた。河道２は幅が21ｍもあり、その流路から判断して、調査区の南で河道１と合流していたとみられ、河道２が本流で、河道１は支流と考えられる。このため、弥生時代には実際は河道２が集落を隔てる大きな境界線として存在し、立田Ｅ１区の東端は立田遺跡を中心とする集落の範囲にあったものと思われる。ただ、河道１も８ｍの幅があり、河道２の東斜面からかなりの遺物が出土したことを考慮すると、河道１と河道２に挟まれた地区も北では広がって、一つの集落を形成していた可能性がある。このように、立田Ｅ１区の東半はほとんど河道によって占められ、河道が埋没した後も低位部として中世まで残り、その間は溝や柵の存在から耕作地として利用されていた。

立田Ｅ１区の西半から立田Ｗ１区東までは微高地部分にあたり、弥生時代の中期から集落が営まれていた。とくに、古墳時代の後期から７世紀にかけては多くの竪穴住居が集中し、最盛期をむかえる。古代以降は微

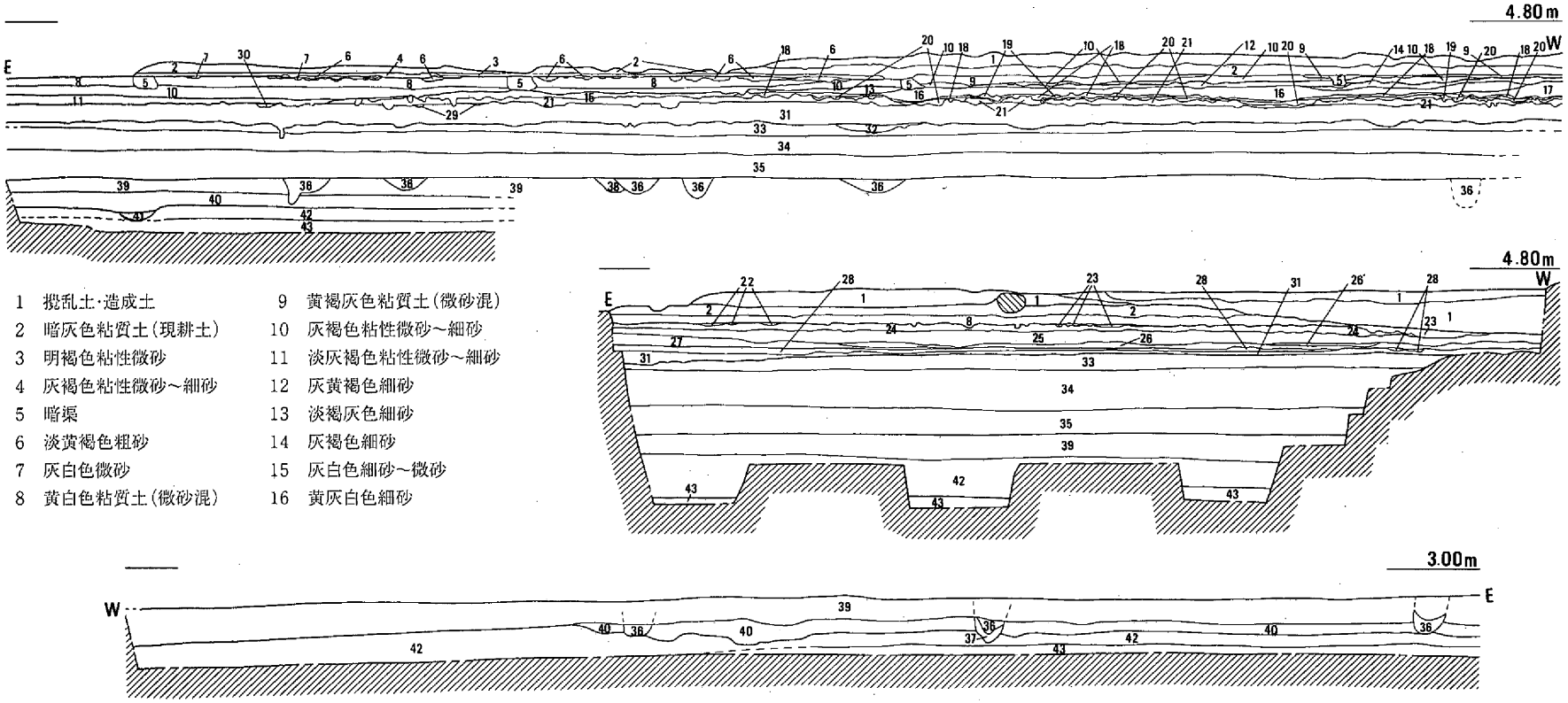


1　現代攪乱・盛土
2　灰色微砂質土（現耕土）
3　灰色砂質土（耕土、砂粒多）
4　灰黄褐色砂質土（砂粒多、上面斑鉄）
5　灰黄褐色砂質土（砂粒多、上面斑鉄）
6　細砂混灰黄褐色粘質土（塊状混合、造成土?）
7　灰白色粘質土（上面斑鉄）
8　淡灰褐色粘質土（上面斑鉄、細砂若干）
9　灰黄褐色粘質土（上面斑鉄、細砂若干）
10　淡灰色粘質土（上面斑鉄、落ち込み1埋土）
11　淡褐灰色粘質土
12　暗灰褐色粘質土斑淡褐灰色粘性砂質土
13　暗灰褐色粘質土（炭粒、焼土若干、黄褐色粘土斑含）
14　暗灰褐色粘質土（炭粒点々、砂粒多）
15　暗灰褐色粘質土（炭粒若干、土器片点々）
16　黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土（焼土塊多）
17　灰褐色粘質土（炭粒点々）
18　暗灰褐色粘質土（炭大粒・焼土塊点々、竪穴住居3埋土）
19　灰・焼土斑暗灰褐色粘質土
20　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土
21　暗灰褐色粘質土斑黄褐色粘質土（住居貼床層）
22　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土（炭粒、焼土若干）
23　灰褐色粘土斑黄褐色粘質土
24　暗灰褐色粘質土（炭粒、焼土点々、古墳時代包含層）
25　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土（炭粒・焼土若干）
26　暗灰褐色粘質土（炭粒・焼土含）
27　暗灰褐色粘質土（炭粒・焼土塊多）
28　灰褐色粘性砂質土（中央付近焼土塊・灰多量、竪穴住居1埋土）
29　黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土
30　暗灰褐色粘性砂質土（固く締まった土）
31　黄褐色粘土斑暗灰褐色粘性砂質土（炭粒点々・竪穴住居埋土?）
32　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土（塊状混合土、炭粒若干）
33　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土（塊状混合土、炭粒若干）
34　暗灰褐色粘質土（弥生時代包含層?）
35　灰褐色粘質土斑黄褐色粘土（漸移層、地山と同一層か）

第47図　立田Ｅ１区西半北壁土層断面図（1/100）

高地上では遺構が検出されなくなるが、周辺の包含層からはこの時代の遺物がかなり出土し、また、微高地周辺の低位部では耕作に伴うとみられる遺構が検出されることから、生活の痕跡がまったく消えたわけでもない。これについては立田遺跡でもみられたように、後世の地下げによる遺構の消滅ということもいくらか考慮する必要があるかもしれない。第47図第11層・第62図第13層は古代の包含層で、第47図第９層・第62図第12層は中世の包含層と考えているが、この２枚の薄層より上は近世以降の堆積層であり、とくに微高地の東端では、中世の包含層の上に近代の耕作土がのっていた。集落が縮小していくのは確かだが、古代にはまだ存続していたと思われる。

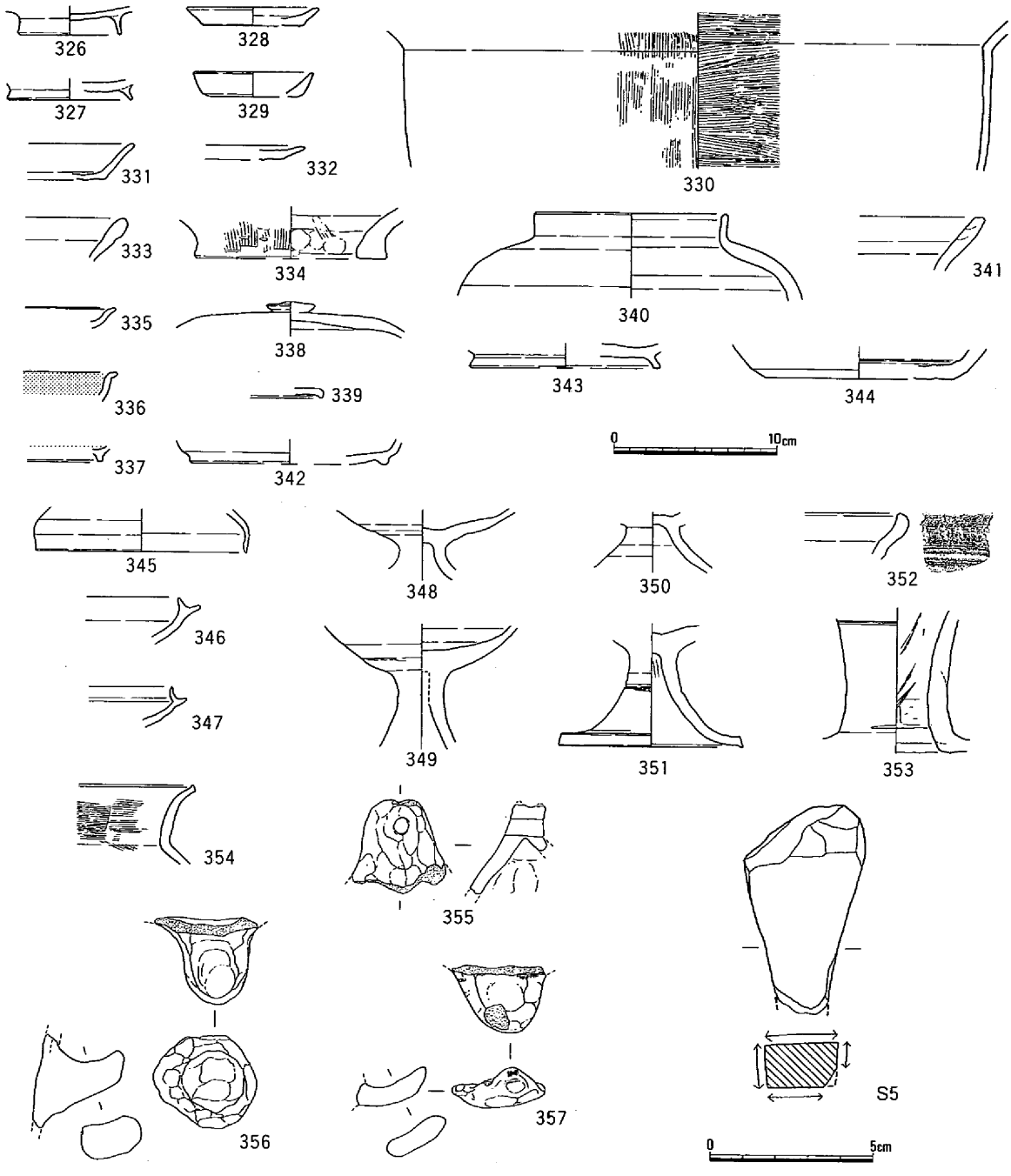
微高地の西端は立田Ｗ１区西で弥生時代の下がりが検出された。古墳時代には微高地の端部は立田Ｗ１区西と立田Ｗ２区の境界付近まで広がったようである。立田Ｗ２区から西は低位部が続いていたが、Ｗ２区の西端で７世紀前半の溝が検出され、微高地の周辺の低位部では耕作が行われていたと考



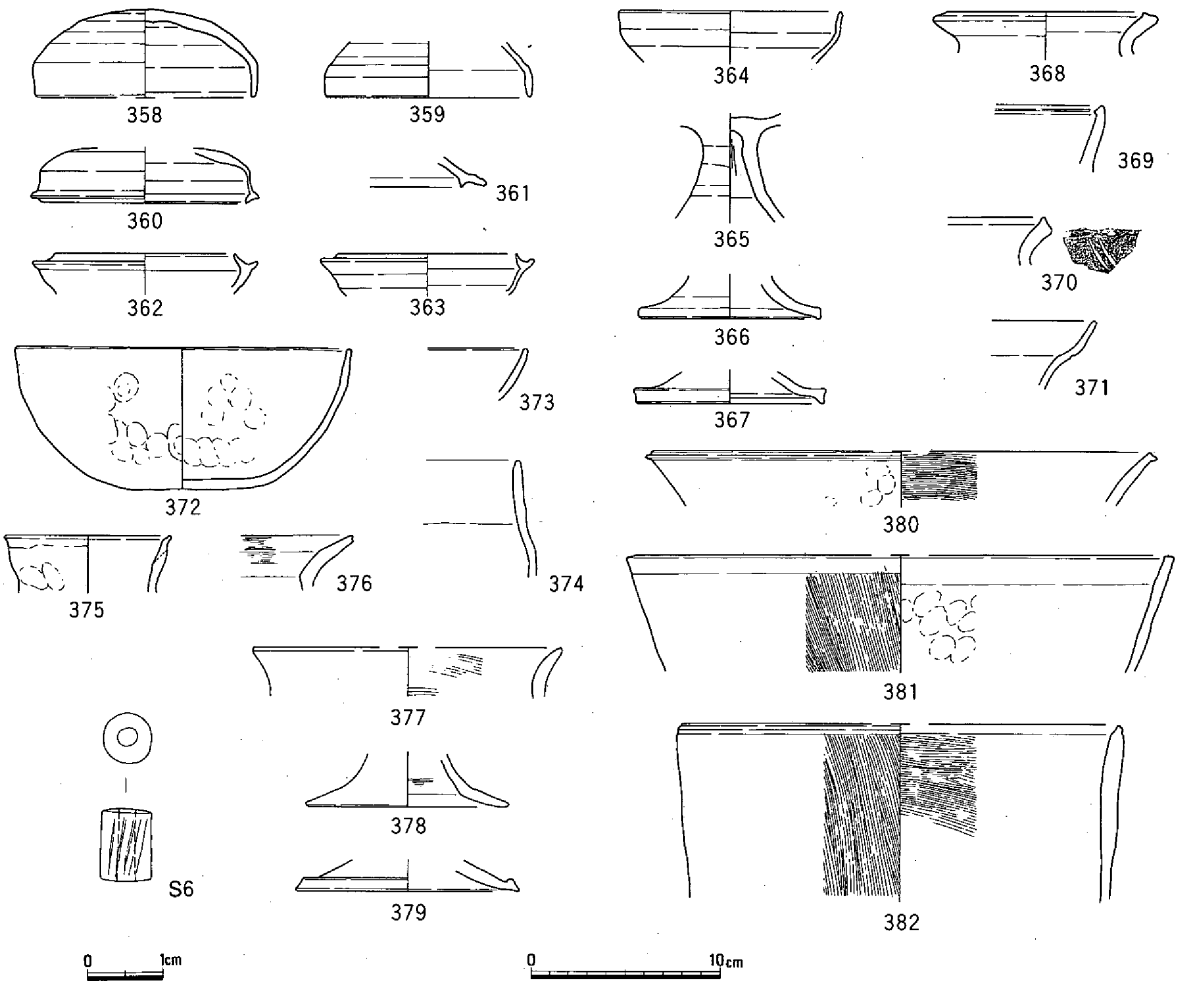
1 攪乱土·造成土
2 暗灰色粘質土(現耕土)
3 明褐色粘性微砂
4 灰褐色粘性微砂～細砂
5 暗渠
6 淡黄褐色粗砂
7 灰白色微砂
8 黄白色粘質土(微砂混)
9 黄褐灰色粘質土(微砂混)
10 灰褐色粘性微砂～細砂
11 淡灰褐色粘性微砂～細砂
12 灰黄褐色細砂
13 淡褐灰色細砂
14 灰褐色細砂
15 灰白色細砂～微砂
16 黄灰白色細砂
17 黄褐灰白色細砂
18 褐灰色微砂
19 褐灰色粘質土
20 淡青灰色微砂
21 淡褐灰色粘質土(微砂混)
22 灰褐色粘質土(微砂·細砂混)
23 灰白色微砂～細砂
24 淡灰黄褐色粘質土
25 淡灰黄色粘質土
26 淡灰褐色粘質土
27 淡褐灰色粘質土
28 淡灰褐色粘質土
29 灰褐色微砂
30 灰褐色粘質土(微砂混)
31 淡青灰色粘土
32 青灰色粘土(溝24埋土)
33 青灰色粘性微砂(斑鉄)
34 青褐灰色粘性微砂(土器包含層)
35 淡緑灰色粘性微砂
36 緑灰色粘性砂質土(炭粒·焼土塊·土器含、溝11～14,16,17埋土)
37 灰色粘質土斑緑灰色粘性砂質土
38 淡緑灰色粘性砂質土(溝15埋土)
39 淡緑灰色～青灰色粘質土
40 黄灰色粘性微砂質土(炭粒·焼土塊·土器片多量包含、溝5埋土)
41 暗灰黄色粘性砂質土(底は焼土面)
42 暗灰黄色～暗青灰色粘性微砂(炭粒·焼土塊·土器片少量包含)
43 黄灰色～青灰色微砂

第48図　立田W2区(上)·W3区(中)南壁、W2区北壁(下)土層断面図(1/100)

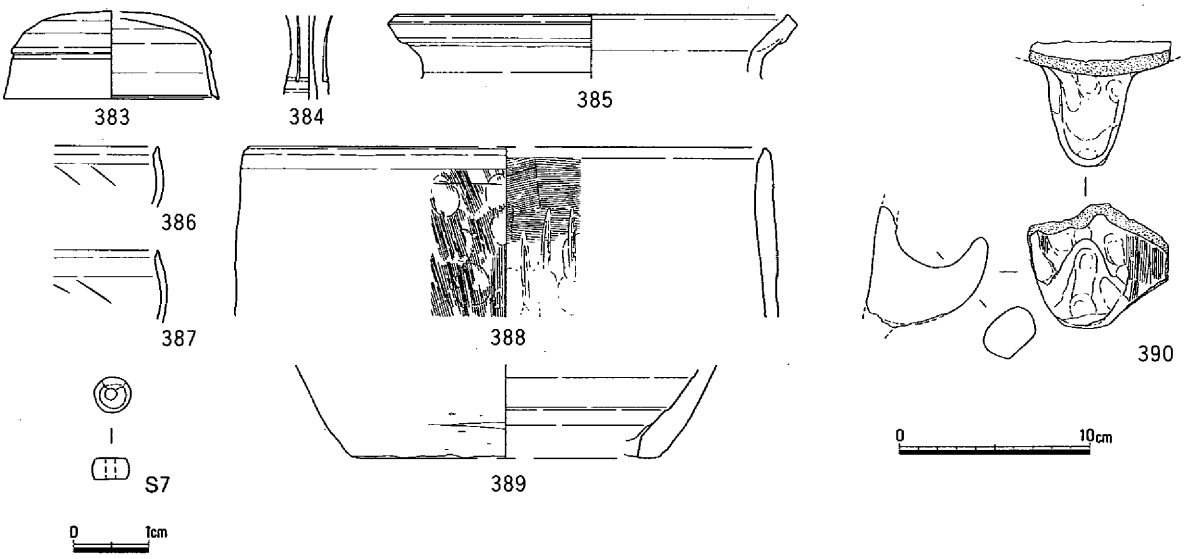
えられる。Ｗ２区からＷ３区にかけての低位部ではじょじょに堆積が進行し、地盤の上昇がみられるが、耕作は連綿と続けられていたようで、堆積層は常に水平を保っていた。堆積層中には微高地の集落の隆盛を語るかのように多くの遺物が、第49図から第52図に示したように、包含されていた。第48図の第42層の上面が７世紀前半の耕作面で、第39層の上面は８世紀代の耕作面と考えている。第33層の上面は中世の遺構検出面で、第49図には**326～330**の中世土器が混入していた。第33層から第35層までは古代の堆積層であるが、８世紀以降とみられる土器はほとんど第33層に集中し、第34層と第35層の土器はほとんど６世紀末から７世紀前半のものに限られていた。第52図の７世紀の耕作面下にあた



第49図　立田W2,3区第33層出土遺物（1/4,1/2）



第50図　立田W2,3区第34層出土遺物（1/4,1/1）

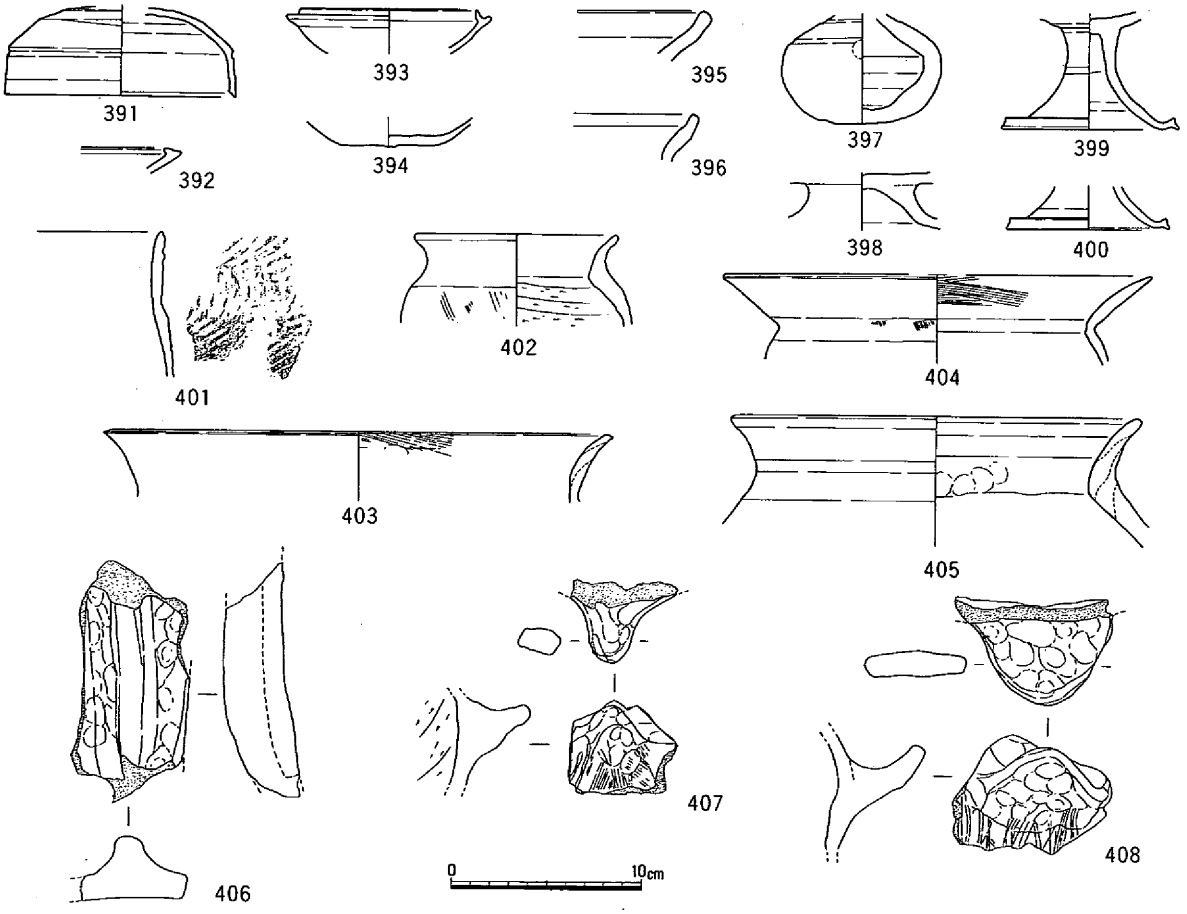


第51図　立田W2,3区第35層出土遺物（1/4,1/1）

る第42層出土土器も７世紀前葉のものがみられたが、５世紀末から６世紀にかけてのものがかなり含まれ、第34層などよりは少し古い様相を呈していた。

高松原古才遺跡は中世には集落はほぼ消滅し、その末期には低位部も埋まり、一帯は平坦な耕作地となって現在に至ったものと思われる。

最後に、第49図から第52図の包含層出土遺物について簡単に説明しておきたい。第49図では、326～337・354～357が土師器、338～353が須恵器である。326～330は中世、331～344は古代、345～357は古墳時代後期、７世紀前半までの土器である。336と337の杯には丹が塗られていた。355はタコ壺とみられ、袋状の器体の頭部には穿孔がある。Ｓ５は流紋岩製の砥石である。残存長が63.5㎜で、４面を使用し、よく磨滅している。第50図では、358～371が須恵器、372～382は土師器である。370は壺とみられるが、外面にヘラ描きの線刻が２条みられる。372の椀は口径176㎜を測る。内外面ともにナデとオサエによって調整されている。374は製塩土器とみられ、口縁部の外面にタタキ目らしい痕跡が認められる。Ｓ６は滑石製の管玉で、全長9.9㎜、直径7.0㎜、重さ0.9ｇを測る。第51図では、383～385・389が須恵器、386～388・390が土師器である。386・387は杯と考えられる。口縁部内面はかすかに窪み、体部内面には工具のあたったような痕跡がみられる。体部外面は横方向のヘラミガキ、内面もヘラミガキのようである。Ｓ７は滑石製の臼玉で、全長2.8㎜、直径4.9㎜、重さ0.1ｇであった。第52図では、391～400が須恵器、401～408は土師器である。401は製塩土器とみられ、外面にはタタキ目が残されている。406はカマド片である。（岡本）



第52図　立田Ｗ2,3区第42層出土遺物（1/4）

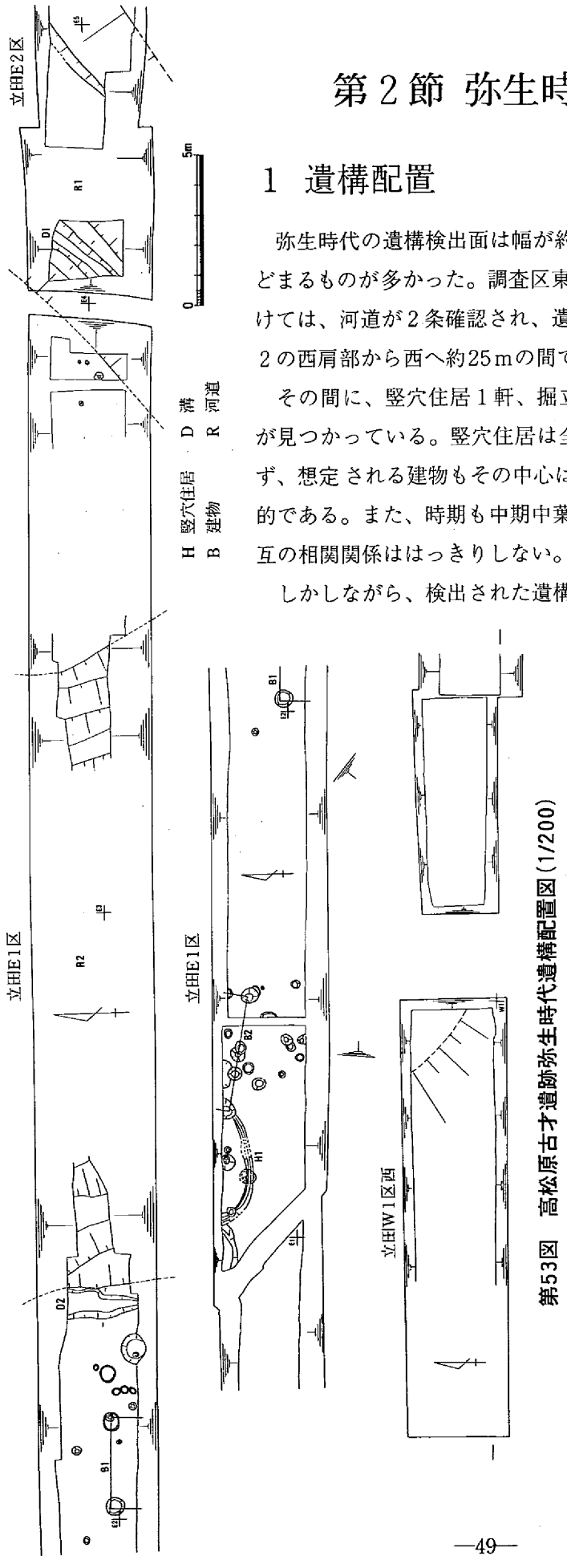
第２節 弥生時代の遺構と遺物

１　遺構配置

弥生時代の遺構検出面は幅が約2.5ｍと狭く、遺構の部分的な検出にとどまるものが多かった。調査区東端の立田Ｅ１区東半から立田Ｅ２区にかけては、河道が２条確認され、遺構密度の比較的高い部分は、おもに河道２の西肩部から西へ約25ｍの間である。

その間に、竪穴住居１軒、掘立柱建物２棟、溝１条、柱穴20数個などが見つかっている。竪穴住居は全体の約１/５程度しか調査区内に存在せず、想定される建物もその中心は調査区外に求められるなどいずれも断片的である。また、時期も中期中葉と後期前半の２時期に大別され、遺構相互の相関関係ははっきりしない。

しかしながら、検出された遺構だけでなく、この微高地あるいは河道で隔絶された範囲での傾向は、河道２の堆積遺物等から河道２の東側は後期前半～中葉、河道２の西側は中期中葉～後期初頭にそれぞれ中心的な時期の遺構の広がりが想定される。　（岡本）



第53図　高松原古才遺跡弥生時代遺構配置図(1/200)

２　遺構・遺物

弥生時代前期土器

（第54図、図版40）

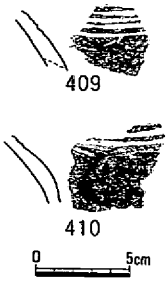
弥生時代前期の確実な遺構は検出されていないが、前期の土器片が２片認められている。

図示した２片は、立田Ｅ１区河道１のほぼ中央部の底近くの堆積土中から出土したもので、いずれも小形壺の肩部片である。409は肩口に４条の沈線を巡らせる。410はやはり肩口に、幅約７㎜の削り出し突帯を設け、そのほぼ中央部に１条の沈線を巡らせる。

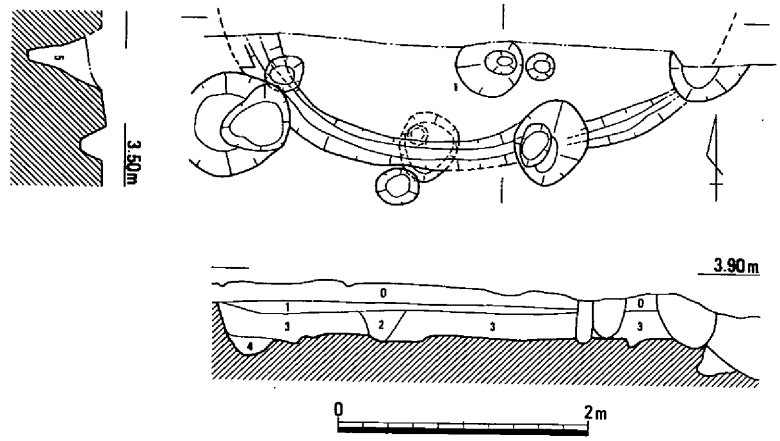
いずれも弥生時代前期の中葉から後半にかけての時期が与えられ、当微高地上には少なくとも前期から人の進出があったと見られる。　（岡本）

竪穴住居１（第55図、図版５・41）

Ｅ１区の西方に位置し住居の大半は調査区北方に延びる竪穴で、後述の建物２に一部切られて検出された。平面形態は円形を呈し、主柱は検出した住居壁と柱穴の位置から４本と推定される。また、竪穴の規模は直径4.5ｍ前後を測るものと思われる。住居壁に添って幅約40㎝のやや幅の広い壁体溝が巡り、壁から中央に向かって約１ｍには主柱が配置されている。規模は長径53㎝、深さ56㎝を測る。床面は一部凹む箇所も確認されたが、おおむね平坦な面を維持していた。埋土にはいずれも炭・焼土が含まれるもので、下層に向かってその量は増し、床面中央付近からは焼土塊が混じるなど、火災を受けた可能性が高い。遺物は少なく、図示し得た甕411は「く」字状に屈曲して開く口縁に、端部はわずかに肥厚する。外面上半にはわずかに煤が残る。外面はハケ調整の後下半をヘラミガキ、内面は押圧ナデを施し、下半にはケズリ痕跡が認められた。S8は太型蛤刃石斧の基部片と思われるもので流紋岩製である。S9・10の石鏃はいずれもサヌカイト製である。当住居は弥・中・Ⅱに焼失したものと推定される。　（岡本）



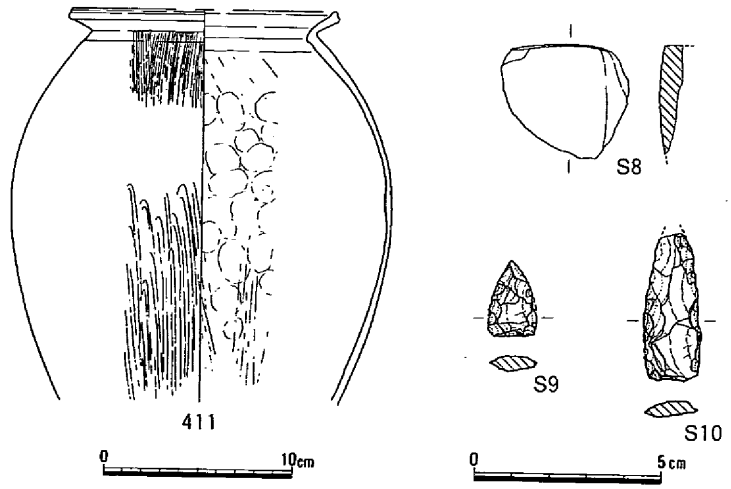
第54図　弥生時代前期土器（1/4）



建物１（第56図）

Ｅ１区の中央に位置する掘立柱建物で、棟の方向は不明である。検出された柱穴は南側調査区外に延びる建物の北辺にあたる２柱穴と判断した。柱穴間距離は３ｍを測る。柱穴はいずれも平面円形で、規模は径58・61㎝、深さ33・50㎝を測る。柱穴の埋土は締まった粘質土塊の堆積が認められ、柱穴１の柱痕部には炭・焼土の混入が確認されたが、当建物が火災を受けた可能性は低い。

遺物は高杯412および甕413が出土している。412は斜め外方に延びる口縁に端部はわずかに肥厚し、端面に数条の凹



第55図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4，1/2）

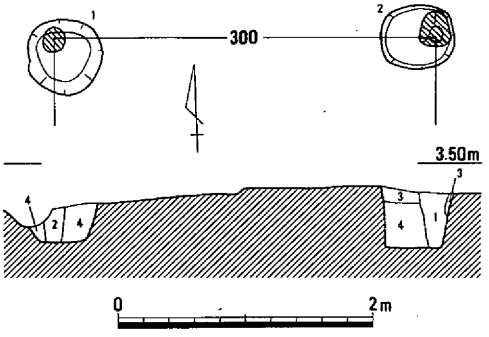
線痕跡を残す。413の底部は内面ヘラケズリにより薄く仕上げられている。形態的にやや古い様相を残すが、弥・後・Ⅰ初頭のものと思われる。（岡本）

建物２（第57図、図版５）

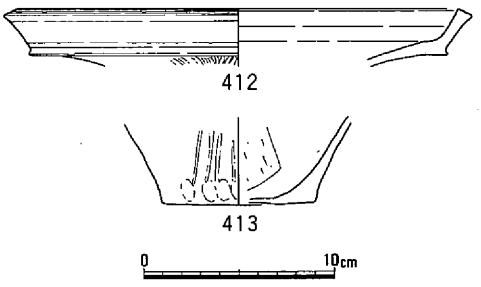
建物１の西方13ｍ、前述した竪穴住居１を一部切って検出された東西棟と推定される掘立柱建物である。建物は柱穴位置から南辺部と推定され、建物の大半は北側調査区外に延びる。東西方向2間で柱穴間距離は1.9ｍを測る。柱穴は平面円形を呈す。規模は径52～60㎝、深さ32～43㎝を測る。遺物は弥生土器細片が出土したのみである。（岡本）

溝１（第58図、図版５）

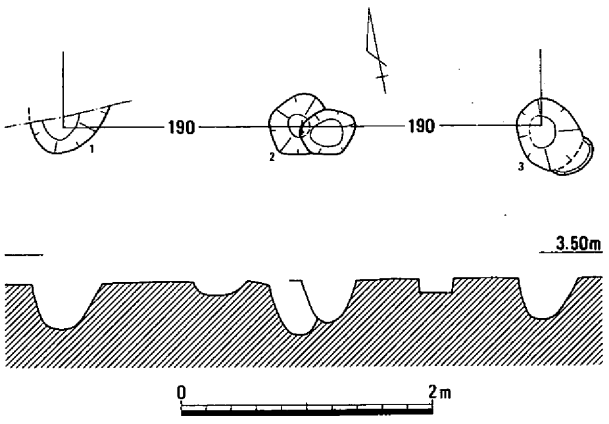
Ｅ１区の東端に位置し、河道１の下層から検出された北東から南西方向に流走する溝である。溝は幅約80㎝、深さ約50㎝を残す。断面「U」字状を呈す。溝は粘土塊混じりの埋め戻された状況が窺われ、遺物は下層から弥生土器らしき破片が出土しているが、時期決定できるものはない。後述する河道から弥生時代後期以前のものと思われる。（岡本）



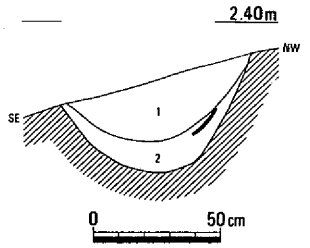
1　暗灰褐色粘質土（焼土・炭混）
2　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土
3　黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土
4　灰褐色粘質土斑黄褐色粘土（塊状混合）



第56図　建物１（1/60）・出土遺物（1/4）



第57図　建物２（1/60）

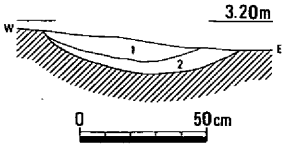


1　灰色粘土斑黄褐色粘質土
2　灰色粘質土
（炭粒・焼土塊を含む）

第58図　溝１（1/30）

溝２（第59図）

Ｅ１区の中央、建物１の東５ｍから検出された南北方向に流走する溝である。溝は幅が80～100㎝と北に広く、南方に向かいやや狭くなっている。深さ約15㎝、断面は皿状を呈す。溝１同様に埋め戻されたと理解され、上層からは土器片が比較的多く出土したが、時期決定には至らなかった。周辺の状況から弥生時代後期のものと理解している。（岡本）



1　黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
（炭粒・焼土塊・土器片を多く含む）
2　灰褐色粘質土斑黄褐色粘土

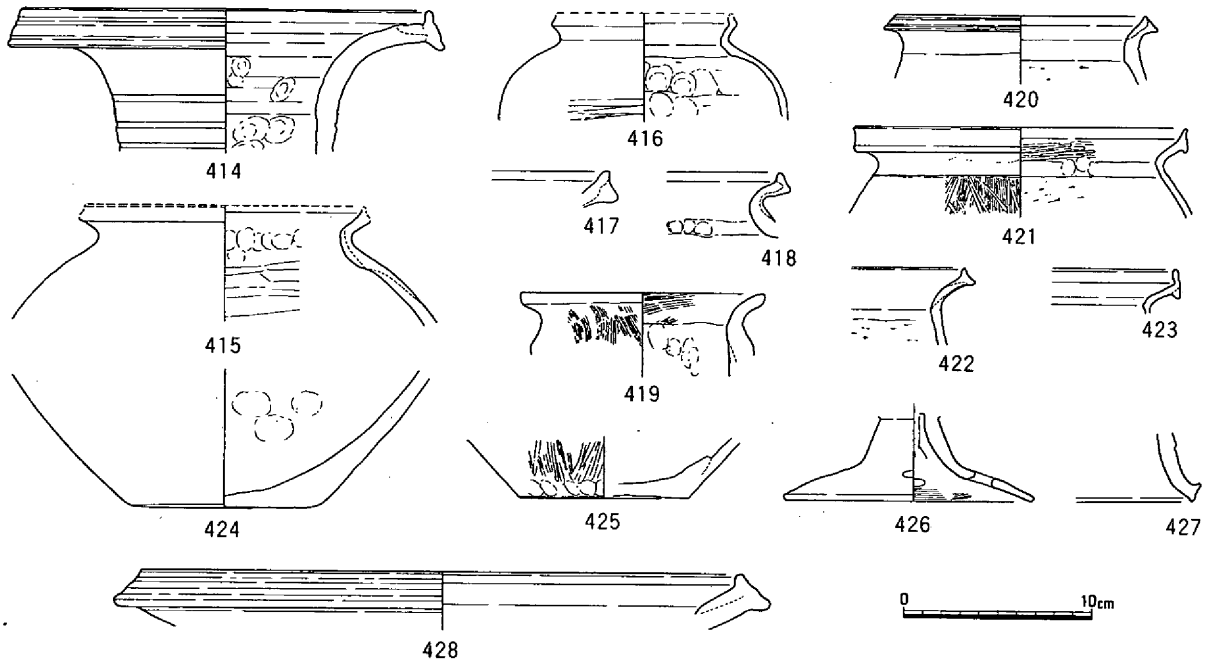
第59図　溝２（1/30）

河道１（第53・60～62図、図版5）

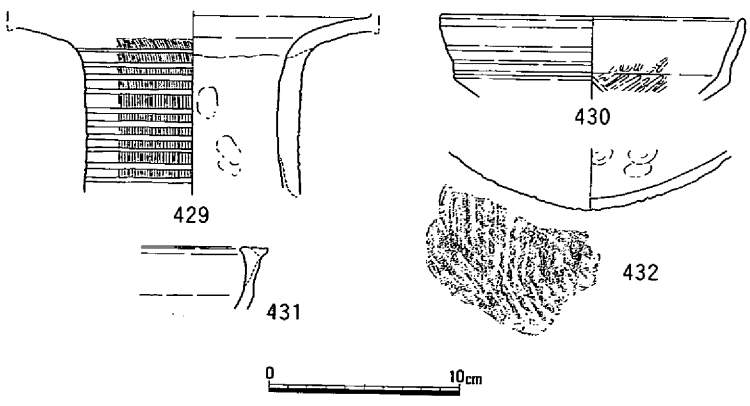
立田Ｅ１区の東端からＥ２区にかけて検出された、幅約８ｍ、深さ約2.2ｍの河道である。河道の堆積土は上層（28層）・下層（33層）に大別され、それぞれ褐灰色微砂・黄緑灰色粘性砂質土で、上層には土器片を数片、下層には炭粒・土器片を点々と認めた。

下層の土器はいずれも破片で、図示できるものも少ないが、長頸壺414や壺415～418・424・425、甕419～423、高杯426、器台428などが出土している。414・417・418・420・428などの口縁部は、端部を斜め上下方向にわずかに拡張または肥厚させる弥生後期の前半の特徴を示すが、421・423などのように口縁端部を上下に拡張させる甕や426のように脚柱部に短脚化の傾向が見られる後期中葉の特徴をもつ土器も混在する。

上層の土器も下層と同様断片的な小破片で、数も少ない。長頸壺429は口縁端部を一部欠くが、口唇部をわずかに上方に拡張させる中葉の時期と思われる。430は小形鉢または高杯の杯部片で、弥・後・Ⅳ期であろうか。431の高杯または鉢の口縁部片は弥・後・Ⅰ、432の甕底部は粗いタタキ目を施す後・Ⅳの時期であろう。



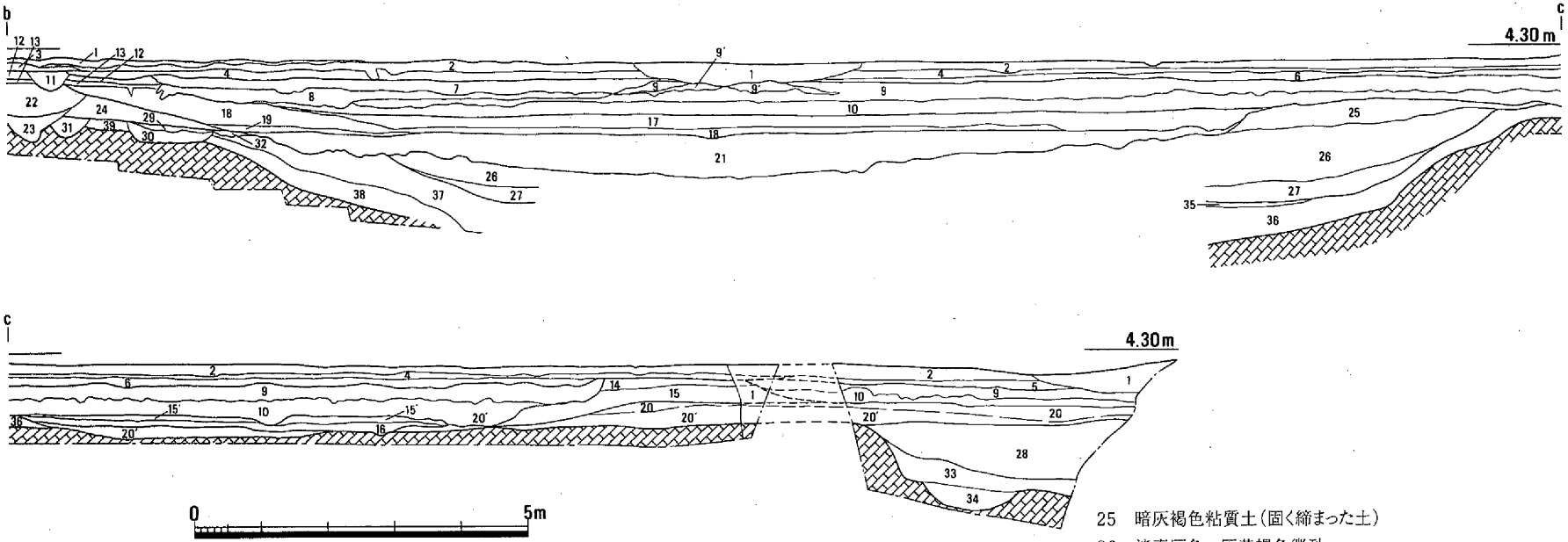
第60図　河道１下層（第33層）出土遺物（1/4）



第61図　河道１上層（第28層）出土遺物（1/4）

堆積土中の土器は、上・下層ともに多少の時期差をもつが、この河道が機能していた時期は、弥・後・Ⅰから弥・後・Ⅳにかけてとみて、大差はないであろう。

（岡本）

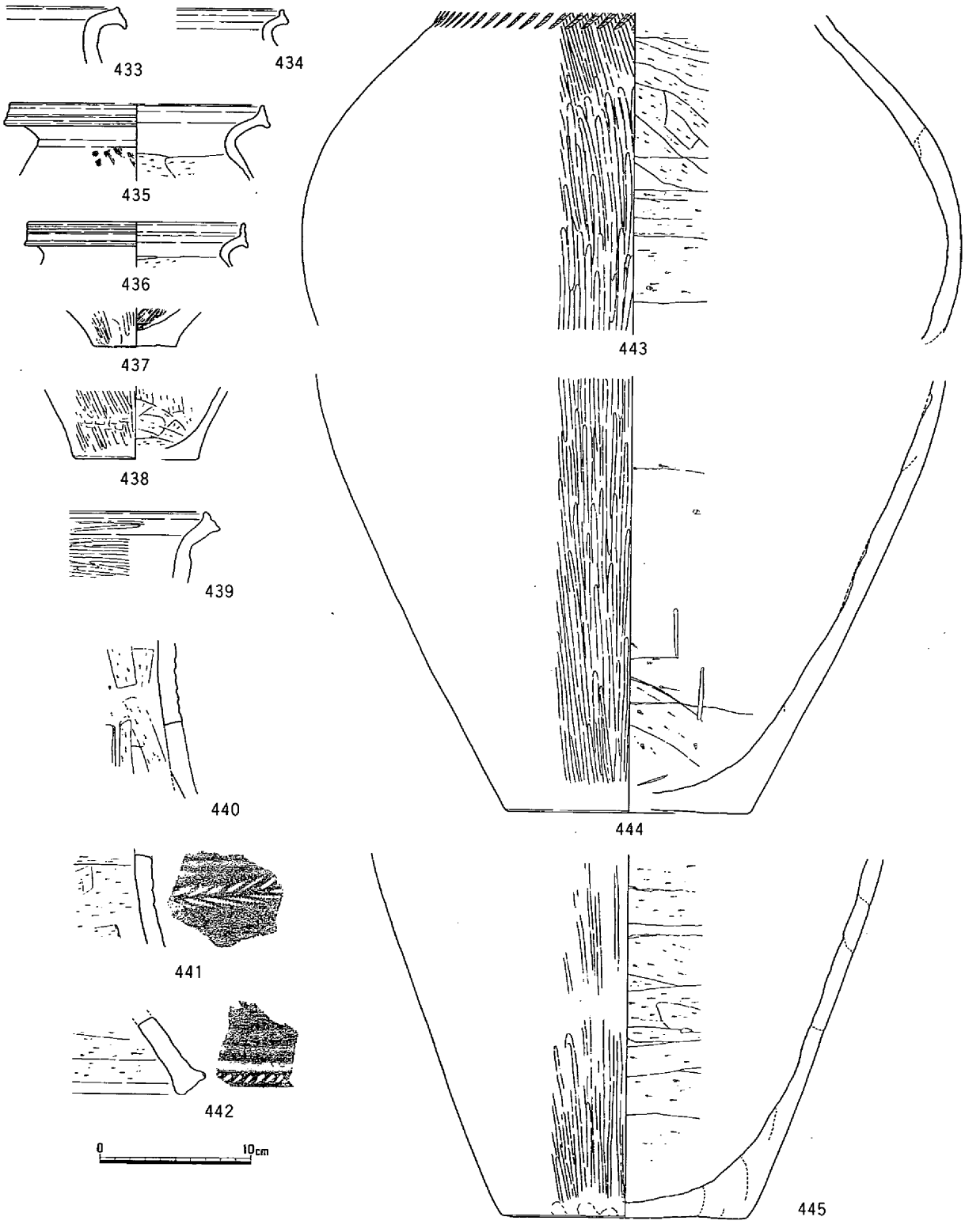


1 現代撹乱・盛土
2 灰色土(現耕土)
3 灰黄褐色砂質土(砂粒多)
4 褐灰色土(床土、上面斑鉄)
5 灰黄褐色土(砂粒大量、上面斑鉄)
6 灰黄褐色土(砂粒大量、上面斑鉄)
7 淡黄灰色砂(上半石粒含、上面斑鉄)
8 灰白色粘質土(砂粒大量)
9 淡灰褐色砂(洪水砂?、粗砂・細砂互層)
9' 淡灰褐色粗砂(土塊混)
10 灰色粘質土(中世包含層、落ち込み2埋土)
11 淡灰黄褐色粘質土
12 灰黄褐色粘質土(上面斑鉄)
13 淡褐灰色粘質土
14 淡黄褐色粘質土
15 淡灰褐色粘質土
15' 褐灰色粘質土(15の下層か、上面斑鉄)
16 褐灰色粘質土(柵1埋土、上面斑鉄)
17 褐灰色粘質土
18 淡灰褐色粘質土(古代包含層?)
19 灰黄褐色砂質土(粘質土塊混合)
20 暗灰褐色粘質土
20' 灰褐色粘性砂質土
21 暗灰褐色粘質土(古墳時代後期包含層)
22 暗灰褐色粘質土
23 黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土(炭粒若干、塊状混合土、溝3埋土)
24 暗灰褐色粘質土(炭・焼土点々、古墳時代包含層)
25 暗灰褐色粘質土(固く締まった土)
26 淡青灰色～灰黄褐色微砂
27 灰色粘性砂質土(粘質土・微砂互層、古墳時代前期包含層?)
28 褐灰色微砂
29 灰褐色粘質土
30 灰黄褐色粘質土(溝2埋土)
31 黄緑色粘質土斑褐灰色粘質土(炭粒若干)
32 暗灰褐色粘質土
33 黄緑灰色粘性砂質土(炭粒・土器片点々)
34 暗灰色粘性砂質土(溝1埋土)
35 暗灰色粘性砂質土(有機質多)
36 褐灰色～灰色粘性砂質土(粘性強、弥生後期包含層)
37 淡褐灰色粘質土
38 暗灰褐色粘質土斑緑灰褐色微砂(焼土・炭粒点々、地山との境界不明瞭)
39 灰褐色粘質土斑黄褐色粘土(漸移層、地山と同一層か)

第62図　立田E1区東半北壁(旧河道部分)土層断面図(1/100)

河道２（第53・62～64図、図版5、図版40）

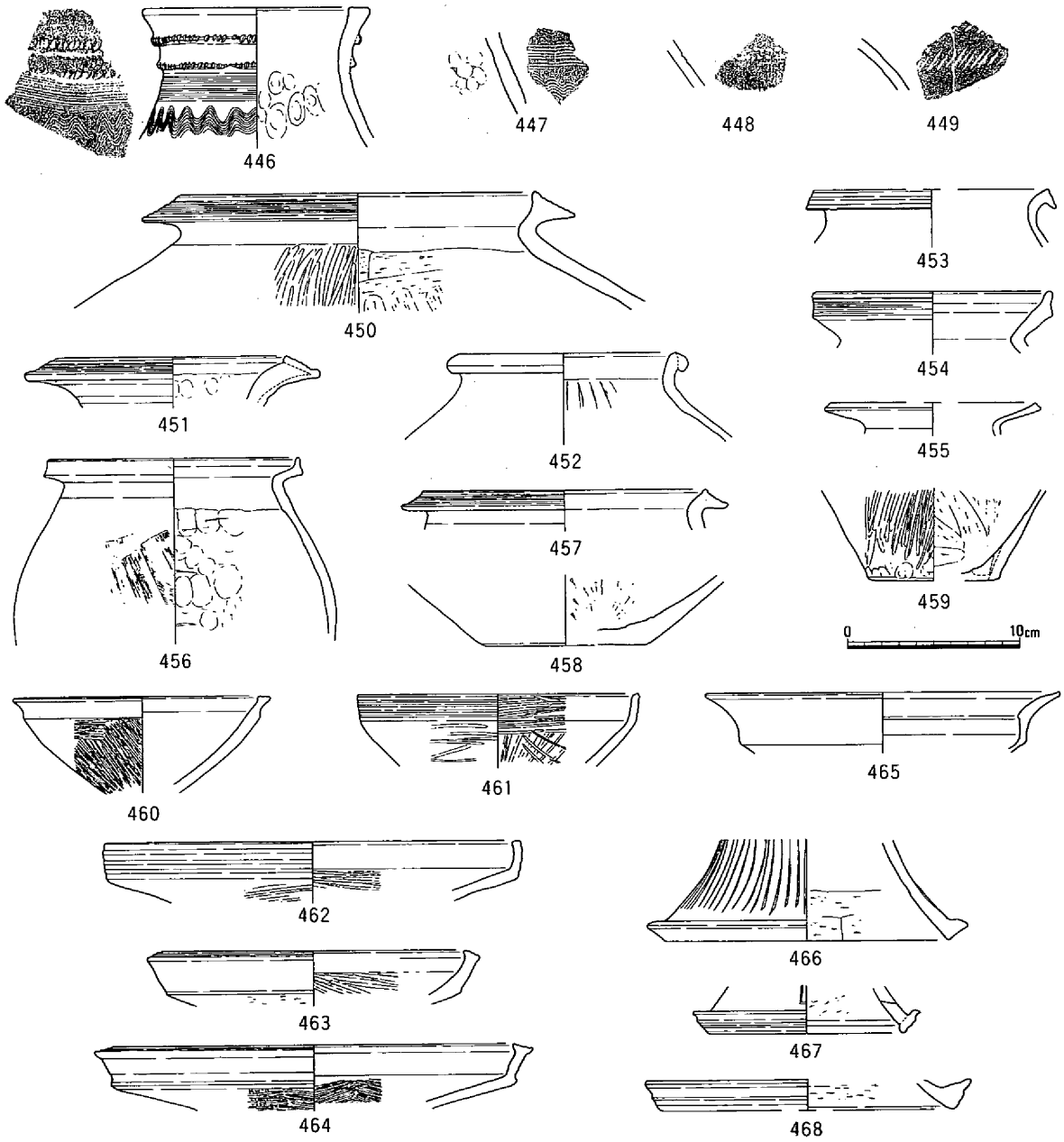
立田Ｅ１区の東寄りに、調査区にほぼ直交して検出された幅約20ｍ、深さ1.8ｍ以上の比較的大きな河道である。河道の中央部はきわめて深く、調査幅が狭くて、かなりの湧水があったため壁面の崩落が続き、底まで完掘できなかった。断面図のように堆積層は数層に分別され、河道の中心に向かって



第63図　河道２東斜面堆積出土遺物(1/4)

凸レンズ状に下がる自然堆積の状況が観察された。また、じょじょに埋まる過程で河道の幅も狭まっていった状況も看取される。そして、下層には弥生時代後期土器包含層があり、上層の第21層が古墳時代後期の包含層であることから、少なくともその間は河道として機能していたと思われる。その後、この河道の上部は、周辺の地形との絡みからすれば、中世までたわみ状の低位部となり、耕作地として利用されていたとみられる。

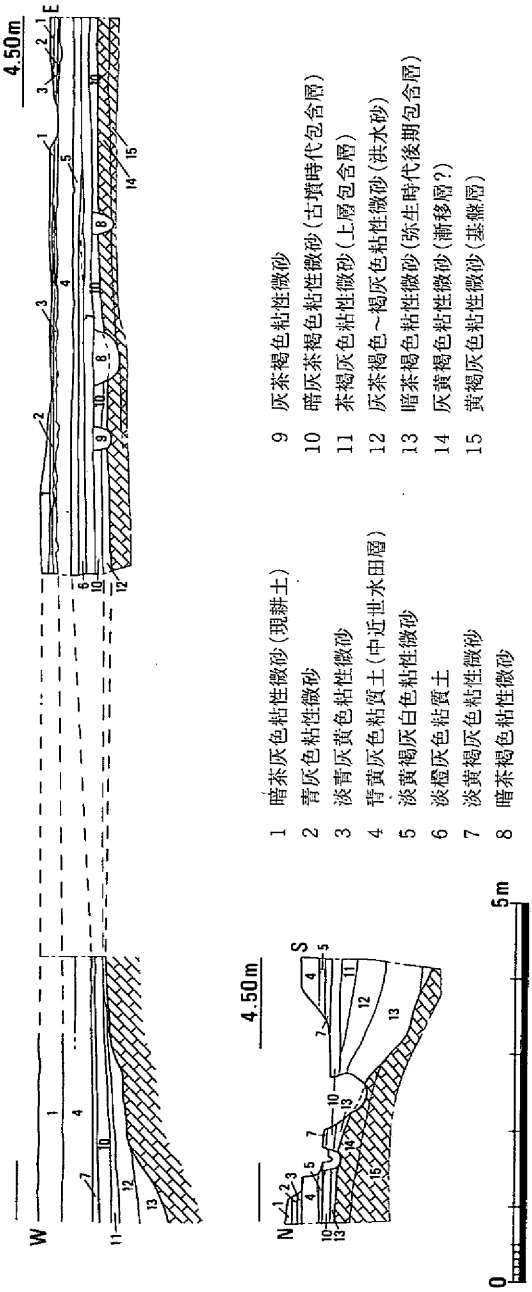
河道肩部の東側から底に向かう斜面に添って堆積したおもに第36層中の土器は、出土量はあまり多くないものの、第63図のように比較的大きな破片を含む。壺**433**、長頸壺**443**、甕**434**～**438**、鉢**439**、器台**440**～**442**などが図示できた。壺・甕の口縁端部は、わずかに内傾して斜め上方または下方に拡張または肥厚させていて、弥・後・Ⅱの様相をもつが、甕**436**のみ口縁端部を上方に拡張させた弥・後・Ⅲの特徴を示し、他に後出する。



第64図　河道２西斜面堆積出土遺物(1/4)

いっぽう、河道肩部の西側からの斜面堆積土の第37・38層中の土器は、第64図に示すように細かくは数時期に分別される。壺446～449は、頸部から肩部にかけて櫛描直線文と波状文、あるいは刺突文を巡らせる弥・中・Ⅱ、高杯462・467・468は内湾気味に立ち上がる口縁部の外面に4～5条の凹線を施すことや脚裾部の三角透かしが貫通するなどの特徴から、弥・中・Ⅲとみてよい。また、口縁部が玉縁状を呈する壺452もこの時期に近いのかも知れない。そのほか、壺450・451、甕453・457、鉢460、高杯463・464・466などは、それぞれ口縁端部の特徴などから弥・後・Ⅰ、高杯465が弥・後・Ⅱの古相、甕456・454と水漉し粘土の高杯または鉢461は弥・後・Ⅲの時期と見られる。

以上のことから、河道２の存続期間は中期末から後期の中葉くらいまでで一旦埋まり、その後さらに小規模になって古墳時代前・後期を経て、中世までに窪み程度になったと思われる。　（岡本）



第65図　立田W１区東・西北壁（上）、W１区西東壁（下）土層断面図（1/100）

微高地西斜面（第53・65・66図、図版40）

立田Ｅ１区の西端からさらに西へ約40ｍ離れた立田Ｗ１区西の東端で、南西方向に下がる弥生期の微高地の斜面が確認された。

堆積土は最下層に暗茶褐色粘性微砂の弥生時代後期包含層、中層に灰茶褐色～褐灰色粘性微砂の洪水砂、上層に茶褐色粘性微砂の包含層が形成されており、その上部は古墳時代の包含層である暗灰茶褐色粘性微砂が約20cmの厚さで水平に堆積していた。

つまり、この河道の肩部付近は弥生時代後期から古墳時代後期までに埋まってしまい、古墳時代後期の水平堆積が少なくとも西へ40ｍほど続く状況を加味すれば、古墳時代になって急激に微高地の核が広がったことが看取される。なお、弥生時代後期の時点では、さらに西の加茂政所遺跡の微高地までのおよそ200ｍ間は、大きな河道または低位部であったと見られる。

斜面堆積土第13層中の土器は、おもに弥・後・Ⅲ期の土器片が多少出土しているが、調査途中の側壁崩壊や湧き水のため十分には採集しきれていない。第12層中の土器は、第66図に示すように長頸壺469・470、鉢471、甕473～477、高杯478などがあるが、３～４時期にわたっている。古い方からいえば、ジョッキ形の472は弥・中・Ⅱ、470・471・473・474が弥・後・Ⅱ、469・476・477が弥・後・Ⅲ、475が弥・後・Ⅳ、478が古・前・

Ⅰの時期と見られる。**478**は土層関係から、第11層または第10層からの混入の可能性が高く、第12層が埋まった洪水の時期が弥・後・Ⅳであり、それより古い土器は周辺からの混入であろう。　（岡本）

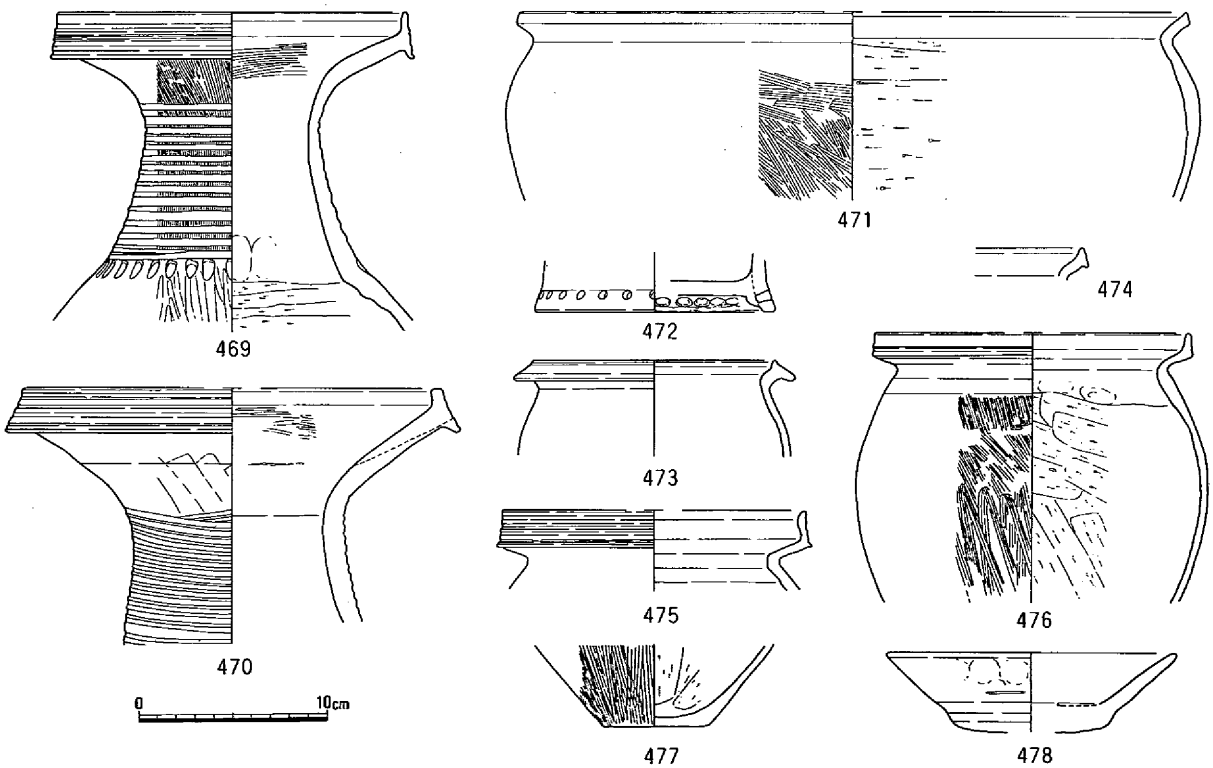
その他の遺物（第67図、図版40・41）

この項では、遺構に混入あるいは側溝や包含層掘り下げ時に出土した土器・石器をとりあげた。

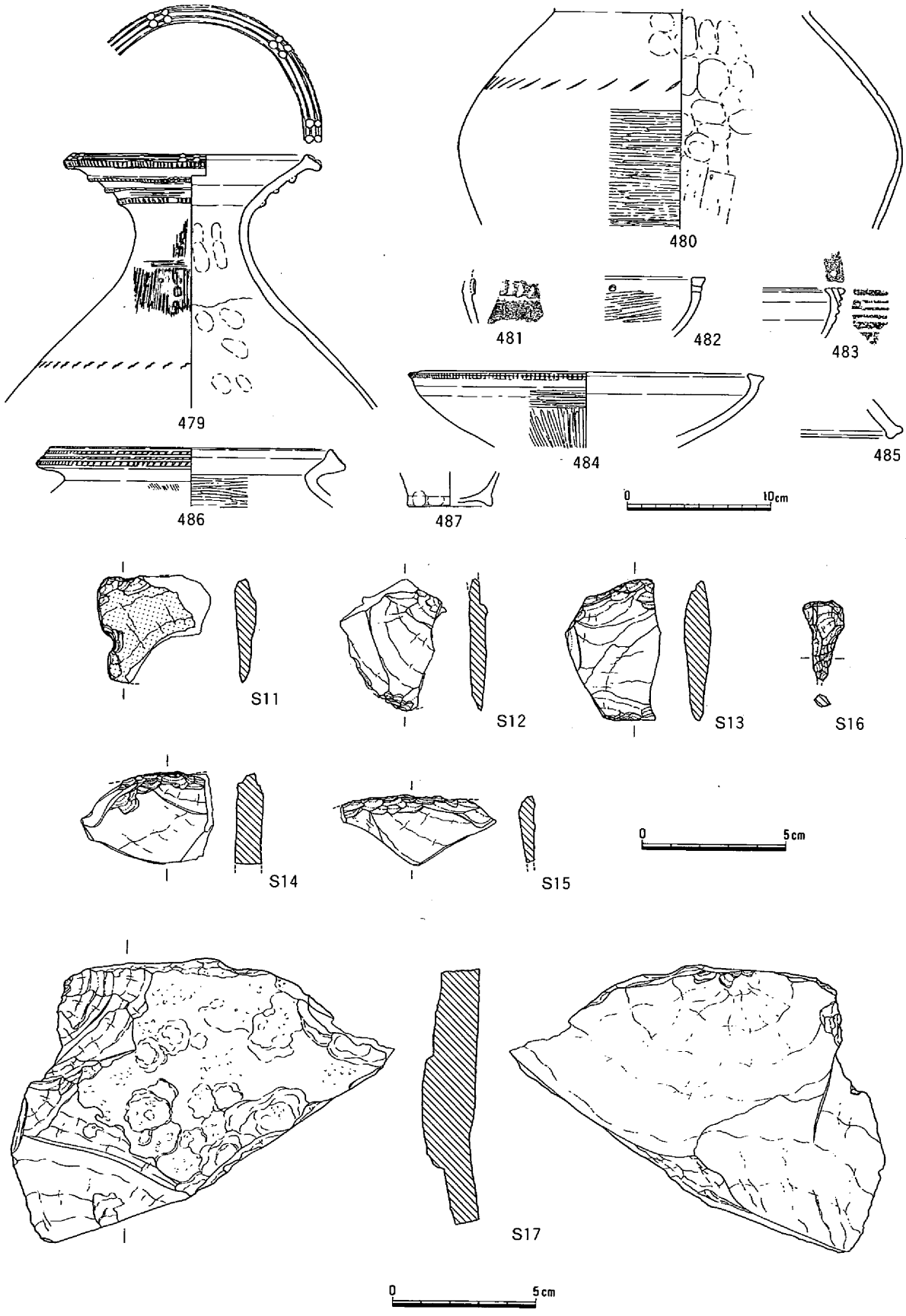
土器：壺**479**は立田Ｃ区の側溝から出土したもので、やや細めの頸部から漏斗状に開く口縁部をもち、口縁端部は斜め上下に肥厚させ、端面には２条の凹線を巡らせた上に小ぶりな円形浮文を４個一対で推定６カ所に施文している。また、口縁部外面には３条の突帯を巡らせ、口縁端突部とともに突頂部に刻目を施し、肩部には貝殻腹縁によると見られる刺突文を巡らせている。壺**480**・甕底部**487**は立田Ｅ１区の側溝、頸部に押圧突帯をもつ壺**481**は立田Ｗ１区の小柱穴、鉢**483**・甕**486**は立田Ｅ１区の包含層、鉢**482**、高杯**484**・**485**は立田Ｅ１区の古墳時代の竪穴住居３の埋土中の出土である。鉢**482**・**483**の口縁端部はわずかに肥厚させ、**482**は口縁下に**483**は口縁端面から口縁下外面へ向けてそれぞれ穿孔をもつ。また、**483**は口縁部外面に５条の凹線を巡らせ、**484**の口縁端部に刻目、**486**の口縁端面には３条の凹線の上に刻線を施すなど、特徴的である。

以上、それぞれ多少の時期差は認められるものの、これらの土器は弥・中・Ⅱの範疇とみてよい。

石器：いずれもサヌカイト製の石器あるいは石核である。石包丁**S11**は、立田Ｃ区の古墳時代の竪穴住居７の覆土から出土している。大半を破損しているが、器表にはケイ酸によるスレが認められる。**S12～S15**は、それぞれ立田Ｅ１区竪穴住居３・Ｗ１区包含層・Ｅ１区包含層・Ｃ区側溝からの出土で、スクレイパーあるいは石包丁の破片であろうか。**S16**の石錐は、立田Ｅ１区の小柱穴からの出土で、ほぼ完形である。図の左側の刃部に摩滅痕が顕著である。**S17**は立田Ｅ１区の基盤層出土の石核である。当微高地出土の古い時期を示す土器よりも、古く遡る可能性もある。　（岡本）

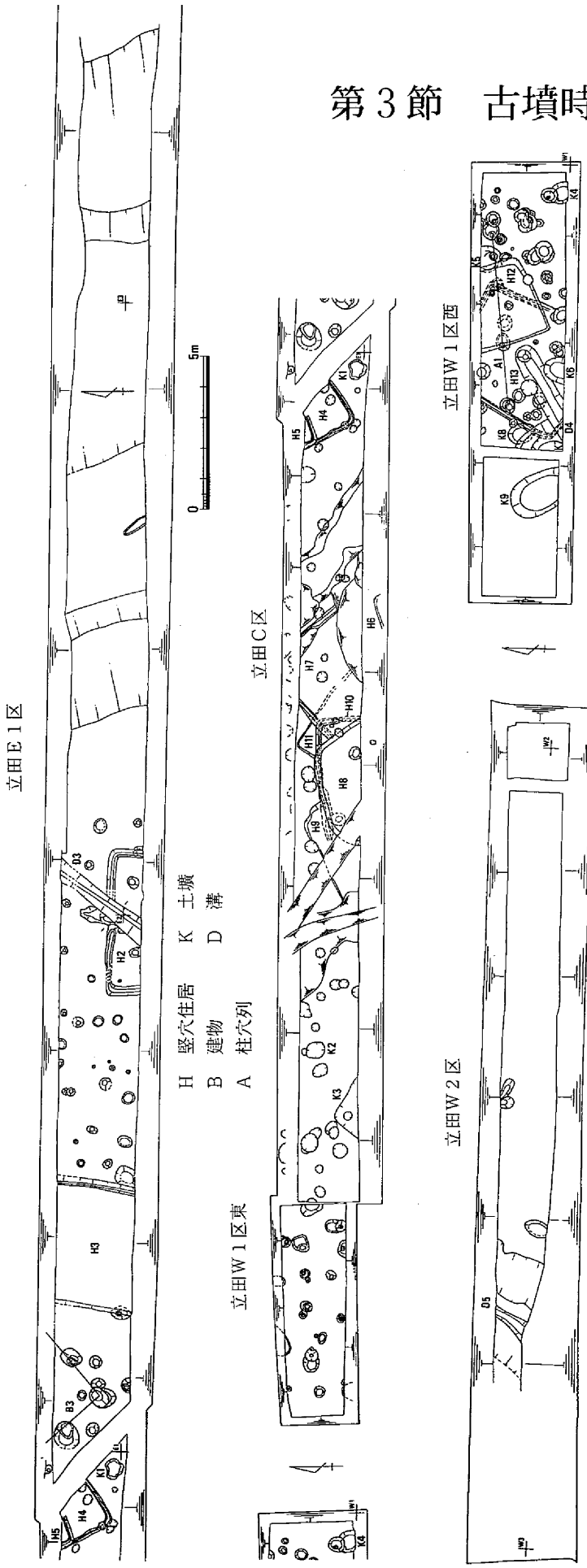


第66図　立田Ｗ１区西微高地斜面洪水砂層（第12層）出土遺物（1/4）



第67図　高松原古才遺跡出土弥生時代遺物（1/4，1/2）

第３節　古墳時代の遺構と遺物



第68図　高松原古才遺跡古墳時代遺構配置図（1/200）

１　遺構配置

古墳時代の高松原古才遺跡は、きわめて遺構の密度が高く、それも竪穴住居の重複が頻繁にみられた。このことから、今回の調査区は集落の中心部を通っていたことが知られる。遺跡の東端にあたる立田Ｅ１区の東半には弥生時代の河道が埋没してできた低位部があって、これが古墳時代の高松原古才遺跡の東限と考えられる。いっぽう、弥生時代の微高地の端部から西斜面が検出された立田Ｗ１区西では、古墳時代には遺構が密集し、微高地面の西への拡張が認められた。立田Ｗ２区の西端に至っても古墳時代の遺構が検出されたが、その検出面は海抜2.0～2.2ｍ前後で、立田Ｗ１区西の検出面の海抜2.6～3.2ｍよりはかなり低く、立田Ｗ１区西と立田Ｗ２区との間に古墳時代の微高地端部が存在すると想定される。

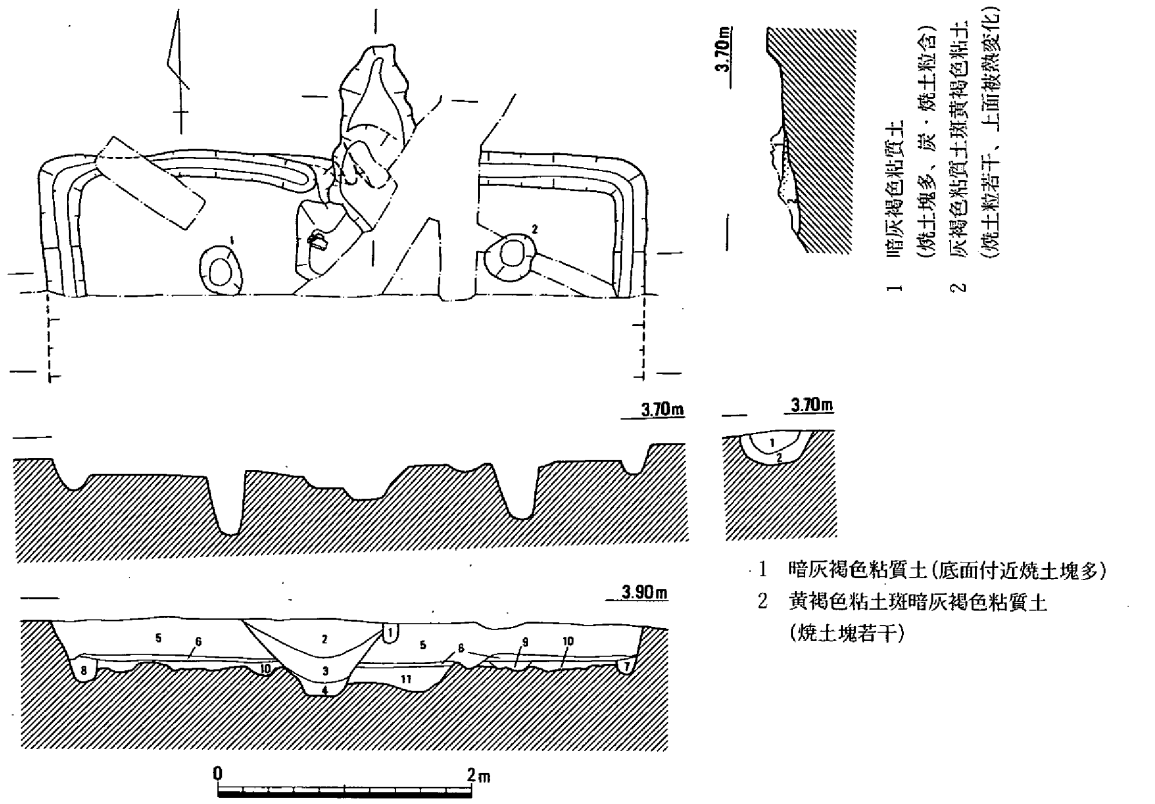
高松原古才遺跡において検出された遺構は、竪穴住居12軒、掘立柱建物１棟、柱穴列１列、土壙９基、溝３条である。立田Ｗ２区の西端で検出された溝１条以外はすべて微高地上で検出された。竪穴住居は調査区内で偏在した在り方を示し、立田Ｅ１区の西端から立田Ｃ区の中央部にかけて８軒が、立田Ｗ１区

西で２軒が重複し、建物や柱穴列もここに位置していた。立田Ｅ１区西半の２軒の竪穴住居は６ｍ程離れていた。微高地上では主要な遺構以外に多数の柱穴も検出された。　（岡本）

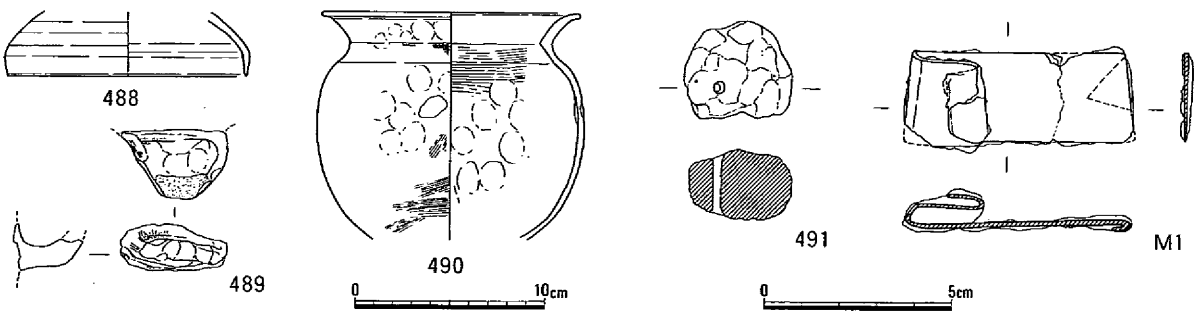
2　遺構・遺物

竪穴住居２（第69図、図版6・40・41）

立田Ｅ１区の西半で検出された。旧河道が埋没した低位部の肩から4.5ｍ西に位置していた。また、西の竪穴住居３とは６ｍ離れていた。調査区の南端で全体の１／４が検出されたにすぎないが、検出



1　淡黄褐色粘質土
2　灰褐色粘質土
3　灰褐色粘質土（焼土塊多）
4　明灰褐色粘質土
5　黄灰色土斑灰褐色粘質土
6　灰色粘土斑黄褐色粘質土（貼床層）
7　暗灰黄褐色粘質土
8　暗黄褐色粘質土
9　黄褐色粘質土
10　灰黄褐色粘質土（整地層?）
11　黄褐色粘質土



第69図　竪穴住居２（1/60）・出土遺物（1/4，1/2）

された北辺と調査区がほぼ平行していたため、全体の形状や規模は推定が可能で、また、柱穴も北側列が検出された。ただ、検出部分の中央部を溝3が破壊していたため、残存状況は良好とはいえない。

住居の平面形は隅丸の方形を呈し、北辺の長さは438cmを測った。北辺の方向はほぼ東西である。北辺の中央にカマドが設けられていた。カマドは溝3によって破壊を受けていたが、焚き口の幅は80cm前後と推定される。燃焼部には被熱によって赤変した底面が残されていた。この底面や住居の貼床を除去すると、燃焼部からカマドの前面にかけて連接した2基の土壙が検出された。土壙の深さは20cm前後と浅く、南の土壙からは土器片や鉄滓が出土した。竪穴の周縁には幅25～30cmの壁体溝が巡らされ、床面からの深さは13cmであった。柱穴の長径は42cm、深さが45・51cmを測った。柱穴間の距離は心々で230cmだった。調査区南壁の土層断面を観察すると、竪穴住居の底は凹凸がみられ、それを灰黄褐色粘質土を入れて整地し、その上に貼床をしていた。

出土遺物には土器と土製品、鉄器がある。**488**は須恵器の蓋である。**489**は土師器のコシキの把手、**490**は土師器の甕である。**490**はカマドの前面の土壙から出土し、胴部の上半に押圧によったような小さな窪みがみられた。**491**は焼土塊のように見えるが、穿孔があり、紡錘車のような土製品であろうか。**M1**も床面から出土した。鉄板の端を折り曲げている。鍬のようなものであろうか。図の右端は外へ折られ、器種に疑問もある。

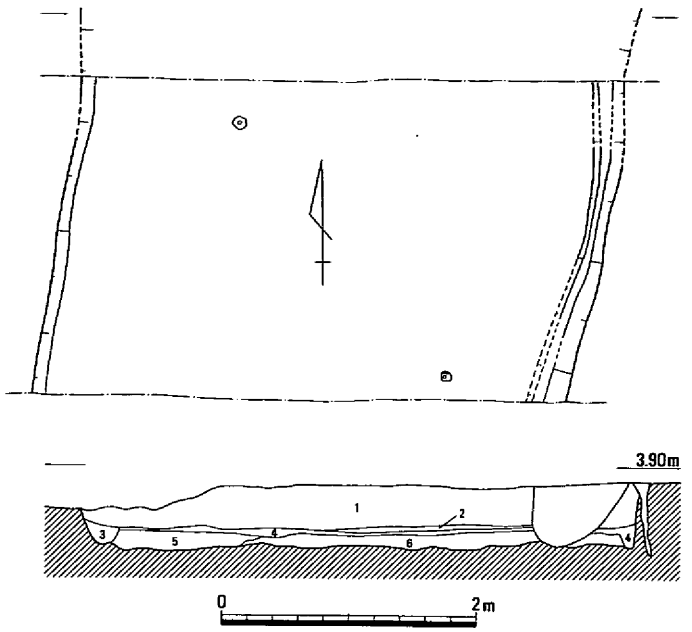
竪穴住居２の年代は出土遺物から判断して７世紀前半と考えられる。（岡本）

竪穴住居３（第70図、図版6・40・41）

立田Ｅ１区の西端で検出された。すぐ西には建物３があり、これと重複している可能性がある。ちょうど住居の中央付近が検出されたためか、柱穴やカマドは確認できず、南北辺も調査区外に位置する。検出されたのは東西辺の一部であるが、ほぼ直線的で平行していることから、竪穴住居の平面形は方形と推測される。東辺と西辺の距離は415cmを測った。東辺では幅24cmの壁体溝を検出したが、西辺では良好に検出できなかった。ただ、調査区北壁の土層断面によれば、西辺にも壁体溝が存在している。竪穴の深さは42cmを測った。調査区北壁の土層断面を観察すると、竪穴の底はかなり凸凹していた。そこへ粘質土を敷いて整地し、その上に貼床を行っていた。これは竪穴住居2と同様の作りである。竪穴住居2の柱間から考えれば、柱穴が検出されてもいいが、床面を下げて検出を試みたが見つからなかった。あるいは長方形の平面形をもつものであろうか。住居の埋土はほとんど第1層で占められていた。この層には炭の大粒や焼土の小塊が点々と含まれていた。一気に埋められたものであろうか。

出土遺物がかなりみられた。土器では**492**～**498**が須恵器、**499**～**503**が土師器である。**492**は杯で、**494**は蓋、**495**～**498**は高杯である。**493**も高杯の可能性がある。**498**は床面出土で、遺構平面図の下の土器である。**499**と**500**は同一個体のものとみられる。カマドの破片である。底では縦位の突帯が突出し、その底面に穿孔がみられる。体部の側面には把手の剥離痕跡が認められる。**501**と**502**は杯とみられる。口縁部はヨコナデ調整、体部はナデとオサエで調整される。**503**は甕の口縁部で、口縁端部は内湾させる。**M2**は方頭式の鉄鏃と考えられる。残存長が71㎜、最大幅は27.5㎜、厚さ3㎜、重さ7.7ｇを測る。**G1**はガラス製の丸玉で、直径7.04㎜、厚さ4.84㎜、重さ0.3ｇを測り、色調は深みのある青色をしている。図示した出土遺物の中で、床面出土は**498**のみで、他は埋土出土である。

竪穴住居3の年代であるが、床面から出土した**498**を重視すれば、７世紀の前葉を中心とした頃と考えるのが適当と思われる。（岡本）



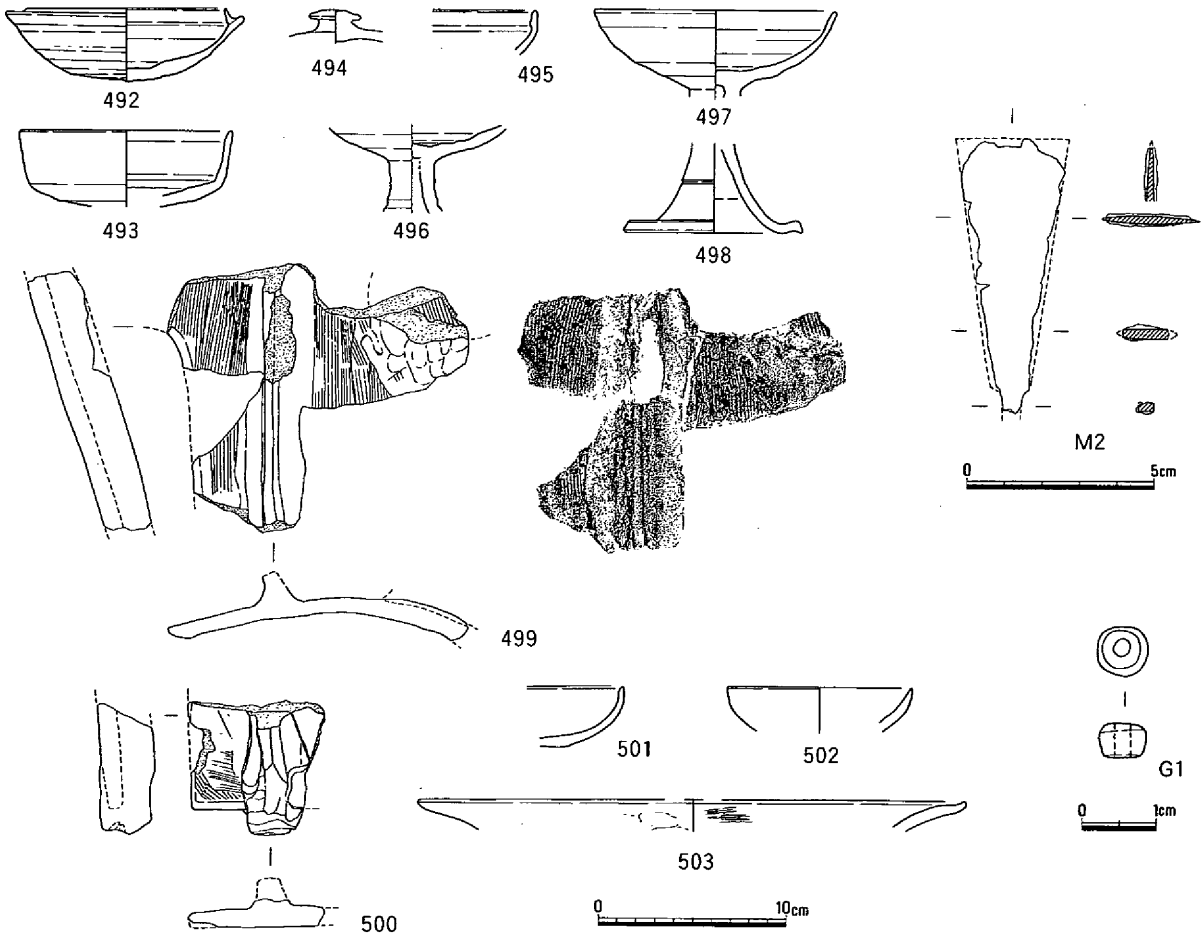
1　暗灰褐色粘質土
（炭大粒、焼土塊を散見）
2　炭・焼土斑暗灰褐色粘質土
3　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土
4　暗灰褐色粘土斑黄褐色粘質土（貼床層）
5　黄褐色粘土斑灰褐色粘質土
（炭・焼土若干含む）
6　灰褐色粘土斑黄褐色粘質土

竪穴住居４（第71図、図版６）

立田Ｃ区の東端部において検出された竪穴住居である。検出面では、隅丸方形を呈すると推定されるが、北半は竪穴住居5に切られ、東側は後世の撹乱を受けているため、規模などは不明である。床面までは5cm程であるが、周囲に幅10cm・深さ10cm程の壁体溝が巡っている。覆土は暗灰黄色粘性微砂が一層である。出土遺物は鉄滓のみで、時期は判然としない。検出状況から古墳時代後期に比定される。　（内藤）

竪穴住居５（第72図、図版６）

立田Ｃ区の東端部、竪穴住居４の北部において、遺構南端の一部のみ



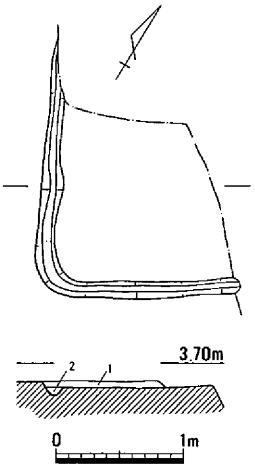
第70図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物（1/4，1/2，1/1）

が検出できた竪穴住居で、大半は調査区外におよんでいる。規模などは不明であるが、床面まで15cm程を測り、壁面に沿い幅15cm・深さ5cm程の壁体溝が巡っている。隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すると推定される。覆土は暗灰黄色粘質土が１層である。土器などの出土がなく、時期は判然としないが、７世紀頃に比定される。　（内藤）

竪穴住居６（第73図）

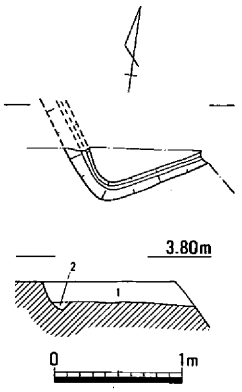
立田Ｃ区東部の南壁において、遺構北端の一部のみを検出したものである。大半が調査区外のため、規模などはまったく不明である。床面までもわずか5cmを測るのみで、覆土は暗灰黄色粘質土が１層である。

土器が出土しているものの細片で、時期などは判然としない。検出状況などから古墳時代後期頃と推定される。　（内藤）



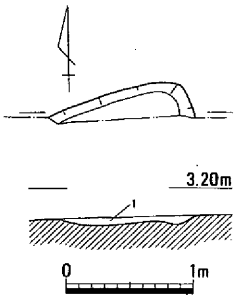
1　暗灰黄色粘性微砂
2　黄灰色粘性微砂

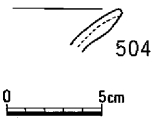
第71図　竪穴住居４（1/60）



1　暗灰黄色粘質土
2　オリーブ褐色粘質土

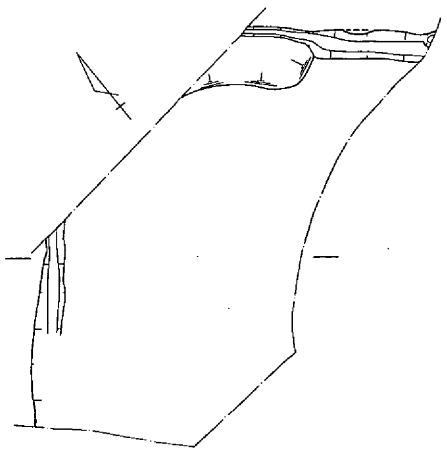
第72図　竪穴住居５（1/60）



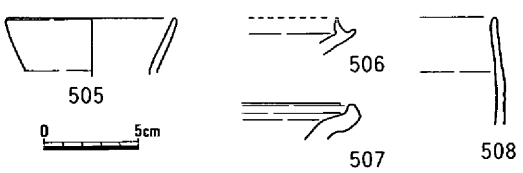


1　暗灰黄色粘質土

第73図　竪穴住居６（1/60）・出土遺物（1/4）



1　黒褐色粘質土
2　暗灰黄色粘質土



第74図　竪穴住居７（1/60）・出土遺物（1/4）

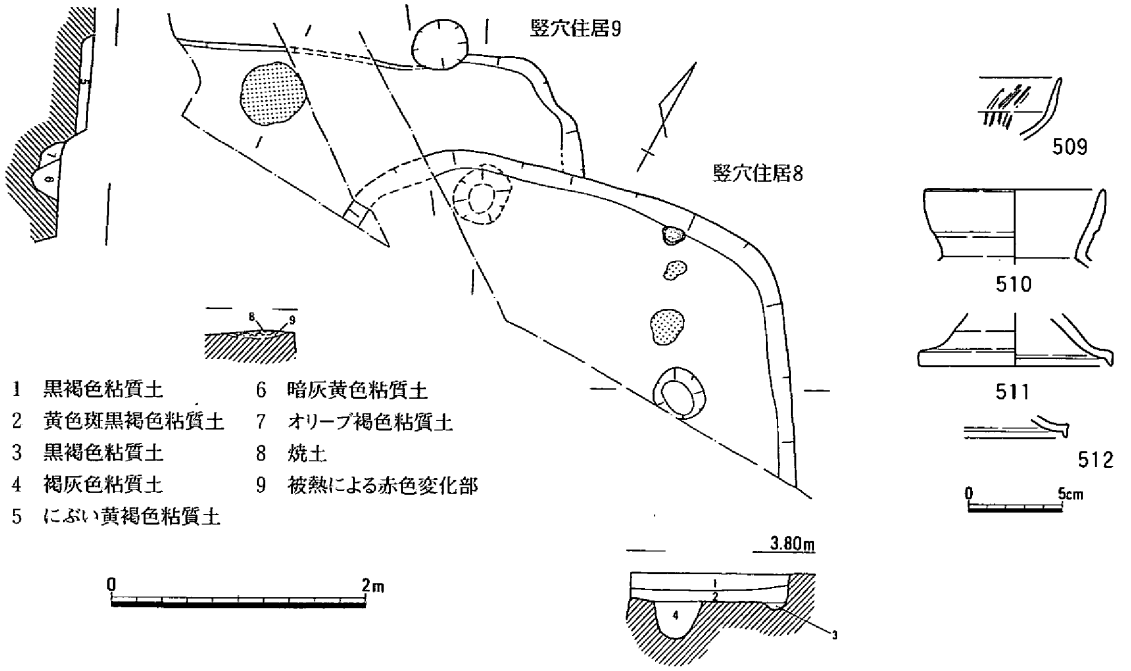
竪穴住居７（第74図、図版７）

立田Ｃ区の中央やや東寄りにおいて検出された竪穴住居である。北角は調査区外で、西部は竪穴住居８に切られ、南東部なども後世の削平を受けており、検出できた部分はそれほど多くない。検出面から床面まで12cmを測り、床面は平坦である。壁面に添って、幅20cm・深さ８cm程の壁体溝が廻り、平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すると推定される。覆土は、黒褐色粘質土が１層である。

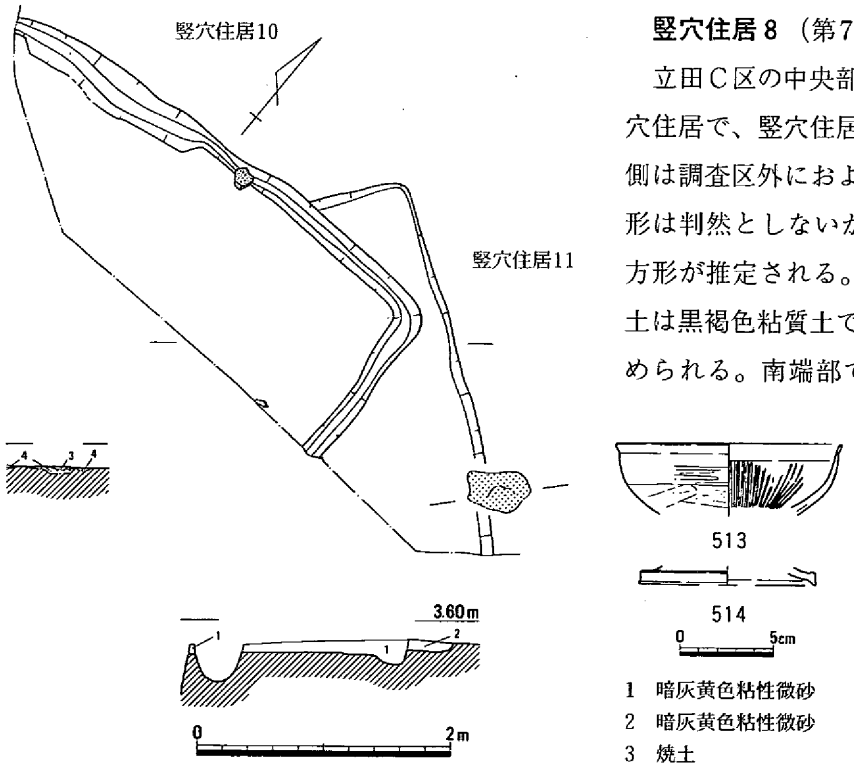
出土遺物としては、須恵器片などのほか製塩土器や焼土塊が認められる。505は口縁が「ハ」の字状に開く壺、506は杯身の口縁部片、507

は壺の口縁部片である。また、508は製塩土器の口縁部片である。

時期は、出土遺物などから７世紀前半と考えられる。　（内藤）



第75図　竪穴住居８(1/60)・出土遺物(1/4)、竪穴住居９(1/60)



第76図　竪穴住居10(1/60)・出土遺物(1/4)、竪穴住居11(1/60)

竪穴住居８（第75図、図版７）

立田Ｃ区の中央部南半において検出された竪穴住居で、竪穴住居７・９などを切っている。南側は調査区外におよんでいるため、全体の平面形は判然としないが、１辺3.5～４m程の隅丸方形が推定される。床面までは25cmを測り、覆土は黒褐色粘質土で、下層には黄色の斑点が認められる。南端部で、径30cm・深さ30cm程の柱穴が１本検出されている。柱穴の埋土は、褐灰色粘質土である。

覆土からは、須恵器などの土器片のほか、鉄滓が出土している。**509**は高杯の口縁部、**510**は壺の口縁部である。また、**511**・**512**は高杯の脚裾部片である。

時期は、出土遺物などから、７世紀前半と考えられる。（内藤）

竪穴住居９（第75図、図版７）

立田Ｃ区の中央部において検出された竪穴住居で、竪穴住居８に切られている。また、南部は調査区外におよんでいるため、全体の平面形は判然としない。床面までは10cmを測るのみで、床面は平坦である。検出された床面西部で径50cm程の焼土面が確認された。また、北東角の壁から50cm程内側において、竪穴住居８の床面下から径45cm程の柱穴が確認された。覆土は、にぶい黄褐色粘質土が１層である。覆土中から鉄滓が出土している。時期は７世紀前半頃と推定される。（内藤）

竪穴住居10（第76図、図版７）

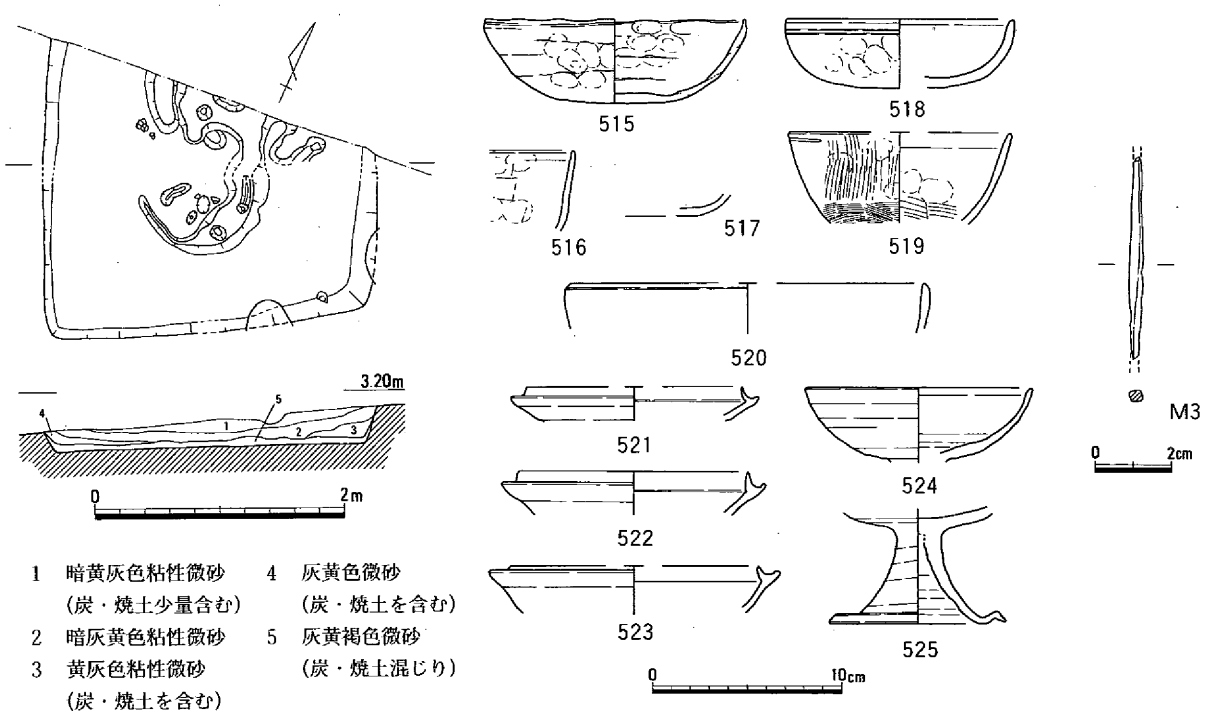
立田Ｃ区の中央部において検出された竪穴住居で、上面をほとんど竪穴住居８に切られている。また、南部は調査区外におよんでいるため、全体の平面形は判然としない。床面までは10cmを測るのみであるが、床面は平坦である。壁面に添って幅15cm・深さ５cm程の壁体溝が廻っている。覆土は、暗灰黄色粘性微砂が１層である。出土遺物としては、土器片が若干出土している。**513**は土師器の杯、**514**は須恵器の高杯である。時期は、出土遺物などから７世紀前半と推定される。（内藤）

竪穴住居11（第76図、図版７）

立田Ｃ区の中央部において検出された竪穴住居であるが、ほとんど竪穴住居10などに切られ、遺存しているのは、北東辺の一部のみである。床面までは７cmを測るのみであるが、床面は平坦である。覆土は暗灰黄色粘性微砂が１層である。北東辺の中央付近でカマドの残痕とみられる焼土面が確認されている。時期は、検出状況などから７世紀初め頃と推定される。（内藤）

竪穴住居12（第77図、図版７・40・41）

立田Ｗ１区西の中央寄りに位置し、北側は調査区外に延びる。その平面形は方形を呈するものと考



第77図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物（1/4，1/2）

えられ、計測可能な東西長は270cmを測る。もっとも遺存の良い部分での検出面からの深さは23cmである。床面は、灰黄褐色微砂（第77図第５層）を3～6.5cmの厚さで貼床とするが、住居の中央付近で不定形に盛り上がったり、浅く窪むような凹凸をもつ。検出した範囲の床面上は、この貼床の凹凸以外に顕著な施設はない。また、貼床をはずした面でも柱穴は確認できなかった。この面の標高は海抜280cm前後を測る。小規模な竪穴住居か、作業小屋のような施設かも知れない。

出土遺物には、土師器・須恵器・鉄器のほか鉄滓がある。図示した遺物は、**516～518・524**が貼床面直上、**521・522**が貼床内からの出土で、その他は床面から遊離しての出土である。

515～519は土師器の杯である。**515**は内外面に粘土紐の接合と押圧痕がみられる。口縁端部を薄く仕上げ、外面に沈線を施す。**516**と**517**は同一個体の可能性が強い。**518**は口縁直下の外面に細い沈線を２条巡らす。**519**は内外面押圧後、杯部外面に縦方向のハケ、内面にナデを施す。底部付近は内外面とも横方向のハケである。また、口縁直下の外面には一部に沈線を施す。

521～523は須恵器の杯身で、短く内傾する立ち上がりをもつ。**524・525**は高杯である。

Ｍ３は断面矩形の鉄片で、釘か錐になるものと考えられる。

以上のことから、住居の時期は７世紀前半と考えられる。　（岡本）

竪穴住居13（第78図）

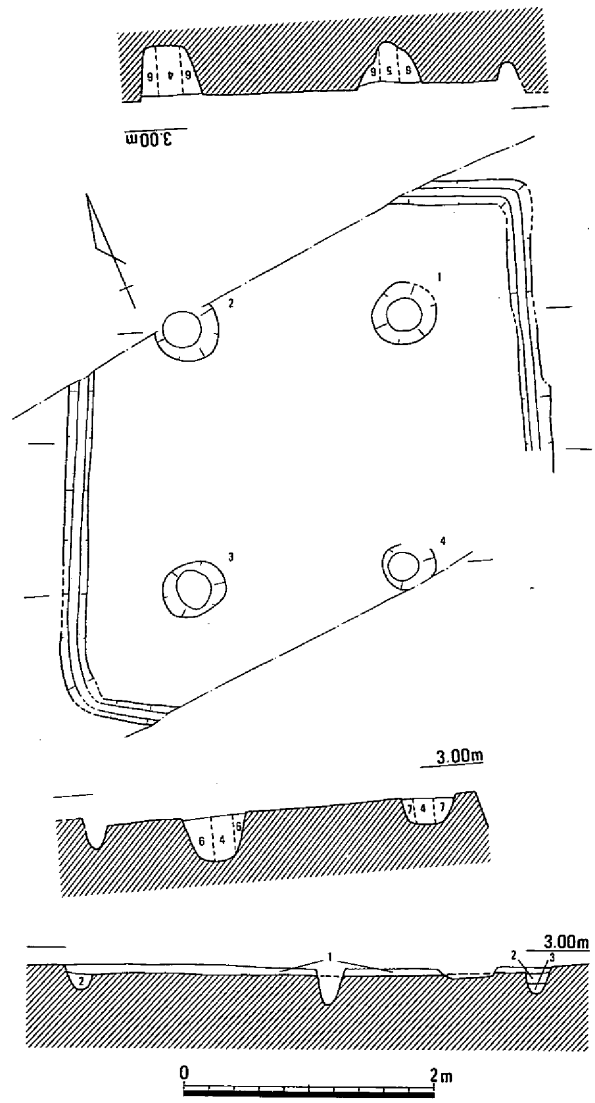
立田Ｗ１区西のほぼ中央に位置する竪穴住居で、北と南の隅は調査区外となる。また、西隅上部を先述の竪穴住居12に切られる。平面形は長方形を呈すると考えられ、東西長は3.85ｍを測り、南北長は約4.5ｍと推定される。検出面からの深さは、約７cmを測るに過ぎない。

主柱穴は４本で、ほぼ円形の掘り方をもつ。その規模は柱穴４が径43cm、深さ20cmとやや小振りなのに対し、他の３本は径50cm、深さ40cm前後を測る。柱間は柱穴１－２で180cm、柱穴３－４で170cm、柱穴１－４と柱穴２－３でいずれも200cmを測る。

出土遺物はないが、検出状況から住居の時期は古墳時代後期と考えられる。　（岡本）

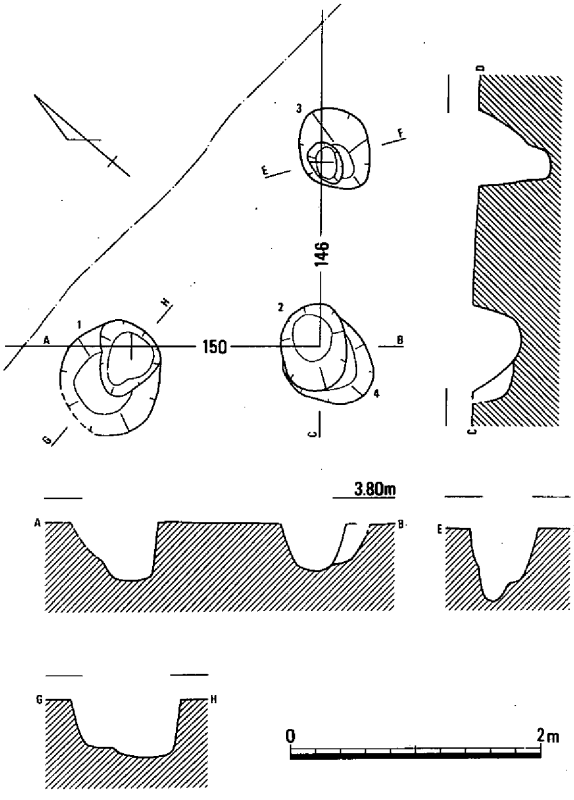
建物３（第79図）

立田Ｅ１区の西端に位置する。周囲の他のものと比べて大振りな柱穴が直角に配置されるもので、建物の棟はさらに北側の調査区外に延びるものと考えられる。



1　茶灰褐色粘性微砂
2　灰褐色粘性微砂
3　暗灰褐色粘性微砂
4　灰色微砂
5　淡灰褐色微砂(炭・焼土含む)
6　淡褐灰色微砂(炭・焼土含む)
7　灰褐色粘性微砂

第78図　竪穴住居13 (1/60)

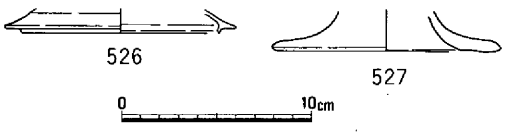


柱穴掘り方の平面形は、円～長楕円形で長径70～90cm、検出面からの深さで35～60cmを測る。埋土はいずれも黄褐色砂質土の小塊を含む暗灰褐色粘質土である。

建物には建て替えによる新旧があると考えられる。これは重複する柱穴２と４の断面観察から、１段深い柱穴２が新しいことから判る。底が２段となる柱穴１と３も同様と考えられる。この新しい方の柱間は、柱穴１－２間で150cm、柱穴２－３間で146cmを測る。

図示した出土遺物は、**526**が須恵器の蓋で、**527**が土師器高杯の脚裾部である。

建物の時期は、７世紀前半と考える。（岡本）



第79図　建物３（1/60）・出土遺物（1/4）

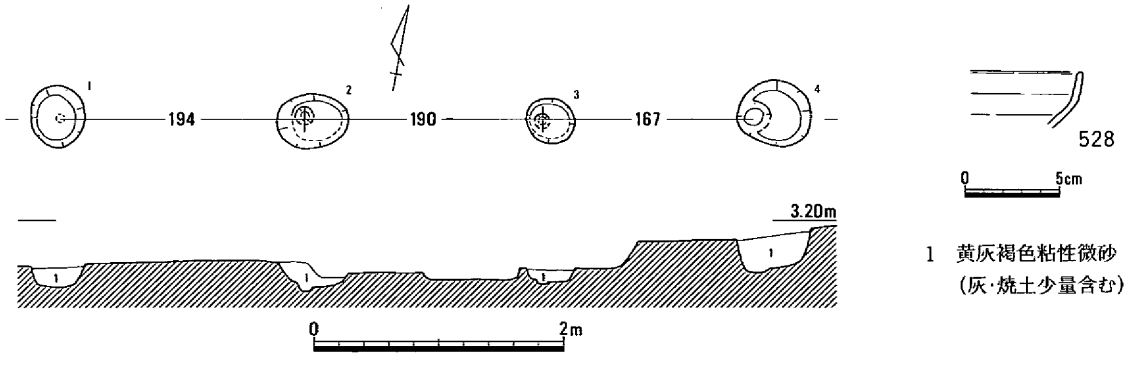
柱穴列１（第80図、図版８）

立田Ｗ１区西で検出した東西方向３間の柱穴列である。柱穴２と４は竪穴住居12に切られていた。また、柱穴４の東側は調査区外となるため、列がさらに延びるか否かは不明である。柱穴掘り方の平面形は円～長楕円形で、径40～60cmを測る。埋土はいずれも黄灰褐色粘性微砂である。柱穴２～４の底面には、柱のあたりによる窪みがみられる。各柱間は、西から194cm、190cm、167cmを測る。

528は須恵器の高杯である。柱穴列の時期は、７世紀代と考えられる。（岡本）

土壙１（第81図、図版８）

立田Ｃ区の東端部、竪穴住居４から50cm南東において検出された焼土土壙である。検出面では、径50cm程の不正円形を呈し、焼土は最も深いところで15cmを測る。土壙内および周辺に伴う遺物などは認められず、性格などは不明である。

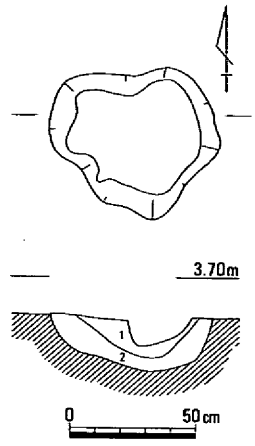


第80図　柱穴列１（1/60）・出土遺物（1/4）

時期の詳細は不明であるが、検出状況から古墳時代後半と推定される。(内藤)

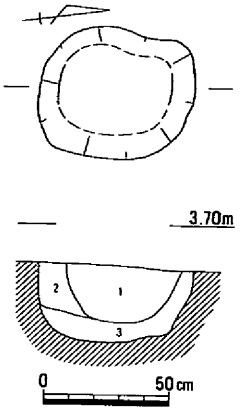
土壙２（第82図）

立田Ｃ区の西部において検出された土壙で、土壙３の北東1.5ｍに位置している。60×50㎝程のやや歪んだ楕円形を呈し、検出面からの深さは30㎝を測る。埋土の上層において馬歯の一部が出土している。時期は、出土遺物などから古墳時代後期に比定される。　(内藤)



1　明赤褐色粘質土（焼土）
2　にぶい褐色粘質土（赤色変化）

第81図　土壙１(1/30)



1　黒褐色粘質土
2　灰黄褐色粘質土
3　にぶい黄褐色粘質土

第82図　土壙２(1/30)

土壙３（第83図）

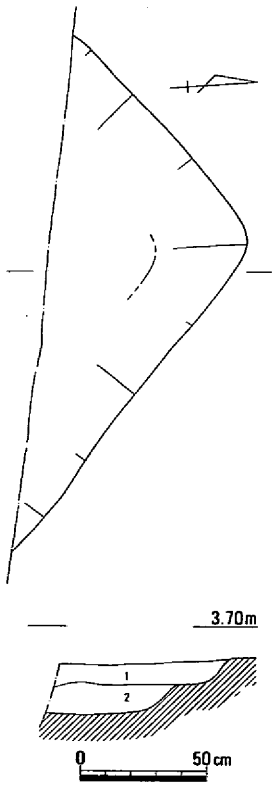
立田Ｃ区の西部、土壙２の南西1.5ｍにおいて検出された土壙で、南部は調査区外におよぶ。検出面では竪穴住居の一部を思わせる遺構であるが、埋土中から焼土や羽口が出土しており、鍛冶関連の廃棄穴と考えられる。時期は、古墳時代後期頃と推定される。　(内藤)

土壙４（第84図）

立田Ｗ１区西の南東隅に位置する。南側を側溝で切られるが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。規模は、東西長70㎝、検出面からの深さ15㎝を測る。出土遺物には土師器片があるが図化可能なものはない。土壙の時期は、検出状況等から古墳時代後期と考えられる。　(岡本)

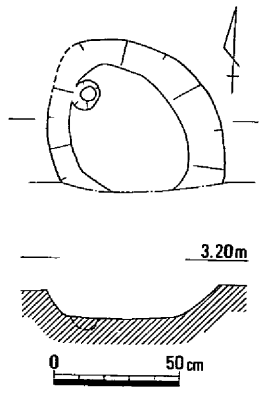
土壙５（第85図、図版41）

立田Ｗ１区西の東半に位置する土壙で、北側を側溝で切られる。また先述の竪穴住居12とも切り合い関係にあり、住居よりも古いことを確認

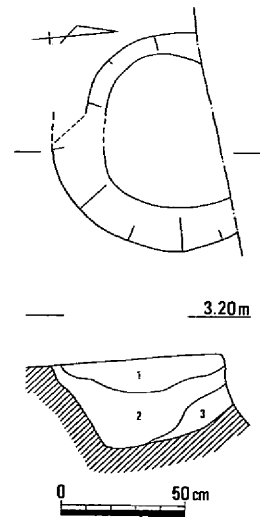


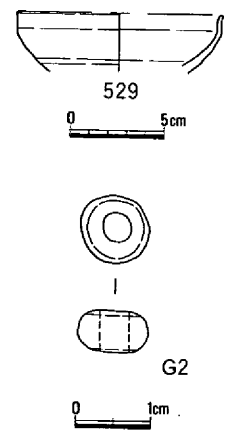
1　黒褐色粘質土
2　暗褐色粘質土

第83図　土壙３(1/30)



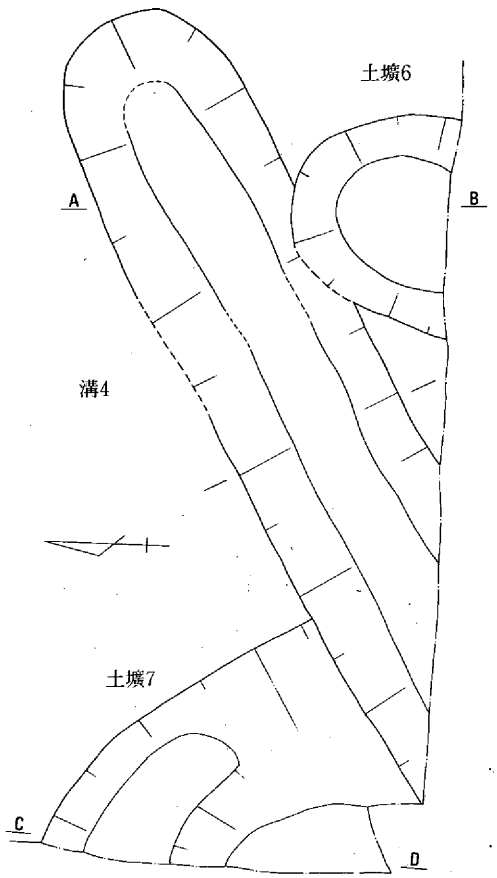
第84図　土壙４(1/30)

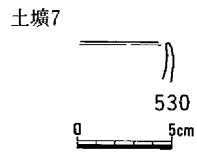


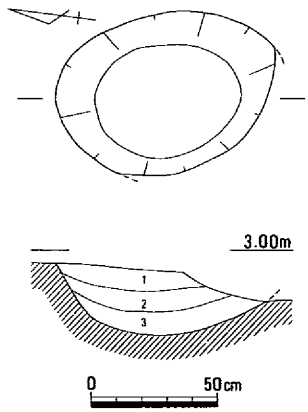


1　黄灰褐色粘性微砂
2　黄茶褐灰色粘性微砂質土
(炭多量・焼土含む)
3　灰茶褐色粘性微砂

第85図　土壙５(1/30)・出土遺物(1/4, 1/1)







第86図　土壙6 (1/30)、土壙7 (1/30)・出土遺物(1/4)、溝4 (1/30)

第87図　土壙８(1/30)

している。平面形はほぼ円形を呈するものと考えられ、その規模は東西長85cm、検出面からの深さ約40cmを測る。底面の標高は267cmである。

出土遺物には、土師器・須恵器・ガラス丸玉がある。**529**は須恵器の高杯かと考えられる。**G２**はガラス製丸玉のほぼ完形品である。土壙内の南寄り標高 292cm の位置で検出した。径9.35㎜、厚さ5.3㎜、孔径3.12㎜、重量0.9gを測る。色調は黄灰色を呈する。

土壙の時期は、遺構の検出状況と出土遺物から、７世紀前半と考えられる。（岡本）

土壙６（第86図）

立田Ｗ１区西のほぼ中央に位置する。南過半を側溝で切られるために全体の形状は不明である。また、第86図のＡ－Ｂ断面にみられるように後述する溝４よりも新しい。東西長83cm、検出面からの深さ33cmを測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物には少量の土師器片がある。土壙の時期は検出状況等から７世紀後半以降と考えられる。（岡本）

土壙７（第86図）

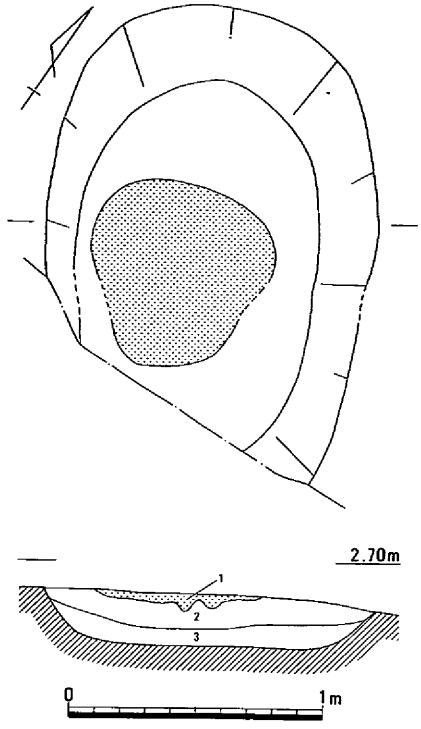
立田Ｗ１区西のほぼ中央に位置する。南と西側を側溝で切られ、全体の形状は不明だが底は２段に落ち込む。また、竪穴住居13・土壙８と切り合いがあり、それらよりも新しい。出土遺物には須恵器と土師器があり、図示したものは、土師器杯の口縁部である。

土壙の時期は、古墳時代後期と考えられる。（岡本）

土壙８（第87図）

立田W1区西の西半に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出面からの深さは26cmを測る。竪穴住居13と土壙７に切られることから、それらよりも古いことが判る。出土遺物には、須恵器と土師器片がある。

土壙の時期は、古墳時代後期と考えられる。（岡本）



第88図　土壙９（1/30）・出土遺物（1/4）

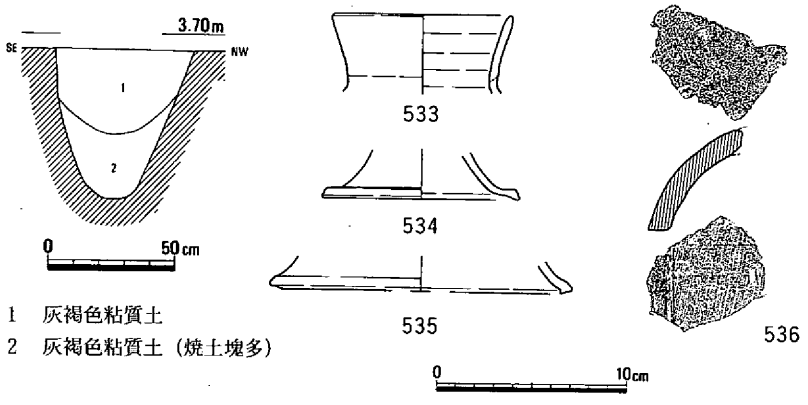
土壙９（第88図）

立田Ｗ１区西の中央よりもやや西寄りに位置する。南側を側溝で切られるが、平面形は小判形を呈すると考えられる。その規模は、長軸190㎝以上、短軸130㎝を測る。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは20㎝前後を測る。

埋土の堆積は３層で、最上層には焼土と炭からなる層がある。これは平面的には土壙のほぼ中央に広がっている。

図示した出土遺物は、いずれも最上層の焼土・炭層の下層から出土した土師器である。**531**は杯、**532**は甕である。

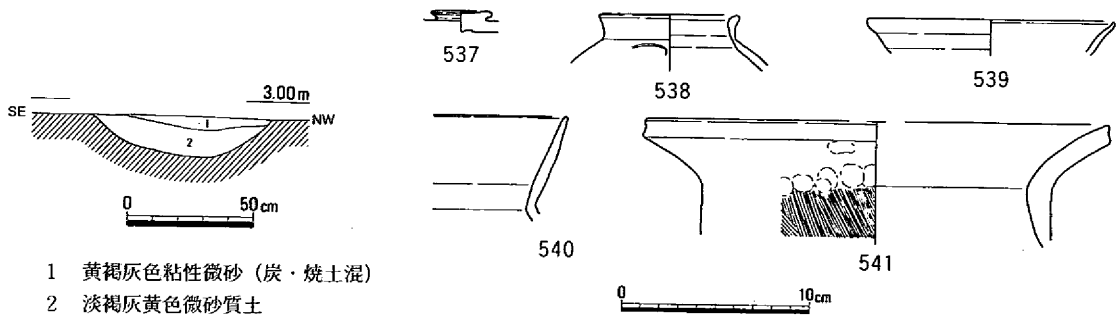
土壙の時期は、周囲の他の遺構と同様に古墳時代後期と考えられる。（岡本）



第89図　溝３（1/30）・出土遺物（1/4）

溝３（第89図、図版９）

立田Ｅ１区の西半、竪穴住居２の中央部分を壊し、ほぼ直線的に掘られていた。溝の幅は70㎝、深さが43㎝を測った。溝壁の傾斜は急で、底部には平坦面がほとんどみられず、溝の断面形はＶ字形に近かった。出土遺物として須恵器・土師器の土器と鉄滓・丸瓦片がある。図示した土器は須恵器で、**533**は平瓶の口縁部とみられる。**534・535**は高杯と思われるが、**535**の形状はやや異質である。**536**



第90図　溝４（1/30）・出土遺物（1/4）

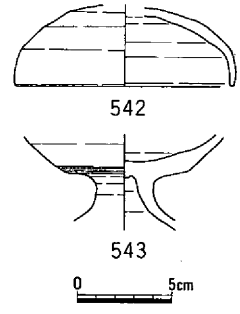
は丸瓦の破片である。溝３の年代は、竪穴住居２より新しいことから７世紀の後半以降であり、丸瓦が出土したことから考えれば、８世紀まで存続していたとみられる。（岡本）

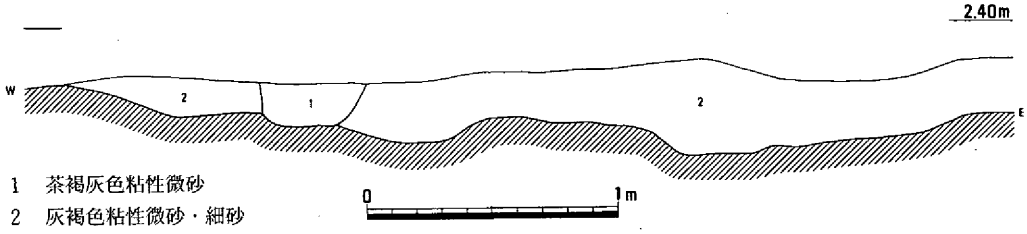
溝４（第86・90図）

立田Ｗ１区西で検出された。土壙６に切られ、土壙７を壊していた。また、これらの遺構の下から竪穴住居13が検出された。溝は立田Ｗ１区西の中央部分から始まり、南西へ流れていたようである。幅75cm、深さ18cmを測った。埋土はレンズ状に２層の堆積がみられ、上層には炭粒や焼土が含まれていた。出土遺物には土器類の他に、鉄滓や焼けた石などもみられた。**537・538**は須恵器、**539～541**は土師器である。**537**は蓋のつまみである。**538**は壺で、肩部に沈線がある。土師器はいずれも甕である。溝４の年代は竪穴住居13より新しく、遺物から７世紀後半から８世紀までが考えられる。（岡本）

溝５（第91図、図版40）

立田Ｗ２区の西端で検出された。この地区は微高地の西側に広がる低位部にあたっている。溝状の２条の窪みが北東から南西の方向でみられた。第48図の調査区北壁の土層を観察すると、この２条の溝状の窪みを埋めた土は同じで、この土層は溝５の東へ、微高地の方へ向かって15cm程の厚さで堆積していた。溝５はこの層の西端に位置し、溝５と微高地に挟まれた窪地の西限を示すものともみられる。おそらく、この窪地が耕作地であったものと思われる。なお、第91図の第１層は古代の溝である。図示した出土遺物はいずれも須恵器である。**542**は蓋である。口径は115mmを測る。**543**は高杯で、杯底部にカキ目がある。遺物から溝５の年代は７世紀前半とみられる。（岡本）





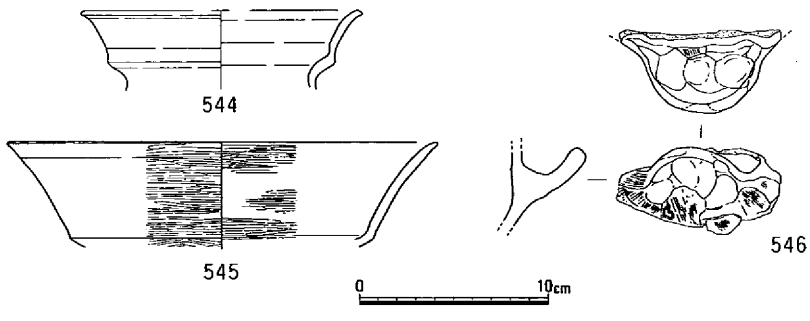
第91図　溝５（1/30）・出土遺物（1/4）

河道２出土土器（第92図）

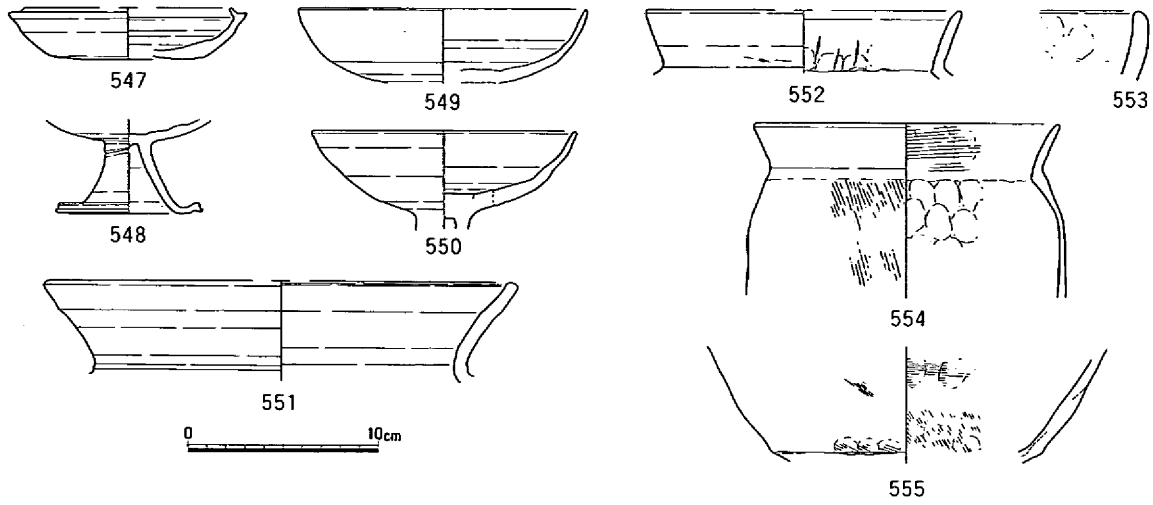
図示した土器は、いずれも旧河道２の砂層（第62図26・27層）から出土した土師器である。

544は壺の口縁で、複合口縁の稜線がややにぶい。**545**は高杯の杯部から口縁で、内外面とも横方向に密にヘラミガキする。**546**はコシキの把手である。

時期は、**544**と**545**は古墳時代初頭、**546**は古墳時代後期に属する。（岡本）



第92図　河道２砂層（第26・27層?）出土遺物（1/4）



第93図　立田Ｅ１区包含層出土遺物(1/4)

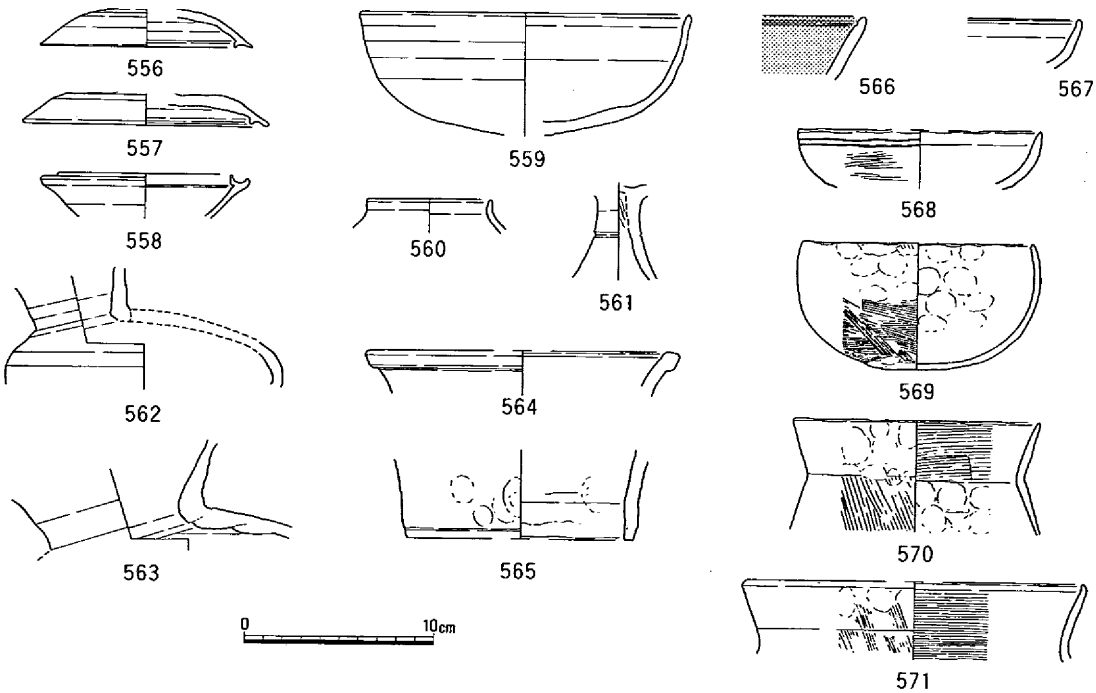
包含層出土土器（第93・94図、図版40）

第93図に掲載した土器は、立田Ｅ１区の暗灰褐色粘質土層から出土したもので、**547～551**が須恵器、**552～555**が土師器である。

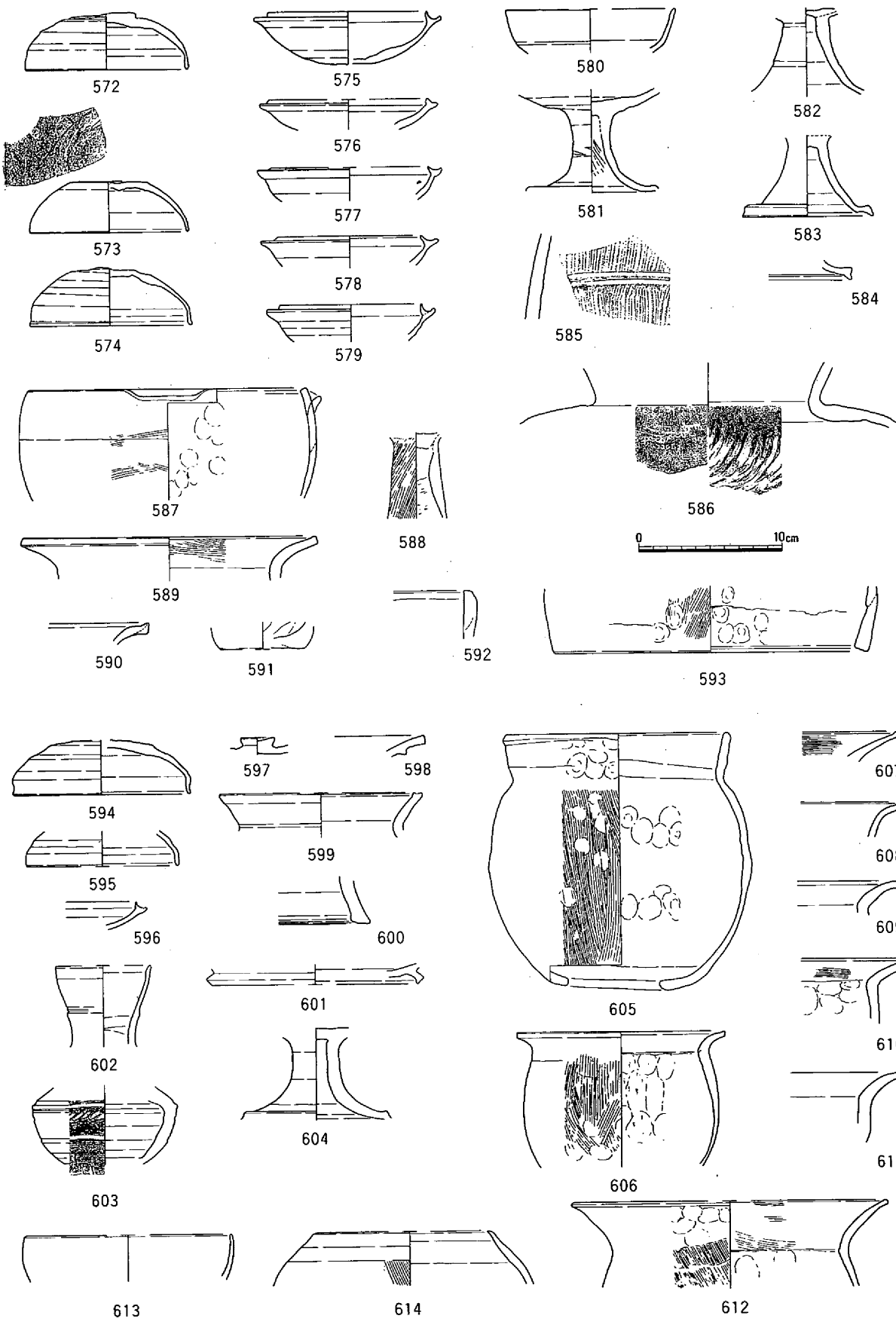
547は杯身で、短く内傾する立ち上がりをもつ。底は平坦なものだが、中央がやや窪むようになる。**548**は高杯の杯底部から脚部にかけてである。短い脚部は「ハ」の字状に開きながら、地面に接地する部分で強く屈曲する。**549**と**550**は高杯の杯部で、いずれも椀形の形状となる。**550**には脚柱の一部が残る。**551**は甕の口縁である。

552は甕の口縁部、**554**は甕の口縁部から胴部にかけてである。**553**はやや内湾する口縁部で、器種は甕と考えられる。**555**は高杯の杯部で、屈曲部に明瞭な稜をもつ。

これらの時期は、概ね７世紀前半代であるが、**555**のように５世紀前半代に属するものもある。



第94図　立田Ｗ１区包含層出土遺物(1/4)



第95図　高松原古才遺跡出土古墳時代遺物(1/4)

第94図掲載の土器は、立田Ｗ１区の包含層から出土した土器で、556～565が須恵器、566～571が土師器である。

556と557は杯蓋で、いずれも口縁内面に短い返りが付く。557は頂部につまみの一部が残る。558は杯身で、短く内傾する立ち上がりをもつ。559は椀である。復元口径は173㎜を測り、口縁端部を丸くおさめる。560は口縁が短く立ち上がる壺で、有蓋となるものであろう。561は高杯の脚柱部で、その中程に凹線を１条巡らせている。562と563は平瓶である。564は甕で、肥厚する口縁端部の断面は方形を呈する。565はコシキの底部で、内外面とも押圧後にナデを施す。

566は内外面丹塗りの杯の口縁部である。端部を丸くおさめ、その内面に沈線を１条巡らせている。567と568は杯の口縁部で、568は端部近くの外面に細い沈線を２条巡らせている。569は椀で、外面は押圧後ハケメ、内面は押圧後平滑にナデを施す。また、外面は二次的に火を受けて変色している。570と571は甕の口縁部である。

これらの時期は７世紀前半に属するもので、須恵器は当期の器種構成をほぼ表している。　（岡本）

遺構に伴わない遺物（第95図、図版40）

上段の572～593は、立田Ｅ１区の古墳時代包含層から出土した遺物である。また、下段の594～614は、主に立田Ｗ１区の柱穴や包含層、側溝等から出土したもので、一部に立田Ｅ１区の側溝から出土したものを含んでいる。以下、上段・下段に大別して記述を進めたい。

上段の遺物のうち、572～586が須恵器、587～593が土師器である。

572～574は杯蓋で、口径110㎜前後、器高36～42㎜を測る。573の外面にはヘラで「×」印が刻まれている。575～579は杯身で、いずれの蓋受けも短く内傾する立ち上がりとなる。580～584は高杯である。脚部のうち581と582には脚柱中程に凹線がみられる。585は甕の頸部で、外面には２条の沈線とその上下にカキメを施す。586も甕の頸部で、外面は縦方向の平行タタキ後横方向の工具ナデ、内面は同心円文のタタキを施す。

587は片口鉢、588は高杯の脚柱部である。また、589と590は甕の口縁部、591は壺の底部である。592はコシキの口縁部、593は底部と考えられる。

下段の遺物のうち、594～604が須恵器、605～614が土師器である。

594と595は杯蓋、596は杯身である。597は杯蓋のつまみで、偏平化した形態である。598は甕の口縁部である。これは、当地区周辺の須恵器としては最も古い段階のもので、５世紀代に属すると考えられる。599は壺の口縁部で、「く」の字状に屈曲して端面に凹部をもつ。600は脚端部である。601は杯の高台部である。大きく「ハ」の字状に開く比較的高い高台で、内端面で接地する。602は提瓶の口縁部と考えられ、中程に凹線を２条施している。603は、最大径で稜をもって屈曲する甕の胴部である。稜を挟んで上下に凹線を巡らせ、さらにそれらの下部には刺突文と凹線を巡らせる。604は高杯の脚部である。

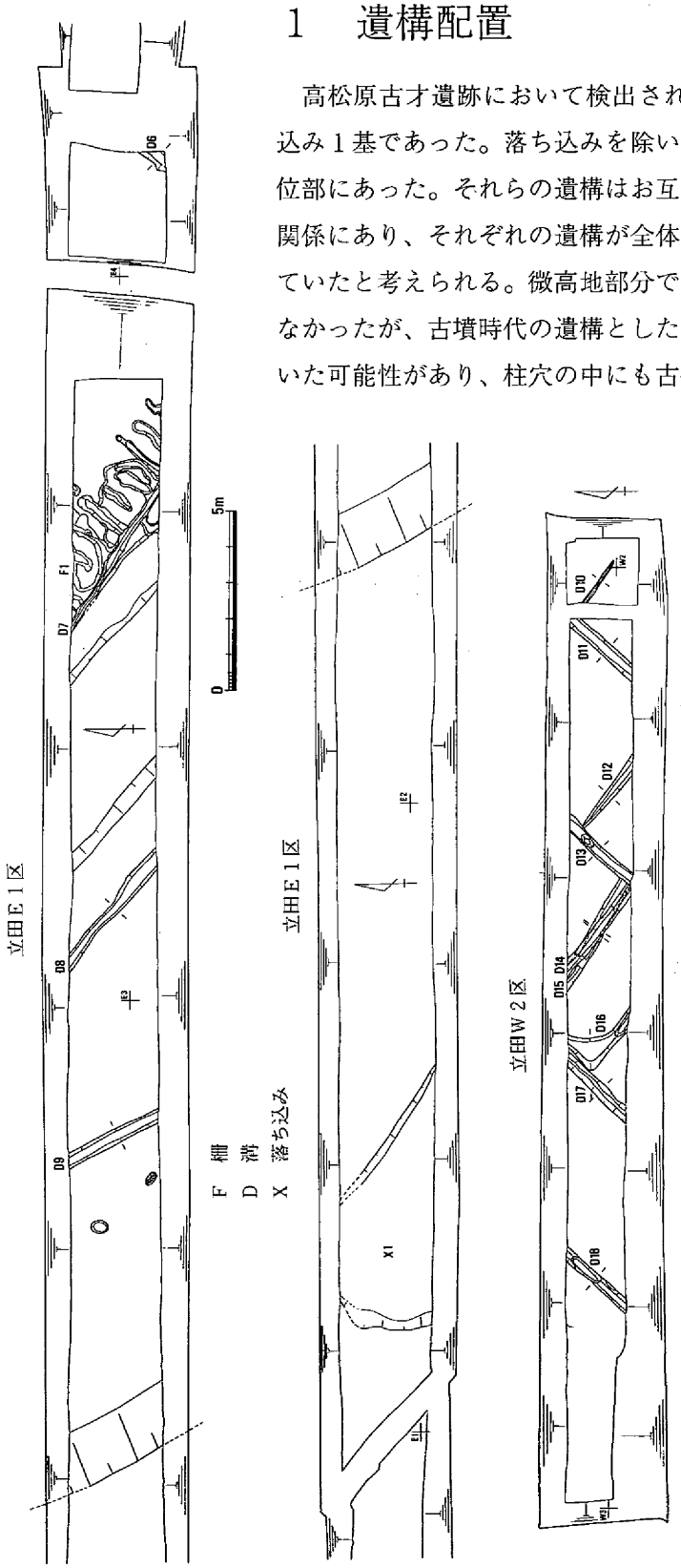
605～612は甕である。強弱はあるものの、すべての口縁部は「く」の字状に屈曲し、その後直線的に延びる605と、外反しながら開く606～612がある。また、口縁端部の形態では、丸くおさめる605・611と、軽くつまみ上げる606～610がある。なお、605の底部は焼成後に孔を開けている。613は杯の口縁部で、614は鉢の口縁部と考えられる。

以上の遺物の時期は、７世紀前半代を中心とし、当地区の古墳時代の遺構検出状況と整合する。また、先述した598が大きく遡るほか、601や603など上記の時期を前後するものもある。　（岡本）

第４節　古代の遺構と遺物

１　遺構配置

高松原古才遺跡において検出された古代の遺構は溝13条、柵１列、落ち込み１基であった。落ち込みを除いてすべての遺構が微高地からはずれた低位部にあった。それらの遺構はお互いに、平行ないしは直交するような位置関係にあり、それぞれの遺構が全体の中の一つの部品として関連を持ち合っていたと考えられる。微高地部分では明確に古代の遺構と指摘できるものはなかったが、古墳時代の遺構とした溝３・４は出土遺物から古代に存続していた可能性があり、柱穴の中にも古代のものがなかったとはいいきれない。包含層からは古代の遺物がかなり出土しているため、古代においてもこの遺跡で集落が継続していたことは確かと思われる。



第96図　高松原古才遺跡古代遺構配置図(1/200)

微高地の東西両側の低位部は、古代にはさらに埋め立てられて上昇していたが、なお東側で80cm、西側で100cm前後の微高地との段差があった。東側の低位部では弥生時代の河道２が埋没した部分の落ち込みがなお残っていたが、その東端に幅３m、高さ50cmの土手が作られ、その東は再び低位部となっていた。西の落ち込み部分で２条の溝が検出され、東側の落ち込みの西端に柵１列と溝１条があり、Ｅ１区の東端でこれと直交する方向の溝が１条検出された。

微高地西側の低位部ではＷ２区で溝が９条検出された。これらの溝のうち北東から南西方向の４条は等間隔で平行関係にあり、４条はそれらと直交する関係にあった。また、１条は鈎形に屈折していた。　　(岡本)

2　遺構・遺物

柵１（第97図、図版９）

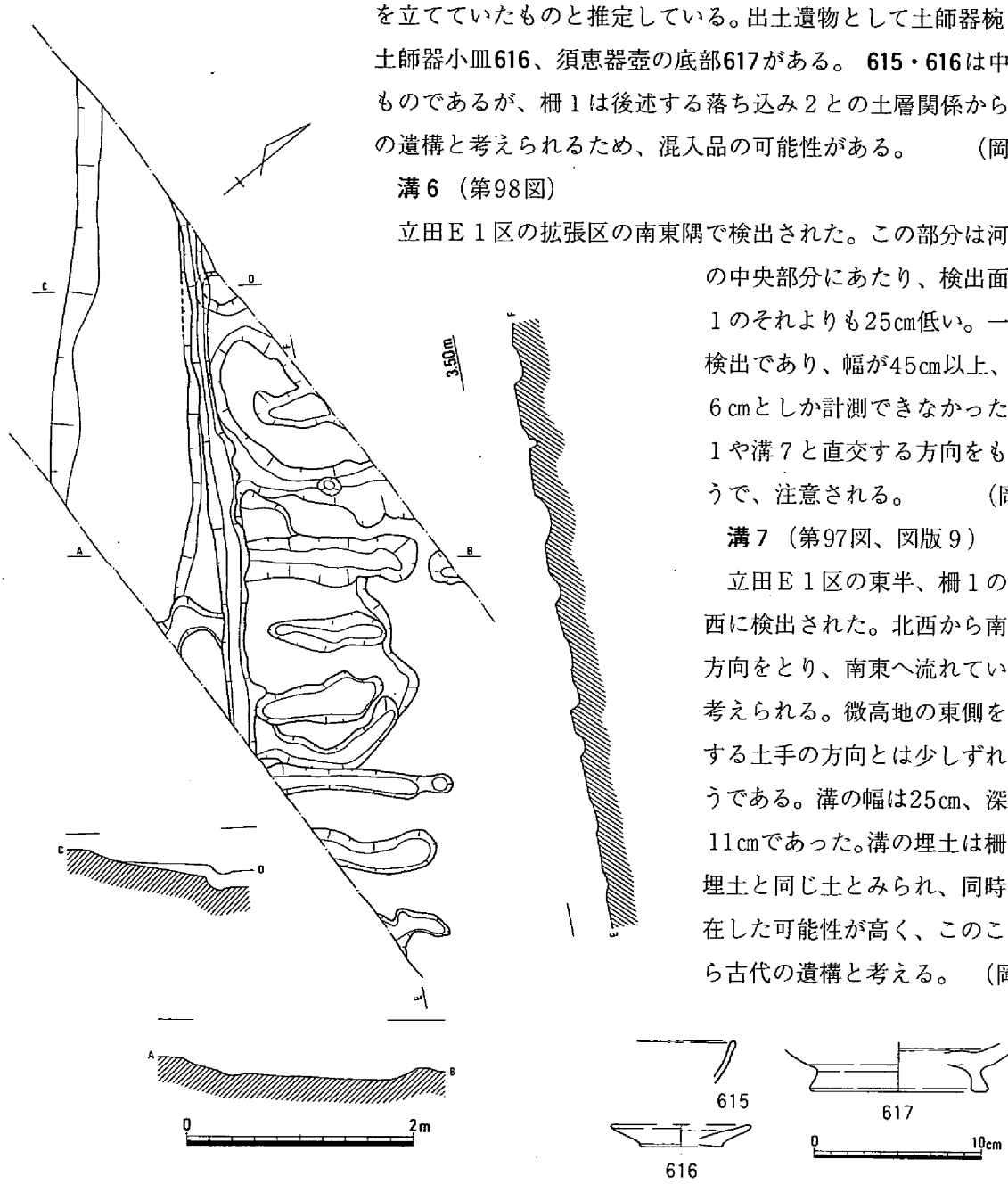
立田Ｅ１区の東半で検出された。微高地の東側の低位部は、かつての河道２の東岸あたりに設けられた幅３ｍ、高さ50cmばかりの土手で二分されていた。柵１はその土手の東裾から１～1.5ｍの所で、土手と平行するような形で存在していた。柵１のすぐ西には溝７が走っていたが、柵との時間的な関係は明確にはできず、あるいは共存していた可能性もある。柵とした遺構は、長径が105～170cm、幅が20～45cmの不整形な細長い穴が65cm程の間隔で列ぶものである。穴の深さは15cmまでと浅い。穴の中央部分がもっとも深いが、図の下半の穴では右端の部分も深かった。このようなことから複数の柱を立てていたものと推定している。出土遺物として土師器椀615、土師器小皿616、須恵器壺の底部617がある。615・616は中世のものであるが、柵１は後述する落ち込み２との土層関係から古代の遺構と考えられるため、混入品の可能性がある。　（岡本）

溝６（第98図）

立田Ｅ１区の拡張区の南東隅で検出された。この部分は河道１の中央部分にあたり、検出面は柵１のそれよりも25cm低い。一部の検出であり、幅が45cm以上、深さ６cmとしか計測できなかった。柵１や溝７と直交する方向をもつようで、注意される。　（岡本）

溝７（第97図、図版９）

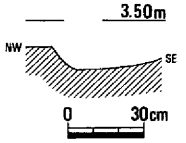
立田Ｅ１区の東半、柵１のすぐ西に検出された。北西から南東の方向をとり、南東へ流れていたと考えられる。微高地の東側を二分する土手の方向とは少しずれるようである。溝の幅は25cm、深さが11cmであった。溝の埋土は柵１の埋土と同じ土とみられ、同時に存在した可能性が高く、このことから古代の遺構と考える。　（岡本）



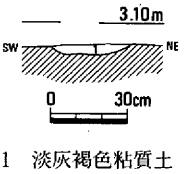
第97図　柵１(1/60)・出土遺物(1/4)、溝７(1/60)

溝８（第99図）

立田Ｅ１区の東半で検出された。河道２が埋没した低位部の東端にあり、微高地の東側の低位部を二分する土手の西 1.5ｍに位置していた。この土手とほぼ平行する、北西から南東の方向をとる。溝の幅が50cm、深さは４cmにすぎなかった。土層関係から古代の遺構と考えている。　（岡本）



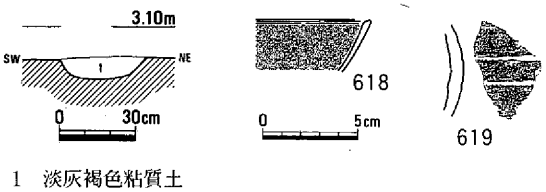
第98図　溝６(1/30)



第99図　溝８(1/30)

溝９（第100図）

立田Ｅ１区の東半、河道２が埋没した低位部の中央付近に位置していた。溝８の西にあり、4.5ｍ離れていた。溝の方向は北東から南西で、微高地の東肩の線とほぼ平行していた。微高地裾との距離は6.5ｍであった。溝の幅は42cm、深さは９cmを測った。遺物が少し出土した。**618**は黒色土器椀である。**619**は須恵器で、瓶の肩部から胴部にかけてとみられ、２条の凹線が巡らされている。遺物からは11世紀以後の溝と考えられる。　（岡本）



第100図　溝９(1/30)・出土遺物(1/4)

溝10～18（第101図、図版９・40・41）

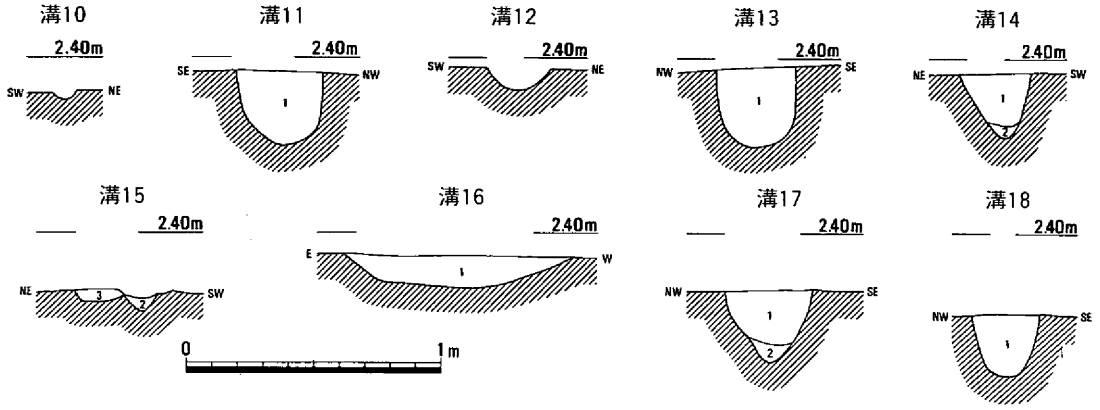
立田Ｗ２区、微高地の西側にある低位部で検出された。検出面の海抜高度は220～245cmである。北東から南西の方向をとる溝が４条とこれと直交する南東から北西の方向をとるものが４条あり、１条の溝は南東から北東の方向をとっていたものが、途中から北東へ屈折していた。また、溝14と15で重複がみられるように、すべてが同時に存在したのではなく、溝17と18の間でも先後関係があったものと考えられる。北東から南西方向をとる溝は約4.5ｍ間隔で平行していたが、南東から北西の方向をとる溝の間隔は一定していなかった。溝の規模を列挙すると、溝10は幅11cm、深さ９cm、溝11は幅39cm、深さ32cm、溝12は幅33cm、深さ10cm、溝13は幅37cm、深さ42cm、溝14は幅32cm、深さ18cm、溝15は幅44cm、深さ30cm、溝16は幅37cm、深さ15cm、溝17は幅40cm、深さ37cm、溝18は幅34cm、深さ32cmであった。溝の幅は検出状態の悪かった溝10以外は32～44cmと大きく違わなかったが、深さは10cm～42cmと差が大きく、とくに、北東から南西方向の溝が深かった。これらの溝はその立地から考えて耕作に伴うものとみられるが、北東から南西方向の溝が主要な施設で、その間を南東から北西方向の溝で任意に浅く区画したものと考えられる。

それぞれの溝から少しずつ遺物が出土している。土器類が主であるが、他に鉄滓や焼石もみられた。土器では丹塗りの土師器もあった。図示した遺物はほとどが古墳時代のものである。溝が掘削されたのが古墳時代の包含層の上面であることによる。**622**は土師器の甕の口縁部であるが、それ以外のものはすべて須恵器である。**624**・**625**・**630**は杯である。**628**・**629**・**631**・**632**は蓋である。**620**・**626**は高杯である。**621**は器台の脚であろうか。**623**は椀、**627**は鉢と思われる。土器の年代では７世紀の前半がほとんどを占めている。鉄器が２点ある。**Ｍ４**は刀子で、茎の部分と身部が一部残っていた。残存長59.5㎜、背幅3.5㎜を測る。**Ｍ５**は刀の鍔のような形状の板製品である。幅が12.5㎜、厚さは２㎜を測った。**Ｓ18**はアプライト製の砥石である。一面のみを使用していた。

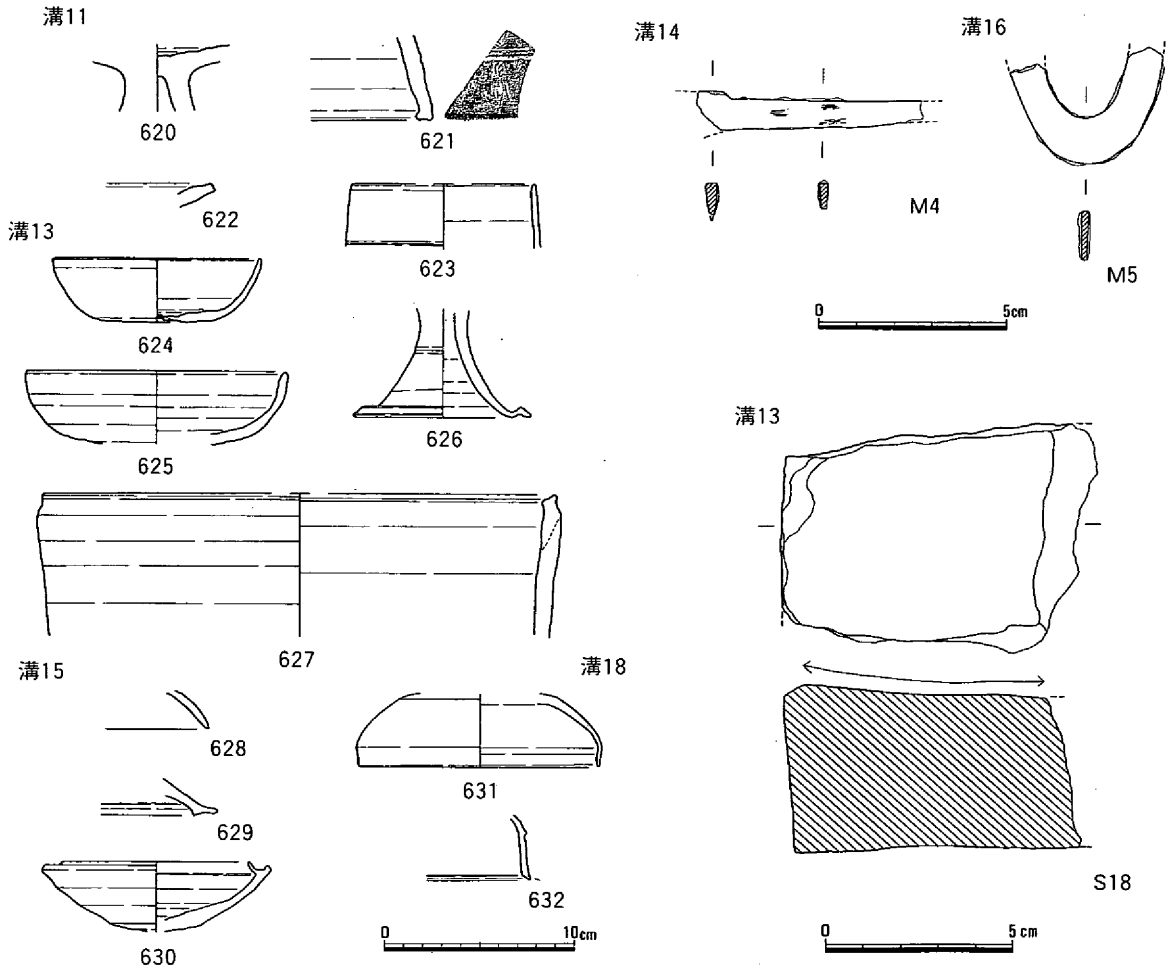
これらの溝の年代であるが、７世紀前半より新しく、丹塗り土師器を出土することから９世紀以前と考えられる。奈良時代から平安時代の初期にかけてであろうか。　（岡本）

落ち込み１（第47・96・102図、図版41）

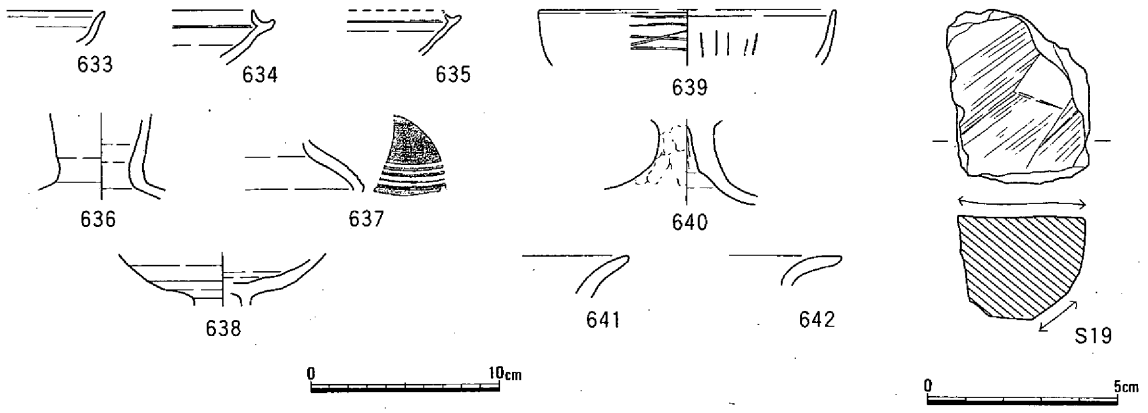
立田Ｅ１区の西端、微高地の上面に位置していた。不整形な浅い落ち込みで、底面も凹凸がみられた。調査区の南端で幅が9.2ｍ、深さは20㎝を測った。出土遺物として土器類の他、砥石やウマかウシの臼歯があった。633～638は須恵器、639～642は土師器である。633は皿、634･635は杯、636は提瓶、637は壺、638は高杯である。639は杯で、内面には縦方向の、外面には横方向の暗文が認められる。640は高杯、641・642は甕である。Ｓ19の砥石は使用面に擦痕が多く残されていた。流紋岩製で



1　緑灰色粘性砂質土　　2　灰色粘質土斑淡緑灰色粘性砂質土　　3　淡緑灰色粘性砂質土



第101図　溝10～18 (1/30)・出土遺物(1/4，1/2)



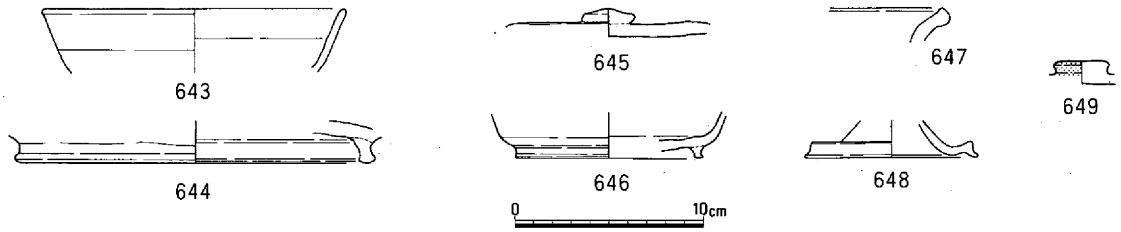
第102図　落ち込み１出土遺物(14，1/2)

ある。７世紀前半の土器がほとんどであるが、**633**は８世紀に降るとみられる。（岡本）

遺構に伴わない遺物（第103・104図）

第103図に示した土器は第48図の第31層から出土した。**643～648**は須恵器、**649**は土師器である。**643**は高台の付く杯である。**644**は壺の底部、**647**は壺の口縁部である。**645**は宝珠形のつまみの付く蓋、**648**は高杯の脚部である。**649**の蓋は丹塗りされている。

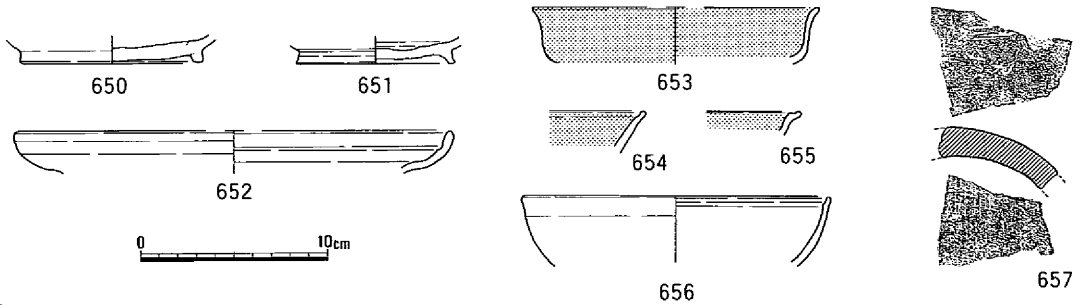
第104図の遺物はおもにＷ１区の包含層から出土したもので、**657**はＥ１区の側溝から出土した。



第103図　立田Ｗ３区出土古代遺物(1/4)

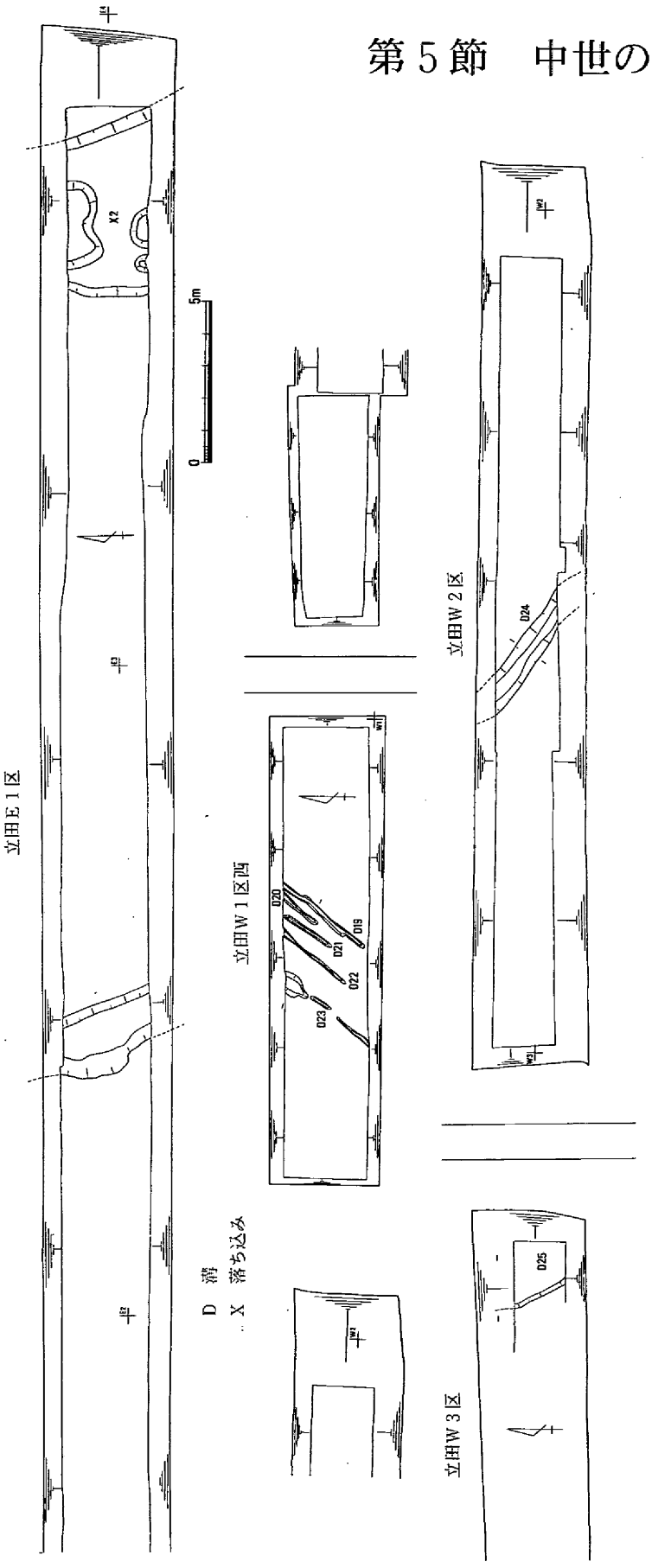
650～652は須恵器、**653～656**は土師器、**657**は丸瓦である。**650・651**は杯である。**652**は盤であろうか。**653～655**は杯で、内外面には丹が塗られている。**654**と**655**の口縁部内面には凹線が巡らされている。**656**は椀であろうか。口縁部の内面にかすかな段が認められる。器面はヨコナデ調整である。

647・648は７世紀前半の古墳時代のものであるが、他は８世紀の奈良時代のものとみられる。ただ、**656**はさらに降る可能性がある。（岡本）



第104図　高松原古才遺跡出土古代遺物(1/4)

第５節　中世の遺構と遺物



第105図　高松原古才遺跡中世遺構配置図（1/200）

１　遺構配置

高松原古才遺跡における中世の遺構はきわめて少なく、微高地上ではまったく確認できなかった。このことは、集落の消滅を意味すると捉えることもできるが、中世の落ち込み２からはかなりの遺物が出土し、まったく生活の痕跡が消えたともいえない。このような、遺物は出土するが遺構がみられないという状況は古代も同様であった。集落が縮小ないしは消滅したという可能性はもちろん否定できないが、いま一つの解釈として、立田遺跡でもみられたような後世の大規模な地下げの存在も無視できない。このために、低位部の遺構のみが残されたともいえるのである。

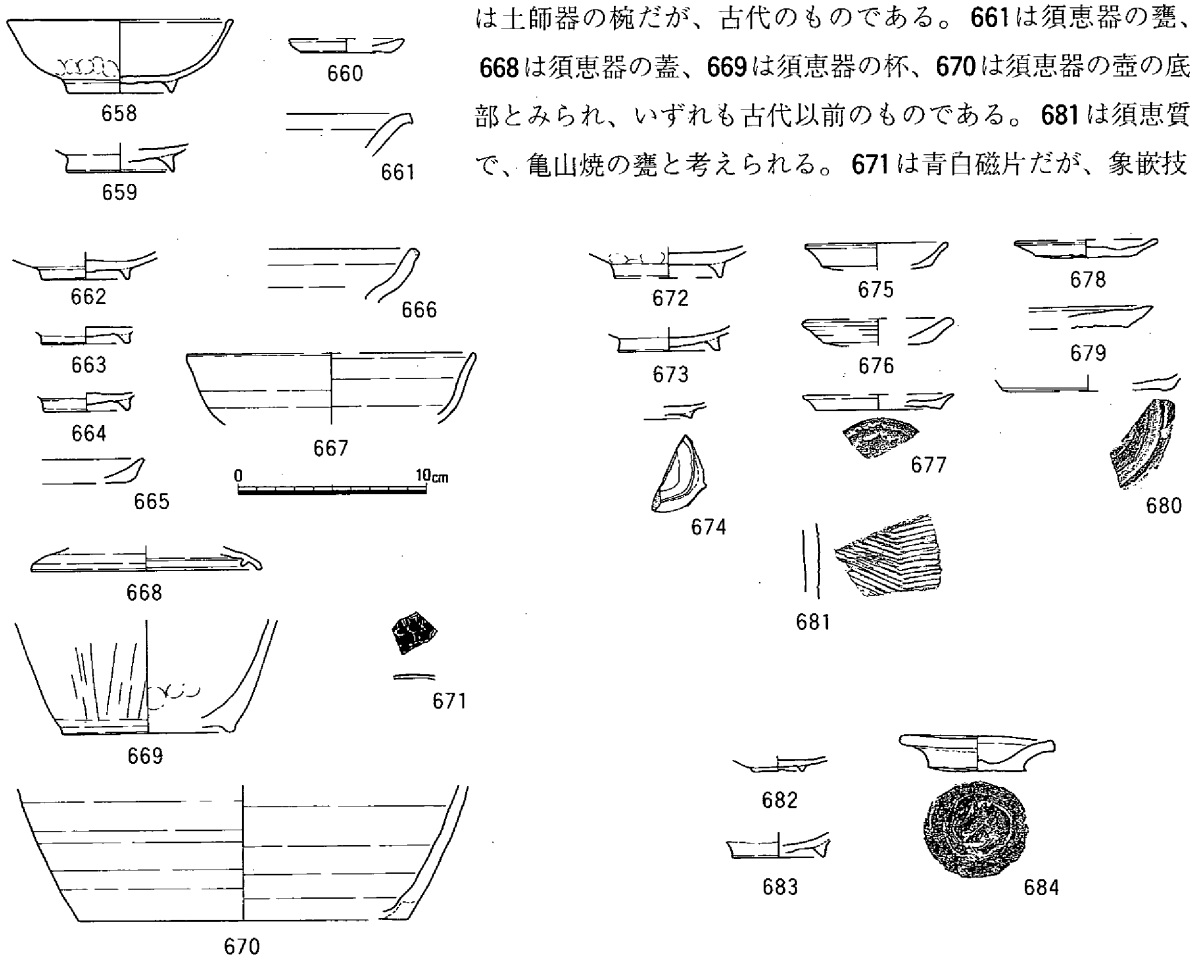
中世の遺構はすべて低位部に位置していた。微高地東側の低位部は、さらに堆積が進み、低位部を二分していた土手が埋まり、幅26ｍ程の平坦面が形成され、その東端が５ｍ程度の幅で不規則に落ち込んでいた。その落ち込みのすぐ東に新しい土手が作られていた。微高地西側の低位部では、溝状遺構がＷ１区西で５条、Ｗ２区とＷ３区で各１条検出されたが、土層関係では各地区で孤立し、相互関係は認められなかった。　（岡本）

2　遺構・遺物

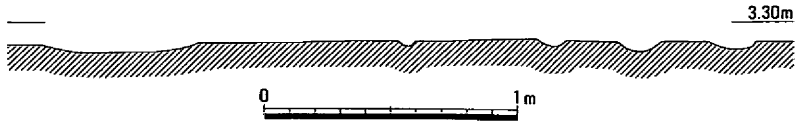
落ち込み２（第62・105・106図）

立田Ｅ１区の東端で検出された。微高地東側の低位部は、古代には土手によって二分され、土手から東側に柵１が存在していた。落ち込み２はその柵１のあった東側の低位部の上方に位置していた。中世には土手は埋まって幅約26ｍの平坦面が形成されていたが、土手の痕跡はかすかに残り、東側部分が少し低くなっていた。落ち込み２は、その不整形な形から考えると人為的に掘削されたとみるよりも、自然に東側の低位部が埋没していく過程で残された窪みと捉えるのが妥当と思われる。古代から東側の低位部の東端は少し高まりをみせていたが、中世にはさらに土が盛られ、幅が推定で2.5ｍ前後の土手が作られたようである。落ち込み２はこの新しい土手の西に接し、土手の上面と落ち込み２の底との高度差は73㎝を測った。落ち込み２の西端での低位部平坦面からの深さは16㎝であった。

第106図に落ち込み２に関係した遺物を図示した。左半は落ち込み２の埋土の上層、すなわち第62図の第９層出土である。右半の上は埋土の下層で同図の第10層、右半の下は同図の第15′層出土である。第９層・10層は落ち込み２だけではなく、微高地東側の低位部を広く埋めていた。**658・659・662～664・672～674・682・683**は土師器の椀である。いずれも低い高台が付き、13世紀の後半から14世紀の前半のものと考えられる。**660・665・675～680**は土師器の小皿である。椀と同じ年代とみられる。**684**は土師器で小皿のようだが、上下逆で器台とも思われる。**666**は土師器の鍋の口縁部である。**667**は土師器の椀だが、古代のものである。**661**は須恵器の甕、**668**は須恵器の蓋、**669**は須恵器の杯、**670**は須恵器の壺の底部とみられ、いずれも古代以前のものである。**681**は須恵質で、亀山焼の甕と考えられる。**671**は青白磁片だが、象嵌技



第106図　落ち込み２上部砂層（左半）・下部粘質土層（右半）出土遺物（1/4）



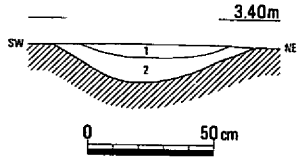
第107図　溝19～23（1/30）

法によるとみられる四葉の花文が白土で表現されている。合子の破片とみられる。

出土遺物から判断して、落ち込み２は14世紀の中頃に埋没したと考えられる。（岡本）

溝19～23（第105・107図）

立田Ｗ１区西で検出された。溝状の遺構が５条平行し、北東から南西の方向をとっていた。溝の幅は15～20cm前後で、深さは７cmまでと浅かった。溝23の北部分のみ幅が60cmを測った。溝の間隔は、溝19から溝22までは心々で40～50cmであったが、溝22と溝23の間は95cmと倍の広さだった。これらの遺構は低位部に位置し、おそらくは耕作痕跡と考えられる。（岡本）

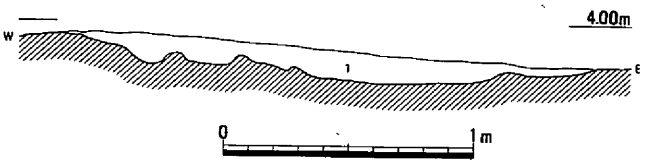


1　青灰色粘質土
2　(暗)青灰色粘土

第108図　溝24（1/30）

溝24（第108図）

立田Ｗ２区で検出された。北西から南東の方向をとる。幅が85cm、深さは19cmを測った。断面形は皿形で、埋土はレンズ状の堆積が２層みられた。出土遺物に土師器の高台付き椀があり、古代の包含層の直上にあることから、鎌倉時代の遺構と考える。（岡本）

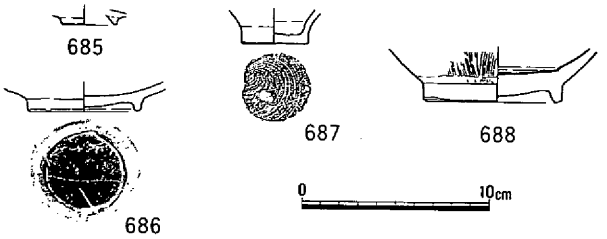


1　灰白色微細砂

第109図　溝25（1/30）

溝25（第109図）

立田Ｅ３区の東端で検出された。上部を現代の削平によって壊されていたため、正確な規模はわからないが、検出部分で幅204cm、深さ20cmを測った。底面はかなり凸凹していた。埋土から中世の溝としたが、現代の耕作土から15cm程下にあり、溝24が検出された古代の包含層とは５層の間層があるため、近世以降に降る可能性もある。（岡本）



第110図　高松原古才遺跡出土中世遺物(1/4)

遺構に伴わない遺物（第110図）

685・686は土師器の椀で高台が付く。**685**はこの器形の最終末のものである。Ｗ２区の第48図第31層出土である。**686**はＥ１区の包含層から出土した。底面にはヘラ描きで「×」の記号が残されている。**687**は須恵器で、小形の壺の底部であろうか。底面には糸切り痕跡が明瞭である。Ｅ１区の側溝から出土した。**688**は白磁の椀の底部である。口縁端部は断面三角形に肥厚させたものと推定される。**685**と同じ層から出土した。（岡本）

第5章　加茂政所遺跡

第1節　概要

加茂政所遺跡は高松原古才遺跡の西200ｍから始まり、360ｍ程の東西幅をもっている。加茂政所遺跡と高松原古才遺跡の間は大きな旧河道が存在するとみられ、中央付近の海抜高度がもっとも低くなっている。加茂政所遺跡とその西に所在する津寺遺跡との間にも河道があったとみられるが、この河道は弥生時代にはすでに埋没していたようで、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構が両遺跡間の低位部でも検出される。このため、加茂政所遺跡と津寺遺跡を明瞭に区画することは困難であるが、現在の大字名の境がこの旧河道の中心あたりにあるため、この境界となる農道を両遺跡の境とする。そのあたりの小字名は加茂・津寺ともに高田と呼んでいる。

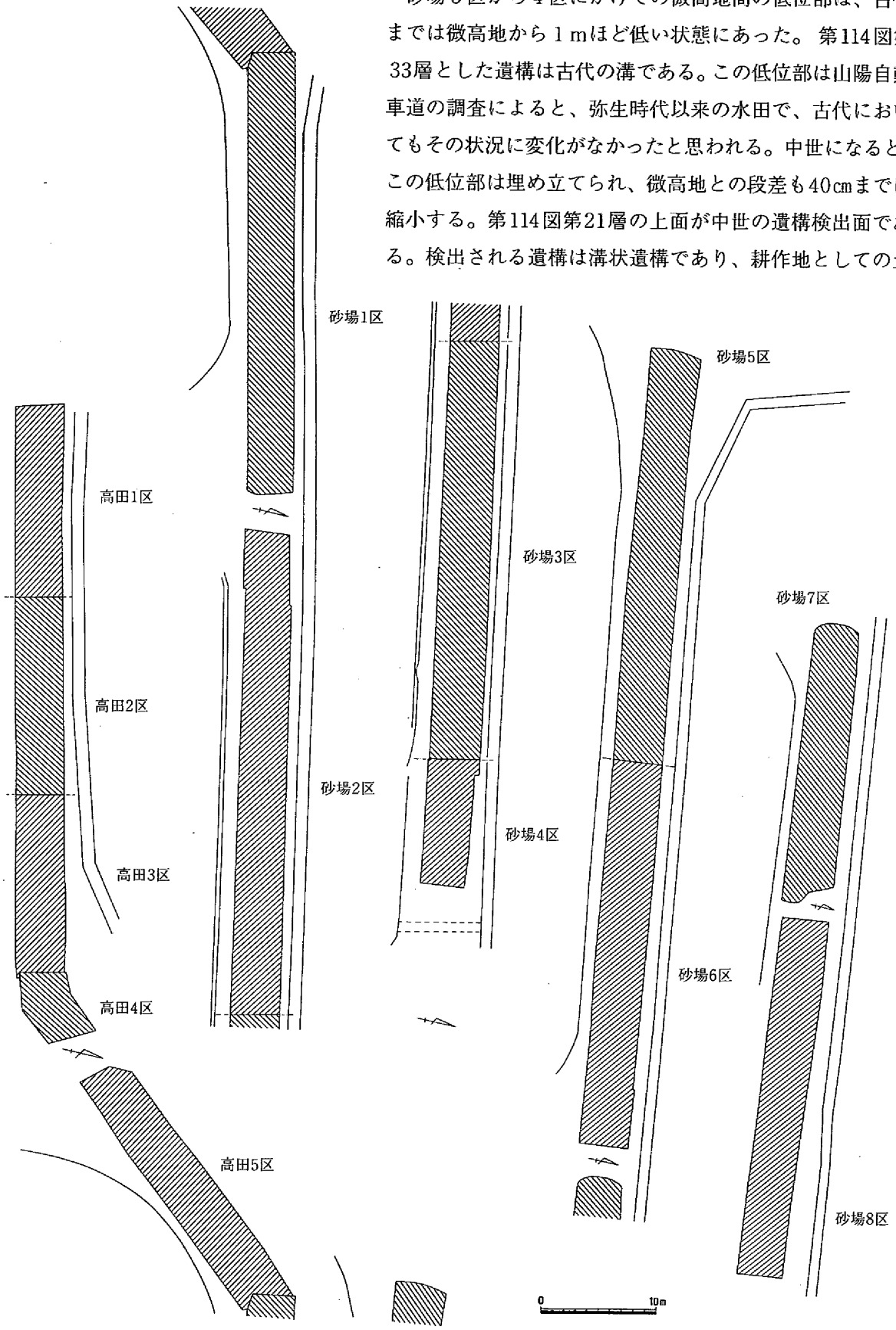
加茂政所遺跡の調査は、平成４年度に西端の高田地区の一部について実施され、平成５年度にそれに続く地区から東へ向かって調査を行った。調査対象地の小字名は西から高田と砂場の二つがあった。調査区は狭長なため、発掘進度や遺物や図面の記録上の必要性から任意に区画し、小字別に１区から順次に地区名を付けていった。高田地区は１区から５区まで、砂場地区は１区から８区までである。平成４年度に調査を実施したのは高田１区から３区までである。

加茂政所遺跡は地形的には単一の微高地ではなく、東西二つの微高地とそれに挟まれた低位部からなり、西側の微高地の西に広がる低位部でも遺構が検出された。東側の微高地の東端は古代以降の河道によって大きく抉られていた。西側の微高地は高田５区から砂場３区にかけて存在し、東側の微高地は砂場５区から砂場８区の西端までであった。高田１区から高田４区までは微高地の西側の低位部で、砂場４区は微高地間の低位部にあたる。

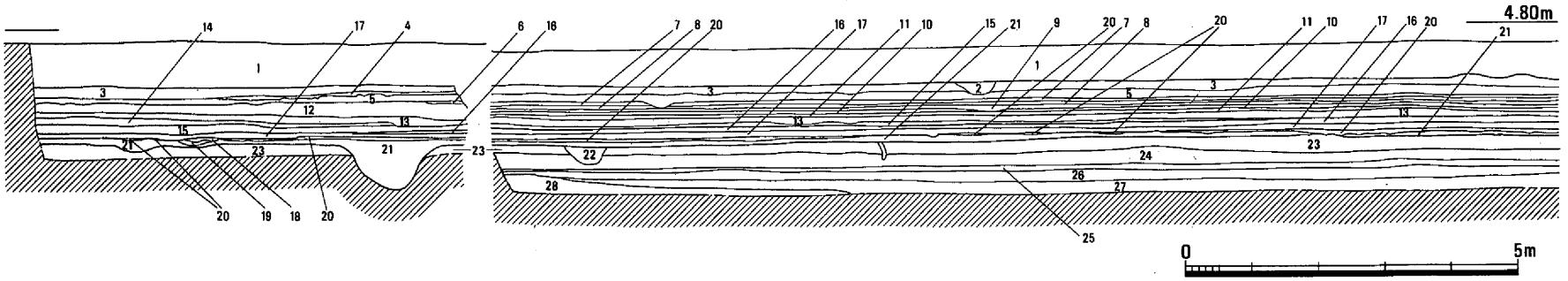
高田１区から４区までは低位部で、第112図上段の第28層が緩やかに西へ下降しているのは旧地形の名残と思われる。この地区は古墳時代には水平な堆積層が形成され、遺構が検出されるようになる。遺構の中には竪穴住居が１軒あり、このような低位部を選地していることの意味が問われなければならない。この地区においては中世に大きな地下げがなされたものとみられ、古墳時代の包含層の上に中世の包含層がのり、中世の遺構の検出面が古墳時代の包含層であった。中世の遺構は溝状遺構で、低位部で耕作を行っていた痕跡とみられる。

高田５区から砂場３区までは微高地が存在した。微高地の核になっているのは第113図上段の第31層であるが、砂場１区の中央付近から西へ下がりはじめ、これが高田３区の第28層に続く可能性がある。微高地の東側の下がりは砂場3区の西端にあり、第114図第48・49層がその傾斜面に堆積した層と考えられる。この微高地では弥生時代の遺構が検出されず、集落の形成は古墳時代の後期からと考えられる。東の微高地では弥生時代から集落が存在しているのとは対照的である。中世には数多くの柱穴が掘られ、土壙や溝が集中し、墓地も存在したようで、集落の中心部になっている。この頃にはむしろ東側の微高地よりもにぎやかである。微高地の縁辺にあたる高田５区は耕作地になっていたようで、平行する溝が何条も掘られていた。近世以降はこの地区は水田化されている。

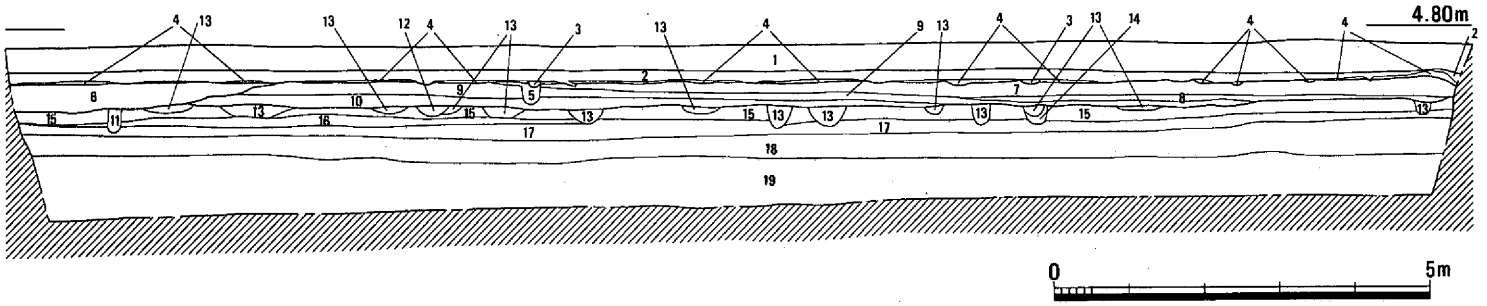
砂場３区から４区にかけての微高地間の低位部は、古代までは微高地から１ｍほど低い状態にあった。第114図第33層とした遺構は古代の溝である。この低位部は山陽自動車道の調査によると、弥生時代以来の水田で、古代においてもその状況に変化がなかったと思われる。中世になると、この低位部は埋め立てられ、微高地との段差も40㎝までに縮小する。第114図第21層の上面が中世の遺構検出面である。検出される遺構は溝状遺構であり、耕作地としての土



第111図　加茂政所遺跡調査区区割り図（1/500）

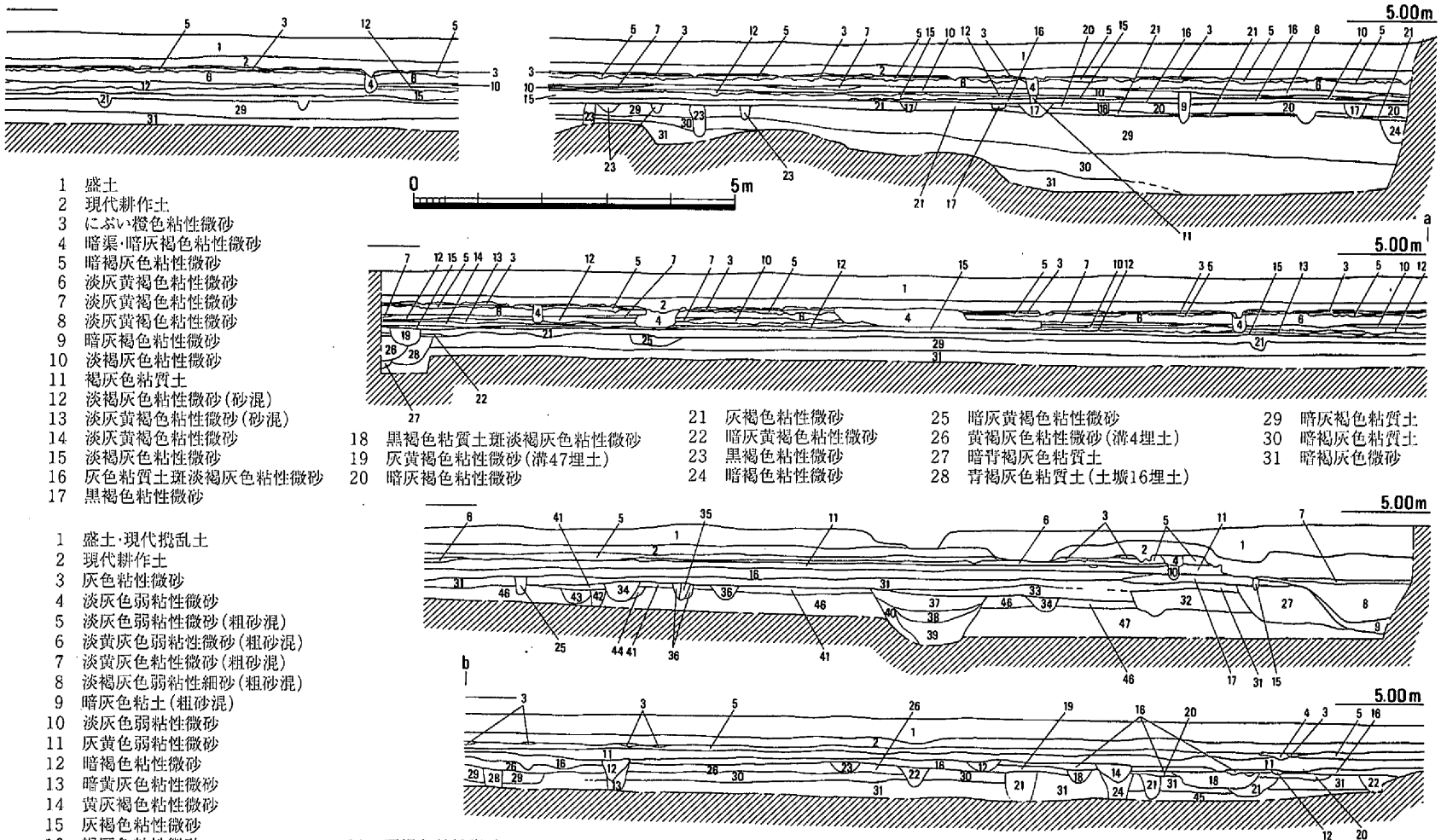


1 盛土
2 現代撹乱
3 現代耕作土
4 灰色粘性微砂
5 淡灰色粘性微砂斑
淡褐灰色粘性微砂
6 淡褐灰色粘質土
7 淡黄褐色粘性微砂
8 淡黄褐色粘性微砂
9 淡褐灰色粘性微砂
10 淡褐灰色粘性微砂
11 淡褐灰色粘性微砂
12 淡青褐灰色粘性微砂
13 淡褐灰色粘性微砂
14 淡褐灰色粘性微砂
15 淡褐灰色粘性微砂
16 黄褐灰色粘性微砂
17 黄褐灰色粘性微砂
(中世包含層)
18 淡褐灰色粘性微砂
(溝18埋土)
19 褐灰色粘性微砂斑
淡褐灰色粘性微砂
20 褐灰色粘性微砂
21 暗褐灰色粘性微砂
(古墳時代包含層)
22 暗褐色粘性微砂
23 暗褐灰色粘質土
24 青褐灰色粘性微砂
25 青褐灰色粘質土
26 黄褐灰色粘質土
27 淡褐黄灰色粘性微砂
28 淡褐黄灰色微砂



1 盛土
2 現代耕作土
3 耕土斑にぶい橙色微砂
4 にぶい橙色微砂
5 暗渠
6 淡褐灰色粘性微砂
7 にぶい橙色微砂
8 にぶい橙色微砂
9 にぶい橙色微砂
10 にぶい橙色微砂
11 灰褐色粘性微砂
12 暗灰褐色粘性微砂(砂混)
13 暗灰褐色粘性微砂
14 暗灰褐色粘性微砂
15 灰黒褐色粘性微砂
16 灰褐色粘性微砂
17 灰黄褐色粘性微砂
18 青灰黄褐色粘性微砂
19 青灰色粘質土

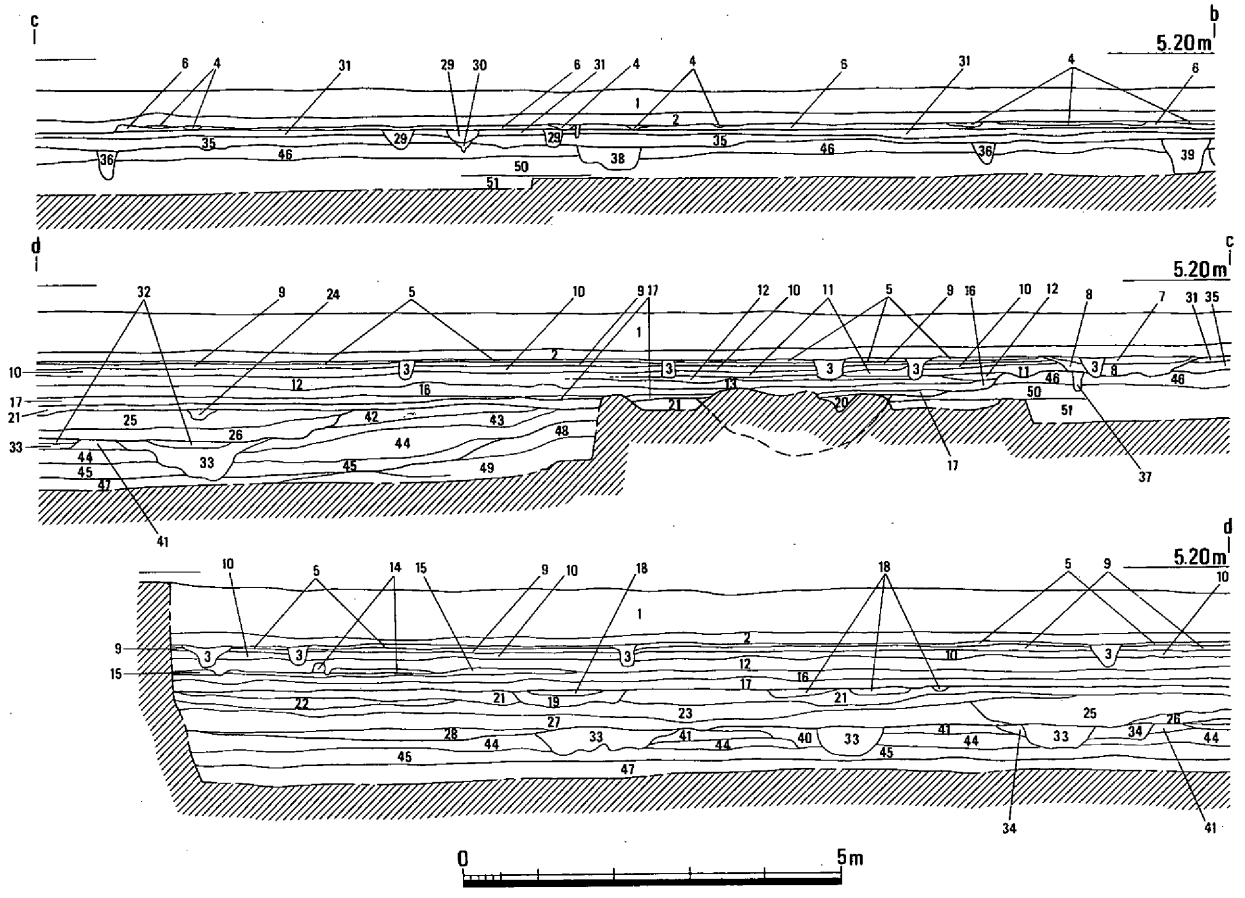
第112図　高田3，4区南壁(上)、高田5区南東壁(下) 土層断面図(1/100)



1 盛土
2 現代耕作土
3 にぶい橙色粘性微砂
4 暗渠・暗灰褐色粘性微砂
5 暗褐灰色粘性微砂
6 淡灰黄褐色粘性微砂
7 淡灰黄褐色粘性微砂
8 淡灰黄褐色粘性微砂
9 暗灰褐色粘性微砂
10 淡褐灰色粘性微砂
11 褐灰色粘質土
12 淡褐灰色粘性微砂(砂混)
13 淡灰黄褐色粘性微砂(砂混)
14 淡灰黄褐色粘性微砂
15 淡褐灰色粘性微砂
16 灰色粘質土斑淡褐灰色粘性微砂
17 黒褐色粘性微砂
18 黒褐色粘質土斑淡褐灰色粘性微砂
19 灰黄褐色粘性微砂(溝47埋土)
20 暗灰褐色粘性微砂
21 灰褐色粘性微砂
22 暗灰黄褐色粘性微砂
23 黒褐色粘性微砂
24 暗褐色粘性微砂
25 暗灰黄褐色粘性微砂
26 黄褐灰色粘性微砂(溝4埋土)
27 暗青褐灰色粘質土
28 青褐灰色粘質土(土坡16埋土)
29 暗灰褐色粘質土
30 暗褐灰色粘質土
31 暗褐灰色微砂

1 盛土・現代撹乱土
2 現代耕作土
3 灰色粘性微砂
4 淡灰色弱粘性微砂
5 淡灰色弱粘性微砂(粗砂混)
6 淡黄灰色弱粘性微砂(粗砂混)
7 淡黄灰色粘性微砂(粗砂混)
8 淡褐灰色弱粘性細砂(粗砂混)
9 暗灰色粘土(粗砂混)
10 淡灰色弱粘性微砂
11 灰黄色弱粘性微砂
12 暗褐色粘性微砂
13 暗黄灰色粘性微砂
14 黄灰褐色粘性微砂
15 灰褐色粘性微砂
16 褐灰色粘性微砂
17 暗褐色粘性微砂
18 暗灰褐色粘性微砂
19 黄色粘質土斑褐灰色粘性微砂
20 灰褐色粘性微砂
21 黄橙色粘性微砂
22 黄灰褐色粘性微砂
23 灰褐色粘性微砂
24 暗褐色粘性微砂
25 暗黄褐色粘性微砂
26 褐灰色粘性微砂
27 暗灰黄褐色粘性微砂(竪穴住居3埋土)
28 黄褐色粘性微砂
29 黄灰褐色粘性微砂
30 黄褐色粘性微砂
31 褐色粘性微砂
32 灰黄褐色粘性微砂(竪穴住居4埋土)
33 褐色粘性微砂
34 暗黄褐色粘性微砂
35 暗褐色粘性微砂
36 黄褐色粘性微砂
37 灰黄褐色粘性微砂
38 暗灰褐色粘性微砂
39 暗灰褐色粘質土(細砂混)
40 暗灰褐色粘性微砂(細砂混)
41 褐色粘性微砂
42 黄色粘質土斑灰褐色粘性微砂
43 灰褐色粘性微砂
44 黄灰色粘性微砂
45 褐色粘性微砂
46 黄褐色粘性微砂
47 青緑灰色粘土

第113図　砂場1区(上)、砂場2区西端・東端(下)　南壁土層断面図(1/100)



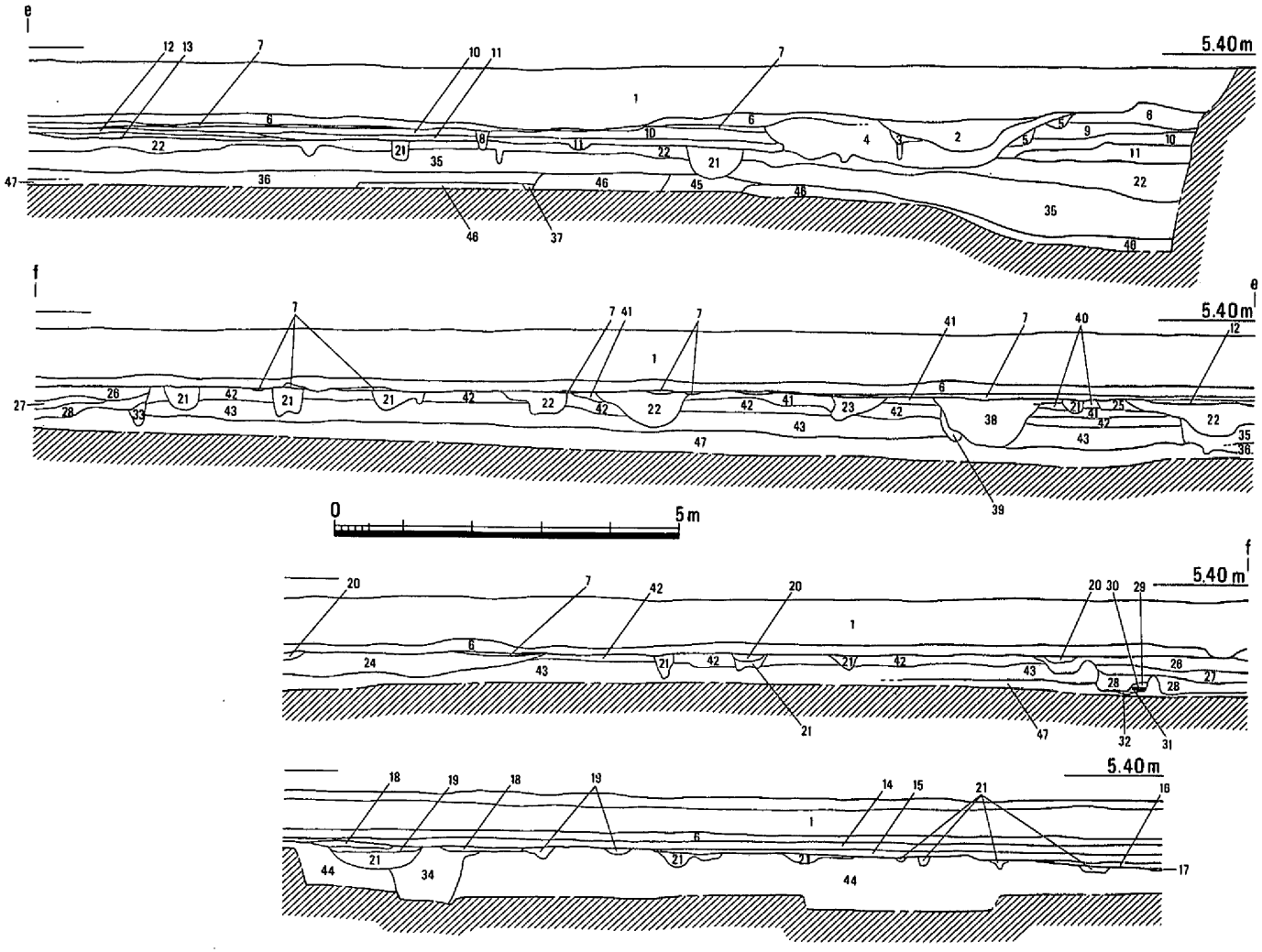
1　盛土·攪乱土
2　現代耕作土
3　暗渠
4　灰色粘性微砂
5　斑鉄
6　淡灰色粘性微砂(粗砂混)
7　灰黄色粘性微砂
8　灰色粘性微砂(黄色土斑)
9　淡灰色弱粘性微砂
10　淡黄灰色弱粘性微砂(粗砂混)
11　淡黄灰色弱粘性微砂
12　灰色粗砂
13　淡黄灰色弱粘性微砂(粗砂混)
14　にぶい黄色粘性微砂
15　黄色粘性微砂
16　淡黄灰色粘質土
17　黄褐色粘質土
18　暗灰黄色粘質土
19　黒褐色粘質土
20　青灰色粘質土(溝51埋土)
21　灰褐色粘性微砂
22　黄灰色粘質土
23　灰黄色粘質土
24　灰色砂質土
25　灰色粘性微砂
26　灰色粘質土
27　灰オリーブ色粘質土
28　暗灰黄色粘質土
29　暗灰褐色粘性微砂
30　灰褐色粘性微砂
31　灰黄色弱粘性微砂
32　黄灰色粘性微砂
33　黄灰色粘質土
(溝14～16埋土)
34　黄灰色粘質土
35　褐灰色粘性微砂
36　暗褐色粘性微砂
37　褐灰色粘質土
38　灰褐色粘性微砂
(炉状遺構2埋土)
39　暗灰褐色粘性微砂
40　暗灰黄色粘質土
41　暗灰黄色粘質土
42　灰色粘質土
43　黄灰色粘質土
44　灰オリーブ色粘質土
45　灰色粘質土
46　暗黄褐色粘性微砂
47　明黄褐色混砂粘土
48　灰オリーブ色砂質土(含土器片)
49　オリーブ灰色砂質土(含土器片)
50　灰褐色粘性微砂
51　黄褐色粘性微砂

第114図　砂場3，4区南壁土層断面図(1/100)

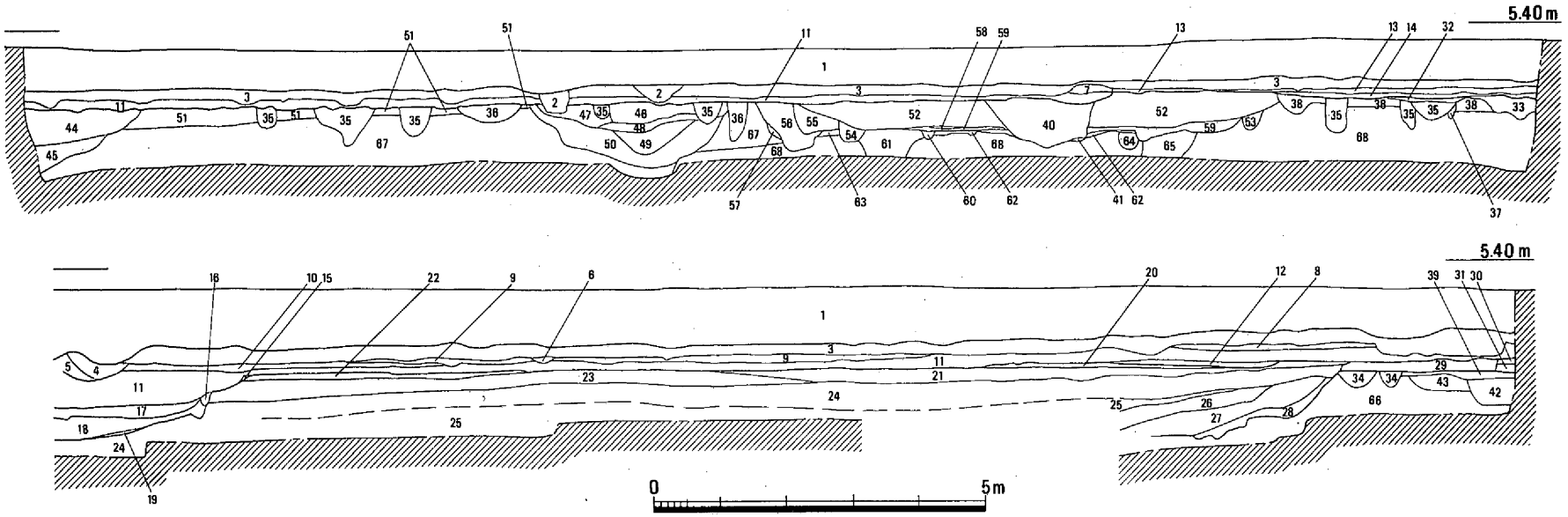
地利用は変わらない。近世以降、さらに埋め立てられ、やがて段差は解消される。

東側の微高地は砂場5区と4区の間に西側の肩が存在するとみられる。微高地の東端は砂場8区の西端近くにある古代の下がりである。第116図の第28層の堆積している斜面が古代の下がりで、この面は洪水によって微高地が抉られてできた面と考えられている。したがって、もとの微高地はさらに東へ延びていたものと考えられる。東側の微高地では近代以降の地下げが激しく、現在の耕作土を除去すると、すぐに古墳時代の遺構が検出された。古墳時代の遺構の検出面が、東の微高地では西の微高地より40cmほど高く、本来、東の微高地が西の微高地より高かったと推定される。弥生時代の遺構が東の微高地だけに検出された理由もそこにあるのかもしれない。明確に古代とされる遺構はみられなかったが、中世には集落が営まれたようである。　(岡本)

1　盛土·現代攪乱土
2　暗灰黄色弱粘性微砂(粗砂混)
3　暗灰黄色粘質土
4　にぶい黄褐色粘性微砂
5　暗灰黄色粘性微砂
6　現代耕作土
7　斑鉄
8　黄褐色粘性微砂
9　黄褐色粘性微砂
10　黄褐色粘性微砂
11　灰色土斑にぶい黄褐色粘性微砂
12　暗灰黄色粘性微砂
13　にぶい黄褐色粘性微砂
14　灰黄色粘性微砂
15　暗灰黄色粘性微砂
16　黄灰色粘性微砂
17　暗灰黄色粘性微砂
18　褐灰色土斑暗灰黄色粘性微砂
19　褐灰色粘性微砂
20　灰オリーブ色粘性微砂
21　灰黄褐色粘性微砂
22　暗灰黄色粘性微砂
(溝52·53埋土)
23　黄灰色粘性微砂(溝54埋土)
24　灰黄褐色粘性微砂
25　灰黄褐色粘性微砂
26　灰黄褐色粘性微砂
27　黒褐色粘性微砂
28　にぶい黄褐色粘性微砂
29　暗灰黄色粘性微砂
30　焼土
31　暗灰黄色粘性微砂
32　焼土
33　褐灰色粘性微砂
34　灰黄褐色粘性微砂
35　にぶい黄褐色粘性微砂
36　暗褐色粘性微砂
37　黒褐色粘性微砂
38　黒褐色粘性微砂(土壙1埋土)
39　オリーブ褐色粘性微砂
40　褐灰色粘性微砂
41　褐灰色粘性微砂
42　灰黄褐色粘性微砂
43　黄褐色粘性微砂
44　にぶい黄褐色粘質土
45　暗灰黄色粘性微砂
46　灰オリーブ色粘性微砂
47　黄褐色粘性微砂



第115図　砂場5区(上)、砂場6区西端・東端(下)南壁土層断面図(1/100)



1 盛土・撹乱土
2 現代撹乱
3 現代耕作土
4 現代耕作土(砂混)
5 現代耕作土(砂混)
6 浅黄色微砂
7 にぶい黄橙色粘質土
8 灰オリーブ微砂(小礫混)
9 浅黄色粘性微砂(小礫混)
10 浅黄色粘性微砂(小礫混)
11 浅黄色粘性微砂(小礫混)
12 浅黄色粘性微砂(小礫混)
13 にぶい黄橙色粘性微砂
14 にぶい黄橙色粘性微砂
15 浅黄色微砂
16 にぶい黄褐色粘性微砂
17 オリーブ灰色粘質土
18 灰オリーブ色粘質土
19 オリーブ灰色粘質土
20 にぶい黄色粘質土
21 にぶい黄色粘質土
22 黄褐色粘質土
23 黄褐色粘質土
24 にぶい黄褐色粘質土
25 暗緑灰色粘質土
26 褐色粘性微砂
27 にぶい黄褐色粘性微砂
28 灰黄色粘性微砂
29 黄褐色粘性微砂
30 暗灰黄色微砂
31 灰オリーブ色微砂
32 にぶい黄橙色粘性微砂
33 灰黄褐色粘質土斑にぶい黄橙色粘性微砂
34 にぶい黄褐色粘性微砂
35 黄褐色粘性微砂
36 にぶい黄色粘性微砂
37 灰オリーブ色粘質土
38 にぶい黄褐色粘性微砂
39 灰オリーブ色微砂
40 灰オリーブ色粘性微砂
41 灰オリーブ色粘質土
42 オリーブ褐色微砂
43 にぶい黄褐色微砂
44 にぶい黄褐色粘性微砂
45 にぶい黄褐色粘性微砂
46 にぶい黄褐色粘性微砂
47 にぶい黄褐色粘性微砂
48 にぶい黄色粘性微砂
49 灰黄褐色粘質土
50 灰黄褐色粘質土
51 黄褐色粘性微砂
52 灰色微砂斑にぶい黄褐色粘性微砂
53 灰オリーブ色粘質土
54 灰オリーブ色粘性微砂
55 灰オリーブ色粘性微砂
56 灰オリーブ色粘性微砂
57 オリーブ黄色粘性微砂
58 オリーブ色粘性微砂
59 暗オリーブ色粘性微砂
60 暗灰黄色粘質土
61 オリーブ褐色粘質土
62 暗オリーブ色粘性微砂
63 灰オリーブ色粘性微砂
64 暗灰黄色粘質土
65 暗オリーブ色粘質土
66 にぶい黄色粘質土
67 黄褐色粘性微砂
68 黄褐色粘質土

第116図　砂場7区(上)、砂場8区(下) 南壁土層断面図(1/100)

第２節　弥生時代の遺構と遺物

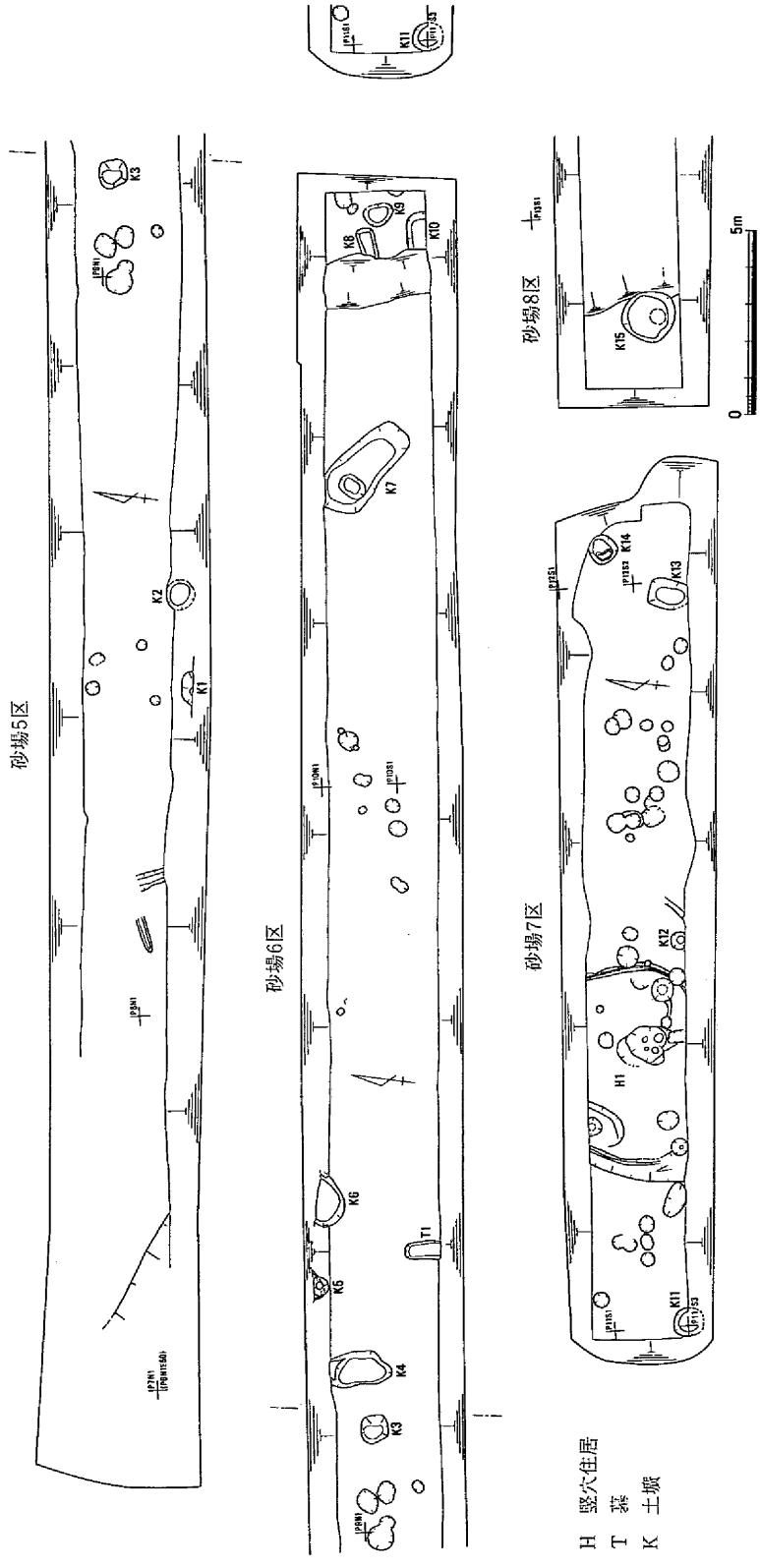
１　遺構配置

加茂政所遺跡から検出された弥生時代の遺構は、それほど多くない。しかも、検出されているのは、砂場５区から８区にかけての微高地上の、幅100ｍ程の範囲に限られている。

おもな遺構としては、７区において直径６ｍを測る後期の竪穴住居が検出された。また、６区においては、西部で中期の土壙墓や土壙群が検出されたのをはじめ、東部で大量の貝殻や獣骨などを廃棄し、貝塚が形成された中期の土壙が検出されている。

このほか、砂場５区から、後期の土壙が３基、砂場６区の東端で、後期の土壙３基、７区から中期の土壙１基と後期の土壙３基が、８区から後期の土壙１基が検出されている。さらに調査範囲が狭小なため、建物としてまとめることはできなかったものの、多数の柱穴が検出されている。

なお、加茂政所遺跡では、包含層中から前期の土器が出土しているが、検出された遺構は、中期から後期のものである。　（内藤）



第117図　加茂政所遺跡弥生時代遺構配置図（1/200）

2　遺構・遺物

竪穴住居１（第119図、図版11・46）

砂場７区の中央部やや西寄りにおいて検出された遺構である。遺構の南北両端は、調査区外におよんでいるため、正確な規模などは明らかでないが、検出状況などから径６ｍ程を測る円形の竪穴住居が推定される。遺構全体の半分程度しか確認できなかったため、主柱穴とみられる柱穴も３本が確認されたのみである。なお、調査区外にはあと３本の柱穴が推定され、６本柱で構成されていたと考えられる。柱穴は直径50㎝前後で、床面からの深さは40～60㎝を測りややばらつきがあるが、埋土は暗褐色粘性微砂が１層である。なお、これらの柱穴は、竪穴住居の壁面に添って廻る壁体溝に近接して設けられている。壁体溝の規模は床面から幅20㎝・深さ10㎝程を測り、黄褐色および暗灰黄色の粘性微砂が埋積している。竪穴住居の中央やや東寄りの位置に中央穴が設けられ、その周囲を中心に炭・焼土が多く認められる。中央穴は径100～120㎝程で、床面から深さ30㎝を測り、暗褐色粘性微砂が埋積している。また、中央穴の周囲４か所程の床面上に焼土面が確認された。なお、この中央穴は、直径40㎝・深さ50㎝程の柱穴状のピットの埋没後に設けられている。

出土遺物としては、床面および覆土中から**691～701**などの弥生土器が出土している。**691・692**は壺形土器の口縁部および頸部片であるが、同一個体の可能性がある。頸部外面は縦方向にハケ目調整され、その上に凹線がら旋状に廻っている。　**693・694**は口縁端部が「く」の字状に外反している鉢形土器、**695**は台付壺形土器片である。**696～699**は「く」の字状に外反した口縁端部が、やや内傾気味に上方へ拡張されている甕形土器の口縁部片で、内面は肩部までヘラケズリされている。**700・701**は高杯形土器で、**700**は内・外面とも細かいヘラミガキで仕上げられた杯部片、**701**は脚柱部片である。

この他に、床面から**Ｓ20**のサヌカイト製の石鏃片が出土している。

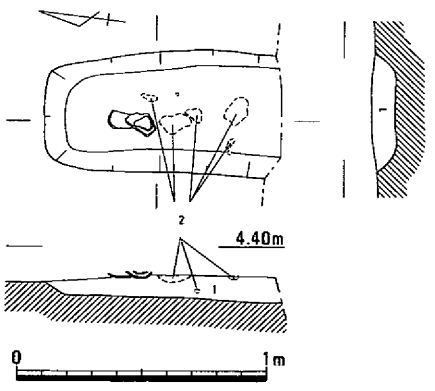
時期は、出土遺物などから弥生時代後期後半（弥・後・Ⅲ）と考えられる。　（内藤）

墓１（第118図、図版11）

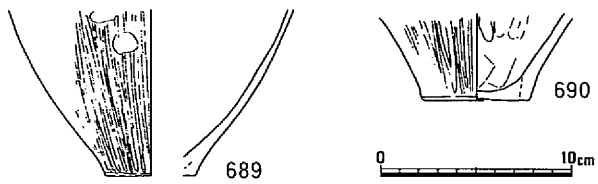
砂場６区の西部において検出された遺構で、南部は調査区外におよんでいる。検出状況から長方形の平面形を呈すると考えられる。規模は、長さは不明であるが幅50㎝・深さ10㎝前後を測り、底面はほぼ平坦である。埋土は、ほぼ灰黄褐色粘性微砂が１層であるが、底面より少し浮いたところに数か所骨片を含む灰色粘土がブロック状に認められた。人骨小片が確認されたことから、土壙墓と考えられる。

遺物は、北部の底面からやや浮いたところで、甕形土器の底部片などが若干出土している。

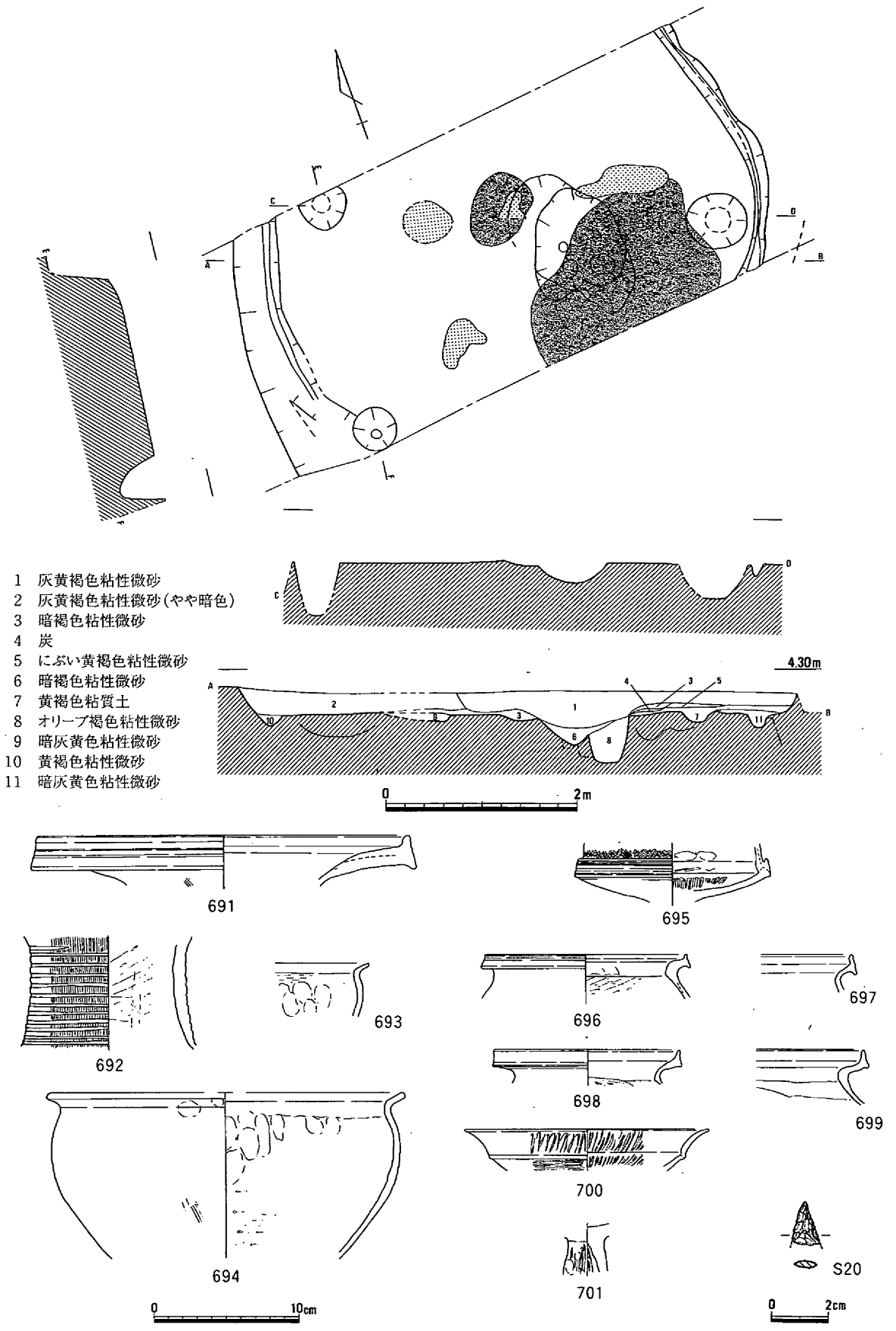
時期は、弥生時代中期中葉と考えられる。（内藤）



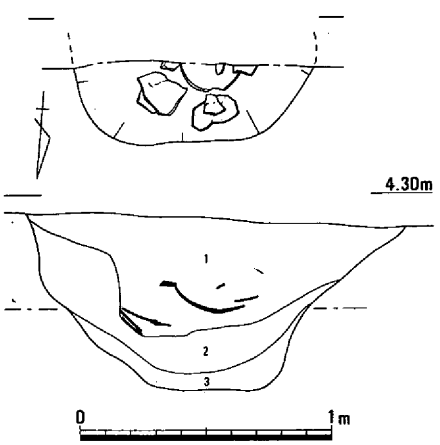
1　灰黄褐色粘性微砂
2　灰色粘土（含骨片）



第118図　墓１（1/30）・出土遺物（1/4）



第119図　竪穴住居１(1/60)・出土遺物(1/4，1/2)

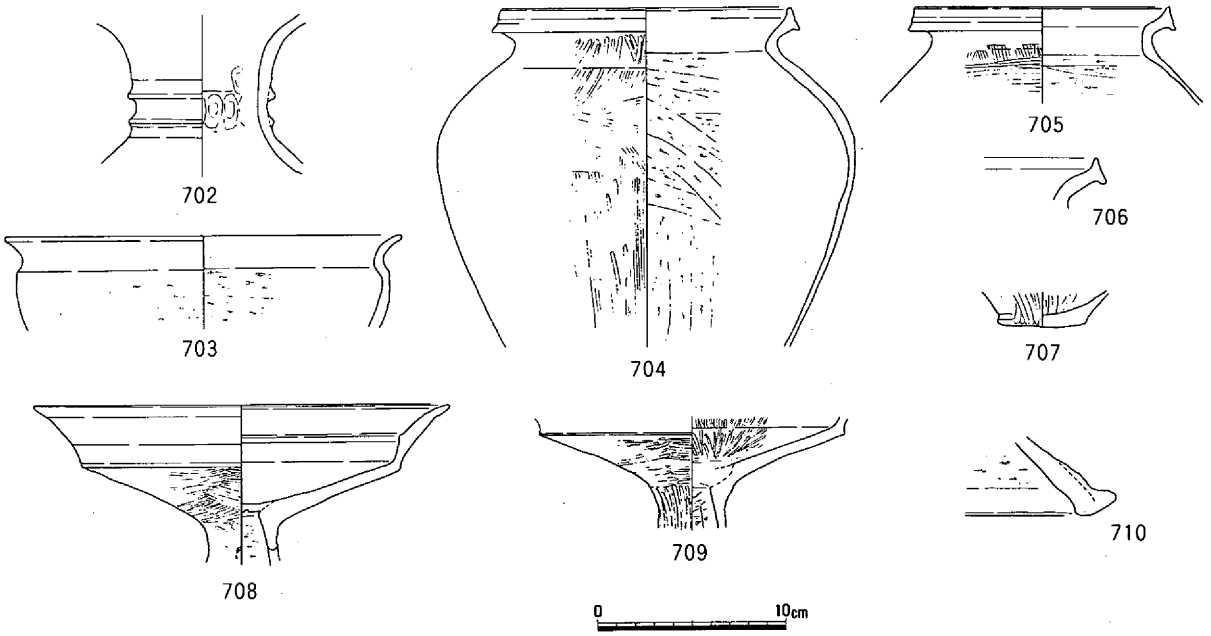


1　黒褐色粘性微砂
2　灰黄褐色粘性微砂
3　暗灰黄色粘性微砂

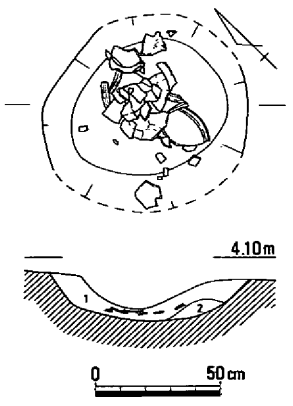
土壙１（第120図、図版11・42）

砂場５区のほぼ中央、南壁部にかかって検出された遺構である。多くが調査区外におよんでいるため、遺構の形状などは判然としないものの、検出面からの深さは70cm程を測る。埋土は３層に分かれ、第１層の黒褐色粘性微砂の下層から弥生土器・焼土塊などが出土している。

702は壺形土器の頸部片で断面三角形の貼り付け突帯が２条巡っている。**703**は口縁端部が開き気味に外反している鉢形土器である**704～706**は「く」の字状に外反した口縁端部がやや肥厚し、外面に凹線が巡る甕形土器で、内面は肩部までヘラケズリされている。**707**は甕形



第120図　土壙１(1/30)・出土遺物(1/4)



1　暗灰黄色粘性微砂
2　暗褐色粘性微砂

第121図　土壙２(1/30)

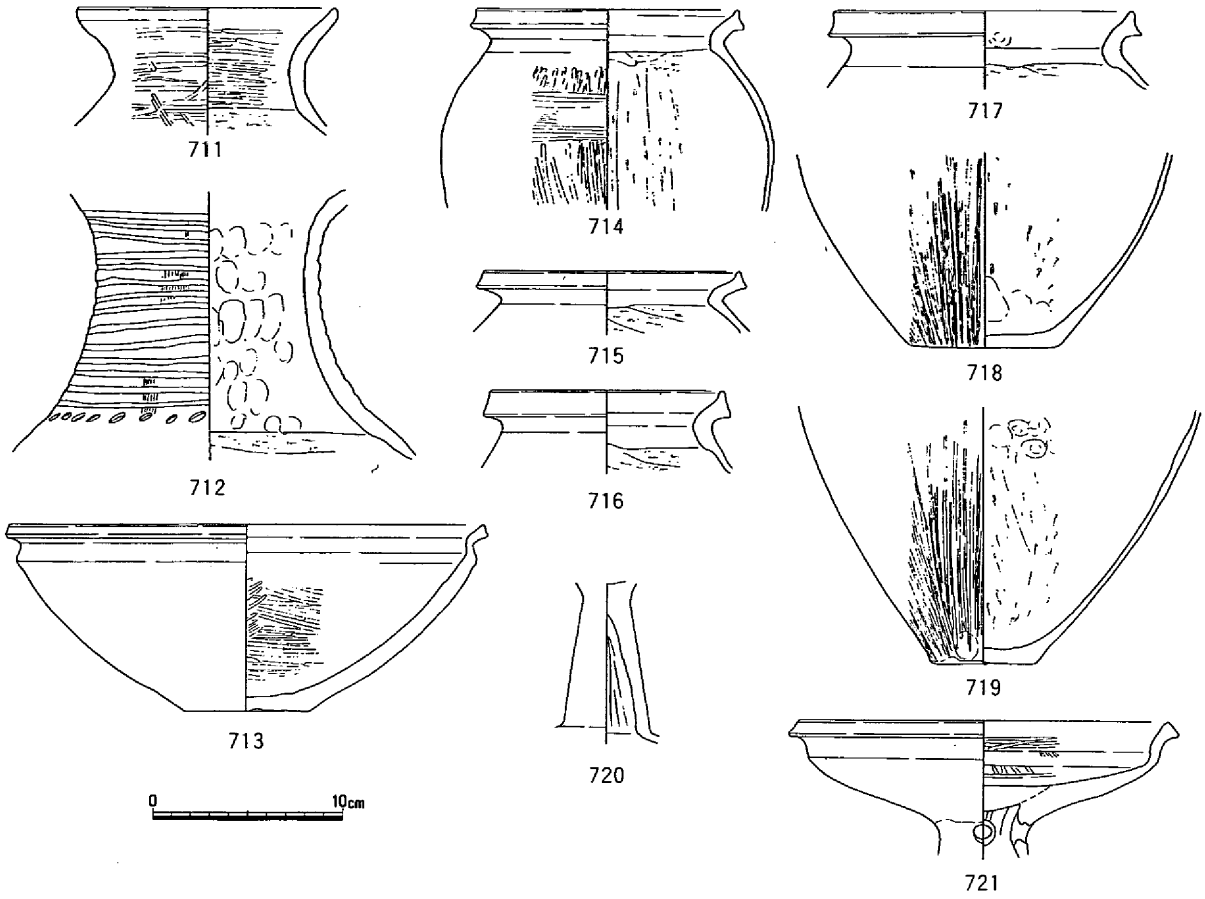
土器の底部片である。**708～710**は高杯形土器で、**708**の脚柱部には円孔の透かしがある。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期中頃と考えられる。（内藤）

土壙２（第121･122図、図版42）

砂場5区の中央やや東寄りの南壁付近において検出された遺構で、上面が後世の溝7により削平を受けている。規模は、直径80cm前後のやや歪んだ円形を呈し、検出面からの深さはわずか18cmを測るのみである。埋土は、暗灰黄色粘性微砂が埋積し、比較的平坦な底面近くから弥生土器がまとまって出土している。

711は頸部から口縁部が緩やかに外反している壺形土器、**712**は壺形土器の頸部片である。**713**は「く」の字状に外反した口縁端部がわずかに肥



第122図　土壙２出土遺物(1/4)

厚し、外面に凹線が巡る鉢形土器である。**714～719**は甕形土器で、口縁部は「く」の字状に外反した端部が肥厚し少し上方に拡張している。**721**は高杯形土器で脚柱部に円形の透かしがある。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期中頃と考えられる。(内藤)

土壙３（第123図）

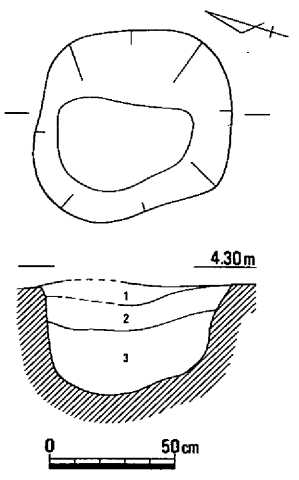
砂場５区の東端部において検出された遺構である。規模は、一辺70cm前後のやや歪んだ隅丸方形を呈し、検出面からの深さは45cmを測る。埋土は３層あり、第３層の灰黄褐色粘性微砂から弥生土器の細片が出土している。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期と考えられる。（内藤）

土壙４（第124図、図版46）

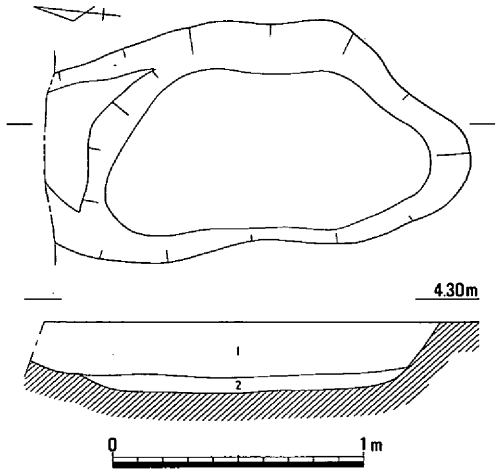
砂場6区の西端部、土壙３から80cm程東において検出された遺構である。規模は、北端部が調査区外におよんでいて、長さは判然としないものの、幅90cm・深さ28cm程を測り、平面形はやや歪んだ長楕円形を呈している。底面はほぼ平坦である。

埋土は２層あり、下層のにぶい黄褐色粘質土から土器の細片などが出土している。骨片などは認められなかったが、検出状況などから土壙墓とも考えられる遺構である。



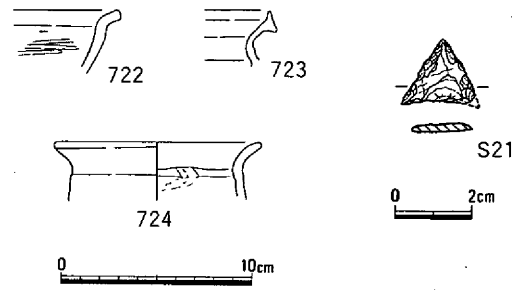
1　暗灰黄色粘性微砂
2　暗灰黄色粘性微砂
3　灰黄褐色粘性微砂

第123図　土壙３(1/30)



1　暗灰黄色粘性微砂
2　にぶい黄褐色粘質土

第124図　土壙４(1/30)・出土遺物(1/4,1/2)



出土遺物として、722の鉢形土器や723・724の甕形土器が出土しているが、いずれも細片である。

これらの土器のほか、S21のサヌカイト製石鏃が出土している。

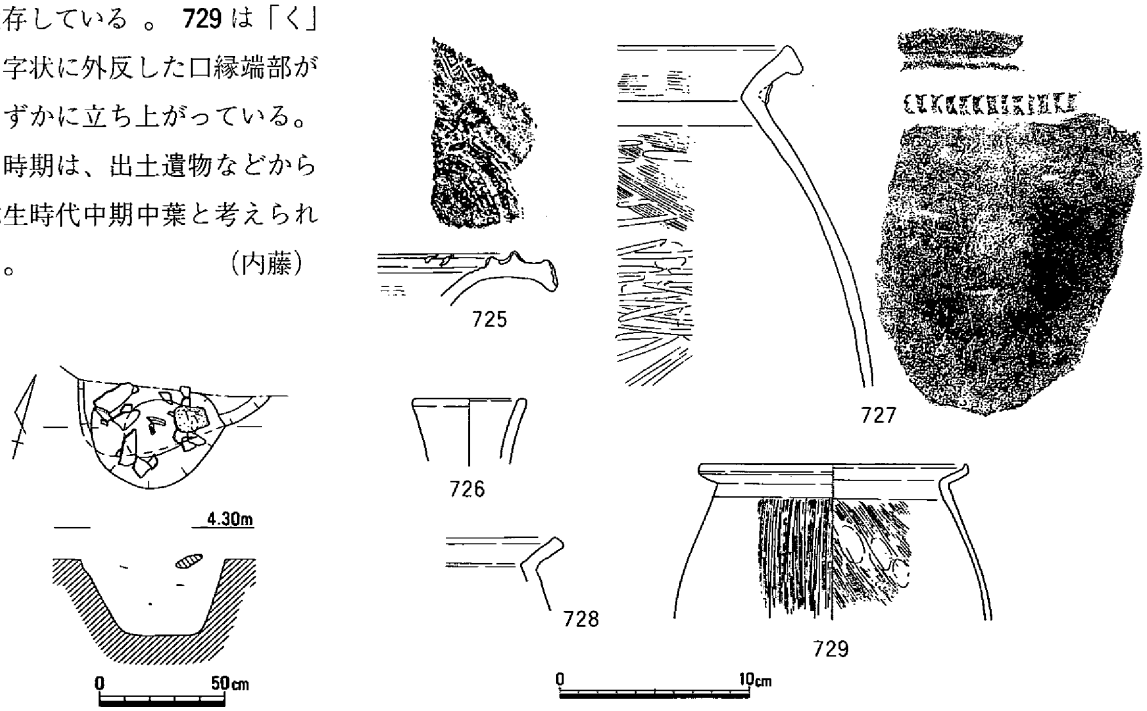
時期は、出土遺物などから弥生時代後期と考えられる。　（内藤）

土壙５（第125図）

砂場６区西部の北壁付近、土壙４から1.5ｍ程東において検出された遺構である。北測が調査区外におよんでいるため、規模、形状などは全く不明である。検出面からの深さは30㎝程を測り、南端部はピット状を呈する土壙である。埋土は灰黄褐色粘質土が１層で、土器の細片のほか骨片が出土している。底面はほぼ平坦である。

出土遺物のうち725は壺形土器の口縁部片で、拡張した口縁端面に鋸歯文が巡っている。726は直口壺の口縁部片、727～729は甕形土器である。727の口縁が「く」の字状に外反した外面に突帯が貼り付けられ、爪圧痕が巡っている。内面はヘラミガキされ、口縁部および体部上半には調整のハケ目が遺存している。729は「く」の字状に外反した口縁端部がわずかに立ち上がっている。

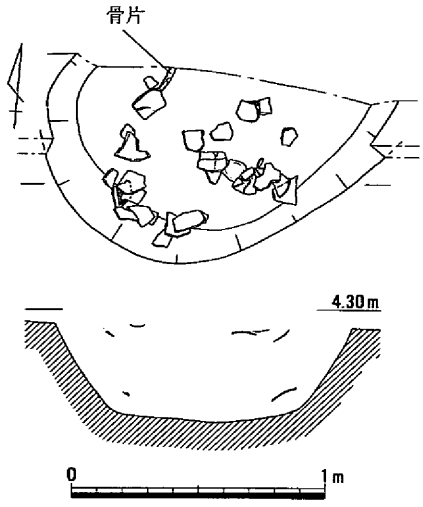
時期は、出土遺物などから弥生時代中期中葉と考えられる。　（内藤）



第125図　土壙５(1/30)・出土遺物(1/4)

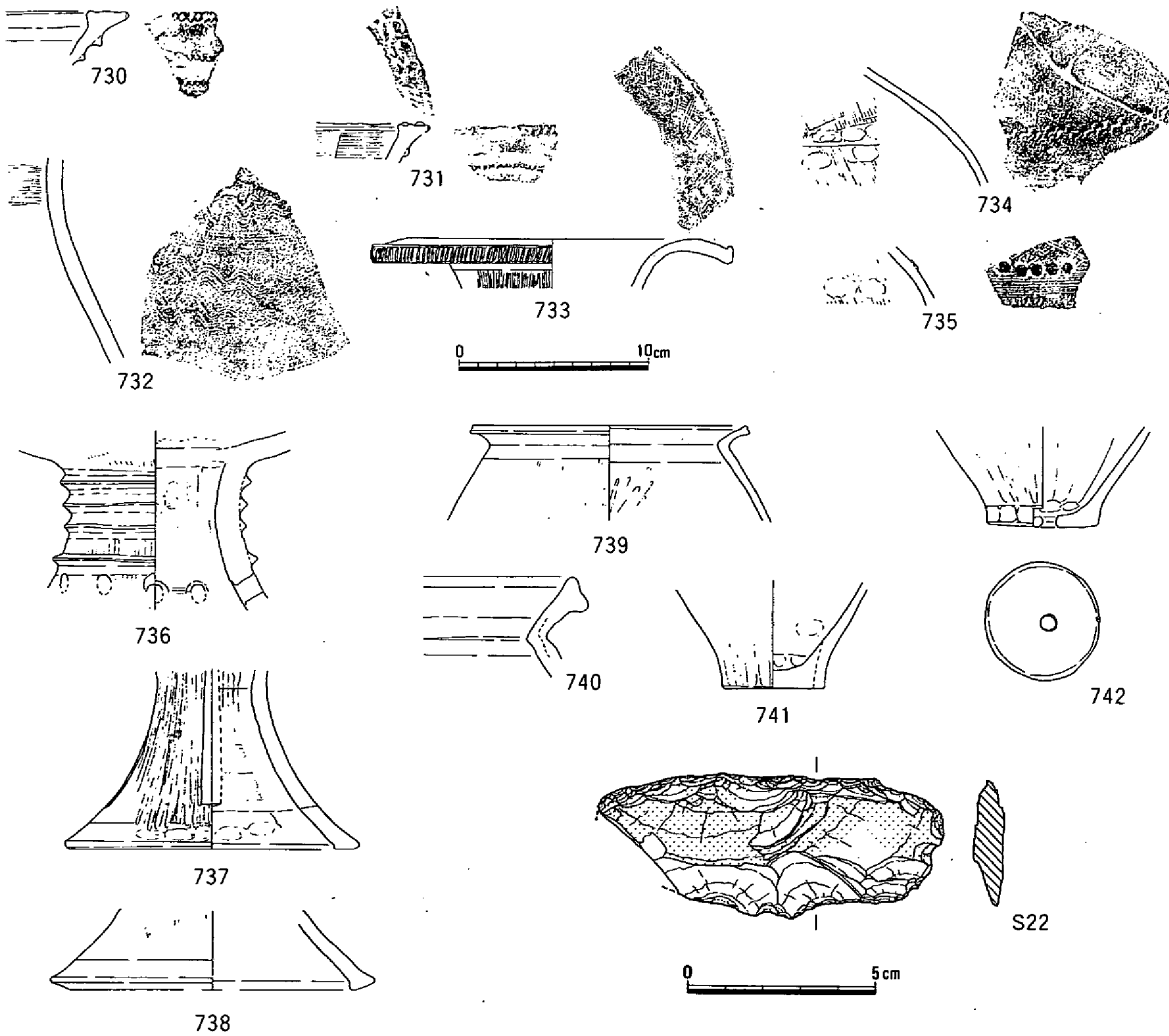
土壙６（第126図、図版12・46）

砂場６区の西部北壁部、土壙５の東１ｍ程において検出された遺構である。北側が調査区外におよんでいるため、全体の規模などは不明であるが、短径120㎝程の楕円形を呈する土壙と推察される。検出面からの深さは38㎝を測り、底面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色粘性微砂が１層で、比較的多くの土器などが出土している。



730・731は肥厚して開き気味に立ち上がる壺形土器の口縁端部片である。**730**の外面には刻み目が、**731**の上面には円形の浮文が巡っている。**732～735**も壺形土器の口縁部や肩部の細片である。**736～738**は高杯形土器の脚部片で、**736**の脚柱部は断面三角形の貼り付け突帯４条を巡らせ、脚部に円形の透かしがある。**739～742**は口縁部が「く」の字状に外反している甕形土器の口縁部や底部片である。**742**の底部には焼成後円孔が穿たれている。

これらの土器のほか、S22のサヌカイト製スクレイパーが出土している。



第126図　土壙６（1/30）・出土遺物（1/4，1/2）

なお、出土遺物のなかには、５ｍ程西に位置する土壙３と接合する土器が認められている。

時期は、出土遺物などの状況から弥生時代中期中葉と考えられる。　（内藤）

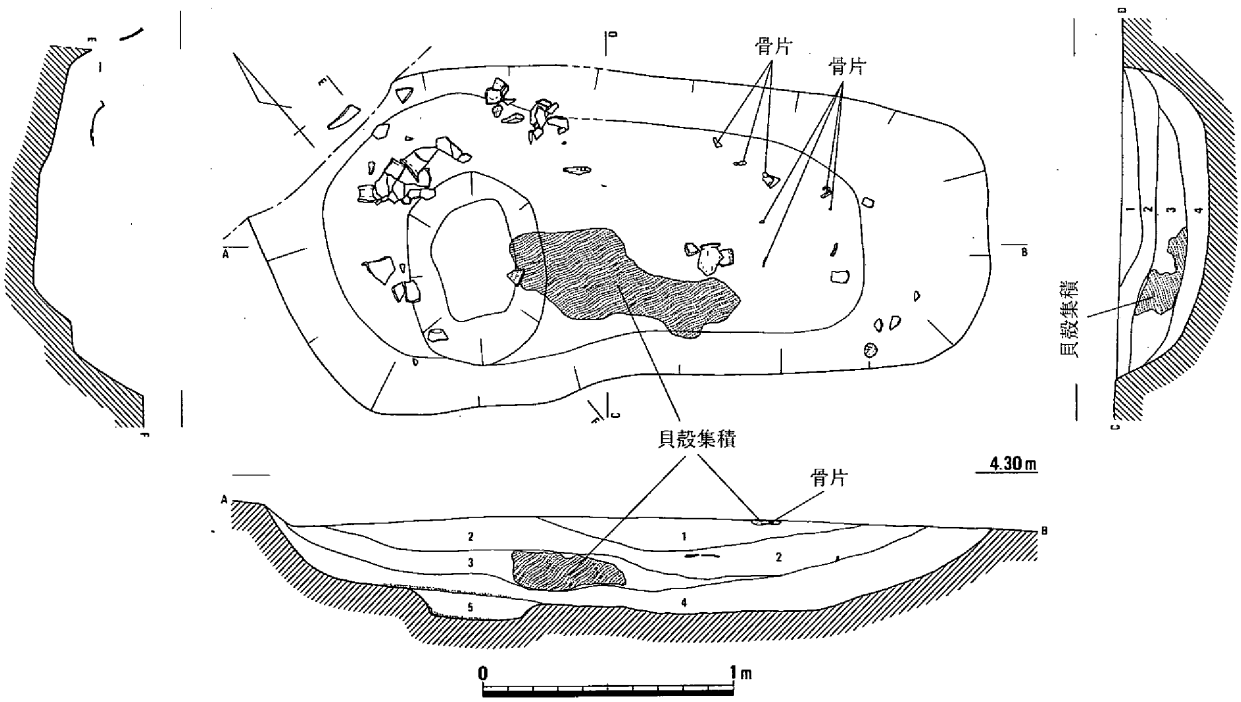
土壙７（第127・128図、巻頭図版１、図版12・13・42・46）

砂場６区の東部北寄りにおいて検出された遺構である。規模は、北端の一部が調査区外におよんでいるが、長辺300㎝・短辺130㎝程の隅丸長方形を呈する土壙墓状の遺構である。検出面からの深さは38㎝程を測り、底面は比較的平坦であるが、北寄りの底面に77×53㎝の楕円形で、深さ10㎝程の窪みが認められる。埋土は５層あり、第１層の黄灰色粘質土には、焼土・炭などと伴に、大量の獣骨・貝殻などが出土している。また、第３層の灰オリーブ色粘土中には多量の土器片と伴に、貝殻の集積が認められ、貝塚が形成されている土壙である。

743は口縁部がやや肥厚して上方に立ち上がる壺形土器で、外面に多条の沈線と波状文を施している。**744**も同様の体部片である。**745～747**は壺形土器の口縁部片で、**747**の端部外面には波状文を巡らし、上面および外面に円形浮文を貼り付けている。**748～751**は高杯形土器で、**748**の杯部上端には蓋を取り付けたとみられる円孔が穿たれている。**750**の端部上面には円形浮文が貼り付けられ、**751**の脚裾部には、長方形の透かしと円孔が交互に穿たれている。**752～755**は口縁端部が肥厚しないで「く」の字状に外反している甕形土器で、内面はハケ目調整後体部下半までヘラミガキされている。**752**の底部は焼成後、円孔が穿たれている。

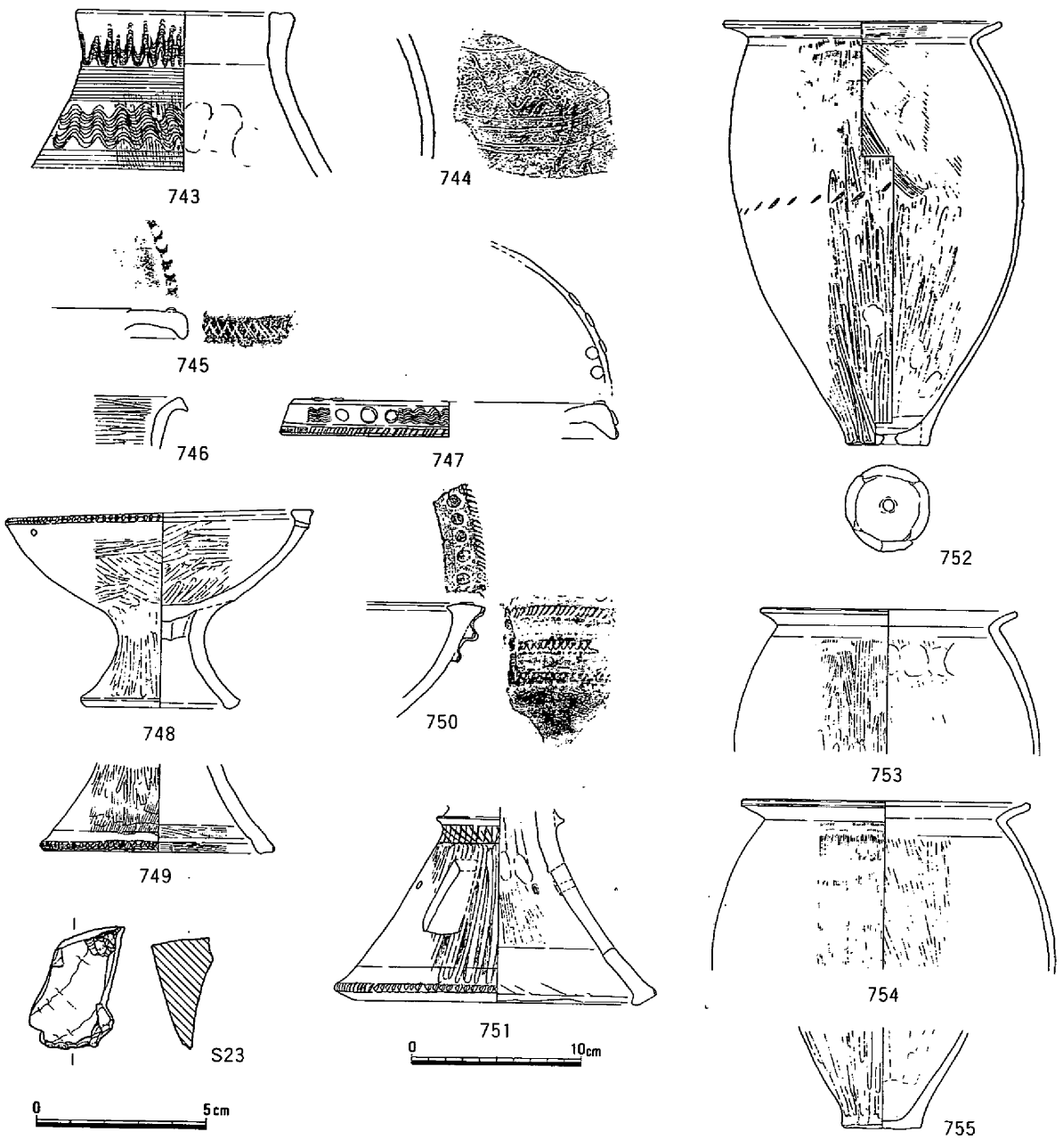
これらの土器のほか、**Ｓ23**のサヌカイト製の楔形石器が出土している。

時期は、出土遺物などの状況から弥生時代中期中葉と考えられる。　（内藤）

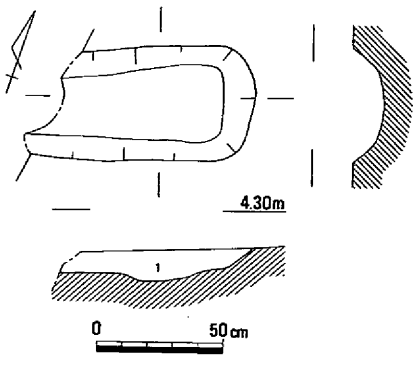


1　黄灰色粘質土
（含焼土粒・貝殻・炭粒）
2　灰黄褐色粘性微砂
（含黄色粘質土斑・炭粒）
3　灰オリーブ色粘土
（貝殻・土器片多量）
4　暗灰黄色粘質土
（下面に炭化物層）
5　黒褐色粘性微砂
（下面に炭化物層・
粗粒の状態）

第127図　土壙７（1/30）

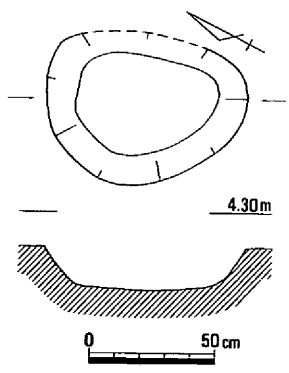


第128図　土壙７出土遺物（1/4，1/2）

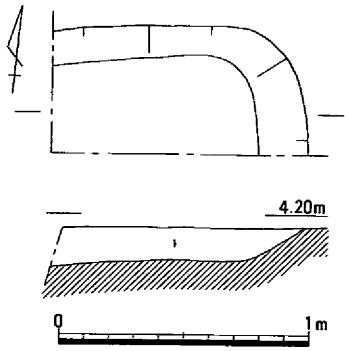


1　暗灰黄色粘性微砂

第129図　土壙８（1/30）

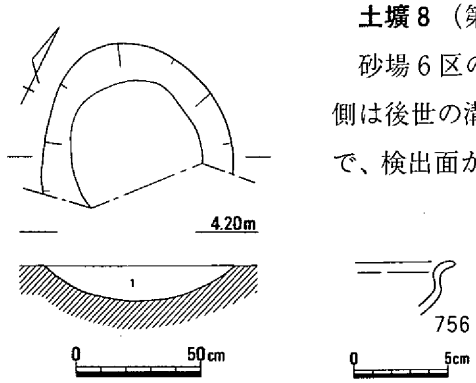


第130図　土壙９（1/30）



1　暗灰黄色粘性微砂

第131図　土壙10（1/30）



1　灰黄褐色粘性微砂

第132図　土壙11（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙８（第129図）

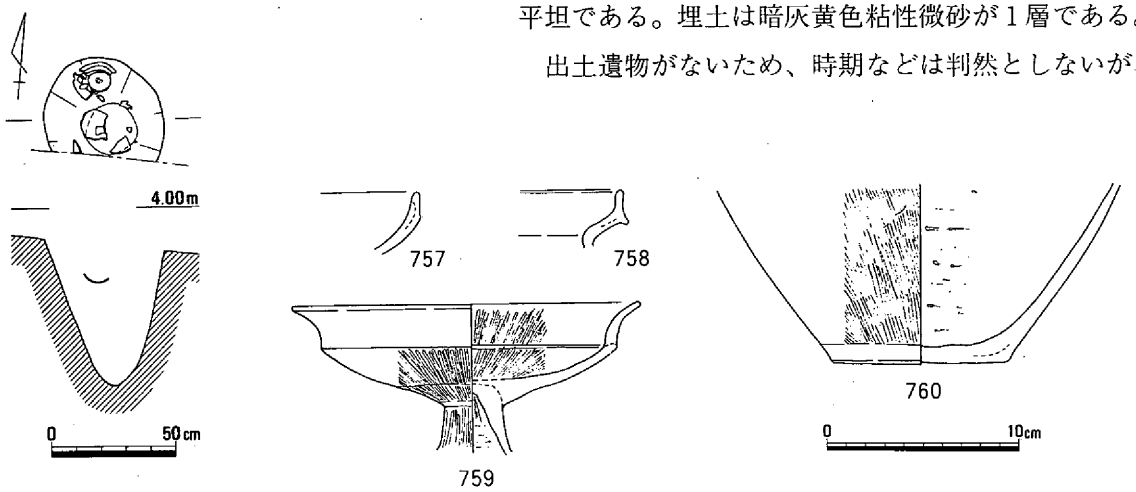
砂場６区の東端部、土壙９の西にほぼ接して検出された遺構で、西側は後世の溝９により削平されている。規模は、幅45cm程の隅丸長方形で、検出面からの深さは12cm前後を測る。埋土は暗灰黄色粘性微砂が１層で弥生土器の細片が出土している。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期頃と考えられる。（内藤）

土壙９（第130図）

砂場6区東端部、土壙10の北40cm程において検出された遺構である。規模は、80×60cm程でやや歪んだ楕円形を呈する。検出面からの深さは17cmを測り底面は平坦である。埋土は暗灰黄色粘性微砂が１層である。

出土遺物がないため、時期などは判然としないが、



第133図　土壙12（1/30）・出土遺物（1/4）

埋土の状況などから弥生時代後期頃と考えられる。（内藤）

土壙10（第131図）

砂場6区東端部南壁付近で検出された遺構で、土壙8の南80cm程に位置している。西側は後世の溝9に削平され、南側は調査区外におよんでおり規模などは不明である。検出面からの深さは12cm程を測り、底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰黄色粘性微砂が１層で弥生土器の細片が出土している。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期頃と考えられる。（内藤）

土壙11（第132図）

砂場７区西端の南壁付近において検出された遺構である。南側が調査区外におよんでいるため、全体の規模などは不明であるが、径80cm程の楕円形を呈する土壙と推察される。検出面からの深さは38cmを測る。埋土は灰黄褐色粘性微砂が１層で土器の細片が出土している。

756は高杯形土器の口縁部片であるが、器面が剥離していて調整などは不明である。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期頃と考えられる。（内藤）

土壙12（第133図、図版42）

砂場7区の中央部南端、竪穴住居１から50cm程東において検出された遺構である。南端の一部が調査区外におよんでいるが、直径50cm・深さ55cmを測る柱穴状の土壙である。埋土は、暗褐色粘性微砂

が１層であるが、埋土上半に土器が多く含まれている。

757は鉢形土器、758は甕形土器のいずれも口縁部片である。759は高杯形土器の杯部から脚柱部で、内・外面ともヘラミガキにより丁寧に仕上げられている。760は底部片である。

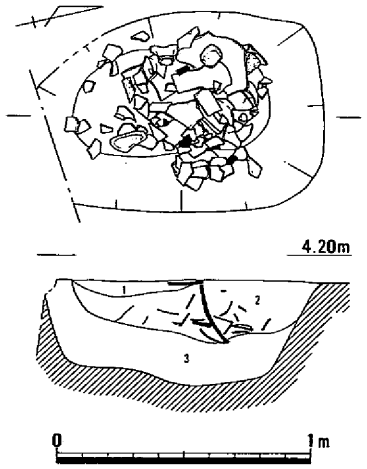
時期は、土器などから弥生時代後期後半と考えられる。（内藤）

土壙13（第134図、図版13･42･46）

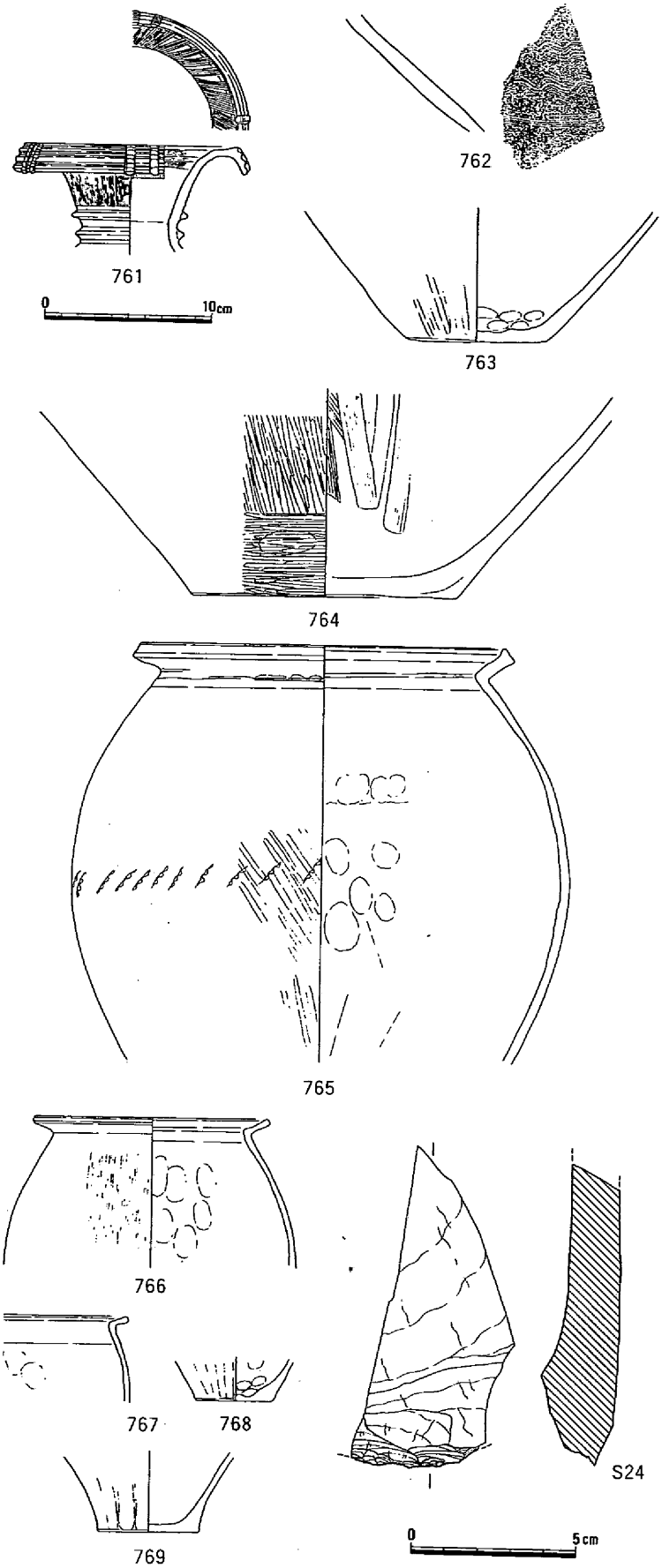
砂場７区の東部、土壙14の南側1.2ｍ程において検出された遺構である。南端部は調査区外におよんでいるが、120×80㎝程のやや歪な隅丸長方形を呈する土壙である。底面は南側が少し高くなっているが、検出面からの深さは40㎝を測る。埋土は３層で、第２層の灰黄褐色粘性微砂中に多量の土器などが含まれている。

出土遺物の内761～764は壺形土器、765～769は甕形土器である。

また、これらの弥生土器のほか



1　黒褐色粘性微砂（含炭）
2　灰黄褐色粘性微砂
3　灰黄褐色粘性微砂（粘性弱）



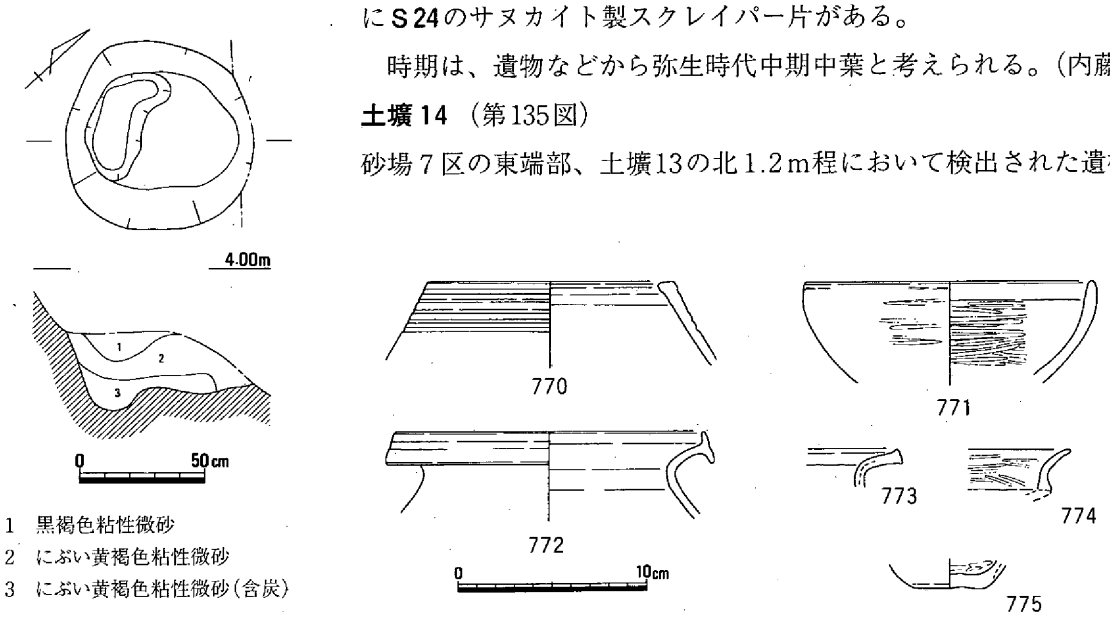
第134図　土壙13（1/30）・出土遺物（1/4，1/2）

にＳ24のサヌカイト製スクレイパー片がある。

時期は、遺物などから弥生時代中期中葉と考えられる。（内藤）

土壙14（第135図）

砂場７区の東端部、土壙13の北1.2ｍ程において検出された遺構で



第135図　土壙14（1/30）・出土遺物（1/4）

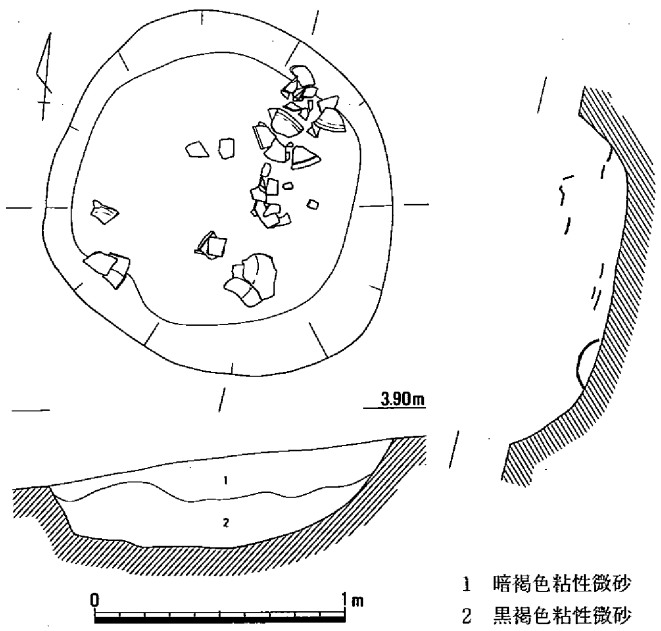
ある。規模は、直径75㎝程の円形を呈する土壙で、検出面からの深さは25㎝程を測る。南西側に一段窪みが認められる。埋土はにぶい黄褐色粘性微砂が埋積し、上部に黒褐色粘性微砂がある。

出土遺物としては、**770**の壺形土器、**771**の鉢形土器、**772・773**の甕形土器、**774**の高杯形土器などがあるが、いずれも細片である。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期後半と考えられる。（内藤）

土壙15（第136・137図、図版14・42）

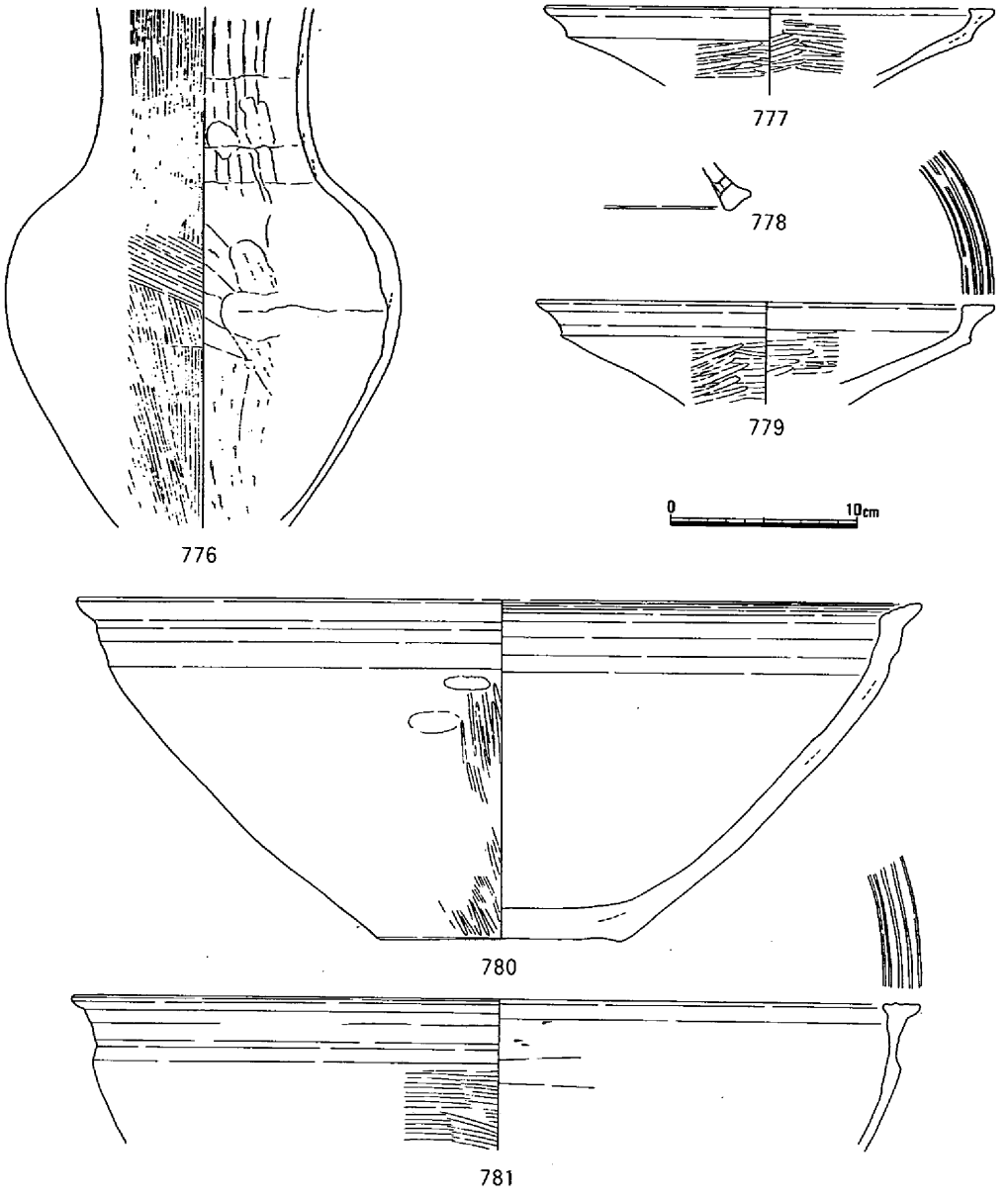
砂場８区の西端部、微高地傾斜面肩部において検出された遺構である。規模は、直径140㎝程でやや方形に近い円形の平面形をもつ土壙である。検出面からの深さは35㎝を測り、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に分かれるが、いずれも黒っぽい褐色粘性微砂である。



第136図　土壙15（1/30）

出土遺物のうち底面近くでは、ほぼ完形の土器が認められている。**776**は壺形土器、**777～779**は高杯形土器である。高杯形土器の杯部は、内・外面とも丁寧なヘラミガキが施され、**777・779**の拡張された口縁端面には凹線文が巡らされている。また、**778**の脚裾部には、円孔が穿たれている。**780**はほぼ完形の鉢形土器で、体部外面はヘラミガキされている。**781**は大形の鉢形土器の口縁部片である。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期と考えられる。（内藤）



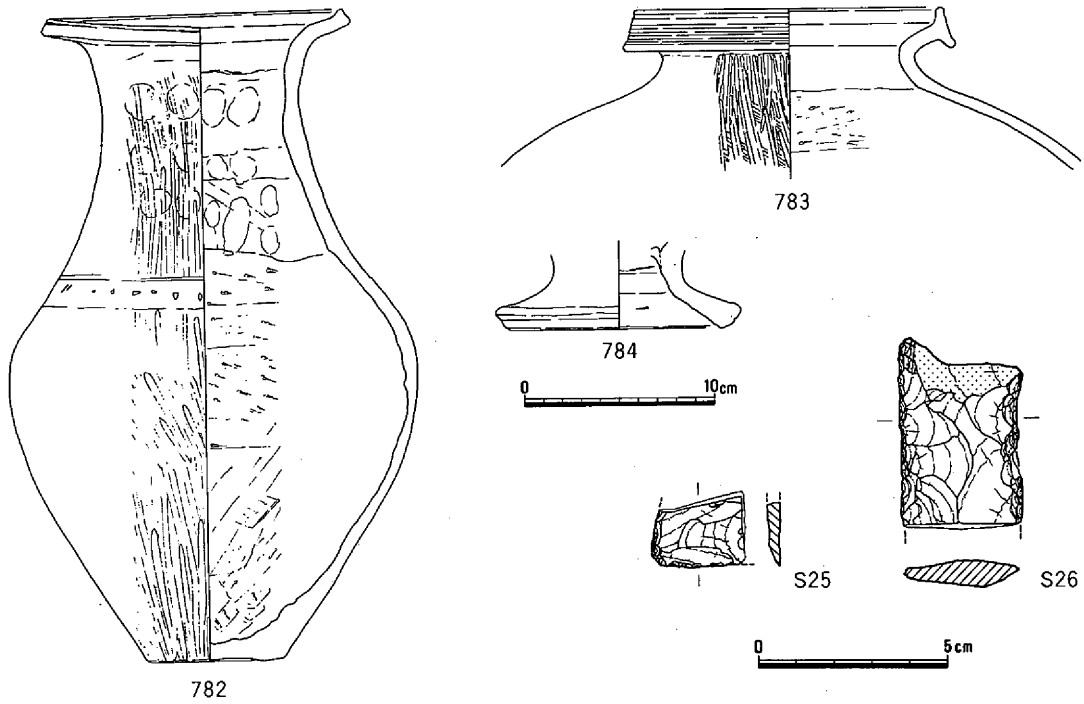
第137図　土壙15出土遺物(1/4)

砂場８区微高地傾斜面出土遺物（第138図、図版42・46）

砂場８区の西端部から、弥生時代の微高地は東に向かって急激に下がりはじめ、傾斜面を形成している。この斜面の埋土である、にぶい黄褐色粘性微砂および灰黄色粘性微砂中から弥生土器などが出土している。**782**はやや急な「ハ」の字状を呈する頸部をもつ壺形土器で、頸部から緩やかに外反する口縁端部がわずかに上方に摘み上げられている。外面はヘラミガキされ、頸部と体部の境にヘラ先による列点文が巡っている。体部内面は、ヘラケズリされている。頸部には内・外面とも指オサエの痕跡が認められる。**783**は壺形土器の口縁部片で、体部から外反した口縁端部が上下に拡張され、端面に４・５条の凹線を巡らせている。体部は、外面がハケ目の後ヘラミガキ、内面はヘラケズリされている。**784**は台部片である。

これらの土器のほかに、サヌカイト製の石器片などが若干出土している。**S25**はスクレイパー、**S26**は石槍の断片とみられる。

（内藤）



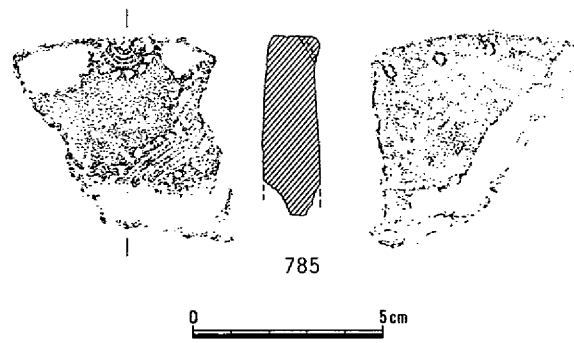
第138図　砂場８区微高地傾斜面出土遺物（1/4，1/2）

その他の遺物（第139・140図、図版42・46）

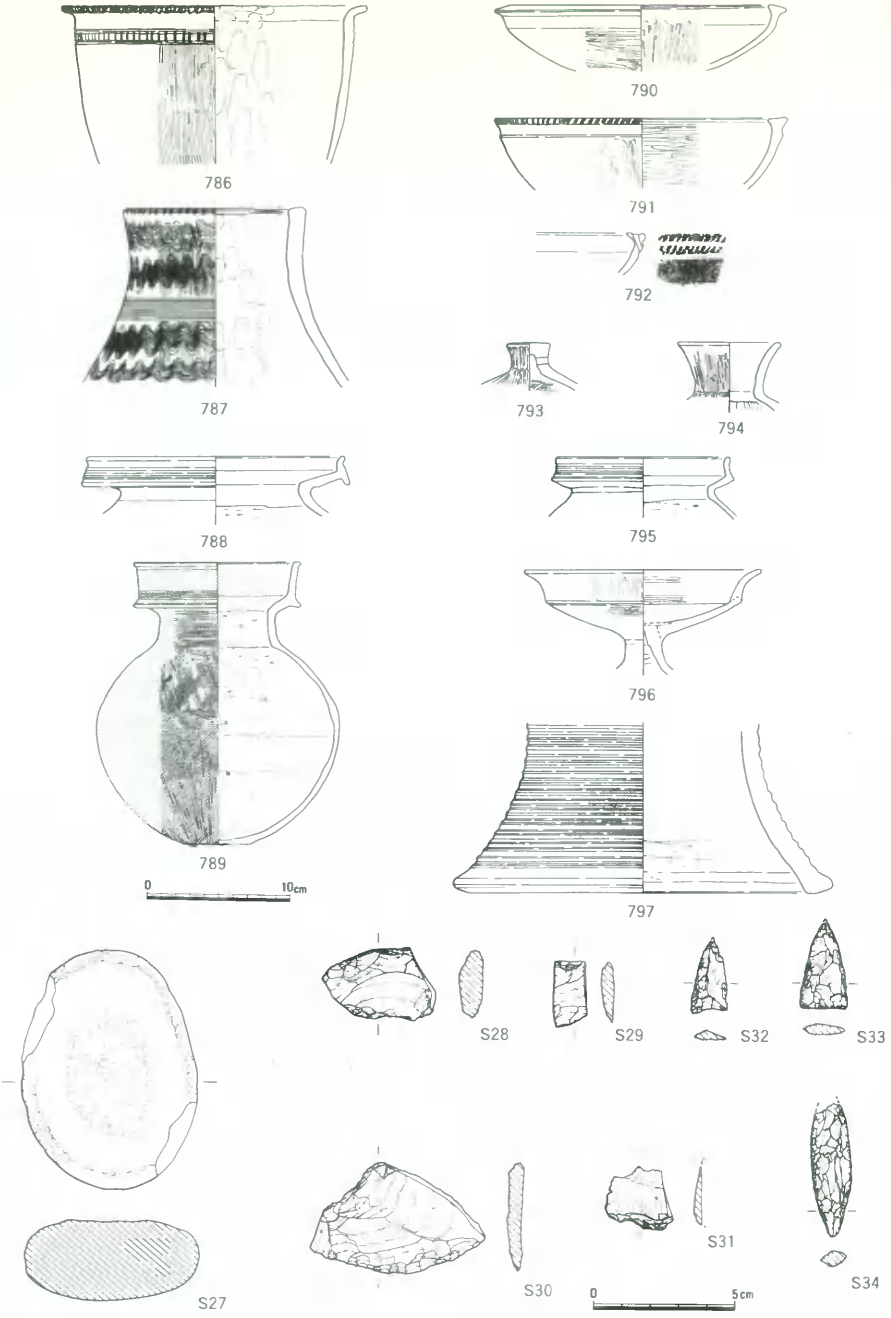
加茂政所遺跡では、遺構には伴なっていないものの、弥生時代の遺物が包含層などから多く出土している。**785**は分銅形土製品の細片である。遺存している全長は48㎜・幅55㎜で最大厚15㎜を測る。器面がかなり傷んでいるが、表側上端を渦文や列点文で飾り、裏側上端部に穿孔があることから上半部の破片と考えられる。

786は口縁端部を外反させた弥生時代前期の甕形土器で、屈曲部下側に２条のヘラ描き沈線が巡り、その間に縦方向の沈線が巡っている。外面は縦方向のハケ目、内面は指ナデされている。**787**は口縁部が肥厚気味に上方に立ち上がる弥生時代中期の壺形土器で外面は波状文で飾られ、頸部と体部の境に櫛描き沈線が巡っている。**788**は口縁端部が上下に拡張されている甕形土器、**789**は口縁端部を大きく上方に立ち上げ、丁寧に仕上げられた壺形土器で、外面および口縁部内面は丹塗りされたいずれも弥生時代後期の土器である。また、**790～792**は高杯形土器の口縁部片、**793**は蓋形土器の摘み部片、**794**は壺形土器で弥生時代中期の土器である。**795**は「く」の字状に外反させた口縁端部を上方に立ち上げ、外面に凹線を巡らせている甕形土器、**796**は高杯形土器、**797**は器台で弥生時代後期の土器である。

なお、これらの弥生土器のほかに敲石**S27**や**S28～S34**などのサヌカイト製石器が出土している。敲石は一部が欠損しているものの中央部に使用痕がある。**S28・S29**は楔形石器、**S30・S31**はスクレイパー、**S32～S34**は石鏃である。（内藤）



第139図　加茂政所遺跡出土分銅形土製品（1/2）



第140図　加茂政所遺跡出土弥生時代遺物（1/4，1/2）

第３節　古墳時代の遺構と遺物

１　遺構配置

加茂政所遺跡から検出された古墳時代の遺構は、ほぼ調査区の全域におよんでいる。しかし、特に遺構が集中しているのは、砂場１区の東端から砂場３区の中央部までと、砂場５区中央部から砂場８区西端の微高地上部分においてである。いずれも竪穴住居を中心とした遺構群が広がっている。

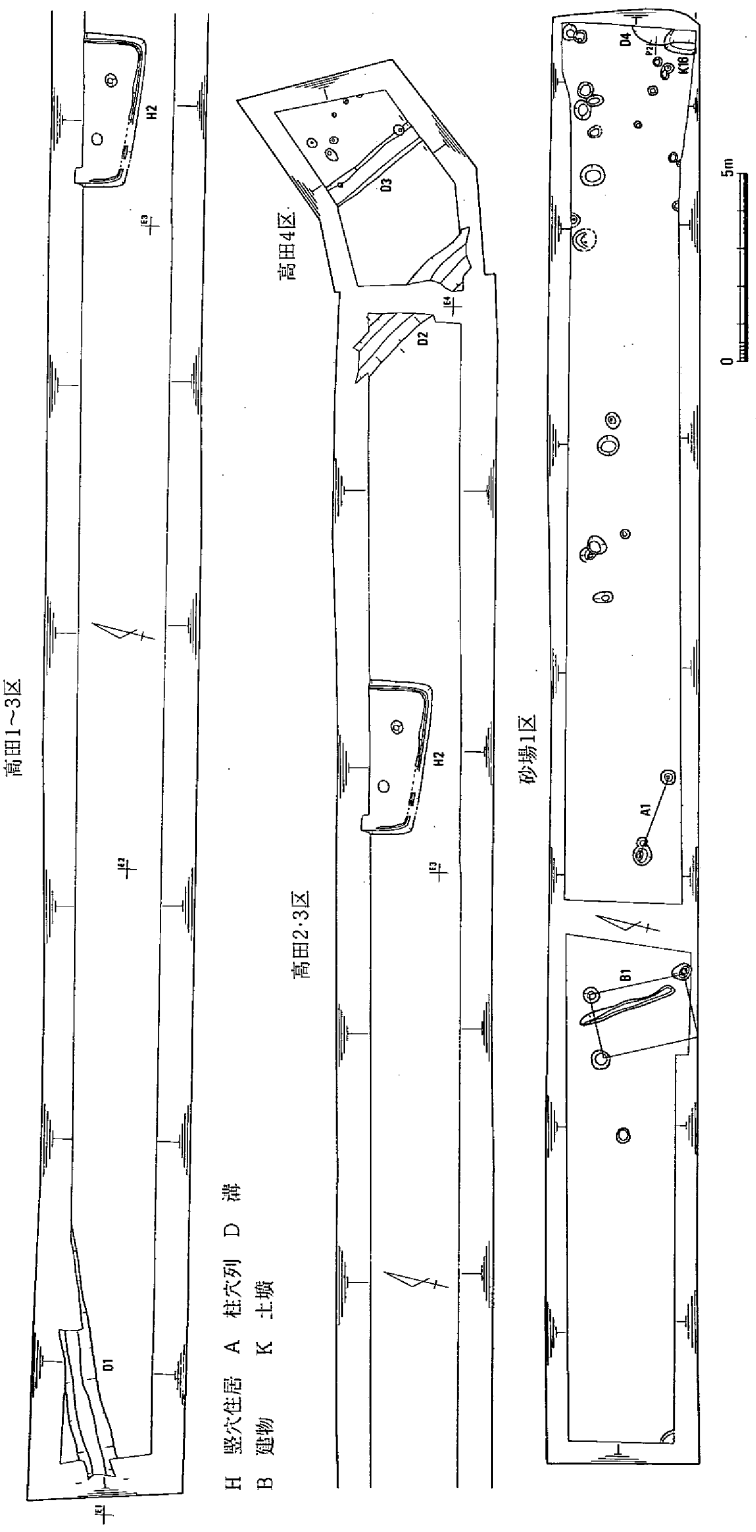
各調査区の古墳時代の主な遺構をあげてみると、高田１区では、西端部に後期の溝がある。また、高田３区の中央部には、後期の竪穴住居がある。高田３区の東端から高田４区にかけては前期の溝が検出されている。

砂場１区からは、中央やや西寄りにおいて、後期の建物および柱穴列が、東端において後期の土壙・溝が検出されている。

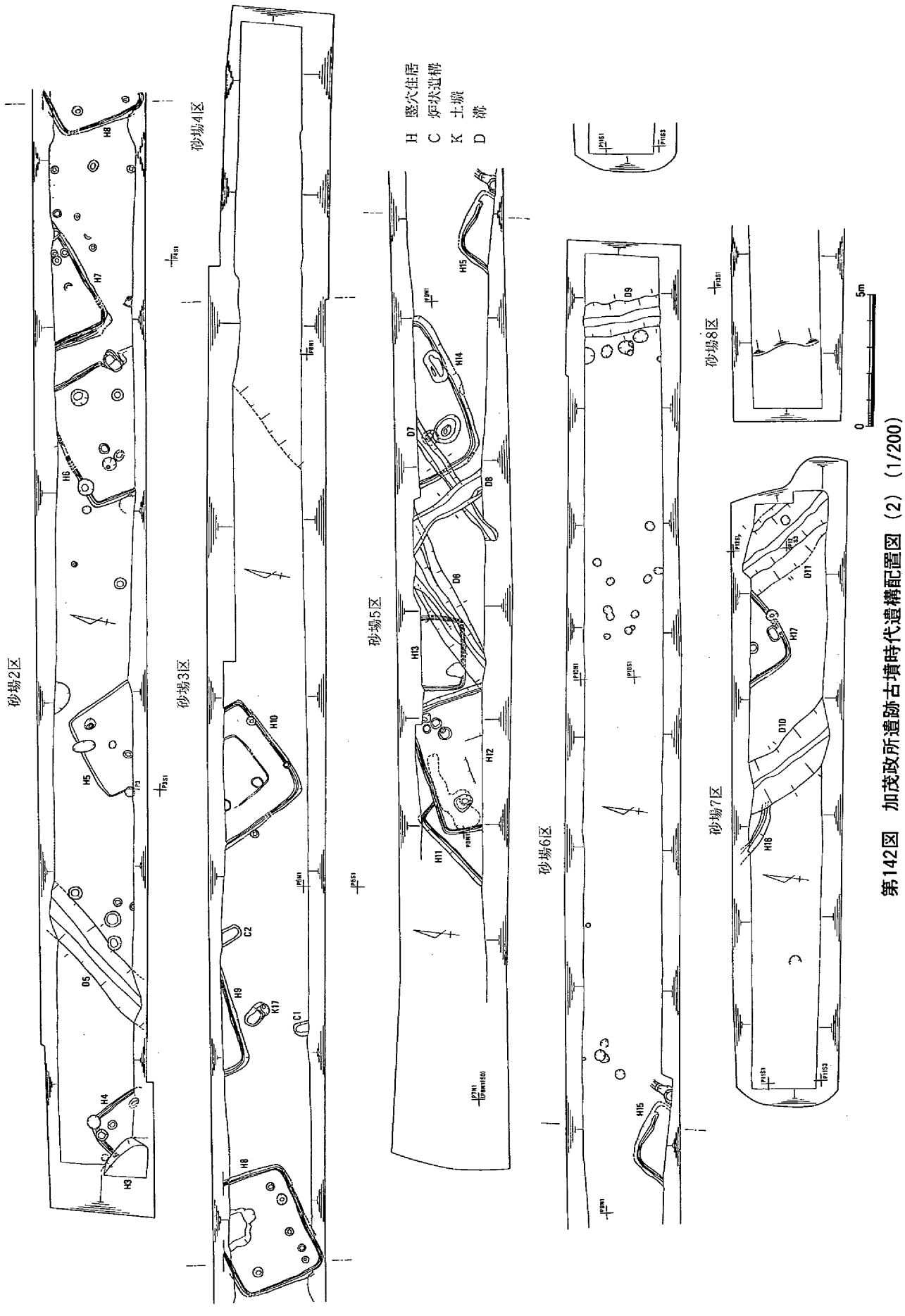
砂場２区から３区にかけては、２区の西端部で１軒、中央部で１軒、東部から３区中央部にかけては５軒、竪穴住居が検出されている。いずれも後期のものである。また、２区の西部で後期の溝が検出されているほか、３区の西部では、後期の炉状遺構が２基検出されている。

砂場４区は、低位部にあたり、古墳時代の遺構は検出されていない。

砂場５区では、中央部で前期の竪穴住居が４軒検出されたほか、後期の溝３条が検出された。



第141図　加茂政所遺跡古墳時代遺構配置図（1）（1/200）



第142図　加茂政所遺跡古墳時代遺構配置図（2）（1/200）

砂場５区から６区にかけては、カマドをもつ後期の竪穴住居が１軒検出され、砂場６区東端においては、前期の溝１条が検出されている。

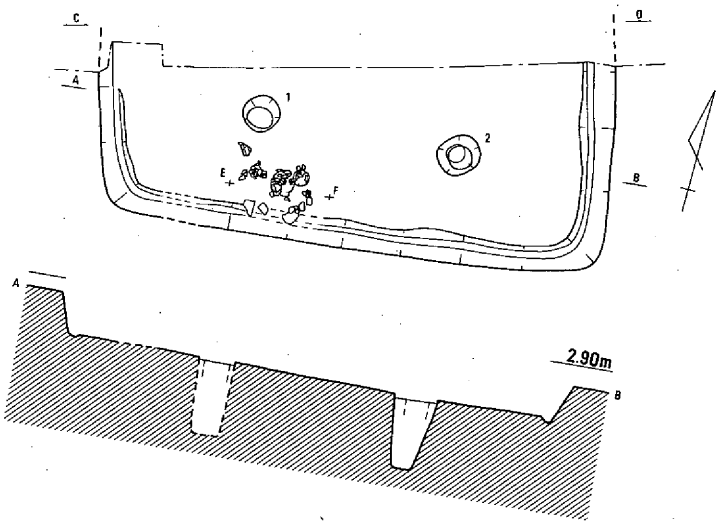
砂場７区では、中央部から東部にかけて、前期の竪穴住居２軒と溝２条が検出されている。

この他に、加茂政所遺跡では、調査区が狭小なためまとめることはできなかったが、多数の柱穴が検出されており、建物がさらにふえる可能性もある。　(内藤)

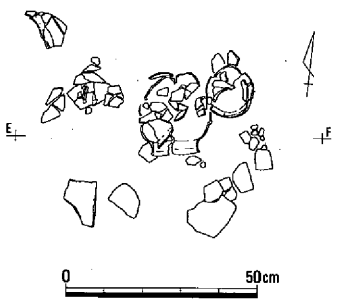
2　遺構・遺物

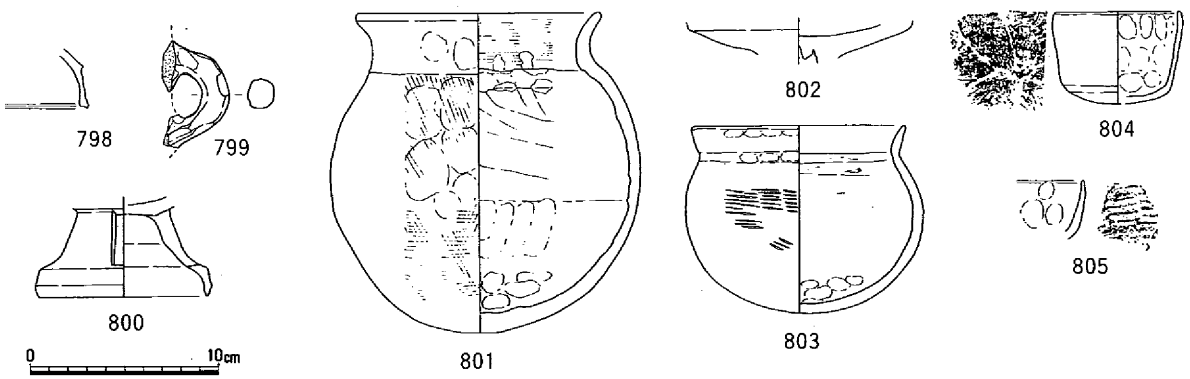
竪穴住居２（第143図、図版14・43）

高田３区の西端で検出された。全体の半分弱を検出したのみだが、平面形は方形をなすようである。検出された南辺と東西辺は直角にはならず、ややいびつな形をしていた。南辺の長さは390cmで、竪穴住居の深さは30cm程度であった。壁体溝が巡り、幅25cm前後、床面からの深さは５cmまでとごく浅かった。柱穴が２個検出され、その長径は30cmと44cmで、柱穴間の距離は160cmを測った。この竪穴住居の基盤になっていた層は砂層で、水がしみ出し、柱穴は掘り



1　灰色粘質土(暗褐色粘性砂質土斑多)
2　暗灰色粘性砂質土(黄色砂質土小斑)
3　灰黒色粘質土(黄色砂質土小斑)
4　灰色･黄色粘質土斑淡青灰色粘性砂質土

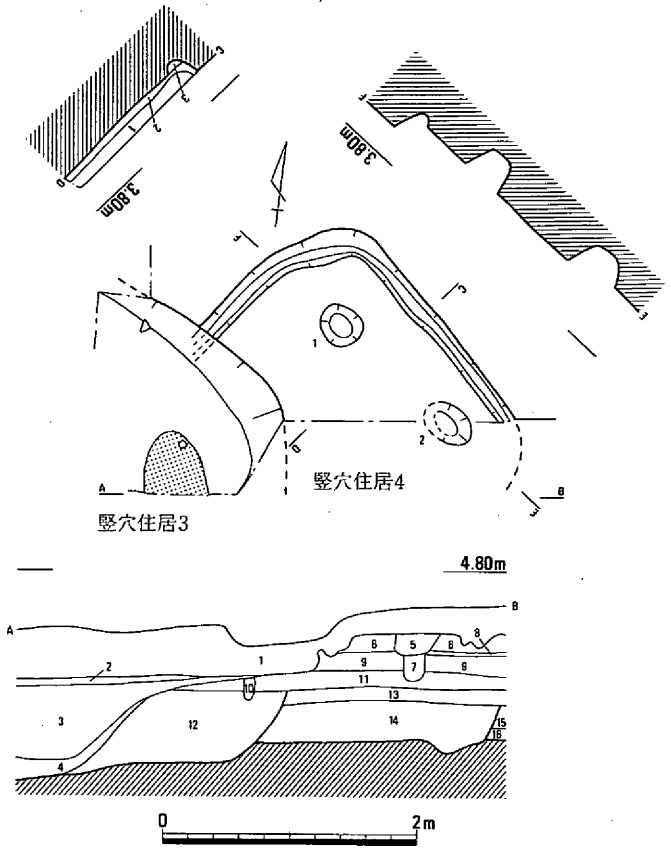




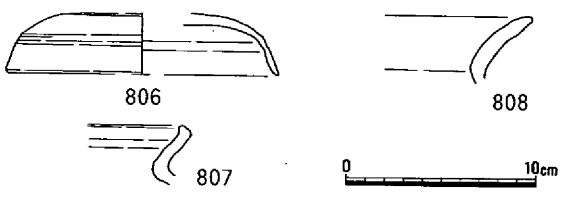
第143図　竪穴住居２(1/60)・同遺物出土状態平面図(1/20)・出土遺物(1/4)

下げる途中から湧水して崩れてしまった。埋土を観察すると、竪穴の底は凹凸が激しく、これを灰色粘土や黄色粘土の混じった土で埋めて、平坦な床面を作っていた。高田３区から１区にかけては旧河道が埋没した低位部とみられ、住居の床面の海抜高は2.55ｍと、砂場調査区の住居より１ｍ低い。

南辺の中央から西に少し寄った付近で土器片の集中がみられ、完形に近く復元されるものもあった。現位置を保っていた可能性がある。798～800は須恵器で、798は蓋、799は縦位の把手、800は高杯である。801～803は土師器で、甕と高杯である。803の外面にはタタキ目がみられる。804・805は製塩土器で、805の外面にもタタキ目らしい痕跡が認められた。これらの遺物から竪穴住居２の年代は５世紀末から６世紀初頭頃と考える。　（岡本）



1　現代耕作土
2　淡灰黄色粘性微砂
3　淡褐灰色弱粘性細砂(粗砂混)
4　暗灰色粘土(粗砂混)
5　淡灰色粘性微砂
6　淡灰黄色粘性微砂(粗砂混)
7　淡灰色粘性微砂
8　斑鉄層
9　暗褐色粘性微砂
10　灰褐色粘性微砂
11　暗褐色粘性微砂
12　暗灰黄褐色粘性微砂(竪穴住居3埋土)
13　褐色粘性微砂
14　灰黄褐色粘性微砂(竪穴住居4埋土)
15　褐色粘性微砂
16　黄褐色粘性微砂



第144図　竪穴住居３，４(1/60)・竪穴住居３出土遺物(1/4)

竪穴住居３・４（第144図、図版14）

砂場２区の西端南部において検出された遺構である。いずれも遺構の南側は調査区外におよんでおり、また、西側も竪穴住居４は竪穴住居３に、竪穴住居３は後世の削平を受けていて、遺構全体の状況は判然としないものである。

竪穴住居３は、北東部の壁面から床面の一部が確認できたのみで、規模などはまったく不明である。床面で焼土面が確認されているが、壁体溝・柱穴などは検出されていない。検出面から床面までは57㎝を測り、覆土は暗灰黄褐色粘性微砂が埋積している。

出土遺物のうち、806は焼土において出土した須恵器の杯蓋である。807・808は覆土中から出土した、甕形土器・壺形土器の口縁部片である。

竪穴住居４は、北の角を中心に、全体の４分の１程が検出されている。規模は一辺2.5ｍ程の隅丸方形の竪穴住居が推定される。壁面に添って、幅15㎝・深さ10㎝程の壁体溝が廻っている。柱穴は壁体溝から30㎝程内側に位置し、直径30㎝・深さ30㎝前後を測る円形のものが２本確認され、全体では４本柱であったと推定される。

時期は、出土遺物などから竪穴住居３が７世紀前半、竪穴住居４はそれより若干遡るものと推察される。　（内藤）

竪穴住居５（第145図、図版15）

砂場２区の中央やや西寄りにおいて検出された遺構である。遺構の南半は調査区外におよんでいるため、正確な規模などは明らかでないが、一辺3.3ｍ程のほとんど丸味をもたない隅丸方形の平面形の竪穴住居が推定される。壁体溝は設けられていないが、壁面から35㎝程内側の北の角に、直径40㎝・深さ40㎝程の柱穴が1本のみ検出されている。なお、この柱穴から1ｍ程内側には、50×30㎝程の範囲に楕円形状の焼土面が検出され、火所と推定される。検出面から床面までの深さは25㎝で覆土は２層あり、中央部床面には褐灰色粘性微砂が埋積している。

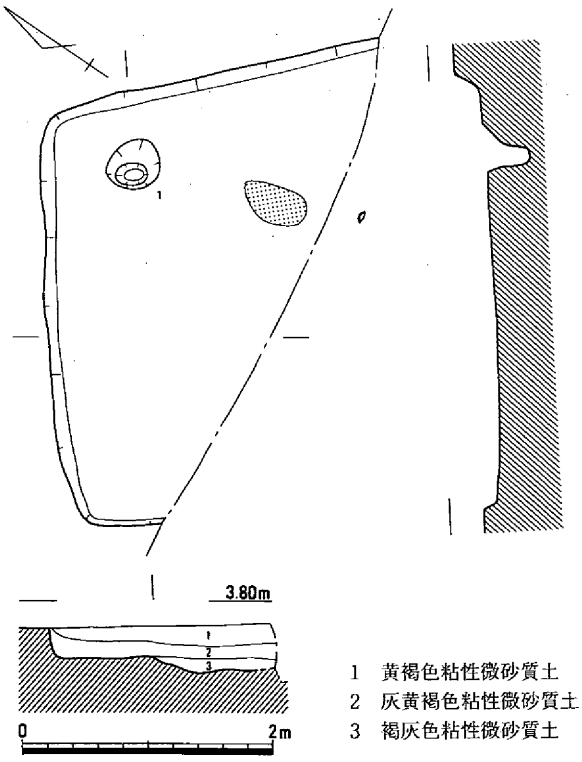
出土遺物としては、いずれも覆土中から**809～811**などの須恵器や、**812～816**などの土師器がある。**809・810**は杯身、**811**はコシキの口縁部で、内面は青海波のタタキ目が認められる。**812**は鉢形土器、**813～815**は甕形土器の口縁部片である。また、**816**はコシキの把手部分である。

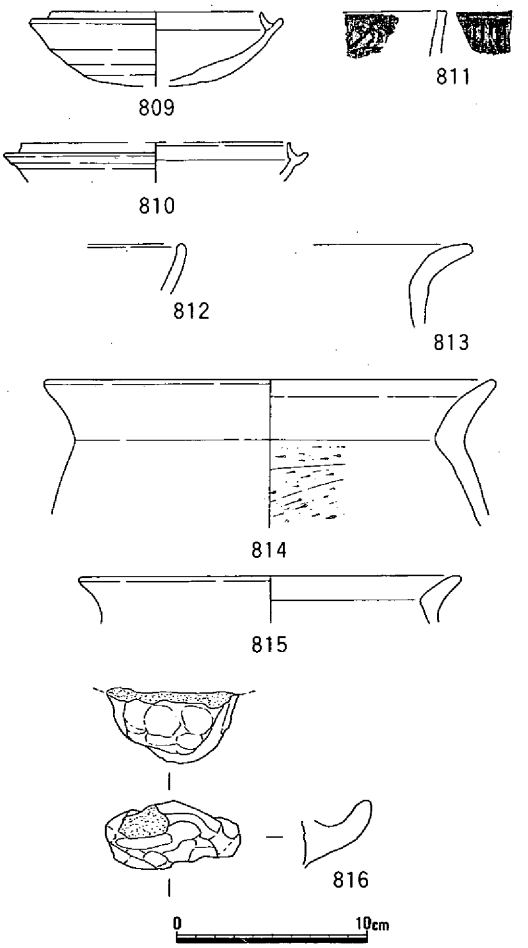
時期は、出土遺物などから７世紀初頭と考えられる。（内藤）

竪穴住居６（第146図、図版15・46）

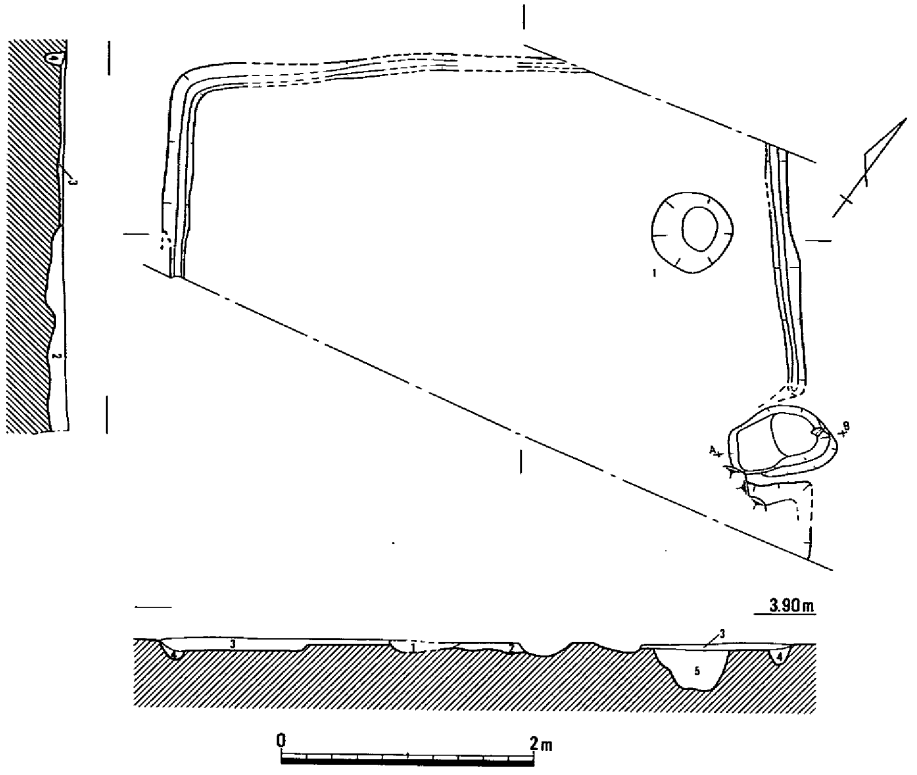
砂場２区の中央やや東寄り、竪穴住居７から１ｍ西において検出された遺構で方向はほぼ一致している。遺構の北端部および南半分は調査区外におよんでいるため、正確な規模などは明らかでないが、一辺５ｍ程でほとんど丸味をもたない隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居である。竪穴住居の壁面に添って幅20㎝・深さ15㎝程の壁体溝が廻っている。また、北東辺壁面の中央付近には、カマドが設けられている。

カマドは、長径85㎝・短径58㎝程のやや歪んだ楕円形を呈する平面形で、床面からの深さ20㎝前後を測る。住居内の南西側は一段深くなり、第４層の上面

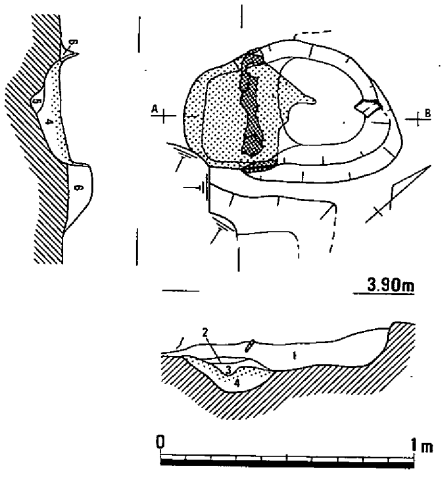




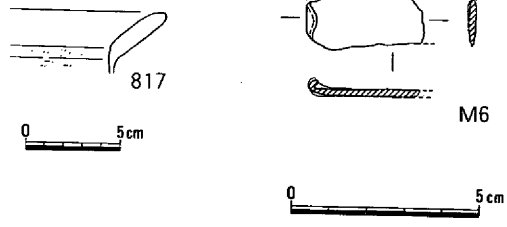
第145図　竪穴住居５(1/60)・出土遺物(1/4)



1　褐灰色粘性微砂　　3　灰黄褐色粘性微砂　　5　にぶい黄褐色粘性微砂
2　灰黄褐色粘性微砂　　4　暗灰黄色粘性微砂



1　暗黄灰色粘性微砂
2　明赤褐色焼土粒
3　褐灰色粘質土
4　褐灰色粘性微砂
　（上面被熱）
5　褐灰色粘質土
6　灰黄褐色粘性微砂



第146図　竪穴住居6(1/60)・同カマド平面図(1/30)・出土遺物(1/4，1/2)

がよく被熱している。

壁体溝から30cm程内側の北角近くにおいて柱穴状の土壙が１基検出されたものの、ほかに柱穴とみられる遺構はない。この土壙は、直径60cm程の円形で、深さ30cmを測る。

この竪穴住居は、ほとんど床面近くまで削平されており、覆土はわずかに残るのみである。床面は平坦である。

出土遺物はわずかに認められるもののいずれも細片で、817は「く」の字状に外反する甕形土器の口縁部片である。M6は両端を数cm折り曲げている鉄製の摘み鎌である。一部が欠損しており、現状では、長さ15cm・幅50cm・最大厚0.4cmを測る。

時期は、出土遺物などから７世紀初頭と考えられる。　（内藤）

竪穴住居７（第147図、図版16・46）

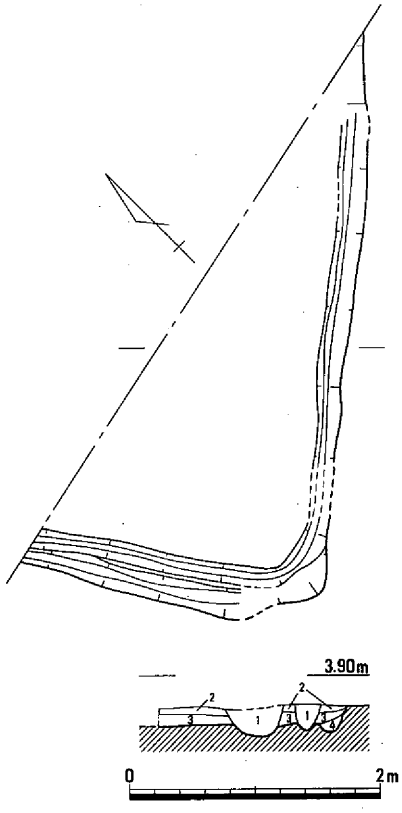
砂場２区の東部、竪穴住居６から１ｍ東において検出された遺構である。遺構の北部は調査区外におよび、検出できたのは南角を中心とした一部のみである。規模などは判然としないが、ほとんど丸味をもたない隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居である。壁面に添って幅20㎝・深さ10㎝程の壁体溝が廻っている。なお、南西側の壁体溝は２条あり、内側の溝が外側を切っている。建替えが行なわれたと考えられる。覆土は２層あり、にぶい黄褐色粘性微砂が上層に、灰黄褐色粘性微砂が下層に埋積している。床面は平坦である。調査区内においては、この遺構に伴う柱穴は検出されていない。

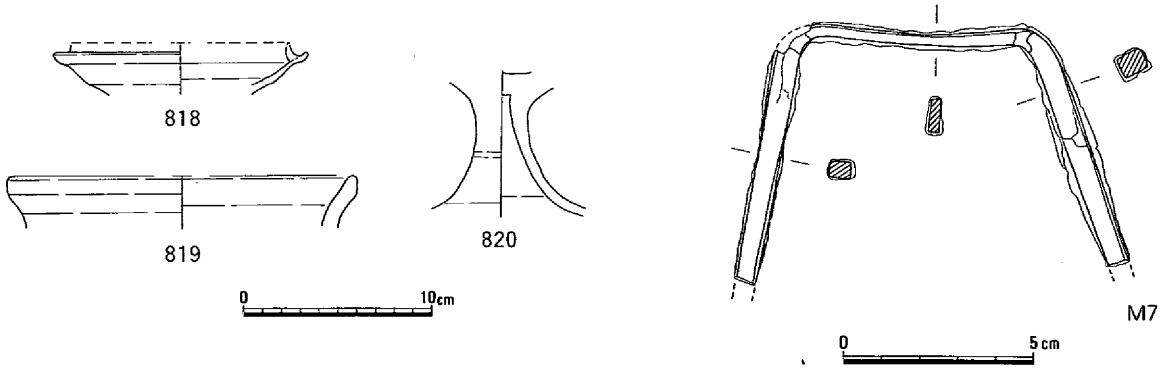
出土遺物としては、土師器・須恵器などの土器があるが、いずれも細片である。**818**は須恵器の杯身、**819**は須恵器の壺、**820**は須恵器の高杯の脚柱部片である。このほかに、先端部がいずれも欠損しているため用途などは不明であるが、一辺５㎝程で「コ」の字状に折れ曲がった鉄片が出土している。

時期は、一部分が検出されたのみで判然としないが、出土遺物などから7世紀初頭頃と考えられる。（内藤）

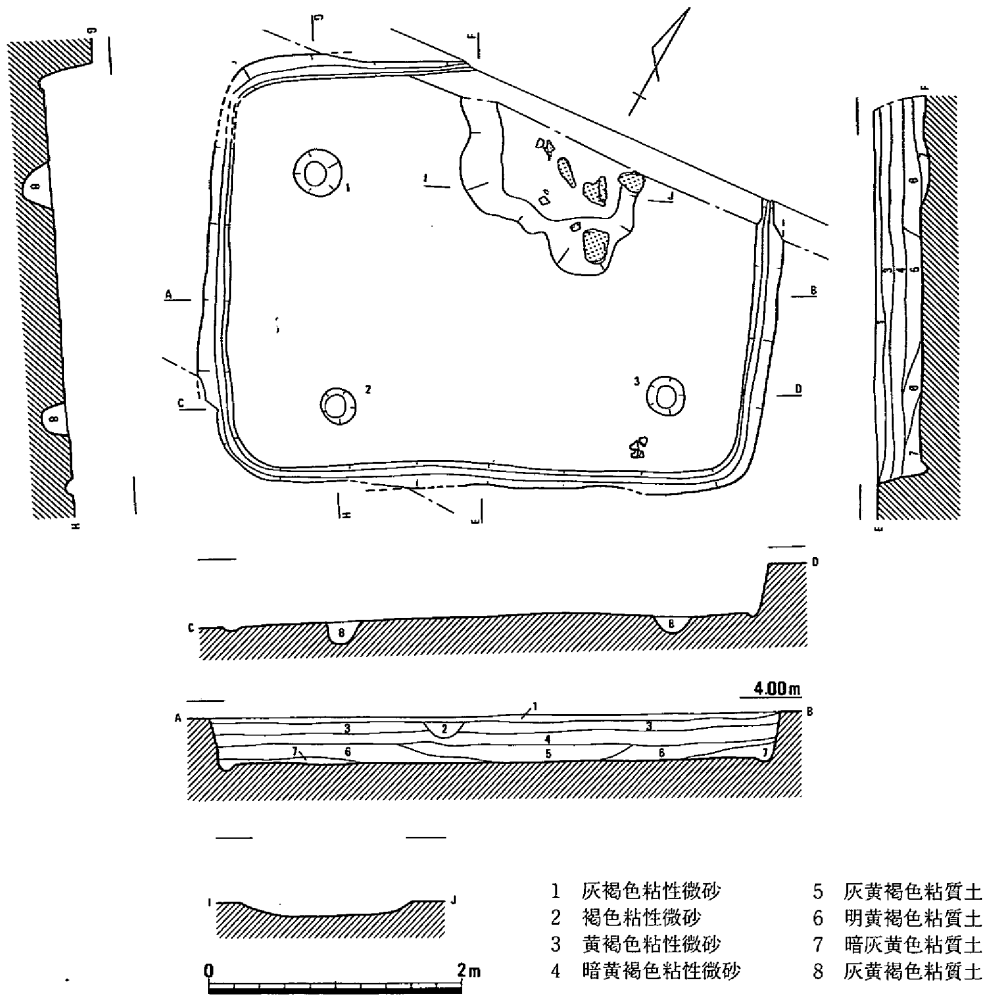
竪穴住居８（第148図、図版16・43）

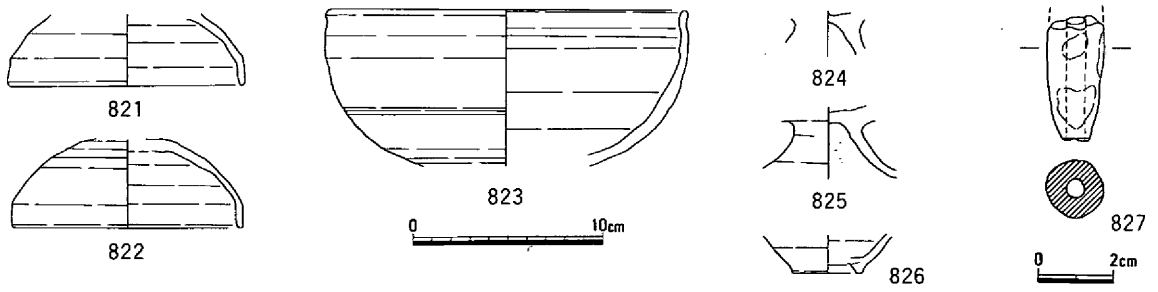
砂場２区から３区に跨がって検出された遺構で、竪穴住居７から東へ３ｍほどに位置している。北端の一部が調査区外におよんでいるが、長辺4.5ｍ・短辺3.4ｍ程を測り、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。壁面に添って幅20㎝・深さ10㎝程の壁体溝が廻っている。検出面から床面まで37㎝を測り床面はほぼ平坦である。覆土は、上層に褐色もしくは黄褐色の粘性微砂が、下層に灰黄褐色粘質土が埋積している。なお、床面の北西辺側には、壁体溝と同じ埋土の暗灰黄色粘質土で埋まった不定形の窪みが検出された。規模は、径1.5ｍ・深さ5㎝程を測り、底面は比較的平坦である。埋土中からは、土器片と伴に焼土塊などのほか、鉄片や鉄滓が多く認められる。焼土面などは確認されていないが、炉跡の一部が推定される。柱穴は、各角の壁体溝から30～50㎝内側に3本検出されている。残る1本が北側調





第147図　竪穴住居7(1/60)・出土遺物(1/4，1/2)





第148図　竪穴住居8(1/60)・出土遺物(1/4，1/2)

査区外に推定され、4本柱で構成されていると考えられる。柱穴の規模は、直径30～40㎝の円形であるが、床面からの深さは20㎝前後を測るのみであまり深くない。

出土遺物としては、土師器・須恵器などがあるがいずれも細片である。**821・822**は須恵器の杯蓋である。**823**は外面下半を横方向にヘラケズリした須恵器の鉢である。**824・825**は高杯の脚柱部片、**826**は底部片である。これらの土器のほか、半分近く欠損している**827**の土錘片が出土している。

時期は、出土遺物などから7世紀前半と考えられる。　（内藤）

竪穴住居９（第149図）

砂場３区東部の北壁際において、竪穴住居８から3.5ｍ程北東において検出された遺構である。検出状況などから、隅丸長方形を呈する竪穴住居と推定されるが、南角部分が一部検出できたのみで詳細は不明である。壁面に添って、幅20㎝・床面からの深さ10㎝程の壁体溝が廻っている。床面はほぼ平坦で、一部に貼り床とみられる灰オリーブ色粘質土の堆積が認められる。覆土は、上層がにぶい黄褐色粘性微砂、床面直上が暗灰黄色粘性微砂である。

出土遺物としては、土師器などの土器片が認められたが、いずれも細片で図示できるものはなかった。このほか、鉄片・焼土塊などが出土している。

時期は、出土遺物などから7世紀前半頃と考えられる。（内藤）

竪穴住居10（第150図、図版16）

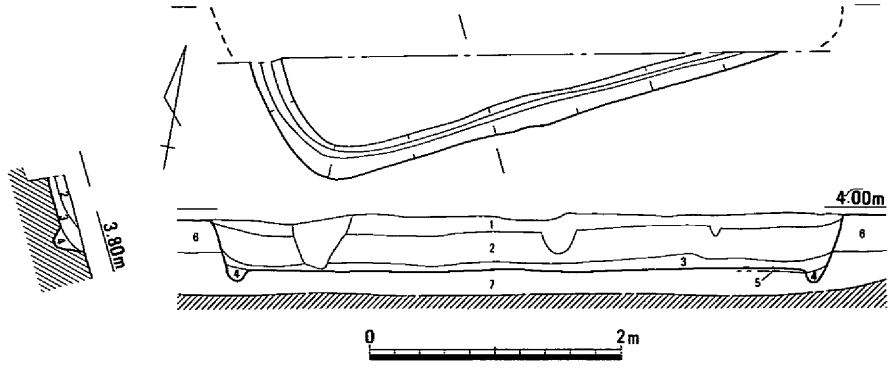
砂場３区中央部の北半において検出された遺構で、竪穴住居９の東４ｍ程に位置している。遺構の北半部が調査区外におよんでいるため、詳細な規模などは明らかでないものの、検出状況などから一辺4.4ｍ程の隅丸方形を呈する竪穴住居と推定される。検出面から床面までは25㎝程で、竪穴住居の壁面に添い幅20㎝・床面からの深さ10㎝程の壁体溝が廻っている。床面はほぼ平坦であるが、壁体溝から80㎝程内側からは床面が約５㎝下がり、段差が認められる。この一段下がった床面の南と西の角付近において柱穴が検出されている。検出された柱穴は、直径40㎝前後の円形で、床面からの深さは、柱穴１で40㎝・柱穴２で25㎝を測る。いずれも直径12～13㎝程で、断面が円形の柱痕が確認されている。しかし、東角の柱穴は検出されていない。覆土は、灰褐色粘性微砂で、一段下がった中央部には灰黄褐色粘性微砂が埋積している。

出土遺物としては、土師器・須恵器などの土器片のほか、窯壁片などの焼土塊や桃の種子が認められた。**828～834**は須恵器片で、**828**は杯蓋、**829**は杯身である。**830・831**は鉢もしくは杯身、**832・833**は高杯の脚裾部である。**834**はやや開き気味に立上がる頸部から口縁部がさらに外反している壺である。**835**は高杯の脚柱部片、**836・837**は古墳時代後半の製塩土器である。

時期は、出土遺物などから6世紀末から7世紀初頭頃と考えられる。（内藤）

竪穴住居11・12（第151図、図版17・43・46）

砂場５区の中央やや西寄りにおいて検出された遺構である。いずれも遺構の南側は調査区外におよ



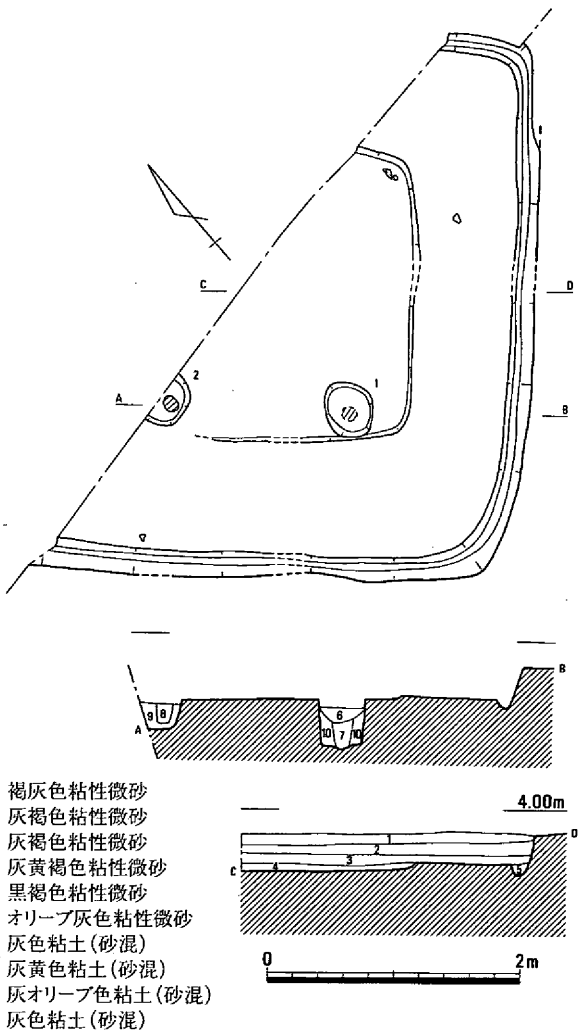
1　灰黄褐色粘性微砂
2　にぶい黄褐色粘性微砂
3　暗灰黄色粘性微砂
4　黒褐色粘性微砂
5　灰オリーブ色粘質土(床貼?)
6　にぶい黄褐色粘性微砂
7　褐色砂質土

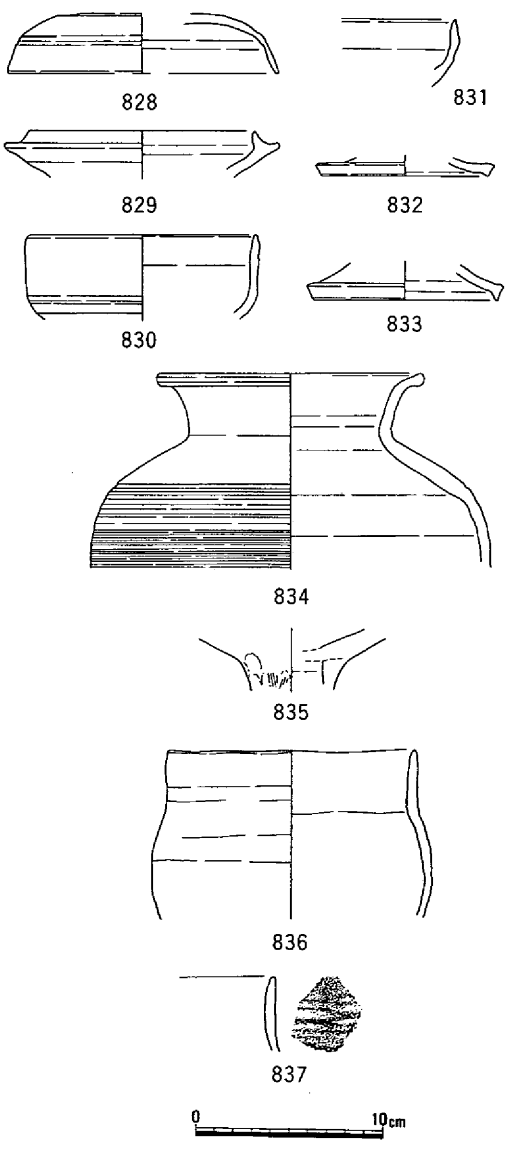
第149図　竪穴住居9(1/60)

んでおり、竪穴住居12の北端部も北壁にあたっている。

竪穴住居11は、検出部分の大半が床面の一段低い竪穴住居12により削平を受け、北東部の一部が検出できたのみである。このため、規模などはまったく不明であるが、検出状況などから隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈する竪穴住居と考えられる。検出面から床面までは17cm程を測り、竪穴住居の壁面に添い幅30cm・床面からの深さ15cm程の壁体溝が廻っている。床面はほぼ平坦で、柱穴などは検出されていない。覆土は、暗褐色粘性微砂が１層である。

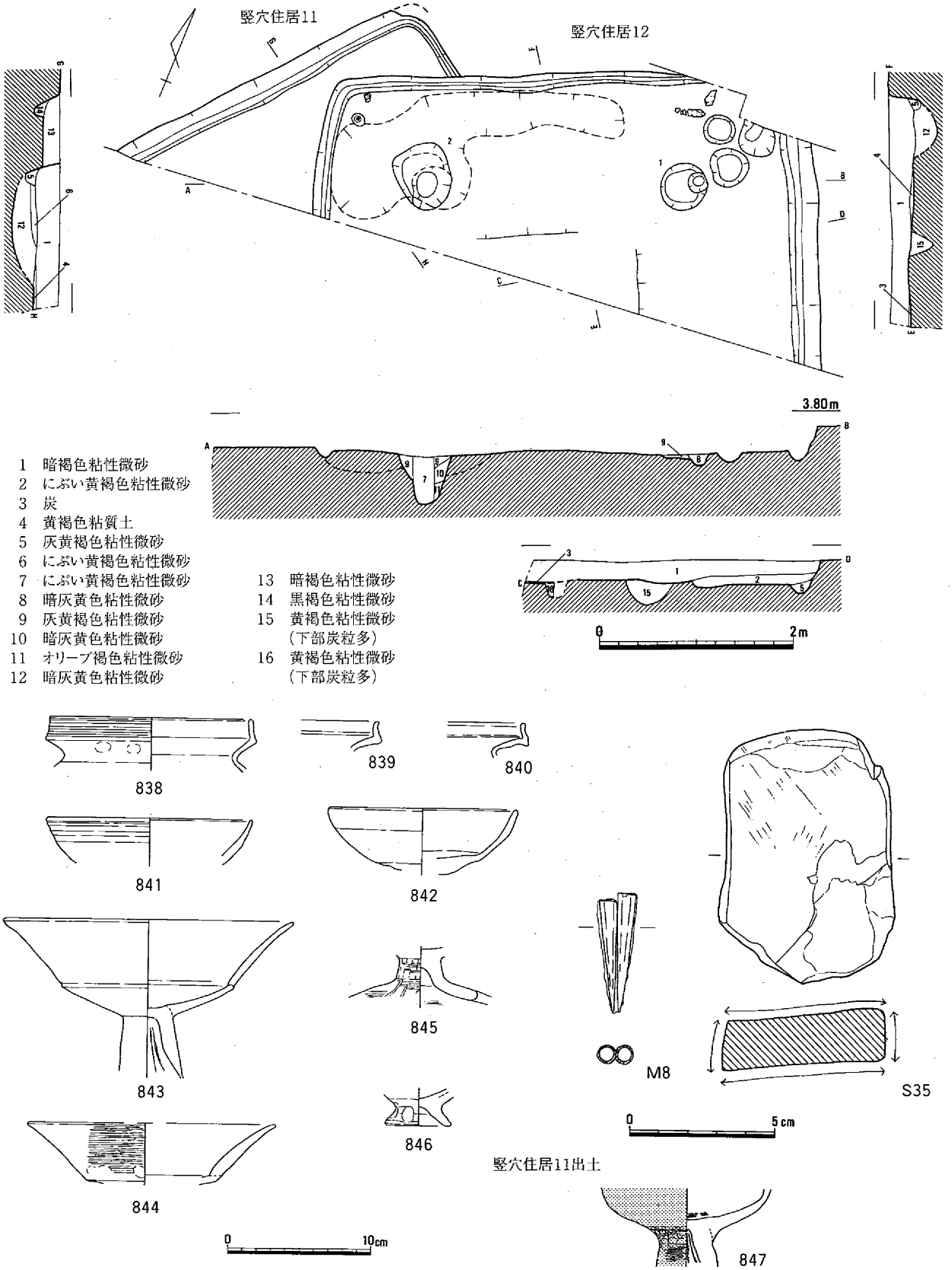
竪穴住居12は、北端の角部を除いて遺構の北半部がほぼ検出されたものの、全体の規模などは明らかでない。検出状況などから一辺5.3ｍ程の隅丸方形の竪穴住居が推定される。検出面から床面までは25cm程を測り、壁面に添い幅30cm・床面からの深さ15cm程の壁体溝が廻っている。床面はほぼ平坦であるが、壁体溝から1.5ｍ程内側の中央部はわずかに床が高くなっている。柱穴は、壁体溝から80cm程内側の北東および北西の角に位置し、直径50cm程の円形である。このことから、この竪穴住居は4本柱で構成されていたと推察される。なお、検出された柱穴の床面からの深さは、柱穴２は50cmを測るものの、柱穴1はわずか15cm程である。柱穴２は北西側に広がっているが、これは柱材の抜き取り跡と考えられる。また、柱穴1の北側に３基のピットが認ら





第150図　竪穴住居10(1/60)・出土遺物(1/4)

れるものの、性格などは不明である。なお、柱穴２の北西側には大きな窪みが確認されたが、これは竪穴住居以前のものとみられる。覆土は暗褐色粘性微砂が１層で、中央部などで一部黄褐色粘質土の貼床



第151図　竪穴住居11，12（1/60）・出土遺物（1/4，1/2）

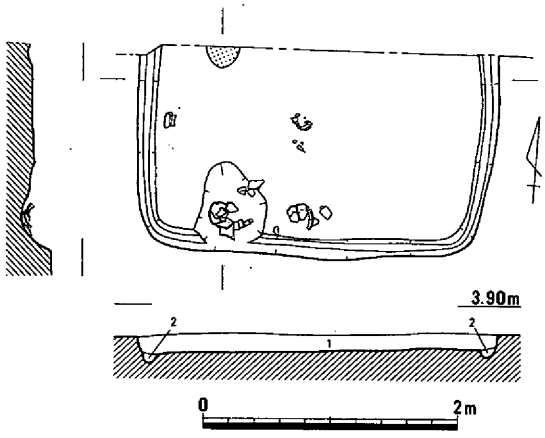
が確認されている。

遺物のうち、竪穴住居12からは838～846などの土器が出土している。838～840は「く」の字状に外反した口縁端部が上方に立ち上がり、端面外面に櫛描き沈線や凹線を施す甕形土器である。841・842は椀形の杯部をもつ高杯形土器の口縁部片、843・844は口縁端部が斜め外方に開く高杯形土器の杯部および杯部と脚柱部片である。また、846は台付き鉢形土器（製塩土器）の台部片である。これらの土器のほかに、用途不明の鉄器M8や流紋岩製の砥石S35が出土している。また、竪穴住居11からは弥生土器の細片が出土している。847は高杯形土器の杯部下半から脚柱部にかけての土器片で、外面には丹塗りが施されている。

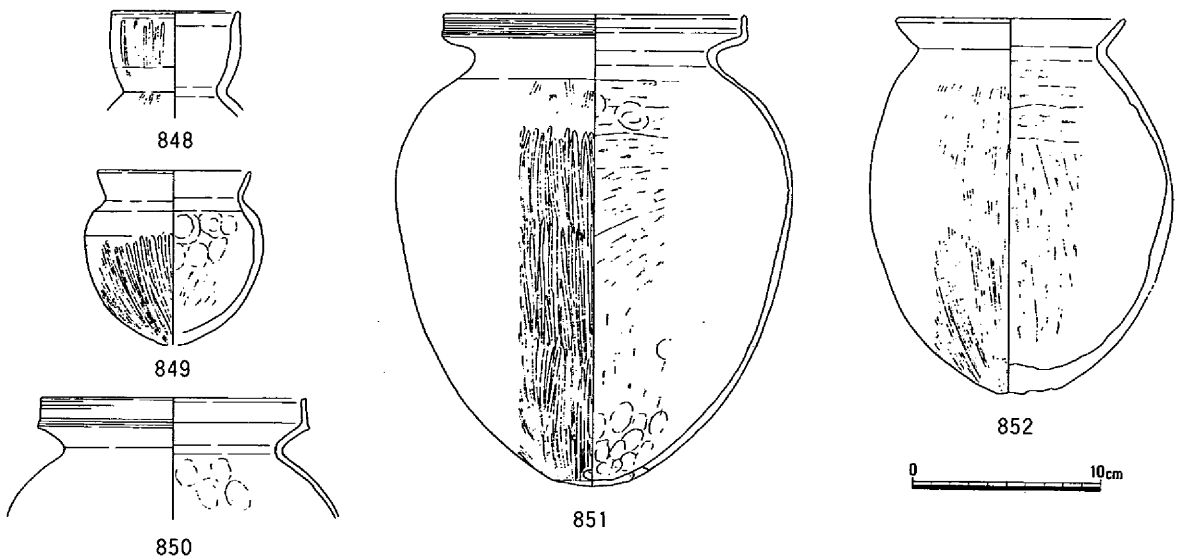
これらの遺構のうち竪穴住居12は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。一方、竪穴住居11は出土遺物が少なく明らかでないが、弥生時代後期から古墳時代初頭頃と推定される。（内藤）

竪穴住居13（第152図、図版17・43）

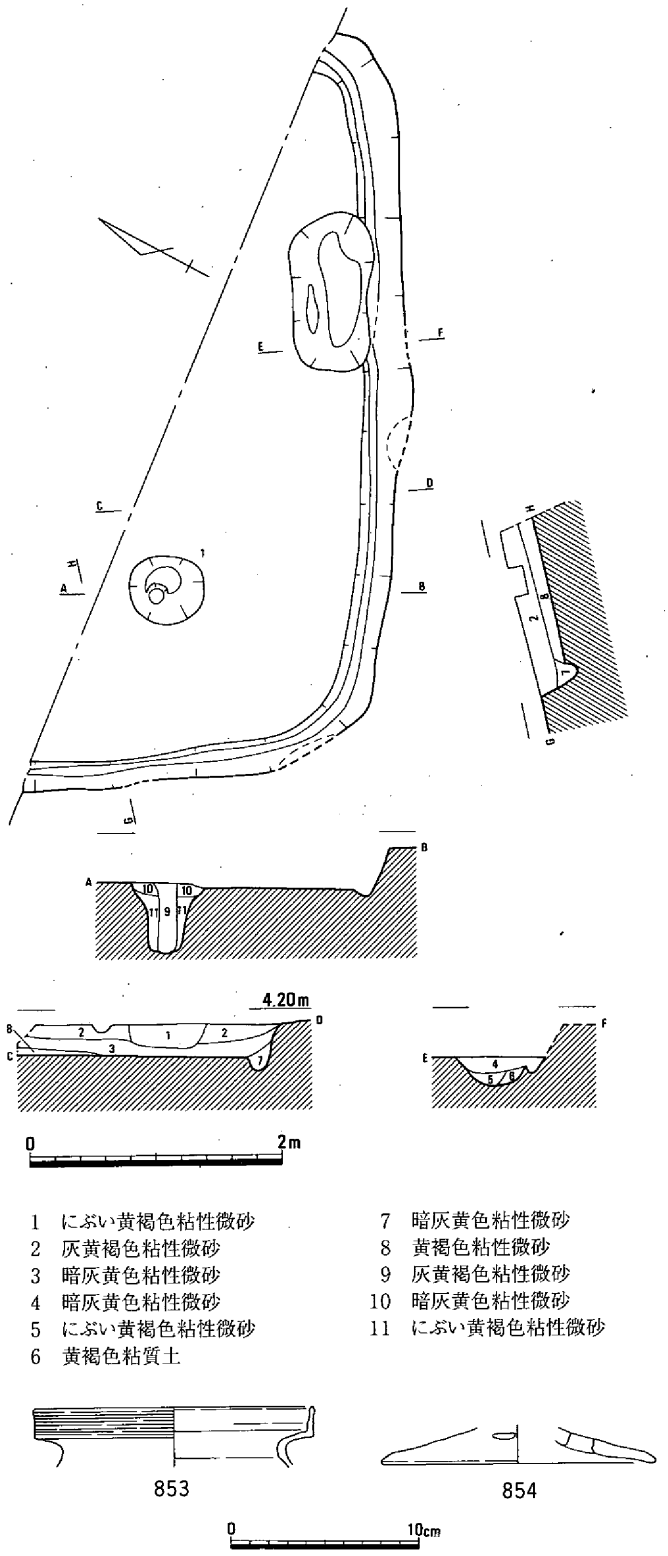
砂場５区の中央部北半において検出された遺構で、一部が竪穴住居12の北東辺に接している。遺構の北半部が調査区外におよんでいるため、詳細な規模などは明らかでないが、東西幅2.85ｍを測る隅丸方形もしくは隅丸長方形の竪穴住居と推定される。検出面から床面までは15㎝程で、壁面に添い幅15㎝・床面からの深さ10㎝程の壁体溝が廻っている。床面はほぼ平坦で、柱穴は検出されていないが、南辺西部の壁体溝際に浅い土壙が設けられている。土壙の規模は、長径70㎝・短径50㎝程の歪んだ楕円形を呈し、最も深いところで床面から12㎝を測る。底はわずかに段をもち南側が低くなっている。この土壙からは土器がまとまって出土しており、やや浅いものの貯蔵穴のようなものと考えられる。また、遺構中央の西側、壁体溝から30㎝程内側の調査区北端



1　灰黄褐色粘性微砂　　2　暗灰黄色粘性微砂



第152図　竪穴住居13（1/60）・出土遺物（1/4）



第153図　竪穴住居14(1/60)・出土遺物(1/4)

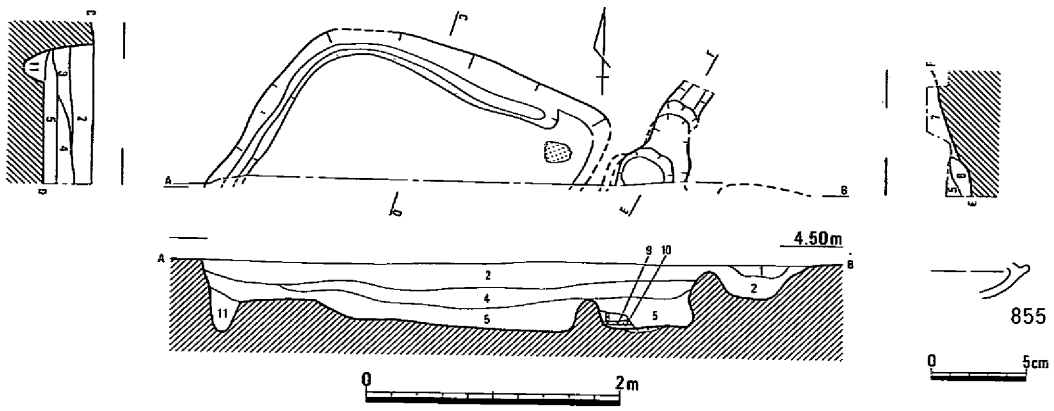
部で、直径25cm程の焼土面が検出され、火どころと考えられる。覆土は、灰黄褐色粘性微砂が１層である。

遺物は、いずれも貯蔵穴およびその周辺からまとまって出土しているもので、**848**は小形の直口壺の口縁部片である。**849**は口縁部が「く」の字状に外反している小形の甕形土器で、体部外面は丁寧にヘラミガキされている。**850・851**は「く」の字状に外反した口縁端部が上方に立ち上がり、端面外面に櫛描き沈線を巡らせている甕形土器で、体部外面は丁寧にヘラミガキされている。**851**の底部近くに１か所焼成後の穿孔が認められる。**852**は口縁部が「く」の字状に外反している甕形土器で、体部外面はハケ目調整のままである。

時期は、出土遺物などから古墳時代前期である。　（内藤）

竪穴住居14（第153図、図版18）

砂場5区の東部において、竪穴住居13の東５m程のところで検出された遺構である。遺構の大半は調査区外におよんでおり、検出できたのは南側の一部分のみである。このため全体の状況は明らかでないが、東西幅６m程を測る隅丸方形もしくは隅丸長方形の竪穴住居と推定される。検出面から床面まで30cmを測り、壁面に添い幅30cm・床面からの深さ10cm程の壁体溝が廻っている。床面はほぼ平坦で、壁体溝から100cm程内側に柱穴が検出されている。柱穴の規模は、直径55cm程の円形で、床面からの深さは55cmを測る。なお、この柱穴から直径12cmで断面が円形の柱痕が確認されている。また、南辺の壁体溝に添ったやや東寄りの位置に、長軸125cm・短軸60cmのやや歪んだ隅丸長方形の土壙が設けられている。床面からの深さは20cm程で底面は平坦である。中央より少しずれているが、出入り口に付帯している土壙と考えられる。覆土は、上層に灰黄褐色粘性微砂が、下層に暗灰黄色粘性微砂が埋積し、一部に黄褐色粘性微砂の貼床が認められる。



1　灰オリーブ色粘性微砂
2　灰黄褐色粘性微砂
3　オリーブ褐色粘性微砂
4　黒褐色粘性微砂
5　にぶい黄褐色粘性微砂
6　黄色粘質土斑黒褐色粘性微砂
7　灰黄褐色粘性微砂(煙道部)
8　暗灰黄色粘性微砂
9　焼土
10　暗灰黄色粘性微砂
11　褐灰色粘性微砂

第154図　竪穴住居15(1/60)・出土遺物(1/4)

遺物としては、土師器などの土器が比較的多量に出土しているが、いずれも細片である。**853**は外反した口縁の端部が上方に立ち上がり、その外面に櫛描き沈線を巡らせている甕形土器の口縁部片、**854**は裾部に３か所円孔を穿っている高杯形土器の脚裾部片である。

時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。　（内藤）

竪穴住居15（第154図、図版18）

砂場５区から６区に跨がって検出された遺構で、竪穴住居14の南東３ｍ程に位置している。遺構の大半は調査区外におよんでおり、検出できたのは北東部の一部のみである。このため全体の状況は明らかでないが、隅丸方形もしくは隅丸長方形の竪穴住居と推定される。検出面から床面まで40cmを測り、壁面に添い幅35cm・床面からの深さ20cm程の壁体溝が廻っている。床面はほぼ平坦である。調査区の南端において、壁体溝の北東辺に取り付いたカマドの一部が検出された。カマド全体の構造は明らかでないが、カマドの中心からなだらかに立ち上がる煙道の底部が検出された。覆土は３層で、灰黄褐色粘性微砂の間に黒褐色粘性微砂が挟まれて埋積している。

遺物としては、土師器・須恵器などの土器が出土しているが、いずれも細片である。**855**は須恵器の杯身片である。

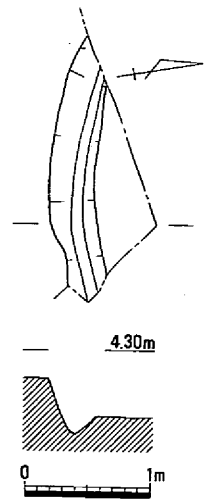
時期は、出土遺物などから７世紀初頭頃と考えられる。　（内藤）

竪穴住居16（第155図、図版11）

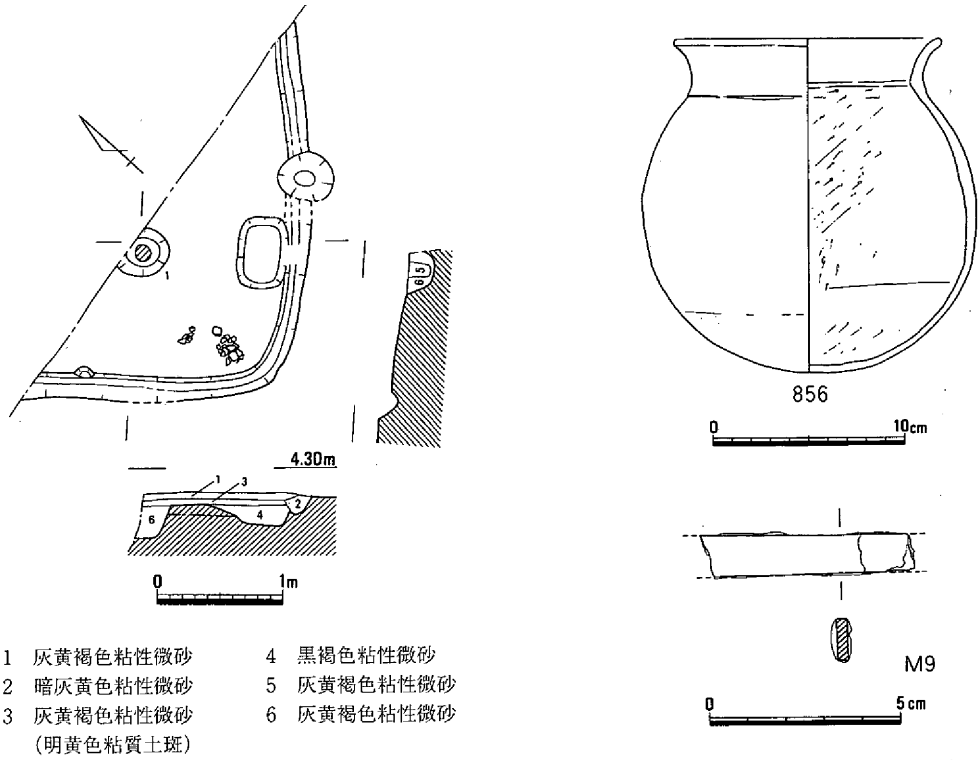
砂場７区の中央部北端において検出された遺構で、大半は調査区外にある。また、調査区内の東半は溝10に削平され遺存していない。幅35cm・床面からの深さ15cm程の壁体溝が2ｍ程弧状に検出できたのみで、詳細はまったく不明であるが、円形の竪穴住居と思われる。検出面から床面までは35cm程で、覆土は暗褐色粘性微砂が１層である。

遺物は、弥生土器・土師器などの土器が若干出土しているが、いずれも細片である。このほかに焼土塊が認められている。

時期は、遺物が少なく判然としないが、検出状況などから弥生時代後期から古墳時代初頭頃と考えられる。　（内藤）



第155図 竪穴住居16(1/60)



第156図　竪穴住居17（1/60）・出土遺物（1/4，1/2）

竪穴住居17（第156図、図版43・46）

砂場７区の東部北半において検出された遺構で、竪穴住居16から４ｍ程東に位置している。遺構の大半は調査区外におよんでおり、南側の角部分が検出されているのみで、全体の規模などは明らかでない。検出状況などから隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈する竪穴住居と推定される。検出面から床面までは10cm足らずであるが、壁面に添い幅20cm・床面からの深さ10cm程の壁体溝が廻っている。床面はほぼ平坦であり、壁体溝から90cm程内側に柱穴が検出されている。柱穴の規模は、直径40cm程の円形で、床面からの深さは25cmを測る。なお、この柱穴から直径15cmで断面が円形の柱痕が確認されている。また、南東辺の壁体溝に添って、長軸58cm・短軸40cmの隅丸長方形を呈する土壙が設けられている。床面からの深さは15cm程で底面は平坦である。出入り口部に付帯する土壙ともみられるが、柱穴の正面に位置しており、性格は判然としない。覆土は、灰黄褐色粘性微砂で、床面直上には明黄色粘質土の混入がみられる。

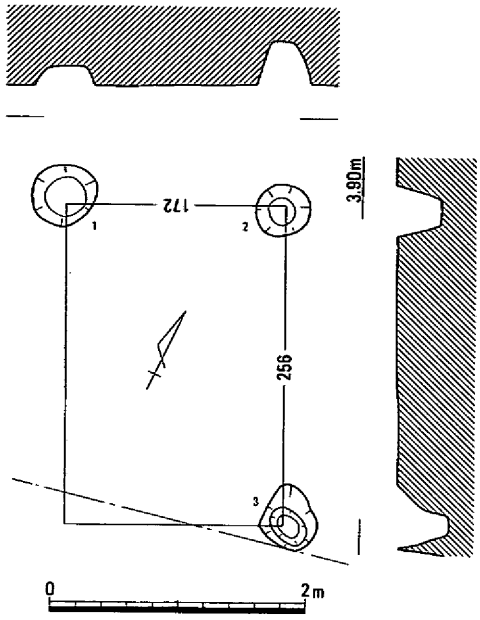
遺物は、南角部を中心に土師器などの土器が出土しているが大半は細片である。**856**は「く」の字状に外反した口縁端部がやや湾曲気味にのびている甕形土器で、体部の中心より少し下で最大径となる。なお、これらの土器のほかに両端が欠損している刀子とみられる鉄片**M9**が出土している。

時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。（内藤）

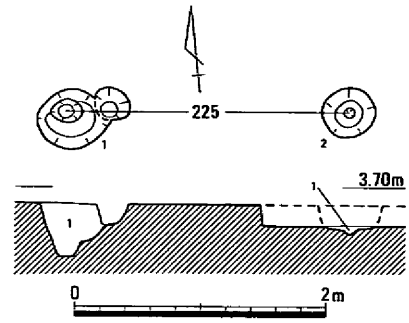
建物１（第157図）

砂場１区の中央やや西寄りにおいて検出された遺構で、柱穴列１の西２ｍ程に位置している。検出できたのは１×１間の掘立柱建物であるが、調査範囲が狭小なためさらに広がる可能性がある。柱穴は、いずれも直径40～50cm程の円形で、検出面からの深さは、柱穴１が20cm・柱穴２が38cm・柱穴３が40cmを測る。なお、南側の柱穴は調査区外にあたる。建物の軸線は30°西に振っている。

時期は、出土遺物はないが、検出状況などから古墳時代後期頃と考えられる。（内藤）



第157図　建物1(1/60)



1　黒褐色粘性微砂質土

第158図　柱穴列1(1/60)

柱穴列１（第158図）

砂場１区の中央やや西寄りにおいて検出された遺構で、建物１の東２ｍ程に位置している。調査範囲が狭小なため、検出できたのは柱穴２本のみであるが、さらに調査区外に広がる掘立柱建物の一部と考えられる。

時期は、出土遺物はないが、検出状況などから古墳時代後期頃と考えられる。（内藤）

炉状遺構１（第159図）

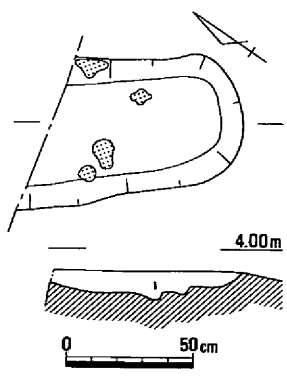
砂場３区の西部北端において検出された遺構で、竪穴住居９のすぐ東側に位置している。北側は調査区外におよんでいるため、全体の規模は不明であるが、幅60cm・深さ10cm程を測る。壁および床面に焼土部分が認められ、炉状遺構と考えられる。土師器・須恵器などの細片が若干出土している。

時期は、出土遺物などから7世紀前半頃と考えられる。（内藤）

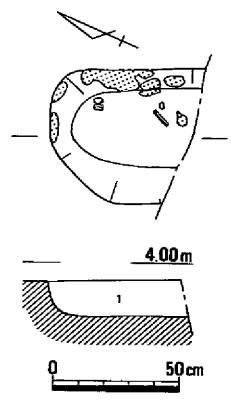
炉状遺構２（第160図、図版19）

砂場３区の西部南端において検出された遺構で、竪穴住居９の南1.8ｍ程に位置している。南側は調査区外におよび、全体の規模は不明であるが、幅55cm・深さ15cm程を測る。北東側の壁面を中心に焼土面が確認され、炉状遺構と考えられる。土器の細片と伴に鉄滓・骨片などが出土している。

時期は、出土遺物などから7世紀前半頃と考えられる。（内藤）



1　灰褐色粘性微砂

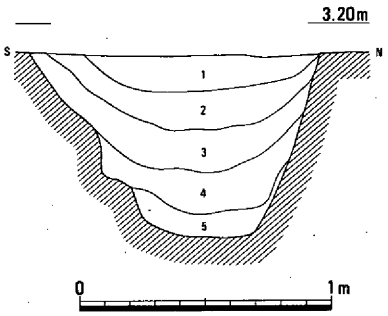


1　灰褐色粘性微砂

第159図　炉状遺構1(1/30)　第160図　炉状遺構2(1/30)

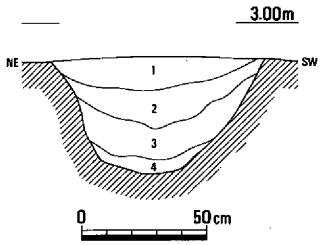
溝１（第161図）

高田１区の西端で検出された。東南東から西南西へ流れていたと推測される。溝の幅は98cm、深さは75cmを測った。溝の断面形はＵ字形を呈する。溝の底はかなり平坦な面になっていた。埋土は５層のレンズ状の堆積となっていた。出土遺物には須恵器や鉄滓があり、５世紀代のものがみられ、竪穴住居２との共存もありうる。（岡本）



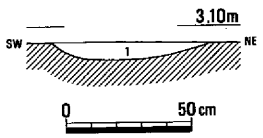
1　青褐灰色粘性微砂質土
2　暗緑灰色粘性微砂質土
3　暗青灰色粘質土(微砂混)
4　暗灰色粘質土(微砂混)
5　灰色粘質土(微砂混)

第161図　溝１(1/30)



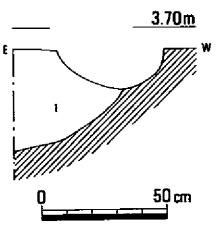
1　褐灰色粘性微砂質土
2　暗灰色粘質土
3　黄灰色微砂斑灰黒色粘質土
4　黄灰色粘性微砂斑暗灰色粘質土

第162図　溝２(1/30)



1　暗褐灰色粘性微砂質土

第163図　溝３(1/30)



1　黄褐灰色粘性微砂質土

第164図　溝４(1/30)

溝２（第162図）

高田３区から４区にかけて検出された。南東から北西へ流れていた可能性もある。幅が87cm、深さは47cmであった。溝の断面形はＵ字形で、底部は丸くなっていた。埋土はレンズ状の堆積が４層みられた。遺物には弥生時代後期の土器片があったが、古墳時代前期の溝と考えたい。　（岡本）

溝３（第163図）

高田４区の中央部を南東から北西に流走しているとみられる溝で、３ｍ程南西の溝２と平行に流走している。検出できたのは溝の底部分のみで、幅60cm・深さ７cmを測る。遺物としては、土師器などの細片が若干出土している。時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。　（内藤）

溝４（第164図）

砂場１区の東端を北一南方向に流走している溝である。東側の肩部を検出できなかったため、規模は不明であるが、検出面から深さ40cmを測る。溝の断面は比較的緩やかである。

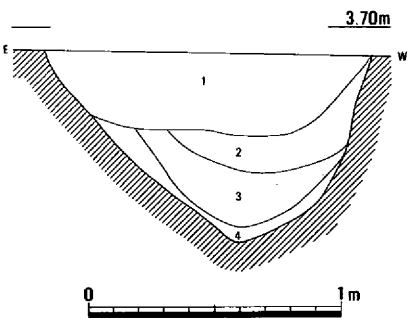
遺物が出土していないため時期は明らかでないが、検出状況などから古墳時代後期頃と考えられる。　（内藤）

溝５（第165図、図版43）

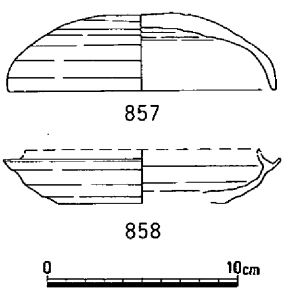
砂場２区の西部を南西から北東に流走している溝である。溝の規模は、幅130cm・深さ75cmを測り、断面は西側がやや急になっている。埋土は第２～４層がレンズ状に順次堆積し、その後第１層が埋積したものと思われる。

埋土中からは、土師器や須恵器などの土器が若干出土している。**857**は須恵器の杯蓋、**858**は須恵器の杯身である。

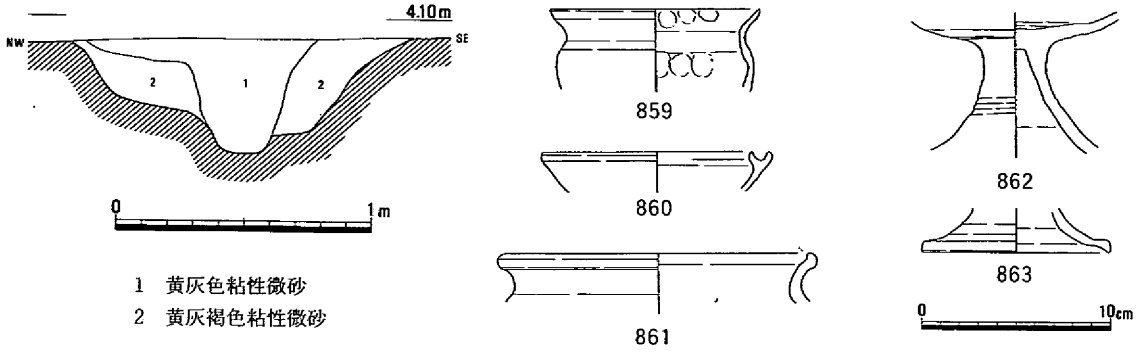
時期については、埋土の状況などから多少時間の経過も考えられるが、最終埋没は6世紀末と推定される。　（内藤）



1　灰黄褐色粘性微砂
2　暗灰褐色粘性微砂
3　暗灰褐色粘質土(含細砂)
4　暗灰褐色粘性微砂(含細砂)



第165図　溝５(1/30)・出土遺物(1/4)



第166図　溝６(1/30)・出土遺物(1/4)

溝６（第166図、図版19）

砂場５区の中央部を北東―南西方向に流走している溝で、流路は２m程南東の溝７とほぼ平行している。この溝は、ほぼ同じところを流れた溝が２本重なって検出されたものである。外側の溝は、幅130cm・深さ38cmを測り、断面は緩やかである。埋土は黄灰褐色粘性微砂が１層である。内側の溝は、幅90cm・深さ45cmを測り、断面はかなり急である。埋土は黄灰色粘性微砂が１層である。

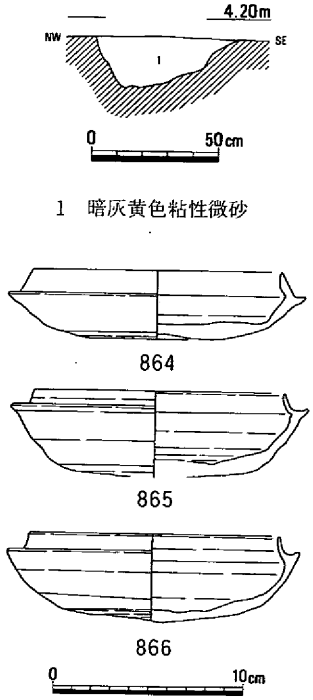
遺物としては、土師器・須恵器などの土器のほか、炉壁などの焼土塊や釘の小片が出土している。**859**は「く」の字状に外反した口縁の端部が外方へ開く鉢形土器である。**860**は須恵器の杯身、**861**は須恵器の甕の口縁部片である。**862・863**はいずれも須恵器の高杯の脚部片である。

時期については、若干のずれがあると思われるが、最終埋没は7世紀初頭頃と推定される。(内藤)

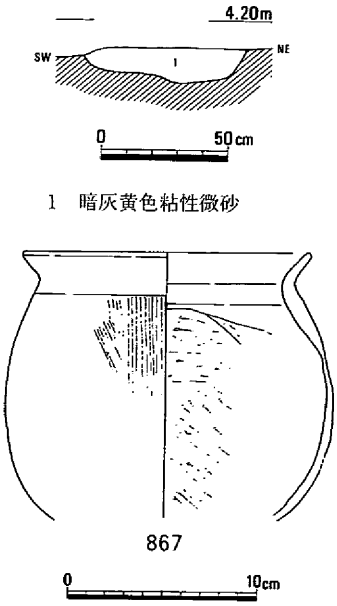
溝７（第167図、図版19・43）

砂場５区の中央やや東寄りを北東から南西に流走している溝で、流路は２m程北西の溝６にほぼ平行し、一部が直交する溝8に切られている。検出された規模は、幅50cm・深さ20cmを測り、断面は北西側がやや急である。埋土は暗灰黄色粘性微砂が１層である。

遺物は、須恵器のほかに土師器などの細片が出土している。図示した**864～866**はいずれも須恵器の杯身である。溝の埋没時期は、出土遺物などから６世紀後半と考えられる。(内藤)



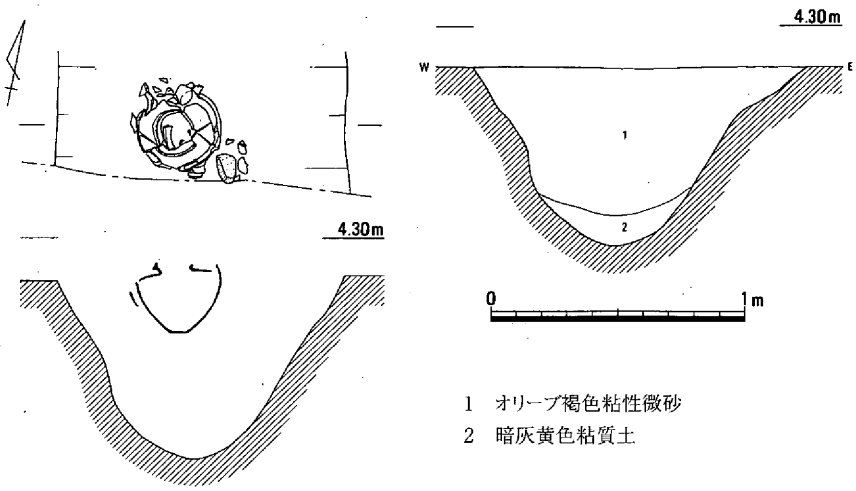
第167図　溝７(1/30)・出土遺物(1/4)

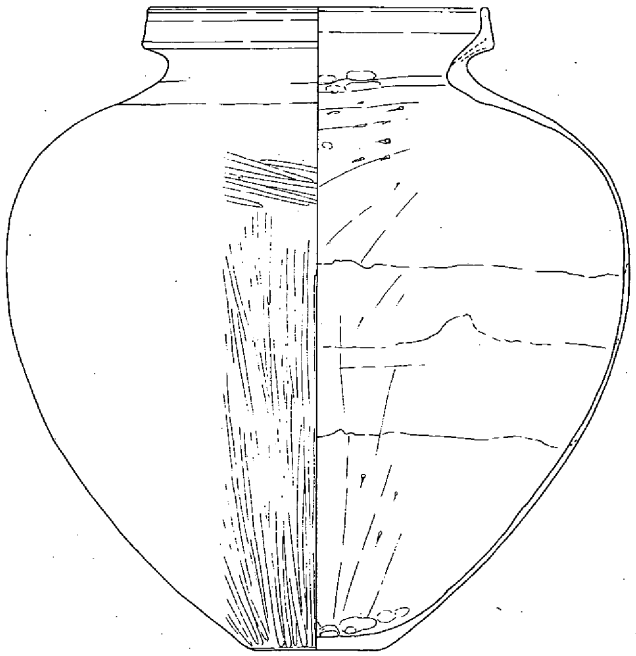


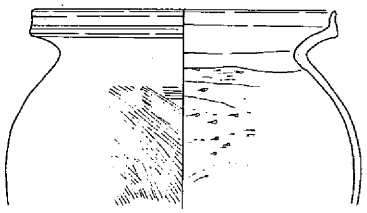
第168図　溝８(1/30)・出土遺物(1/4)

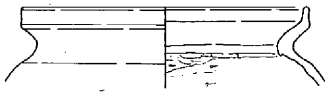
溝８（第168図、図版43）

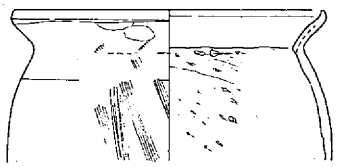
砂場５区の中央やや東寄りを北西から南東に流走している溝で、直交する溝７を切っている。検出された規模は、幅65cm・深さ15cmを測る。底部はなだらかで、北東側が一段低くなっている。

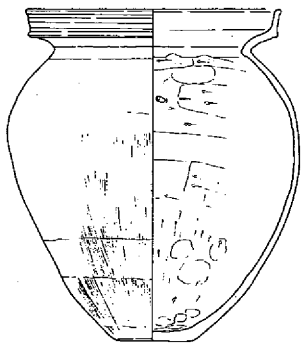


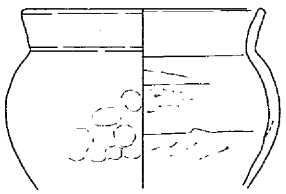

868

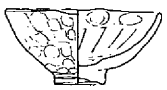

875


876

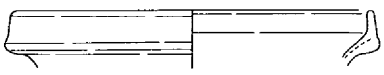

877

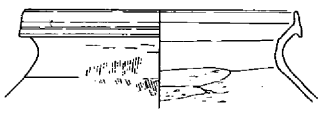

878


869

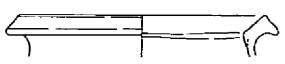

870

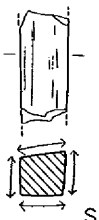
0　10cm


871


873

872

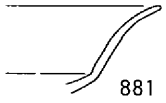

874


S36

0　2cm

879

880


881

第169図　溝９(1/30)・同遺物出土状態(1/30)・出土遺物(1/4，1/2)

遺物としては、土師器・須恵器などの土器が出土しているが、ほとんど細片である。867は球形に近い体部から口縁部が「く」の字状に外反している甕形土器である。

時期は、出土遺物や検出状況などから7世紀初頭頃と考えられる。（内藤）

溝9（第169図、図版20・43）

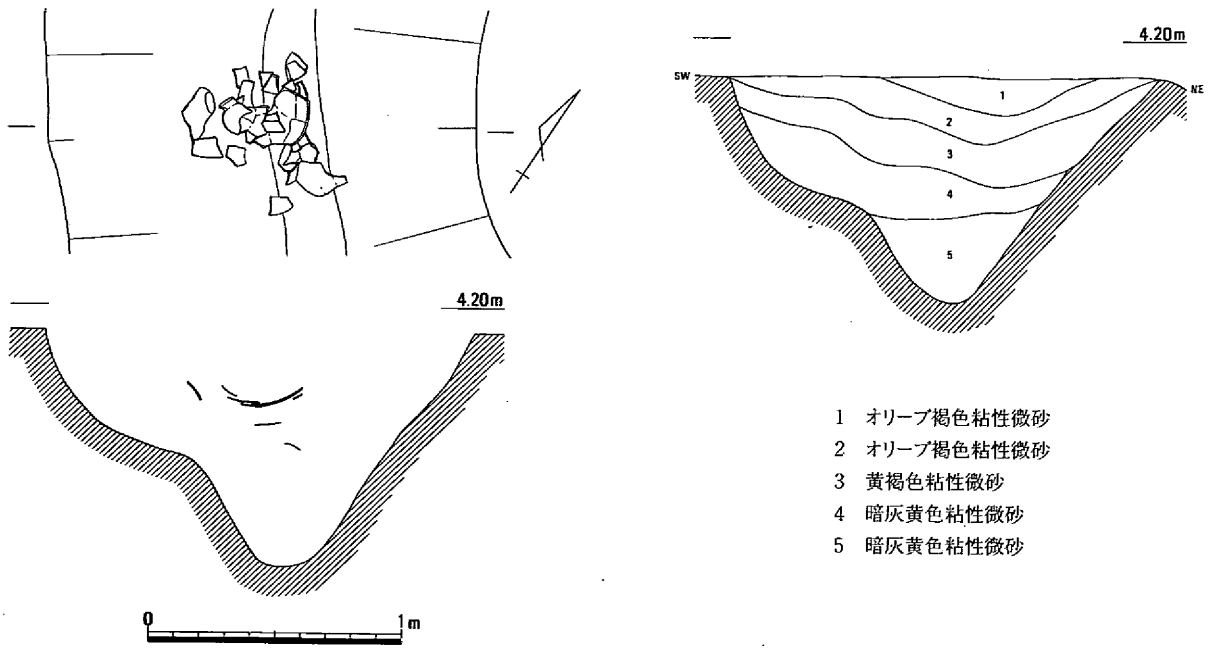
砂場6区の東端近くにおいて検出された溝で、ほぼ北―南方向に流走している。検出面での規模は、幅130cm・深さ70cmを測り、断面は下半がやや急になっている。埋土は2層で、底部から10cm程は暗灰黄色粘質土がレンズ状に堆積しており、少し時間をかけて埋積したと推定される。

遺物としては、弥生土器・土師器などの土器のほか砥石が出土している。868は上層から出土した壺形土器で、上半に最大径をもつ体部から、ほとんど頸をもたないで「く」の字状に外反した口縁の端部が上方にのびている。体部外面はヘラミガキ、内面は頸部下までヘラケズリされている。869は口縁部が「く」の字状に外反しただけの鉢形土器、870は手捏ねの小形鉢形土器である。871～877は弥生時代後期の甕形土器の口縁部片である。878は、「く」の字状に外反した口縁の端部が上方にのび、その外面に凹線文が施された弥生時代後期の甕形土器で、体部外面はハケ目調整され、内面は上端までヘラケズリされている。880・881は内外面とも丁寧にヘラミガキされた弥生時代後期の高杯形土器の杯部片である。S36は4面共使用痕のある流紋岩製の砥石である。

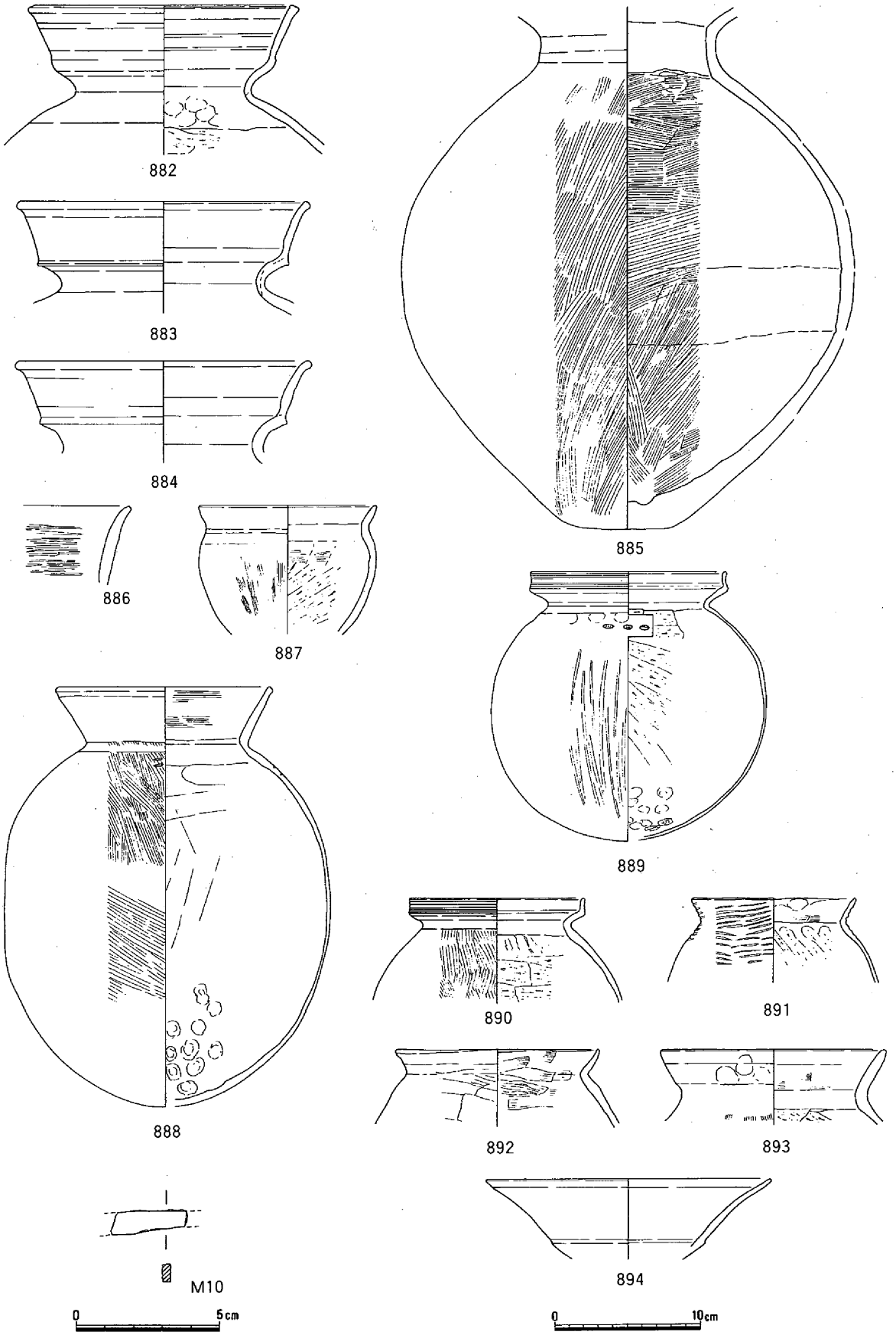
この溝は、出土遺物や検出状況などから弥生時代後期頃から使われはじめ、古墳時代初頭頃に埋没したものと考えられる。（内藤）

溝10（第170・171図、図版20・44・46）

砂場7区の中央部において検出された溝で、竪穴住居16を切り北西―南東方向に流走している。検出面での規模は、幅170cm・深さ90cmを測り、南西側に少し段をもつもののほとんど「V」字の断面を呈している。埋土は5層あり、上層の第1～3層のオリーブ褐色粘性微砂と黄褐色粘性微砂はレンズ状に堆積し、下層の暗灰黄色粘性微砂の堆積とは、少し時間差があると推定される。



第170図　溝10（1/30）・同遺物出土状態（1/30）

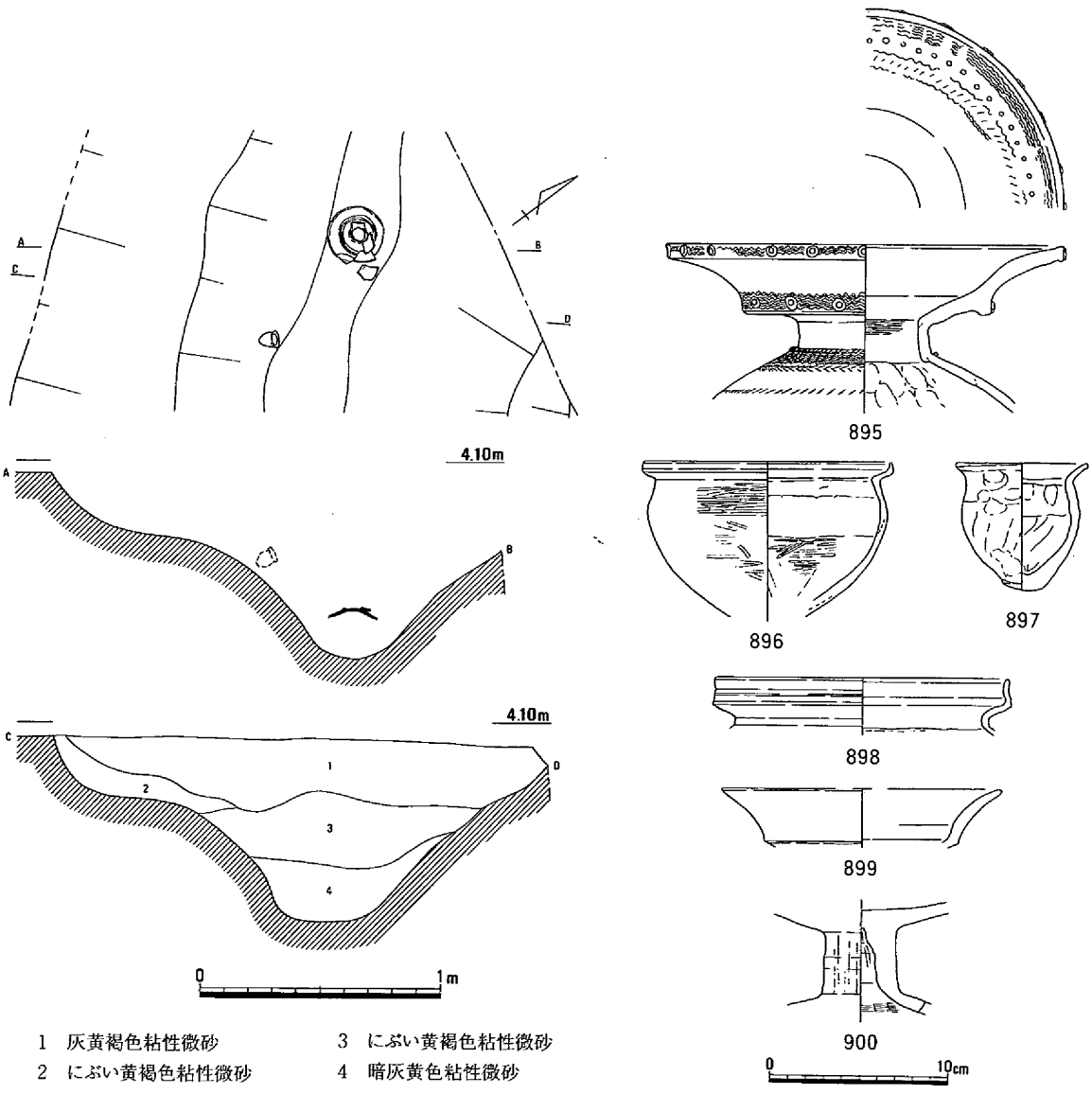


第171図　溝10出土遺物(1/4，1/2)

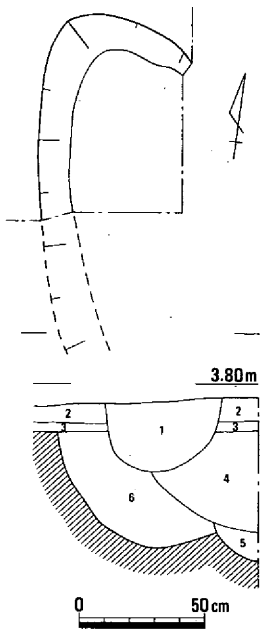
遺物は、第3層を中心にほぼ完形に復元できる土器などがまとまって出土している。882～885は二重口縁の壺形土器で、885の体部は内・外面とも丁寧にハケ目調整されている。887は口縁が「く」の字状に外反した鉢に近い甕形土器、888は少し長めの体部から口縁が「く」の字状に外反している甕形土器で、体部外面は丁寧にハケ目調整されている。889・890は口縁端部に櫛描き沈線を巡らせた甕形土器で、889はほとんど球形の体部である。891～893は口縁部が「く」の字状に外反しただけの甕形土器で、タタキ目により外面を調整している。897は高杯形土器の杯部である。これらの土器のほかM10の鉄片が出土している。両端が欠損しているが刀子片とみられる。この溝は、出土遺物や検出状況などから弥生時代後期頃から使われはじめ、古墳時代前期頃に埋没したと考えられる。（内藤）

溝11（第172図、図版21・44）

砂場７区の東端部を北西から南東へ流走している溝で、流路は4.5m程西の溝10にほぼ平行し、北端部で竪穴住居17に切られている。検出された規模は、幅226cm・深さ76cm程で、断面は緩やかに立ち上がり途中に少し段をもつ。埋土は３層で、第1層に灰黄褐色粘性微砂が、第３層ににぶい黄褐色

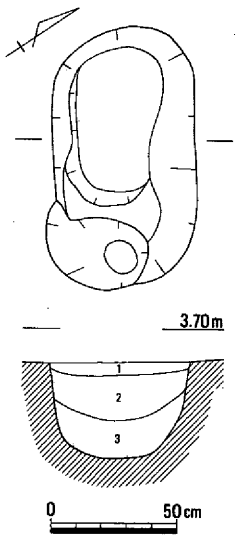


第172図　溝11（1/30）・同遺物出土状態（1/30）・出土遺物（1/4）



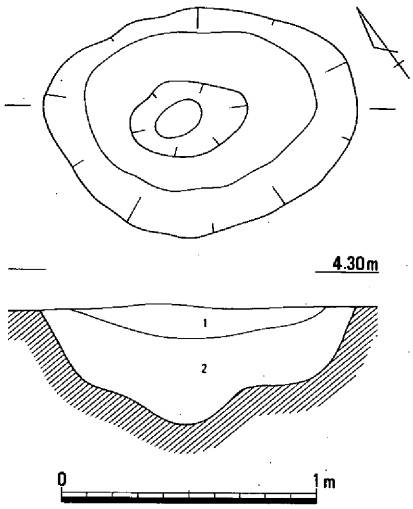
1　灰黄褐色粘性微砂質土(溝9)
2　灰褐色粘性微砂質土
3　暗灰黄褐色粘性微砂質土
4　黄褐灰色粘性微砂質土(溝14)
5　暗青褐灰色粘質土
6　青褐灰色粘質土(土壙1埋土)

第173図　土壙16 (1/30)



1　にぶい黄褐色粘質土
2　灰黄褐色粘性微砂
3　灰黄褐色粘質土

第174図　土壙17 (1/30)



1　灰黄褐色粘性微砂
2　暗灰黄色粘性微砂

第175図　土壙18 (1/30)

粘性微砂が、最下層の第４層に暗灰黄色粘性微砂が堆積している。

遺物はおもに第３・４層を中心に、弥生土器･土師器などの土器が出土している。**895**は頸部から屈曲して斜め外方に開く口縁部に円形浮文や波状文、竹管文などを巡らせ、丁寧に装飾した弥生時代後期の壺形土器である。**896**は口縁端部をすこしつまみ上げている鉢形土器、**897**は口縁部を外反させただけの手捏ねの甕形土器、**898**は口縁端部を立ち上げ、外面に凹線を巡らせた甕形土器である。また、**899・900**は高杯形土器の口縁部片、および脚柱部片である。

この溝は、出土遺物や検出状況などから弥生時代後期頃から使われはじめ、古墳時代前期に埋没したと考えられる。　(内藤)

土壙16（第173図）

砂場１区東端の南壁付近において検出された遺構である。東側は溝４に削平され、南部は調査区外におよび規模などは判然としない。検出面からの深さは46cmを測り、埋土は青褐灰色粘質土が埋積している。埋土中から若干の土師器・須恵器などの土器が出土しているがいずれも細片である。

時期は、出土遺物などから古墳時代後期頃と推定される。　(内藤)

土壙17（第174図、図版21）

砂場３区の西部、竪穴住居９のすぐ南側において検出された遺構である。規模は、長径100cm・短径60cm程のやや歪んだ楕円形を呈し、検出面からの深さは38cmを測る。壁面は比較的直立して立ち上がり、底面は平坦である。埋土は３層がレンズ状に堆積している。

出土遺物がないため、時期は判然としないが、検出状況から古墳時代と推定される。　(内藤)

土壙18（第175図）

砂場５区の東部、竪穴住居14の上面において検出された遺構である。規模は、長径 120cm・短径90cm程のやや歪んだ楕円形を呈し、検出面からの深さは47cmを測る。壁面は途中で段をもち、少し緩や

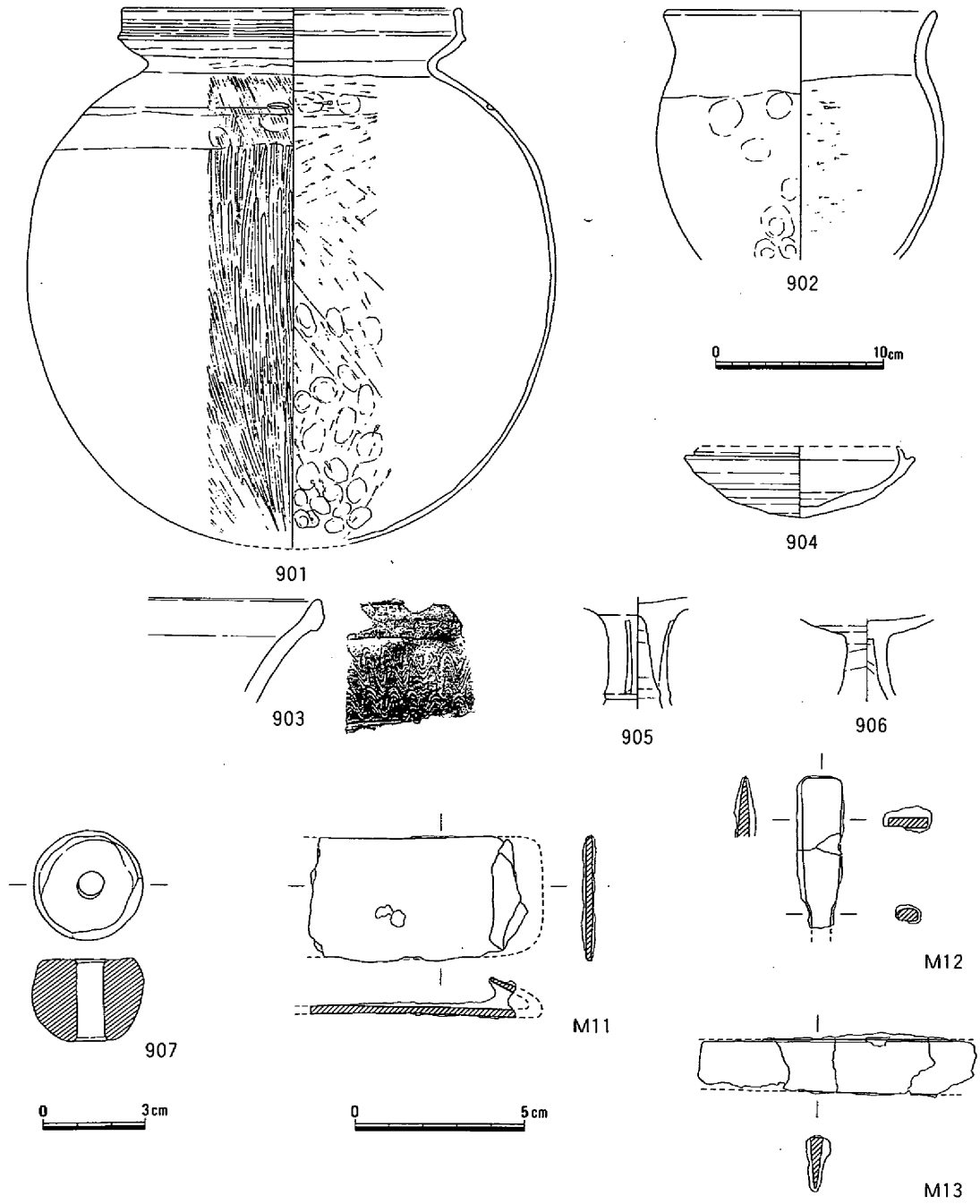
かに立ち上がる。埋土は２層でレンズ状に堆積している。

遺物は、弥生土器や土師器が若干出土しているが、いずれも細片で時期の決定には至らない。

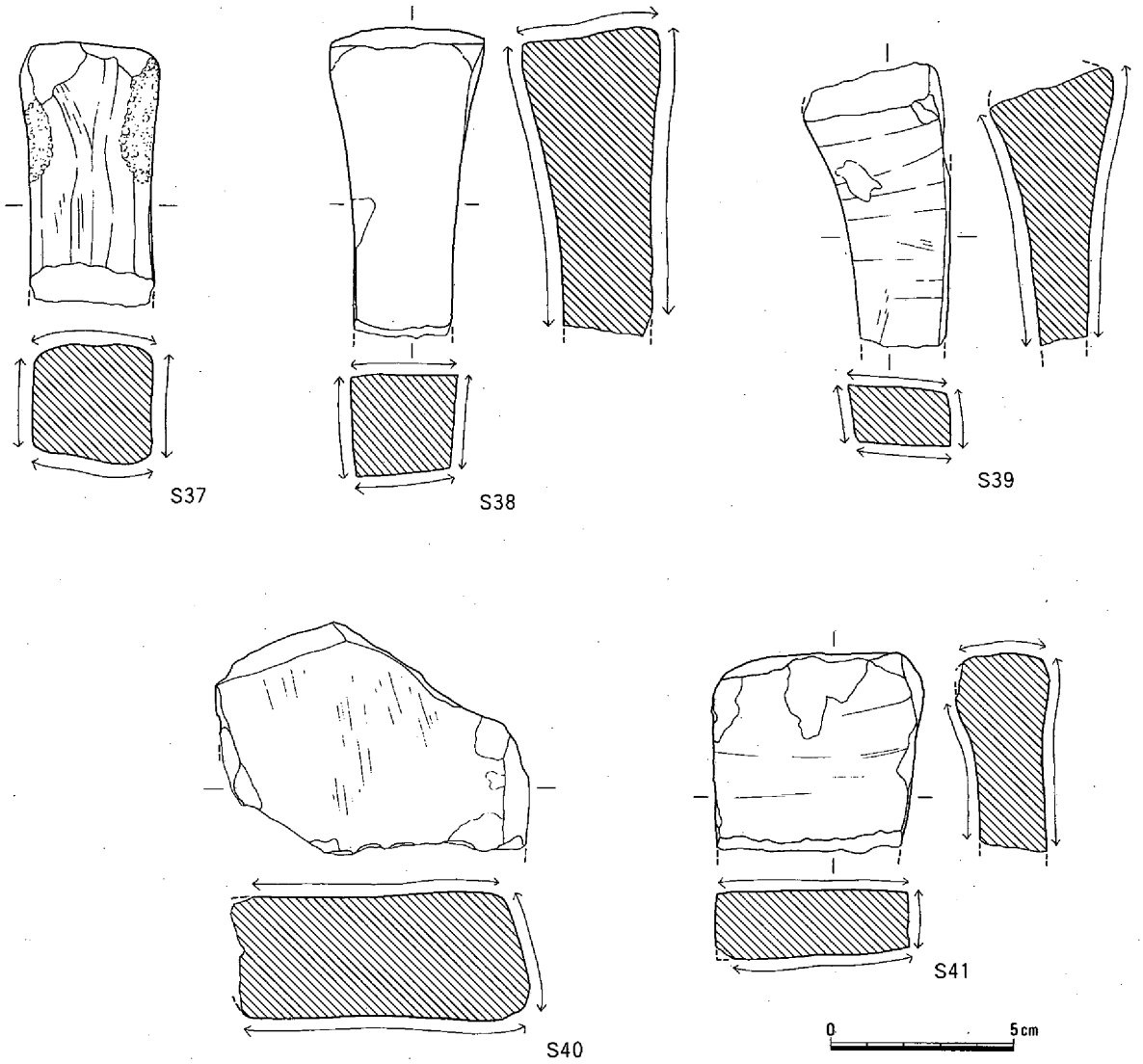
この土壙は古墳時代前期頃と推定されるが、明らかに竪穴住居14の埋没後のものである。（内藤）

その他の遺物（第176・177図、図版44・46）

加茂政所遺跡では、遺構には伴っていないものの、古墳時代の遺物が包含層などから多く出土している。**901・902**は古墳時代初頭および前期の土師器、**904～906**は須恵器である。**901**はほとんど球形の体部から「く」の字状に外反した口縁の端部が上方に立ち上がり、端面外面に櫛描き沈線を巡らせる甕形土器で、体部外面はハケ目調整後、肩部までヘラミガキされ、肩部に１か所ヘラ先による刺突が認められる。**902**は口縁部が緩やかに外反して立ち上がる甕形土器で、丁寧な調整は施されてい



第176図　加茂政所遺跡出土古墳時代遺物（1）（1/4，1/2）



第177図　加茂政所遺跡出土古墳時代遺物(2)（1/2）

ないものである。903は開き気味の口縁端部を肥厚させている壺で、外面に波状文を巡らせている。904は杯身、905・906は高杯の脚柱部である。905には３か所長方形の透かし窓が切り込まれている。これらの土器のほかに、土製紡錘車907や鉄器M11～M13が出土している。鉄器はいずれも一部を欠いているが、M11は摘み鍬、M12は鉄鏃、M13は刀子とみられる。S37～S41はいずれも使用痕が認められる砥石である。材質はS37が花崗閃緑岩で、そのほかは、いずれも流紋岩である。　（内藤）

第４節　古代の遺構と遺物

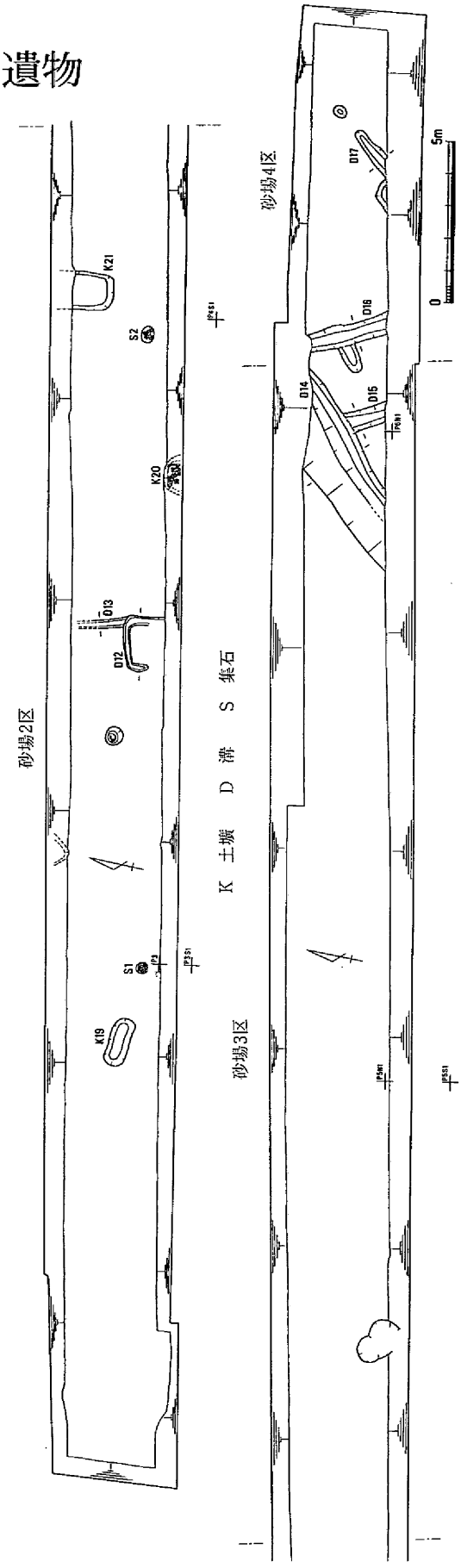
1　遺構配置

加茂政所遺跡から検出された古代の遺構は、それほど多くない。しかも、検出されているのは、砂場２～４区の幅70～80ｍ程の範囲においてのみである。

おもな遺構としては、土壙４基・溝６条・集石遺構２・土器溜まり１などである。しかし、このほかにも包含層中からほぼ完形のものを含み、古代の遺物が多数出土していることから、中世以降に削平されたものもかなりあると推察される。

土壙が検出されたのは、いずれも砂場２区で、土壙墓状のものと穴状のものの２種類がある。溝は、おもに砂場３区から４区にかけての微高地斜面部において検出されており、微高地の肩部に平行するものとほぼ直行するものとがみられる。なお、砂場２区の中央部において溝状の遺構が検出されたが、性格などはまったく不明である。

集石遺構は、砂場２区で検出されているが、両者は10ｍ以上離れて検出されたもので、それぞれに伴う遺構も検出されておらず、性格などは不明なものである。（内藤）



第178図　加茂政所遺跡古代遺構配置図（1/200）

2　遺構・遺物

土壙19（第179図、図版45）

砂場２区の中央西寄りにおいて検出された遺構である。規模は、長径155㎝・短径65㎝程のやや歪んだ楕円形を呈し、検出面からの深さは23㎝を測る。壁面は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。形態から土壙墓も考えられるが、判然とはしない。埋土は暗褐灰色粘性微砂１層で、土師器や須恵器などの土器が若干出土している。908は土師器の杯身である。

時期は、出土遺物などから奈良時代前半頃と推定される。（内藤）

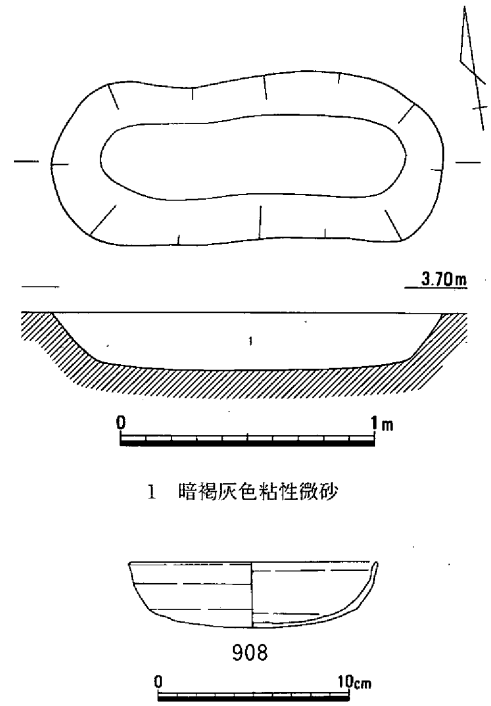
土壙 20（第180図、図版 22・45）

砂場２区の西部中央寄りの南端部において検出された遺構で、南半は調査区外におよんでいる。このため規模などは明らかでないが、径1.3ｍ･深さ20㎝程の土壙と推定されるものである。

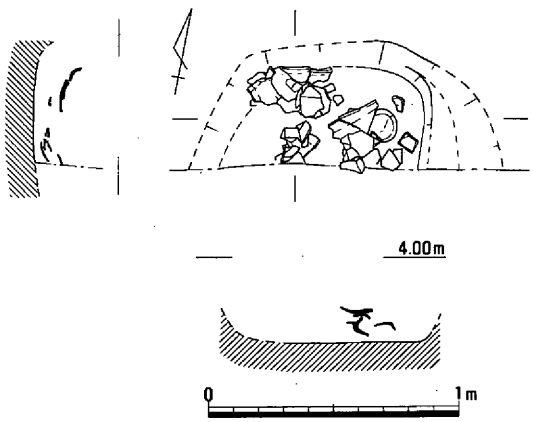
埋土中からは、土師器や須恵器などかなり多量の土器が出土している。**909～911**は須恵器、**912～917**は土師器である。**909**は口径 16.6㎝・器高 3.7㎝で底部はヘラ切りされている杯身である。**911**は高杯の脚柱部である。**912**は口径13.4㎝・器高 2.8㎝、**913**は口径13.6㎝・器高3.2㎝で底部をヘラ切りしている杯身である。**914・915**は丹塗りの杯身で、**914**は口径14.6㎝・器高3.7㎝で底部にはしっかりした高台が貼り付けられている。**917**は「く」の字状に外反した口縁部がやや湾曲気味になっている甕形土器で、体部外面は丁寧なハケ目、内面は指ナデにより調整している。

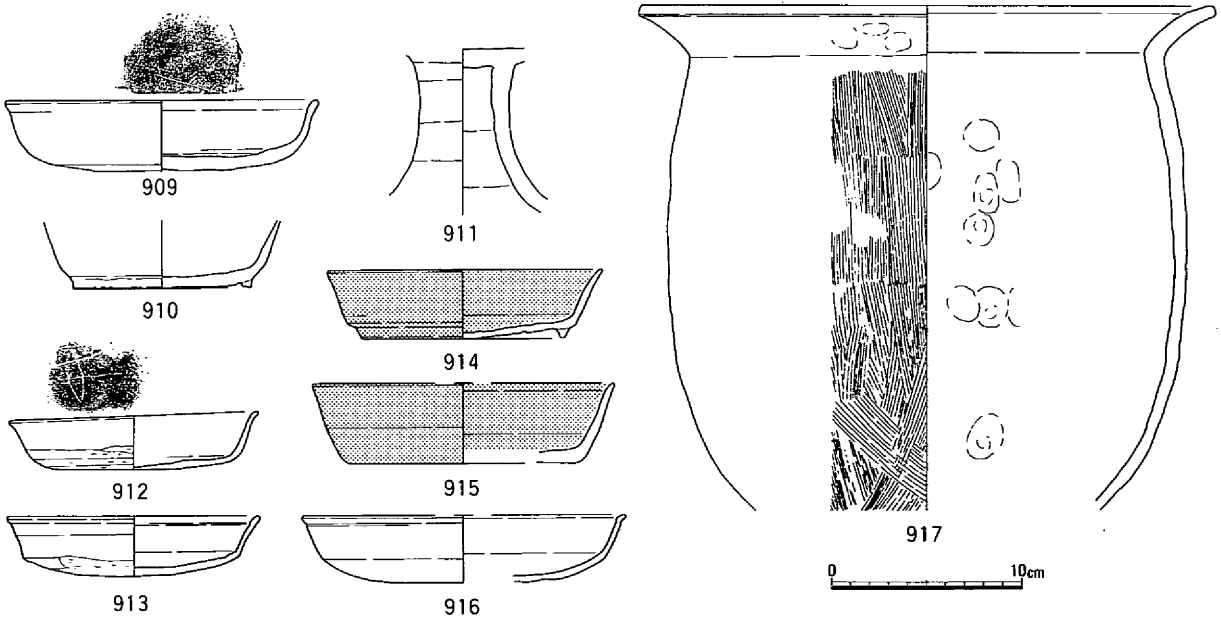
時期は、出土遺物などから奈良時代である。

（内藤）



第179図　土壙19（1/30）・出土遺物（1/4）





第180図　土壙20（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙21（第181図、図版45）

砂場２区の西部北端において検出された遺構で、北半は調査区外におよんでいるため全体の規模などは不明である。検出状況などから南北に少し細長い長方形の土壙と推定される。検出面においては東西120cm・深さ23cmを測り、南側の壁面は緩やかに立ち上がっているものの、東西は比較的直立している。検出された土壙の埋土は４層であるが、第４層の暗灰黄褐色微砂質土の上面で平坦面がつくられており、この面が床面になると考えられる。形態などから土壙墓とも考えられる遺構であるが、判然とはしない。

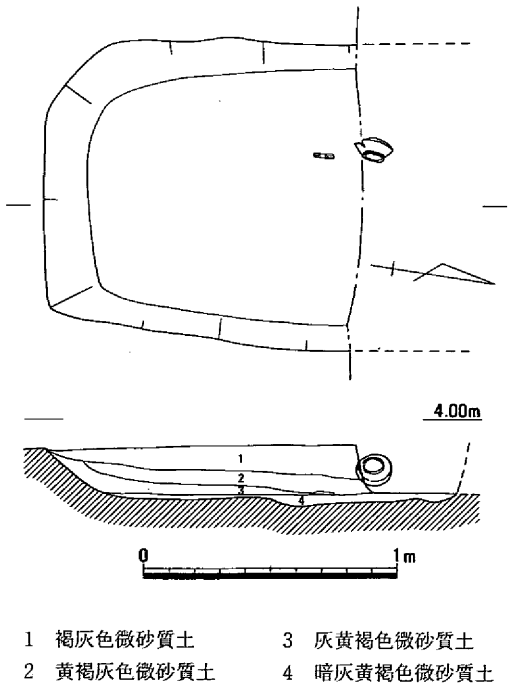
出土遺物としては、土師器や須恵器などの土器のほか、土錘や骨片などがある。**918**は須恵器の壺の口縁部片である。**919～921**は黒色土器の椀で、**919**は口径15.2cm・器高5.6cm、**920**は口径14.4cm・器高5.2cm、**921**は口径14.0cm・器高5.0cmを測り、内・外面とも丁寧にヘラミガキされている。**923**・**924**は土師器の杯身、**926～930**は土師器の小皿である。**931**・**932**はいずれも一部を欠損しているが、土錘片である。

時期は、出土遺物などから10世紀頃と推定される。（内藤）

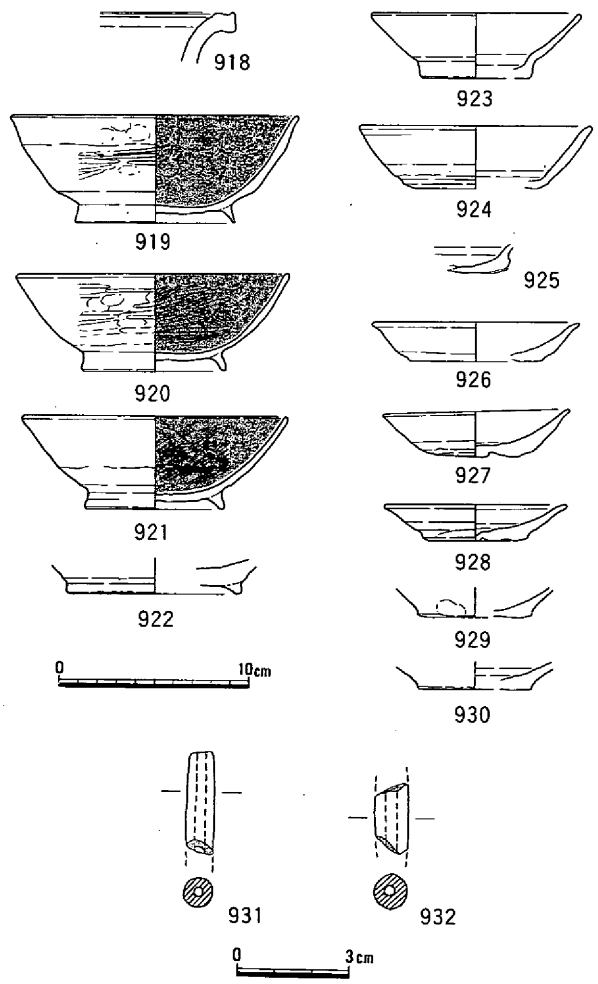
砂場２区調査区南壁土壙出土遺物（第182図、図版45）

砂場２区の南壁面において検出された遺構で、規模などは不明なものの、土師器・須恵器などの土器がまとまって出土している。

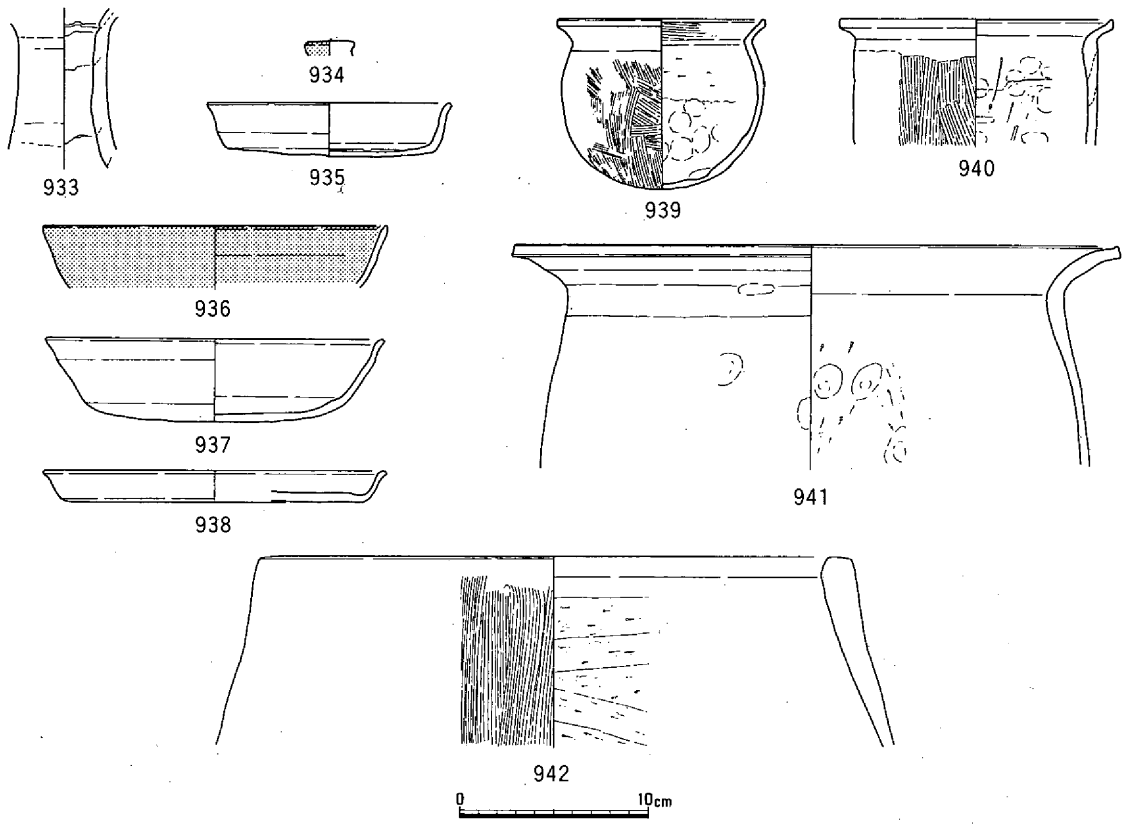
933は須恵器の高杯、**934**は蓋の摘み部分とみられるが、丹塗りされている。**935～937**は土師器の杯身で、**936**は内・外面とも丹塗りされている。**935**は口径12.8cm・器高2.8cm、**937**は口径17.8cm・器高4.4cmを測る。また、**938**は土師器の皿である。**939**は土師器の小形



1　褐灰色微砂質土　　3　灰黄褐色微砂質土
2　黄褐灰色微砂質土　　4　暗灰黄褐色微砂質土



第181図　土壙21（1/30）・出土遺物（1/4，1/2）



第182図　砂場２区調査区南壁土壙出土遺物（1/4）

丸底壺で、口径10.8cm・器高8.8cmを測る。体部外面はハケ目調整後一部ヘラミガキされている。

940～942はいずれも土師器の甕形土器である。

時期ついては、検出状況が良好でなく遺物の混入もみられるが、奈良時代と推定される。　（内藤）

溝12（第183図）

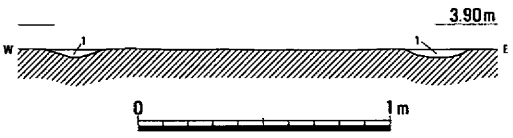
砂場２区の中央部の南側において、「コ」の字状に廻って検出された溝である。南側が調査区外におよんでおり、性格などは不明である。検出面での規模は、幅20～25cm・深さ４cm程の浅い溝で、溝13を切っているがほとんど時期差はない。埋土は黒褐色粘性微砂が１層である。遺物としては、土師器・須恵器などの細片が出土している。時期は７～８世紀頃と推定される。　（内藤）

溝13（第184図）

砂場２区の中央部において、南部を溝12に切られて検出された北―南に流走する溝である。規模は幅18cm・深さ２cm程で土師器片などが出土している。時期は７～８世紀頃と推定される。　（内藤）

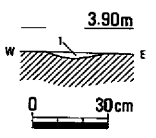
溝14（第185図、図版22）

砂場３区東端の微高地の傾斜部において検出された溝で、微高地の肩部に平行し、南西から北東に流走している。規模は、微高地の傾斜部に位置しているため判然としないが、幅85cm・深さ50cm程を測る。埋土は、褐灰色粘質土が１層で、断面は緩やかな「U」



1　黒褐色粘性微砂

第183図　溝12（1/30）



1　黒褐色粘性微砂

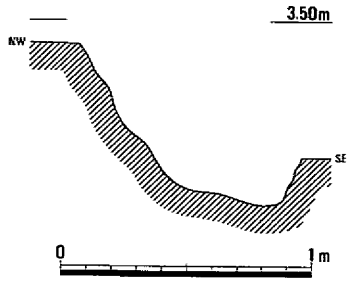
第184図　溝13（1/30）

字形を呈する。

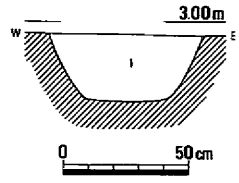
土器などの遺物が出土していないため時期などは不明であるが、古代と推定される。（内藤）

溝15（第186図、図版22）

砂場３区東端の微高地傾斜部において、微高地肩部に直行して検出された溝で、北西―南東方向に流走している。規模は、幅60cm・深さ27cmを測り、埋土は黒褐灰色粘質土が１層である。断面は緩やかな「U」字形を呈する。出土遺物がなく、時期は判然としないが、溝16に平行して流走するもので、ほぼ同時期に推定される。（内藤）



第185図　溝14（1/30）

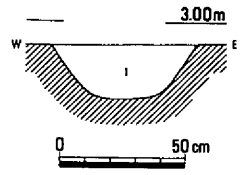


1　黒褐灰色粘質土

第186図　溝15（1/30）

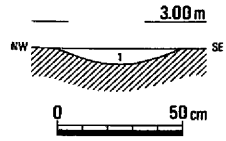
溝16（第187図。図版22）

砂場４区西端の微高地傾斜部において、微高地肩部にほぼ直行して検出された溝で、北西から南東に流走している。規模は、幅55cm・深さ22cmを測り、埋土は黒褐灰色粘質土が１層である。断面は緩やかな「U」字形を呈する。埋土中から、土師器・須恵器などの細片が若干出土している。時期は７世紀頃と推定される。（内藤）



1　黒褐灰色粘質土

第187図　溝16（1/30）



1　黒褐灰色粘質土

第188図　溝17（1/30）

溝17（第188図、図版22）

砂場４区の中央付近において検出された溝で、北東から南西に流走している。上部は削平され、底部がわずかに検出されたもので、幅45cm・深さ４cmを測るのみである。埋土は、黒褐灰色粘質土が１層で、出土遺物はなく、時期などは判然としない。検出状況から古代と推定される。（内藤）

集石１（第189図）

砂場2区の中央やや西寄りにおいて検出された遺構で、直径50cm程の浅い土壙内に礫が集石しているが、性格は不明である。須恵器の細片が出土している。時期は７世紀頃と推定される。（内藤）

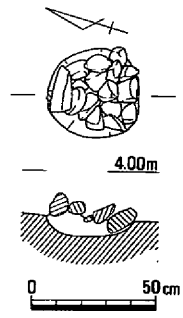
集石２（第190図、図版23）

砂場2区の東部において検出された遺構で、径50×40cm程の浅い土壙内に礫が集められているもので性格などは不明である。土師器の細片が出土している。時期は古代頃と推定される。（内藤）

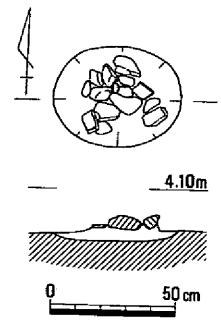
土器溜まり１（第191図、巻頭図版3、図版22・45）

砂場３区西部の南端において、明確な掘り方などはもたないものの、径１m程の範囲に土器片などが集中して出土している遺構である。南端は、調査区外におよび、さらに南へ広がる可能性がある。

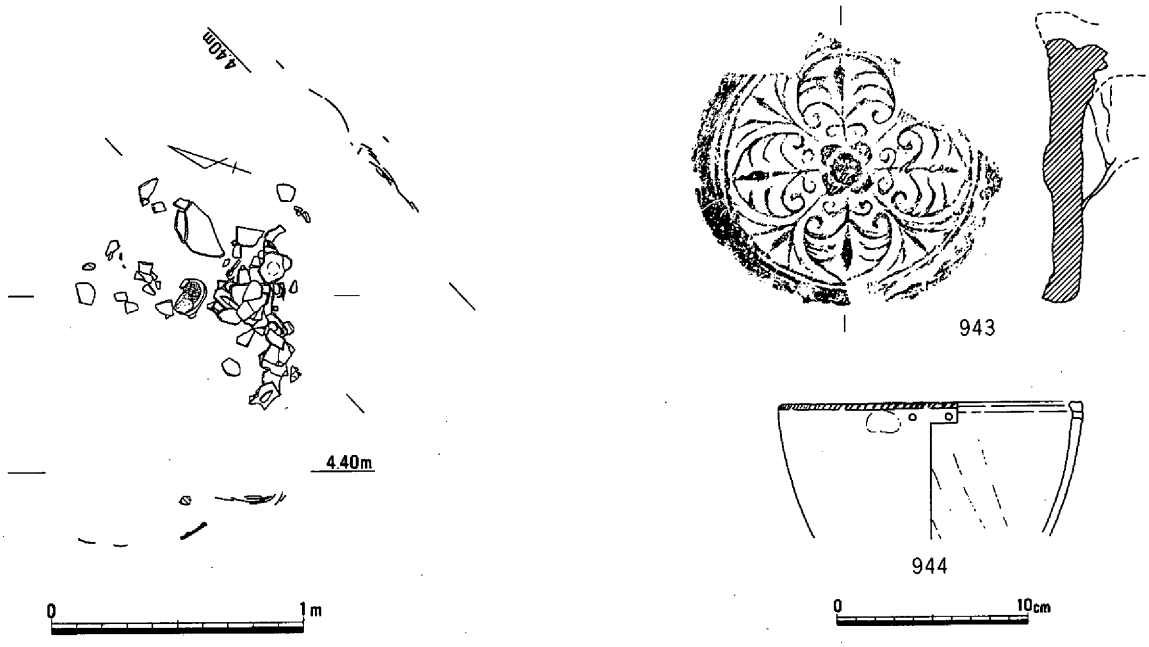
出土した土器はいずれも細片で、時期にもバラツキが認められる。**944**は口縁端部に刻め目を巡らし、口縁上端部に蓋を取り付けるために



第189図　集石１（1/30）

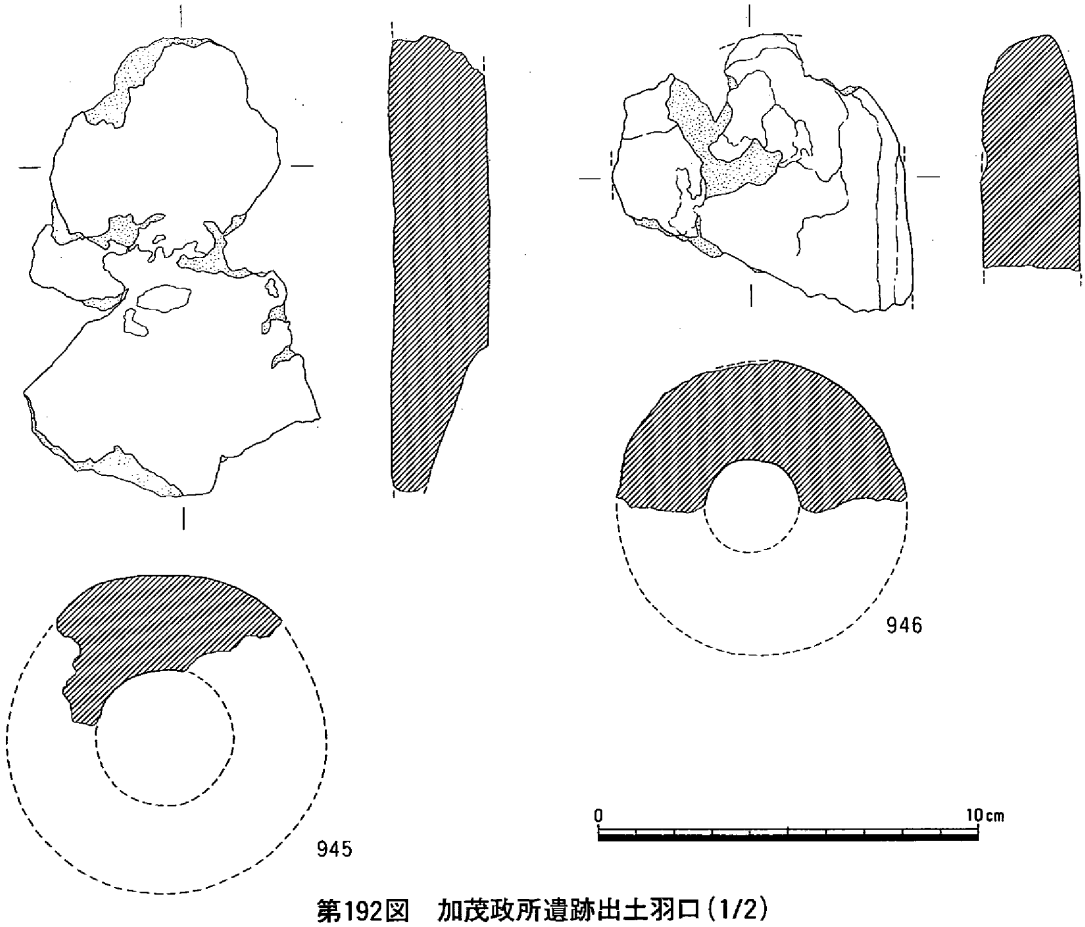


第190図　集石２（1/30）

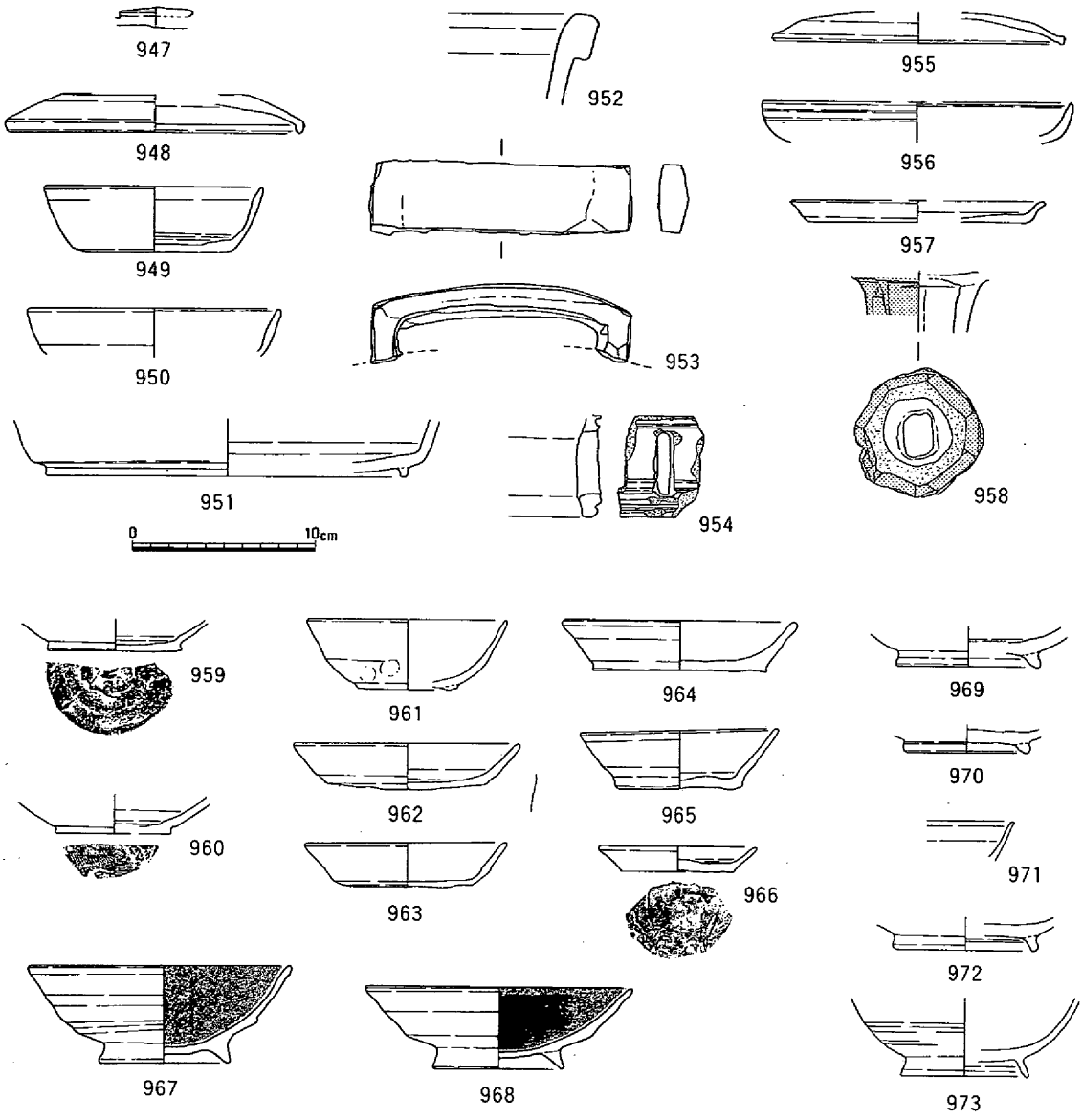


第191図　土器溜まり１（1/30）・出土遺物（1/4）

円孔が認められる弥生時代中期の鉢形土器である。また、943は土器に混入して出土した10世紀後半頃の宝相華文の軒丸瓦である。同様の瓦は、南接の山陽自動車道の調査でも出土している。



第192図　加茂政所遺跡出土羽口（1/2）



第193図　加茂政所遺跡出土古代遺物（1）（1/4）

その他の遺物（第192～194図、巻頭図版３、図版45）

加茂政所遺跡では、遺構に伴っていないものの、古代の遺物が包含層などから多く出土している。

945・946ははいずれも羽口の一部である。調査区内において炉跡などは検出されていないが、土壙や溝の埋土中に、炭や焼土の含まれているものもあり、近くに遺構があると推定される。

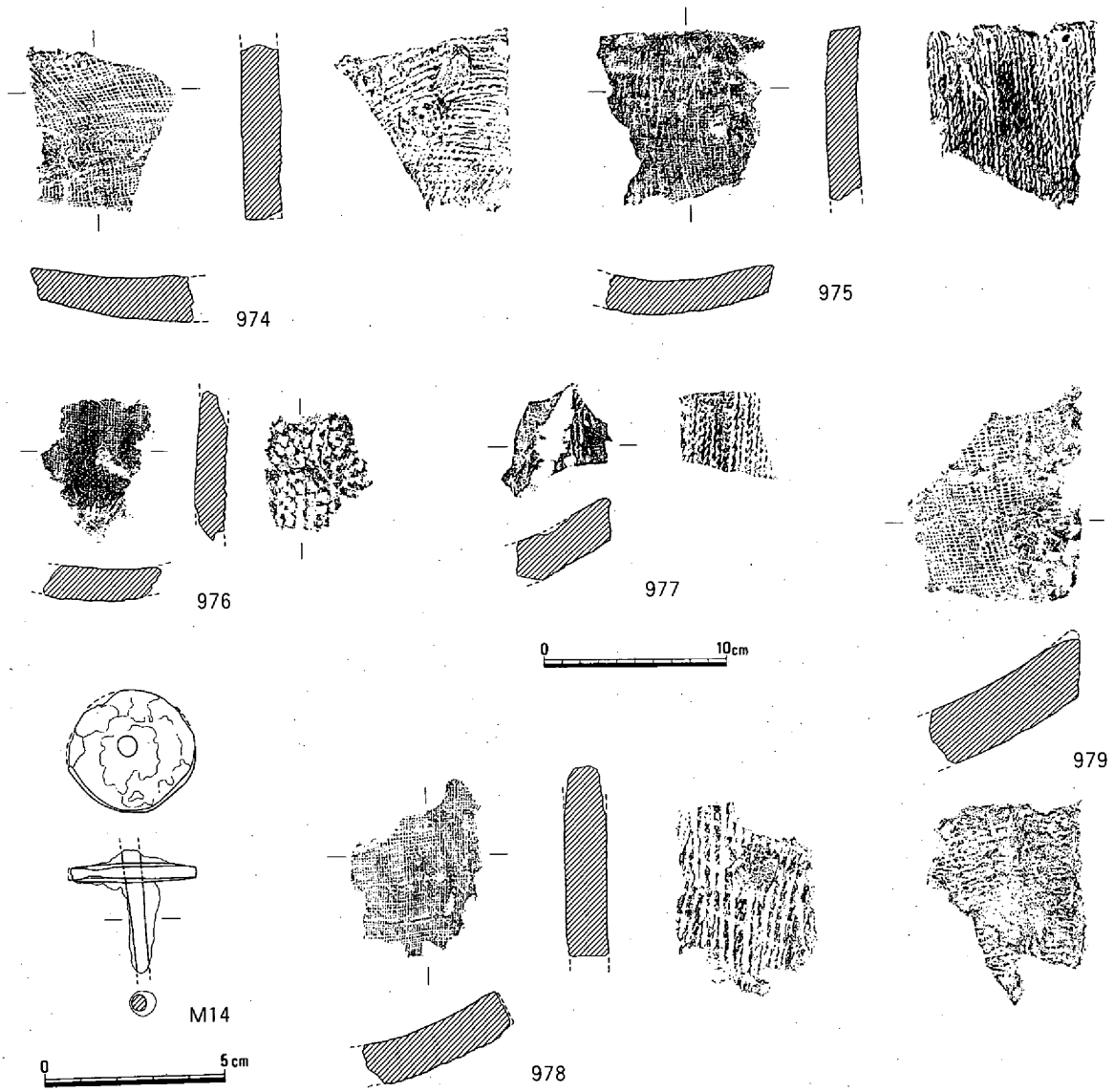
947～954は奈良時代頃の須恵器、**955～958**は土師器である。

947は杯蓋の摘み部分、**948**は杯蓋、**949～951**は杯身である。また、**953**は平瓶の把手、**954**は円面硯の破片である。**955**は杯蓋、**956**は杯身、**957**は皿、**958**は丹塗りされた高杯の脚部片である。

959・960は底部をヘラ切りしている杯の底部、**961～965**は杯身、**966**は底部をヘラ切りした土師器の小皿である。

967・968はいずれも平安時代の内黒土器で底部に断面三角形の高台を貼り付けている

969・970は緑釉陶器、**971～973**は灰釉陶器の椀で、底部に高台を貼り付けている。



第194図　加茂政所遺跡出土古代遺物（2）（1/4，1/2）

974～979はいずれも平瓦である。内面は布目、外面は縄目の瓦で、時期は平安時代頃のものとみられる。これらは土器溜まり１から出土している軒丸瓦**943**と共に使用されていたものと考えられ、時期は10世紀後半から11世紀初頭頃と推定される。

M14は、芯棒の両端が欠損しているが、鉄製の紡錘車である。（内藤）

第５節　中世の遺構と遺物

１　遺構配置

加茂政所遺跡においては、ほぼ全域でなんらかの中世遺構が検出されている。しかし、遺構の集中しているのは、砂場１区から砂場３区の中央部までと、砂場６区から砂場７区にかけての微高地上部分である。前者では、土壙墓４基をはじめ、大形のものも含み土壙や溝などが検出されたほか、非常に多数の柱穴がみつかっている。一方、後者では、土壙墓の可能性が考えられる土壙を含み、溝や柱穴が多数検出され、砂場６区西端の微高地傾斜面においては、多量の中世土器が出土している。

加茂政所遺跡では砂場３区の中央付近を肩部として、東に向かい基盤が次第に下がっている。また、砂場６区西端を肩部として西に向かい次第に基盤が下がる。この間は低位部となり、遺構が稀薄になっている。このため、砂場３区の東部から砂場４区にかけては、微高地の肩に平行する溝が多数検出されたほかに、土壙などが若干検出されているにすぎない。また、砂場５区では土壙や柱穴などが多少検出されたものの、全体からみるとその密度は薄い。

砂場８区の西端部から東に向かい、基盤が次第に下がりはじめ、砂場８区中央東よりにおいて完全に斜面となる。このため、砂場８区では西半においてのみ土壙や柱穴などが多少検出されている。

高田５区の南西端から南西に向かい、基盤が次第に下がりはじめている。このため、高田１～４区では、溝および溝状遺構と柱穴が、高田５区で微高地の肩にほぼ平行する溝がみられるのみである。

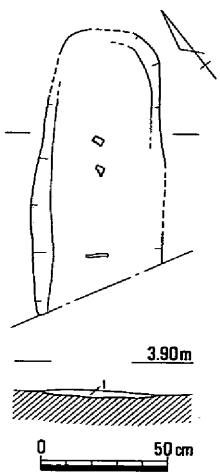
２　遺構・遺物

墓２（第195図）

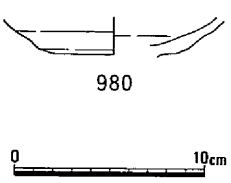
砂場３区の西端部において検出された遺構で、墓３の３ｍ程西に位置している。遺構の上面が削平されており、検出面から床面まで深さ２～３㎝を測るのみである。また、南西部も削平されていて全長は不明であるが、幅50㎝程を測り、隅丸長方形を呈す。埋土は、黄灰褐色粘性微砂が１層で、床面は平坦である。検出状況などから、土壙墓と考えられるもので、長軸は北西―南東方向である。

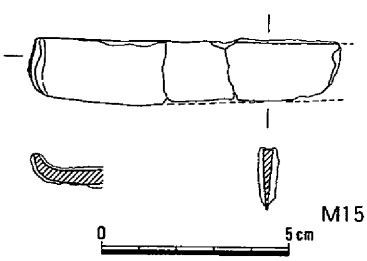
埋土中からは、土器の細片と伴に鉄器・人骨片が出土している。**980**は土師器の底部片である。**M15**は一部を欠損しているため、全長は不明であるが、幅17㎜を測る鉄鎌である。

時期は、出土遺物などから12世紀初頭頃である。　（内藤）

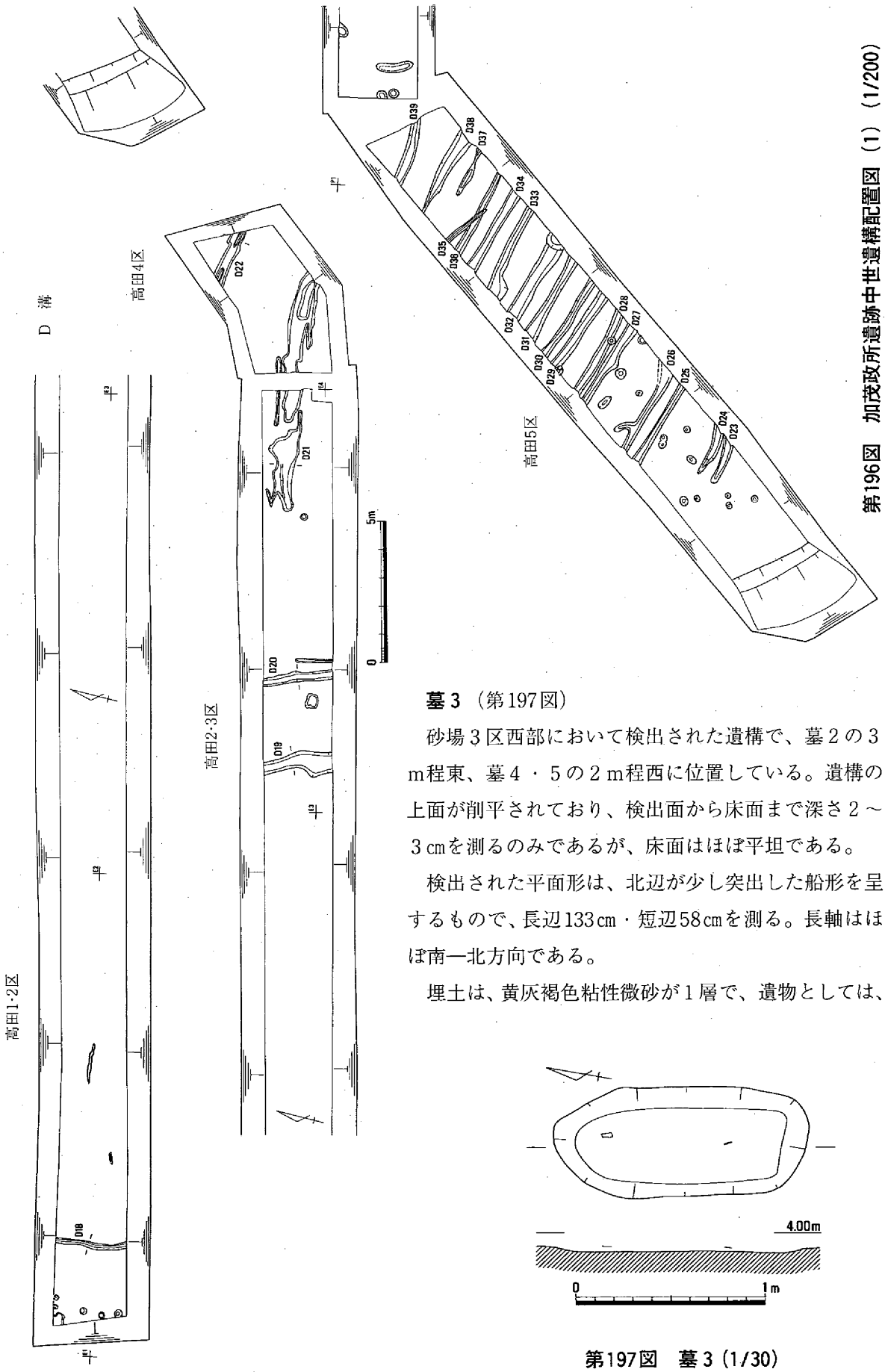


1　灰褐色粘性微砂





第195図　墓２（1/30）・出土遺物（1/4，1/2）



第196図　加茂政所遺跡中世遺構配置図（1）（1/200）

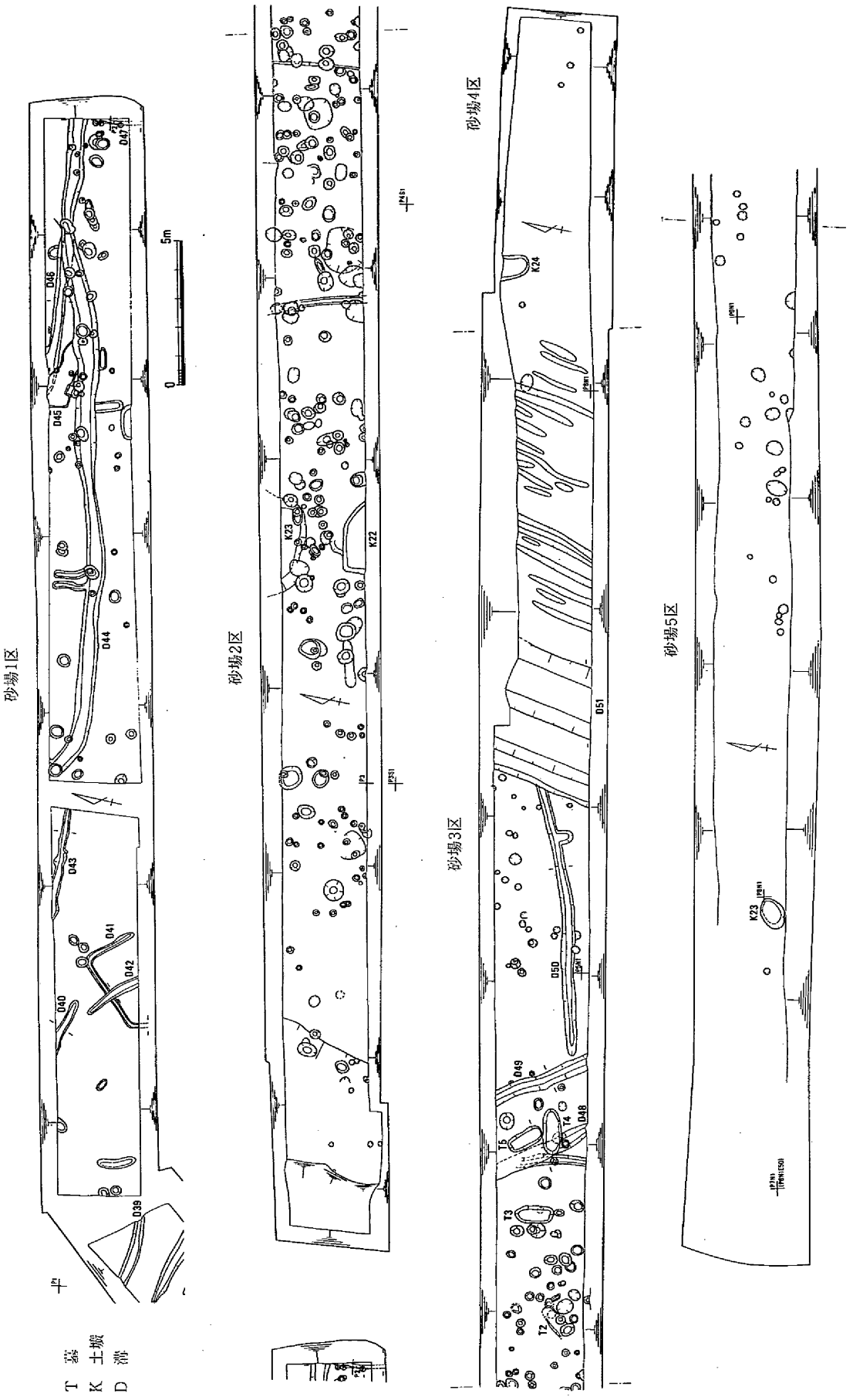
墓３（第197図）

砂場３区西部において検出された遺構で、墓２の３m程東、墓４・５の２m程西に位置している。遺構の上面が削平されており、検出面から床面まで深さ２～３cmを測るのみであるが、床面はほぼ平坦である。

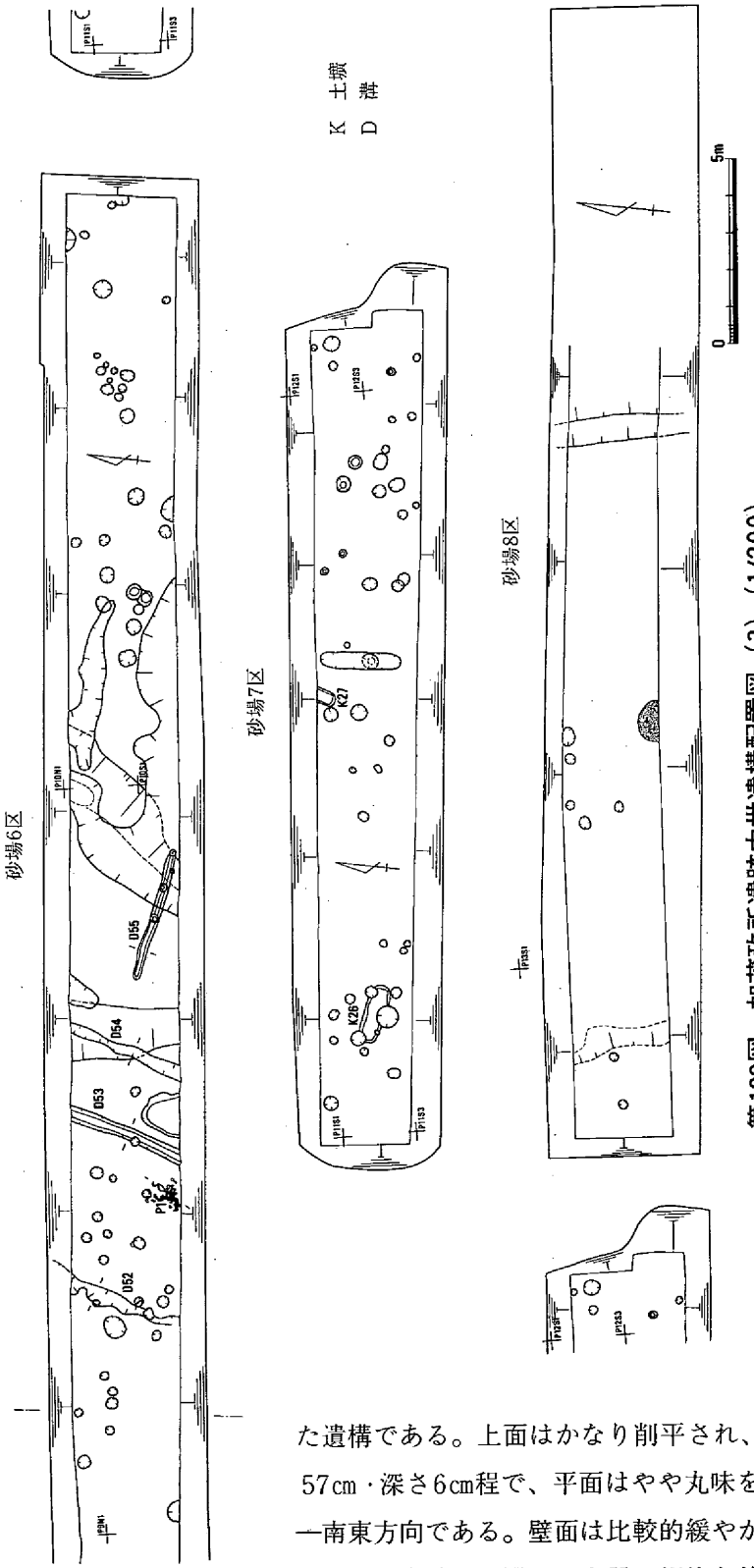
検出された平面形は、北辺が少し突出した船形を呈するもので、長辺133cm・短辺58cmを測る。長軸はほぼ南―北方向である。

埋土は、黄灰褐色粘性微砂が１層で、遺物としては、

第197図　墓３（1/30）



第198図　加茂政所遺跡中世遺構配置図(2)(1/200)



第199図　加茂政所遺跡中世遺構配置図（3）（1/200）

土師器などの土器片と伴に骨片が出土している。

時期は、出土遺物などから12世紀初頭頃である。（内藤）

墓４（第200図、巻頭図版４、図版23）

砂場３区の西部において検出された遺構で、北辺の上面を一部墓５に切られている。検出された平面形は、ほとんど長楕円形を呈し、長軸はほぼ東―西方向である。規模は、長径157cm・短径65cm・深さ15cmを測る。壁面はやや緩やかで、床面は平坦である。埋土は、黄灰褐色粘性微砂が１層で、頭骨をはじめ比較的遺存状態の良好な一体の埋葬人骨と伴に、土器の細片や鉄滓が出土している。

埋葬人骨は、頭位を西に置き顔を南に向け、足は「く」の字に曲げられている。人骨の年齢や性別・身長などについては、鑑定に使用する部位の遺存状態が悪く、明らかにならなかった。

時期は、出土遺物などから12世紀初頭頃である。（内藤）

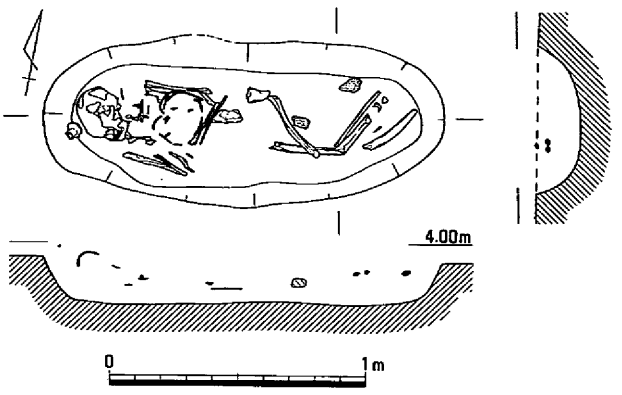
墓５（第201図）

砂場３区の西部において、墓４の北端を一部切って検出された遺構である。上面はかなり削平され、検出された規模は、長さ128cm・幅57cm・深さ6cm程で、平面はやや丸味をもつ隅丸長方形である。長軸は北西―南東方向である。壁面は比較的緩やかで、床面は平坦である。埋土は黄灰褐色粘性微砂が１層で、土器の細片と伴に骨片が出土している。

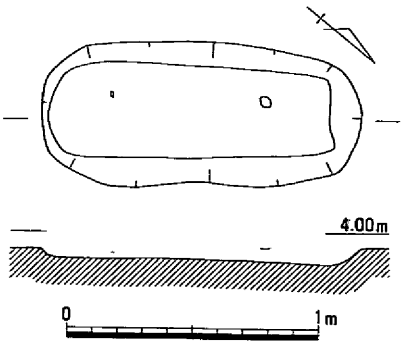
時期は、墓４より新しいものの、出土遺物などから12世紀初頭頃と推定される。（内藤）

土壙22（第202図）

砂場２区の中央南端において検出された遺構で、南側は調査区外におよんでいる。遺構の大半が調査区外とみられ、規模などは不明である。断面は浅い溜まり状のくぼみで、淡灰褐色微砂の埋土中か



第200図　墓4（1/30）



第201図　墓5（1/30）

ら中世土器などが出土している。981・982は土師器の椀で、底部には小さな高台が貼り付けられている。983は土師器の小皿である。

時期は、出土遺物などから13～14世紀頃と推定される。（内藤）

土壙23（第203図）

砂場2区の中央北端において検出された遺構で、北側は調査区外におよんでいる。遺構の大半が調査区外とみられ、規模などは不明である。灰褐色粘性微砂の埋土中から中世土器などが出土している。

984～987は土師器の椀で、底部には小さな高台が貼り付けられている。988～991は土師器の小皿、992・993は土鍋の口縁部片である。994は一部欠損しているが土製の土錘である。このほかに、亀山焼の細片や鉄片が出土している。

時期は、出土遺物などから14世紀頃と推定される。（内藤）

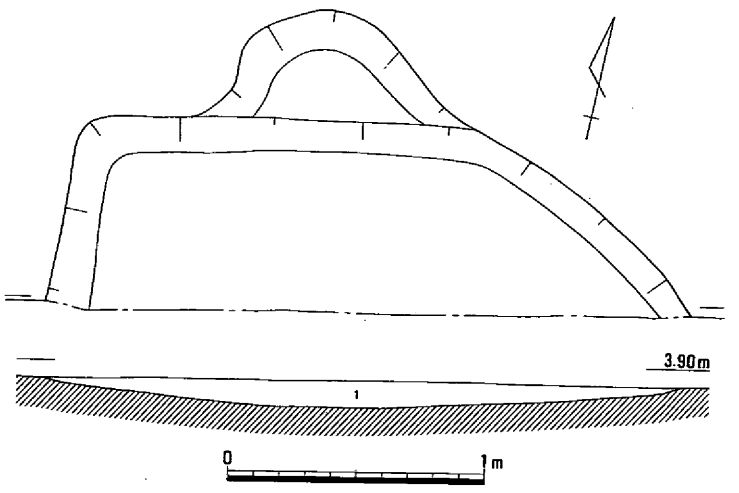
土壙24（第204図）

砂場4区の西部北端において検出された遺構である。北半は調査区外におよんでいるため、遺構の全長は不明であるが、幅80cm・深さ12cm程を測り、北西―南東方向に長軸をもつ隅丸長方形と推定される土壙である。東側面はやや緩やかに立ち上がるものの、床面はほぼ平坦で、埋土は褐灰色粘性微砂が1層である。

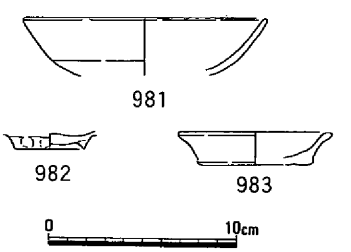
遺物としては、土器の細片のほかに骨片が出土している。

形態や検出状況などから、土壙墓とも考えられる遺構である。

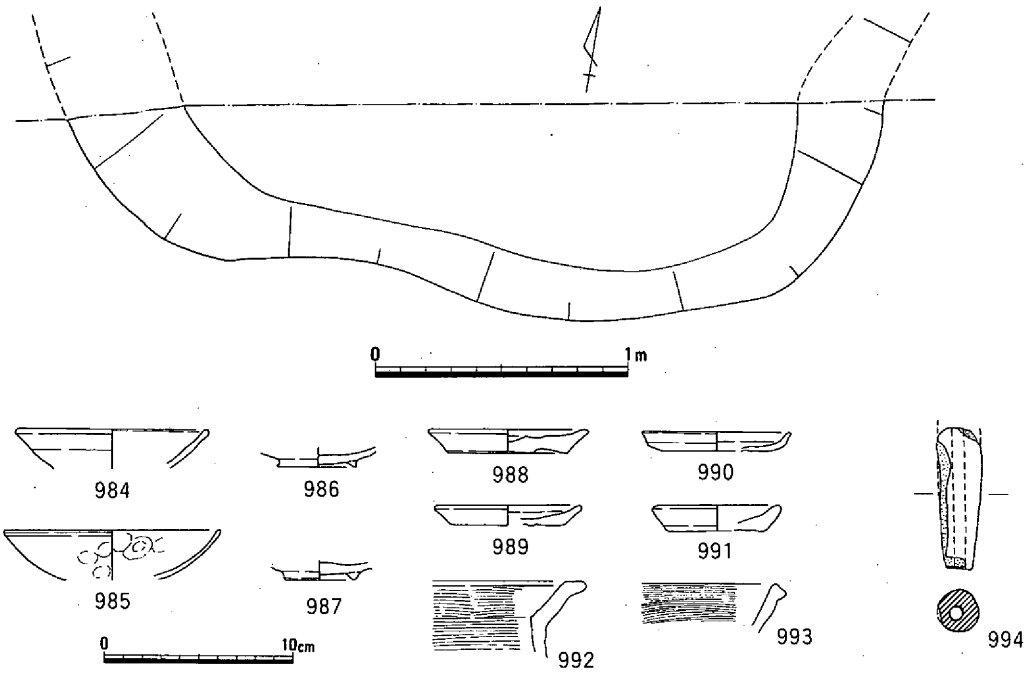
時期は、出土遺物などから古代



1　淡灰褐色微砂質土



第202図　土壙22（1/30）・出土遺物（1/4）



第203図　土壙23（1/30）・出土遺物(1/4，1/2)

末から中世初頭頃と推定される。（内藤）

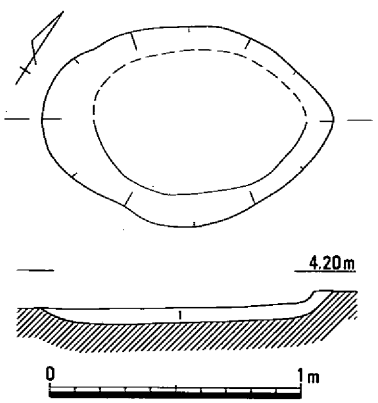
土壙25（第205図）

砂場５区の西部において検出された遺構で、長径115cm・短径80cm程のやや歪んだ楕円形を呈する土壙で、検出面からの深さは12cmである。緩やかな断面で、底面は平坦である。埋土は灰黄色粘質土が１層である。埋土中から土器片が出土しているが、細片である。

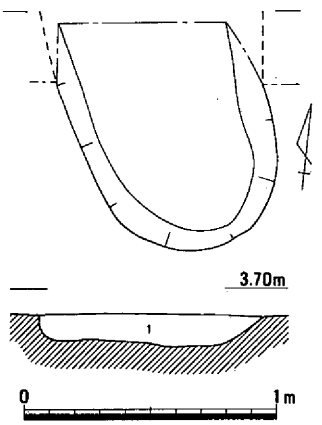
時期は、検出状況などから中世に推定される。（内藤）

土壙26（第206図、図版23）

砂場７区の西部において検出された遺構で、長さ160cm・幅60cm・深さ15cm程を測り、東―西に長軸をもつやや歪んだ隅丸長方形の土壙である。壁面はやや緩やかに立ち上がり、底面は湾曲気味である。埋土は、暗灰黄色粘性微砂が１層で、弥生土器などが混入しているものの細片である。



第205図　土壙25（1/30）

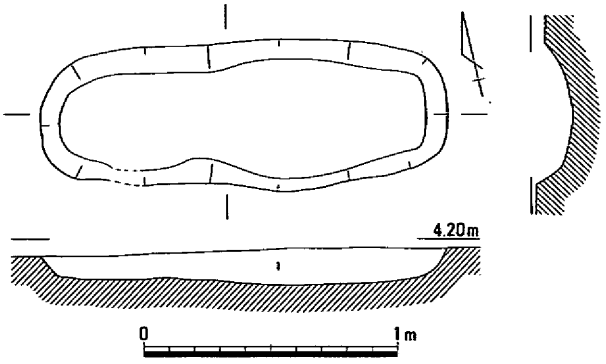


第204図　土壙24（1/30）

時期は、出土遺物などから11世紀後半から12世紀初頭頃と推定される。（内藤）

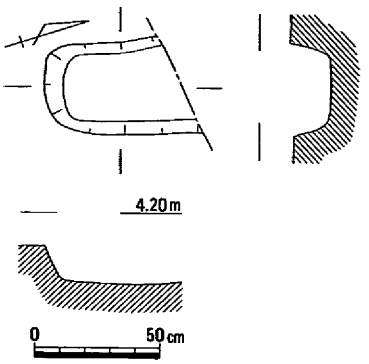
土壙27（第207図）

砂場７区の中央部北端において検出された遺構である。北半は調査区外におよんでいるため、遺構の全長は不明であるが、幅40cm・深さ17cmを測り隅丸長方形を呈すると推定される土壙である。側壁面は比較的直立して立ち上がり、底面は



1　暗灰黄色粘性微砂

第206図　土壙26（1/30）



第207図　土壙27（1/30）

平坦である。埋土は、灰黄褐色粘性微砂が１層である。土壙の長軸は南―北方向である。

この遺構は、形態などから土壙墓とも考えられるが、人骨や副葬品などの出土がなく判然とはしない。埋土中には、弥生土器などが混入しているが、いずれも細片である。

時期は、11世紀後半から12世紀初頭頃と考えられる。（内藤）

溝18（第208図）

高田１区の西端で検出された。北から南へ少しうねりながら流れる溝である。溝の幅が21cm、深さは７cmであった。この溝の西では６個の柱穴がみられ、溝の東側とは対照的であった。何かの区画施設であったかもしれない。埋土は黄褐灰色粘質土であった。中世の土器片が出土した。**995**は椀の口縁部、**996**は小皿である。13世紀から14世紀にかけてのものと思われる。（岡本）

溝19（第209図）

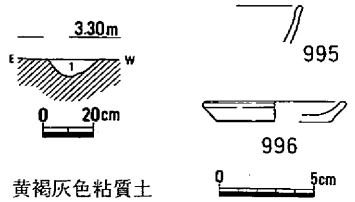
高田３区にあって、溝18と同じような方向をとる。規模はやや大きく、幅が40～90cm、深さは５cmとやはり浅かった。埋土から中世の溝と判断される。（岡本）

溝20（第210図）

高田３区の西半、溝19の東2.5ｍにあって、溝19と平行していた。同じ機能をもっていたとみられる。幅は35cm程度、深さは３cmにすぎなかった。中世とみられる土器片が出土した。（岡本）

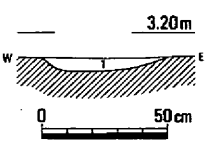
溝21（第211図）

高田３区から４区にかけて検出された不定型な溝状遺構である。この溝の2.5ｍ北にも同じような溝22があり、同時に存在していたと思われる。溝は最大幅が108cmで、深さが11cmであった。２条に分かれたり、底が２段になったりする部分があり、何度も掘り直された結果と考えられる。おそらくは耕作に関係した遺構で、前述の溝は耕地を区画するものではなかろうか。（岡本）



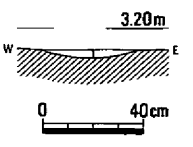
1　黄褐灰色粘質土

第208図 溝18（1/30）・出土遺物(1/4)



1　褐灰色粘性微砂質土

第209図　溝19（1/30）

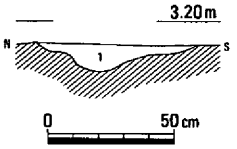


1　褐灰色粘性微砂質土

第210図　溝20（1/30）

溝 22（第212図）

高田４区の北東部を北西―南東方向に流走している溝で、2.5ｍ程南西の溝21と平行している。規模は、幅62㎝・深さ8㎝を測り、壁面は緩やかである。埋土から土師器などの土器が出土しているが、いずれも細片である。時期は検出状況などから中世に比定される。（内藤）

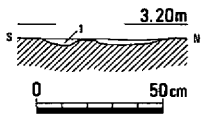


1　淡褐灰色粘性微砂質土

第211図　溝 21（1/30）

溝 23～39（第196図、図版 24）

いずれも高田５区において検出された溝である。高田５区の南西端で検出された微高地の肩部にほぼ平行し、北西―南東方向に流走している。上面が削平されていて、底部がわずかに遺存していると考えられる。溝 24・25・27・28などは深さ40㎝前後を測るものの、大半は10㎝程度である。幅は20～60㎝程と様々で、溝23・24・37・38などは、南東側は遺存しているものの、北西部は削平されている。埋土は、いずれも暗灰褐色粘性微砂が１層である。遺物としては、溝24および溝39をのぞき、古代から中世にかけての土器の細片が出土している。このほかに、溝36から鉄釘が出土しているのをはじめ、溝25および31から鉄片が出土している。



1　淡褐灰色粘性微砂質土

第212図　溝 22（1/30）

時期は、検出状況などから古代末から中世初頭頃に比定される。（内藤）

溝 40（第213図）

砂場１区の西部北半において検出された溝である。北西から南東に流走するもので、南東側は削平されている。埋土から若干土器の細片が出土している。時期は、古代末から中世頃である。（内藤）

溝 41（第214図）

砂場1区の西部南半において「コ」の字状に検出された溝で、中央部を溝42に切られている。幅23㎝・深さ10㎝を測り、埋土は黒褐色粘性微砂である。調査区内において遺物は出土していない。

時期は、検出状況などから古代末から中世初頭頃に比定される。（内藤）

溝 42（第215図）

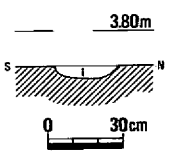
砂場１区の西部において検出された溝である。北西から南東に流走するもので、北西側は削平されている。埋土は１層で、土器などは出土していない。時期は、古代末から中世初頭頃である。（内藤）

溝 43（第216図）

砂場１区の西部において検出された溝である。西―東に流走するもので、幅24㎝・深さ４㎝を測る。埋土は淡灰褐色粘性微砂で、土器片が出土している。時期は、古代末から中世初頭頃である。（内藤）

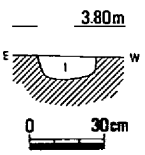
溝 44（第217図、図版 24）

砂場1区の中央部から東部にかけて検出された溝で、溝45・46を切っている。ほぼ西から東へ流走



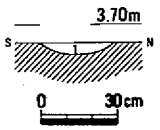
1　淡灰褐色粘性微砂質土

第213図　溝 40（1/30）



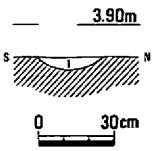
1　黒褐色粘性微砂質土

第214図　溝 41（1/30）



1　黒褐色粘性微砂質土

第215図　溝 42（1/30）



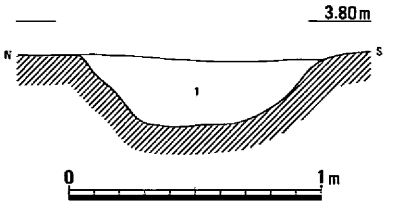
1　淡灰褐色粘性微砂質土

第216図　溝 43（1/30）

し、東端部で削平されている。規模は幅95cm・深さ27cmを測り、埋土は黒褐色粘性微砂が１層である。出土遺物としては土器などの細片のほか、鉄滓が出土している。時期は、検出状況などから古代末から中世初頭頃である。　（内藤）

溝45（第218図）

砂場１区の東部において検出された溝で、北から南に流走し、溝44に切られている。規模は、幅110cm・深さ５cm程のごく浅いもので、底面はほぼ平坦である。遺物としては、土師器・須恵器などの細片が出土している。時期は、検出状況などから古代末から中世初頭頃である。　（内藤）

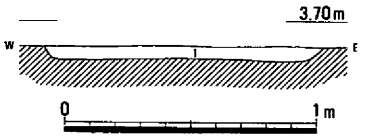


1　黒褐色粘性微砂質土

第217図　溝44(1/30)

溝46（第219図）

砂場１区の東部において検出された溝で、西から東に流走している。中央部を溝44に切られている。規模は、幅30cm・深さ10cm程を測り、断面は緩やかな「U」字形を呈す。埋土は１層で、土器の細片が含まれている。時期は、検出状況などから古代末から中世初頭頃である。　（内藤）

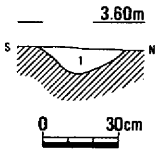


1　淡褐灰色粘性微砂質土斑
　黒褐色粘性微砂質土

第218図　溝45(1/30)

溝47（第220図）

砂場１区の東端において検出された溝で、調査区境に位置している。北から南へ流走し、規模は幅47cm・深さ27cmを測り、埋土は１層である。検出状況などから古代末から中世初頭頃に比定される。　（内藤）



1　黒褐色粘性微砂質土

第219図　溝46(1/30)

溝48（第221図）

砂場３区の西部を北西から南東に流走している溝で、２m程東の溝49に平行している。幅54cm・深さ13cmを測り、埋土中から土器の細片、鉄釘片が出土している。時期は、古代末から中世初頭頃に比定される。（内藤）

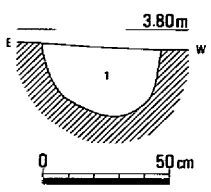
溝49（第222図）

砂場3区の西部で、２m程西の溝48に平行している溝である。規模は、幅50cm・深さ27cmを測る。埋土は１層で、土器の細片が出土している。時期は、古代末から中世初頭頃に比定される。　（内藤）

溝50（第223図）

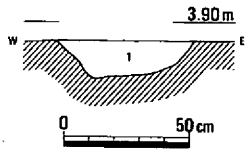
砂場３区の西部から中央部を西から東に流走している溝で、東側は微高地の下がりにより切られている。規模は、幅33cm・深さ10cmを測る。埋土中から土器の細片と伴に鉄釘片が出土している。

時期は、古代末から中世初頭頃に比定される。　（内藤）



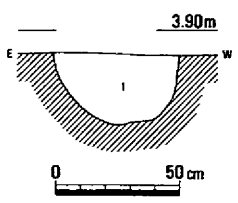
1　淡黄褐色粘性微砂質土

第220図　溝47(1/30)



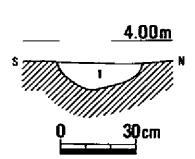
1　暗灰褐色粘性微砂

第221図　溝48(1/30)



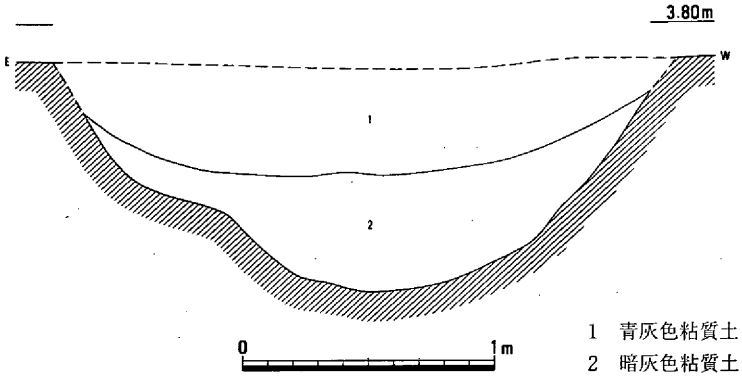
1　暗灰褐色粘性微砂

第222図　溝49(1/30)



1　淡褐灰色粘性微砂

第223図　溝50(1/30)



第224図　溝51（1/30）・出土遺物（1/4）

溝51（第224図、図版24）

砂場３区の中央東寄りにおいて検出された溝で、微高地の下がりに位置し、肩部に平行して南―北方向に流走している。規模は、幅250cm・深さ90cmを測り、壁面は緩やかに立ち上がっている。埋土は２層あり、上層に青灰色粘質土が、下層に暗灰色粘質土が堆積している。遺物としては、土師器・須恵器などのほか、瓦や白磁の細片が出土している。時期は、14世紀頃に比定される。　（内藤）

溝52（第225図）

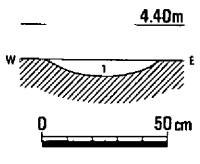
砂場６区の西部を北から南へ流走している溝で、４m程東の溝53に平行している。規模は、幅42cm・深さ６cm程で、土器の細片が出土している。時期は13～14世紀頃に比定される。　（内藤）

溝53（第226図）

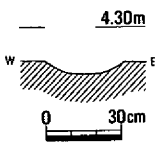
砂場６区の西部を北から南へ流走している溝で、４m程西の溝52に平行している。規模は、幅30cm・深さ６cm程で、遺物は出土していない。時期は、中世に比定される。　（内藤）

溝54（第227図）

砂場６区の西部を北から南へ流走している溝である。２m程西の溝53に平行している。幅30cm・

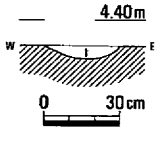


1　灰黄褐色粘性微砂

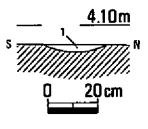


1　暗灰黄色粘質土

第225図　溝52（1/30）　第226図　溝53（1/30）

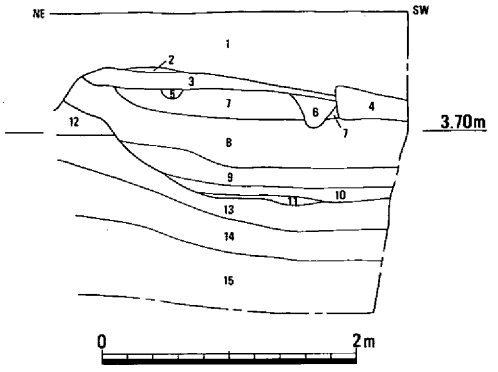


1　灰黄褐色粘性微砂



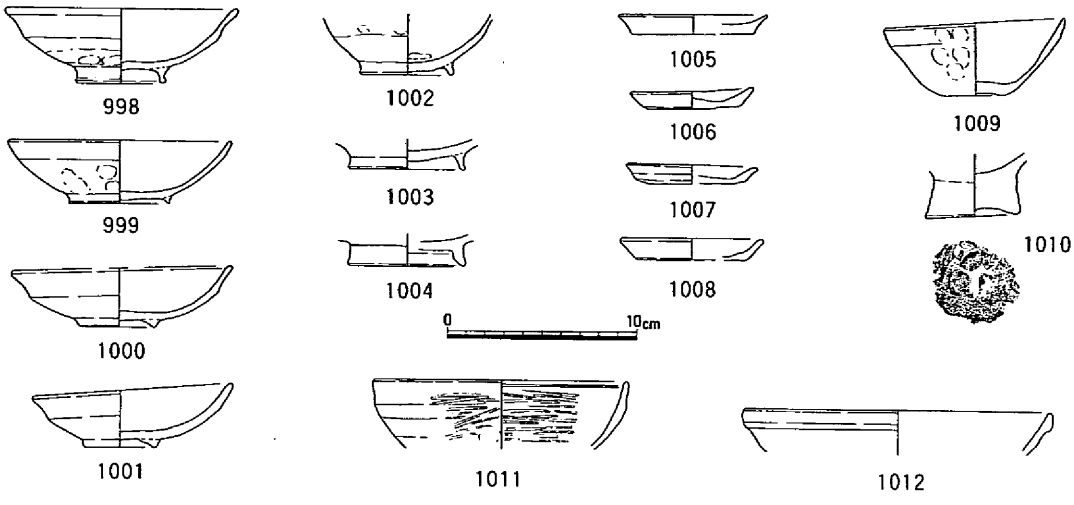
1　暗灰黄色粘質土

第227図　溝54（1/30）　第228図　溝55（1/30）



1　盛土
2　淡褐灰色粘性微砂質土（盛土混）
3　淡褐灰色粘性微砂質土
4　青褐灰色粘性微砂質土（現代耕作土）
5　真砂
6　淡褐灰色粘性微砂質土（砂混）
7　淡青褐灰色粘性微砂質土
8　淡青褐灰色粘性微砂質土
9　淡褐灰色粘性微砂質土（Mn斑）
10　淡褐灰色粘性微砂質土
11　淡青褐灰色粘性微砂質土
12　暗褐灰色粘性微砂質土（Mn斑多）
13　暗青褐灰色粘質土
14　緑褐灰色粘質土
15　灰緑色粘性微砂質土

第229図　高田5区南端微高地斜面土層断面図（1/60）



第230図　加茂政所遺跡出土中世遺物(1/4，1/2)

深さ６cm程を測る。時期は古代末から中世頃と比定できる。（内藤）

溝55（第228図）

砂場６区の中央部を西―東方向に流走している溝である。規模は、幅24cm・深さ４cm程で、埋土は１層である。埋土から土器の細片や鉄滓が出土している。時期は、古代末から中世に比定される。（内藤）

高田５区微高地斜面（第229図）

高田５区の南西端において、南西方向に下がる微高地の肩部が検出された。

第12層の暗褐灰色粘性微砂質土は、中世微高地上の基盤層であり、第13層の暗青褐灰色粘質土は、斜面および低位部における基盤層である。この微高地の斜面は1mで70cm程、かなり急激に下がっている。この中世斜面堆積土の埋土中からは、7～8世紀頃の土師器・須恵器などが出土している。（内藤）

その他の遺物（第230図）

加茂政所遺跡では、遺構に伴ってはいないものの、古代末から中世初頭のものを含み、中世の遺物が包含層などから多く出土している。**998～1004**は土師器の椀である。**998**はややしっかりした高台が貼り付けられているが、**999～1001**などは、底部に小さな断面三角形の高台を巡らせているもので、平安時代末から鎌倉時代にみられる、いわゆる「早島式」の椀である。**1005～1008**は土師器の小皿である。**1009**は指ナデ調整しただけの手捏ねの鉢、**1010**は台部片である。**1011**は瓦器の椀、**1012**は白磁碗の口縁部である。また、**1013**は土製の土錘である。（内藤）

第6章　津寺遺跡

第1節　概要

津寺遺跡の調査対象地は、岡山ジャンクションの下を南北に走る県道箕島高松線によって二つの地区に分けられる。それぞれ地名（小字名）を採って、県道の東側を高田調査区、西側を中屋調査区と呼称している。これは山陽自動車道の調査区設定と同様である。

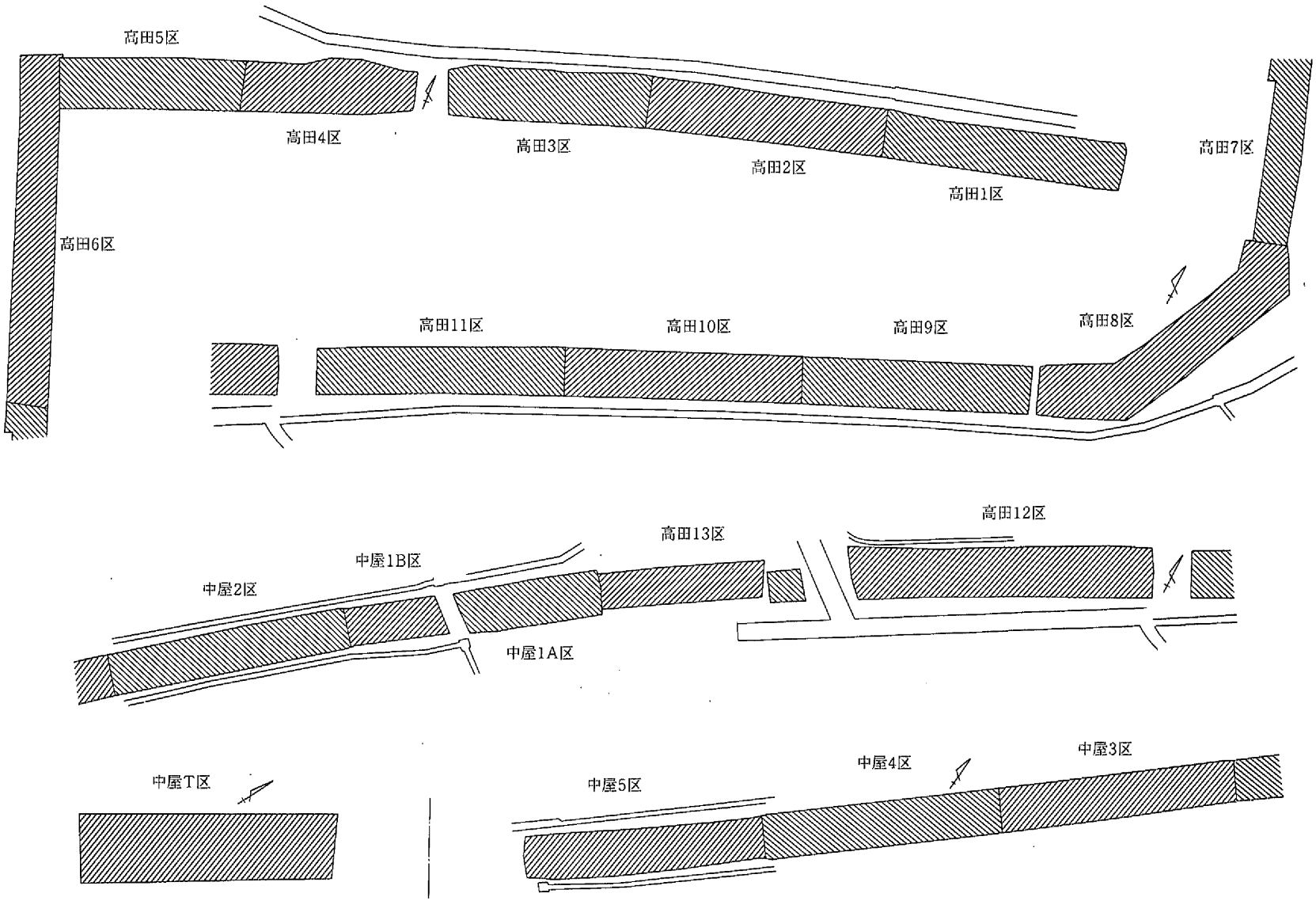
高田調査区は、加茂政所遺跡の高田調査区1区の西に南北道路を挟んで隣接している。つまり、山陽自動車道の北側の側道下にあって、津寺地区と加茂地区における土盛り部分を結ぶ橋脚部分の中央部を起点としている。調査区は北側道を西へたどり、津寺地区の土盛り部分が始まる地点で南へ直角に折れて、山陽自動車道の下をくぐる。山陽自動車道の下を過ぎると、続いて南側溝を再び西へたどる。この間、既存の水路は調査対象から除外している。調査対象地は幅が4m程度であったが、きわめて長く、調査そのものも北側道部分・山陽自動車道下・南側道部分・県道周辺の4地点に分けて実施したため、遺物や図面の整理上の都合で4地点をさらに任意に細分し、東から順に1区、2区と呼ぶこととした。北側道部分は1区から5区まで、自動車道下は6区と7区、南側道部分は8区から11区まで、県道周辺は12区と13区となった。県道部分は高田調査区に含め、13区とした。

中屋調査区は県道からさらに西へ南側道をたどり、102mの地点まで調査を進めた。幅は4m程である。この間を20m前後で細分し、1区から5区までを設定した。中屋5区から後述の中屋T区までの間の南側道部分については、山陽自動車道の建設に伴う発掘調査として、すでに調査済みであった。

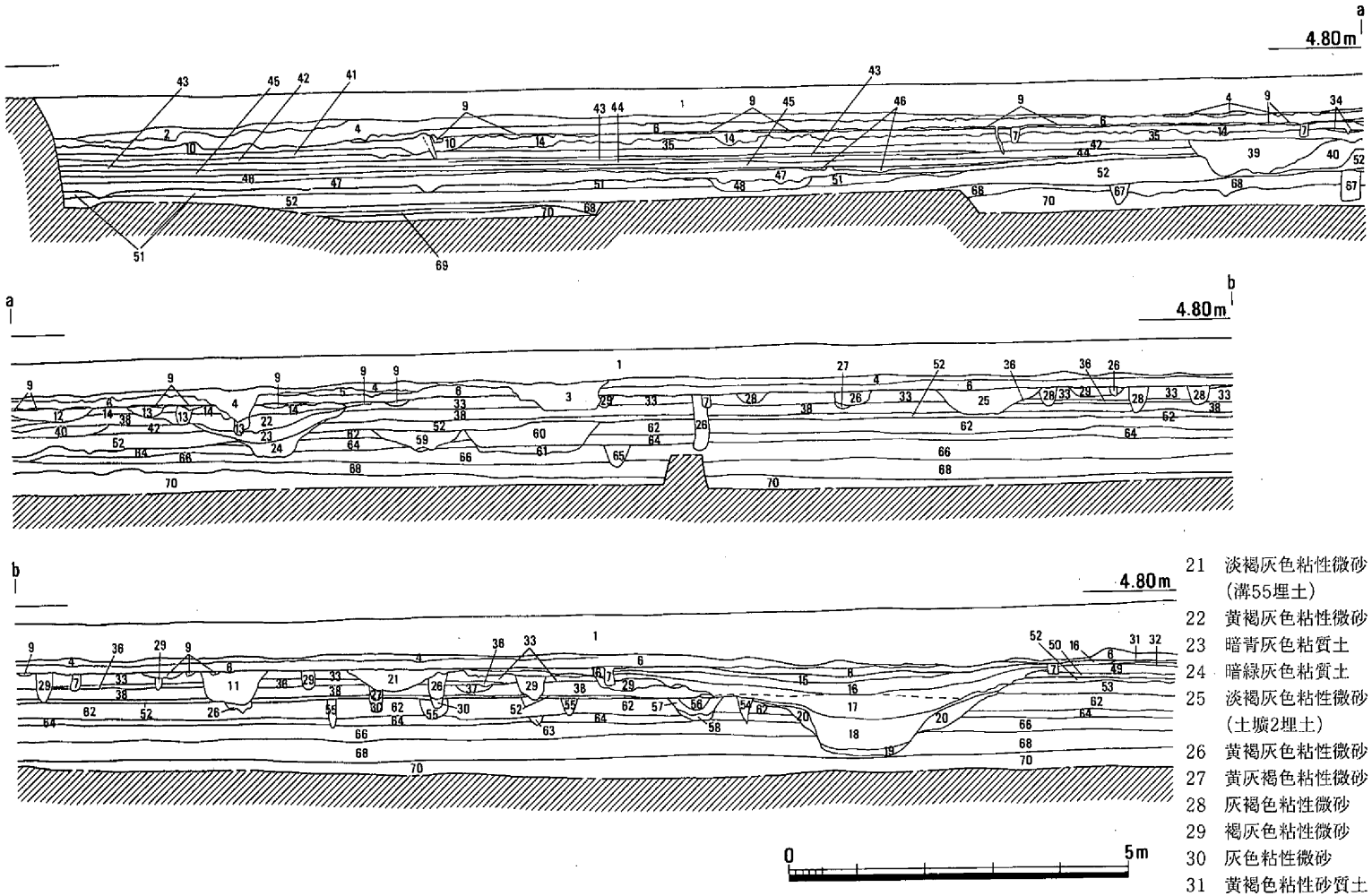
足守川の左岸部分は堤防を断ち割り、幅6mの調査区を設定した。調査区の南側は、足守川と遮断するために矢板列が打ち込まれたが、それよりかなり北側で古代以降の微高地の傾斜面が検出され、それ以前の遺構は存在しなかった。この調査区を中屋T区と呼ぶ。

高田調査区のうち、1区から5区にかけては北から南へ下がる微高地の傾斜面にあたっていたようで、第232図の第70層、第233図の第32層が微高地の基盤層と考えられる。その上面は2区のあたりで高くなり、西へ一度下がった後、5区で再び高さを増す。2区の北側と5区の西側にそれぞれ別の微高地が存在していたものと考えられる。5区の微高地は弥生時代にはかなり堆積が進んでいたようで、古墳時代の前期には、その斜面に水田が作られている。水田の東端は確認できなかったが、1区から3区まではまだ低湿地の状態にあったと思われる。やがて水田は洪水によるとみられる砂層で埋没し、新たに高くなった地盤に古墳時代後期の竪穴住居が掘られ、集落が形成される。古墳時代後期の遺構検出面は第233図の第23・29層の上面である。この面は第232図の第62層の上面に続き、2区の中央部から東へ高さを減じ、1区の低湿地に至る。微高地部分が拡張され、2区の北にあった微高地と繋がった可能性もある。古代の遺構の検出面もほぼ等しいが、3区から東では第232図の第52層の上面になって少し高まり、1区では第51層の上面に続き、この地区では耕作が始まったようである。

中世になると地形にはさらに大きな変化が加わる。中世には2区・3区を中心に集落が形成されるが、その東西を画する溝に移動があり、その検出面の高さが増加している。最初の東限の溝である溝

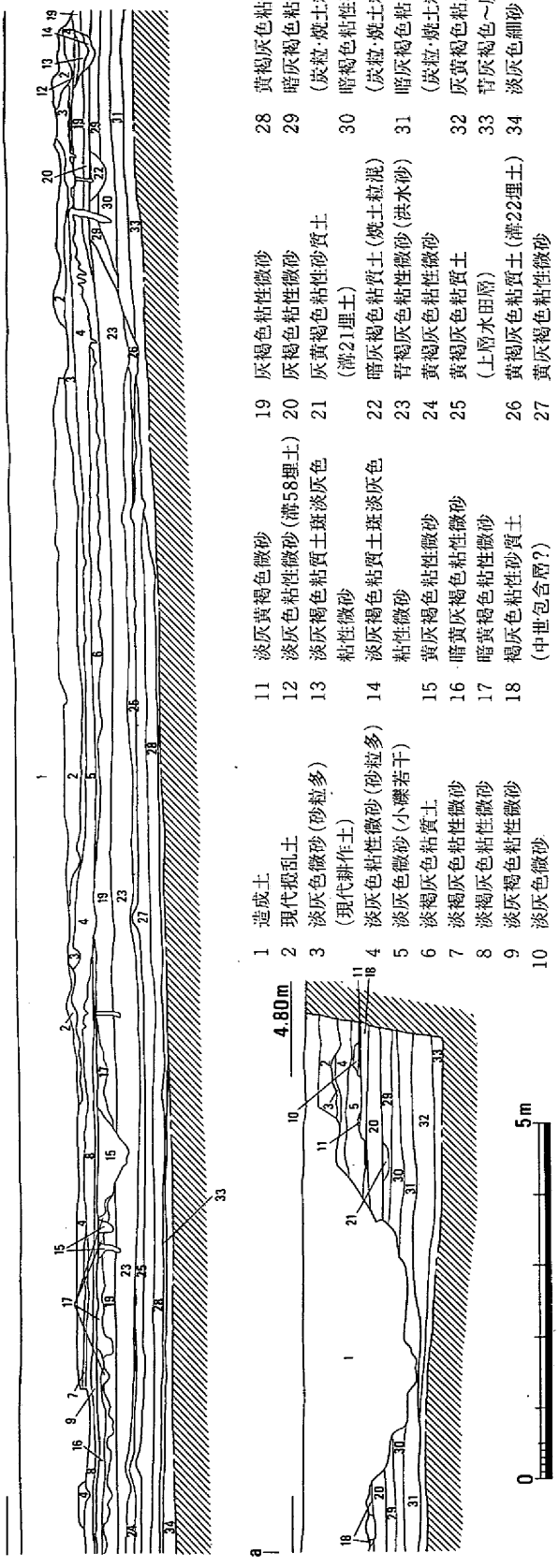


第231図　津寺遺跡調査区区割り図(1/500)



1 造成土
2 撹乱土
3 撹乱土
4 暗褐灰色粘質土
5 暗褐灰色粘性微砂
6 暗青褐灰色粘質土（現代耕作土）
7 暗渠
8 淡灰褐色粘性微砂
9 黄灰色粘性微砂
10 橙灰色粘性微砂
11 淡褐灰色粘性微砂
12 淡褐灰色粘性微砂（溝53埋土）
13 暗褐灰色粘性微砂
14 淡褐灰色粘性微砂
15 淡褐灰色粘性微砂
16 黄褐灰色粘性微砂
17 褐灰色粘性微砂
18 暗青灰色粘質土（微砂混）
19 暗緑灰色粘質土
20 青灰色粘質土（微砂・灰・焼土混）
21 淡褐灰色粘性微砂（溝55埋土）
22 黄褐灰色粘性微砂
23 暗青灰色粘質土
24 暗緑灰色粘質土
25 淡褐灰色粘性微砂（土壙2埋土）
26 黄褐灰色粘性微砂
27 黄灰褐色粘性微砂
28 灰褐色粘性微砂
29 褐灰色粘性微砂
30 灰色粘性微砂
31 黄褐色粘性砂質土
32 黄褐色粘性微砂
33 淡褐灰色粘性微砂
34 淡灰色粘性微砂
35 淡褐灰色粘性微砂
36 灰褐色粘性微砂
37 褐灰色粘性砂質土（灰・焼土混）
38 褐灰色粘性微砂
39 青灰色粘質土（溝52埋土）
40 暗褐灰色粘質土
41 褐灰色粘質土
42 淡灰褐色粘質土（微砂混）
43 灰褐色粘質土（微砂混）
44 淡青褐灰色粘質土（微砂混）
45 淡褐灰色粘質土（微砂混）
46 淡青褐灰色粘質土
47 暗灰褐色粘性微砂（細砂混）
48 暗褐色粘性微砂斑青灰色粘質土（溝51埋土）
49 淡黄褐灰色粘性微砂
50 黄褐灰色粘性微砂
51 青褐灰色粘性微砂
52 黄褐灰色粘性微砂
53 灰褐色粘性微砂
54 黄灰褐色粘性微砂
55 黄褐灰色粘性微砂
56 黄褐灰色粘性微砂（溝15埋土）
57 褐灰色粘性微砂
58 灰褐色粘性微砂
59 暗黄褐灰色粘性砂質土
60 暗黄褐灰色粘性砂質土（溝14埋土）
61 暗褐灰色粘性微砂
62 黄褐灰色粘性微砂
63 灰褐色粘性微砂
64 褐灰色粘性微砂
65 灰色粘性砂質土
66 灰褐色粘性微砂
67 灰色粘性砂質土
68 灰褐色粘質土
69 灰黄色粘質土（微砂混）
70 黄灰色粘質土（基盤土）

第232図　高田1～3区南壁土層断面図（1/100）

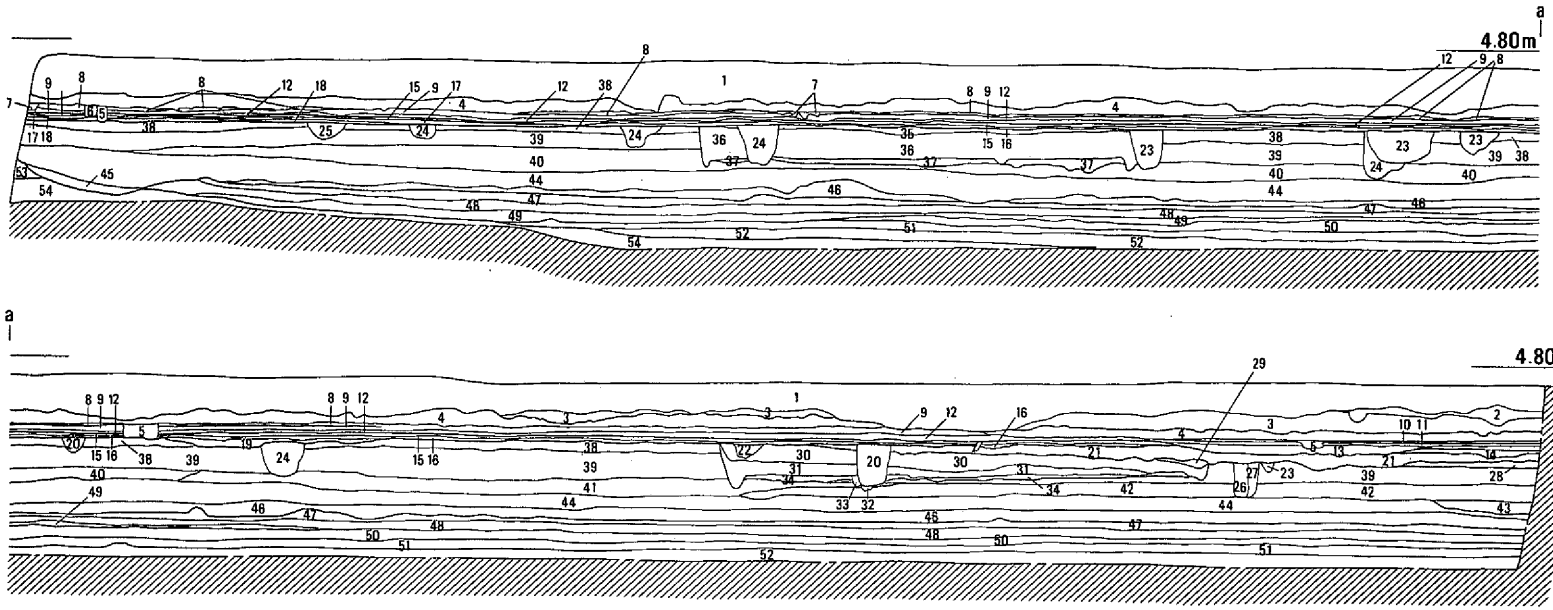


1 造成土
2 現代撹乱土
3 淡灰色微砂（砂粒多）（現代耕作土）
4 淡灰色粘性微砂（砂粒多）
5 淡灰色微砂（小礫若干）
6 淡褐灰色粘質土
7 淡褐灰色粘性微砂
8 淡褐灰色粘性微砂
9 淡灰褐色粘性微砂
10 淡灰色微砂
11 淡灰黄褐色微砂
12 淡灰色粘性微砂（溝58埋土）
13 淡灰褐色粘質土斑淡灰色粘性微砂
14 淡灰褐色粘質土斑淡灰色粘性微砂
15 黄灰褐色粘性微砂
16 暗黄灰褐色粘性微砂
17 暗黄褐色粘性微砂
18 褐灰色粘性砂質土（中世包含層?）
19 灰褐色粘性微砂
20 灰褐色粘性微砂
21 灰黄褐色粘性砂質土（溝21埋土）
22 暗灰褐色粘質土（焼土粒混）
23 背褐灰色粘性微砂（洪水砂）
24 黄褐灰色粘性微砂
25 黄褐灰色粘質土（上層水田層）
26 黄褐灰色粘質土（溝22埋土）
27 黄灰褐色粘性微砂（下層水田層）
28 黄褐灰色粘性微砂
29 暗灰褐色粘性砂質土（炭粒・焼土粒若干混）
30 暗褐色粘性砂質土（炭粒・焼土粒若干混）
31 暗灰褐色粘質土（炭粒・焼土粒若干混）
32 灰黄褐色粘土（床土）
33 背灰褐色～灰黄褐色微砂
34 淡灰色細砂

第233図　高田4・5区南壁土層断面図（1/100）

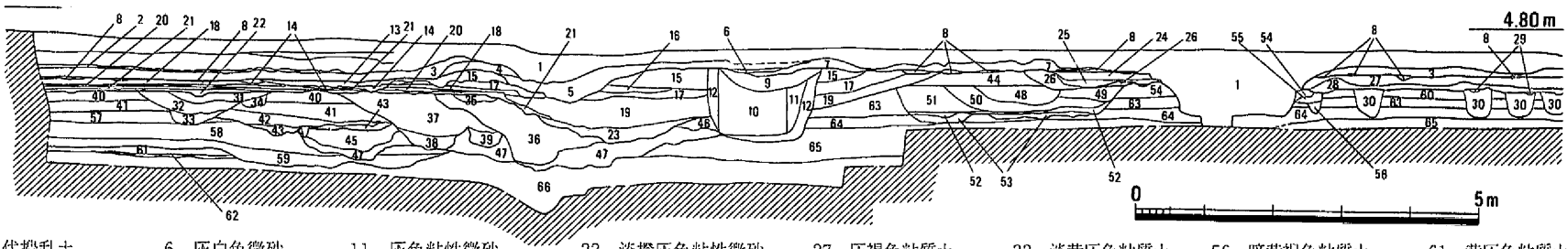
52（第232図第40層）の検出面は第232図の第42層であるが、後の東限の溝である溝54（第232図第24層）の検出面は第232図の第33層で、25cmの差がある。第42層はすでに東へ向かっては水平に延びているため、中世の集落が形成された時には１区の低湿地はすでに埋め立てられていたとみられるが、溝54の段階でさらに地盤が高められている。この段階で、１区から５区まではほぼ水平な面になっていたものと考えられ、その年代は室町時代の末期とみられる。

高田６区から８区の中央付近までは低位部で、やはり古墳時代前期の水田が広がっていた。８区の中央部から南へはじょじょに地形は高まりをみせ、再び微高地が現れる。微高地の裾には水田の南限となる溝（第235図第59層）が掘削されていた。水田は洪水の砂層で厚く埋められ、その上面に古墳時代後期の竪穴住居が掘られることとなるのは４・５区の状況と同じである。第234図の第38層が古墳時代後期の遺構検出面であり、これはまた古代の遺構検出面でもある。この面は水田面からは１m程も上昇しているが、８区南半の微高地との間には依然大きな水路があり、その後、現在までこの水路は継続される。古墳時代後期の段階で６区から８区まではほぼ水平となり、しかも、５区の同時代の面よりも10cm高くなっていた。古代には７区の南半から８区の北半にかけて少し掘り下げがなされ、耕作がなされたようで第234図の第21層がそこの堆積層である。この地区における中世の状況は、近世以降の地下げが古墳時代後期の遺構検出面

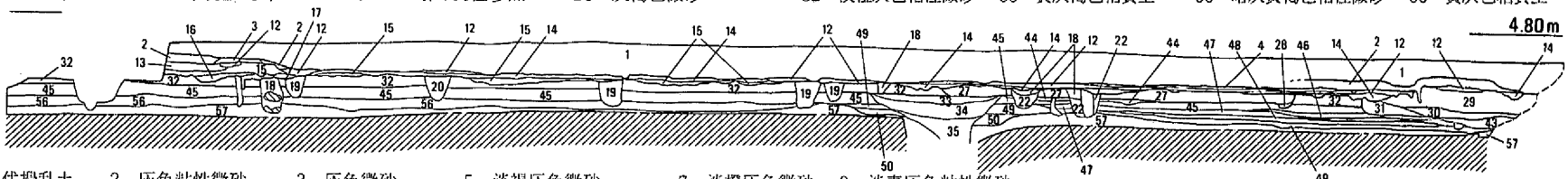


1 造成土
2 盛土
3 現代攪乱土
4 灰色粘性微砂（現代耕作土）
5 暗渠
6 淡灰色粘性微砂
7 灰白色粘性微砂
8 淡黄灰色粘性微砂
9 淡黄灰色粘性微砂
10 淡灰黄色粘性砂質土
11 淡黄褐灰色粘性砂質土
12 淡黄灰色粘性微砂
13 淡帯褐灰色粘性微砂
14 淡黄灰色粘性微砂
15 淡黄灰色粘性微砂
16 淡黄灰色粘性微砂
17 淡褐灰色粘性微砂
18 淡褐灰色粘性微砂
19 暗褐色粘性微砂
20 黄灰褐色粘性微砂
21 黄灰色粘性微砂斑灰褐色粘性微砂（溝38・39埋土）
22 褐灰色粘性微砂
23 黄褐色粘性微砂
24 黄灰褐色粘性微砂
25 黄褐灰色砂質土（溝35埋土）
26 灰黄褐色粘性微砂
27 青褐灰色粘性微砂
28 黄褐色粘性微砂斑灰色粘性微砂
29 灰黄褐色砂質土
30 灰色粘土斑灰褐色粘性微砂（竪穴住居7埋土）
31 黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土（竪穴住居7埋土）
32 黄灰色微砂斑灰色粘土
33 灰色粘性微砂斑黄褐色粘性微砂
34 灰色粘土斑黄褐色粘性微砂（竪穴住居7貼床）
35 暗灰褐色粘性微砂（竪穴住居6埋土）
36 灰褐色粘性微砂（竪穴住居6埋土）
37 灰黄褐色粘性微砂（竪穴住居6貼床）
38 灰褐色粘性微砂
39 灰褐色粘性微砂
40 灰褐色細砂
41 黄灰褐色粘性微砂
42 灰色微砂
43 青灰色粘質土
44 褐灰色細砂（洪水砂層）
45 褐灰色微砂（溝23埋土）
46 灰色粘質土（上層水田層）
47 黄褐灰色粘質土（下層水田層）
48 黄橙色粘質土
49 黄褐灰色粘質土
50 黄褐灰色粘性微砂
51 黄褐灰色粘質土
52 黄褐灰色粘質土
53 褐灰色粘質土
54 褐灰色粘質土（北端部は粘性微砂）

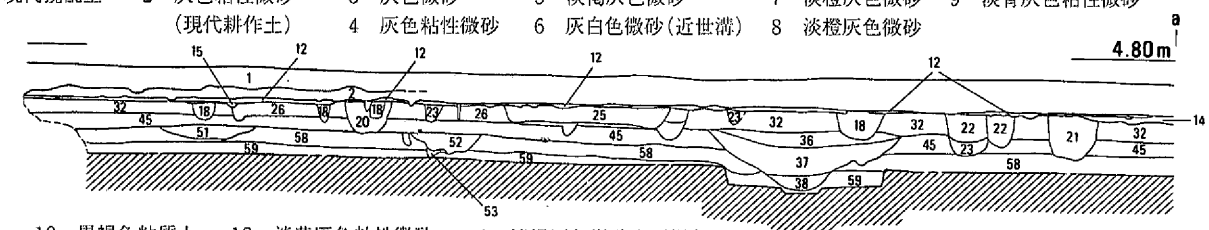
第234図　高田6・7区東壁土層断面図（1/100）



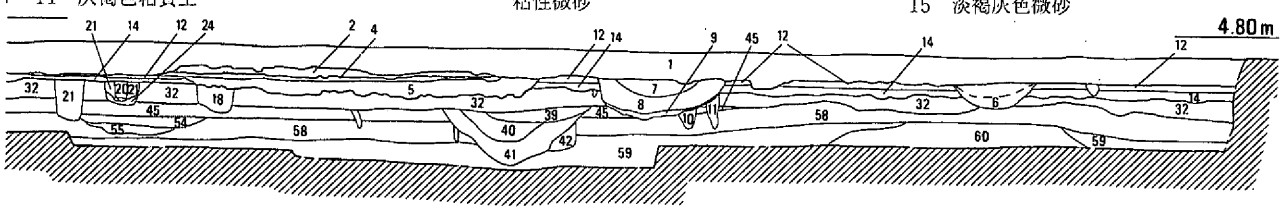
1　現代撹乱土
2　灰黒褐色土
3　暗灰褐色粘性微砂（現代耕作土）
4　灰色粘性微砂
5　灰黒色微砂
6　灰白色微砂
7　淡褐灰色微砂
8　淡褐灰色微砂
9　褐灰色微砂
10　灰褐色粘性微砂（野壺埋土）
11　灰色粘性微砂
12　灰褐色粘性微砂
13　暗褐灰色土斑黄灰色粘性微砂
14　灰白色粗砂（礫混）
15～21　第268図参照
22　淡橙灰色粘性微砂
23　灰色粘質土
24　黒褐色微砂斑淡褐灰色微砂
25　淡褐灰色微砂
26　灰褐色微砂
27　灰褐色粘質土
28　淡黄灰色微砂
29　灰黄色粘性微砂
30　暗褐色粘質土
31　淡橙灰色粘質土
32　淡橙灰色粘性微砂
33　淡黄灰色粘質土
34　橙灰色粘性微砂
35～47　第268図参照
48～53　第263図参照
54　灰色粘質土
55　黄灰褐色粘質土
56　暗黄褐色粘質土
57　淡灰橙色粘性微砂
58　黄褐灰色粘性微砂
59　黄灰色微砂・細砂（溝27埋土）
60　暗灰黄褐色粘性微砂
61　黄灰色粘質土
62　黄灰色微砂・細砂
63　暗黄灰褐色粘性微砂
64　黄褐色粘性微砂
65　黄褐色微砂
66　黄灰色粘質土



1　現代撹乱土
2　灰色粘性微砂（現代耕作土）
3　灰色微砂
4　灰色粘性微砂
5　淡褐灰色微砂
6　灰白色微砂（近世溝）
7　淡橙灰色微砂
8　淡橙灰色微砂
9　淡青灰色粘性微砂

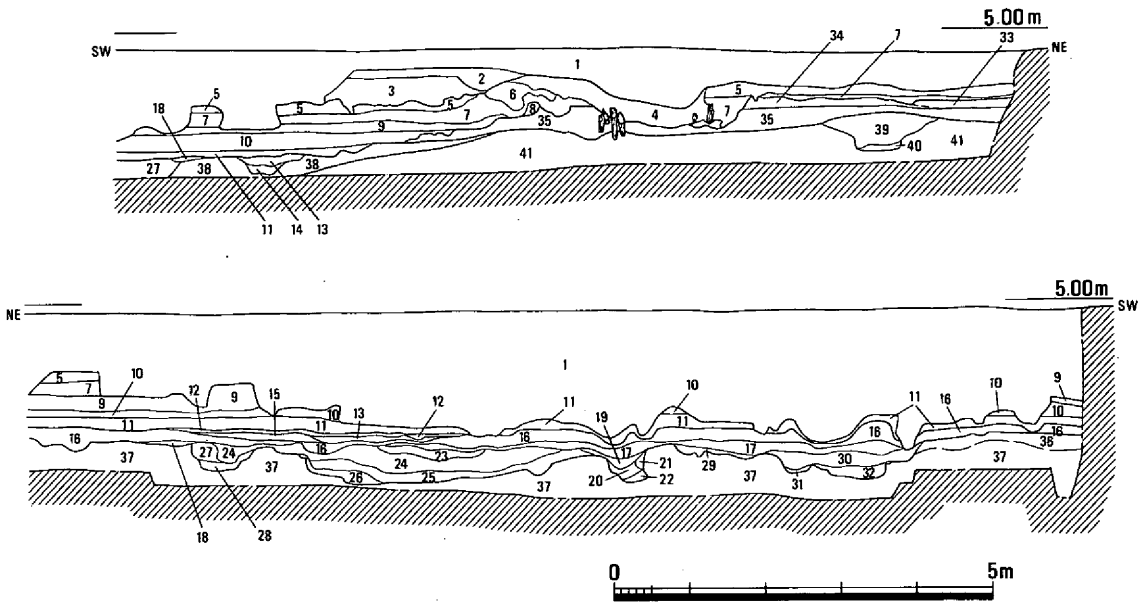


10　黒褐色粘質土
11　灰褐色粘質土
12　淡黄灰色粘性微砂
13　淡褐灰色微砂斑灰褐色粘性微砂
14　淡灰橙色粘性微砂
15　淡褐灰色微砂



16　淡褐灰色微砂斑灰褐色粘性微砂
17　灰褐色粘性微砂
18　淡褐灰色粘性微砂
19　灰橙色粘性微砂
20　黒褐色粘性微砂
21　暗灰褐色粘性微砂
22　黒褐色粘性微砂
23　黒褐色粘質土
24　灰褐色粘性微砂
25　灰褐色粘質土
26　竪穴住居16埋土
27・28　竪穴住居12埋土
29～31　竪穴住居14埋土
32　暗灰黄褐色粘性微砂
33～35　溝2埋土
36～38　溝7埋土
39～42　溝9埋土
43　茶褐色粘性微砂
44　黄褐色粘性微砂
45　黄灰褐色粘性微砂
46　灰褐色粘性微砂
47　茶褐色粘性微砂
48　黄灰色微砂
49　褐灰色微砂
50　黄灰色粘性微砂
51　溝5埋土
52・53　溝6埋土
54・55　溝8埋土
56　黄褐色粘性微砂
57　黄褐色微砂
58　暗灰褐色粘質土
59　黄灰褐色粘性微砂
60　青灰色微砂

第235図　高田8区東壁（上）、高田9～11区南壁（下）土層断面図（1/100）



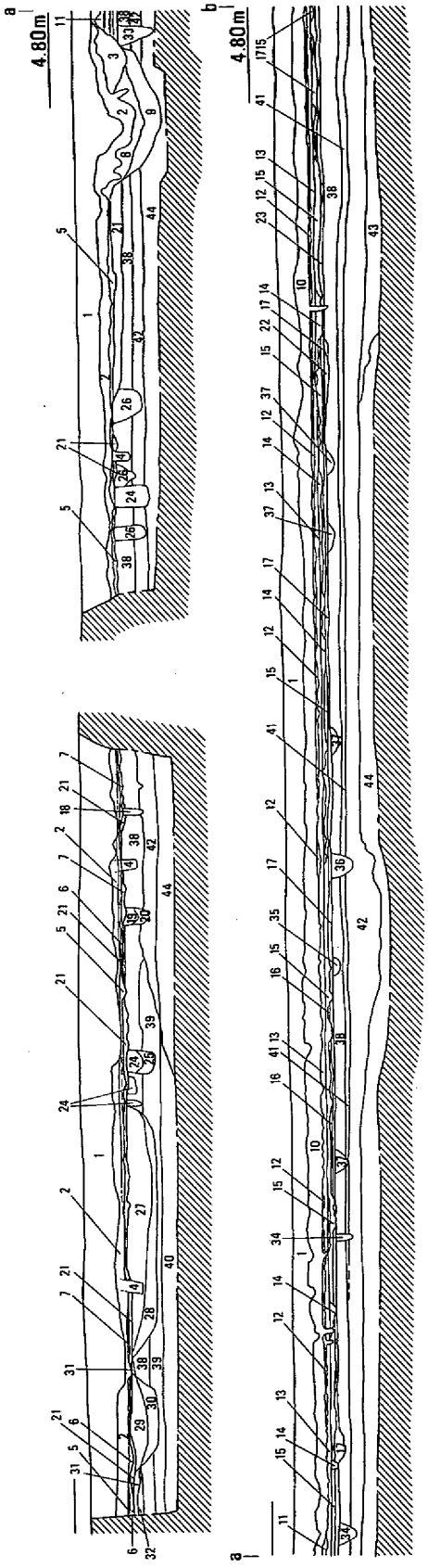
1　造成土
2　道路盛土
3　真砂土
4　青灰色粗砂･微砂互層（現代用水路埋土）
5　灰色微砂（現代耕作土）
6　淡灰褐色微砂
7　淡青灰色微砂
8　にぶい橙色微砂
9　灰色粘性微砂（炭粒点々）
10　青灰色微砂
11　灰色粘質土（中世包含層､炭粒点々）
12　暗灰色粘質土
13　淡灰色微砂（溝43埋土）
14　灰色粘性微砂
15　暗褐灰色粘質土
16　暗青灰色微砂
17　オリーブ灰色粘質土
18　淡黄灰色粘質土
19　灰緑色粘質土
20　淡緑褐色微砂
21　緑灰色微砂
22　淡灰褐色粘質土（溝46埋土）
23～28　第314図参照（溝44･45埋土）
29　暗灰オリーブ色微砂
30～32　第316図参照（溝47埋土）
33　淡灰褐色砂質土
34　灰褐色粘性砂質土
35　暗灰黄褐色粘性砂質土
36　オリーブ褐色微砂
37　明黄褐色粘質土
38　暗青灰色粘質土
39　灰黄褐色粘性砂質土（溝10埋土）
40　暗灰褐色粘質土
41　灰オリーブ色粘質土（基盤層）

第236図　高田12区東半北壁（上）、同西半南壁土層断面図（1/100）

の近くまで及んでいるために明確ではないが、遺構は確認されていない。

高田８区の南半から現れた微高地は高田12区まで続く。この微高地は津寺遺跡の本体に近いせいもあってか、弥生時代から遺構が認められ、弥生時代から古墳時代後期までで３面の遺構検出面が存在する。もっとも下の面は第235図の第58層の上面で、溝５・６などが検出されている。次の面は第45層の上面で、溝７・８などが検出された。溝から出土する遺物はほとんどなく、小片のため年代判定は困難であったが、古墳時代の前期かとみられる土器片があり、この上に古墳時代後期の遺構が存在することからすると、この検出面は古墳時代前期まで降る可能性もある。古墳時代後期遺構検出面は第32層の上面である。この面の直上には近世の水田層があり、第32層の上面は後世の削平面にあたっている。このため、古墳時代後期の地表の高さは判断できないが、第32面の上面がすでに高田６区の古墳時代後期の遺構検出面より30cmも高く、この微高地がもともと高かったものと思われる。

高田12区から13区にかけては低位部となる。第236図上の第41層、あるいは第38層が微高地の基盤層と考えられるが、この層は西へ落ち込み、12区の中央部から西の底には砂層が一面に確認された。おそらく自然河道が存在するものとみられるが、その上面には平安時代の溝（第236図下第23～32層）が存在するため、奈良時代頃の河道と考えられ、微高地を削り取ったものと思われる。古代の溝が埋没した後は、中世の包含層（第236図第11層）が厚く形成され、以後、現在まで水田が営まれていたとみられる。



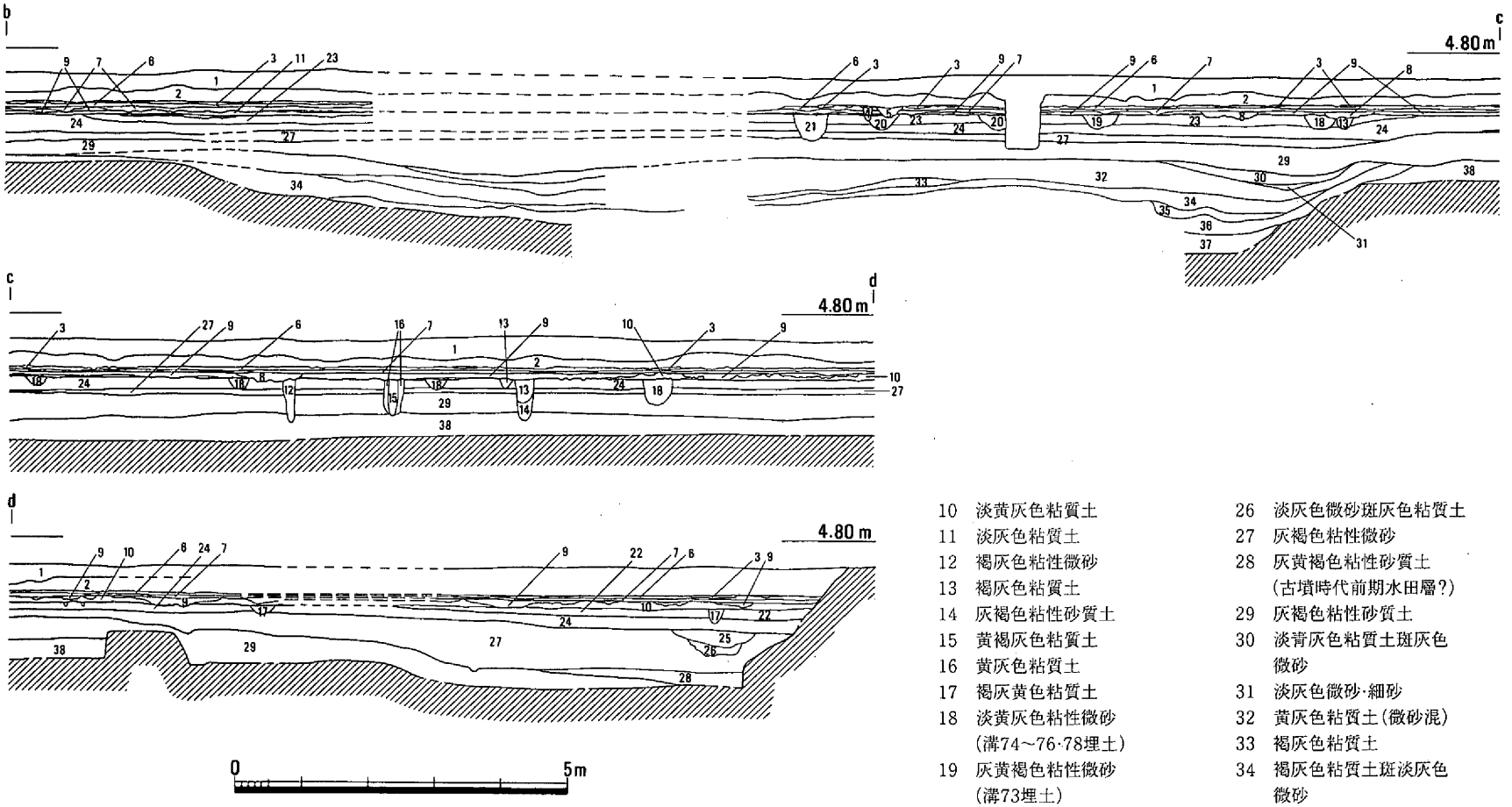
1　造成土
2　褐灰色粘質土（現代耕作土）
3　淡灰色粘質土
4　暗渠
5　淡灰色粘性微砂
6　黄燈色微砂質土
7　淡褐灰色粘質土
8　淡灰褐色砂
9　背灰色砂
10　灰黒色粘性微砂
（現代耕作土）
11　淡灰色粘性砂質土
12　灰色粘性微砂
13　淡灰黄褐色粘性微砂
14　淡黄灰色粘性微砂
15　淡灰黄色粘性微砂
16　淡黄灰色粘質土
17　淡褐灰色粘質土
18　黄灰褐色砂質土
19　褐灰色粘質土
20　灰褐色粘質土
21　淡褐灰色粘質土
22　淡灰色粘質土
23　淡灰色粘質土
24　淡黄灰色粘性微砂
25　褐色粘性砂質土
26　黄灰褐色砂質土
27　灰褐色粘質土（土壌3埋土）
28　灰黄褐色粘性微砂
29　淡灰黄褐色粘質土
30　淡褐灰色粘質土
31　淡黄灰色粘性微砂
32　淡黄灰色粘性微砂
33　淡褐灰色粘質土
34　褐灰色粘性微砂
35　淡灰色粘性微砂
36　灰褐色粘質土
37　灰黄褐色砂質土
（溝61～64埋土）
38　灰褐色粘性微砂
39　灰褐色粘性砂質土
40　淡灰黄褐色粘性砂質土
41　灰褐色粘性微砂
42　灰褐色粘性砂質土
（溝12埋土）
43　淡灰色微砂・細砂
44　淡褐灰色粘質土

第237図　中屋1・2区南壁土層断面図（1/100）

中屋調査区はほとんどが微高地で、5区になって西へ地形が下がり、低位部となっていく。この低位部は微高地から65cm低く、古墳時代前期の水田層とみられる粘性微砂層（第238図下第28層）が確認された。やがてこの低位部は厚く埋められ、微高地との段差は古代には20～30cmに減少するが、なお用水路（第238図第25・26層）が掘削され、耕作地として利用されたようである。それらも埋没して中世には段差はさらに縮まり、近世には水平になっている。

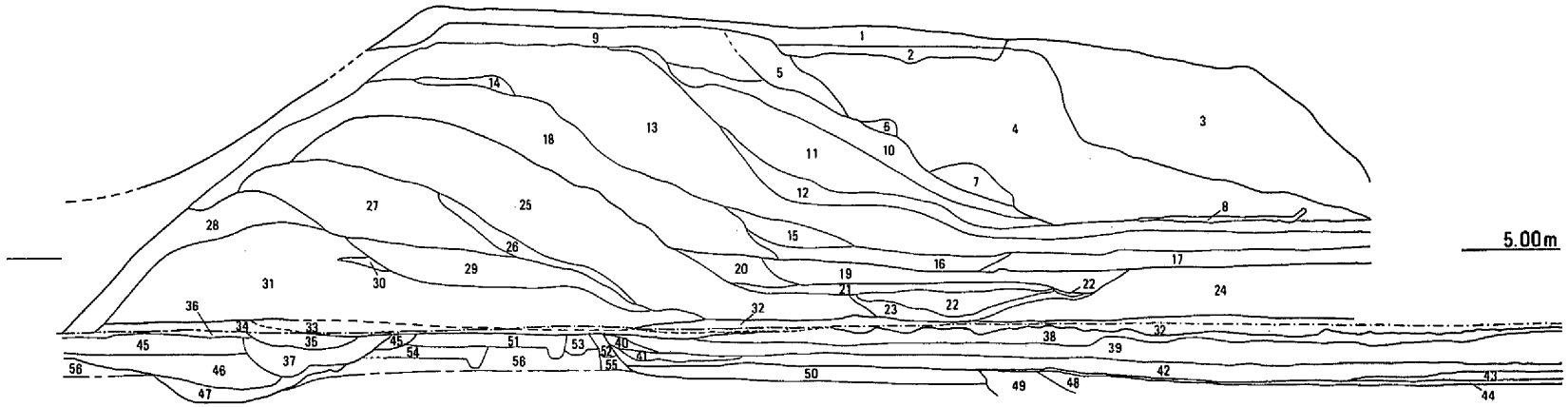
中屋調査区の微高地部分には古墳時代以前の遺構はほとんどみられなかったが、弥生時代後期の大溝が東から南西に蛇行して3区から4区の南半をかすめ、それが埋没した跡の窪みに古墳時代前期の土器溜まりが形成されていた。古代には柱穴が数個掘られたのみで、中世には直線的な細い溝が一定の間隔で掘られ、何かの耕作がなされていたようである。その後、柱穴が集中するようになり、近世にかけて集落が形成されたようであるが、やがて水田化されている。

中屋T区では調査区の北端で弥生時代から古墳時代にかけての微高地が検出されたが、中世以降の用水路や水田の掘削によって遺構は大きな破壊を受けていて、その全体像は明確につかめなかった。近世の削平が古墳時代の遺構に及んでいた。　（岡本）

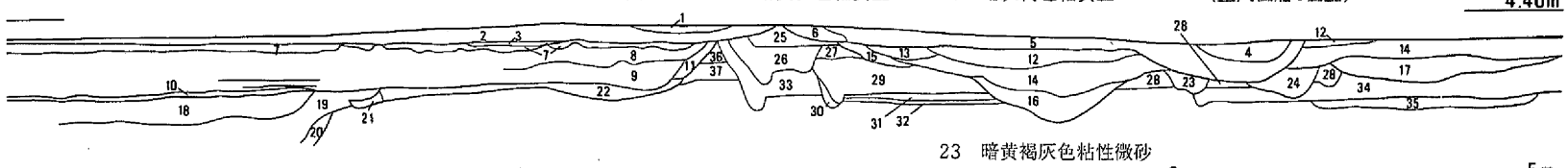


1 造成土
2 暗褐灰色粘質土（現代耕作土）
3 灰色粘性微砂
4 暗渠
5 黄灰色粘性微砂
6 淡灰黄褐色粘性微砂
7 淡灰黄色粘性微砂
8 黄灰色粘質土斑灰褐色粘質土
9 淡黄灰色粘質土
10 淡黄灰色粘質土
11 淡灰色粘質土
12 褐灰色粘性微砂
13 褐灰色粘質土
14 灰褐色粘性砂質土
15 黄褐灰色粘質土
16 黄灰色粘質土
17 褐灰黄色粘質土
18 淡黄灰色粘性微砂（溝74～76·78埋土）
19 灰黄褐色粘性微砂（溝73埋土）
20 灰黄褐色粘性砂質土
21 淡灰色微砂·細砂
22 黄褐灰色粘質土
23 灰褐色粘質土
24 灰褐色粘性微砂
25 淡褐灰色粘質土
26 淡灰色微砂斑灰色粘質土
27 灰褐色粘性微砂
28 灰黄褐色粘性砂質土（古墳時代前期水田層?）
29 灰褐色粘性砂質土
30 淡青灰色粘質土斑灰色微砂
31 淡灰色微砂·細砂
32 黄灰色粘質土（微砂混）
33 褐灰色粘質土
34 褐灰色粘質土斑淡灰色微砂
35 淡褐灰色微砂·細砂
36 暗青褐灰色粘性微砂
37 淡青灰色微砂斑暗青灰色粘質土（炭·焼土·木片を含む）
38 黄褐色微砂（基盤層）

第238図　中屋3～5区南壁土層断面図（1/100）



1　アスファルト・砂利
2　明灰褐色微砂質土
3　灰褐色粘質土
4　暗青灰色粘質土
5　暗灰黄色微砂質土
6　暗灰黄色微砂質土
7　暗灰黄色微砂質土
8　明灰黄色細砂質土
9　明灰褐色微砂質土
10　暗灰褐色細砂質土
11　明灰褐色細砂質土
12　青灰色粘質土
13　明灰黄色微砂質土
14　明灰褐色微砂質土
15　明灰褐色微砂質土
16　淡灰褐色微砂質土
17　灰褐色粘質土
18　灰褐色粘質土
19　灰褐色微砂質土
20　明灰褐色粘質土
21　淡灰褐色粘質土
22　明灰褐色粗砂質土
23　淡灰黄色粘質土
24　灰褐色粘質土
25　灰褐色粘質土
26　淡灰褐色細砂質土
27　明灰黄色細砂質土
28　明灰褐色微砂質土
29　明灰黄色微砂質土
30　明灰褐色微砂質土
31　灰褐色微砂質土
32　淡灰褐色細砂質土
33　暗灰褐色粘質土
34　暗青灰色粘質土
35　灰黒色粘質土
36　明灰黄色粘質土
37　暗灰色粘質土
38　暗灰黄色粘質土
39　暗灰色粘質土
40　暗黄灰色粘質土
41　暗黄灰色粘質土
42　暗灰色粘質土
（中世水田層）
43　灰褐色粘質土
44　明灰褐色粘質土
45　明灰褐色粘質土
46　灰褐色粘質土
（溝81埋土）
47　暗灰褐色粘質土
48　暗灰褐色粘質土
49　灰色粘質土
（古代下がり）
50　暗黄灰色粘質土
51　灰褐色粘質土
（竪穴住居3埋土）
52　暗灰褐色粘質土
（竪穴住居4埋土）
53　暗灰褐色粘質土
（竪穴住居2埋土）
54　淡灰褐色粘質土
（竪穴住居1埋土）
55　暗灰褐色粘質土
56　黄灰色粘質土
（基盤層）



1　淡褐灰色粘性微砂
2　淡灰褐色粘性微砂
（現代耕作土）
3　淡灰色微砂
4　灰黒色粘性細砂
5　淡褐灰色粘質土
（近世溝埋土）
6　淡緑灰色粘質土
7　暗褐灰色微砂
8　暗緑灰色粘土
9　暗灰緑褐色粘性微砂
（中世水田層）
10　暗青褐灰色粘質土
11　暗灰黄褐色粘性微砂
12　暗緑褐灰色粘質土
（溝80埋土）
13　暗緑灰褐色粘性微砂
（溝79埋土）
14　淡黄褐灰色粘質土
15　淡黄褐灰色粘質土
16　淡灰白色粘性微砂
（溝81埋土）
17　明灰褐色粘質土
18　暗褐灰色粘性微砂
19　淡褐灰色粘性微砂
（古代下がり）
20　黒褐色粘質土
21　暗褐色粘質土
22　暗灰褐色粘質土
23　暗黄褐灰色粘性微砂
（溝28埋土）
24　暗黄褐灰色粘性微砂
（溝29埋土）
25　淡褐灰黄色粘性微砂
26　暗褐色粘質土
27　淡灰黄褐色粘性微砂
28　淡灰赤褐色粘性微砂
（竪穴住居20埋土）
29　明灰黄褐色粘性微砂
（竪穴住居18埋土）
30　暗灰黄褐色粘性微砂
31　暗灰黄褐色粘性微砂
32　淡褐灰色粘質土
33　淡灰黄褐色粘性微砂
34　灰赤褐色粘性微砂
（竪穴住居19埋土）
35　明灰黄褐色粘性微砂
（竪穴住居17埋土）
36　淡灰褐色粘性微砂
37　淡灰黄褐色粘性微砂

第239図　中屋T区東壁（上）、西壁（下）土層断面図（1/100）

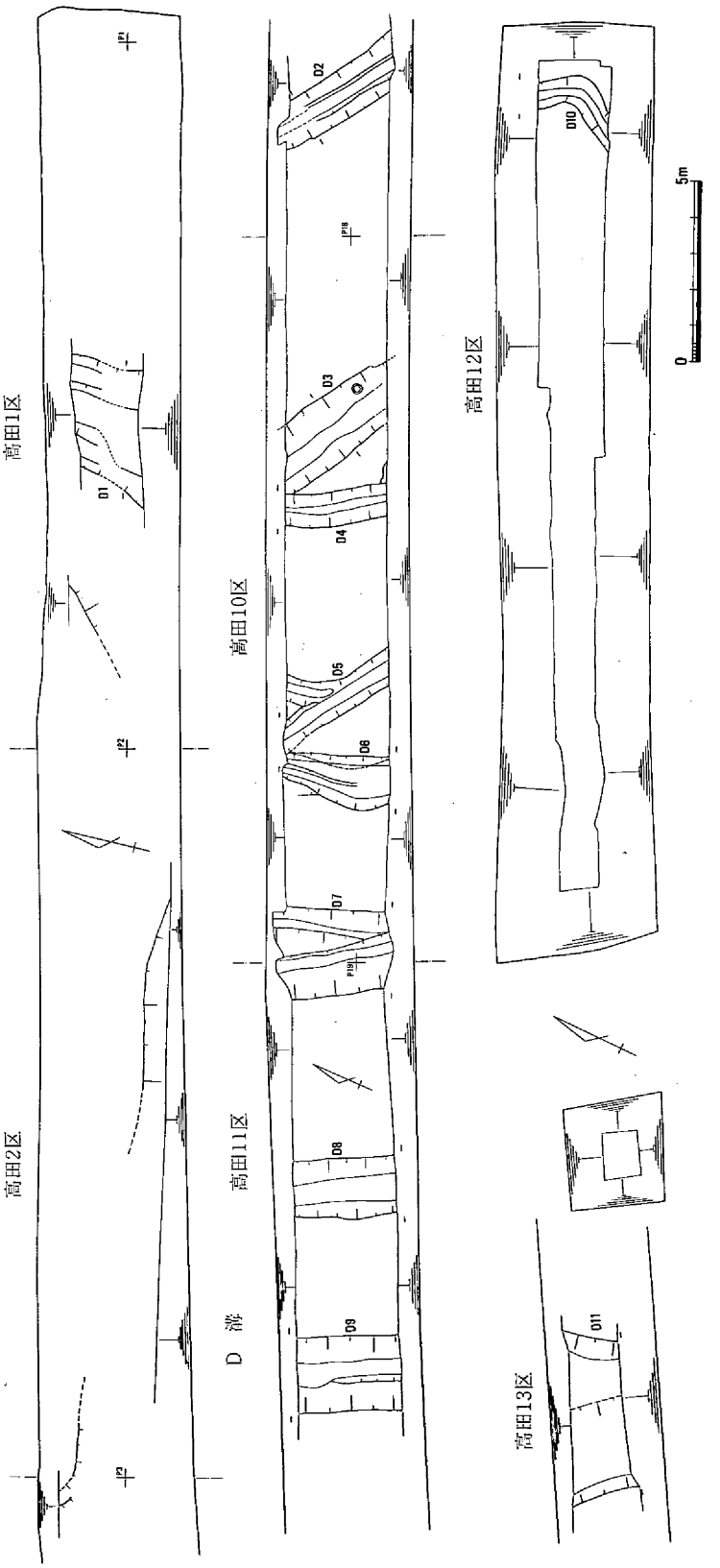
第２節　弥生時代の遺構と遺物

１　遺構配置

津寺遺跡において検出された弥生時代の遺構は、高田調査区から中屋調査区の全域にわたって広く分布していたが、それぞれの調査区では偏在した在り方を示していた。高田調査区では、１区から８区にかけての地域には溝１条が存在したにすぎなかったが、９区から13区にかけての地区では10条の溝が集中していた。

また、中屋調査区ではＴ区において竪穴住居4軒の集中がみられたのに対し、１区から５区までの地域では２条の溝を検出したにとどまった。このような状況は当然ながら地形との関係が強いものと考えられ、遺構が集中していた地区はいずれも微高地部分にあたり、遺構の少なかった地区は微高地の縁辺から低位部にかけての地域に位置していたことがわかる。

高田１区から３区にかけての地区では南に下る微高地の縁辺が確認され、大形の溝１が添っていた。中屋５区でも微高地の下がりが検出され、低位部には水田層らしい層位が認められた。高田13区と中屋３区の大溝は人工的で、用水路と考えられる。（岡本）



第240図　津寺遺跡弥生時代遺構配置図（１）（1/200）

2　遺構・遺物

竪穴住居1（第242図）

中屋T区の微高地で検出した東西に伸びる直線の壁体溝である。長さ250cm、幅20cm、深さ10cmを測る。溝の北側が住居内部である。遺物は採集していないので切り合い関係から弥生時代と考えられる。（浅倉）

竪穴住居2（第242図）

中屋T区の微高地で検出した隅丸の壁体溝である。遺物は採集していないので切り合い関係から弥生時代と考えられる。（浅倉）

竪穴住居3（第242図、図版48）

中屋T区の微高地で検出したL字状の壁体溝と1個の柱穴がある。溝の深さは床面から10cm、柱穴の深さは同じく10cmを測る。この住居の床面の海抜高は390cmである。

遺物は図示した2点の土器片などと共に土製品が出土している。**1014**の高杯口縁は水平な面を持つ。**1015**は高杯の脚部で、丸い穴を持つ。**1017**は管状土錘である。

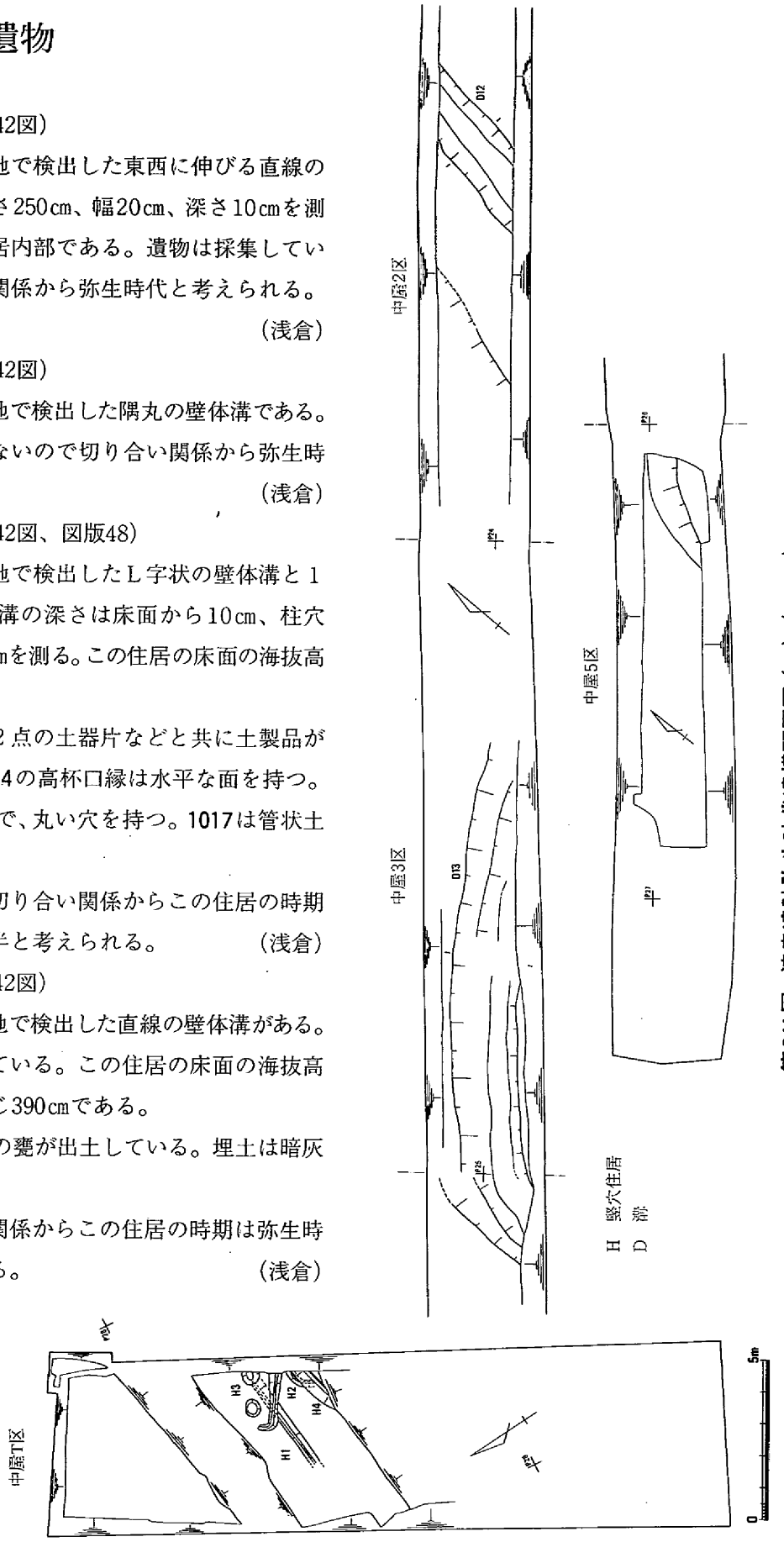
これらの遺物と切り合い関係からこの住居の時期は弥生時代後期後半と考えられる。（浅倉）

竪穴住居4（第242図）

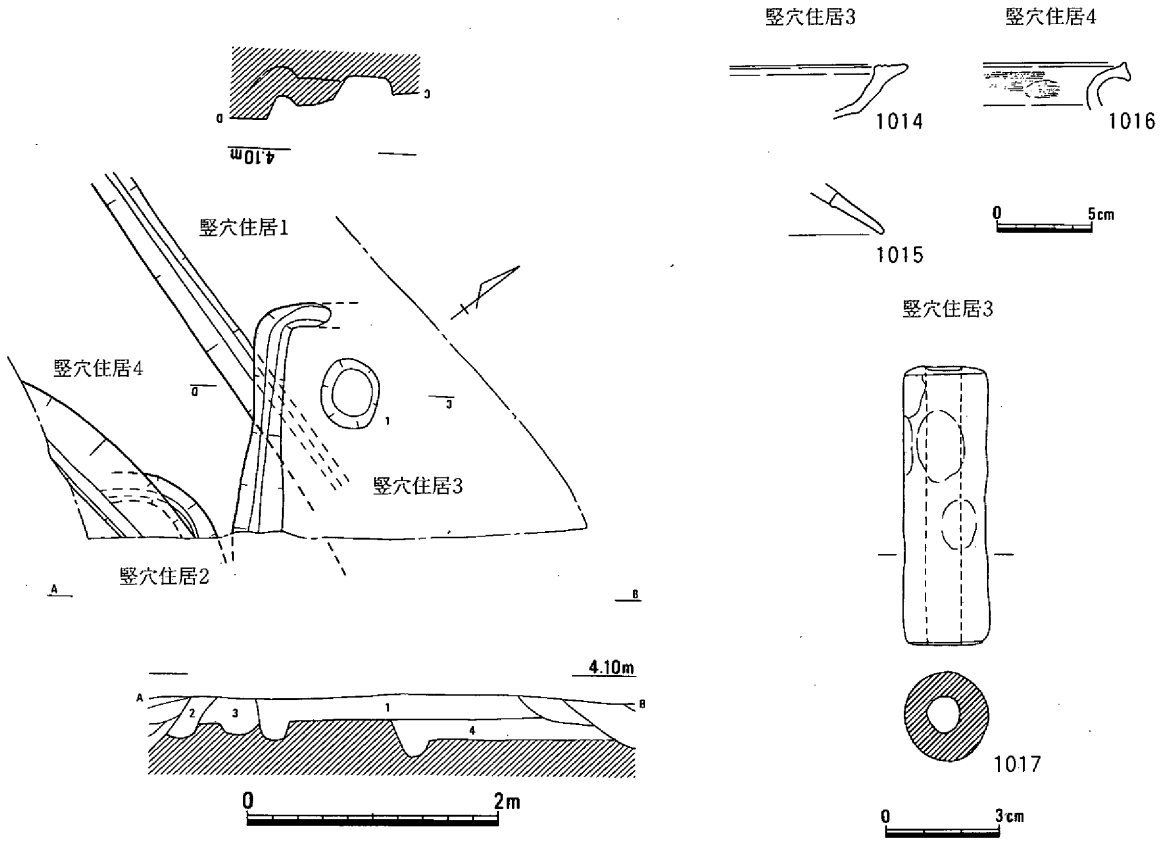
中屋T区の微高地で検出した直線の壁体溝がある。竪穴住居2を切っている。この住居の床面の海抜高は竪穴住居2と同じ390cmである。

遺物として**1016**の甕が出土している。埋土は暗灰色粘質土である。

土層の切り合い関係からこの住居の時期は弥生時代後期と考えられる。（浅倉）



第241図　津寺遺跡弥生時代遺構配置図（2）（1/200）



1　灰褐色粘質土(竪穴住居3埋土)　　3　暗灰褐色粘質土(竪穴住居2埋土)
2　暗灰褐色粘質土(竪穴住居4埋土)　　4　淡灰褐色粘質土(竪穴住居1埋土)

第242図　竪穴住居１，２，３，４（1/60）・竪穴住居３，４出土遺物（1/4，1/2）

溝１（第243図）

高田１区の中央付近で検出された。南北方向の溝で、わずかな検出部分での判断では南へ流れていたようである。検出幅が約３ｍ、深さは湧水のため確認できなかったが、第１層の厚さは43㎝を測った。西岸は微高地の端部にあたっていた。土器片がいくらか出土したが、図示したものは甕である。二重口縁のものがあり、弥・後・Ⅳとみられる。溝の埋没は古墳時代まで降るかもしれない。（岡本）

溝２（第244図、図版26）

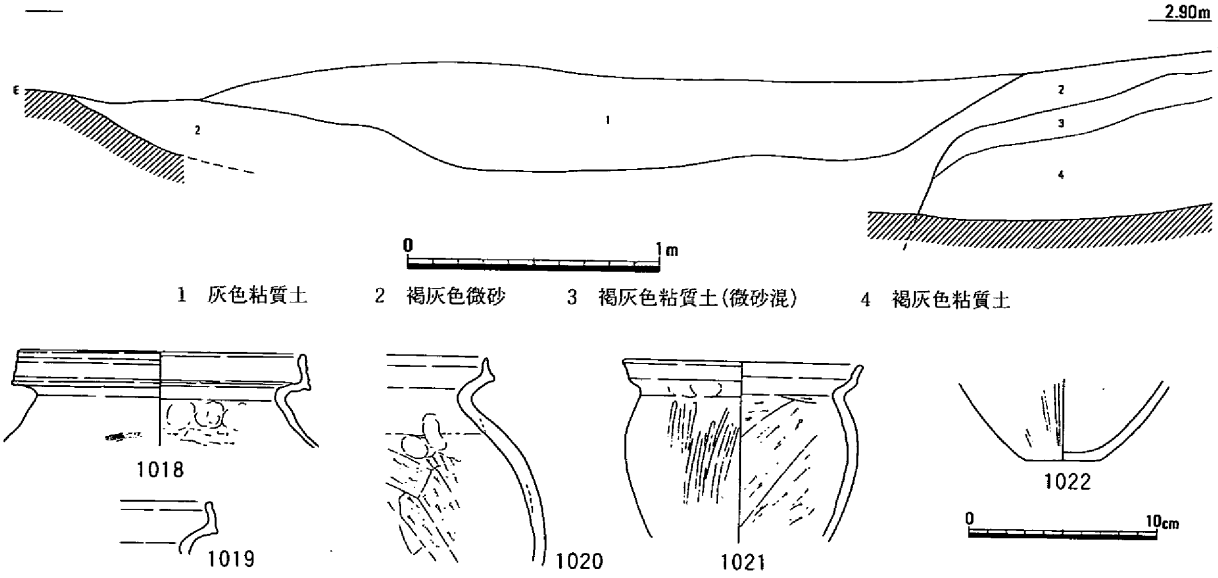
高田９区の西端で検出され、北西から南東の方向をとっていた。幅128㎝、深さ67㎝を測り、流走方向は不明である。溝壁の下部に屈折があり、掘り直しも考えられる。遺物は出土しなかったが、竪穴住居12の検出面より１層下で検出された。古墳時代前期に降る可能性もある。（岡本）

溝３（第245図、図版26）

高田10区の東半で溝２と平行していた。幅177㎝、深さは60㎝を測った。断面の形状も溝２と類似し、底は平坦な底面をもっていた。ただ、掘り直しの痕跡は認められなかった。壺の肩部の破片が出土し、砂質ではあるものの精良な胎土で、薄手であり、弥生時代末から古墳時代初頭のものかとみられる。竪穴住居14の下にあって、検出面は溝２と同一とみられ、同時存在の可能性が高い。（岡本）

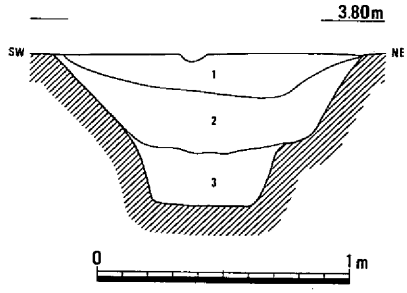
溝４（第246図）

高田10区の東半にあり、南北方向をとっていた。調査区北壁の断面観察から溝３より新しいことが



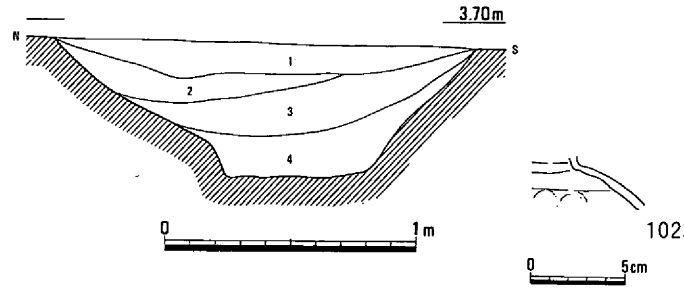
1　灰色粘質土　　2　褐灰色微砂　　3　褐灰色粘質土(微砂混)　　4　褐灰色粘質土

第243図　溝１(1/30)・出土遺物（1/4）



1　灰褐色粘性砂質土
2　淡灰褐色微砂斑灰褐色粘性砂質土
3　灰褐色粘性砂質土斑青緑色微砂

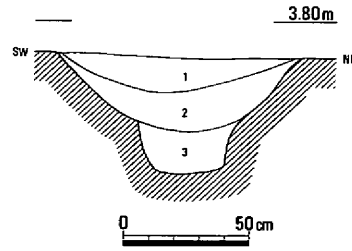
第244図　溝２(1/30)



1　茶褐色粘質土
2　淡茶褐色粘性微砂
3　茶褐色粘性微砂
4　暗茶褐色粘性微砂

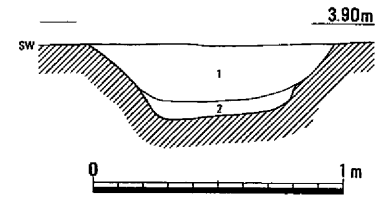
第245図　溝３(1/30)・出土遺物(1/4)

確認された。断面形をみると、底部が台形状に落ち込んでいて、平坦な底面が形成され、溝２との類似がみられる。幅が98cm、深さは46cmを測った。遺物はなかった。　　(岡本)



1　黄褐色砂質土
2　暗灰黄褐色砂質土
3　暗灰褐色粘性砂質土

第246図　溝４(1/30)

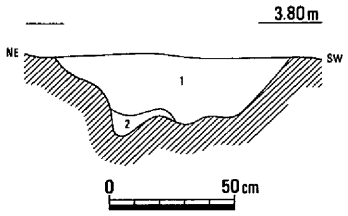


1　灰黄褐色粘性微砂
2　暗灰黄褐色粘性微砂

第247図　溝５(1/30)

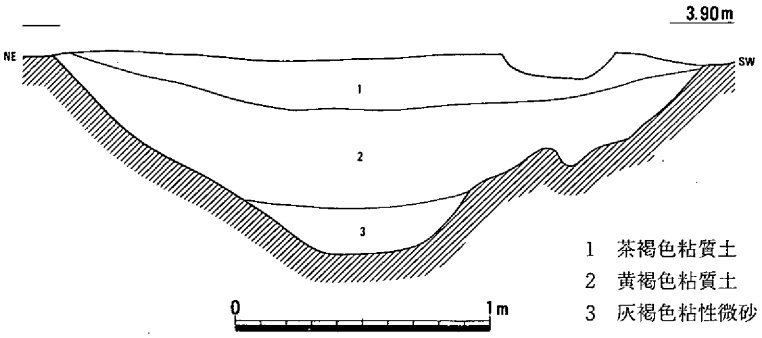
溝５（第247図）

高田10区の西半で検出された。北西から南東の方向だが、北半で北方向に枝分かれしていた。溝６よりも新しいが、検出面は同一で、溝２の検出面よりは１面下にあたる。幅92cm、深さ30cmを測った。断面形は台形に近く、平坦な底面をもつが、溝壁にわずかな屈折が認められた。(岡本)



1　暗黄褐色粘質土
2　暗黄灰色粘質土

第248図　溝６(1/30)



1　茶褐色粘質土
2　黄褐色粘質土
3　灰褐色粘性微砂

第249図　溝７(1/30)

溝６（第248図、図版26）

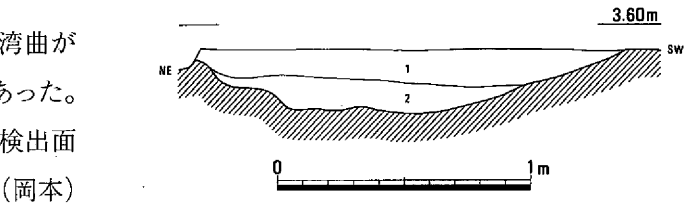
高田10区の西半にあり、南北方向だが湾曲が強い。幅が推定１ｍ前後、深さは33㎝であった。溝の底は西に片寄って深部がみられた。検出面から弥生時代のものとみられる。　（岡本）

溝７（第249図）

高田10区と11区の境にあった。２条の溝を一度に掘ったため、個々の形状はあまり明確ではないが、西側の溝がより新しいことは確認された。西側の溝は幅210㎝、深さ80㎝で、底部には平坦面をもつ。検出面は溝２と同一とみられ、遺物から古墳時代前期に埋没した可能性もある。　（岡本）

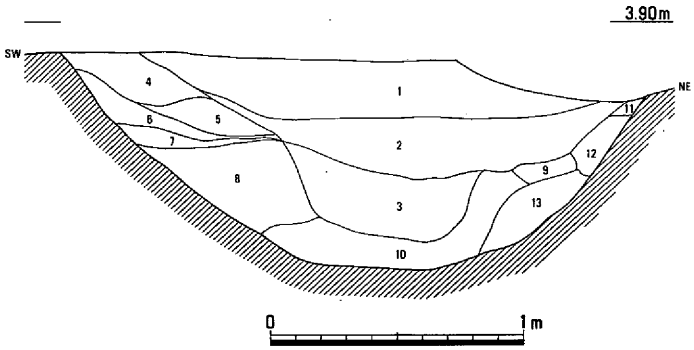
溝８（第250図）

高田11区の東半にあり、北北西から南南東の方向をとっていた。幅170㎝、深さ44㎝を測り、底面はやや凹凸があるものの平坦であった。検出面は溝５・６と等しい。　（岡本）



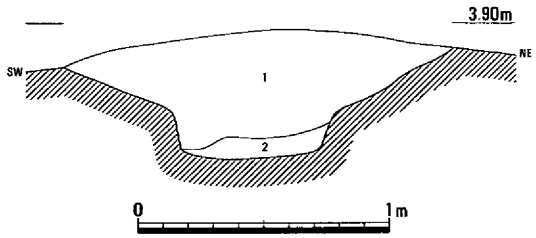
1　灰黄橙色粘性微砂　　2　灰黄褐色粘性微砂

第250図　溝８(1/30)



1　暗灰褐色微砂
2　灰褐色粘性微砂
3　灰褐色粘質土
4　暗灰褐色微砂
5　灰黄褐色粘性微砂
6　灰黄褐色粘性微砂
7　灰黄褐色粘性微砂
8　灰褐色粘質土
9　灰褐色粘質土
10　灰黄褐色粘性微砂
11　淡灰黄褐色粘性微砂
12　灰黄褐色粘性微砂
13　暗灰褐色粘質土

第251図　溝９(1/30)

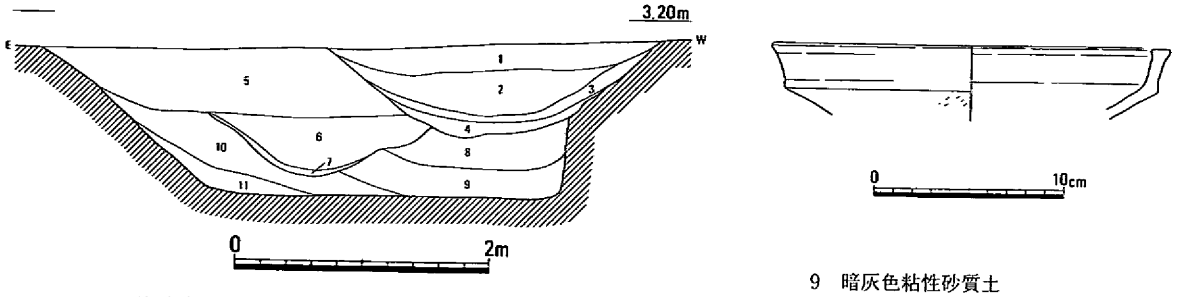


1　灰黄褐色粘性砂質土　　2　暗灰褐色粘質土

第252図　溝10(1/30)

溝９（第251図、図版26）

高田11区の東半、溝８の３ｍ西で溝８と平行していた。検出面は溝８よりは１面上で、溝７と同じであるため、同時存在は考えにくい。幅が210㎝、深さは88㎝を測った。調査区南壁の土層断面によれば、溝内堆積土は大きくは３層に分けられる。　（岡本）

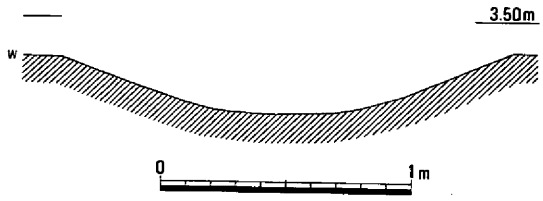


1　灰褐色粘性砂質土
2　褐灰色粘性砂質土
3　灰色粘質土
4　灰色粘性砂質土
5　灰褐色粘性砂質土
6　褐灰色粘性砂質土(炭粒点々)
7　灰色粘質土斑灰色粘性砂質土
8　灰色粘質土斑淡灰色粘性砂質土
9　暗灰色粘性砂質土
(炭粒点々、薄層砂互層堆積)
10　淡灰黄褐色粘質土斑粘性砂質土
(炭粒点々)
11　淡黄褐灰色粘質土斑粘性砂質土

第253図　溝11 (1/60)・出土遺物 (1/4)

溝10（第252図、図版26）

高田12区の東端で検出された。幅が73cm、深さは50cmを測った。北西からの流れが調査区で大きく湾曲し、南西に流路を変えていた。溝の断面形は溝２～４と等しく、底部が逆台形状に落ち込んでいた。遺物はなかった。　（岡本）



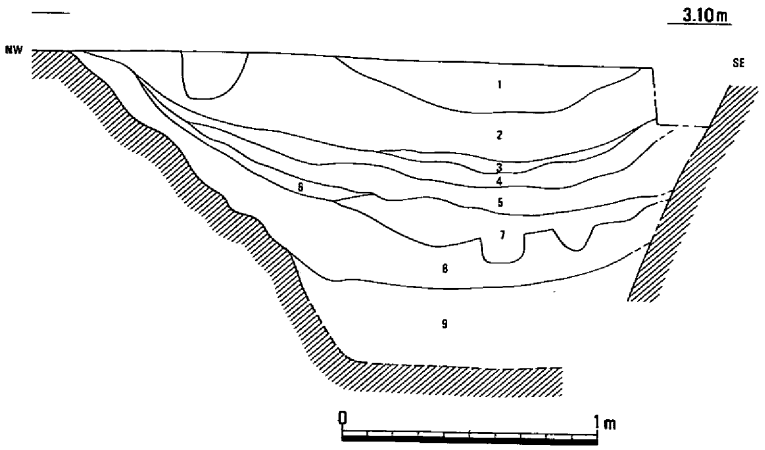
第254図　溝12 (1/30)

溝11（第253図）

立田13区にあった大形の溝である。少なくても２条の溝が重複していたが、検出時には明確に分けられず、一度に掘り下げた。最新の溝は第240図に破線で示したように北西から南東へ湾曲していたようで、その幅は推定で2.5m前後、深さは78cmを測った。溝の断面観察によると、まず幅４m、深さ120cmの大溝があり、埋没後に一度改修がなされ、さらに最新の溝が掘り直されたようである。図示した高杯は最新の溝から出土し、弥・後・Ⅰのものとみられる。　（岡本）

溝12（第254図）

中屋２区で検出された。北から南に流れ、幅が180cm、深さは34cmを測った。底にはかなり凹凸が



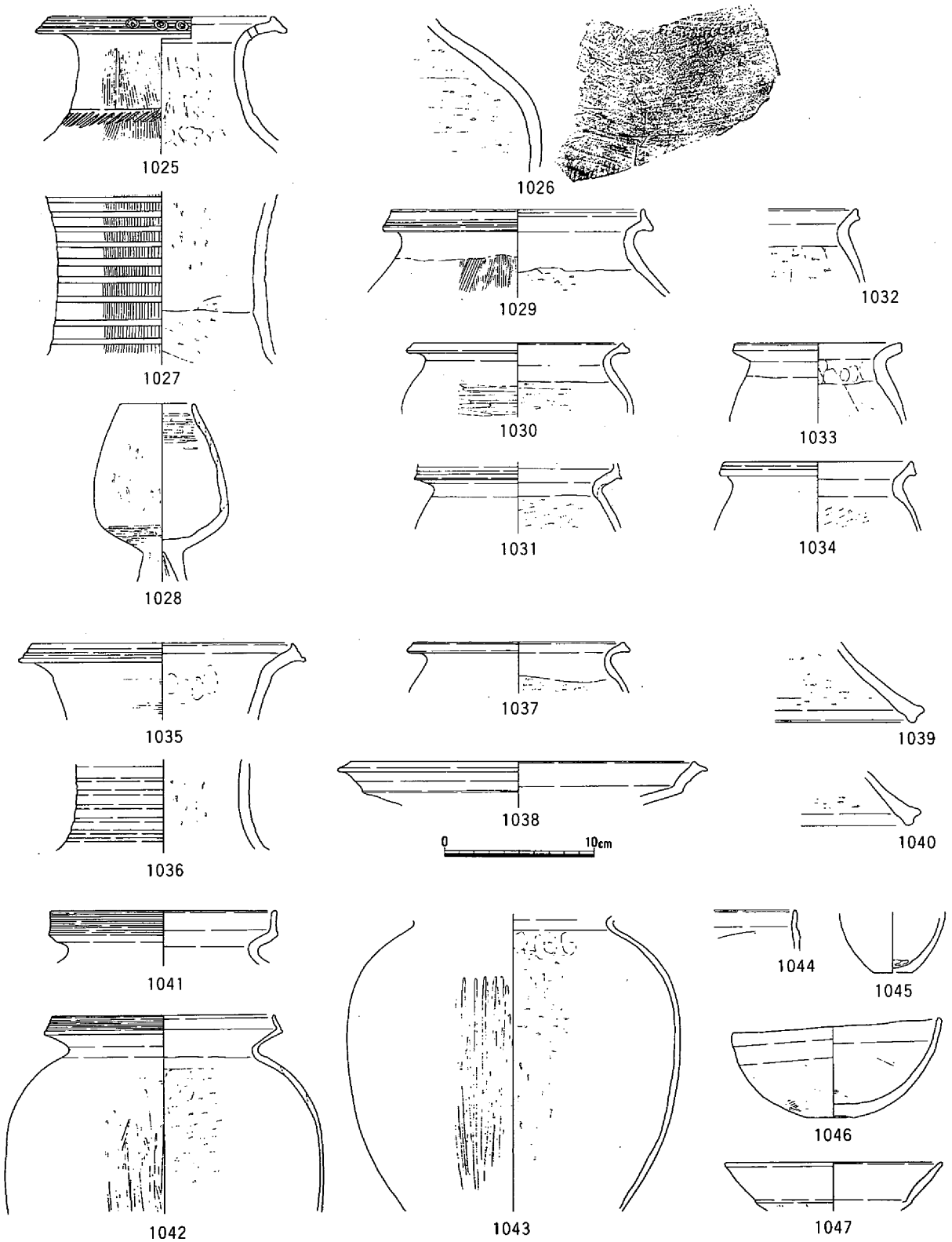
1　淡黄褐灰色粘性微砂
2　淡灰色微砂斑褐灰色粘性微砂
3　淡灰色微砂～細砂
4　淡青褐灰色粘性微砂
5　褐灰色粘性微砂
6　褐灰色粘性微砂～細砂
7　黄褐灰色微砂～細砂
8　褐灰色粘性微砂
9　暗青灰色粘質土
(微砂混、炭・焼土・木片混)

第255図　溝13 (1/30)

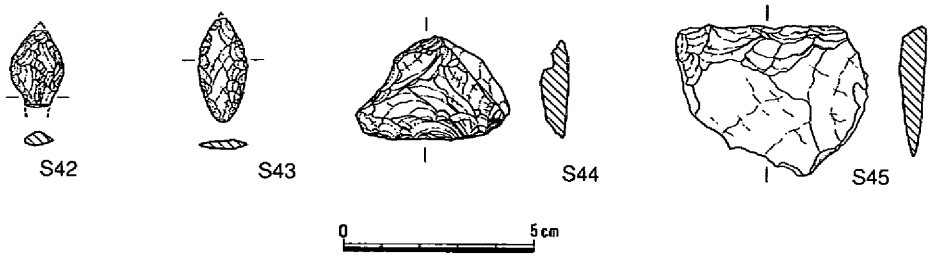
あった。埋土は周辺の堆積層である灰褐色粘性砂質土が落ち込んだ状況を示していた。　（岡本）

溝13（第255・256図）

中屋３区から４区にかけて検出された大溝である。東西方向で湾曲していて、その一部が調査区にかかって掘り出された。もっとも幅の広いところで2.8ｍを測り、全幅の2／3程度と推定される。深



第256図　溝13出土遺物(1/4)



第257図　津寺遺跡出土弥生時代遺物（1/2）

さは湧水層まで下がったため確認できなかったが、140cm以上あったことは確かである。溝壁の傾斜は約40°で、底部に近づくと急傾斜に変わっていた。底部の状況は明瞭ではないが、調査区南壁の土層断面から判断すれば、かなり平坦な底面をもっていたものと推測される。

埋土は幾層にもわたるレンズ状の堆積層からなり、長期にわたる埋没過程を示している。このことは、後述する土器の年代幅からも考えられる。第3層は細砂層で、この堆積時までは、水路としての機能をもっていたものと判断される。第1層と第2層の粘性微砂層は、本来の機能が失われた後の堆積である可能性が考えられる。最下層の暗青灰色粘質土層には炭粒や焼土塊、それに木片などがかなり包含されていた。集落に近接していたことによるものと思われる。

部分的な発掘ではあったが、かなりの出土遺物があった。出土土器の年代幅は弥・後・Ⅰから古・前・Ⅰに及ぶが、弥・後・ⅡからⅢが中心を占めていた。遺物は層位別に上・中・下・最下の順に取り上げた。図示した内、1025～1034までが最下・下層出土、1035～1040が中層、1041～1047が上層出土である。最下層は第9層の暗青灰色粘質土層にあたる。

下層・最下層出土土器の内、1029～1034の甕では弥・後・ⅡとⅢの両者がみられるが、最下層から出土した1029・1031などは弥・後・Ⅲである。1025～1027は壺で、1025では口縁端面に竹管文を押した円形浮文が飾られ、頸部下端にはハケ状工具による刺突文が巡らされていて、1026の頸部下端には貝殻による連続刺突文が施されていた。1028は椀状の杯部をもつ高杯である。

中層出土土器の内、1035・1036は壺、1037は甕、1038～1040は高杯である。壺1035や高杯はいずれも弥・後・Ⅰの時期のものと判断される。

上層は第1・2層である。1041～1043は甕で、口縁部が折れて上方に立ち上がり、その外面に櫛描沈線文を巡らせている。古・前・Ⅰのもので、1044・1046の鉢や1047の高杯も同期とみられる。このように、上層の土器は古墳時代に属するものが多くを占めていて、これらは後述する土器溜まり1・2との関連が考えられる。

以上のように、層別に取り上げた土器の年代から判断すると、最下層の段階から弥・後・Ⅲの土器の出土がみられ、溝が掘削されたのはこの時期と考えられる。上層の土器は古・前・Ⅰがほとんどであることから、溝が機能していたのは弥・後・ⅢからⅣの期間であったと判断される。　（岡本）

その他の遺物（第257図、図版48）

津寺遺跡の包含層から出土した弥生時代に属するとみられる石器があるので図示しておく。いずれもサヌカイト製である。S42は石錐で高田6区から出土した。錐の本体である身部は折損している。S43は無茎の木葉状の石鏃で、高田10・11区から出土した。S44・45は剥片で、器種は明確ではない。S44は中屋T区、S45は高田2区から出土した。　（岡本）

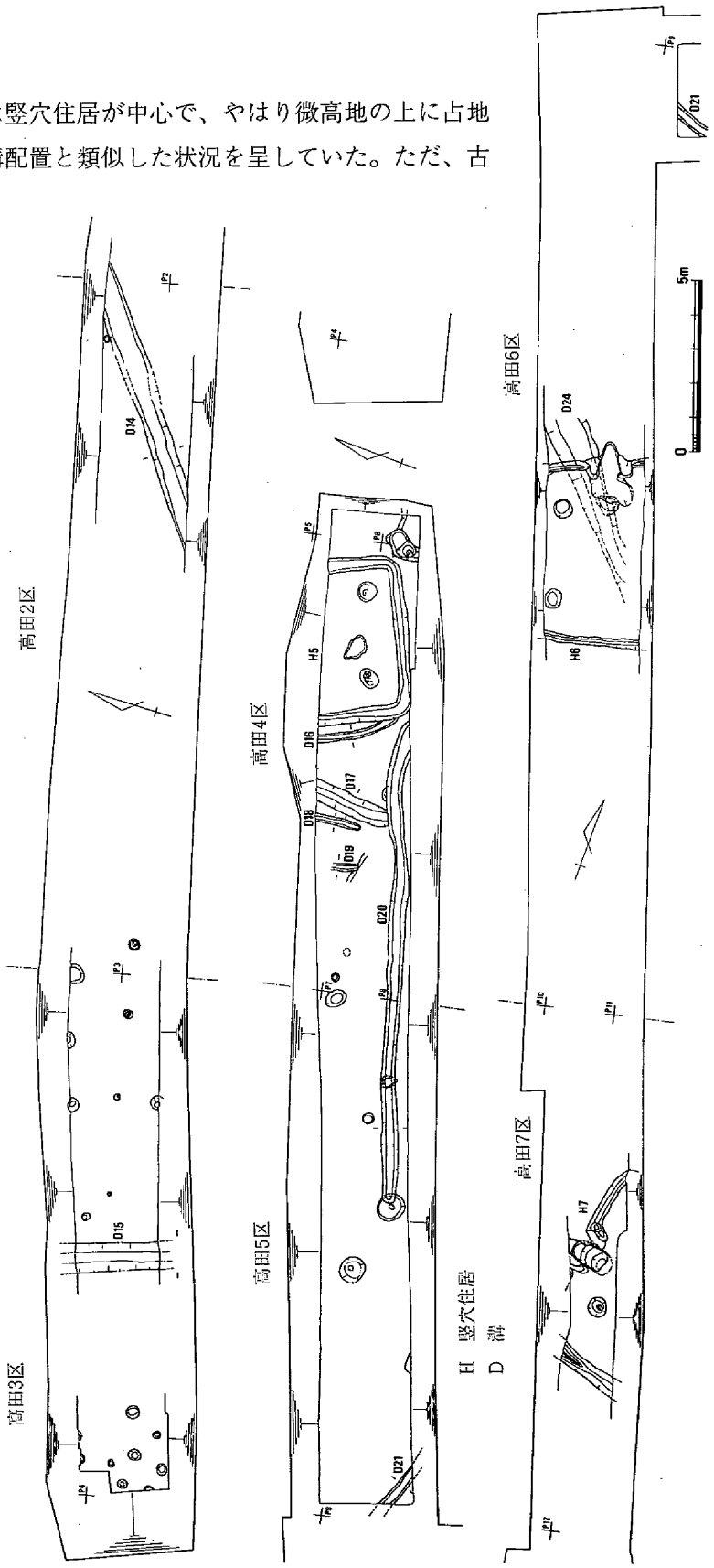
第３節　古墳時代の遺構と遺物

１　遺構配置

津寺遺跡の古墳時代の遺構は竪穴住居が中心で、やはり微高地の上に占地しているため、弥生時代の遺構配置と類似した状況を呈していた。ただ、古墳時代の前期と後期では遺跡の景観に大きな変化がみられ、後期に入ると高田調査区でより広範な遺構の分布がみられることとなる。

古墳時代前期の竪穴住居は高田９・10区で１軒、中屋Ｔ区で４軒が検出された。中屋Ｔ区では２条の溝も確認された。中屋３区では土器溜まりが２カ所検出され、溝13の埋没後の地形との関係が考えられる。高田４区から７区にかけては水田が開かれ、８区の微高地との間に溝が１条走っていた。この他に高田６区で溝が１条みられたのみで、古墳時代前期の遺構はまばらである。

古墳時代の後期に入ると、水田は埋没し、その上に竪穴住居や溝が多く掘削され、高田調査区の全域にわたって遺構が展開する。高田８区では大きな溝が掘られ、この溝はそののち現代まで継続されている。いっぽう、中屋調査区では遺構がみられなくなる。高田調査区における後期の遺構は竪穴住居が11軒、溝は10条である。６世紀後半以降の



第258図　津寺遺跡古墳時代遺構配置図（1）（1/200）

遺物を伴うものがほとんどである。

さらに降って古代になると、この地区を中心に多数の建物が構築され、無数の柱穴が検出されることとなる。その開始時期が6世紀後半にあったことは留意される。（岡本）

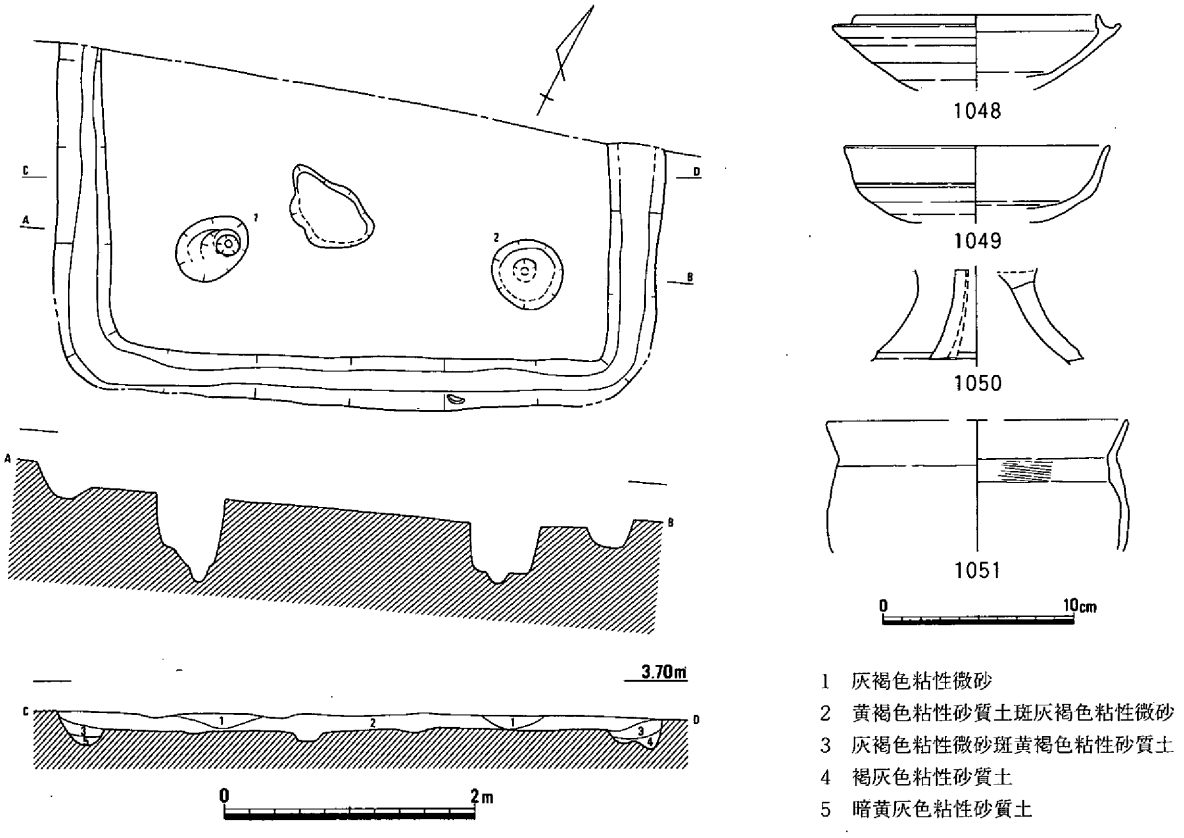
第259図　津寺遺跡古墳時代遺構配置図（2）（1/200）

2　遺構・遺物

竪穴住居5

（第260図、図版27・28）

高田4区の東半で検出された。平面形は隅丸方形とみられ、南半分弱を発掘した。南辺の長さは470cmを測り、竪穴の深さは15cmと浅く、かなり後世の削平をうけたものと思われた。2個の柱穴が南辺と平行する形で並び、4本柱の構造であったと推定される。柱穴の長径と深さは、柱穴1で62cmと57cm、柱穴2では57cmと42cmであり、柱穴間の距離は心々で235cmを測った。どちらの柱穴の底にも柱のめり込みによるとみられる小穴の柱痕が認められ、その直径は18cmであった。両柱穴の中



第260図　竪穴住居５（1/60）・出土遺物（1/4）

央から少し西側に片寄って長径80cm、深さ６cmの不整形な穴がみつかったが、位置や規模からみて住居の中央穴とは考えられない。竪穴の壁に添って幅33～45cm、深さ28cmの壁体溝が巡らされていた。

遺物には、須恵器の杯（**1048**）、高杯（**1049・1050**）と土師器の甕（**1051**）があり、鉄滓も認められた。遺物の年代から判断して、竪穴住居５の時期は６世紀後葉から７世紀前葉と考えられる。（岡本）

竪穴住居６（第261図、図版27）

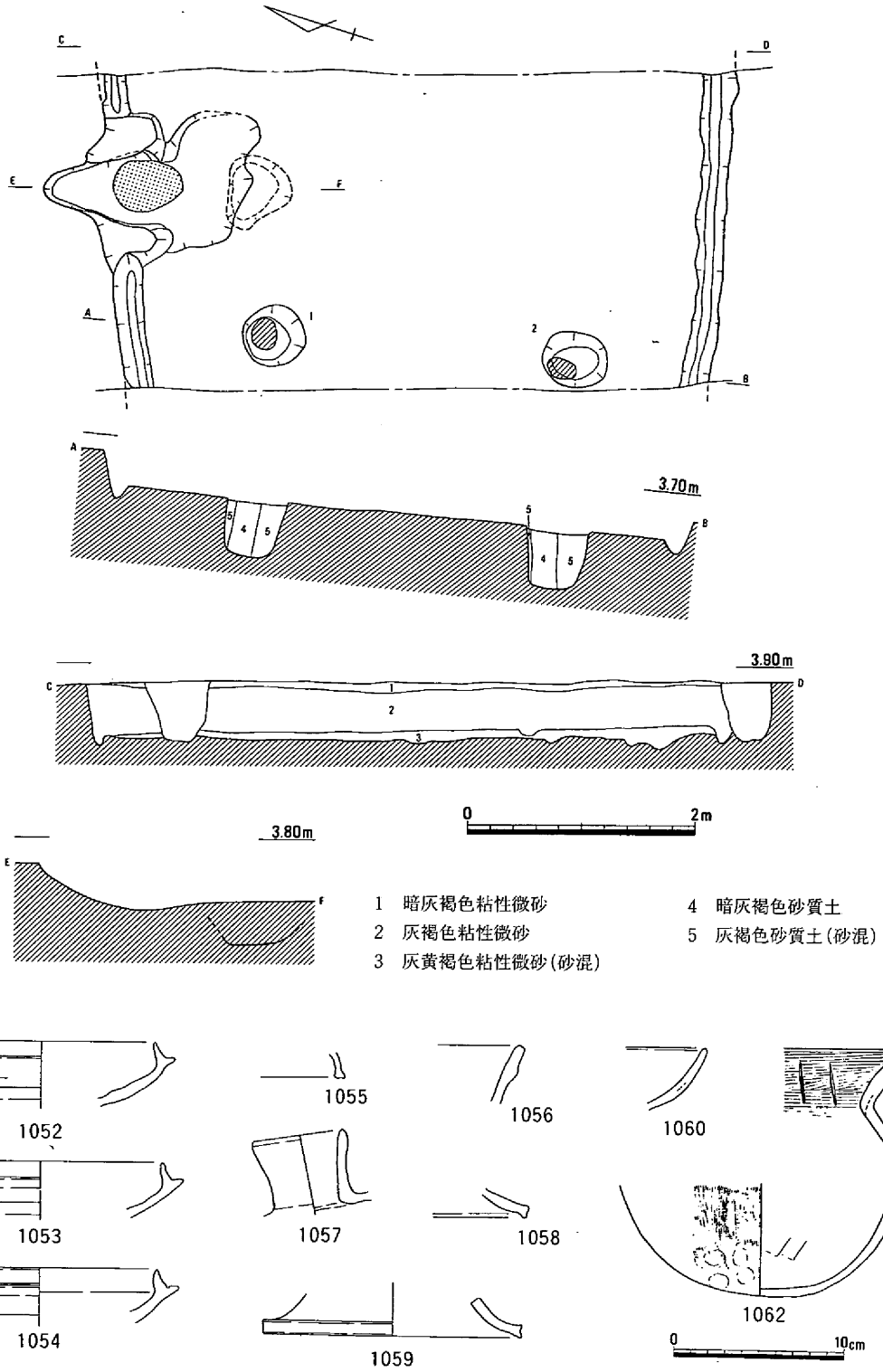
高田６区の中央部に位置していた。検出された南北辺から平面形は方形と推定されるが、正確な形状はつかめない。両辺の距離は545cmを測った。柱は４本とみられ、西側の２個の柱穴が確認された。柱穴の長径と深さは、柱穴１が55cmと50cm、柱穴２は58cmと55cmで、ともに柱痕が確認された。柱痕の直径は30cmと25cmを測った。柱穴間の距離は255cmであった。北辺の中央にカマドが作られていた。カマドは焚き口の幅が80cmで、奥行き110cmまで残存していた。焚き口部分には長径60cmの焼土塊が残されていた。床面を掘り下げると、焚き口の前方に長径65cm、短径55cmの穴が検出され、後述する竪穴住居７・12のようにカマドに伴う施設と考えられる。この住居には貼床が施されていた。

遺物としては土器がかなり出土し、鉄滓もあった。須恵器には杯（**1052～1054**）と蓋（**1055**）、平瓶（**1057**）、高杯（**1058・1059**）があり、土師器には高杯（**1060**）と甕（**1061・1062**）がみられ、ミニチュア品も認められた。これらの遺物から判断すると、竪穴住居６の年代は６世紀後葉と考えられる。（岡本）

竪穴住居７（第262図、図版28）

高田７区の中央で検出された。西辺と南辺の半分弱が検出され、西辺の中央付近ではカマドが作りつけられていた。４本柱の構造であったと推定され、南東部の柱穴が１個確認された。住居の平面形

は隅丸方形とみられ、西辺の長さは570cm程度と復元される。カマドは焚き口の幅が65cmで、燃焼部には長径60cmの被熱部分が残されていた。また、焚き口の前には炭の広がりがあり、土器片が集中していた。貼床層を除去すると燃焼部から焚き口の前面にかけて長径125cm、短径66cmの穴が検出された。その上半の灰黄色粘性微砂は粘性が強く、カマドの防湿のような機能をもった施設かと考えられる。住居内では他にも火所が認められた。柱穴は長径55cm、深さ48cmで、直径22cmの柱痕があった。

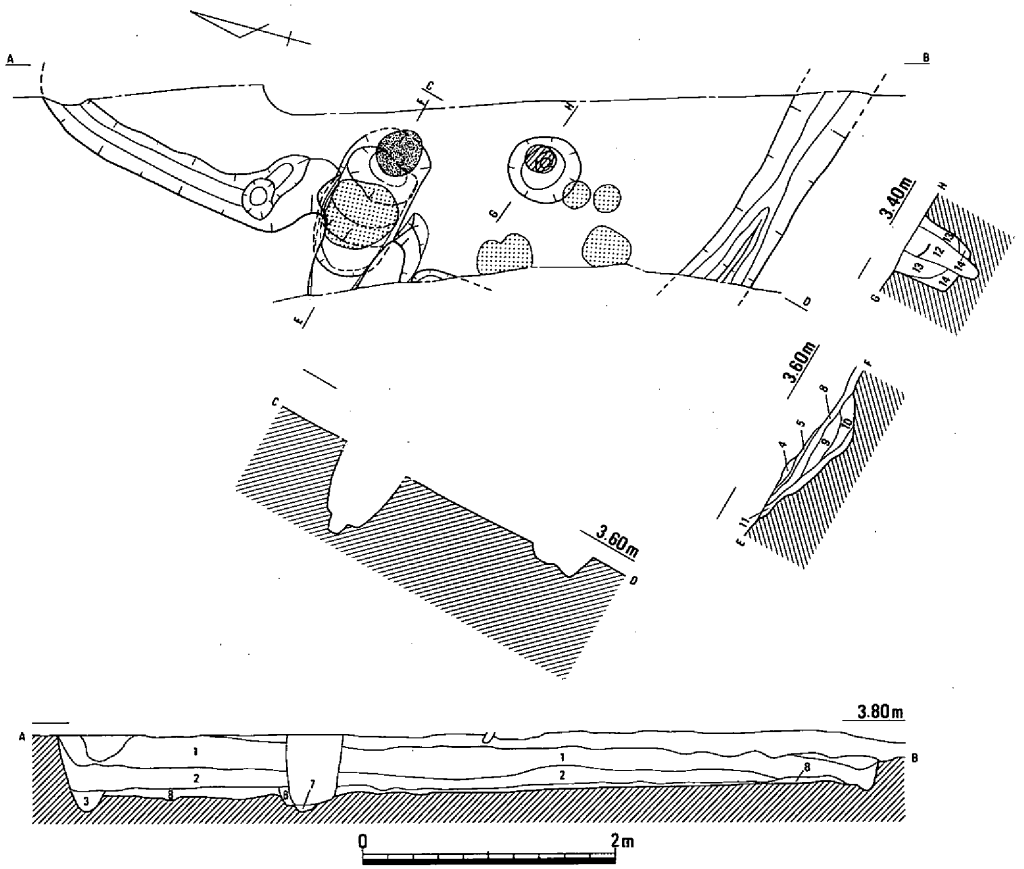


第261図　竪穴住居6（1/60）・出土遺物（1/4）

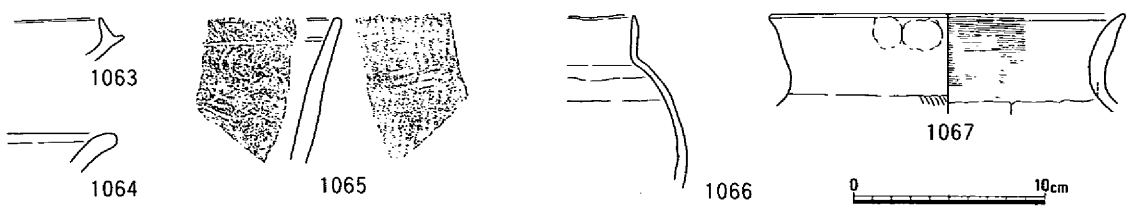
出土遺物には須恵器の杯（1063）、甕（1064）、コシキ（1064）、土師器の甕（1066・1067）があり、1065はカマド内から、1067はカマドの前面の土器群中にあった。1065の外面には平行タタキ目、内面には同心円文が残っていた。竪穴住居７の年代は遺物から６世紀末から７世紀前半とみられる。　（岡本）

竪穴住居８（第263図、図版28）

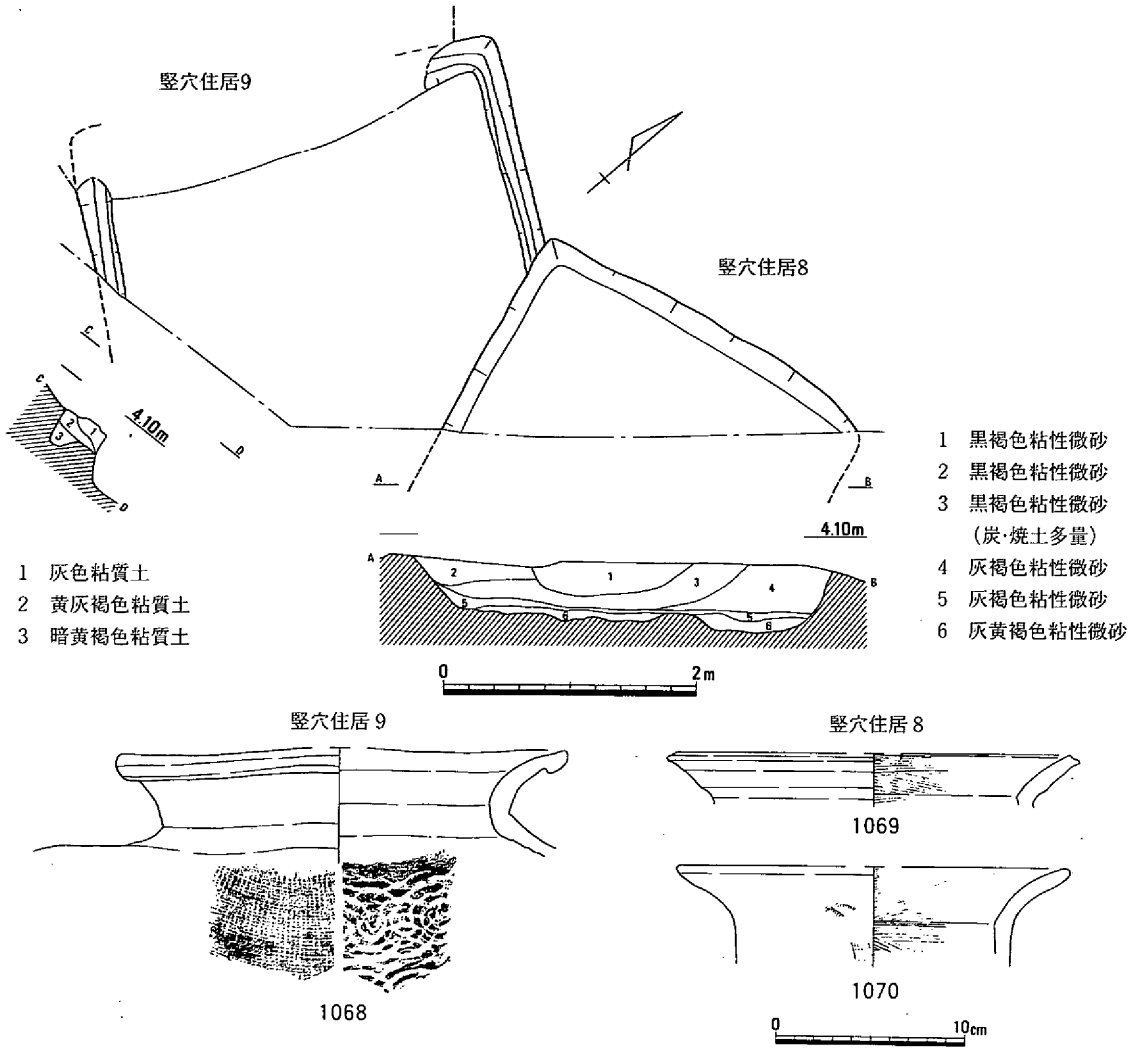
高田８区で竪穴住居９と重複し、それよりは新しい。平面形が方形の小形の住居とみられ、北辺の長さは３ｍ前後と推定される。柱穴や壁体溝は確認できなかったが、断面観察から貼床の存在が認められた。土器と鉄滓が出土した。1069と1070は土師器の甕で、口縁部の形状に違いがみられる。竪穴住居９との関係から７世紀前半と判断される。　（岡本）



1　灰色粘土斑灰褐色粘性微砂
2　黄褐色粘質土斑灰褐色粘質土
3　灰褐色粘質土斑黄褐色粘質土
4　淡黄褐色粘性微砂（焼土塊混）
5　灰色粘質土（炭粒・焼土混）
6　灰色粘性微砂斑黄褐色粘性微砂
7　黄灰色微砂斑灰色粘土
8　灰色粘土斑黄褐色粘性微砂（貼床）
9　灰黄色粘性微砂
10　黄灰色粘性微砂
11　灰褐色粘質土（炭・焼土微少粒混）
12　灰色粘土斑黄褐色粘性微砂
13　黄褐色粘性微砂
14　黄褐色粘性微砂



第262図　竪穴住居７（1/60）・出土遺物（1/4）



第263図　竪穴住居8，9（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居9（第263図、図版28）

高田8区の西半にあって、竪穴住居8や近世の土壙によって破壊をうけていた。やはり方形の平面形をもつと推定され、北辺と南辺の距離は350cmを測った。柱穴は検出できなかったが、幅20cm、深さ25cm前後の壁体溝が周囲に確認された。出土遺物として須恵器・土師器の他に鉄滓があった。1068は須恵器の甕で焼け歪みが顕著である。7世紀の前葉とみられる土器片もあった。（岡本）

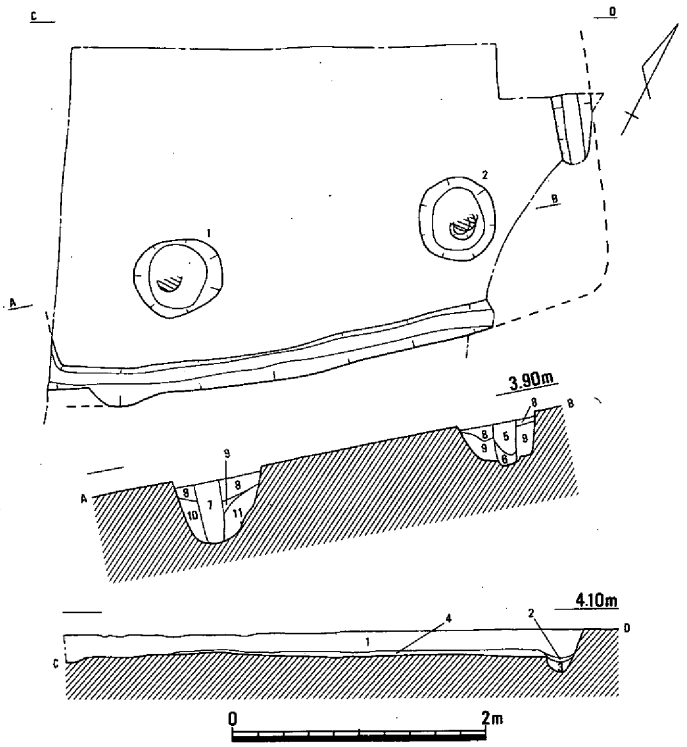
竪穴住居10（第264図、図版29）

高田8区の西端で検出された。近世の土壙によって破壊をうけ、また現在の水路の下に一部がかかる。平面形は方形で、一辺の長さは450cm前後と考えられる。4本柱の構造とみられ、南東側の2個の柱穴を検出した。柱穴の長径と深さは、柱穴1が70cmと56cm、柱穴2は66cmと35cmを測った。両柱穴で柱痕が確認され、その直径は20cmであった。柱穴間の距離は240cmを測る。壁体溝が確認され、その幅は30cmで、床面からの深さは6～18cmと浅かった。調査区北壁の土層断面の観察から貼床が認められた。貼床の層は灰褐色粘性微砂と黄褐色粘性微砂が塊状になって混合されていた。

出土遺物は須恵器・土師器の土器類が少量で、図示しうるほどのものはなかつた。その年代も古墳時代後期としかわからないが、竪穴住居10の年代も6世紀後葉から7世紀前半と考えたい。（岡本）

竪穴住居11（第265図）

高田９区にあり、竪穴住居12・13の埋没後に建てられていた。住居の南東隅を検出したにすぎないが、平面形は方形と推定される。検出された南辺の長さは2.3ｍを測った。幅20cmの壁体溝を確認した。出土遺物には土師器・須恵器・製塩土器の小片があり、古墳時代後期とみられる。（岡本）



1　灰褐色粘性微砂
2　褐灰色粘質土
3　淡褐灰色粘質土
4　黄褐色微砂斑灰褐色粘性微砂
5　灰褐色微砂
6　褐灰色微砂
7　暗灰褐色微砂
8　灰褐色微砂
9　灰黄褐色微砂
10　褐灰色微砂
11　灰褐色微砂

第264図　竪穴住居10（1/60）

竪穴住居12（第266図、図版29）

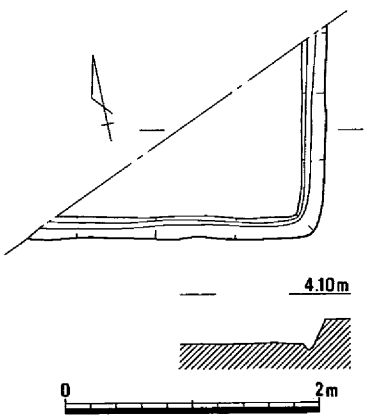
高田９区の西端にあり、竪穴住居13よりは新しく、竪穴住居11によって破壊をうけていた。平面形は隅丸方形とみられ、北半分を検出した。北西辺の長さは510cmで、その中央部にカマドが築かれていた。竪穴の周囲には壁体溝が確認され、その幅は20cm前後あり、南西壁では段が認められた。カマドは焚き口の幅が100cmで、奥に105cmまで残存していた。燃焼部には長径85cmの被熱部分が残されていた。カマドの下を掘り下げると、長径165cm、短径103cmの土壙が検出された。土壙の断面形は椀形で、中の埋土は塊状の混合土となっていた。カマドの前方両側に柱穴が２個検出され、４本柱の構造であったとみられる。柱穴の長径は65・70cm、深さは41・45cmで、柱穴２では直径13cmの柱痕が確認された。

図示した遺物は**1071**が須恵器の蓋のつまみ、**1072**が須恵器の身である。この他に土師器片もあった。出土遺物の年代から竪穴住居12は６世紀後葉から７世紀前葉のものとみられる。（岡本）

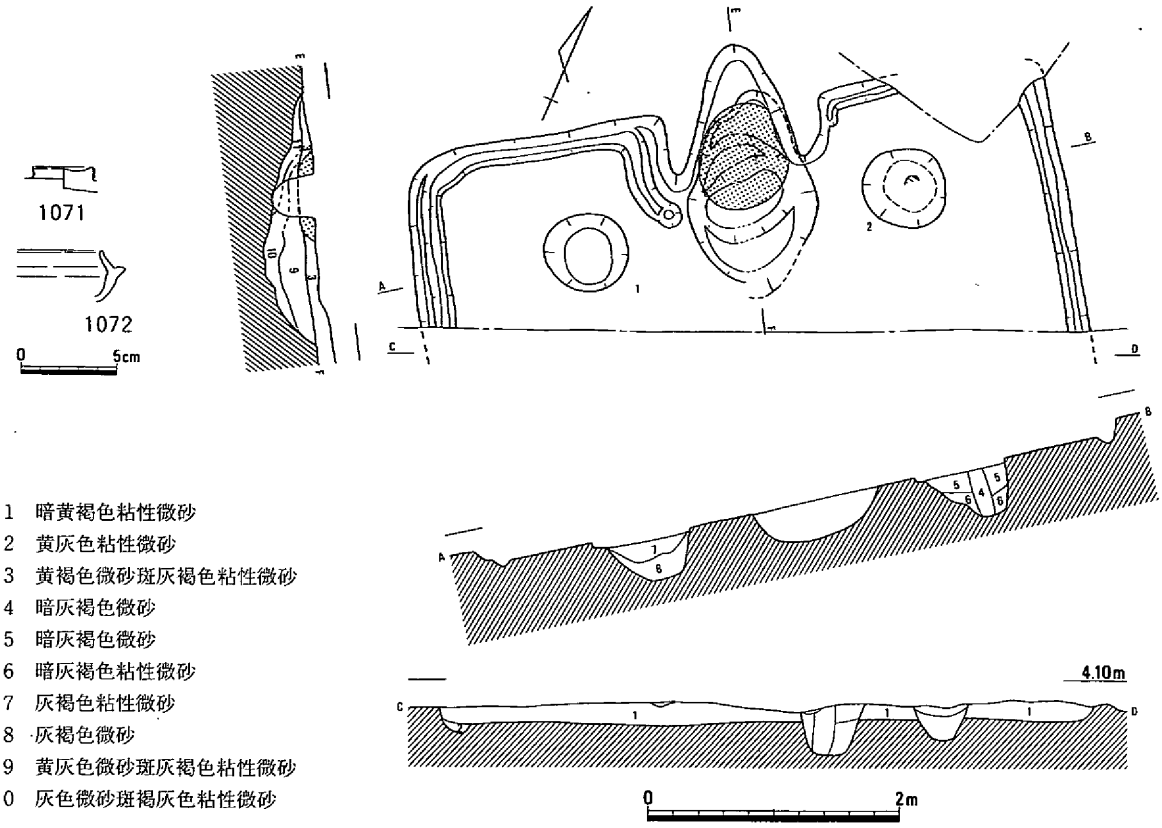
竪穴住居13（第267・268図、図版29）

高田９区で竪穴住居12によって一部破壊をうけていた。平面形は隅丸方形と推定され、南東隅を検出したにとどまった。調査区の北端で重複する柱穴２個を確認した。壁体溝も二重に巡り、調査区北壁の土層断面で第２層と第６層の底に炭層がそれぞれ存在していたことから、この竪穴住居は一度建て直されたことが確実である。検出された南辺の長さは240cm程度あり、竪穴の規模は一辺が６ｍ前後あったものとみられる。柱穴は深さが49cmあり、直径15cmの柱痕が確認できた。

遺物は多く、土器の他に鉄片や鉄滓も出土した。図示した土器は古・前・Ⅰ～Ⅱの土師器で、**1073・1074**が壺、**1075～1079**



第265図　竪穴住居11（1/60）



1　暗黄褐色粘性微砂
2　黄灰色粘性微砂
3　黄褐色微砂斑灰褐色粘性微砂
4　暗灰褐色微砂
5　暗灰褐色微砂
6　暗灰褐色粘性微砂
7　灰褐色粘性微砂
8　灰褐色微砂
9　黄灰色微砂斑灰褐色粘性微砂
10　灰色微砂斑褐灰色粘性微砂

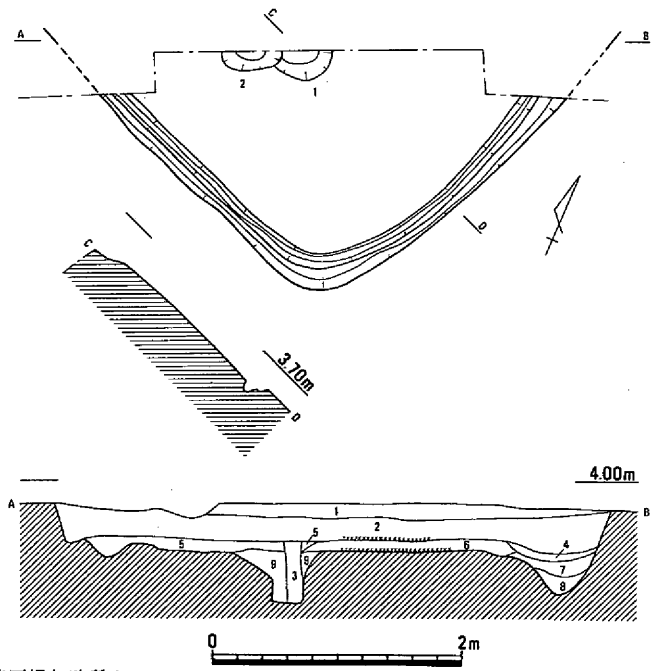
第266図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物（1/4）

は甕、1080～1086は高杯である。甕の1075は胴部外面にタタキ目を残し、底部にかすかに平底をもつ。1086は1082のような椀形の杯部をもつか。竪穴住居の年代は古墳時代前期と考えられる。　（岡本）

竪穴住居14

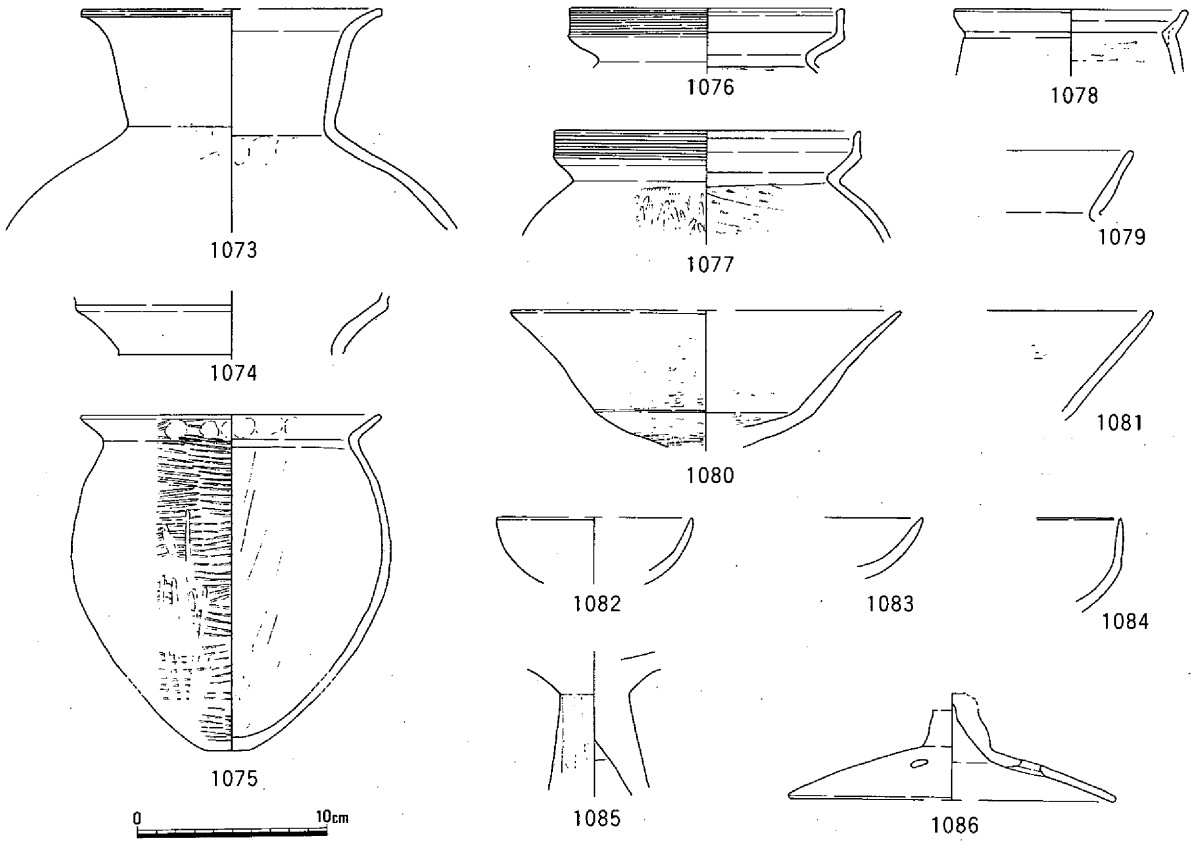
（第269･270図、図版30）

高田10区の東端、竪穴住居12の西わずか1mで検出された。隅丸方形の平面形で、北隅1/4弱を発掘した。カマドが検出され、その位置から北西辺の中央にカマドをもっていたとみられる。カマドの中軸線から竪穴の北隅までの距離は250cmを測った。柱穴や壁体溝は確認できなかった。カマドは焚き口部分がちょうど調査区の側溝にかかったため、南側を調



1　淡灰褐色砂質土
2　灰褐色微砂質土
（土器片･炭粒多　底に炭層）
3　灰緑色細砂斑灰褐色粘性微砂質土
4　暗灰褐色粘性微砂質土
5　灰褐色粘性微砂質土
6　灰褐色粘性砂質土斑灰黄色微砂
（細砂薄層含む　底に炭層　貼床）
7　淡緑灰色微砂
8　暗灰褐色粘性砂質土
9　灰緑色細砂斑灰褐色粘性微砂

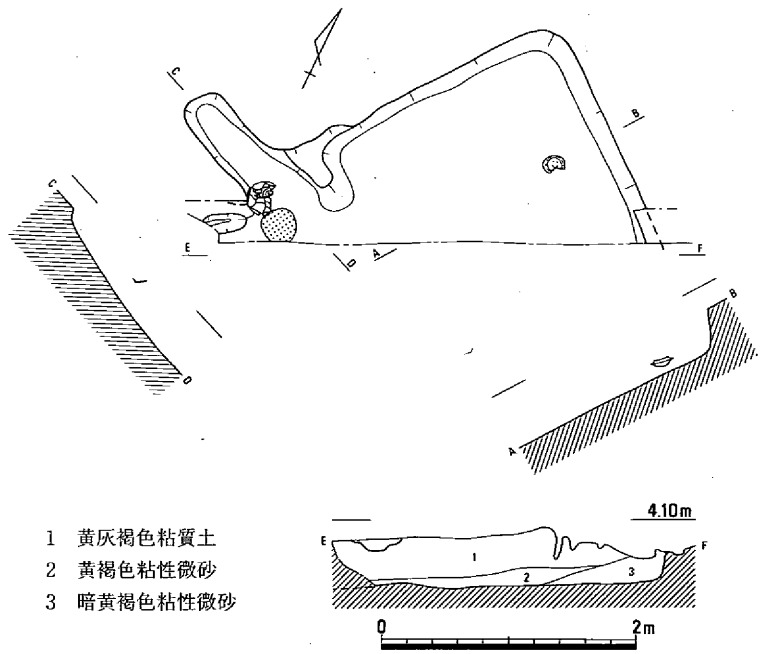
第267図　竪穴住居13（1/60）



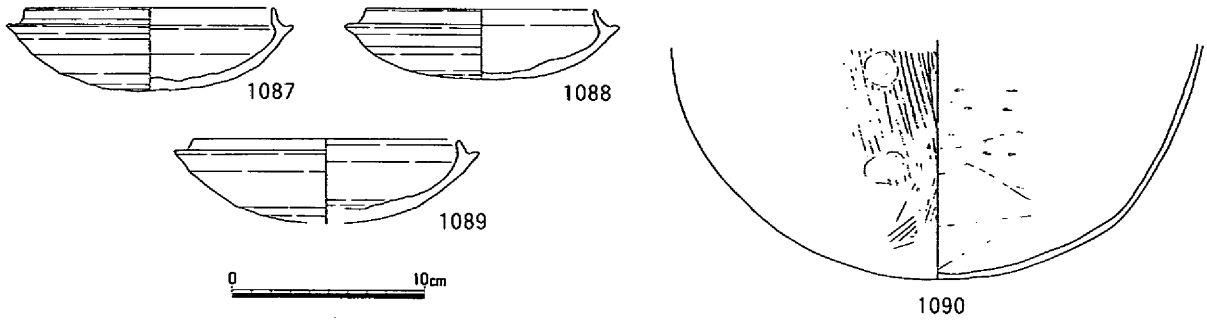
第268図　竪穴住居13出土遺物（1/4）

査によって一部破壊してしまい、完全な形ではないが、焚き口の幅は65㎝程度とみられる。煙道部が細長く残存していて、幅が35㎝、奥行きは145㎝を測った。焚き口の中心から南にずれて長径28㎝の焼土塊が残され、それに接近して甕の底部（**1090**）が座った状態で出土した。甕の中には須恵器の杯の大形破片（**1088**）が入っていた。また、図示したように床面から須恵器の杯（**1087**）が出土した。

出土した須恵器の杯の口径は**1087**が129㎜、**1088**は120㎜を測り、器高は**1087**が44.5㎜、**1088**は37.5㎜であった。６世紀後葉のものとみられる。このことから判断すると、竪穴住居14の年代は６世紀後葉から６世紀末にかけてと考えられ、竪穴住居12に先行するとみられる。（岡本）



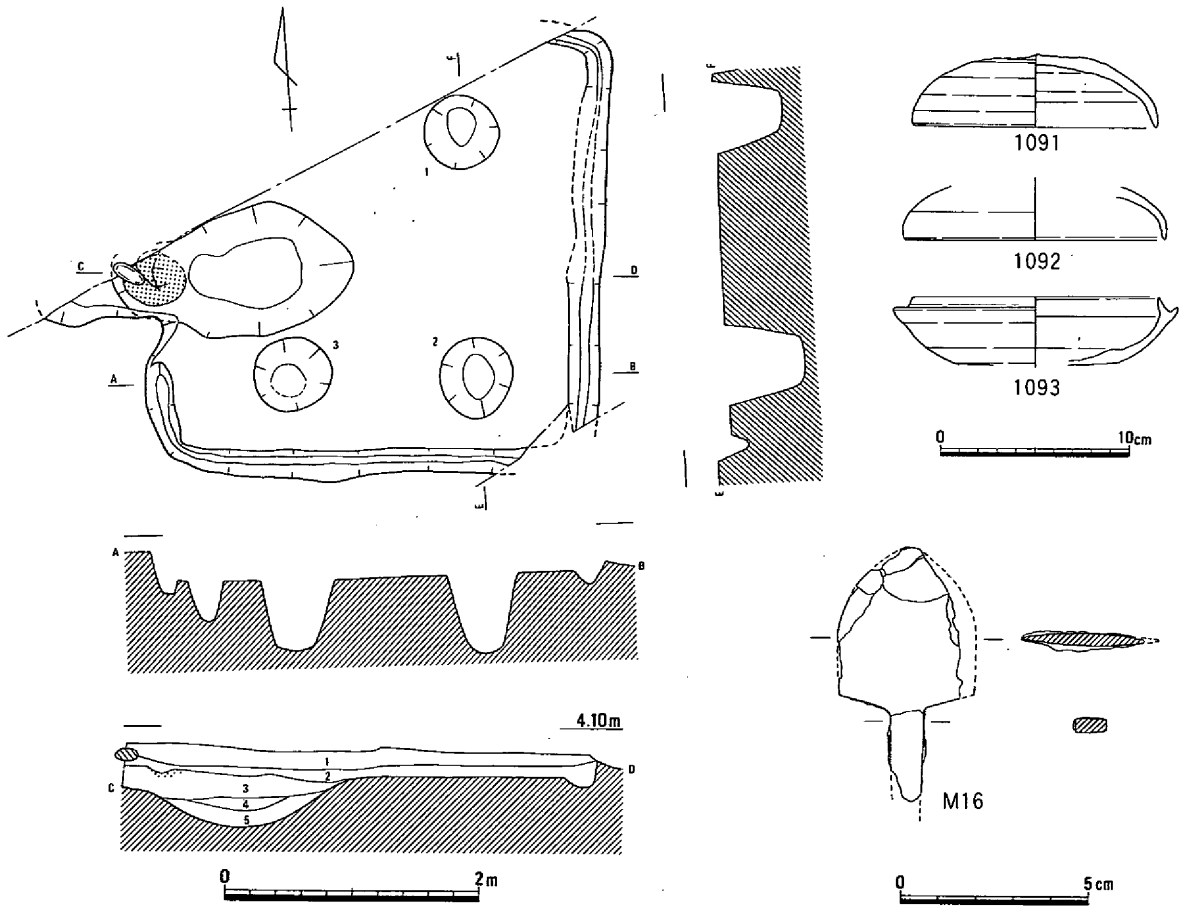
第269図　竪穴住居14（1/60）



第270図　竪穴住居14出土遺物（1/4）

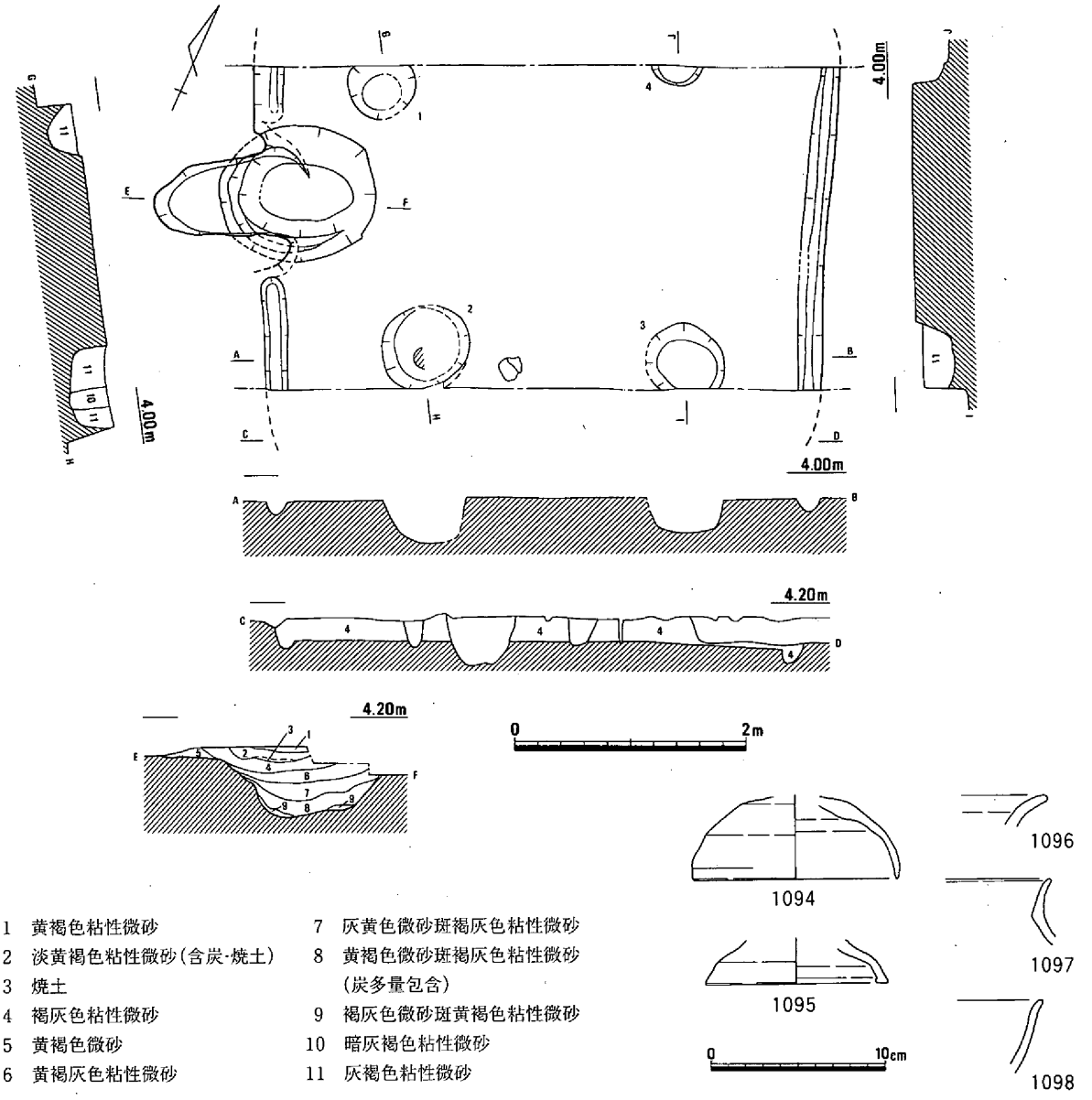
竪穴住居15（第271図、図版30・48）

高田10区の西端に位置し、竪穴住居16によって破壊をうけていた。平面形は隅丸方形で、西辺の中央にカマドを作りつけていた。北西部分と南東隅は検出できなかったが、東辺･南辺ともに350㎝前後に復元される。柱穴が３個確認され、４本柱の構造であったことが知られる。柱穴の距離は、柱穴１と柱穴２の南北が長くて200㎝を測り、柱穴２と柱穴３の東西は150㎝で、かなり差がみられた。柱



1　暗灰褐色粘性砂質土
2　灰褐色粘性砂質土
3　灰黄褐色粘性砂質土（炭･焼土点々）
4　灰黄色粘性砂質土
5　暗灰黄色粘性砂質土（炭･焼土点々）

第271図　竪穴住居15（1/60）・出土遺物（1/4，1/2）



第272図　竪穴住居16（1/60）・出土遺物（1/4）

穴の長径と深さは、柱穴１が60cmと55cm、柱穴２は65cmと65cm、柱穴３で62cmと56cmであった。竪穴住居の周囲には幅25cmの壁体溝が確認された。カマドは調査区の北端で南半分が検出された。焚き口の幅は不明だが、長径50cmの被熱部分が燃焼部に残され、その西半に長さ13cmの細長い河原石が立てられた状態で残存していた。甕を上にかけたものであろうか。カマドの燃焼部から焚き口の前面にかけて、長径190cm、短径105cm、断面形が椀形の土壙が掘られ、カマドの基礎施設とみられる。

出土遺物には図示した須恵器と鉄鏃の他に土師器や鉄滓があった。**1091**と**1092**は蓋で、**1091**の口径は128㎜であった。**1093**は杯で、口径は130㎜を測った。**M16**の鉄鏃は平根式で残存長67㎜、身長43㎜、身幅は36㎜と推定される。竪穴住居15の年代は６世紀後葉から７世紀初頭と考えられる。　（岡本）

竪穴住居16（第272図、図版31）

高田10区の西端で竪穴住居15と重複してあり、竪穴住居15よりも新しい。住居の中央部分がちょうど調査区の中に入ったため、方形と推定される住居の北辺と南辺については検出されなかった。中央

にカマドを作りつけた西辺と直線的な東辺、それに柱穴が4個確認された。幅20cm前後の壁体溝も東西両辺で認められた。4個の柱穴はその中心を結んだ形が方形とはならず、不整な四角形となっていた。これは柱穴1がかなりずれていることによる。柱穴1と柱穴2、柱穴2と柱穴3の距離は230cmだが、柱穴1と柱穴4の距離は255cmを測った。柱穴の規模は、もっとも大きい柱穴2で長径が76cm、深さは40cmあり、柱穴1は長径が59cm、深さは37cmを測った。カマドは焚き口の幅が85cmで、奥まで120cmが残っていた。燃焼部には焼土塊が認められた。カマドの燃焼部から焚き口の前面にかけては、床面下に長径134cm、短径118cmの楕円形の土壙が掘られ、底には炭が多量に包含されていた。

出土遺物は土器のみであった。**1094**と**1095**は須恵器で、**1096**～**1098**は土師器である。**1094**は蓋で、口径は118mmを測る。**1095**は脚部である。**1096**と**1097**は甕、**1098**は高杯である。これらの出土遺物や竪穴住居15との関係から、竪穴住居16の年代は7世紀前半と考えられる。　（岡本）

竪穴住居17（第273･274図、図版31･47）

中屋T区中央部にあって隅丸方形と推定できる住居で、そのコーナー部分が一部検出できた。竪穴住居18にほとんど切り取られている。床面の海抜高は330cm、壁の高さは80cm 残存している。

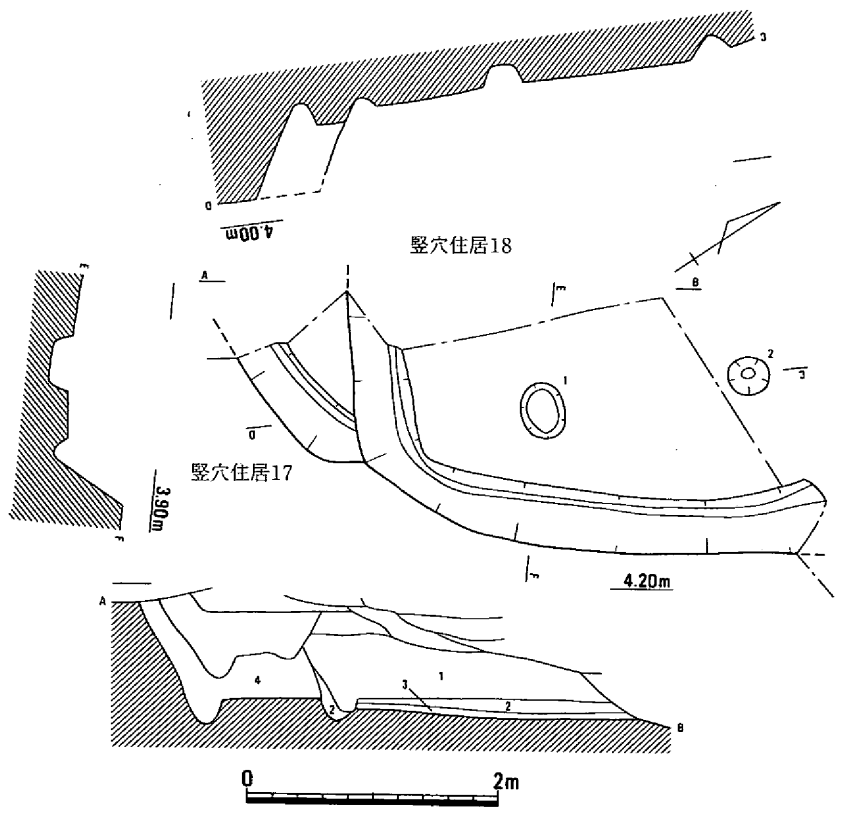
遺物は甕・高杯などの土器が数点出土した。**1106**は口縁部から肩部の一部が欠けているが、器形のすべてがわかる残存状体の良好な甕である。口縁部には櫛描き沈線を施し、体部外面はヨコハケした後、縦のヘラミガキし、底部は平底が残る。内面はヘラケズリで器壁を薄くしており、底部と肩部には指頭圧痕が残されている。これから住居の時期は古墳時代初頭と言える。　（浅倉）

竪穴住居18（第273･274図、図版31）

中屋T区中央部にあって隅丸方形の住居で、竪穴住居17をほとんど切っている。床面の海抜高は330cm、壁の高さは80cm 残存している。壁体溝の深さは10cm程度であり、柱穴は2個検出し、その深さは床面から15cmを測る。

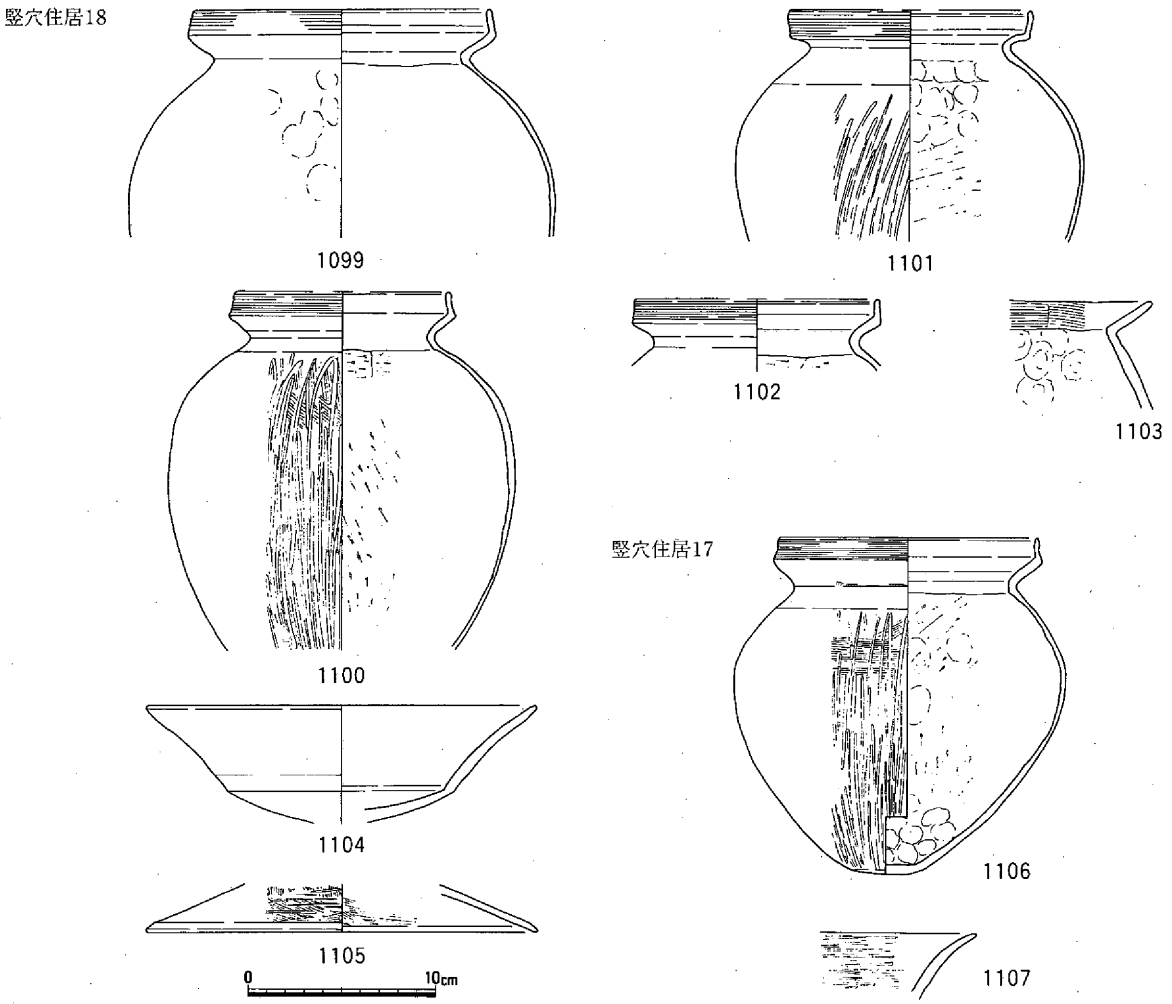
柱と柱の心々距離は165cmある。断面観察から2軒の住居が重なっていることがわかる。

遺物は甕・高杯などの土器がいくらか出土している。これから住居の時期は古墳時代初頭と言える。　（浅倉）



1　明灰黄褐色粘性微砂（竪穴住居18埋土）
2　暗灰黄褐色粘性微砂
3　淡褐灰色粘質土
4　淡灰黄褐色粘性微砂（竪穴住居17埋土）

第273図　竪穴住居17･18（1/60）



第274図　竪穴住居17・18出土遺物（1/4）

竪穴住居19（第275･276図、図版31）

中屋Ｔ区北端部で検出した方形の竪穴住居である。調査区内に80パーセントかかっているが、コーナー部分が調査できなかった。南側の壁体溝の一部、方形に一段低い床面、楕円形土壙および柱穴状小形ピットなどを検出している。いわゆるベットを持つ住居である。火災に遭っていて、とくに中央部分に焼土塊が見られた。主柱穴は図中の柱穴４と５があたると考えられる。中央の床面の海抜高は300㎝、周囲の床面のそれは310㎝を測る。壁体溝は長さ100㎝、幅15㎝、深さ５㎝を測る。

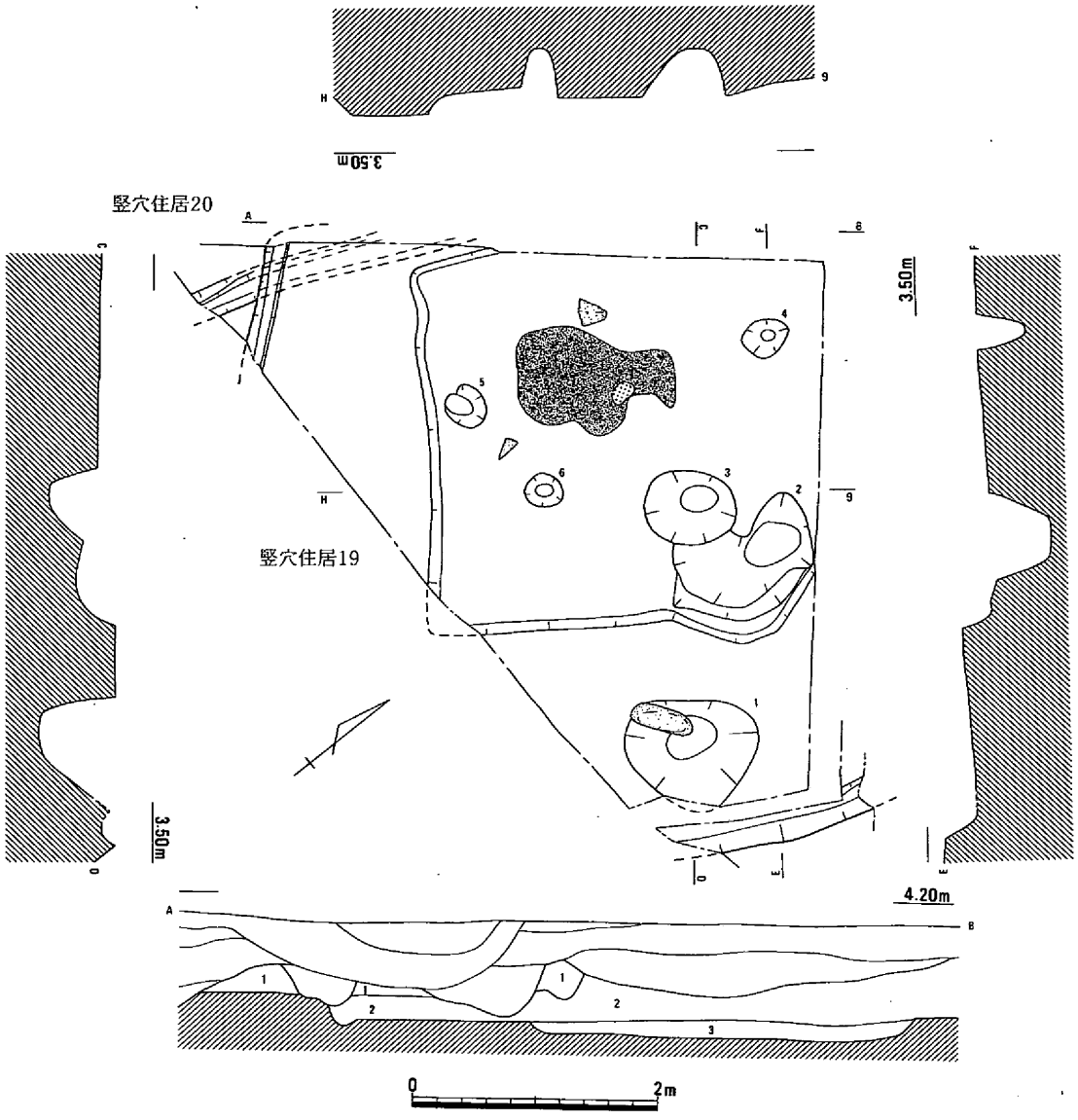
土器は多数出土しており、壺・甕・鉢・高杯などがある。**1113～1115**は二重口縁を持つ壺である。**1116～1118**は外反する口縁を有する壺である。**1119**は小型丸底壺である。**1120・1121**は浅い鉢で、砂粒を含む。**1122**は大形で二重口縁の鉢である。**1123**は異形の土器で、山陰や中国山地で出土する蒸し器と考えられる。**1124・1125**は吉備地方特有の櫛描き沈線を持つ甕である。**1126**はタタキ目を持つ甕である。**1127～1131**は小形の甕である。**1127**の甕は端部が上に伸びるが櫛描きはない。**1132～1136**は高杯である。**1132**は水漉し粘土を使用している。高杯の脚は短く、裾部には3個ないし4個の円孔を開けている。**1137・1138**は製塩土器の脚である。

以上の土器から見てこの住居の廃棄された時期は古墳時代初頭と考えられる。　（浅倉）

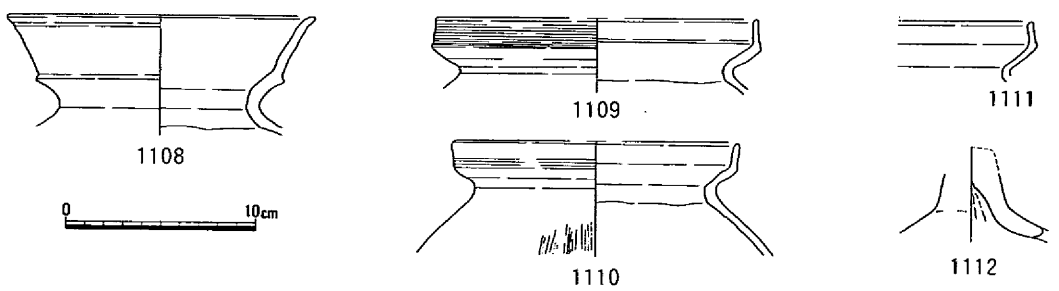
竪穴住居20（第275図、図版31）

中屋Ｔ区北端部で検出した方形と推定できる竪穴住居である。東側の壁体溝の一部を検出したのみで、調査区の西壁の土層断面観察から竪穴住居であることが確認された。

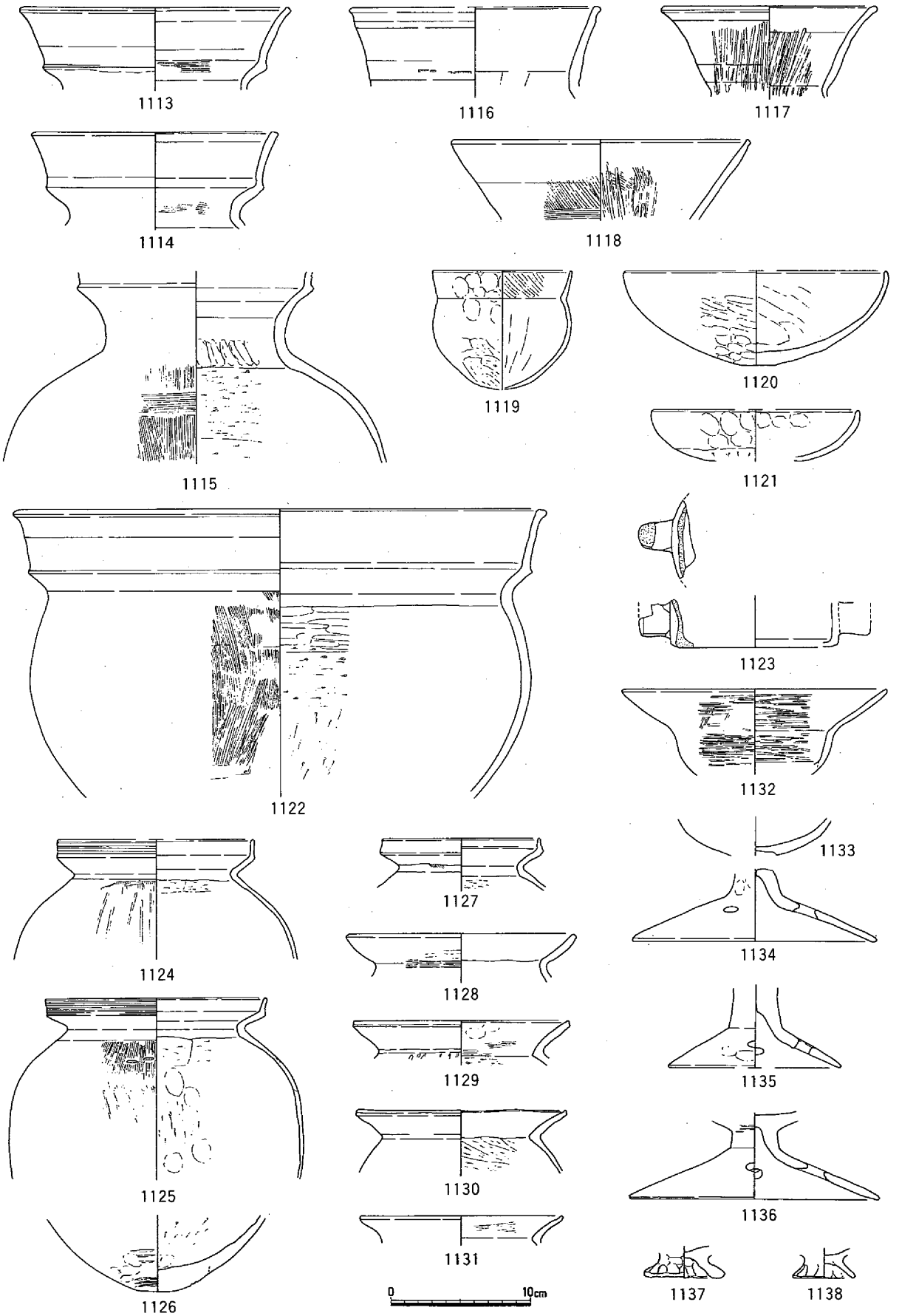
遺物は土器細片が出土している。これと切りあいから見て古墳時代前期と考えられる。　（浅倉）



1　淡灰赤褐色粘性微砂（竪穴住居20埋土）
2　灰赤褐色粘性微砂（竪穴住居19埋土）
3　明灰黄褐色粘性微砂（竪穴住居19埋土）



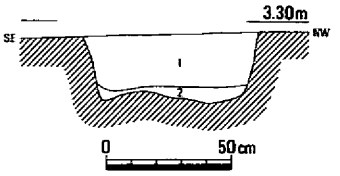
第275図　竪穴住居19，20（1/60）・竪穴住居20出土遺物（1/4）



第276図　竪穴住居19出土遺物（1/4）

溝14（第277図）

高田2区にあって、北東から南西に流れた直線的な溝である。幅が80cm、深さは48cmを測った。断面形は逆台形で、底に暗褐灰色粘性微砂の薄層がみられ、流水時に堆積したものと思われる。須恵器の出土から古墳時代後期の遺構とみられる。　（岡本）

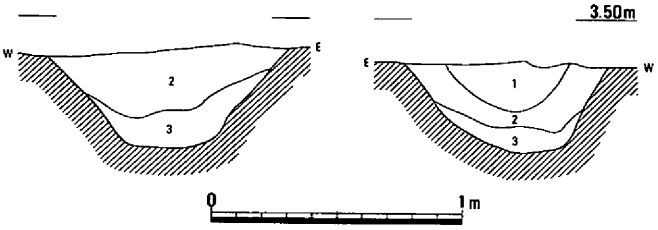


1　暗黄褐灰色粘性砂質土
2　暗褐灰色粘性微砂

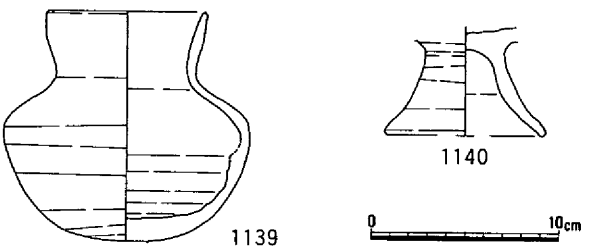
第277図　溝14（1/30）

溝15（第278図）

高田3区の中央付近で検出された。南北方向の溝で、断面形は不整な椀形を呈し、底には少し窪んだ面をもつようである。第278図の左は調査区の北壁の断面で、右は南壁の断面である。南壁では埋土が1層増えていて、溝底の高さからも南へ流れていたことが知られ、じょじょに埋没したものとみられる。出土遺物には須恵器と土師器があった。**1139**は須恵器の壺で、完形である。**1140**は須恵器の高杯の脚とみられる。これらの遺物から判断して溝15は6世紀後葉頃のものと考えられる。　（岡本）



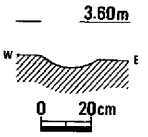
1　黄褐灰色粘性微砂　　2　褐灰色粘性微砂　　3　灰褐色粘性微砂



第278図　溝15（1/30）・出土遺物（1/4）

溝16（第279図、図版28）

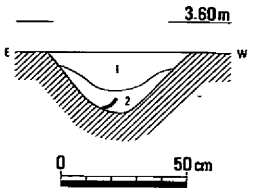
高田4区の中央部で竪穴住居5に接して検出された。竪穴住居5より古い。北から南東へゆるやかに湾曲していた。幅25cm、深さは6cmとごく浅かった。その位置や規模から後述する溝18･19と同じ性格のものと思わる。遺物はなかったが、古墳時代後期の遺構と考えられる。　（岡本）



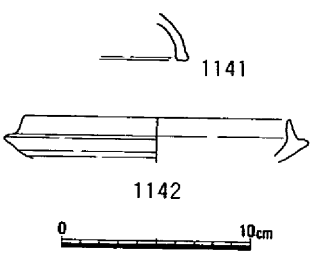
第279図　溝16（1/30）

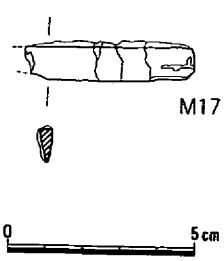
溝17（第280図、図版28）

高田4区にあり、竪穴住居5の1.5m西に位置していた。溝20に先端を切られ、そこから南では検出されなかった。南北方向の溝で底は北へ低くなっていた。幅が63cm、深さは26cmを測った。断面形はV字形に近く、埋土は2層で、上層には炭粒や焼土粒が含まれていた。出土遺物には土器の他に鉄器や鉄滓があった。**1141**･**1142**は須恵器で



1　暗褐色粘性微砂（炭･焼土混）
2　黄褐色粘性微砂斑灰褐色粘性微砂



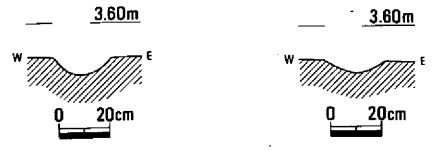


第280図　溝17（1/30）・出土遺物（1/4，1/2）

蓋と杯、M17は刀子とみられる。溝の年代は６世紀後半と考えられる。（岡本）

溝18・19（第281図、図版28）

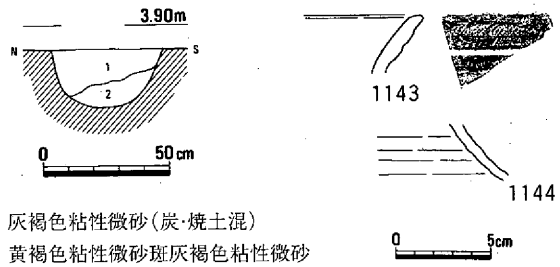
高田４区で検出された、平行に位置する２条の浅い溝状の遺構である。溝18は幅が23cm、深さは８cmあり、溝19は幅が24cm、深さは５cmにすぎなかった。二つの溝の間隔は130cmで、前述の溝16と溝18の間は240cmを測った。水田の埋没後、古墳時代後期に集落が形成される時の遺構と考えられる。（岡本）



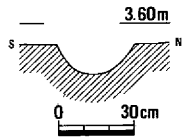
第281図　溝18（左）・19（右）（1/30）

溝20（第282図、図版28）

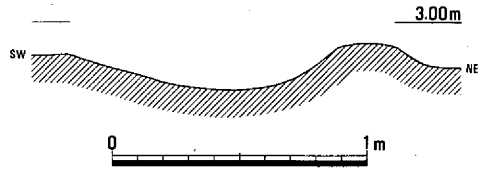
高田４区から５区にかけて検出された。竪穴住居５に近接したあたりから南へ流路を変えるようである。検出部分の西端と東端では底の高さに18cmの差があり、東へ流れていたとみられる。断面形はU字形で、埋土は２層に分



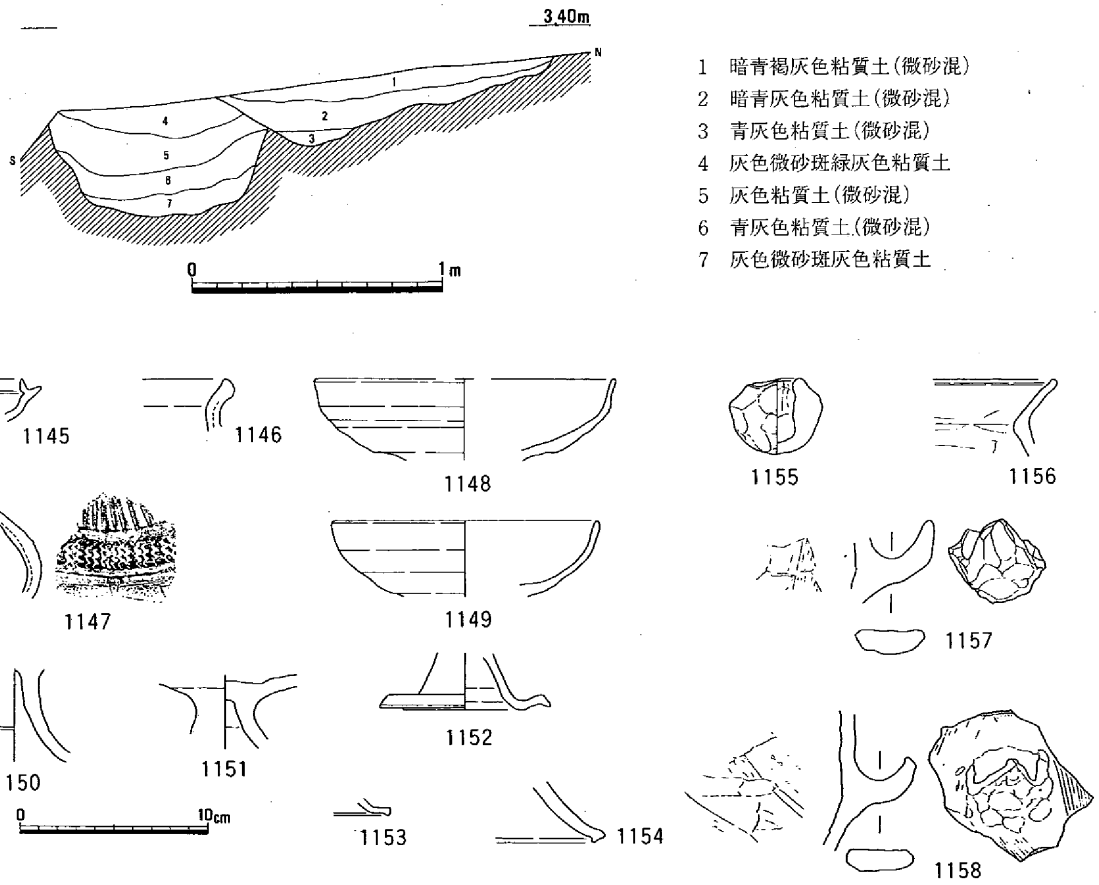
第282図　溝20（1/30）・出土遺物（1/4）



第283図　溝21（1/30）



第284図　溝24（1/30）



第285図　溝25（1/30）・出土遺物（1/4）

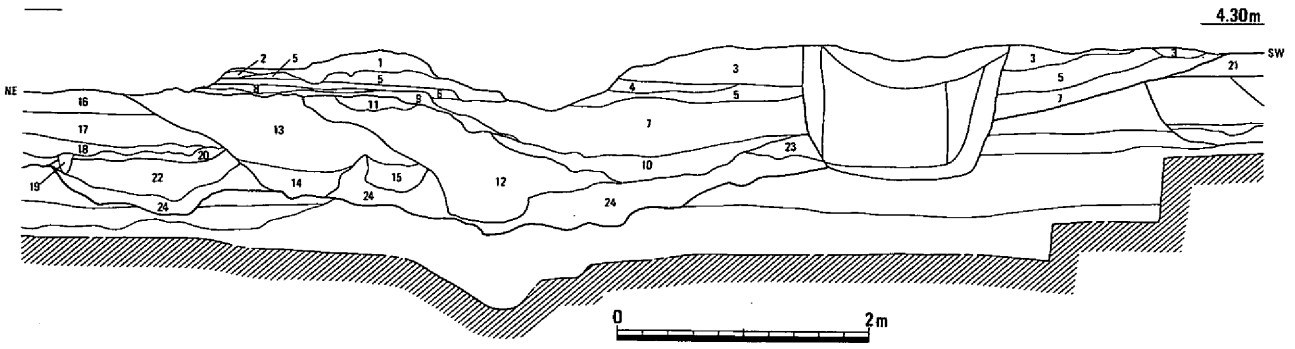
かれ、上層には炭粒や焼土粒が含まれていた。この状況は溝17とよく類似し、溝17と溝20が繋がっていた可能性もある。出土遺物には鉄滓もみられた。1143は須恵器の甕の口縁で、斜線文が認められ、1144は須恵器の高杯脚部である。6世紀後葉から7世紀前葉にかけての溝と考えられる。　(岡本)

溝21（第283図）

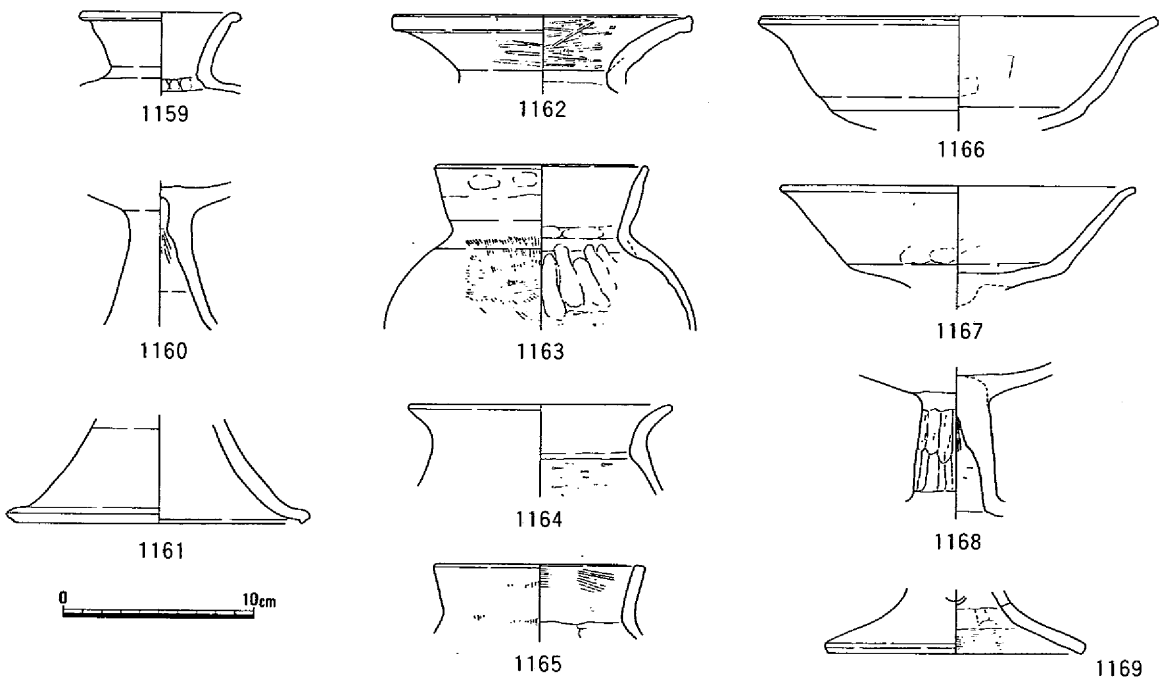
高田5区の南西角で検出したが、6区では認めなかった。東西方向の溝で、古代に降る可能性もある。幅30cm、深さ32cmを測り、調査区南壁では3層の埋土が確認された。遺物はなかった。(岡本)

溝24（第284図）

高田6区の中央部で、古墳時代前期の水田を覆う褐灰色微砂が起伏をもち、大畦状の高まりとその



1　灰色粘性微砂
2　灰白色微砂
3　淡黄褐灰色微砂
4　淡黄褐灰色微砂
5　淡灰黄褐色微砂
6　灰黄褐色微砂
7　灰褐色微砂
8　灰黄褐色微砂
9　淡灰黄褐色微砂
10　灰色粘質土(近世溝)
11　褐灰色微砂
12　褐灰色微砂(中世溝?)
13　褐灰色微砂(溝42埋土)
14　暗灰色粘質土
15　暗灰色粘性微砂
16　黄灰白色粘性微砂
17　灰黄褐色粘性微砂
18　灰黄褐色微砂
19　灰色粘性微砂
20　灰色粘性微砂斑灰黄色粘質土(溝41埋土)
21　灰褐色微砂
22　灰黄色粘質土斑灰色粘質土(溝25埋土)
23　灰色粘性微砂
24　暗緑灰色粘質土(溝26埋土)



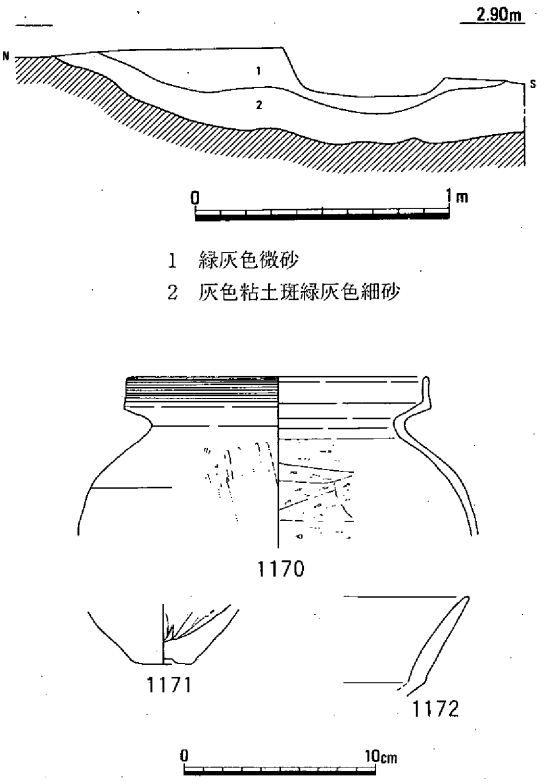
第286図　溝25，26，41，42（1/60）・溝26出土遺物(1/4)

西側に溝状の窪みを形成していた。これが溝24である。幅117cm、深さ30cmを測った。この上にさらに洪水の褐灰色砂が覆って平坦地が形成される。上部の水田施設の可能性がある。　（岡本）

溝25（第285・286図、図版31・47）

高田８区の北半で検出された。西側は後世の溝によって破壊をうけていた。発掘調査時には溝41との区別ができず、一時に掘り下げたが、第285図の土層断面図によって２条の溝の重複であることが判明し、調査区東壁の土層観察から、２条の溝は年代を異にすることも明らかとなった。溝25はほぼ直線的な溝で、幅が87cm、深さは47cmを測った。埋土は４層に分けられたが、いずれの層も粘質土と微砂が混じり合った土で、順序よく堆積していた。第286図をみると、溝26が埋没した後に掘削されている。

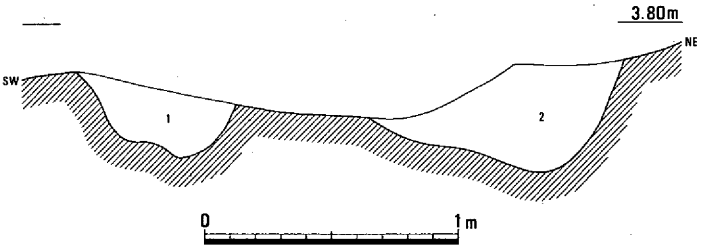
出土遺物としては土器と鉄滓があった。図示した遺物のうち、**1145～1154**は須恵器、**1155～1158**は土師器である。**1145**は杯、**1146・1147**は壺、**1148～1154**は高杯である。**1155**は手捏ねのミニチュア壺、**1156**は甕、**1157・1158**はコシキの把手である。溝25の年代は７世紀前半と考えられる。（岡本）

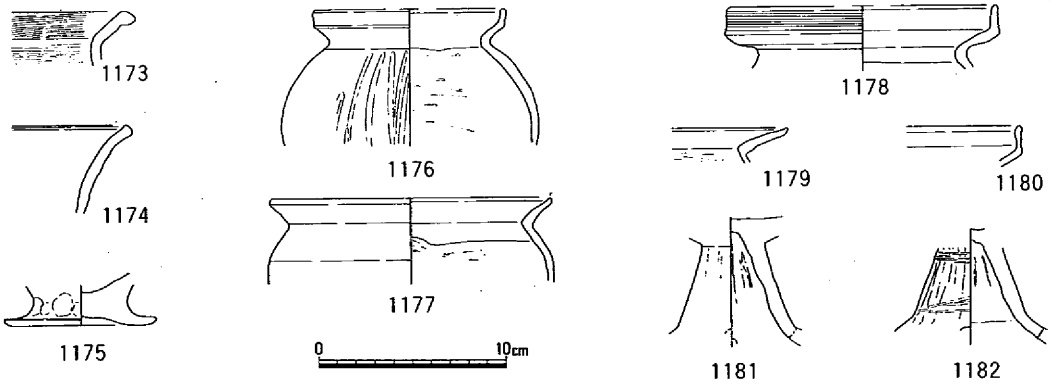


第287図　溝27（1/30）・出土遺物（1/4）

溝26（第286図、図版31）

高田8区の中央部に位置していた大形の溝である。水田があった低位部と高田９区より西の微高地との境に掘られ、これ以降、現代まで水路として継続されていく。調査区東壁の土層観察によれば、水田を洪水の砂が埋め、さらにもう１層の土層の





第288図　溝28，29（1/30）・溝29出土遺物（1/4）

堆積がみられた後に掘削されていた。竪穴住居の掘削はまだ2層の堆積を経ることとなる。溝は全体で8m程の幅をもつが、底は広狭の2条に分かれる。出土遺物として鉄滓や鞴の羽口もあった。**1159～1161**は須恵器で、**1159**が提瓶、**1160・1161**は高杯である。6世紀後半のものとみられる。**1162～1169**は土師器で、**1162・1163**が壺、**1164・1165**は甕、**1166～1169**は高杯である。土師器には古・前・Ⅲのものが多くみられ、混入がなければ、溝26の年代は5世紀から6世紀の間と考えられる。（岡本）

溝27（第287図）

高田8区の北半にあり、溝25・26の下に位置していた。微高地の裾にあたり、水田を埋めた洪水の砂によって埋没していたことから、水田に伴っていた可能性が高い。後世の破壊をうけて全形はつかめないが、検出部分で幅が250cm以上、深さは38cmを測った。出土遺物のうち、**1170・1171**は甕で、**1172**は高杯である。古・前・Ⅰ期とみられ、水田の年代と対応している。（岡本）

溝28（第288図）

中屋T区北部で検出した北北西から南南東に延びる溝で、長さ150cm、幅70cm、深さ30cmを測り、埋土は暗黄褐灰色粘性微砂である。遺物は皆無であるが、溝29と同じ時期と考えられる。（浅倉）

溝29（第288図）

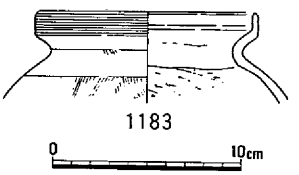
中屋T区北部で検出した北北西から南南東に伸びる溝で、溝28と平行関係にある。長さ300cm、幅100cm、深さ40cmを測り、埋土は暗黄褐灰色粘性微砂である。

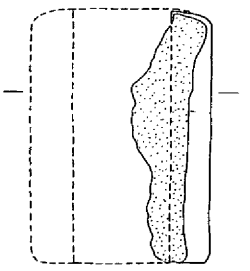
遺物は土器の細片が少量出土している。壺・甕・高杯・鉢が見られる。

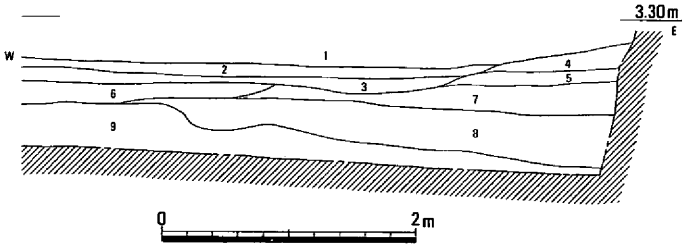
土器から考えて時期は古墳時代前期と考えられる。（浅倉）

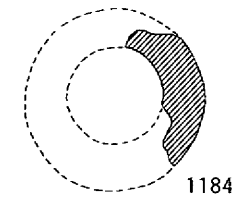
水田（第289～292図、図版32・48）

高田4区から7区にかけて水田が検出され、関連出土遺物から古墳時代前期のものと考えられる。高田5区の西半から6区の北端にかけては幅6m前後の帯状の高まりが存在していた。この高まりは東西の方向をとっていて、これを基準として水田の畦が平行ないしは直交する形で設けられていた。高田4区の北東隅で別の高まりの裾部分が検出され、高田4区から5区にかけての水田は幅12m程度の帯状をなしていたものと推定される。高田5区の高まりから南の水田については、



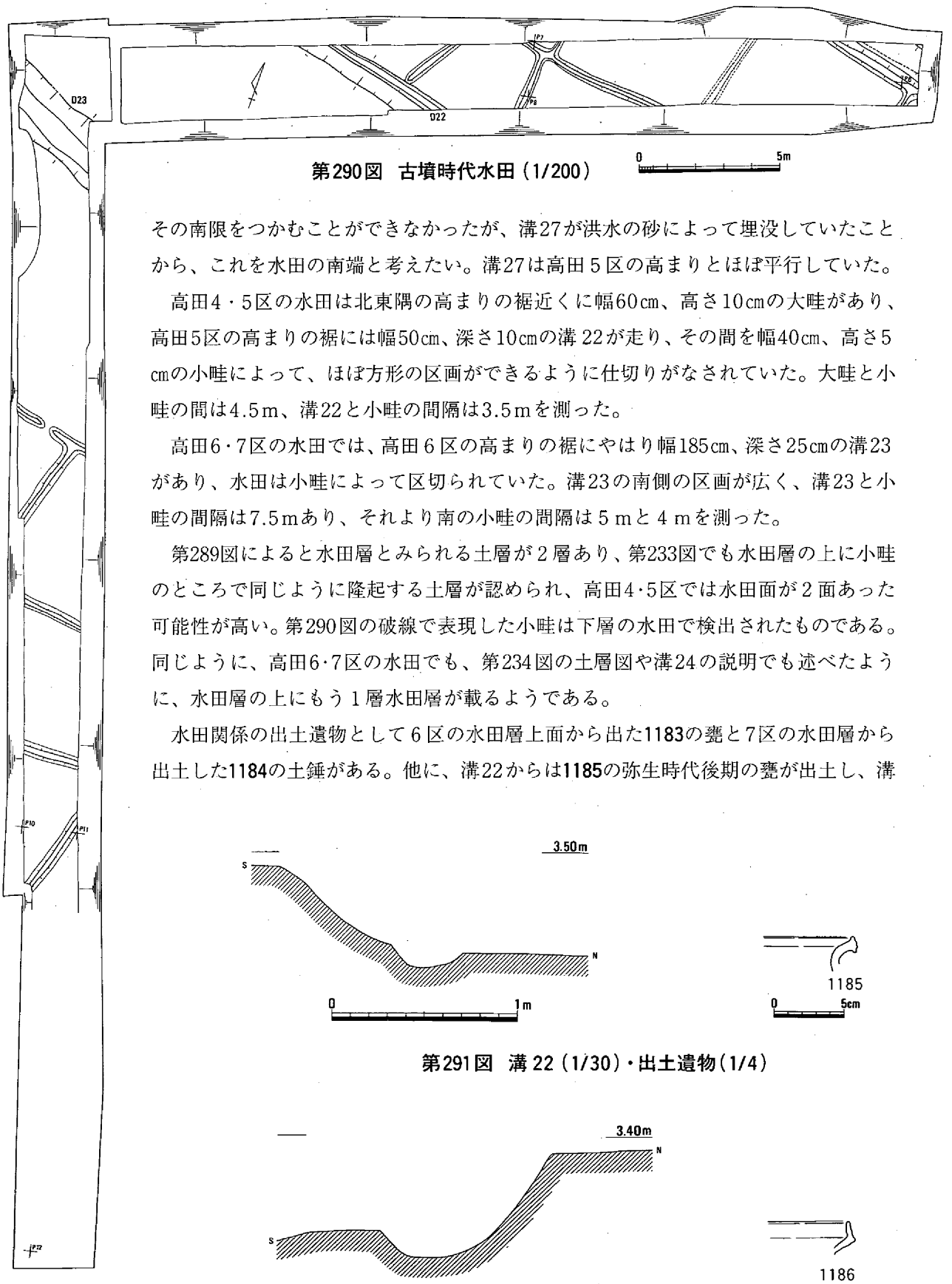






1　灰黄褐色粘性微砂（洪水砂層）
2　黄褐灰色粘性砂質土（上層水田層）
3　灰褐色粘性砂質土
4　褐色砂質土（炭粒・焼土塊点々）
5　灰褐色粘性砂質土
6　黄褐灰色粘性砂質土（下層水田層）
7　暗褐灰色粘質土（炭・焼土若干）
8　灰緑褐色粘質土（微高地基盤層）
9　灰緑褐色～淡灰色細砂（湧水層）

第289図　高田4区北壁水田土層断面（1/60）・水田関連遺物（1/4，1/2）



第290図　古墳時代水田（1/200）

その南限をつかむことができなかったが、溝27が洪水の砂によって埋没していたことから、これを水田の南端と考えたい。溝27は高田５区の高まりとほぼ平行していた。

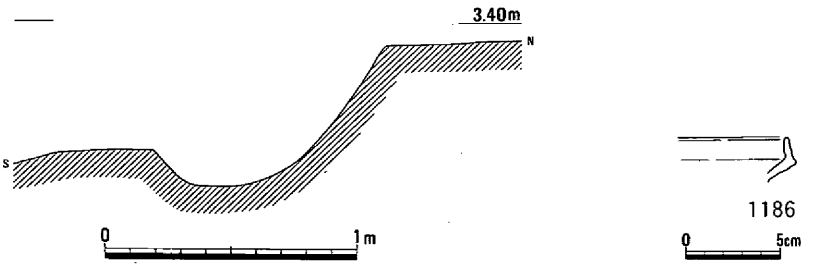
高田4・5区の水田は北東隅の高まりの裾近くに幅60cm、高さ10cmの大畦があり、高田5区の高まりの裾には幅50cm、深さ10cmの溝22が走り、その間を幅40cm、高さ5cmの小畦によって、ほぼ方形の区画ができるように仕切りがなされていた。大畦と小畦の間は4.5m、溝22と小畦の間隔は3.5mを測った。

高田6・7区の水田では、高田６区の高まりの裾にやはり幅185cm、深さ25cmの溝23があり、水田は小畦によって区切られていた。溝23の南側の区画が広く、溝23と小畦の間隔は7.5mあり、それより南の小畦の間隔は５mと４mを測った。

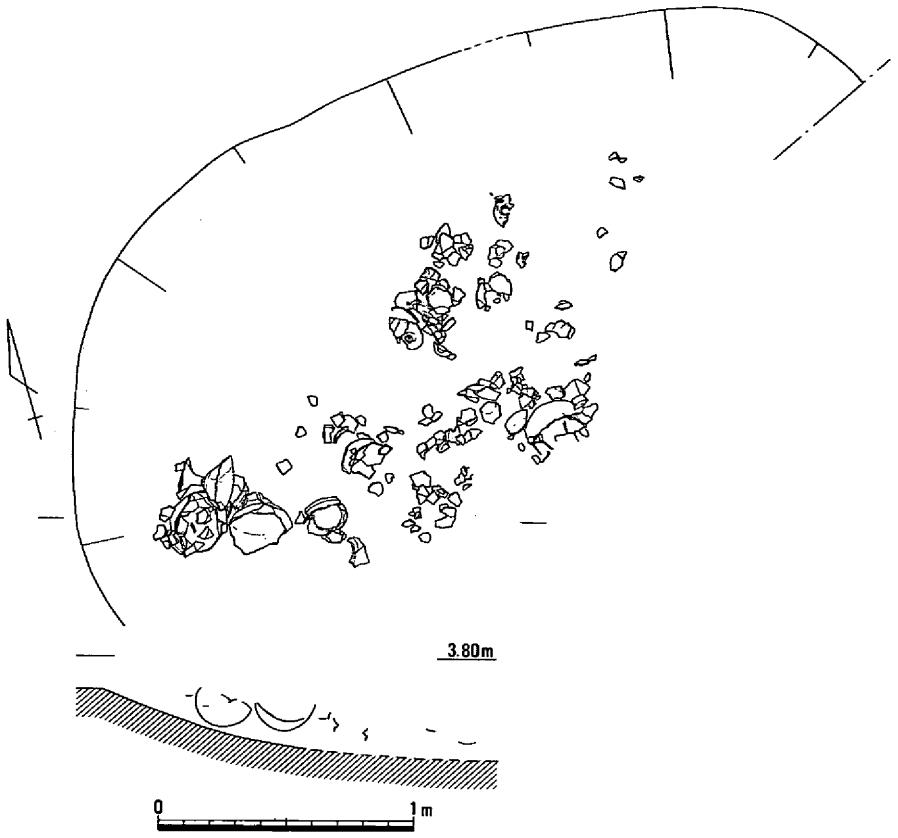
第289図によると水田層とみられる土層が２層あり、第233図でも水田層の上に小畦のところで同じように隆起する土層が認められ、高田4・5区では水田面が２面あった可能性が高い。第290図の破線で表現した小畦は下層の水田で検出されたものである。同じように、高田6・7区の水田でも、第234図の土層図や溝24の説明でも述べたように、水田層の上にもう１層水田層が載るようである。

水田関係の出土遺物として６区の水田層上面から出た**1183**の甕と７区の水田層から出土した**1184**の土錘がある。他に、溝22からは**1185**の弥生時代後期の甕が出土し、溝

第291図　溝 22（1/30）・出土遺物（1/4）



第292図　溝 23（1/30）・出土遺物（1/4）



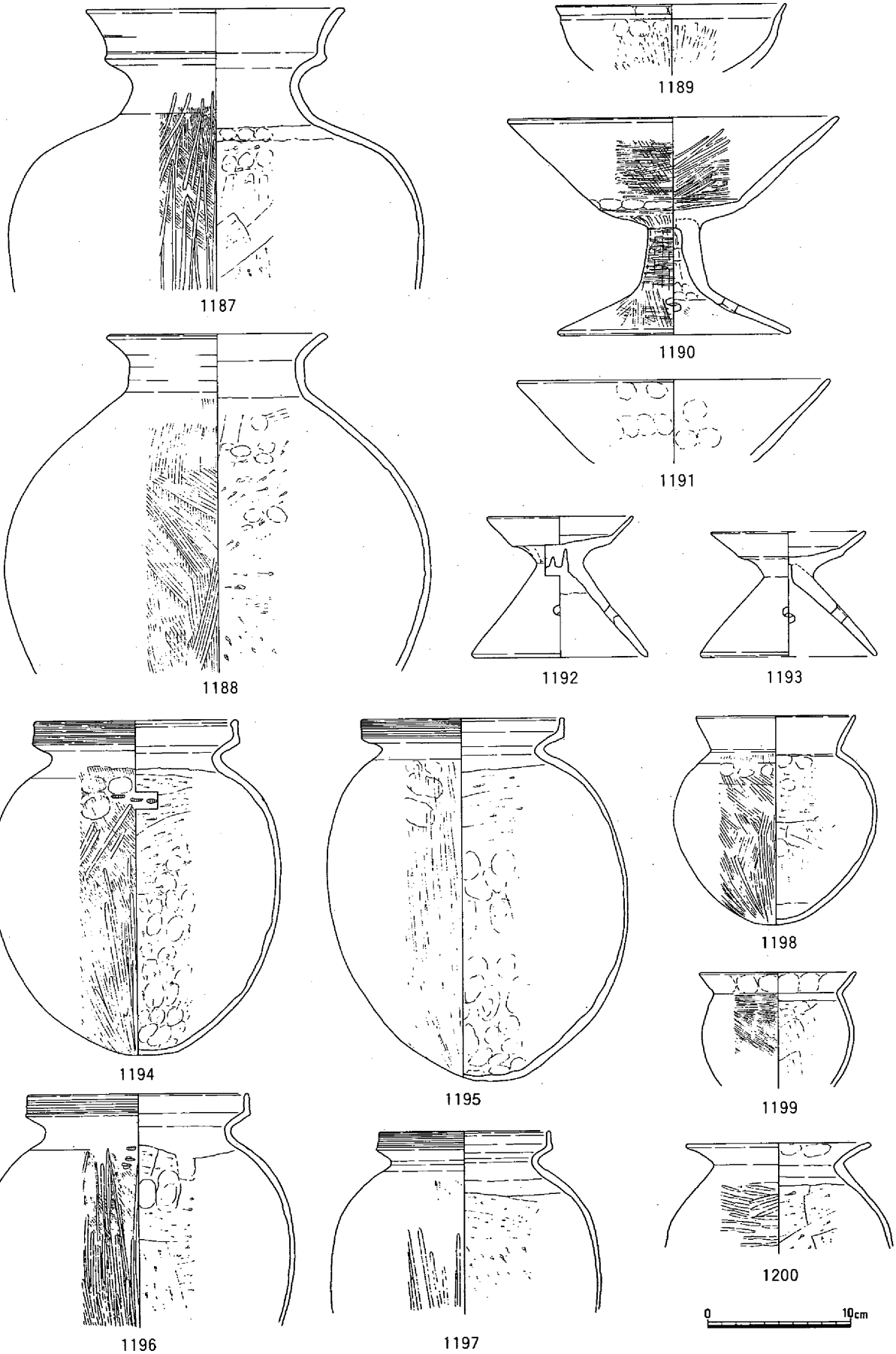
第293図　土器溜まり1（1/30）

23からは古墳時代前期の甕の口縁部が出土した。1183や1186は古·前·ⅠかⅡと考えられる。（岡本）

土器溜まり1（第293·294図、図版33·47）

中屋3区東半、調査区の南壁側に大量の土器の溜まりが検出された。土器溜まりは南壁に添って幅240cmの広がりをもち、周辺部から中心部に向かって深くなっていた。明瞭には検出されなかったが、長径3.6m、深さが35cm程度の浅い窪みの中にあり、周辺から転がり込んだ状況を呈していた。土器はいずれも破砕された状態で、完形でその場に据えられたようなものはみられなかった。この地区には弥生時代後期の大溝である溝13が存在していて、古墳時代の前期に入って埋没していた。土器溜まりの土器は古・前・Ⅰのもので、まだ溝の窪みが残っている段階で土器の投棄が行われたものと想定される。土器は周辺の集落からもたらされたものとみられるが、山陽自動車道の調査に伴って発掘された津寺遺跡では土器溜まりの周辺は水路と水田のみで、今回の調査の高田9区で検出された竪穴住居13が唯一近接した竪穴住居である。このため、この土器溜まりの性格については祭祀的な要素も無視できない。

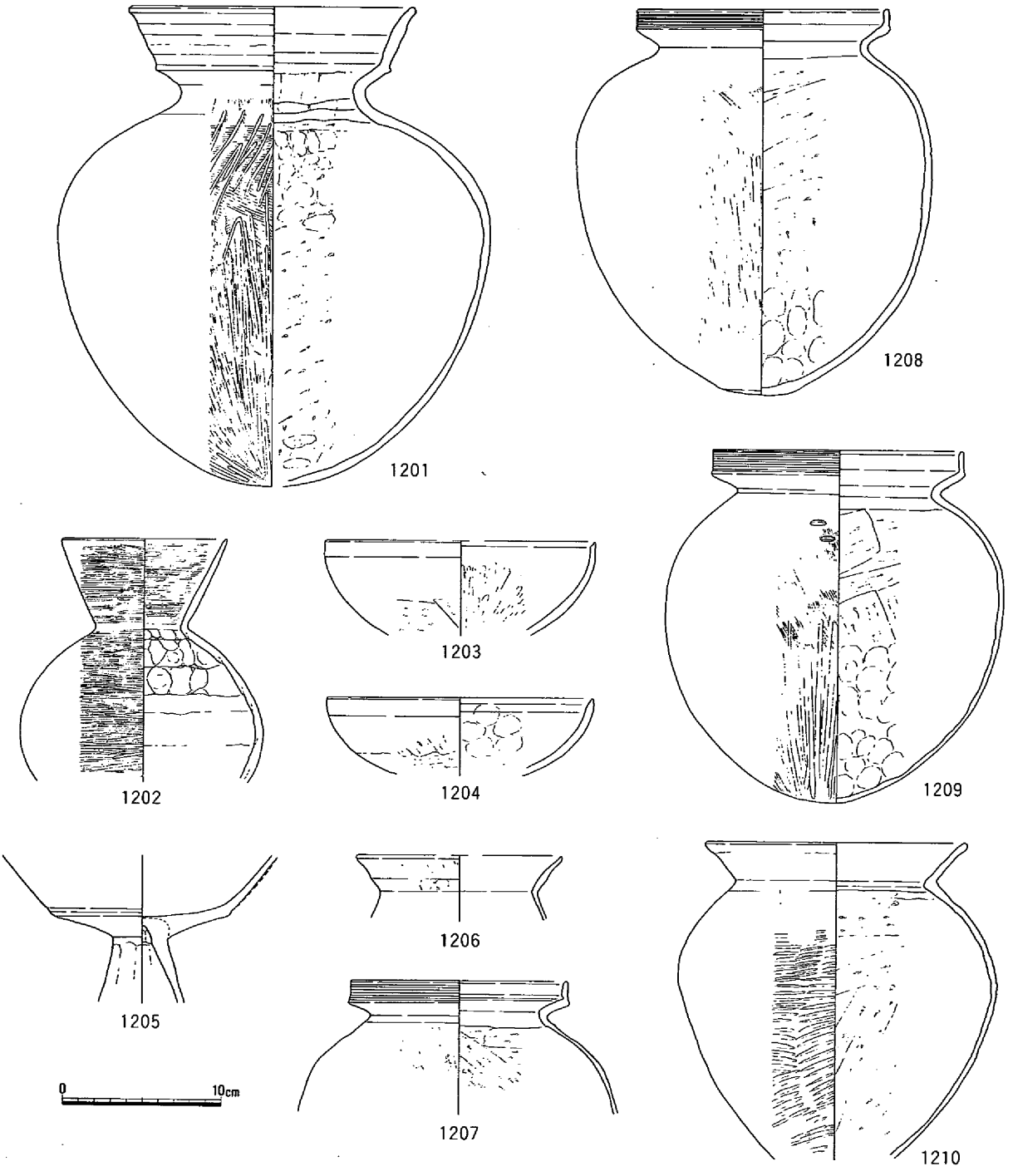
大量の土器が出土したが、復元で完形に近くなったものを中心に図示した。1187·1188は壺である。1188は直口で、口縁部の上半を外反させていた。1189は鉢である。口縁部と体部の間に軽い段がある。1190·1191は高杯である。1192·1193は器台で、杯の底部に小さな穿孔があるが、貫通はしていない。1194～1200は甕である。甕には二重口縁のものと直口のものがみられる。1194·1196の肩部外面には刺突文が3個、横位あるいは縦位に施されている。1200には外面にタタキ目が残されている。これらの土器はいずれも古・前・Ⅰのものと考えられる。（岡本）



第294図　土器溜まり１出土遺物（1/4）

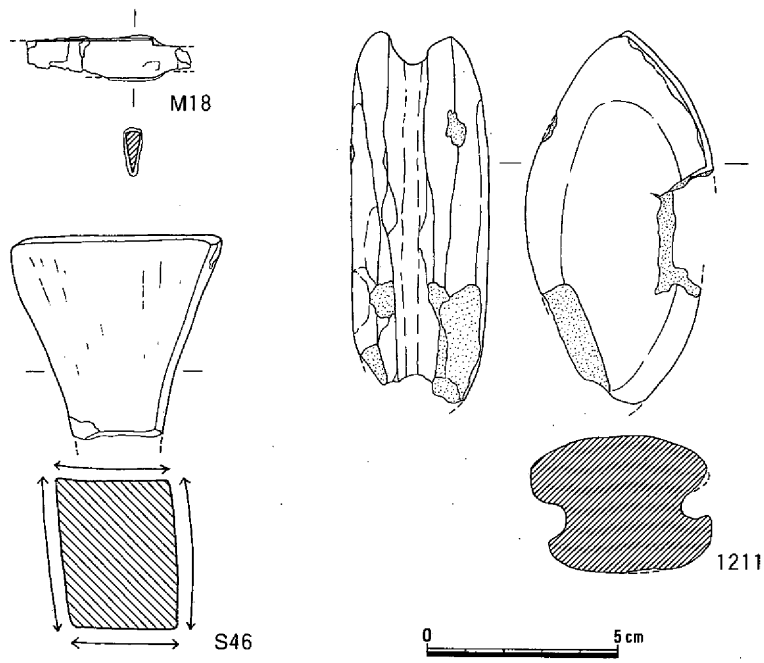
土器溜まり２（第295図、図版33・図版47）

中屋３区の中央部、土器溜まり１の2.5ｍ南西でもう１カ所土器の集中がみられた。この部分も溝13の肩部の上部にあたっていたが、土器溜まり１にみられたような土器群の傾斜はみられず、長径が125㎝、幅が70㎝の範囲に収まっていた。精査を行ったが、周辺には土壙のようなものは確認できず、土層断面の観察でも堆積土中に散乱した状態であった。土器片の他に河原石がわずかに含まれていた。土器片には大形のものが多く、とくに西半では完形に近かった土器が後世の削平によって上部を削り取られたような状態で、直立したり、横倒しになったものが並んでいた。土器の表面には風化の跡は



第295図　土器溜まり２出土遺物（1/4）

みられず、すぐに埋まったものと思われるため、土壙を見落としたか、地面に並べてすぐに土をかけたかのどちらかかとみられる。しかし、土盛りの痕跡も確認できなかった。土器溜まり２の状況は、土器溜まり１と比べて、より祭祀的な色彩が濃い。



第296図　津寺遺跡出土古墳時代遺物（1/2）

図示した出土遺物のうち、**1201・1202**は壺、**1203・1204**は鉢、**1205**は高杯、**1206～1210**は甕である。**1203・1204**の底部にはヘラケズリがなされている。**1206**の口縁端部はつまみ上げられ、**1208**の底部にはわずかに平底の痕跡が残る。**1210**の甕は胴部の外面にタタキ目が残され、「く」の字状の口縁の先端は少し厚くなっていた。これらの遺物の年代も古・前・Ⅰ期と考えられ、土器溜まり１と近接した時期に形成されたとみられる。（岡本）

その他の遺物（第296図、図版48）

古墳時代に属するとみられる鉄製刀子・砥石・土錘が出土しているので紹介する。

M18は身部の断面形が三角形を呈し、刀子とみられる。茎と刃先を欠失していて、残存長が43㎜、身幅は12㎜、背の厚さは５㎜を測る。背側に段状の関をもち、刃側は斜めになっている。中屋１Ａ区の包含層中から出土した。

S46は砥石で流紋岩製である。断面形は方形で、４面すべてを使用し、よく磨り減っている。中屋３区の古代の柱穴から出土し、古代のものである可能性もある。

1211は土錘である。全長100㎜、幅48㎜、厚さ36㎜の長楕円形で、側面に幅12㎜の溝を巡らせている。重量は141.1gを測った。中屋２区の古墳時代の包含層から出土した。（岡本）

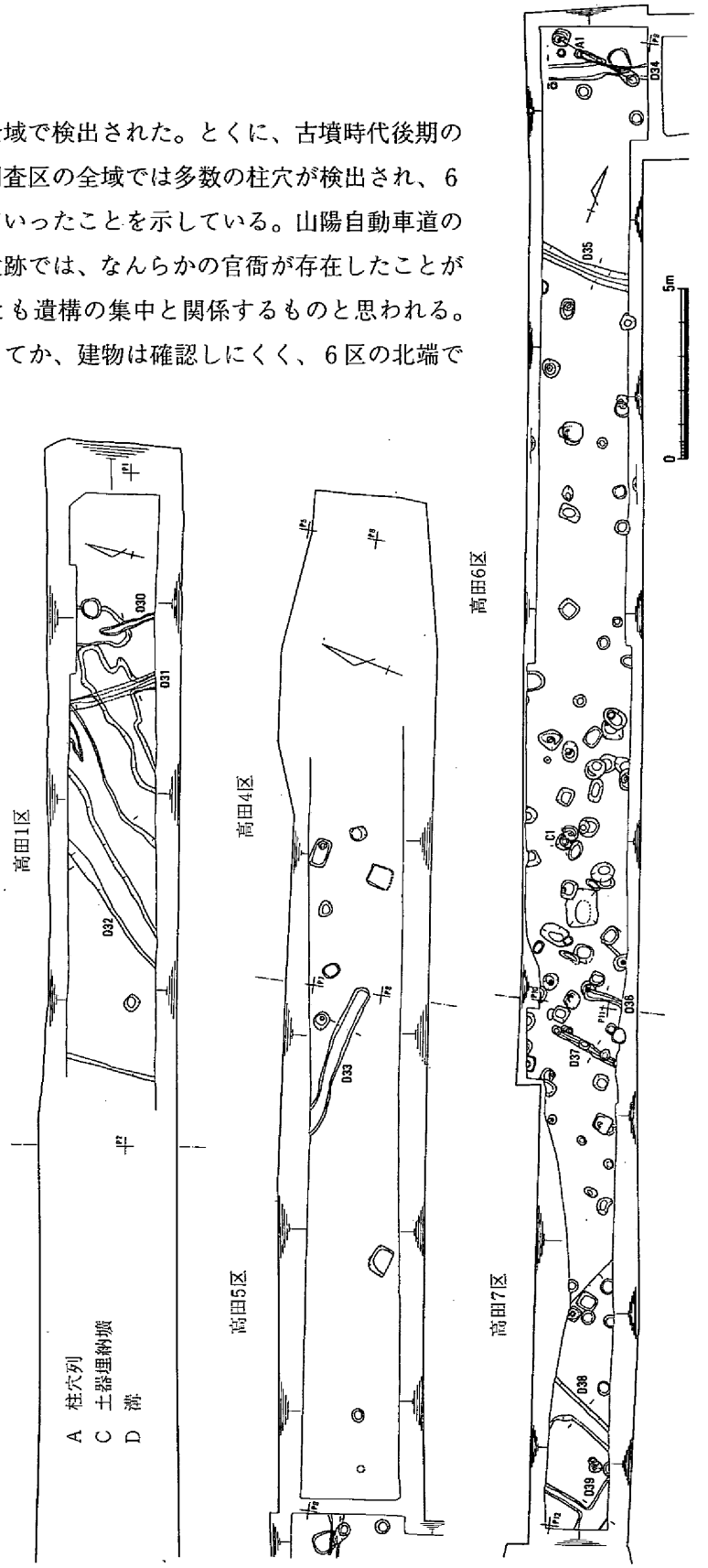
第4節　古代の遺構と遺物

1　遺構配置

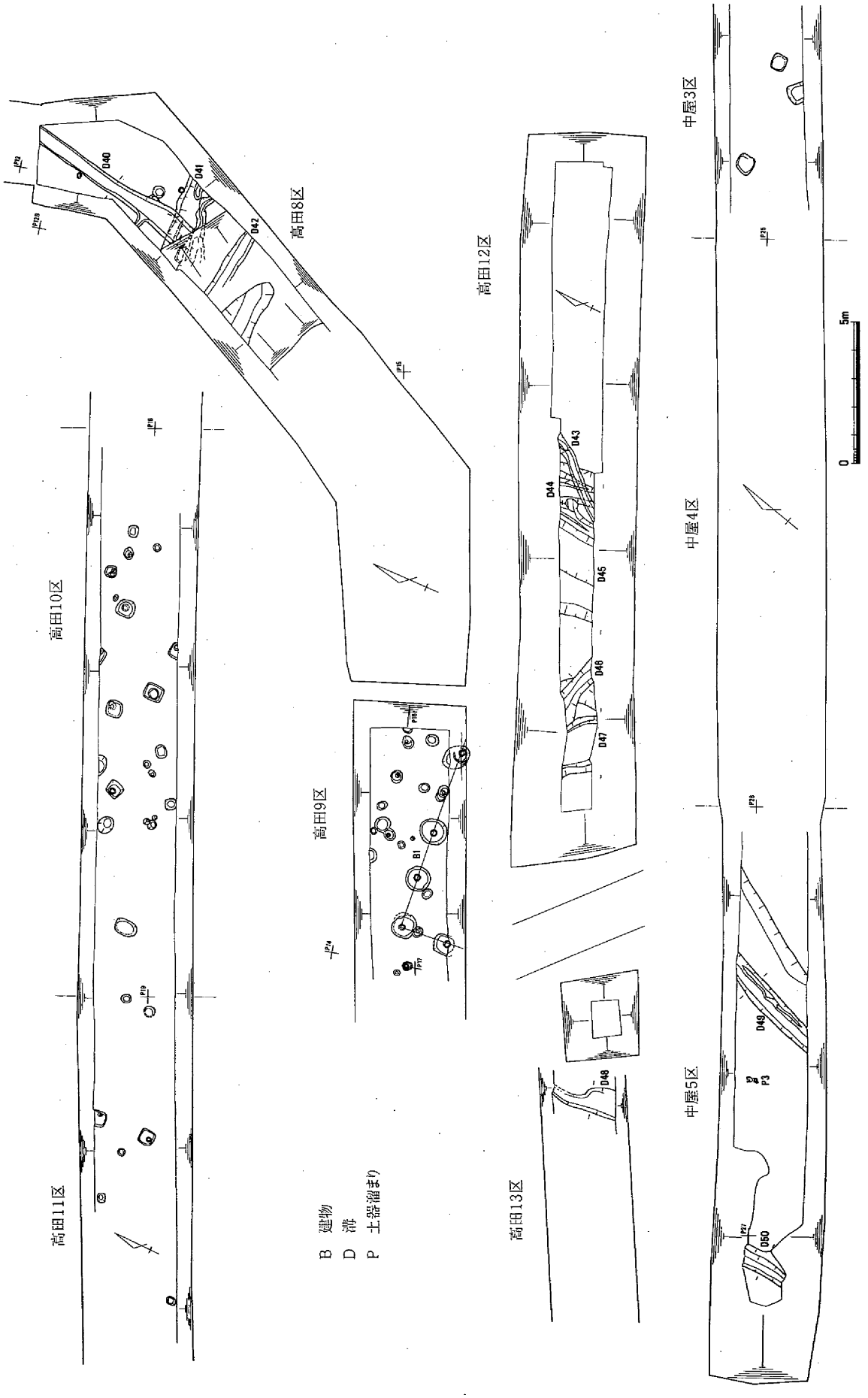
古代の遺構は調査区のほぼ全域で検出された。とくに、古墳時代後期の竪穴住居が集中していた高田調査区の全域では多数の柱穴が検出され、6世紀後半以降、集落が発展していったことを示している。山陽自動車道の発掘調査の結果、古代の津寺遺跡では、なんらかの官衙が存在したことが明らかになっている。このことも遺構の集中と関係するものと思われる。ただ、調査区が狭いせいもあってか、建物は確認しにくく、6区の北端で柱穴列を1列、9区で建物を1棟認めたにすぎなかった。柱穴は中屋3区でも少し検出され、この地区にも建物の存在したことが推定される。

高田6区で土器埋納壙が1基検出された。検出地点のすぐ東の山陽自動車道の調査でも胞衣壺とみられる土器埋納壙が出土していて、付近に想定される建物に居住していた人々の性格をしのばせる。

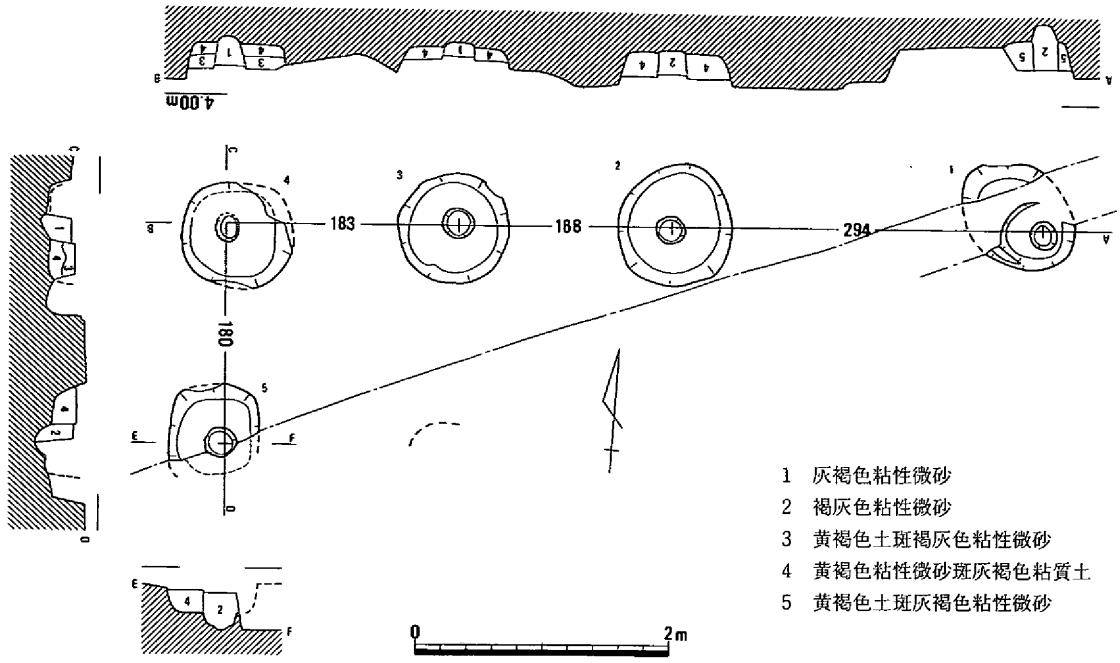
古代の溝は柱穴群のある微高地をはずれた低位部に集中する傾向があり、高田1区で3条、高田7区から8区にかけて5条、高田12区・13区で6条が検出された。中屋5区でも微高地のはずれで2条の溝を確認した。なお、中屋T区では足守川へ向かって古代の下がりを検出している。ほかに高田5区から7区にかけて5条の溝を検出したが、柱穴との位置関係から、その一部は柱穴群内の建物に伴うようである。　　（岡本）



第297図　津寺遺跡古代遺構配置図(1)(1/200)



第298図　津寺遺跡古代遺構配置図(2)(1/200)



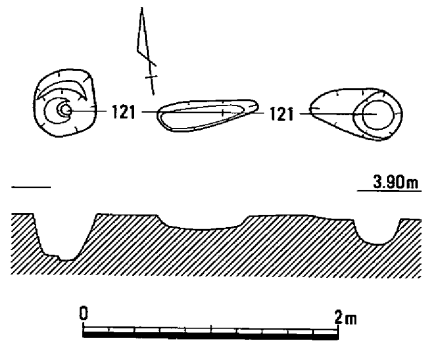
第299図　建物１（1/60）

2　遺構・遺物

建物１（第299図、図版33）

高田９区の東端で一部を検出した。東西方向に４個の大形柱穴が列び、西端の柱穴の南にもう１個柱穴を検出した。さらに、この柱穴の東にも柱穴が１個存在することが、調査区の南壁の観察から明らかとなり、大形の建物が１棟存在したことが確認された。最後の柱穴の存在といずれの柱穴も同規模であることから、建物は総柱の様式であったことが推定される。不整な円形の柱穴が多かったが、柱穴４・５は隅丸方形に近かった。柱穴の長径は90～100cmで、どの柱穴にも直径25cm程度の柱のめり込みが確認された。柱穴の埋土はほとんどが１層だった。柱間は揃わず、北柱列では183・168・294cm、柱穴４と５の間は180cmであった。北柱列の方位は磁北から86°東を測った。

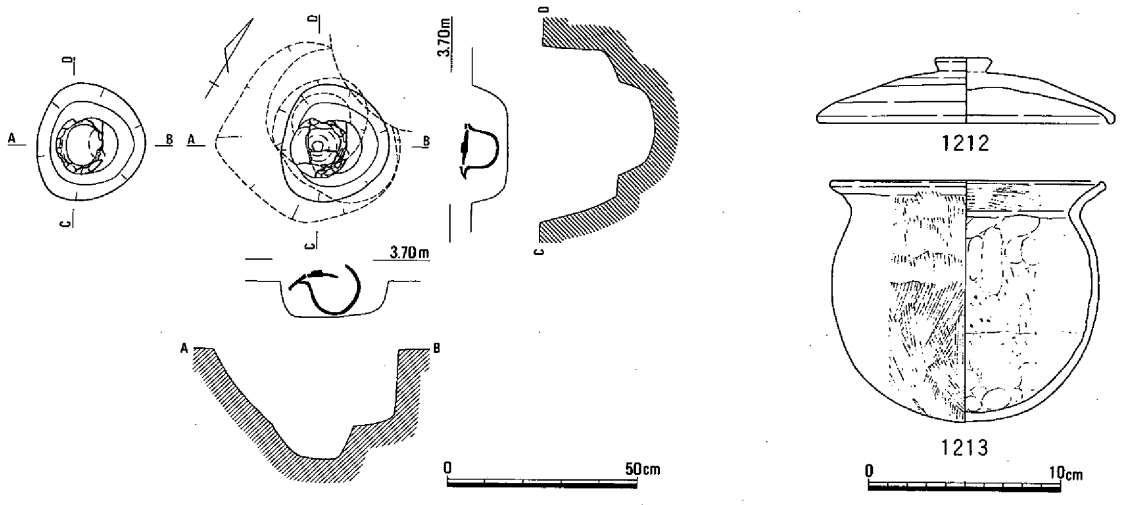
建物の年代を決定するような遺物は出土しなかったが、山陽自動車道の調査で隣接地から並ぶような形で建物（建物11）が検出されていて、その年代観から奈良時代のものと考えたい。　（岡本）



第300図　柱穴列１（1/60）

柱穴列１（第300図）

高田６区の北端で検出された。２個の柱穴とその間に細長い穴が見つかり、線状の配置を思わせた。軸線の方向は磁北から83°西を測る。南にほぼ平行して近接する溝35とともに、柱穴群から想定される建物の方向を考える手がかりになると思われる。西側の柱穴は方形に近く、長軸の長さは51cm、深さは39cm。東側の柱穴は一段深い円形部分が長径38cm、深さは22cmを測った。中央の穴は長径が79cm、深さは12cmと浅かった。２個の柱穴の距離は242cmで、中央の穴は中点から西寄りにあった。　（岡本）



第301図　土器埋納壙１(1/20)・出土遺物(1/4)

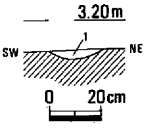
土器埋納壙１（第301図、巻頭図版２）

高田６区の南半に位置し、柱穴群の一角から検出された。小形の土師器の甕に、須恵器の蓋をのせた一組の土器が、平面形が不整な楕円形の土壙に埋納された状態で出土した。土壙は長径31cm、短径28cm、深さ10cmを測り、埋土は褐灰色粘性微砂であった。甕の中は灰色の粘質土が詰まっていたが、遺物は含まれていなかった。さらに調査を進めていくと、この土壙の直下から長径が48cmで、直径26cmの柱痕をもった柱穴が検出された。検出面は低いが、この柱穴はもともと土器埋納壙の検出面から掘られていたと考えられるため、土器埋納壙は柱穴の中に設けられたものと判断される。この事実から、この土器埋納壙は地鎮の目的を持っていたのではないかとみられる。

1212の須恵器の蓋は口径154㎜、器高35㎜で、円盤状のつまみをもち、口縁端部を摘み出している。**1213**の土師器の甕は口径142㎜、器高128㎜を測る。８世紀後半のものと考えられる。（岡本）

溝30（第302図）

高田１区で検出された溝状の窪みである。幅が27cm、深さは４cmと浅い。溝31と平行し、耕作に伴う遺構かと考えられる。遺物は出土しなかったが、土層関係から古代と考えられる。（岡本）

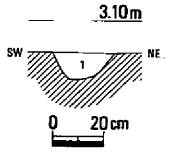


1　暗褐色粘性微砂

第302図　溝 30 (1/30)

溝31（第303図）

高田１区にあり、溝30の西1.5ｍに検出された。幅が30cm、深さは14cmでわずかに湾曲していた。調査区南壁の土層断面の観察から、溝30と同時に存在していたとみられる。古代以前とみられる土師器片が出土した。（岡本）

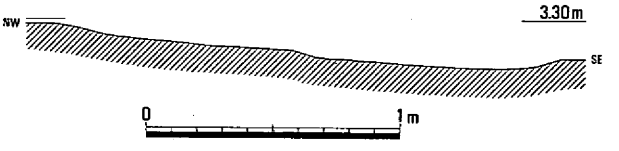


1　灰褐色粘質土(微砂混)

第303図　溝 31 (1/30)

溝32（第304図）

高田１区の中央部で検出された。北東から南西の方向をとる。溝の幅は断面図の部分で198cmと広いが、深さは15cmと浅かった。調査区南壁の土層では微高地からの緩斜面の裾に位置し、以東は平坦面が続く。耕作地を区

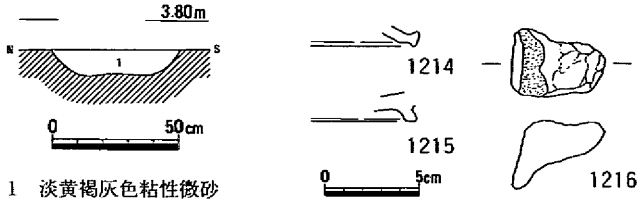


第304図　溝 32 (1/30)

画する溝と考えたい。出土遺物に黒色土器片と鉄滓があった。　（岡本）

溝33（第305図）

高田5区の東端にあり、東から西へ流れていたようである。検出部分は直線的で、西端で北へ湾曲するようであった。溝の幅は52cm、深さは10cmを測った。溝の方向は後述する溝35に近く、近接して柱穴が存在することから、柱穴群に伴う可能性がある。出土遺物の**1214**は須恵器の高杯脚端、**1215**は土師器の杯の高台部、**1216**は土師器の把手である。溝の年代は、遺物や柱穴群との関係から奈良時代と考えたい。　（岡本）

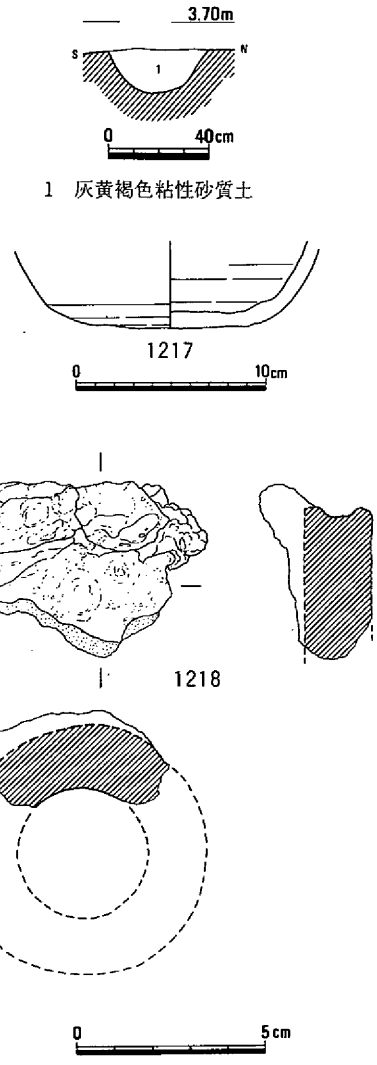


1　淡黄褐灰色粘性微砂

第305図　溝33（1/30）・出土遺物（1/4）

溝34（第306図、図版48）

高田6区の北端で検出されたが、高田5区では確認できなかった。溝の方向は北東から南西であり、周辺の古代の溝とは異なる。むしろ古墳時代の溝20に近く、その延長上に位置している。重複している柱穴列1よりも古いが、奈良時代らしい土器片が出土したことから古代としておく。幅50cm、深さ19cmであった。断面形は椀形をなす。**1217**は須恵器の壺の底部、**1218**は鞴の羽口片である。　（岡本）



1　灰黄褐色粘性砂質土

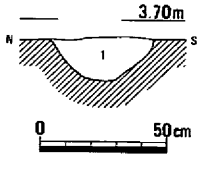
第306図　溝34（1/30）・出土遺物（1/4,1/2）

溝35（第307図、図版25）

高田6区の北半にあり、東西方向をとる。60cm離れて2個の柱穴が溝35と平行するように列び、建物との関係が考慮される。溝は幅が50cmで、深さは17cm、断面形は椀形であった。溝の方向は磁北から87°東を測る。瓦や丹塗りの土師器が出土し、9世紀以前の溝と考えられる。（岡本）

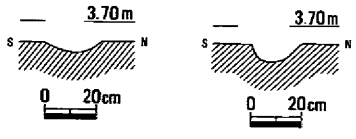
溝36・37（第308図）

高田6区と7区の境で検出された平行する2条の浅い溝である。溝36は幅20～30cm、深さ9cm、溝37は幅が20～25cm、深さは5cmを測った。その方向から判断すると、柱穴群から想定される建物に伴う可能性が高く、どちらの溝か

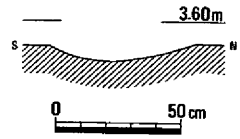


1　黄褐灰色砂質土

第307図　溝35（1/30）



第308図　溝36（左）・溝37（右）（1/30）

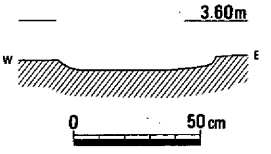


第309図　溝38（1/30）

らも奈良時代とみられる遺物が出土した。その規模からすると、雨落ち溝のようなものが考えられる。溝37はみぞの中に長径30cm前後の柱穴が並び、中央にあることから、溝に付属するかもしれない。（岡本）

溝38（第309図、図版34）

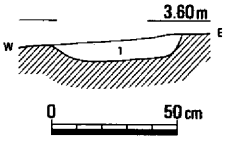
高田７区の南端で検出された。高田７区は中央よりやや南から落ち込みが始まり、15～20cm低い平坦面が南に形成されていた。溝28はこの面で検出され、その方向は落ち込みの肩部の線と直交していた。溝は調査区の西端で枝分かれするようである。幅が55cm、深さは７cmにすぎない。竪穴住居の埋土を削った層の下面にあたる。（岡本）



第310図　溝39(1/30)

溝39（第310図、図版34）

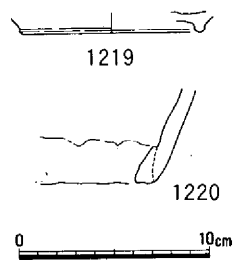
溝38のすぐ南にあり、溝38と繋がる可能性が高い。溝38と平行する方向で西へ幅25cmの枝を出していた。南北方向の溝本体は幅が62cm、深さは５cmであった。溝38と一体になり、格子目状の溝群を形成していた可能性もあり、耕作に関係した遺構と考えられる。（岡本）



1　暗灰褐色砂質土

溝40（第311図）

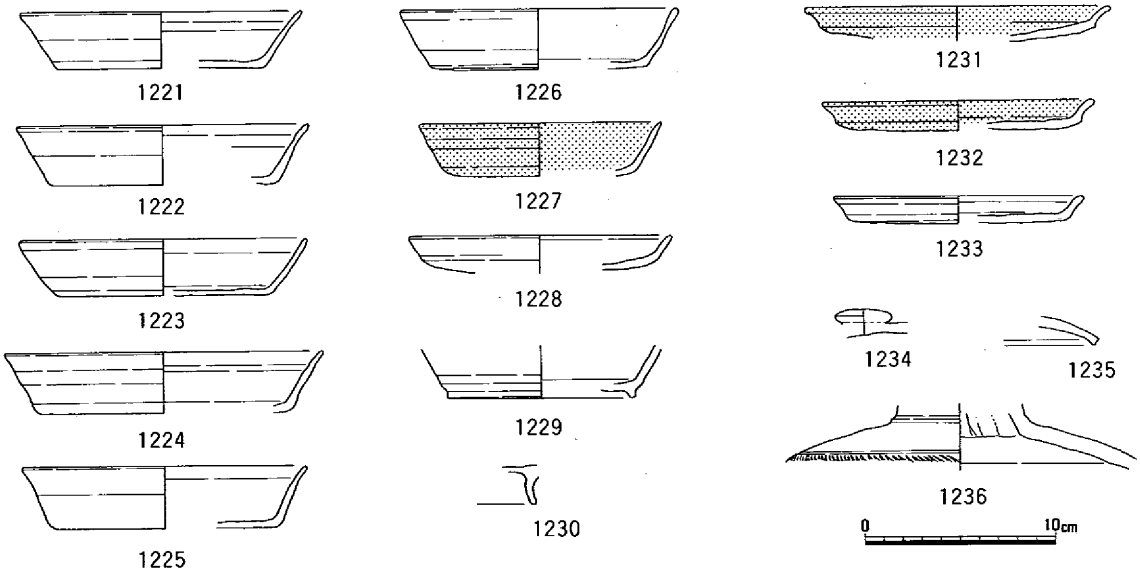
高田８区の北端で検出された。その方向は溝39と平行し、溝の底の高度も等しい。溝39の延長部分である可能性が強いが、溝の中心が30cm程東へ寄っていた。溝の底は南に向かって下がっていた。溝の幅は52～98cm、深さは11cmを測った。検出部分の北端から4.5m南で西へ幅20cmの枝を出していた。出土遺物には丹塗りの土師器片や鉄滓がみられた。**1219**は須恵器の杯、**1220**は土師器のコシキである。奈良時代の溝であろう。（岡本）



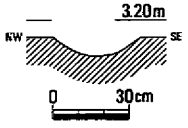
第311図　溝40(1/30)
・出土遺物(1/4)

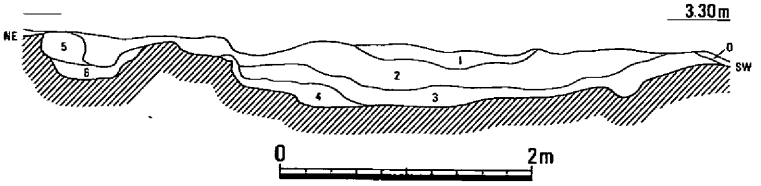
溝41（第285・286図、図版31）

高田8区の北半にあった。古墳時代後期の溝25とほぼ同じ方向で重複し、溝の中心は溝25をはずれて北側にあった。幅が134cm、深さは34cmを測った。溝底の形状は複雑で、検出部分の西端が一段落



第312図　溝42出土遺物(1/4)

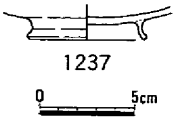




第313図　溝43 (1/30)

ち込んでいた。その部分の深さは70cmもあった。奈良時代とみられる遺物が出土している。　(岡本)

0　灰緑色粘質土(溝46埋土)
1　灰白色微砂
2　明褐灰色微砂
3　明褐色微砂(溝45埋土)
4　暗黄褐色砂質土
5　暗青灰色微砂(溝44埋土)
6　淡灰白色粘質土



第314図　溝44 (左)，溝45(右)(1/60)・溝45出土遺物 (1/4)

溝42　(第286・312図)

高田8区の中央部にあって、中世の大溝と重複していた。発掘時には両者を分離することができず、一度に掘り下げ、その底で方向の異なる一段深い溝を検出し、調査区東壁の土層観察から溝42を確認した。溝の底は平行する2条の溝状の落ち込みとなっていて、幅は58cmと90cmであった。この溝は、前述の溝41が埋没し、その上に2枚の堆積層が形成された段階で掘削され、深さは104cmであった。

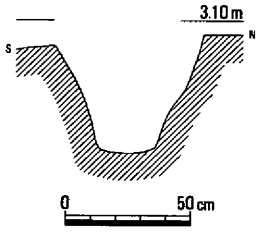
図示した出土遺物のうち、1221～1233は土師器、1234～1236は須恵器である。1221～1227・1229・1230は杯で、1228・1231～1233は皿、1234・1235は蓋。1236は長頸瓶である。トーンをかけた土器以外にも1221・1222・1224・1225の内外面には褐色の塗彩が認められ、丹塗りの可能性がある。1221～1226の杯は同型・同工で、底部外面はヘラ切りの後、平滑に調整するようである。1231～1233の底部外面では、周辺部にはヘラ切り痕跡を認めるが、中央部分には数多くの指頭圧痕が残されていた。これらの杯や皿は9世紀の後半と考えられ、先の溝41との時間差を示すものとみられる。　(岡本)

溝43　(第313図)

高田12区の中央部で検出された。北東から南西の方向をとり、溝44より新しい。溝の幅は40cm、深さは10cmと浅い。中世の包含層が堆積した大きな落ち込みの底で検出された。　(岡本)

溝44・45　(第314図、図版34)

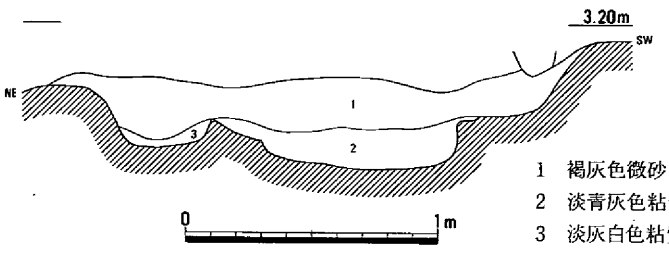
高田12区の中央部に位置していた。幅380cm、深さ50cmの大溝45と幅109cm、深さ38cmの溝44が2条平行し、南北の方向をとっていた。調査区南壁の土層断面を検討すると、2条の溝は同時に存在していたようで、同じ埋土の堆積が認められた。1237は溝45の上面から出土した。土師器の椀で、平安時代後半と考えられる。　(岡本)



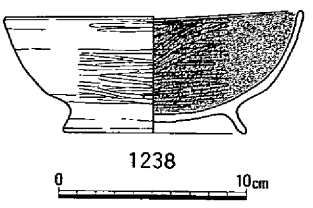
第315図　溝46 (1/30)

溝46　(第315図)

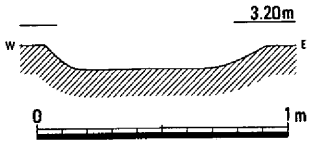
高田12区の西端で検出された。溝47と重複し、溝46が新しい。溝の方



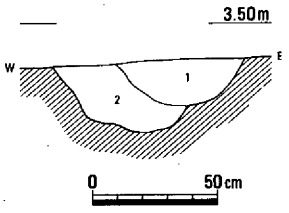
1　褐灰色微砂
2　淡青灰色粘質土
3　淡灰白色粘質土



第316図　溝47 (1/30)・出土遺物 (1/4)

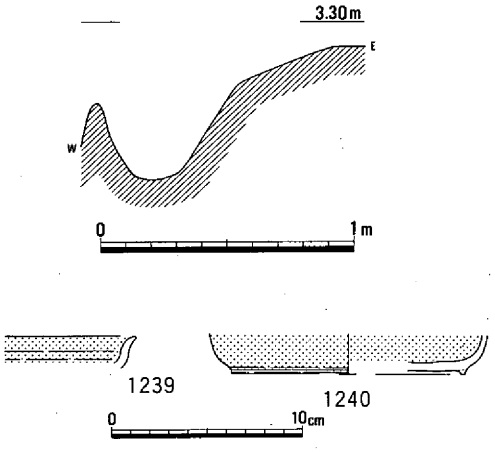


第317図　溝 48 (1/30)



1　淡褐灰色粘質土
2　淡灰色微砂斑淡灰色粘質土

第318図　溝 49 (1/30)



第319図　溝 50 (1/30)・出土遺物 (1/4)

向は東西で、わずかに湾曲するようである。幅が70cm、深さは47cmを測り、断面形はU字状を呈していた。遺物は出土しなかったが、土層関係から古代の溝と判断した。（岡本）

溝47（第316図）

立田12区の西端にあった。北西から南東の方向をとり、幅は193cm、深さは50cmを測った。溝の肩の線は湾曲していた。溝は段構造をなし、下半が一段落ち込んだような形をしていた。埋土の下層から図示した**1238**の黒色土器椀の完形品が出土した。内外面ともにヘラミガキを施し、内面には炭素を吸着させていた。平安時代後半の10世紀後半から11世紀の前葉にかけてのものとみられる。（岡本）

溝48（第317図）

立田13区の東端で検出された。残存状況は悪く、東の肩部は検出面に段差があったため屈曲していた。南北の方向をとる。溝の幅は100cm、深さは10cmにすぎない。年代のわかる遺物は出土しなかったが、土層関係から古代の遺構と考える。（岡本）

溝49（第318図、図版34）

中屋５区の東半で検出された。ここでは南北方向で低位部への傾斜面の肩が走り、溝49はこの肩から25cm低い低位部で、肩の線に沿うような形で検出された。上下に２条の溝が重複し、掘り直されたものとみられる。上方の溝の幅は52cmで、深さが19cm、下方の溝の深さは28cmであった。（岡本）

溝50（第319図、図版34）

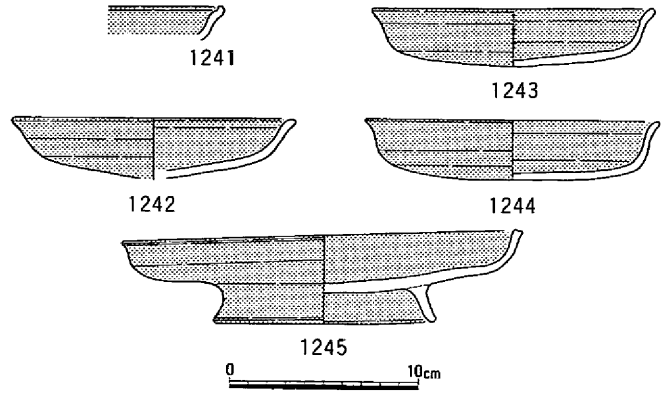
中屋５区の西端で検出された。周辺は後世の攪乱を大きく受け、残存状態は悪かった。南北方向をとっていたが、溝49とは平行していない。溝の幅は60cm、深さが40cmで、断面形はU字状を呈していた。丹塗りの土師器が出土した。**1239**は皿で、**1240**は杯である。奈良時代末期の溝か。（岡本）

土器溜まり３（第320図、図版34）

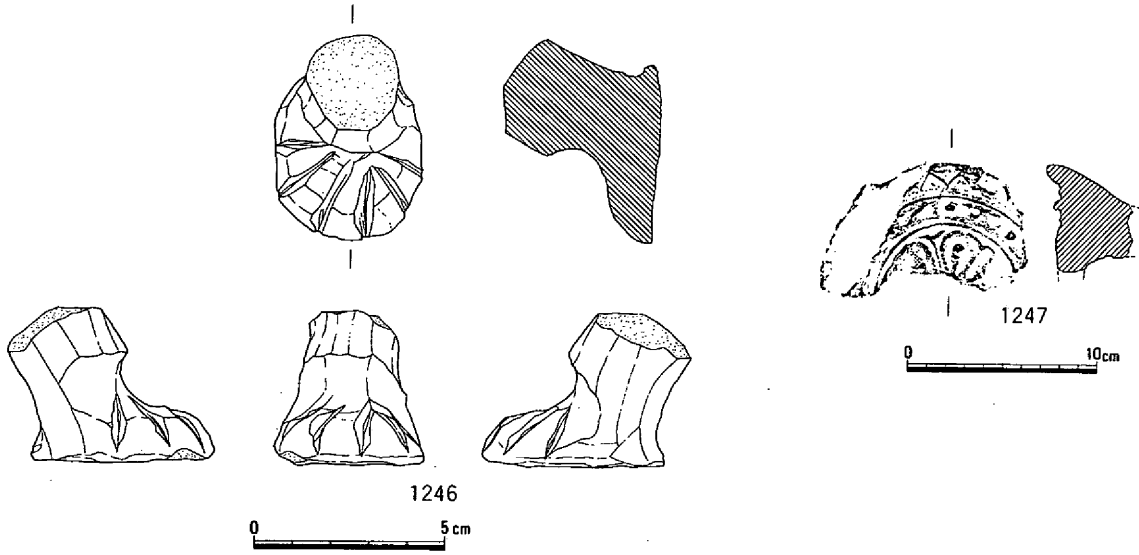
中屋５区の中央部で検出された。低位部にあり、溝49から西に２m離れた地点にあたる。土器溜まりは、大きくは北西側と南東側の２群に別れていたが、その間隔は５cmに過ぎず、土器の破砕した状況をみると、口縁を接して置かれていたといっても過言ではない。北西側の土器片は**1245**の盤が破砕したもので、南東側の土器片は**1242～1244**の杯の土器片からなっていた。復元したところ、**1244**と

1245は口縁の一部を欠くものの、ほぼ完形になった。土器溜まりの周辺を精査したが、土壙のようなものは検出できなかった。出土状態からは並べ置かれたようにみることができ、この低位部でなんらかの祭祀的な行為がおこなわれたことも想定される。

1241は皿で、口縁の内面に段をもっていた。1242～1244はいずれも口縁部を外反させている。1244の底部外面はヘラ切りの後に不定方向のヘラケズリ



第320図　土器溜まり3出土遺物(1/4)



第321図　津寺遺跡出土古代遺物(1/2, 1/4)

で調整されている。全体にナデによって丁寧に仕上げられている。1243の胎土は精選されているが、他では砂粒がかなり含まれていた。1245の盤は高い高台をもつ。わずかに外反させた口縁端部を拡張し、端面に凹線を巡らせる。底部外面はヘラケズリで調整したようである。胎土には砂粒や石粒を多く含んでいた。すべての土器が丹塗りであった。土器の年代は8世紀の後葉と考えられる。（岡本）

その他の遺物（第321図、図版47）

遺構に伴わなかった古代の遺物として須恵器の獣脚と軒丸瓦があるので記述しておく。

1246の獣脚は高田1区の包含層中から出土した。残存高が41.5㎜、脚の長さが48㎜、幅は39㎜を測った。足首の部分はヘラケズリで成形し、甲に移る部分を抉っている。足の甲から爪先にかけてはヘラで6本の線を刻み、指を表現している。全体にヘラを使って作られている。足の裏もヘラで切られたとみられるが、少し波打っている。焼成はきわめて堅緻で、一部に自然釉が認められる。

1247の軒丸瓦は高田12区の現代の用水路から出土した。内区は複弁4弁蓮花文で、外区の内帯には珠文を巡らせ、外区外帯は線鋸歯文を飾る。二子御堂奥瓦窯6類と同じもので、倉敷市矢部の矢部廃寺跡でも出土が知られている。奈良時代後半のものと考えられている。（岡本）

第５節　中世の遺構と遺物

１　遺構配置

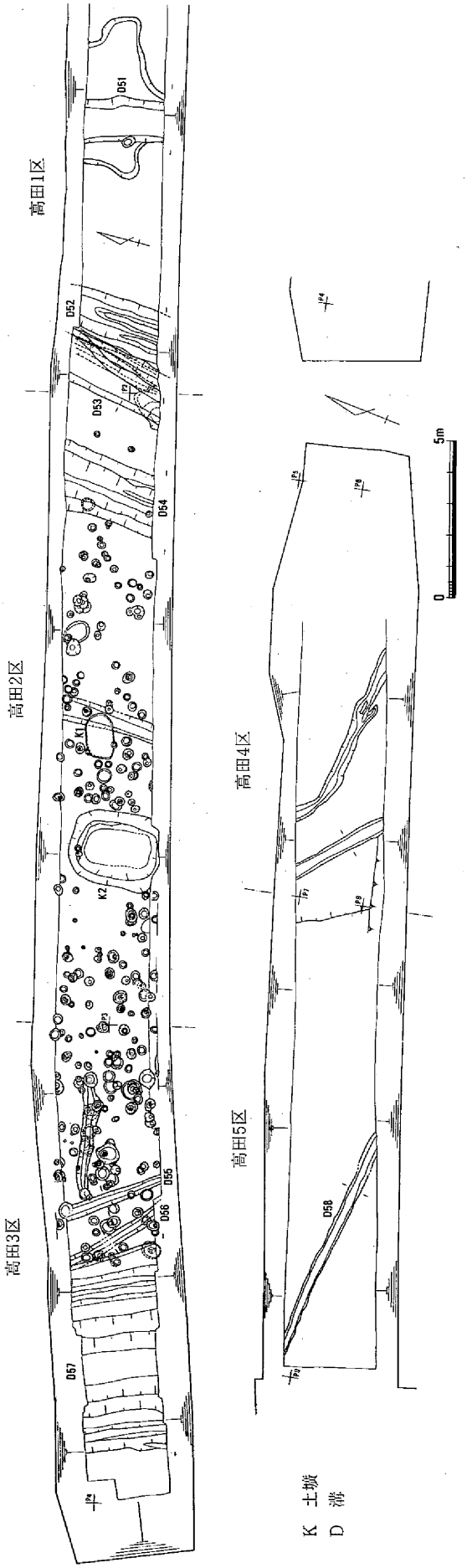
津寺遺跡における中世の遺構は、数は多いものの、調査区の全域にわたって広く分布するのではなく、ある地区に集中する傾向がみられる。遺構の多くは柱穴や土壙・溝で、それらは主に集落を構成する要素であり、集落以外の地区では遺構の数はきわめて少なくなる。

中世の遺構が集中する地区は２カ所で、一つは高田調査区の１区から３区、もう一つは中屋調査区の１区から４区である。この２カ所ではとくに柱穴が集中していて、当時の集落跡と考えられる。一方、高田調査区の６区から13区にかけては中世の遺構は検出されず、耕作地が広がっていたものと思われる。

高田１区から３区では、１区と２区の境に３条と３区の西端に１条大きな溝があり、これに挟まれた地区に多数の柱穴が集中していた。一つの環濠集落と呼べるかもしれない。大形の土壙が１基中央部で検出され、溝も２条確認された。集落から離れた高田４区と５区では溝１条と溝状の遺構が２条検出されたのみである。

中屋１区から４区では多数の柱穴とともに、ある一定の間隔で平行する溝が17条も検出された。これらの溝は柱穴とは時期を異にし、耕作に関係した遺構と考えられる。これ以外に土壙が４基、溝が３条確認された。柱穴の中には近世のものがあったが、識別は困難だった。

中屋Ｔ区でも溝が３条検出されたが、それらより南で検出された中世の水田の区画と平行していたことから農耕用の水路とみられる。溝は重複関係を示し、掘り直されながら長期にわたって継続したものと思われる。　　（岡本）



第322図　津寺遺跡中世遺構配置図（1）（1/200）

2　遺構・遺物

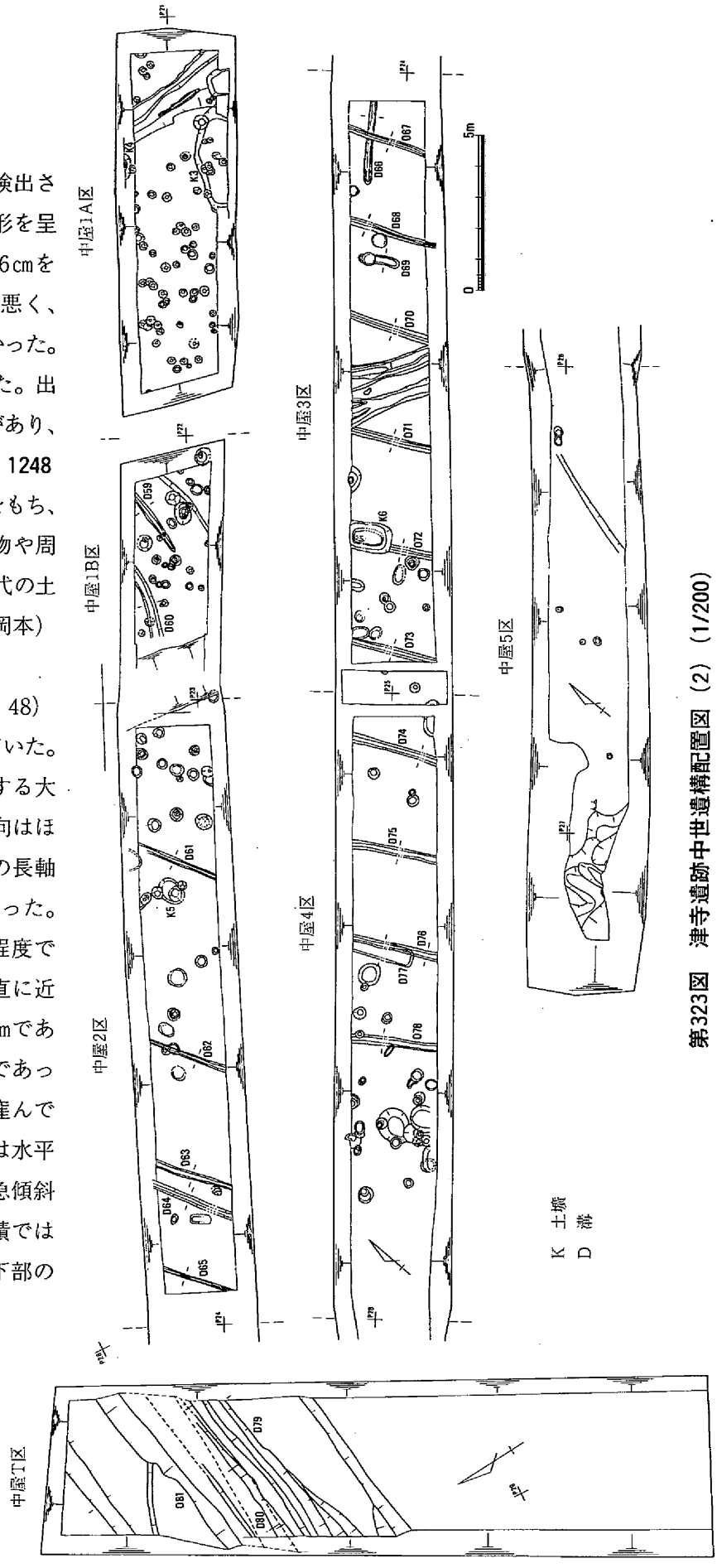
土壙１（第324図）

高田２区の中央部付近で検出された。平面形は不整な楕円形を呈し、長径が146㎝、短径は86㎝を測った。遺構の残存状態は悪く、深さはわずか６㎝にすぎなかった。底面はほぼ平坦になっていた。出土遺物として土師器の小皿があり、鉄滓や須恵器片もみられた。**1248**・**1249**の小皿は短い口縁部をもち、口径は60㎜前後を測る。遺物や周辺の遺構の状況から14世紀代の土壙と考える。　（岡本）

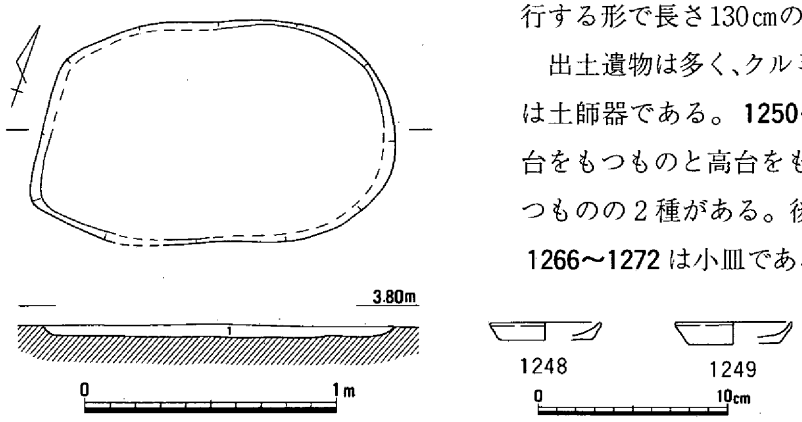
土壙２

（第325・326図、図版35・48）

高田２区の西半に位置していた。平面形が隅丸の長方形を呈する大形の土壙である。長軸の方向はほぼ南北であった。検出部分の長軸は283㎝、短軸は236㎝を測った。壙壁の傾斜は上方では45°程度であったが、底部付近では垂直に近かった。土壙の深さは115㎝であった。土壙の底はほぼ平坦であったが、中央部分がもつとも窪んでいた。埋土の堆積は上方では水平であったが、下部の壙壁が急傾斜になっていた部分までの堆積では中央部が窪んでいた。この下部の２層は粘質土で上層の粘性微砂とは異なり、堆積の仕方に相違があったと思われる。第４層の底には木の葉が敷いたように堆積していた。土壙の底より40㎝上方で短軸に平



第323図　津寺遺跡中世遺構配置図（2）（1/200）

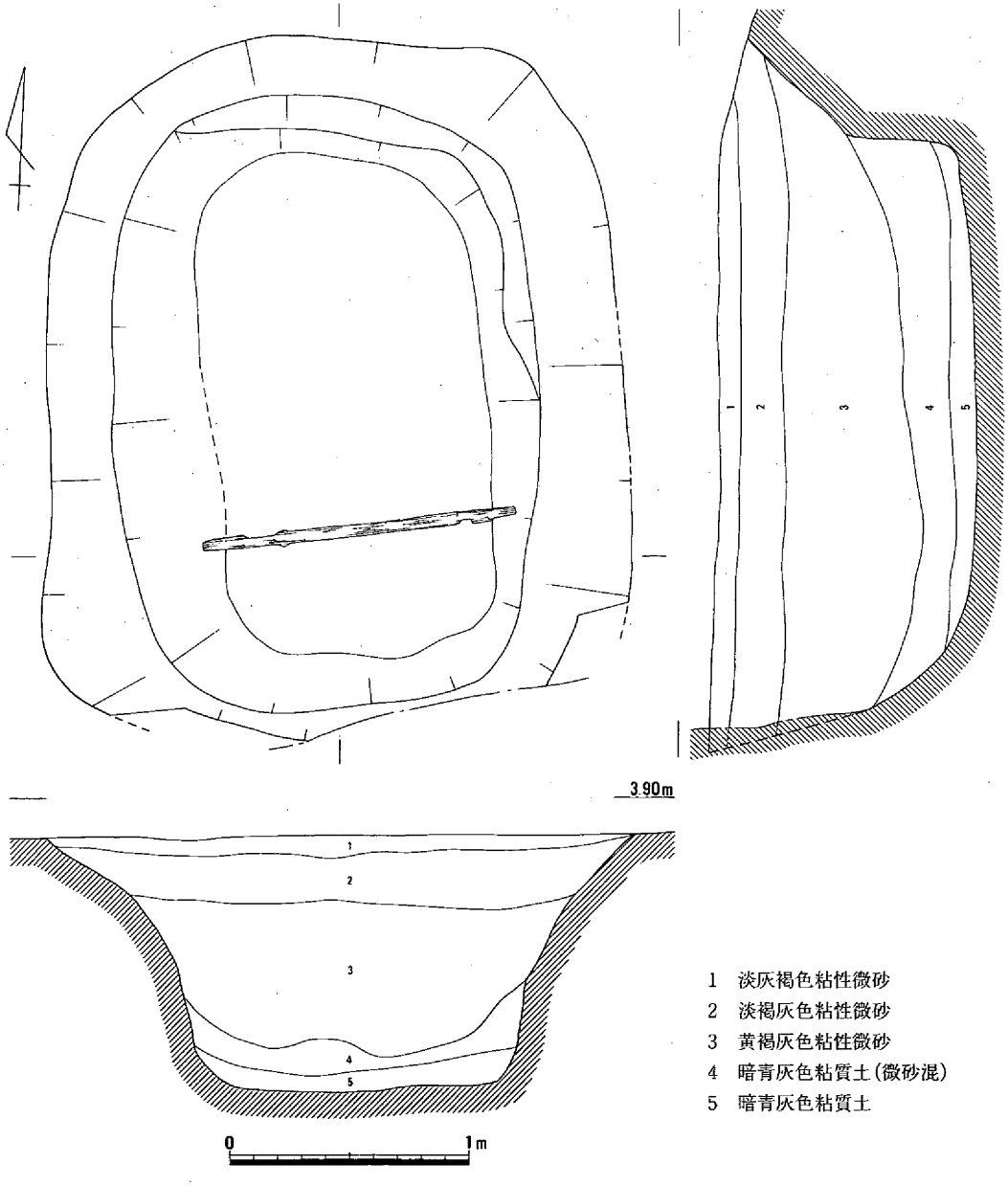


1　淡黄褐灰色粘性微砂

行する形で長さ130㎝の木片が出土した。

出土遺物は多く、クルミの殻もみられた。**1250～1275**は土師器である。**1250～1264**の椀にはごく小さな高台をもつものと高台をもたず、底部の中央に窪みをもつものの２種がある。後者が多い。**1265**は杯である。**1266～1272**は小皿である。底部には回転ヘラ切りの痕跡を残す。**1273・1274**は器台である。**1275**は大形の皿で、底部は粗い押圧調整である。**1276・1277**

第324図　土壙１（1/30）・出土遺物（1/4）



1　淡灰褐色粘性微砂
2　淡褐灰色粘性微砂
3　黄褐灰色粘性微砂
4　暗青灰色粘質土（微砂混）
5　暗青灰色粘質土

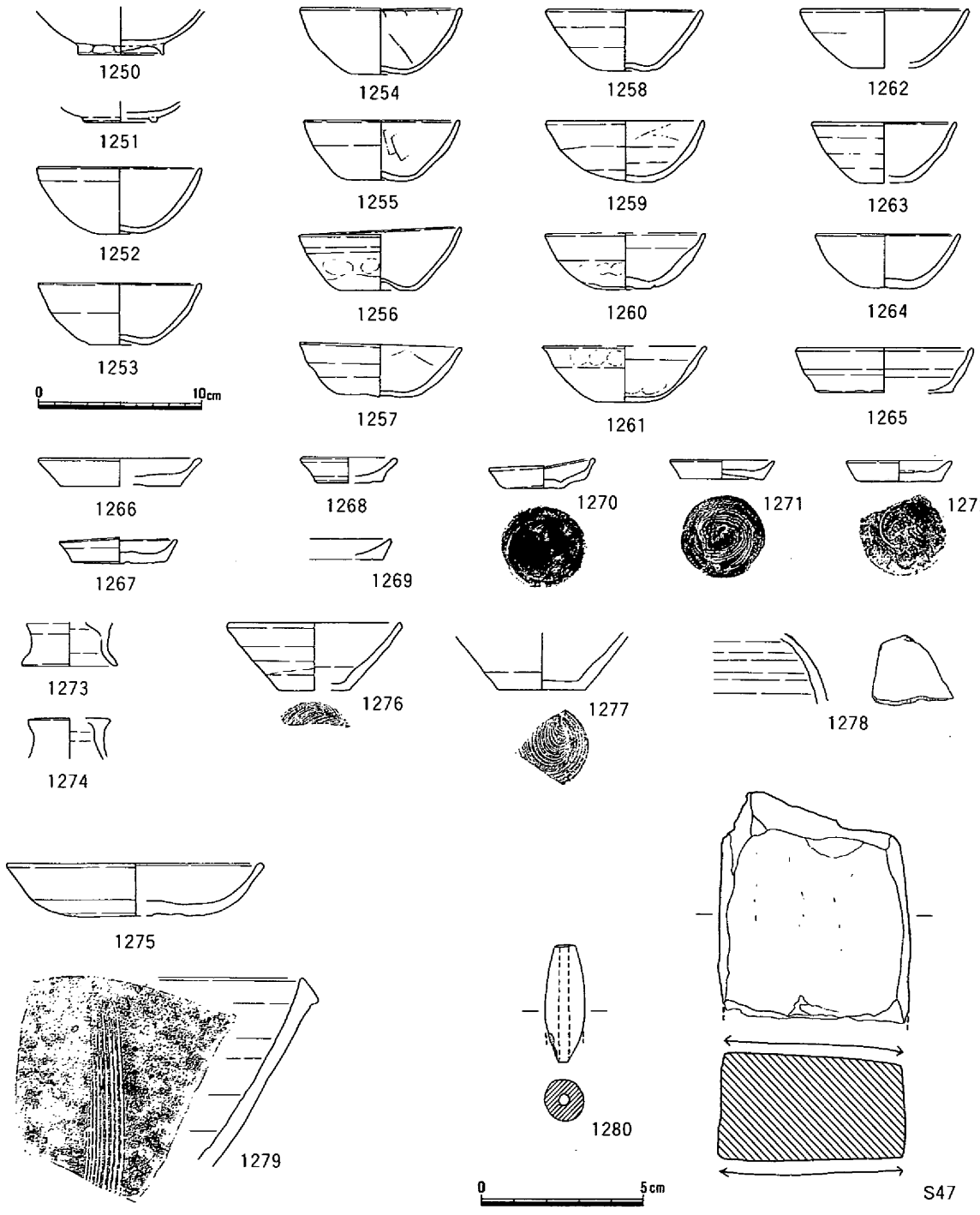
第325図　土壙２（1/30）

は施釉陶器で、灰釉のような浅黄色の釉が内外面にかかっている。底部付近は露胎で、底面は糸切りである。1278は磁器の四耳壺の肩部である。1279は備前焼のすり鉢で、口縁部はわずかに拡張されている。1280は土錘、S47は砥石である。

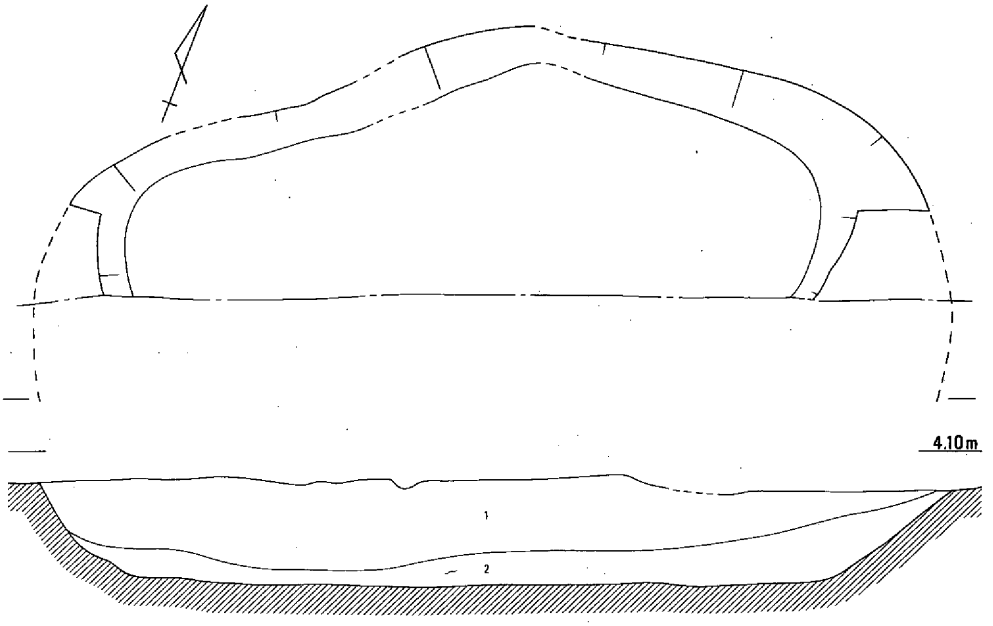
これらの遺物から判断して、土壙２の年代は14世紀後半と考えられる。　（岡本）

土壙３（第327図）

中屋１Ａ区で検出された。調査区の南端で一部を確認したのみで、全形は不明である。大形の土壙



第326図　土壙2出土遺物（1/4,1/2）



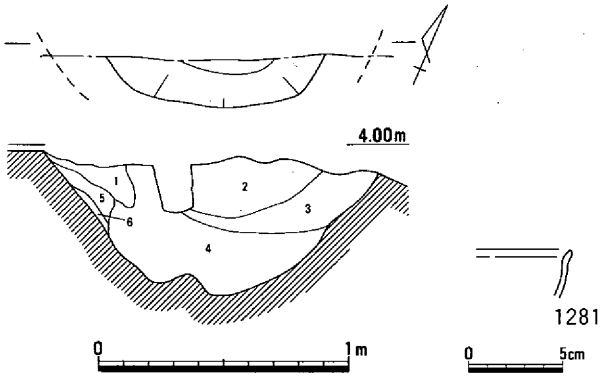
1　灰褐色粘質土(炭･焼土混)
2　灰黄褐色粘性微砂

第327図　土壙３(1/30)

で、検出長径が340㎝、深さは44㎝を測った。壙壁の傾斜はあまり急でなく、広い平坦な底面をもつ。鉄滓や丹塗り土師器など古代の遺物が多かったが、中世の土師器椀の破片も出土した。　（岡本）

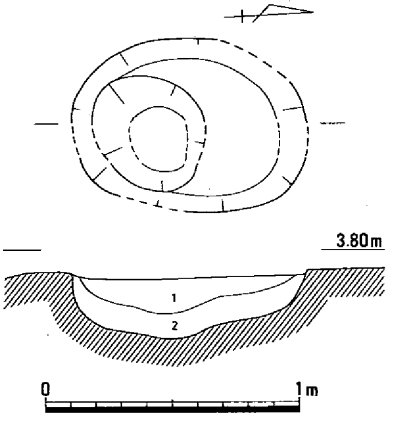
土壙４（第328図）

中屋1Ａ区の調査区北端でごく一部を検出した。土壙３の対面にあたる。検出部分の長径が134㎝、深さは57㎝であった。埋土は複雑な堆積を示し、多量の炭・焼土粒を含んでいた。古代から中世にかけての土器片が出土した。**1281**は土師器椀で13～14世紀にかけてのものとみられる。　（岡本）



1　褐灰色砂質土
2　灰褐色粘性砂質土(焼土混)
3　灰褐色粘性砂質土(炭･焼土混)
4　暗灰褐色粘性砂質土(炭･焼土粒多量)
5　褐灰色砂質土(炭粒少量)
6　淡灰褐色砂質土

第328図　土壙4(1/30)・出土遺物(1/4)



1　淡褐灰色粘性砂質土(炭･焼土混)
2　淡灰褐色砂質土

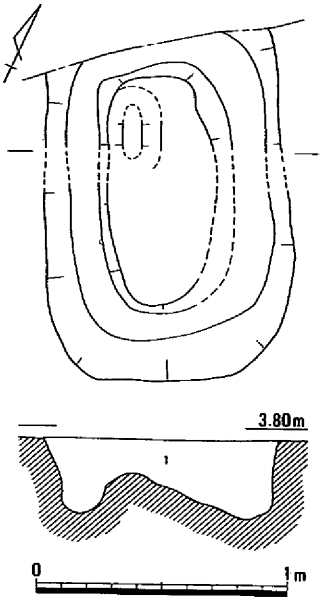
第329図　土壙５(1/30)

土壙５（第329図）

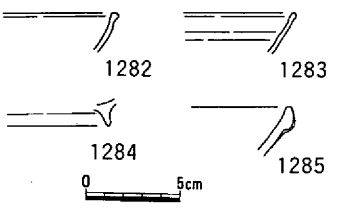
中屋２区の東半で検出された。平面形は楕円形で、底部の南に片寄って円形の落ち込みがみられた。長径が92cm、短径は68cm、深さは27cmを測った。（岡本）

土壙６（第330図、図版35）

中屋３区の西半にあり、溝72を壊している。平面形は隅丸長方形で、主軸の方向は北西から南東であった。検出長軸は139cm、短軸が98cmであった。土壙の底には、壙壁に添って溝が巡らされ、中央部分が少し高く掘り残されていた。検出面から溝の底までの深さは28～35cmを測った。出土遺物のうち、1282～1284は土師器の椀、1285は白磁の碗の口縁部である。さらに鉄滓もみられた。出土遺物から13世紀代の土壙ではないかと考えられる。（岡本）



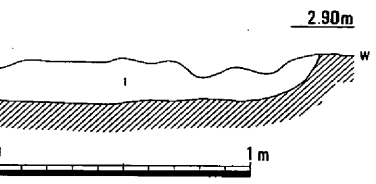
1　淡黄褐灰色粘性微砂（炭・焼土混）



第330図　土壙６（1/30）・出土遺物（1/4）

溝51（第331図）

高田１区の東半にあった。ほぼ南北方向をとるが、少し西に振る。溝の幅は140cm、深さが22cmで、溝の底部は広い平坦面になっていた。調査区南壁の土層観察によると、溝52の検出面と溝51の検出面との間には数層の堆積層があり、かなりの時間差が考えられる。溝51の年代は古代末から中世初頭とみられる。（岡本）

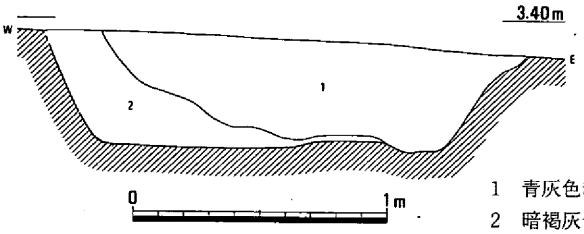


1　暗褐色粘性微砂斑青灰色粘質土

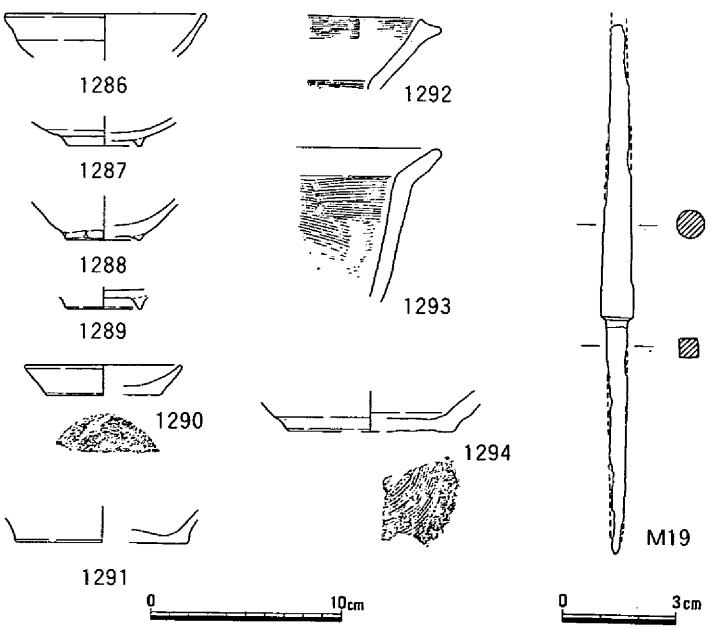
第331図　溝51（1/30）

溝52（第332図、図版48）

高田１区の西端にあって、集落の東を画する溝と考えられる。溝の方

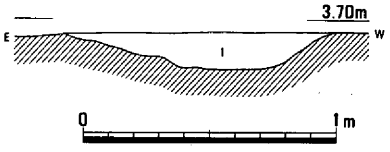


1　青灰色粘質土
2　暗褐灰色粘質土



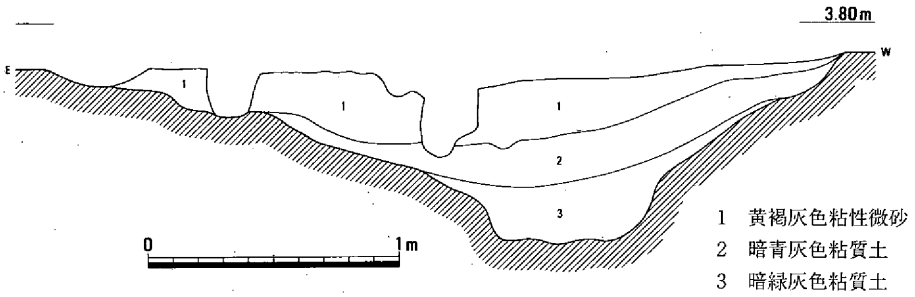
第332図　溝52（1/30）・出土遺物（1/4，1/2）

向は南北であった。溝の検出面は東へ水平に続き、この溝が掘られた時には、東側の低位部は埋まっていたとみられる。幅が２ｍ、深さは56㎝を測り、溝の底は広い平坦面となっていた。このため、断面形は逆台形に近いものとなる。埋土は上下２層に分けられた。出土遺物は多かった。**1286～1289**は土師器椀で、ごく小さな高台をもつ。**1290**は土師器小皿、

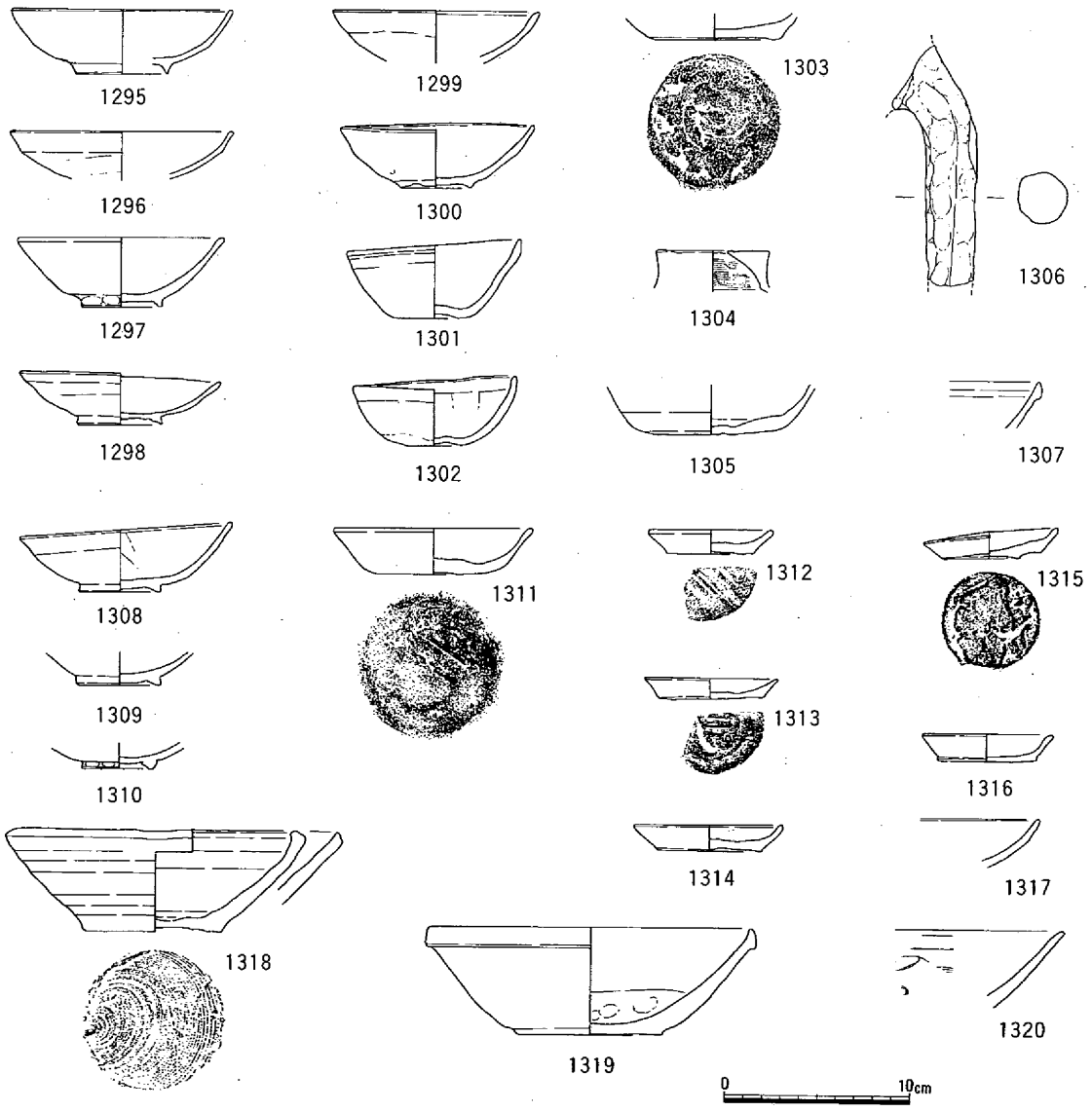


1　淡褐灰色粘性微砂

第333図　溝 53（1/30）



1　黄褐灰色粘性微砂
2　暗青灰色粘質土
3　暗緑灰色粘質土



第334図　溝54（1/30）・出土遺物（1/4）

1291は土師器杯であろうか。1292・1293は土師器の土鍋、1294は須恵器で、こね鉢の底部とみられ、底面は糸切りである。M19は鉄鏃で茎と篦被部が残存し、残存長が140㎜、篦被下端の直径は9㎜を測った。これらの他に、亀山焼の破片も出土した。埋土の上層から出土したのは1286・1288・1289・1291・1293・1294である。遺物の年代から、溝は14世紀中頃から後半のものとみられる。　（岡本）

溝53（第333図）

高田1区と2区の境にあり、南北の方向をとる。幅が150cm、深さは32cmを測った。調査区南壁の土層観察によれば、溝52の検出面との間に2層の堆積層が挟まれ、溝54と同じ検出面であった。遺物には土師器・須恵器のほか、青磁・白磁・備前焼がある。14世紀後半以降の溝とみられる。（岡本）

溝54（第334図、図版36）

高田2区の東端で検出された。溝52の埋没後、新たに掘られた集落を画する溝である。土層関係からは溝57と対になり、同時に存在していた可能性が高い。溝の方向は南北で、溝52と平行し、溝52より5m西に掘られていた。溝の幅は408cmで、深さは81cmを測った。溝の傾斜は緩やかだったが、底部は逆台形状に落ち込み、底面はほぼ平坦にされていた。埋土は3層に分けられた。レンズ状の堆積を示し、じょじょに埋没していったものと思われる。

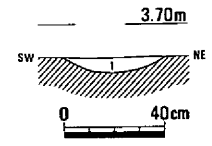
遺物が多量に出土した。図示した遺物のうち、1295～1307は下層出土、1308～1320は上・中層出土である。1295～1304・1306・1308～1317は土師器、1305・1318・1319は須恵器、1307は白磁碗、1320は青磁碗である。1295～1302・1308～1310は椀である。高台をもつものが多いが、無高台で底部に窪みをもつものがみられる。1303・1311・1305は杯で、底面はヘラ切りである。1304は器台、1306は土鍋の脚である。1312～1316は小皿で底部は、ヘラ切りされる。1317は大形の皿か。1318・1319はこね鉢である。出土遺物が示す年代は14世紀後半であり、溝の年代もこれ以降と考えられる。　（岡本）

溝55（第335図）

高田3区の東半で検出された。幅46cm、深さ32cmの溝で、北西から南東の方向をとり、すぐ西の溝56や57とは平行しない。土層関係からは溝57と同時か、それに先行するとみられる。土師器と須恵器片が出土し、14世紀のものかとみられるものがあった。　（岡本）

溝56（第336図）

高田3区の中央部、溝55と溝57の間にあった。溝の方向は北西から南東だが、溝55とは平行しない。調査区南壁の土層観察からは、溝55・57よりは古く、溝52の時期に存在したとみられる。溝の幅は43cm、深さは15cmを測った。古墳時代の土器小片が出土したのみであった。（岡本）



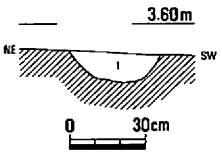
1　淡褐灰色粘性微砂

第335図　溝55（1/30）

溝57（第337図、図版35・48）

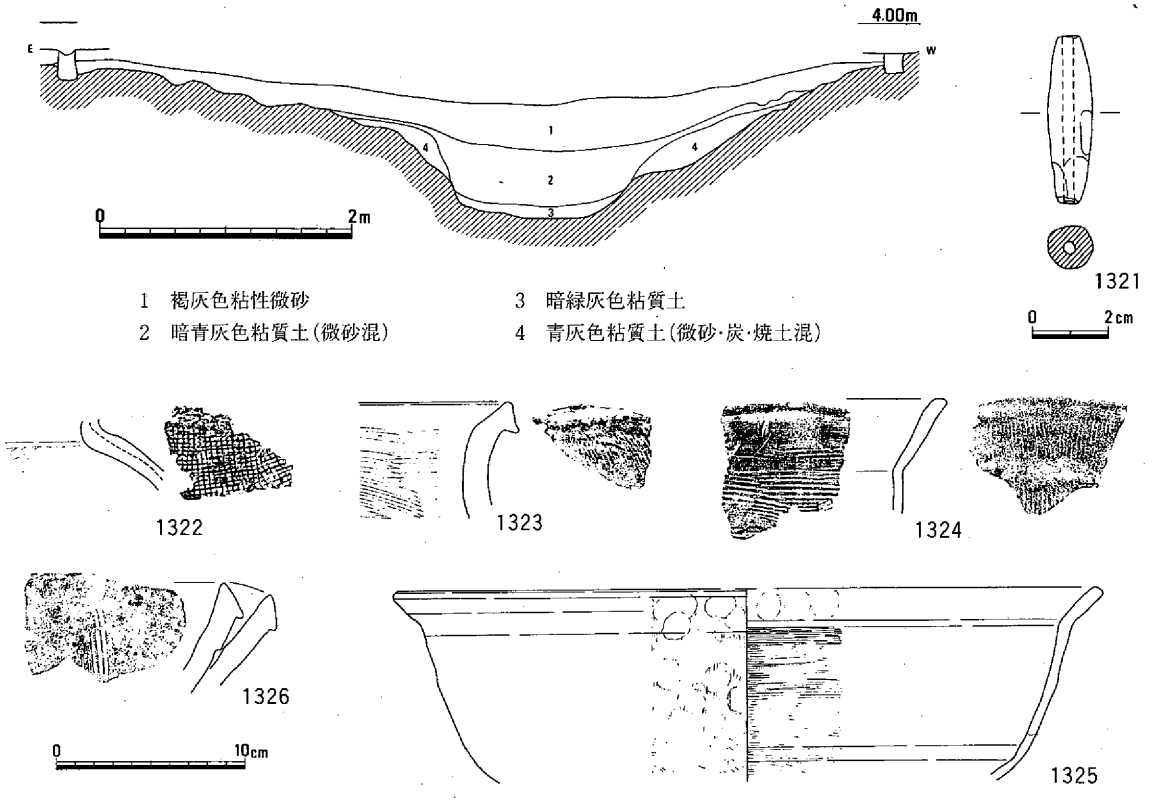
高田3区の西半を占める大溝である。溝の方向は北北西から南南東をとる。溝の壁は上半では緩やかであったが、下半では急傾斜となり、逆台形状に落ち込んでいた。溝の底は幅90cm前後の平坦面となっていた。上半の壁には幅の狭い段が何段も検出され、複雑な形状を呈していた。度重なる改修を示すものであろうか。これに比べて溝の埋土は単純であったが、第4層の存在から一度大規模な改修がなされ、その時に下段の落ち込み部分が掘られたようである。

出土遺物は多く、ウシの腰椎や尺骨・橈骨もみられた。1321は長紡錘



1　褐灰色粘性微砂質土
（炭・焼土混）

第336図　溝56（1/30）



第337図　溝 57 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/4)

形の土錘である。全長 44 ㎜、太さは直径12㎜を測る。**1322**は須恵器で、亀山焼の甕とみられる。**1323～1325**は土師器で、**1323**は甕、**1324**と**1325**は土鍋である。**1326**は備前焼のすり鉢で、口縁部が少し拡張され、下方の突出がみられる。これらの遺物の年代は中世でも後半に属するもので、**1323**などは15世紀後半以降のものであろう。

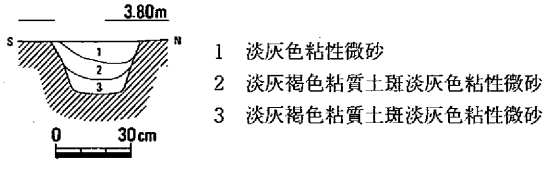
溝57の年代は15世紀以降の室町時代後半とみられ、その廃絶は16世紀に降るかもしれない。(岡本)

溝58　(第338図)

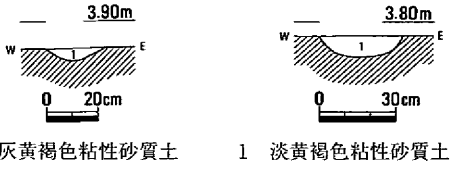
高田５区の西端で検出された。東西方向の溝で、東に流れていたとみられる。直線的な溝である。溝の幅は42㎝、深さが32㎝を測った。溝の断面形は逆台形を呈していた。埋土は3層で、レンズ状の堆積を示していた。遺物に中世のものらしい土器片が含まれていた。　(岡本)

溝59・60　(第339図、図版36)

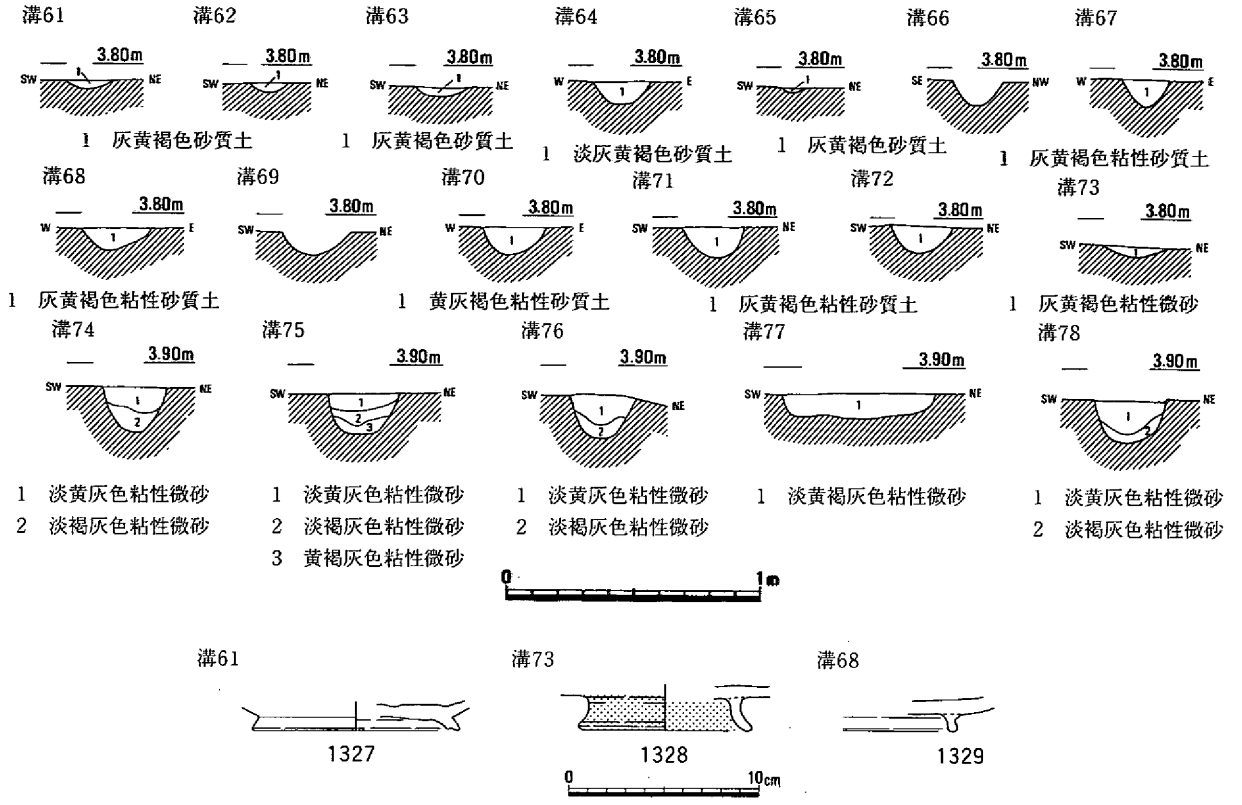
中屋調査区の１Ｂ区で湾曲しながら平行する２条の溝を検出した。溝59は幅26㎝、深さ6㎝で、溝60も幅40㎝、深さ8㎝と、いずれの溝も浅かった。２条の溝の間隔は125㎝であった。溝 59の西120㎝に低い段があり、溝と平行していた。２条の溝は耕作に伴うものではないかと考えられる。　(岡本)



第338図　溝 58 (1/30)



第339図 溝 59 (左)・溝 60 (右) (1/30)



第340図　溝61～78（1/30）・出土遺物（1/4）

溝61～78（第340図、図版36）

中屋調査区の2区から４区にかけて、同じような規模の南北方向の溝が15条も連続して検出された。溝の幅は13～33cmで、25cm前後のものがほとんどであった。溝の深さは高田２区のものがもっとも浅くて３cm、もっとも深い高田４区では18cmを測った。これらの溝はほとんど３m前後の間隔をもち、方向が西に向かうに従って西へ振れ、溝底の高さも西になるほど低くなるという一連の動きをもっていた。おそらく、これらの溝は一体として同じ機能をもっていて、それは耕作に関わるものではなかったかと考えられる。これらの溝と同じ方向をもつやや幅の広い溝69・70や直交する溝66も埋土は同じであった。一連の遺構と考えたい。

ほとんどの溝から土器片が出土したが、図示できたのは３点にすぎない。**1327**は須恵器の瓶の底部である。**1328**は土師器の盤で、丹塗りされていた。**1329**は土師器の杯である。これらの遺物はすべて古代のものであるが、土層関係や隣接地での調査結果から、鎌倉時代の遺構と考えられる。（岡本）

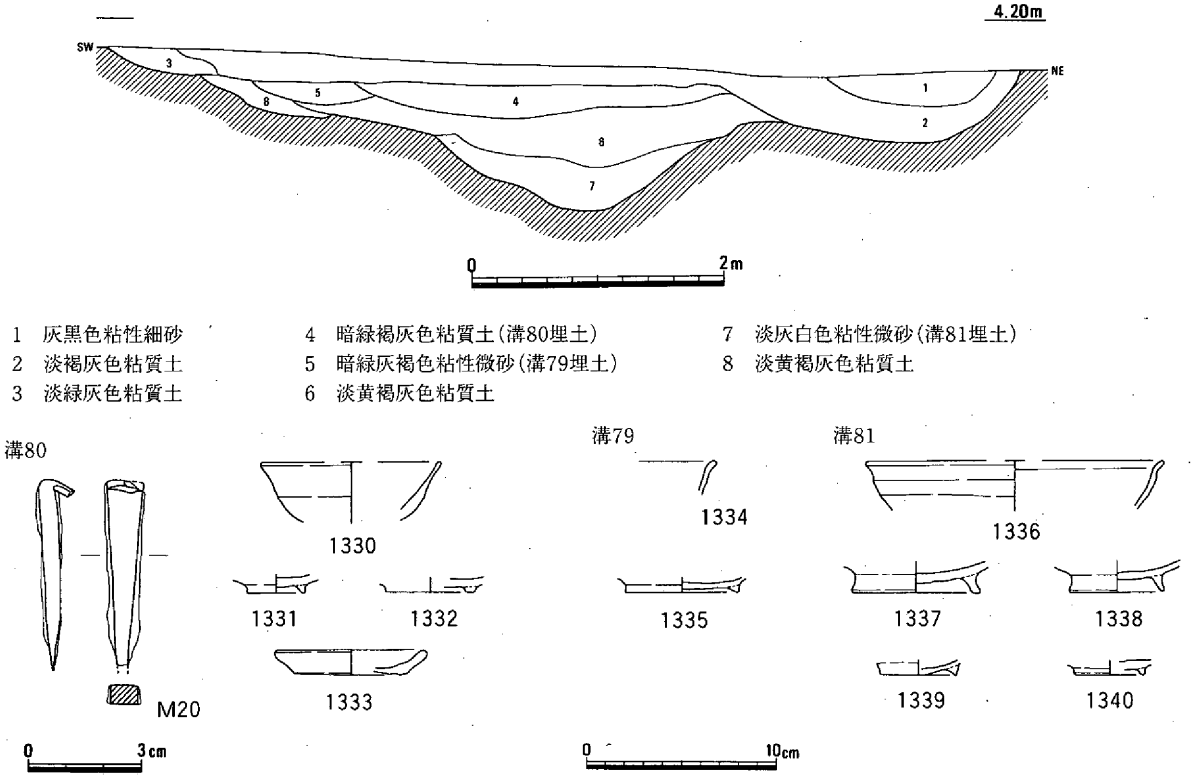
溝79（第341図、図版36）

中屋Ｔ区北部で検出した東西に伸びる溝で、長さ600cm、幅100cm、深さ20cmを測り、埋土は暗緑灰褐色粘性微砂である。出土した土師器の椀からみて室町時代と考えられる。（浅倉）

溝80（第341図、図版48）

中屋Ｔ区北部で検出した東西に伸びる溝で、溝79を切っている。長さ600cm、幅300cm、深さ30cmを測り、埋土は暗緑灰褐色粘質土である。遺物は土師器の椀・皿と鉄釘が出土した。

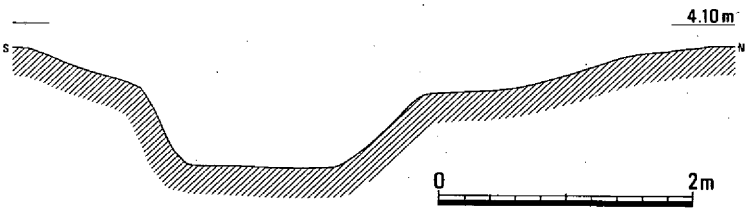
出土した椀からみて室町時代と考えられる。（浅倉）



第341図　溝79, 80, 81 (1/30)・出土遺物(1/2, 1/4)

溝81（第341・342図、図版36）

中屋Ｔ区北部で検出した東西に伸びる溝で、溝80の最下層にあたる。長さ600㎝、幅230㎝、深さ60㎝を測り、埋土は淡灰白色粘性微砂である。遺物は土師器の椀・皿が出土した。



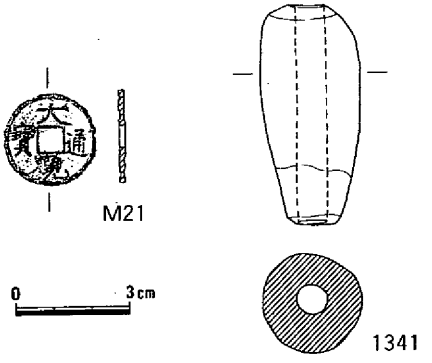
第342図　溝 81 (1/30)

出土した椀などからみて鎌倉時代から室町時代と考えられる。（浅倉）

その他の遺物（第343図、図版48）

M21 は銅銭で「大觀通寶」の字が明瞭である。高田２区の柱穴から出土した。直径は24.5㎜、厚さは1.8㎜を測る。初鋳は1107年である。

1341は土錘である。高田8区の近世の大溝から出土した。図の上方を一部欠損している。長紡錘形だが、通有のものに比べて太い。残存長が 58.5㎜、太さは26.5㎜を測る。重さは35.8g である。（岡本）



第343図　津寺遺跡中世遺物 (1/2)

第7章　まとめ

ここでは、これまでに報告してきた調査成果を踏まえ、発掘調査の行われた足守川の左岸流域における集落の消長を中心に、時代の流れに従って概観してみたい。

この流域平野における生活痕跡は津寺遺跡の縄文時代後期後半の土器を最古とする（註1)。土器片は微高地の基盤層中から出土していた。縄文時代晩期の土器片はさらに点数が増加し、なかには数片がまとまって出土した例もあり（註2)、より頻繁な人々の活動が窺われる。ただ、これまでに報告された資料は10点にすぎず、遺構の検出もみられないことから、平野部における定住を確認するまでには至っていない。加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡からの縄文土器の出土はみられず、縄文時代の遺跡が点在する倉敷市矢部の丘陵地帯との距離が関係するようである。

弥生時代に入ると、足守川の左岸流域平野部における人々の活動は本格的な動きとなり、定住が開始されたものと考えられる。加茂政所遺跡や高松原古才遺跡からも前期の土器が出土している。ともに弥・前・Ⅱ以前の年代が考えられ、弥生時代の初期から活動が展開されている。津寺遺跡では、山陽自動車道の調査で中屋調査区の微高地南端の斜面堆積層から前期土器がまとまって出土している(註3)。弥・前・Ⅰから弥・前・Ⅲまでの破片があり、生活の継続が認められる。遺構そのものの検出は津寺遺跡の土壙1基のみで、他の遺跡では確認されず、集落の規模がどの程度のものであったかは明瞭ではない。遺物の出土状況から考えれば、かなり散在的な展開が想像される。

竪穴住居そのものが検出されるようになるのは弥生時代の中期中葉からで、高松原古才遺跡で円形の竪穴住居が1軒確認された。加茂政所遺跡では同期の竪穴住居の検出はなかったが、弥・中・Ⅱの土器を出土した土壙が複数検出され、集落が営まれていたことは確実である。津寺遺跡でも過去の調査で中期中葉の竪穴住居が検出されている（註3)。

このように、足守川の左岸流域の弥生社会は緩やかな発展を続けていくようであるが、弥生時代の後期に入って急激な高揚期をむかえる。立田遺跡はこの時期に集落が形成されたとみられ、今回の調査で出土した遺物は後期のものに限られていた。竪穴住居が2軒検出され、貯蔵穴群も確認され、河道の斜面堆積層や微高地東端の傾斜面からは多量の後期土器の出土をみた。高松原古才遺跡では建物が検出され、河道の堆積層や微高地西斜面からも後期土器が多く出土した。加茂政所遺跡でも竪穴住居が1軒出土し、土壙も複数検出された。津寺遺跡の今回の調査区では10条を超える溝が検出され、かなり大きな規模の用水管理が行われていたことを窺わせるが、遺跡本体の集落部分からは後期を通じて55軒もの竪穴住居が検出されていて（註4)、この地域一帯における拠点的な集落と考えられる。弥生時代後期には足守川の左岸流域のほとんどの微高地上には集落が立地し、しかも、遺構の密度も高まっている。このような弥生社会の発展を基盤として、首長層の出現がみられ、楯築墳丘墓をはじめとする弥生墳墓群が足守川右岸の丘陵地帯に築造されるようになるものと考えられる。

古墳時代前期の様相は弥生時代後期に比べてかなり変化をみせていて、微高地すべてが集落という状況からはむしろ衰退しているようにみられる。津寺遺跡の中心部では252軒もの竪穴住居が検出され（註5)、今回の調査区でも5軒の竪穴住居が出土し、その拠点的な性格は増大している。ところが、立田遺跡や高松原古才遺跡では古墳時代前期の遺構は検出されず、高松原古才遺跡の河道2から

わずかの土器片が出土したにすぎなかった。いっぽう、加茂政所遺跡では重複あるいは近接して4軒の竪穴住居が検出され、同期の大形の溝も3条、微高地上を走っていた。このように、微高地ごとの変化が大きく、弥生時代の均質性が失われ、集落の集約化が行われたようにもとれる。

弥生時代以来、人々の生活の場として発展を続けてきた足守川の左岸流域平野であるが、古・前・Ⅱの時期に発生した大洪水によって壊滅的な被害を被り、津寺遺跡の集落も一時解体したとされる(註5)。その後、5世紀後半からじょじょに復興して集落の形成がみられるようになり（註6)、6世紀の後半になると再び高揚期が出現する。立田遺跡における集落の再生はみられないが、高松原古才遺跡では重複して11軒もの竪穴住居が検出され、土壙や溝などの遺構も集中していた。加茂政所遺跡では二つの微高地があり、古墳時代前期までの遺構は東側の微高地のみに存在していたが、6世紀後半以降の遺構は東西両側の微高地に広がり、竪穴住居だけでも10軒が検出された。津寺遺跡ではそれまで低位部であった高田調査区に竪穴住居の集中が見られるようになり、今回の調査でも11軒が検出された。住居の多くは7世紀初頭から前半にかけてのものであった。

このような、足守川の左岸から国道180号線まで、びっしりと集落が展開するという状況は、弥生時代後期前半の状況を想わせるが、それ以上に遺構の密度は高い。とくに、津寺遺跡の高田調査区では100軒を超える竪穴住居が6世紀後半から7世紀前半の短期間に集中していた。もう一点注意されることとして、すべての遺跡からかなりの数の鉄滓が出土していることがある。また、年代確定の不安はあるが、鞴の羽口や窯壁の破片もいくらか出土し、加茂政所遺跡の竪穴住居10からも窯壁片が出土している。津寺遺跡では、この頃に大規模な築堤事業が行われていて、大量の人員を投入する必要があり、また、この事業は奈良時代に中屋調査区に出現する官衙施設の前身施設（註6）を設置する事業の一環であったとも考えられる。政治的な中心施設の出現とこれに近接した密度の高い集落の存在が、まったく無関係である可能性は低いものと考えられる。

奈良時代には、津寺遺跡では前述した官衙施設が存在し、それに付随していたと見られる建物群が高田調査区を中心に検出されていて、今回の調査でも高田6・7区で多数の柱穴や土器埋納壙が確認された。加茂政所遺跡や高松原古才遺跡では遺構の数が減少し、集落の規模が小さくなったようである。立田遺跡でも遺物が出土し、人々の生活が続いていたものと思われるが、かつての熱気は感じられない。平安時代には加茂政所遺跡でかなりの数の緑釉陶器・灰釉陶器片が出土しているが、山陽自動車道の調査で、ここに寺院の存在が明らかになっていて、それに伴う遺物と判断される。

中世になると、立田遺跡と高松原古才遺跡はほぼ耕作地となり、集落は消滅していく。加茂政所遺跡では西側の微高地を中心に集落が新たに形成されたようで、数多くの柱穴や溝・土壙がみられ、墓地も伴っていた。津寺遺跡では中屋調査区で新しい集落が形成されている。高田調査区では奈良時代の集落が存在した地区は耕作地となったようであるが、高田1区から3区にかけて堀を伴う集落が出現し、多数の柱穴を含む遺構の密集状況から、かなりの長期間存続していたことが知られる。（岡本）

(註1) 亀山行雄ほか『津寺遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104　岡山県教育委員会　1996年
(註2) 高畑知功ほか『津寺遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127　岡山県教育委員会　1998年
(註3) 亀山行雄ほか『津寺遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104　岡山県教育委員会　1997年
(註4) 高畑知功「弥生時代の津寺遺跡」『津寺遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127　岡山県教育委員会　1998年
(註5) 亀山行雄「古墳時代前期の津寺遺跡」『津寺遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127　岡山県教育委員会　1998年
(註6) 中野雅美「古墳時代後期の津寺遺跡」『津寺遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127　岡山県教育委員会　1998年

付載　加茂政所遺跡弥生時代土壙出土の動物遺存体

岡山理科大学理学部　　富岡　直人

本報告文は、1993年に岡山県古代吉備文化財センターによる発掘で岡山県岡山市加茂政所遺跡砂場調査区から検出された弥生時代中期から後期に属する動物遺存体について記述するものである。

古代吉備文化財センター岡本寛久氏には資料の提供とともに、様々な御教示、御援助を頂いた。

第1節　出土状況

分析資料は、発掘時に確認・サンプリングされたものである。出土遺構は弥生時代中期の土壙6と後期の土壙10、それに弥生時代中期中葉の貝層をともなう土壙7である。特に土壙7は長辺300cm、短辺130cm程の隅丸長方形の土壙墓状の土壙である。

第2節　出土動物遺存体の概要

出土動物遺存体の種名を第1表に掲げ、以下に各種動物遺存体の概要を記述する。

第1表　加茂政所遺跡砂場調査区出土動物遺存体種名表

脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
カサゴ目	Scorpaeni formes
コチ科	Platycephalidae
コチ属	*Platycephalus* sp. indet.
両 生 綱	Amphibia
カエル目	Salientia
哺 乳 綱	Mammalia

硬骨魚綱　　Osteichthyes

破片を含む目科属種不明の部位不明資料が18点出土した。

なかでも土壙7上層からは、通常検出が困難と考えられる脆弱なウロコがほぼ完形1点と半分程度が残ったもの1点（いずれもNo. 23）が検出された。完形の1点は側線鱗である。いずれも種の同定は困難であった。

カサゴ目	Scorpaeni formes
コチ科	Platycephalidae
コチ属	*Platycephalus* sp. indet.

属が判明した資料は、土壙10から出土したコチ属右鰓蓋骨（No. 36）のみであった。

大陸棚浅海域の南日本（千葉県、新潟県以南）に生息し、産卵期には接岸する習性を持つ（中坊1993、阿部　1987)。産卵期に接岸した個体をごく近海で捕獲したものであろうか。

両生綱　Amphibia

カエル目　Salientia

土壙10から右橈尺骨骨幹部（No. 37）が出土した。ヒキガエル程度の大きさであった。食用とされたものかは不明である。

哺乳綱　Mammalia

土壙7から5点が出土した。（No. 29, 31, 32, 33, 34)。いずれも中型哺乳類で、ヒト、イノシシ類、ニホンジカなどの成熟した個体とほぼ同程度の大きさの破片であった。このうちNo. 32のみが火を受けて白色に変化している。部位が特定できたものは、No. 32は頭蓋骨破片、No. 33, 34は肋骨破片のみであった。土壙にともなう埋葬人骨の小破片である可能性もあるが、不明確である。No. 33, 34は同一個体である可能性が高いが、No. 31, 32とNo. 33のグループが同一個体であるかは不明である。

参考文献

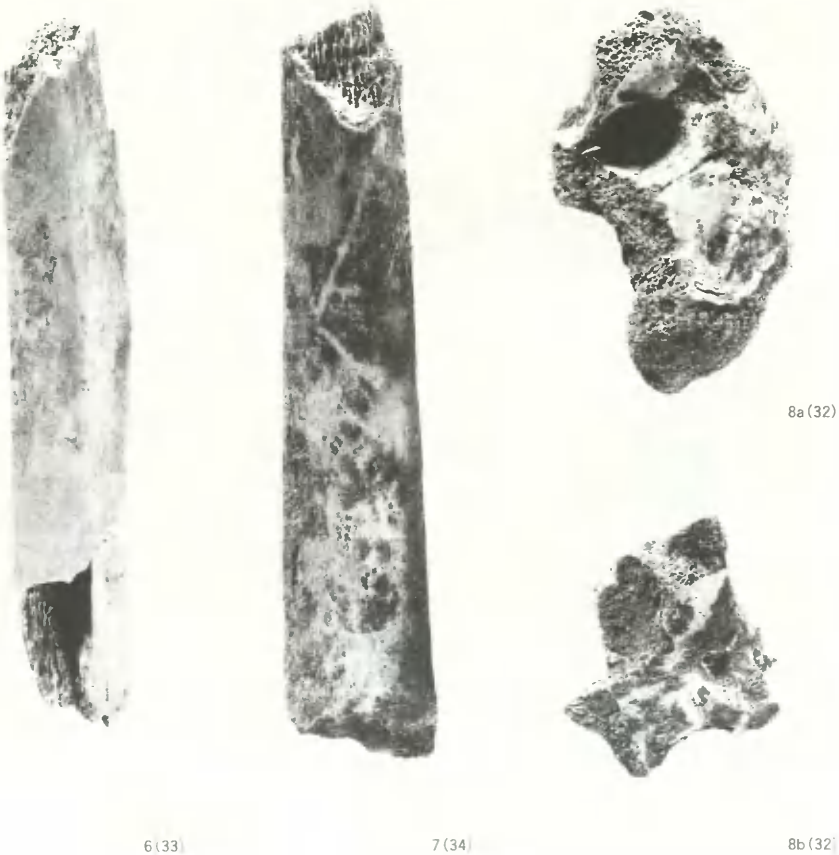
阿部宗明　1987　『原色魚類大図鑑』（北隆館）

中坊徹次　1993　『日本産魚類検索－全種の同定－』（東海大学出版会）

第２表　加茂政所遺跡弥生時代土壙出土動物遺存体一覧

番号	遺構名	層位	年代	分　類	種　名	部位	LR	部分	重量g	色調	備考
36	土壙10		弥生後期	魚類	コチ属	前鰓蓋骨	R	破片	0.43	茶褐	
12	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	腹椎	?	破片	0.38	茶褐	
13	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.02	茶褐	
14	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.03	茶褐	
16	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.05	茶褐	
17	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.03	茶褐	
18	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.03	茶褐	
19	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	前上顎骨	L	破片	0.08	茶褐	
20	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	背鰭鰭棘	M	破片	0.02	茶褐	
21	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.05	茶褐	
22	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.03	茶褐	
23	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	鱗	?	完形	0.01	茶褐	
24	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	担鰭骨	?	破片	0.02	茶褐	
25	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.05	茶褐	
26	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.02	茶褐	
27	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.05	茶褐	
28	土壙７	上層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.06	茶褐	
30	土壙７	中層	弥生中期	魚類	不明	不明	?	破片	0.26	茶褐	
35	土壙10		弥生後期	魚類	不明	不明	?	破片	0.42	茶褐	
37	土壙10		弥生後期	両生類	カエル目	橈尺骨	R	破片	0.17	茶褐	
10	土壙６		弥生中期	哺乳類	不明	四肢骨	?	破片	0.09	茶褐	
15	土壙７	上層	弥生中期	哺乳類	不明	不明	?	破片	0.08	茶褐	
29	土壙７	上層	弥生中期	哺乳類	中型哺乳類	四肢骨	?	破片	2.35	茶褐	イヌによる噛傷
31	土壙７	中層	弥生中期	哺乳類	中型哺乳類	不明	?	破片	1.43	茶褐	
32	土壙７	中層	弥生中期	哺乳類	中型哺乳類	頭蓋骨	?	破片	4.58	白	火を受けている
33	土壙７	中層	弥生中期	哺乳類	中型哺乳類	肋骨	R	骨幹部	3.08	茶褐	
34	土壙７	中層	弥生中期	哺乳類	中型哺乳類	肋骨	L	骨幹部	3.69	茶褐	
38	土壙10		弥生後期	哺乳類	不明	不明	?	破片	0.29	茶褐	

1(36)　2(12)　3(20)　4(24)　5(19)



6(33)　7(34)　8a(32)　8b(32)

図版 1　動物遺存体　1～5魚類(1コチ属右前鰓蓋骨、2～5目不明、
2腹椎、3背臀鰭棘、4担鰭骨、5左前上顎骨)
6～8中型哺乳類(6右肋骨、7左肋骨、8側頭骨)　(1/2)

第２表　獣骨等鑑定結果一覧表

番号	遺跡名	調査区名	遺構名	出土層位	遺構年代	類別	種名	部位	備考
1	立田	立田Ｅ３区	竪穴住居１	炭灰集中部分	弥生後期	魚類		部位不明	
2	高松原古才	立田Ｅ１区	竪穴住居２		古墳後期	哺乳類	中型哺乳類	肋骨	カットマーク
3	高松原古才	立田Ｗ１区	柱穴(Ｐ52)		古墳？	哺乳類	ウマorウシ	臼歯片	
4	高松原古才	立田Ｗ２区	包含層	灰色粘砂土	古墳後期	哺乳類	ウシ	大臼歯	未萌出
5	高松原古才	立田Ｗ２区	包含層	灰色粘砂土	古墳後期	哺乳類	ウマorウシ	臼歯片	未萌出
6	高松原古才	立田Ｗ３区	包含層	淡青灰色粘砂土	古墳後期	哺乳類	ウマorウシ	臼歯片	
7	高松原古才	立田Ｅ１区	落ち込み１		古代	哺乳類	ウマorウシ	臼歯片	
8	高松原古才	立田Ｅ１区	包含層	褐灰色粘土		哺乳類	ウシ	臼歯片	未萌出
9	高松原古才	立田Ｅ１区	包含層	暗灰褐色粘質土		哺乳類	ウシ	下顎左第１、第２小臼歯	
10	加茂政所	砂場６区	土壙６		弥生中期	哺乳類	中型哺乳類	四肢骨	被熱
11	加茂政所	砂場６区	土壙６		弥生中期	哺乳類	中型哺乳類	部位不明	
12	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	腹椎	
13	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
14	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
15	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	哺乳類	中型哺乳類	部位不明骨幹部	
16	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
17	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
18	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
19	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	前上顎骨	
20	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	背臀鰭棘	
21	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
22	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
23	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	鱗	
24	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	担鰭骨	
25	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
26	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
27	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
28	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
29	加茂政所	砂場６区	土壙７	上層	弥生中期	哺乳類	シカorイノシシ類	四肢骨	噛傷
30	加茂政所	砂場６区	土壙７	中層	弥生中期	魚類	硬骨魚	部位不明	
31	加茂政所	砂場６区	土壙７	中層	弥生中期	哺乳類	中形哺乳類	部位不明	
32	加茂政所	砂場６区	土壙７	中層	弥生中期	哺乳類	シカorイノシシ類	側頭骨岩様体、成獣	被熱
33	加茂政所	砂場６区	土壙７	中層	弥生中期	哺乳類	イノシシ類	肋骨骨幹部	
34	加茂政所	砂場６区	土壙７	中層	弥生中期	哺乳類	イノシシ類	肋骨骨幹部	
35	加茂政所	砂場６区	土壙10		弥生後期	魚類	硬骨魚	部位不明	
36	加茂政所	砂場６区	土壙10		弥生後期	魚類	コチ属	前鰓蓋骨	
37	加茂政所	砂場６区	土壙10		弥生後期	両生類	カエル	右橈尺骨、近位端	
38	加茂政所	砂場６区	土壙10		弥生後期	哺乳類		部位不明	
39	加茂政所	砂場４区	包含層		古代	哺乳類	ウマ	右下顎第２大臼歯	
40	加茂政所	砂場４区	包含層		古代	哺乳類	ウマ	臼歯片	
41	加茂政所	砂場４区	土壙24		中世前期	哺乳類		部位不明	
42	加茂政所	砂場４区	包含層			哺乳類	ウマ	右上顎臼歯	
43	加茂政所	砂場４区	包含層			哺乳類	ウマ	左下顎臼歯破片	
44	加茂政所	砂場８区	包含層			哺乳類	ウマ	左下顎臼歯	
45	加茂政所	砂場２区	溝(３)		近世	哺乳類	イヌ	左大腿骨遠位端	
46	加茂政所	砂場４区		南側溝		哺乳類	ウシ	臼歯破片	
47	加茂政所	砂場７区		側溝・排土		哺乳類	イノシシ類頸骨？	四肢骨	
48	加茂政所	砂場８区		北側溝		哺乳類	ウマ	臼歯	
49	加茂政所	砂場４区				哺乳類	ウシ	右上顎大臼歯	
50	加茂政所	砂場８区				哺乳類	ウマ	臼歯	
51	津寺	高田９区	竪穴住居13		古墳前期	魚類	メジロザメ科？	歯	
52	津寺	高田１０区	竪穴住居14		古墳後期	哺乳類	中型哺乳類	肋骨	
53	津寺	高田６区	溝34		奈良？	哺乳類	ウマorウシ	臼歯	
54	津寺	高田８区	溝42？		古代？	哺乳類	ウマ	臼歯	
55	津寺	中屋Ｔ区	下がり		古代	哺乳類	ウマ	上顎臼歯２点	
56	津寺	中屋Ｔ区	下がり		古代	哺乳類	ウマ	下顎第３大臼歯	
57	津寺	高田６区	包含層	暗灰褐色粘砂土	古代？	哺乳類	ウマ	下顎臼歯	

58	津寺	高田３区	溝57		室町	哺乳類	ウシ	腰椎	
59	津寺	高田３区	溝57		室町	哺乳類	ウシ	尺骨、橈骨	
60	津寺	中屋Ｔ区	水田		中世	哺乳類	ウマ	上顎右第２大臼歯	
61	津寺	高田８区	溝(NO.20)		近世	貝類	アカニシ		被熱
62	津寺	高田８区	溝(NO.20)		近世	魚類？		部位不明	
63	津寺	高田８区	溝(NO.20)		近世	哺乳類		部位不明	
64	津寺	高田８区	溝(NO.20)		近世	哺乳類		四肢骨片	
65	津寺	高田８区	野壺(NO.8)		近世	哺乳類	ウマorウシ	大臼歯	未萌出

第３表　石製品一覧表

遺物番号	遺跡名	調査区名	遺構名	遺構年代	種別	材質	法量(mm)			重量(g)	残存率	備考
							長さ	幅(径)	厚み			
Ｓ１	立田	立田Ｅ３区	竪穴住居１	弥生後期	鏃	サヌカイト	24.5	15.0	2.8	1.1	欠	
Ｓ２	立田	排水機場区	土壙２	弥生後期	?	サヌカイト	112.0	41.5	11.0		完	
Ｓ３	立田	排水機場区	微高地斜面	弥生後期	敲石		117.0	87.5	43.0	699.0	完	
Ｓ４	立田	排水機場区	微高地斜面	弥生後期	敲石		106.0	51.0	33.0	266.6	完	
Ｓ５	高松原古才	立田Ｗ２区	包含層	古代	砥石	流紋岩	63.5	37.0	41.0	74.0	欠	
Ｓ６	高松原古才	立田Ｗ２区	包含層	古墳後期	管玉	滑石	9.9	7.0		0.9	欠	
Ｓ７	高松原古才	立田Ｗ２区	包含層	古墳後期	臼玉	滑石	2.8	4.9		0.1	欠	
Ｓ８	高松原古才	立田Ｅ１区	竪穴住居１	弥生中期	蛤刃石斧	流紋岩	30.5	34.0	6.5	8.4	欠	
Ｓ９	高松原古才	立田Ｅ１区	竪穴住居１	弥生中期	鏃	サヌカイト	20.0	13.0	4.0	0.9	欠	
Ｓ10	高松原古才	立田Ｅ１区	竪穴住居１	弥生中期	鏃	サヌカイト	39.0	15.0	5.5	3.7	欠	
Ｓ11	高松原古才	立田Ｃ区	竪穴住居７	古墳後期	石包丁	サヌカイト	39.0	38.0	7.5	11.3	欠	
Ｓ12	高松原古才	立田Ｅ１区	竪穴住居３	古墳後期	スクレイパー?	サヌカイト	34.5	44.5	7.5	10.9	欠	
Ｓ13	高松原古才	立田Ｗ１区	包含層	古墳？	楔?	サヌカイト	33.0	49.0	9.5	18.5	欠	
Ｓ14	高松原古才	立田Ｅ１区	包含層	古墳後期	スクレイパー	サヌカイト	46.0	32.0	9.0	20.7	欠	
Ｓ15	高松原古才	立田Ｃ区	北側溝		?	サヌカイト	54.0	24.5	5.5	6.9	欠	
Ｓ16	高松原古才	立田Ｅ１区	柱穴(Ｐ９)	古墳？	錐	サヌカイト	28.0	14.5	6.0	2.0	欠	
Ｓ17	高松原古才	立田Ｅ１区	微高地基盤	弥生？	石核	サヌカイト	132.5	99.5	20.0	231.0	欠	
Ｓ18	高松原古才	立田Ｗ２区	溝13	古代	砥石	アプライト	61.0	84.5	45.5	376.5	欠	
Ｓ19	高松原古才	立田Ｅ１区	落ち込み１	古代	砥石	流紋岩	46.5	37.5	31.5	61.1	欠	
Ｓ20	加茂政所	砂場７区	竪穴住居１	弥生後期	鏃	サヌカイト	15.0	9.5	2.7	0.3	欠	
Ｓ21	加茂政所	砂場６区	土壙４トレンチ	弥生後期	鏃	サヌカイト	17.0	19.0	2.5	0.6	欠	
Ｓ22	加茂政所	砂場６区	土壙６下層	弥生中期	石包丁	サヌカイト	92.0	38.5	10.5	38.9	欠	
Ｓ23	加茂政所	砂場６区	土壙７上中層	弥生中期	楔	サヌカイト	27.5	37.0	18.5	15.7	欠	
Ｓ24	加茂政所	砂場７区	土壙13	弥生中期	?	サヌカイト	97.0	49.0	24.5	113.2	欠	
Ｓ25	加茂政所	砂場８区	下がり斜面	弥生後期	スクレイパー	サヌカイト	15.0	20.0	5.0	2.5	欠	
Ｓ26	加茂政所	砂場８区	下がり斜面	弥生後期	石包丁	サヌカイト	51.0	33.0	7.5	15.0	完	石槍転用
Ｓ27	加茂政所	砂場７区	柱穴(Ｐ17)		敲石	?	84.0	61.0	30.0	216.0	欠	
Ｓ28	加茂政所	砂場５区	側溝、包含層		楔	サヌカイト	39.5	25.5	8.5	10.9	完	石包丁転用
Ｓ29	加茂政所	砂場７区	柱穴(Ｐ１)		楔	サヌカイト	23.0	12.0	4.0	1.8	完	
Ｓ30	加茂政所	砂場？区	古代包含層	古代	スクレイパー	サヌカイト	61.0	39.0	7.0	16.2	欠	
Ｓ31	加茂政所	砂場７区	柱穴(Ｐ65)		石包丁	サヌカイト	24.0	22.5	3.2	1.4	欠	
Ｓ32	加茂政所	砂場５区	西下がり？	古代？	鏃	サヌカイト	25.5	12.5	3.5	0.9	欠	
Ｓ33	加茂政所	砂場５区	竪穴住居12	古墳前期	鏃	サヌカイト	30.0	16.5	3.8	1.8	欠	
Ｓ34	加茂政所	砂場７区	溝10(上層)	古墳前期	錐	サヌカイト	46.5	14.0	7.0	4.4	欠	
Ｓ35	加茂政所	砂場５区	竪穴住居12	古墳前期	砥石	流紋岩	88.0	60.5	21.0	138.4	完	
Ｓ36	加茂政所	砂場６区	溝９(下層)	古墳前期	砥石	流紋岩	30.0	13.0	13.5	6.7	欠	
Ｓ37	加茂政所	砂場８区	下がり斜面	古代	砥石	流紋岩	72.5	38.5	36.5	182.3	欠	
Ｓ38	加茂政所	砂場１区	包含層	古墳前期	砥石	流紋岩	85.5	43.0	40.0	181.7	欠	
Ｓ39	加茂政所	砂場１区	側溝、排土		砥石	流紋岩	78.5	40.0	34.0	88.2	欠	
Ｓ40	加茂政所	高田１～３区	包含層	近世	砥石	流紋岩	64.0	87.0	35.5	286.9	欠	
Ｓ41	加茂政所	高田１～３区	包含層		砥石	流紋岩	55.5	57.5	28.0	115.9	欠	
Ｓ42	津寺遺跡	高田６区	包含層	古代	錐	サヌカイト	20.5	14.0	3.8	1.1	欠	
Ｓ43	津寺遺跡	高田８～11区			鏃	サヌカイト	27.5	3.0	2.5	0.9	欠	
Ｓ44	津寺遺跡	中屋Ｔ区	古代下がり	平安	楔?	サヌカイト	40.5	27.5	12.5	11.1	完	
Ｓ45	津寺遺跡	高田２区	包含層		?	サヌカイト	51.0	40.0	7.0	14.4	欠	
Ｓ46	津寺遺跡	中屋３区	柱穴(Ｐ21)	古代	砥石	流紋岩	53.5	55.5	39.5	148.9	欠	
Ｓ47	津寺遺跡	高田２区	土壙２	室町	砥石	流紋岩	71.5	59.0	36.5	226.6	欠	

第4表　土錘一覧表

番号	遺跡名	調査区名	遺構名	遺構年代	形態	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	残存	本書番号	備考
1	加茂政所	砂場3区	竪穴住居8	古墳後期	長紡錘形	(33.5	15.2	6.7	折	827	
2	加茂政所	砂場2区	土壙21	古代	長紡錘形	(27.0	7.3	1.1	折	931	
3	加茂政所	砂場2区	土壙21	古代	長紡錘形	(19.0	9.2	1.7	折	932	
4	加茂政所	砂場2区	土壙23	中世	長紡錘形	(37.8	10.7	3.9	折	994	
5	加茂政所	高田1～3区	包含層	中世？	球形刻目式	26.0	23.0	16.2	完	1013	
6	津寺	中屋T区	住居3壁体溝	弥生後期	円筒形	74.1	22.6	35.6	完	1017	
7	津寺	高田7区	水田層	古墳前期	円筒形	66.3	47.6	41.1	欠	1184	
8	津寺	中屋2区	包含層	古墳前期	長楕円側溝式	100.0	48.0	141.1	欠	1211	
9	津寺	高田2区	土壙2	室町	長紡錘形	(36.7	12.1	5.2	折	1280	
10	津寺	高田3区	溝57	室町	長紡錘形	43.7	12.2	5.9	欠	1321	
11	津寺	高田8区	溝(NO.20)	近世	長紡錘形	58.6	26.3	35.8	欠	1341	
12	高松原古才	立田E1区	包含層	中世	長紡錘形?	(28.7	8.3	2.40	折		
13	高松原古才	立田C区	包含層		長紡錘形	40.8	10.7	4.35	欠		
14	加茂政所	砂場2区	古代包含層	古代？	長紡錘形	51.7	8.3	3.26	欠		
15	加茂政所	砂場2区	古代包含層	古代？	長紡錘形	(25.6	11.5	2.48	折		
16	加茂政所	砂場2区	古代包含層	古代？	長紡錘形	63.6	13.8	8.98	完		
17	加茂政所	砂場2区	古代包含層	古代？	長紡錘形	70.8	12.2	10.49	完		
18	加茂政所	砂場3区	古代包含層	古代？	長紡錘形	(40.6	11.9	6.35	折		
19	加茂政所	砂場2区	柱穴(P12)	中世？	長紡錘形	66.9	14.1	11.76	欠		
20	加茂政所	砂場2区	柱穴(P12)	中世？	長紡錘形	(24.0	11.2	2.96	折		
21	加茂政所	砂場2区	柱穴(P119)	中世？	長紡錘形	70.9	14.3	13.14	完		
22	加茂政所	砂場2区	柱穴(P119)	中世？	長紡錘形	(25.3	11.9	2.45	折		
23	加茂政所	砂場2区	柱穴(P119)	中世？	長紡錘形	(38.9	10.5	3.93	折		
24	加茂政所	砂場2区	柱穴(P138)	中世？	長紡錘形	44.3	11.1	5.35	完		
25	加茂政所	砂場3区	柱穴(P4)	中世？	長紡錘形	(48.0	19.7	14.65	折		
26	加茂政所	砂場2区	包含層	中世？	長紡錘形	(44.7	13.6	6.97	折		
27	加茂政所	砂場4区	古代～中世包含層	中世	長紡錘形	(59.3	12.4	8.40	折		
28	加茂政所	砂場4区	古代～中世包含層	中世	長紡錘形	(39.2	13.2	6.02	折		
29	加茂政所	高田1～3区	包含層		長紡錘形	(53.2	18.4	14.85	折		
30	加茂政所	砂場1区	側溝･排土		長紡錘形	59.8	13.7	7.26	欠		
31	加茂政所	砂場1区	側溝･排土		長紡錘形	(23.3	8.8	1.86	折		
32	加茂政所	砂場1区	側溝･排土		長紡錘形?	(39.4	13.8	5.35	折		
33	加茂政所	砂場1区	側溝･排土		長紡錘形	(19.1	16.8	3.77	折		
34	加茂政所	砂場1区	側溝･排土		長俵形	36.4	16.2	10.26	完		
35	加茂政所	砂場2区	側溝･排土		長紡錘形	(42.6	10.0	3.61	折		
36	加茂政所	砂場2区	側溝･排土		長紡錘形	(44.7	11.8	5.81	折		
37	加茂政所	砂場2区	側溝･排土		長紡錘形	32.6	12.6	4.31	欠		
38	加茂政所	砂場2区	側溝･排土		長紡錘形	(30.9	11.3	3.07	折		
39	加茂政所	砂場2区	側溝･排土		長紡錘形	(33.0	12.3	3.64	折		
40	加茂政所	砂場2区	側溝･排土		長紡錘形	(34.0	10.7	4.01	折		
41	加茂政所	砂場2区	側溝･排土		長紡錘形	49.1	11.6	5.85	欠		
42	加茂政所	砂場2区	側溝･排土		長紡錘形	(42.5	11.4	4.91	折		
43	加茂政所	砂場6区	北側溝		長紡錘形	(46.2	13.5	6.55	折		
44	加茂政所	砂場6区	北側溝		嘴形	61.7	27.3	19.40	欠		土錘？
45	加茂政所	砂場7区	側溝･排土		長紡錘形	36.7	8.9	3.03	欠		
46	加茂政所	砂場8区	北側溝		長紡錘形	(29.0	10.4	2.72	折		
47	津寺	中屋2区	包含層	古墳前期	長楕円側溝式	(64.8	34.6	42.71	折		
48	津寺	高田1区	包含層	中世	長紡錘形	53.1	13.5	8.69	欠		
49	津寺	高田1区	包含層	中世	長紡錘形	45.3	10.5	5.29	欠		
50	津寺	高田6・7区	包含層		長紡錘形	41.0	11.8	5.50	欠		
51	津寺	高田6・7区	包含層		長紡錘形	42.8	12.6	7.07	完		
52	津寺	高田6・7区	包含層		長紡錘形	37.4	12.8	5.29	欠		
53	津寺	高田1区	側溝･攪乱･表面		長紡錘形	28.2	12.3	4.01	完		
54	津寺	高田1区	側溝･攪乱･表面		長紡錘形	(41.1	15.9	8.64	折		
55	津寺	高田2区	側溝･攪乱･表面		長紡錘形	(42.2	12.2	6.23	折		
56	津寺	高田2区	側溝･攪乱･表面		長紡錘形	32.5	13.6	4.88	欠		
57	津寺	高田2区	側溝･攪乱･表面		長紡錘形	34.0	12.9	4.90	欠		
58	津寺	高田3区	側溝･攪乱･表面		長紡錘形	33.1	13.9	5.49	欠		

第５表　緑釉・灰釉陶器一覧表

番号	遺跡名	調査区名	遺構名	遺構年代	類別	器種	焼成	部位	色調	本書番号	備考
1	加茂政所	砂場６区	たわみ３	中世	緑釉	椀	土師質	底部	緑色	969	付高台　近江産
2	加茂政所	砂場２区	柱穴(Ｐ84)		緑釉	椀	須恵質	底部	灰緑色	970	付高台　近江産
3	加茂政所	砂場２区	土壙21	古代	緑釉	椀	須恵質	体部	淡灰緑色		
4	加茂政所	砂場２区	土壙21	古代	緑釉	椀	土師質	底部	黄緑色		盤高台　京都産
5	加茂政所	砂場２区	土壙21	古代	緑釉	椀	須恵質	体部	鶯色		京都産
6	加茂政所	砂場２区	土壙21	古代	緑釉	椀	須恵質	体部	灰緑色		
7	加茂政所	砂場２区	土壙23	中世	緑釉	椀	須恵質	口縁部	オリーブ色		京都産
8	加茂政所	砂場２区	土壙23	中世	緑釉	椀	須恵質	体部	オリーブ色		
9	加茂政所	砂場２区	柱穴(Ｐ71)	古代？	緑釉	椀	須恵質	口縁部	緑色		京都産
10	加茂政所	砂場２区	柱穴(Ｐ57)	古代？	緑釉	椀	須恵質	口縁部	オリーブ色		
11	加茂政所	砂場３区	古代包含層	古代	緑釉	椀	須恵質	体部	灰緑色		
12	加茂政所	砂場２区	包含層(古代)	古代	緑釉	椀	須恵質	口縁部	緑黄色		
13	加茂政所	高田１～３区	包含層		緑釉	椀	須恵質	体部	淡灰緑色		
14	加茂政所	砂場２区	包含層		緑釉	椀	須恵質	体部	緑灰色		
15	加茂政所	砂場８区	包含層		緑釉	椀	須恵質		黄緑色		
16	加茂政所	砂場１区	側溝・排土		緑釉	椀	須恵質	体部	緑色		
17	加茂政所	砂場２区	側溝・排土		緑釉	椀	須恵質	口縁部	緑灰色		京都産
18	加茂政所	砂場２区	側溝・排土		緑釉	椀	須恵質	体部	淡緑色		
19	加茂政所	砂場２区	側溝・排土		緑釉	椀	須恵質	口縁部	淡緑灰色		
20	加茂政所	砂場２区	側溝・排土		緑釉	椀	須恵質	口縁部	淡灰緑色		
21	加茂政所	砂場２区	側溝・排土		緑釉	椀	須恵質	口縁部	淡緑灰色		
22	加茂政所	砂場２区	側溝・排土		緑釉	椀	須恵質	口縁部	淡灰緑色		
23	加茂政所	砂場２区	側溝・排土		緑釉	椀	須恵質	体部	緑色		
24	津寺	高田３区	側溝・撹乱・表面		緑釉	椀	土師質	体部	淡灰黄色		
25	加茂政所	砂場２区	側溝・排土		灰釉	椀	須恵質	口縁部	灰色	971	
26	加茂政所	砂場２区	側溝・排土		灰釉	椀	須恵質	底部		972	付高台
27	加茂政所	砂場４区	南側溝(下がり)		灰釉	椀	須恵質	底部	灰色	973	付高台
28	加茂政所	砂場２区	古代包含層	古代	灰釉	瓶	須恵質	体部	緑灰色		5片
29	加茂政所	砂場３区	柱穴(Ｐ7)		灰釉	椀	須恵質	口縁部	淡緑灰色		
30	津寺	高田12区	灰色粘質土	中世	灰釉	瓶	須恵質	底部	淡緑灰色		付高台

第６表　出土窯壁片・羽口片一覧表

番号	遺跡名	調査区名	遺構名	遺構年代	類別	本書番号
1	加茂政所	砂場２区	側溝･排土		羽口片	945
2	加茂政所	砂場２区	柱穴(P61,62)	古代？	羽口片	946
3	津寺	高田６区	溝34	古代(奈良？)	羽口片	1218
4	加茂政所	砂場３区	柱穴(P5)	古代？	羽口片	
5	加茂政所	砂場２区	側溝･排土		羽口片	
6	加茂政所	砂場３区	竪穴住居10　炉	古墳後期	窯壁片	
7	加茂政所	砂場３区	包含層(古墳～古代)	古代？	窯壁片	
8	加茂政所	砂場４区	古代包含層(上層)	古代？	窯壁片	
9	加茂政所	砂場６区	包含層		窯壁片	
10	加茂政所	砂場７区	包含層		窯壁片	
11	加茂政所	砂場２区	側溝･排土		窯壁片	

報告書抄録

ふりがな	たづたいせき　たかまつはらこさいいせき　かもまどころいせき　つでらいせき
書名	立田遺跡2・高松原古才遺跡2・加茂政所遺跡2・津寺遺跡6
副書名	立田排水機場建設ならびに立田排水機場関連放水管地下埋設事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	143
編著者名	岡本寛久・内藤善史・島崎東・柳瀬昭彦・伊藤晃・桑田俊明・富岡直人
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701−0136　岡山県岡山市西花尻1325−3　TEL　086−293−3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700−0824　岡山県岡山市内山下2−4−6　TEL　086−224−2111
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たづた 立田	おかやましたづた 岡山市立田	33201		34度 40分 38秒	133度 50分 2秒	19891012 〜 19920625	353.5㎡	立田排水機場建設に伴う発掘調査
たかまつはらこさい 高松原古才	おかやましたかまつはらこさい 岡山市 高松原古才	33201		34度 40分 38秒	133度 49分 55秒	19920203 〜 19940331	583㎡	立田排水機場建設に伴う発掘調査
かもまどころ 加茂政所	おかやましかも 岡山市加茂	33201		34度 40分 36秒	133度 49分 39秒	19921102 〜 19931124	1363㎡	立田排水機場建設に伴う発掘調査
つでら 津寺	おかやましつでら 岡山市津寺	33201		34度 40分 29秒	133度 49分 25秒	19920626 〜 19980203	1498.5㎡	立田排水機場建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立田	集落	弥生 中世	竪穴住居2軒・掘立柱建物2棟・柱穴列1列・土壙3基・溝5条	弥生土器・土師器・須恵器・石製品（鏃・敲石ほか）	弥生時代後期の集落
高松原古才	集落 河道	弥生 〜 中世	竪穴住居13軒・掘立柱建物3棟・柱穴列1列・柵1列・土壙9基・溝25条・落ち込み2基・河道2条	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・磁器・瓦・鉄滓・ガラス製玉類・鉄製品（鏃・鍬？・刀子ほか）・石製品(砥石・玉類）・土錘	弥生時代前期土器の出土 弥生時代中期から後期にかけてと7世紀前半を中心とする集落 古代遺構は耕作地に伴う溝群
加茂政所	集落 寺院	弥生 〜 中世	竪穴住居17軒・掘立柱建物1棟・柱穴列1列・炉状遺構2基・墓5基・土壙27基・溝55条・土器溜まり1群	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・磁器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・軒丸瓦・鉄製品（鎌・刀子ほか）・鉄滓・石製品（鏃・石包丁・砥石ほか）・分銅形土製品・土錘・紡錘車・羽口・窯壁片	弥生時代前期土器の出土 弥生時代中期から7世紀前半までの集落 古代寺院とその周辺の集落 中世の集落
津寺	集落 水田	弥生 〜 中世	竪穴住居19軒・掘立柱建物1棟・柱穴列1列・土器埋納壙1基・土壙6基・溝81条・土器溜まり3群	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・磁器・軒丸瓦・鉄製品(鏃・刀子・釘ほか)・石製品(鏃・砥石ほか)・鉄滓・羽口・土錘・銭貨・須恵器獣脚	弥生時代後期から中世まで集落が継続 古墳時代前期の水田 中世の堀を巡らす集落

立田遺跡

1．立田排水機場区全景（南西から）

2．立田E2区全景（西から）

3．立田E3区全景（南西から）

図版 2

立田遺跡

1．竪穴住居 1（南から）

2．竪穴住居 2 検出状況（南から）

3．建物 2（南から）

立田遺跡

1．土壙 1（北西から）

2．土壙 2（南から）

3．土壙 3（北西から）

図版 4

高松原古才遺跡

1．立田E1区全景（東から）

2．立田C区全景（東から）

3．立田W1区西全景（西から）

高松原古才遺跡

1．溝1（東から）

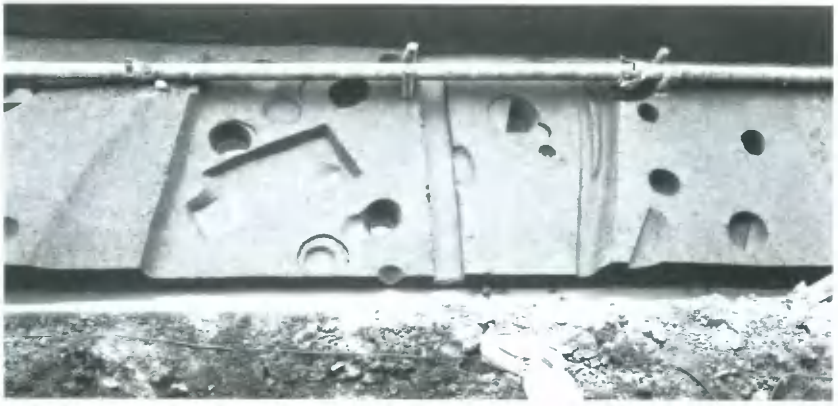
2．竪穴住居1・建物2他（西から）

3．河道2東岸斜面（南西から）

図版 6

高松原古才遺跡

1．竪穴住居 2（南から）

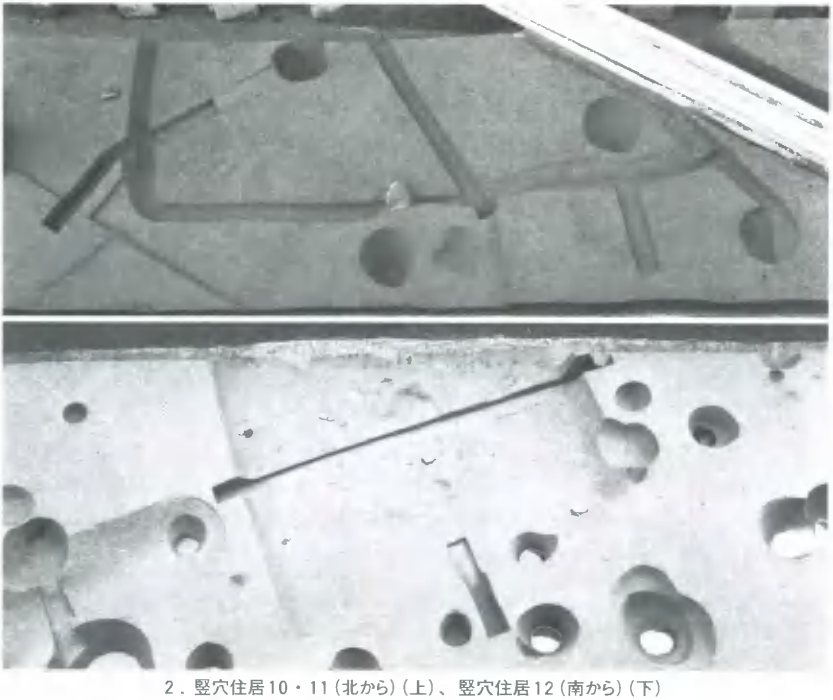


2．竪穴住居 3（南から）

3．竪穴住居 4・5（北から）

高松原古才遺跡

1．竪穴住居 7（北から）（上）、竪穴住居 8・9（南から）（下）

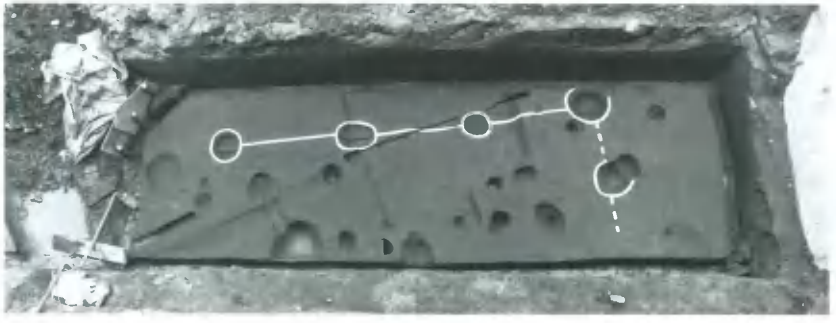


2．竪穴住居 10・11（北から）（上）、竪穴住居 12（南から）（下）

図版 8

高松原古才遺跡

1．立田W1区東古墳時代柱穴群（南から）



2．柱穴列1（南から）

3．土壙1（南から）

高松原古才遺跡

1．溝3（南西から）

2．溝11～18（東から）

3．柵1・溝7（南から）

図版10

加茂政所遺跡

1．高田3区全景（西から）

2．砂場2区全景（西から）

3．砂場5区調査風景（北東から）

加茂政所遺跡

1．竪穴住居1・16（東から）

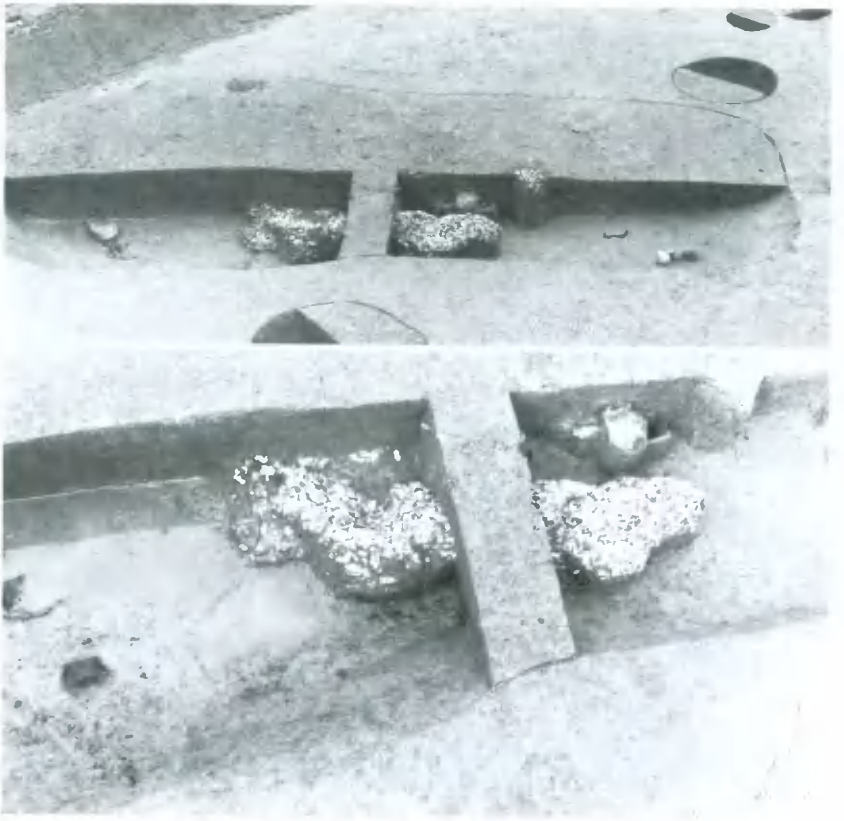
2．墓1
（東から）

3．土壙1
（北から）

図版12

加茂政所遺跡

1．土壙6（北から）



2．土壙7半割状況（南西から）（上）、土壙7貝殻集積状態（南西から）（下）

加茂政所遺跡

1．土壙7遺物出土状態（北東から）

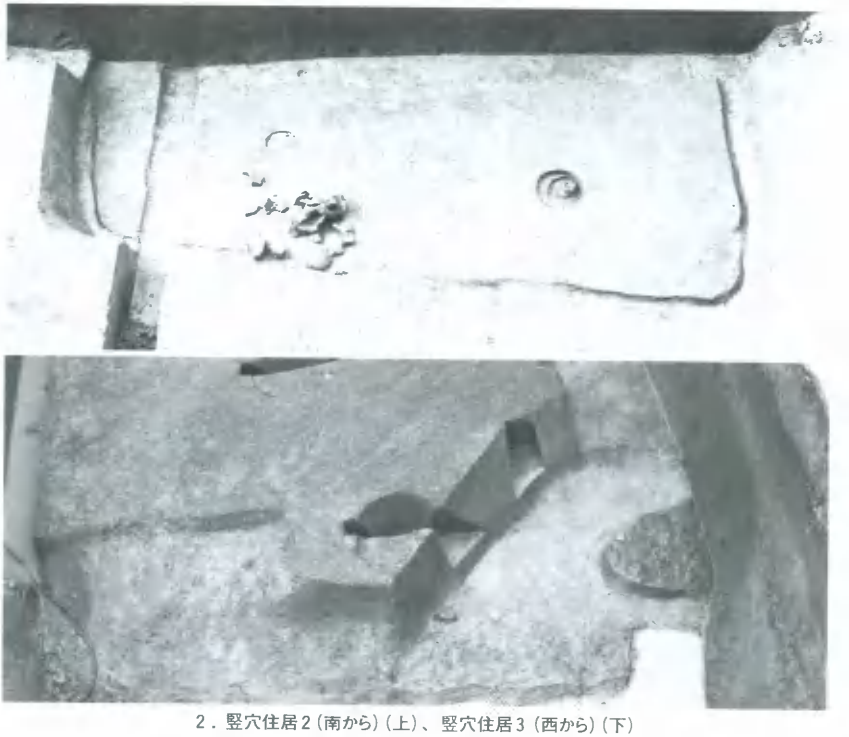
2．土壙7完掘状況（南東から）

3．土壙13（南から）

図版14

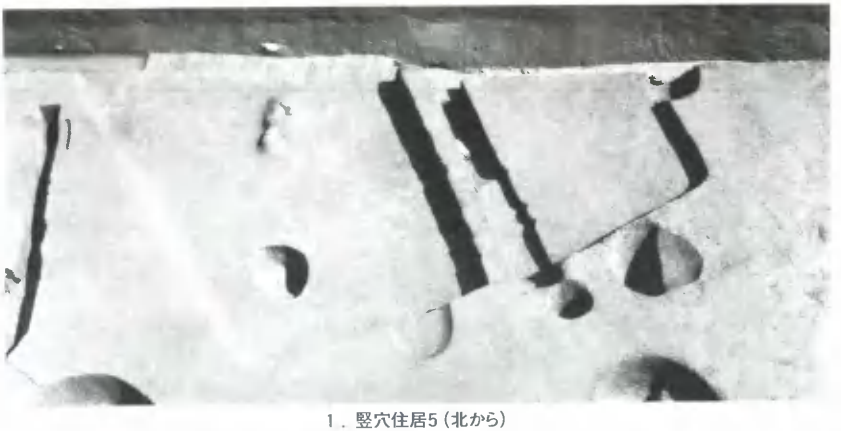
加茂政所遺跡

1．土壙15（西から）



2．竪穴住居2（南から）（上）、竪穴住居3（西から）（下）

加茂政所遺跡

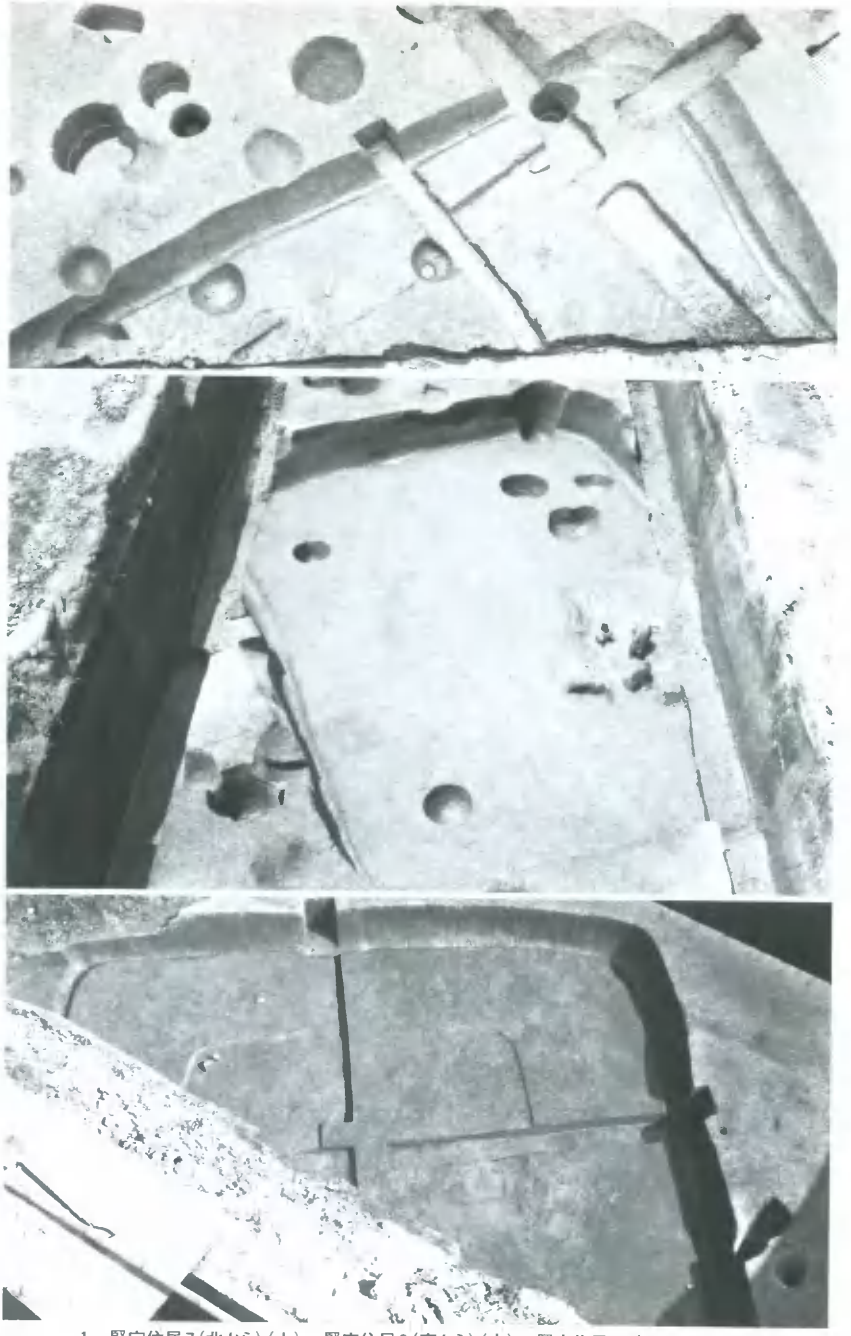


1．竪穴住居5（北から）

2．竪穴住居6（北西から）（上）、同カマド（北西から）（下）

図版16

加茂政所遺跡



1．竪穴住居7（北から）（上）、竪穴住居8（東から）（中）、竪穴住居10（北西から）（下）

加茂政所遺跡

1．竪穴住居11・12
（東から）

2．竪穴住居13
（北から）

3．同壁側穴
（西から）

4．同壁側穴断面
（西から）

図版18

加茂政所遺跡

1．竪穴住居14（東から）

2．竪穴住居15（南から）

加茂政所遺跡

1．炉状遺構2（西から）

2．溝6（北東から）

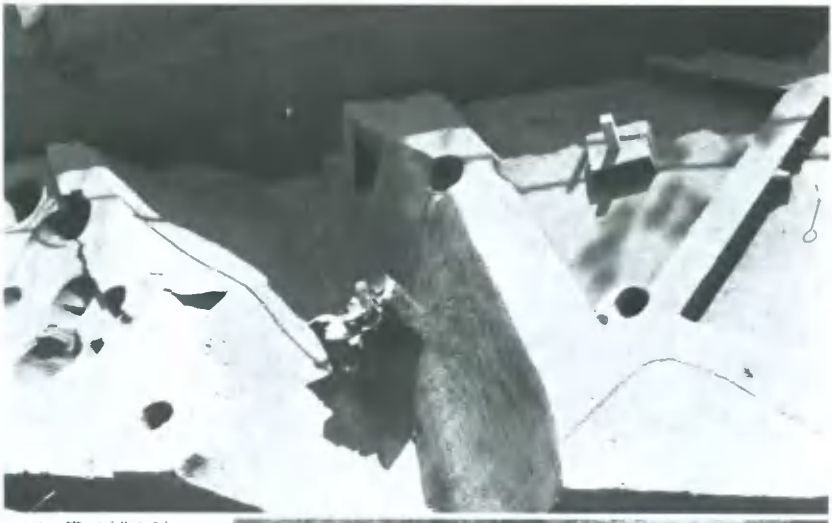
3．溝7（北から）

4．同遺物出土状態（南西から）

図版20

加茂政所遺跡

1．溝9遺物出土状態（南から）



2．溝10（北から）

3．同遺物出土状態
（東から）

加茂政所遺跡

1．溝11（南東から）

2．同遺物出土状態
（北西から）

3．土壙17（南西から）

図版22

加茂政所遺跡

1．土壙20
（北から）

2．溝14～17
（東から）

3．土器溜まり1（南から）

4．同軒丸瓦出土状態（南西から）

加茂政所遺跡

1．集石２
（北から）

２．墓４（南から）

３．土壙26（南から）

図版24

加茂政所遺跡

1．溝23～39（北東から）

2．溝44（東から）

3．溝51（西から）

津寺遺跡

1．高田1～3区全景（西から）

2．高田6・7区全景（北から）

3　中屋3区全景（南西から）

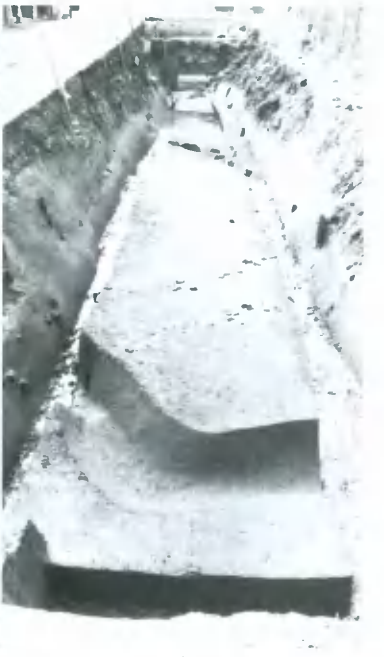
4．中屋T区全景（北東から）

津寺遺跡

1．溝2（南東から）

3．溝6（南から）

2．溝3（南東から）



5．溝10（北東から）

4．溝9（南から）

津寺遺跡

1．竪穴住居5（北西から）

2．竪穴住居6（南から）（上）　　3．竪穴住居6カマド（南から）（下）

図版28

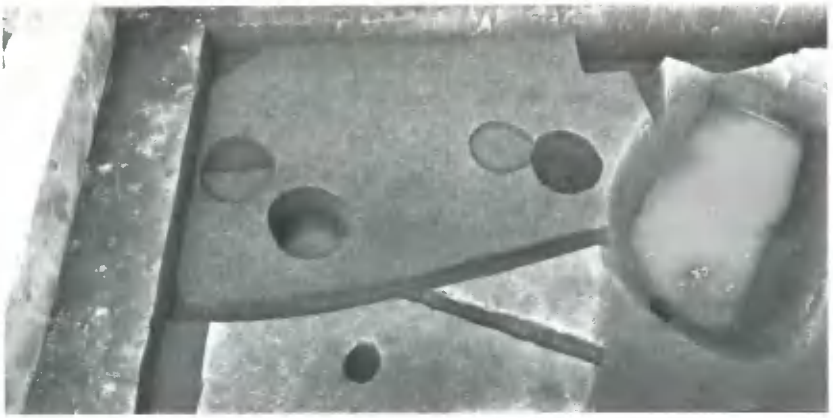
津寺遺跡

1．竪穴住居7（東から）

2．竪穴住居8・9（南から）

3．高田4・5区古墳時代遺構全景（東から）

津寺遺跡



1．竪穴住居10（南から）

2．竪穴住居12（南から）

3．竪穴住居13（南から）

津寺遺跡

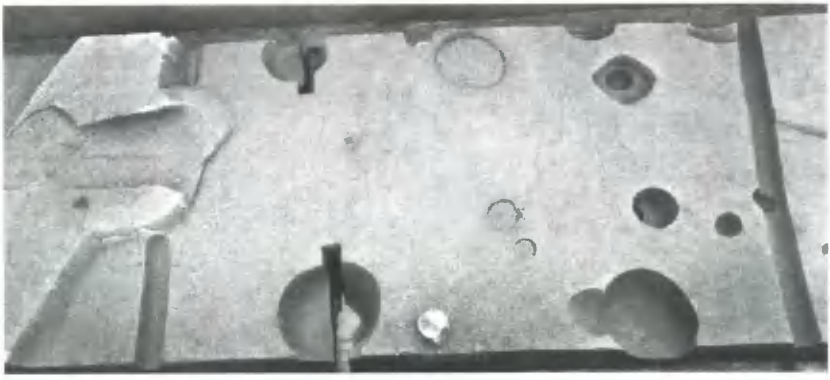
1．竪穴住居14（南から）

2．竪穴住居15（南から）

3．竪穴住居14カマド（南東から）

4．竪穴住居15カマド下土壙（東から）

津寺遺跡



1．竪穴住居16(南から)

2．竪穴住居17～20(北東から)

3．溝25(南東から)

4．溝26(北東から)

図版32

津寺遺跡

1．高田4・5区古墳時代水田（東から）

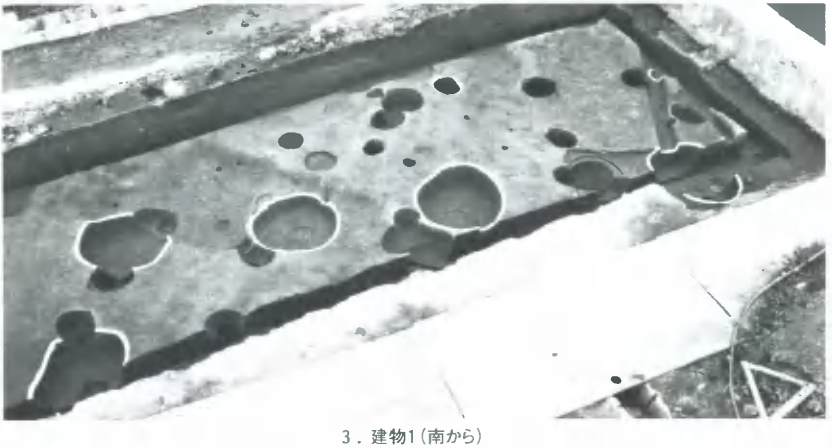
2．高田6・7区古墳時代水田（北から）

3．溝23（南から）

津寺遺跡

1．土器溜まり1（南西から）

2．土器溜まり2（南から）

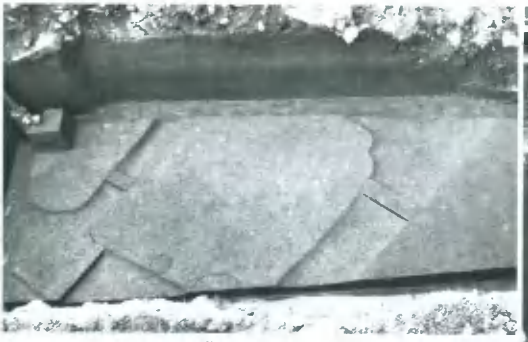


3．建物1（南から）

図版34

津寺遺跡

1．溝44・45(東から)



2．溝38・39(東から)

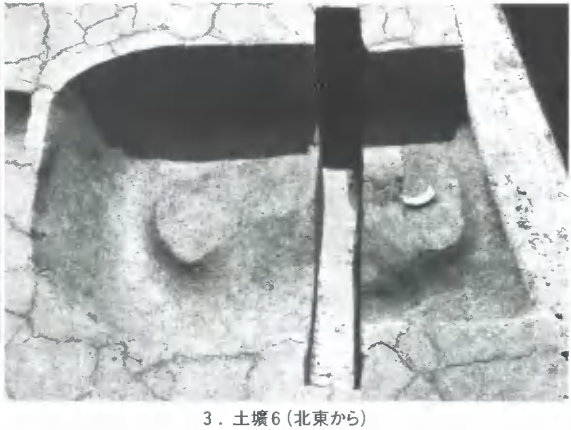
4．土器溜まり3(南西から)

3．溝49・50(南西から)

津寺遺跡

1．高田1～3区中世遺構
全景（東から）

2．土壙2（西から）



3．土壙6（北東から）

4．溝57（北から）

図版36

津寺遺跡

1．溝54（南から）

2．溝59・60（南西から）

3．溝66～73（南西から）

4．溝74～78（北東から）

5．溝79・81（西から）

立田遺跡

12

16

20

13

17

21

14

18

23

15

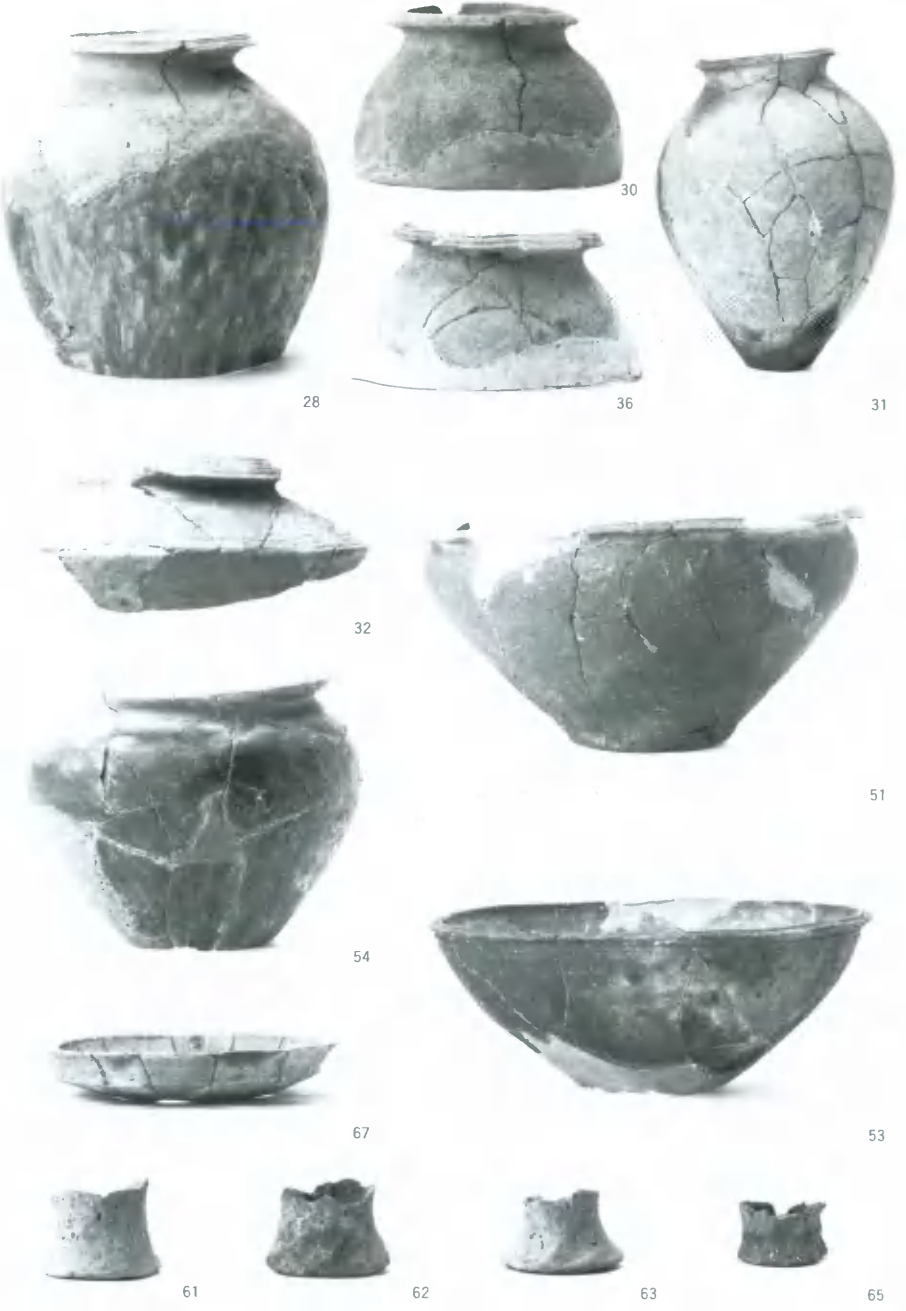
19

26

1．土壙1出土土器

図版38

立田遺跡



1．土壙2出土土器

立田遺跡

75

90

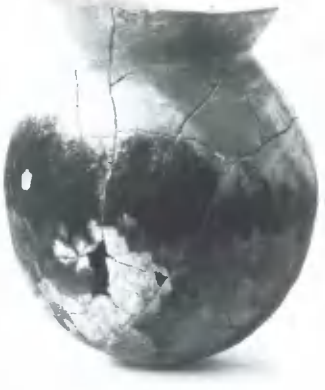
95

78

93

99

1．土壙3出土土器


309

145

6

261

S1

2．立田遺跡出土土器・石器

図版40

高松原古才遺跡

372

409

525

470

410

542

479

452

543

490

550

499

492

569

605

498

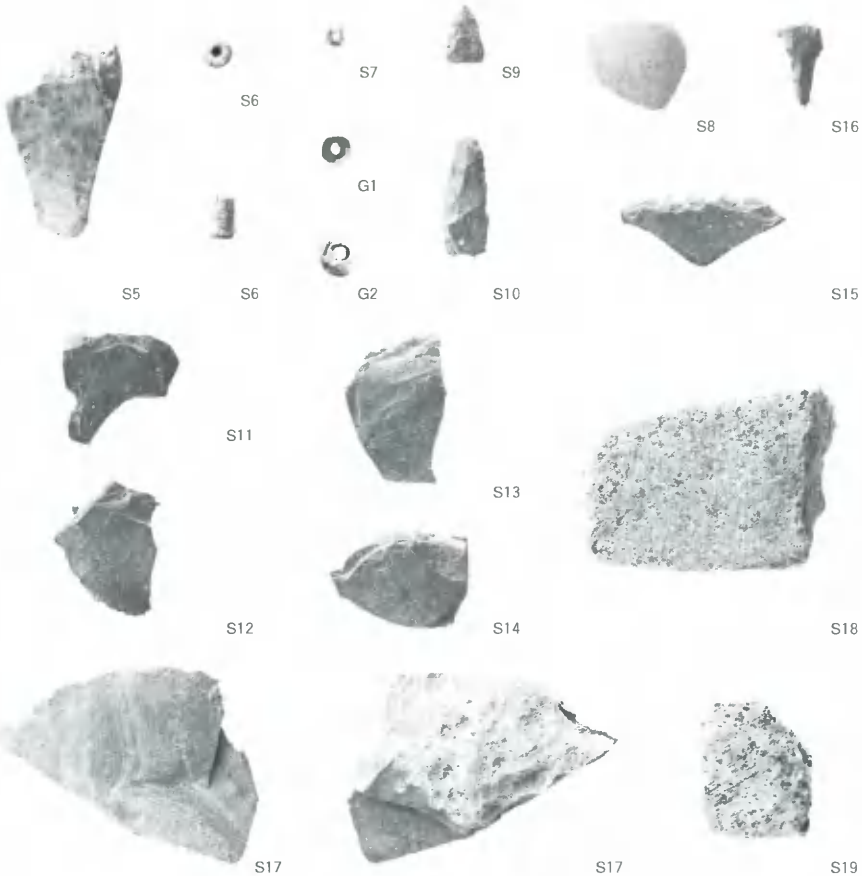
574

515

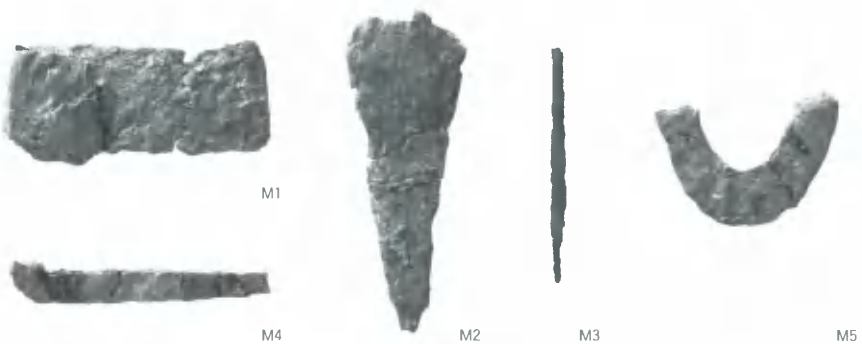
626

1．高松原古才遺跡出土土器

高松原古才遺跡



1．高松原古才遺跡出土石器・玉類



2．高松原古才遺跡出土鉄器

図版42

加茂政所遺跡

708

748

711

712

751

786

713

759

752

721

782

761

765

793

776

1．加茂政所遺跡出土弥生土器

加茂政所遺跡

799

823

841

857

801

843

866

803

849

867

804

851

870

856

852

878

1．加茂政所遺跡出土土器

図版44

加茂政所遺跡

882

885

887

883

890

888

889

891

1．溝10出土土器

901

895

907

897

907

2．加茂政所遺跡出土古墳時代土器・紡錘車

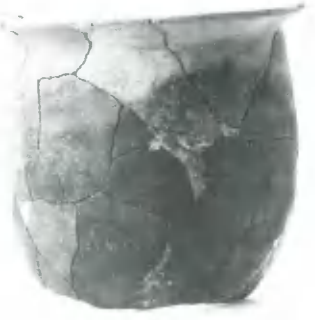
加茂政所遺跡

908

909

913

914


917

920

921

935

945

945

937

939

946

943

954

946

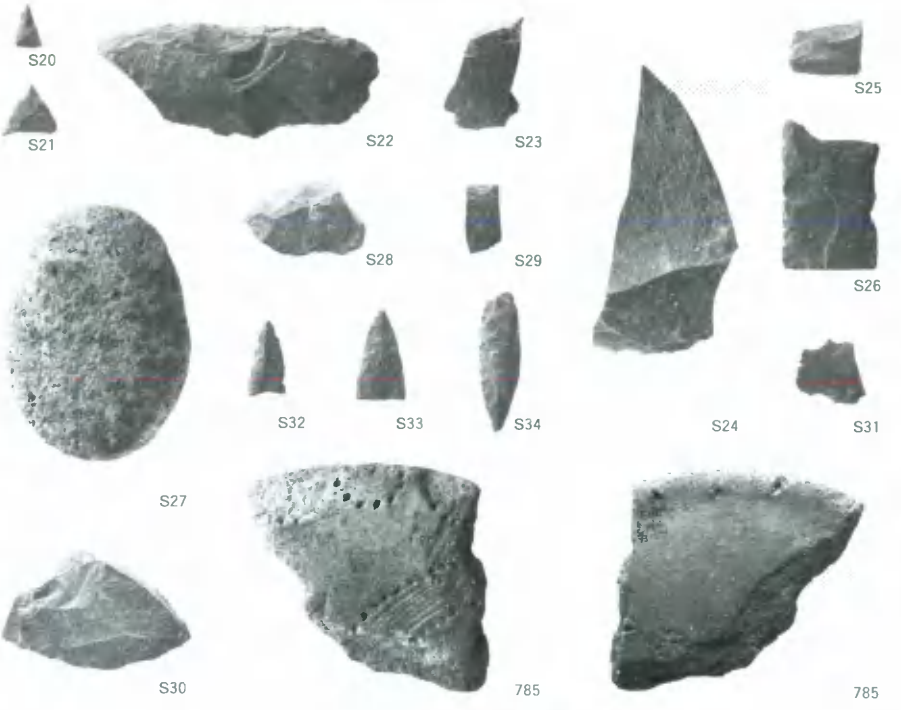
931

932 M14

1．加茂政所遺跡出土古代・中世遺物

図版46

加茂政所遺跡



1．加茂政所遺跡出土石器・分銅形土製品

2．加茂政所遺跡出土鉄器

津寺遺跡

1155

1106

1187

1194

1201

1208

1195

1210

1202

1209

1246

1246

1246

1247

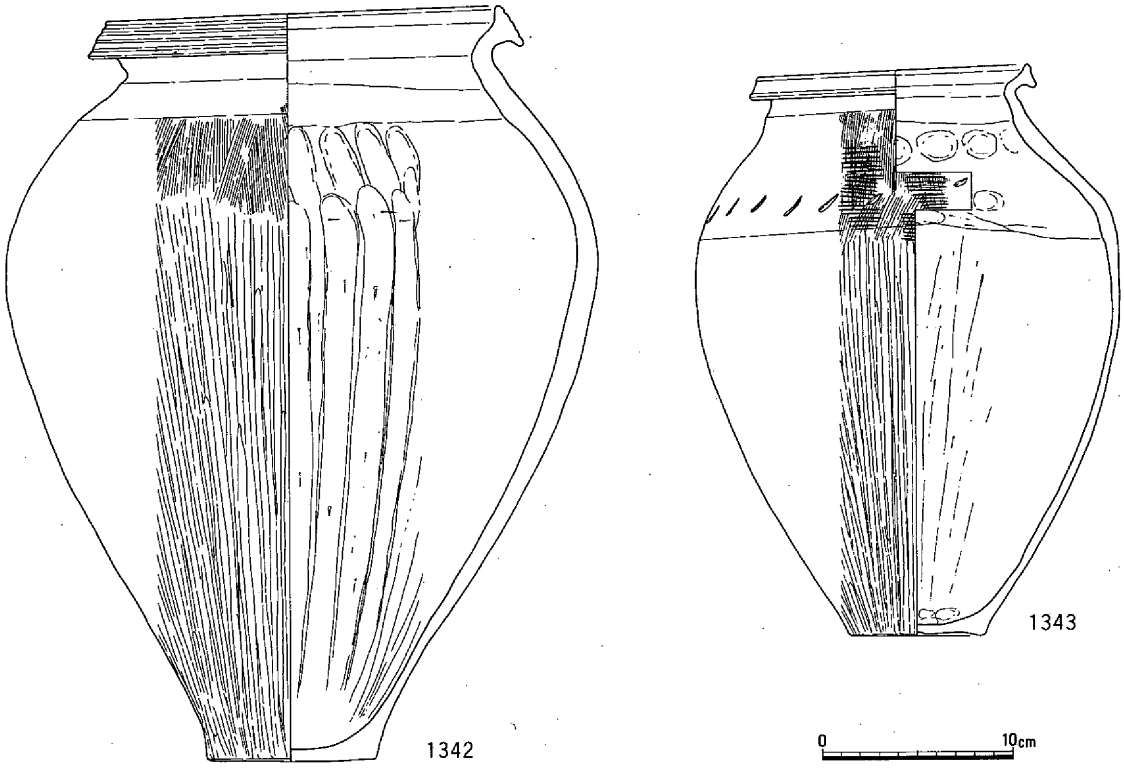
1．津寺遺跡出土土器

図版48

津寺遺跡

1．津寺遺跡出土石器・金属器・土錘・羽口

[補遺]



第344図　立田遺跡土壙1出土土器(3)(1/4)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告143

立　田　遺　跡　2
高松原古才遺跡　2
加茂政所遺跡　2
津　寺　遺　跡　6

立田排水機場建設ならびに立田排水機場
関連放水管地下埋設事業に伴う発掘調査

1999年3月26日　印刷
1999年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印　刷　岡山県農協印刷株式会社
岡山市富町2-5-27